女子文壇

十月特別號

大正元年九月廿五日印刷納本



[redacted]

女子文壇叢書第一編

第壹編

水野葉舟氏序　前島優梨子作

新版 小説 町むすめ

全一冊二百七十頁洋裝
作者最近肖像入
正價金三拾錢
送料金四錢

女性の作物と云ふ事を最も明かに示せるものは前島優梨子の小説となす、優梨子の小説には女性らしき同情あり、女性らしき理解あり、彼女の作れる多くの短篇小説は、其一篇毎に、それぐ異りたる人を引きつける力ありて、讀めば讀むほどしみぐと人生の味ひを感得せしむ、世に閨秀作家を以て標榜する者少からずと雖、多く其名ありて、其實空し、此處に其名を知られずとも、其實力の充實せる若き婦人作家、前島優梨子の處女作を一般の讀書社會に推奬するの機會を得たるは吾人の誇とする處なり。

製本既成

東京市京橋區大鋸町十番地　女子文壇社出版　（振替口座東京壹七貳九）　全國書店取次販賣

女子文壇拾月特別號（第八年第十號）目次

口繪

女子文壇叢書第二編

河井醉茗氏序　山田邦枝子著

新版 姿見日記

全一冊二百八十頁洋裝　作者最近肖像入

正價金三拾錢　送料金四錢

十月中旬發賣

名は日記なれど、實は新時代の若き婦人が抑へんとして抑ふる能はざる自己の告白なり、感想なり、著者の半生の歷史なり。諏訪湖畔に生れて、幼きより文學を愛し、詩歌に憧憬れ、今や家庭の人となりても猶ほ其文筆と離れ難き著者の面目と經歷とは、其熱あり情ある柔かき文章の上に躍如として表はれたり。添ふるに著者自作の和歌三百首を以てす、變化多き著者の境遇の、其をりをりの心持を最も痛切に表はしたるもの、抒情歌として此の如く眞に、此の如く美くしきは稀なり。日記と共に併せ讀む時は、著者の面影は眼前に浮ばむ。山田邦枝子の名は、若き人々の間に最も早く知られたり、其名を知りて未だ一貫したる其人の思想を知らざる者は、速に本書を繙いて彼女が眞實の叫びを了知したまへ。

東京市京橋區大鋸町十二番地　女子文壇社出版　（振替口座東京一七二九）　全國書店取次販賣



THE LADY'S GRAPHIC

婦人畫報

御大葬記念畫報

十一月卷　本號に限り價　卅八錢　郵税三錢　六冊税共一圓五十三錢　十二冊二圓九十四錢

畫報

●先帝御大喪儀を永遠に記念たらん爲に本號を記念畫報として發行し普く忠君愛國の紳士淑女に提供す●畫報は七十有餘頁のアート紙に本誌獨特の鮮明なる百數十の寫眞及繪畫を以て表はしたる二重橋より青山葬場殿に至る御葬列並に桃山に於ける御葬列の御模樣を初め御名代宮殿下各國使臣御葬儀に關する諸調度御大喪前後の雜況參列婦人の喪服其他苟くも御大喪儀に關する事項は細大漏さず滿載せり●此國家の大儀を拜察せんとせば須らく本誌を備へよ

萬世に傳ふべき絶好記念

讀物

●御大喪儀……井上博士
●嗚呼乃木將軍……三宅博士
●軍人と夫人
●大正の婦人
●若き妻……（宮田　三宅安子　長谷川時雨）

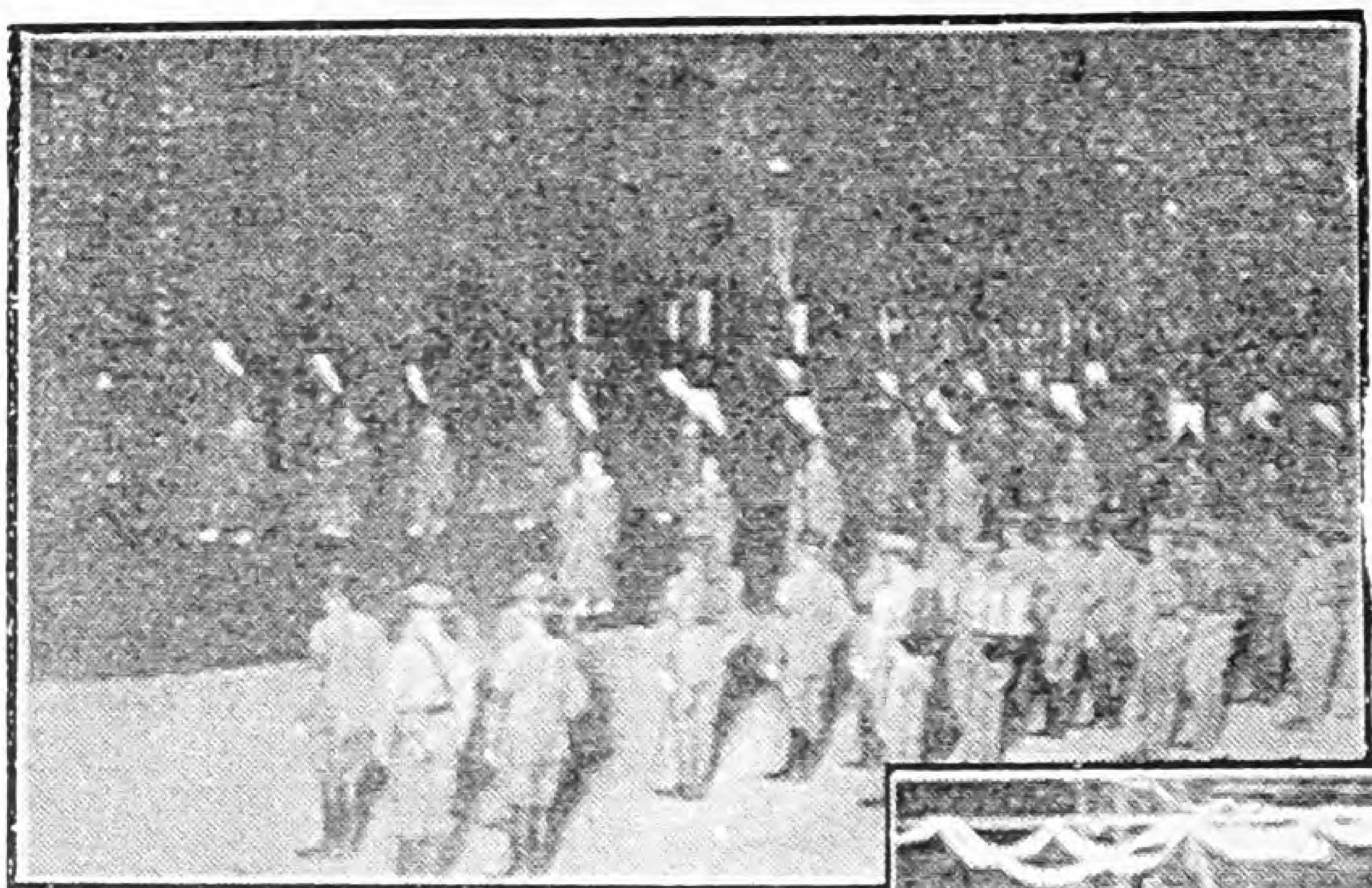
●大正式婦人散歩……小波
●歐洲より……與謝野晶子
●旅行みやげ　小笠原伯夫人
●崩御……三宅花圃
●下町の女學生　戸野みちえ
●織物の見分方　井上秀子
●隆鼻術……田中院長
●小說（藤村）……其他滿載

東京市麴町區飯田町四ノ　振替口座東京一一八一番　**東京社**　電話番町二三三九番　各地到る處の書店に有り

明治天皇御大葬儀（其一）



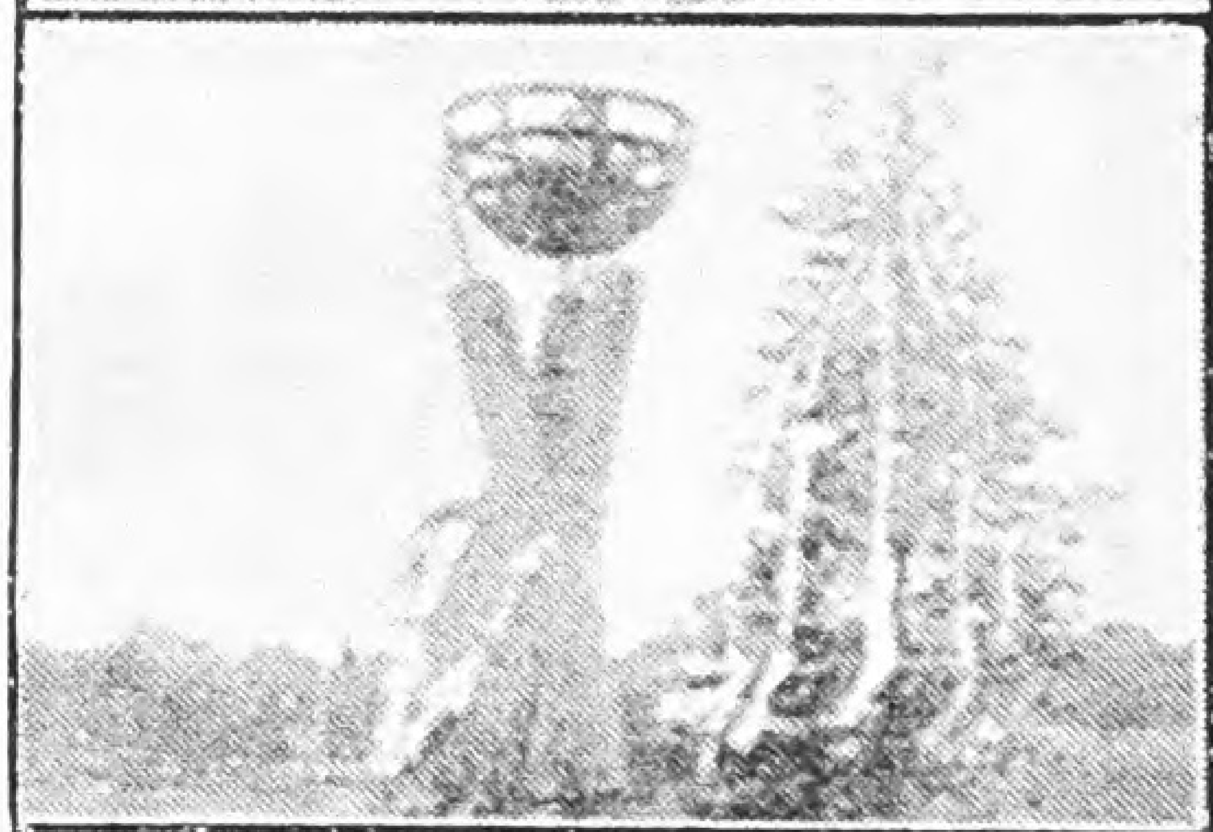
青山葬場殿



御葬列、御鉾



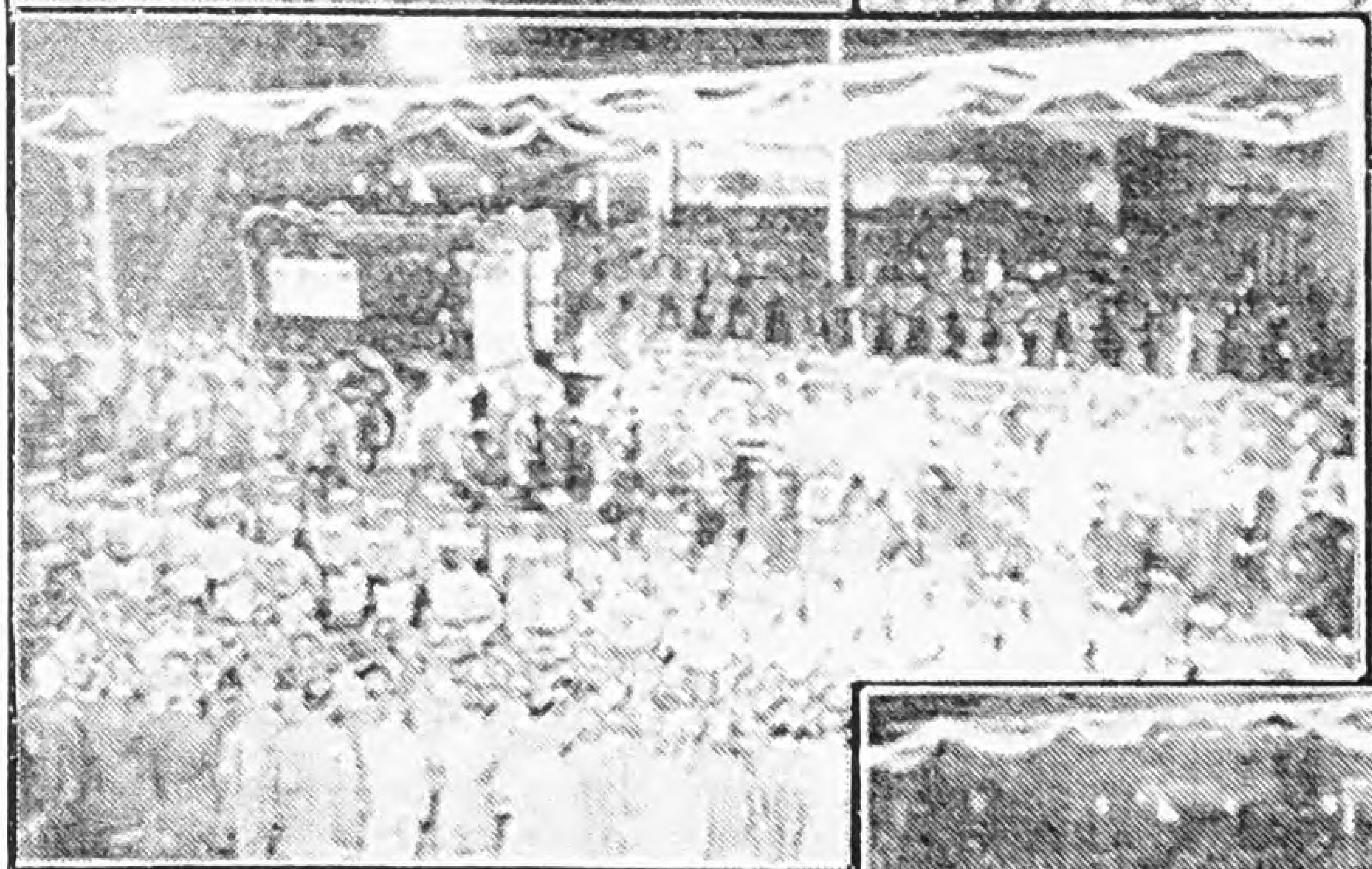
御葬列、御眞榊



二重橋前、篝火と眞榊



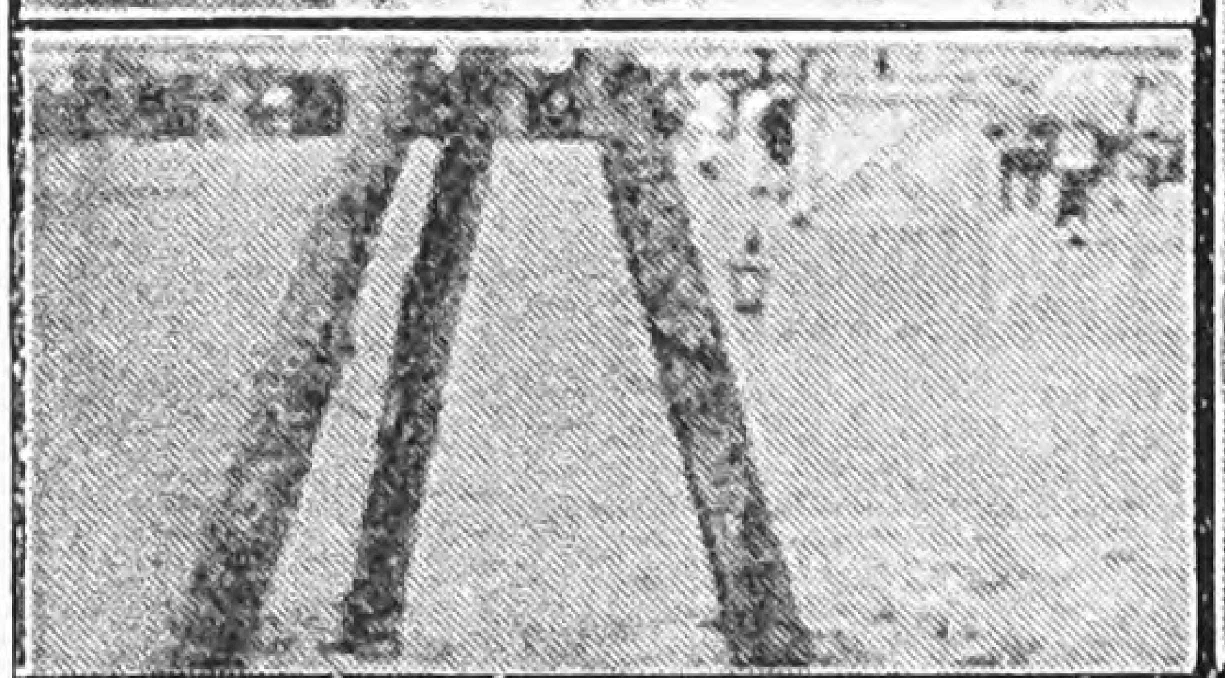
青山大葬場前、春日燈籠

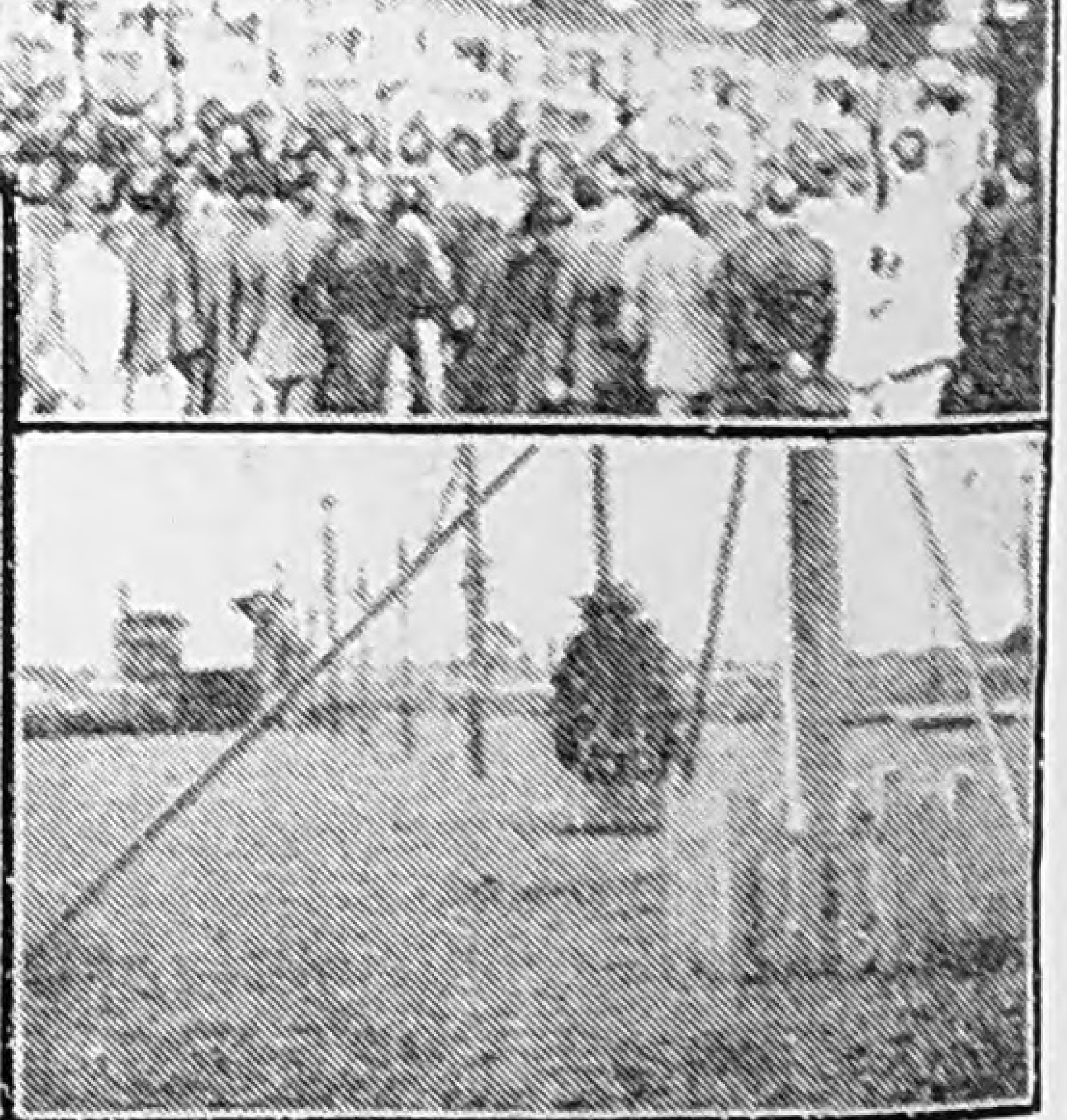


御葬列、御轜車

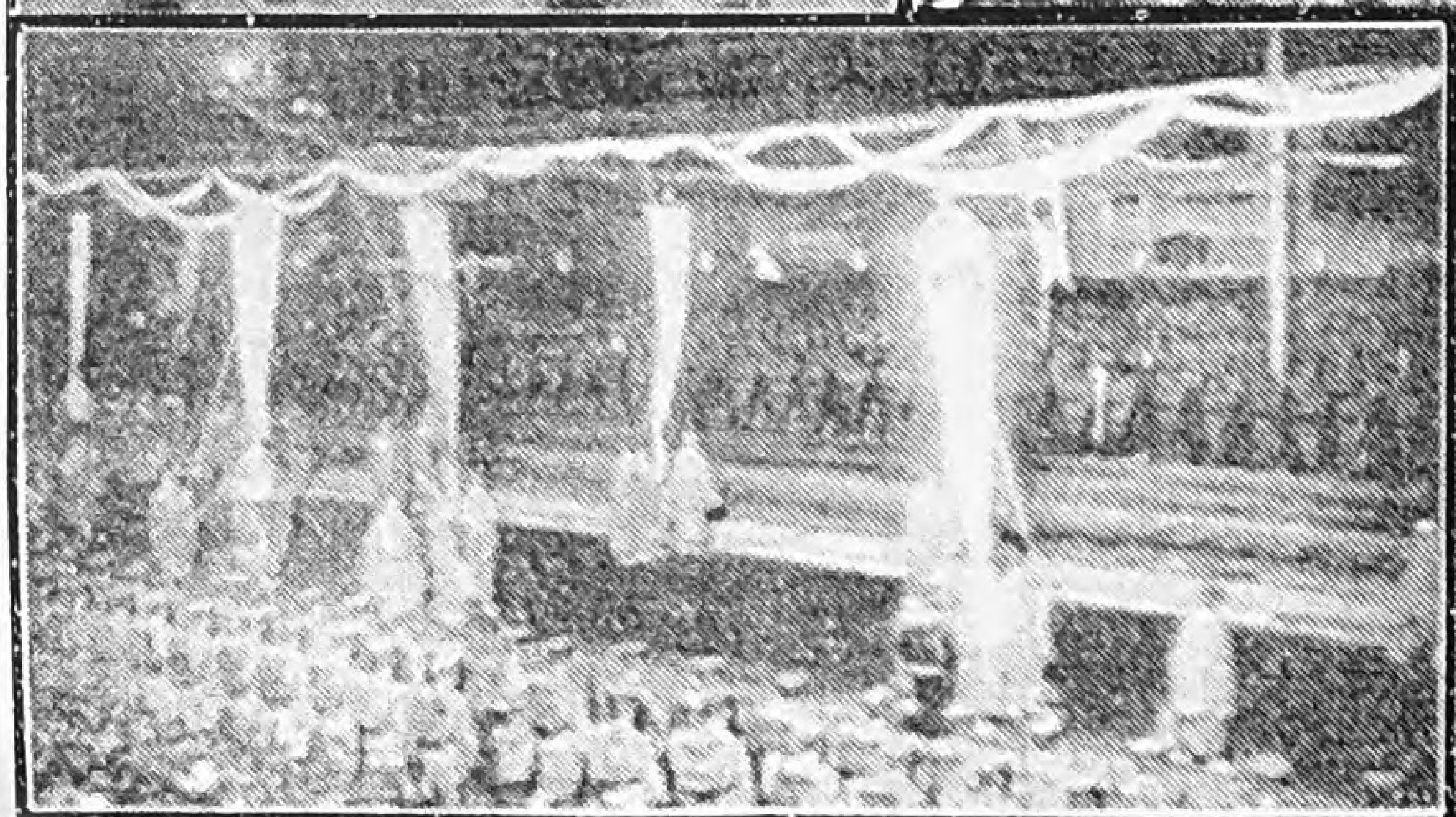


御葬列、御鼓

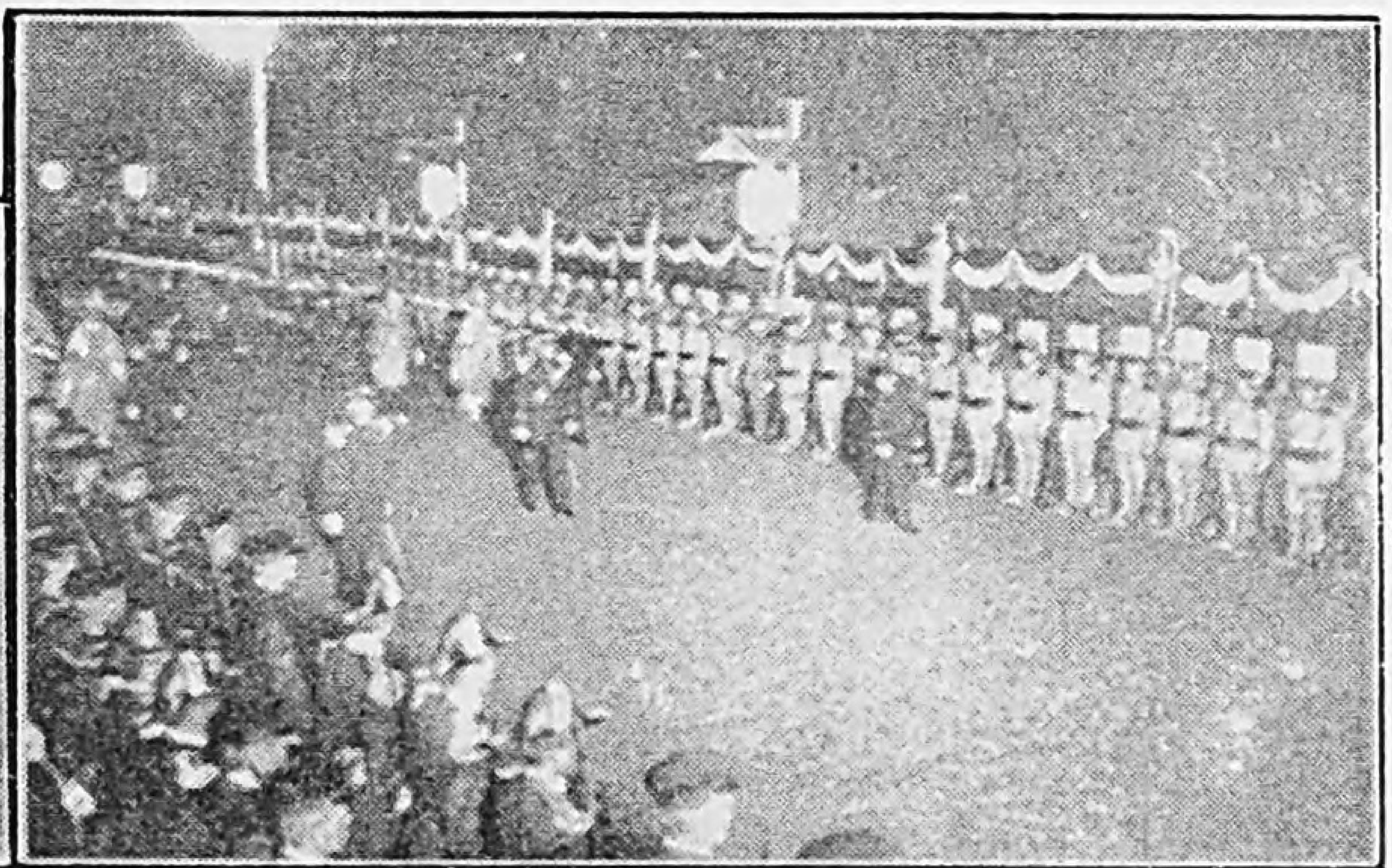




御葬列、御旛



明治天皇御大葬儀（其二）



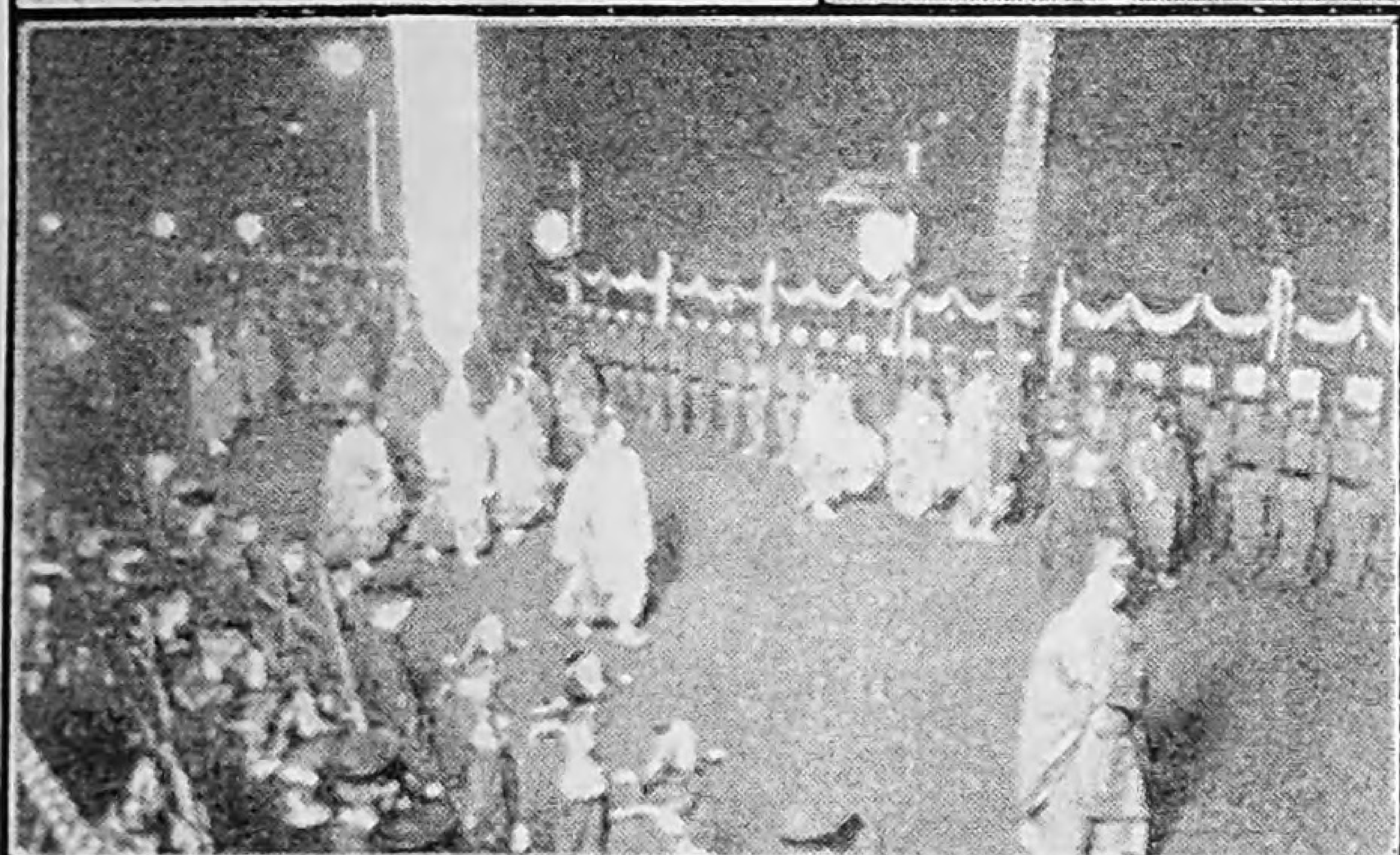
桃山御大葬鹵簿（一）



桃山御陵山頂を望む



御陵地本道



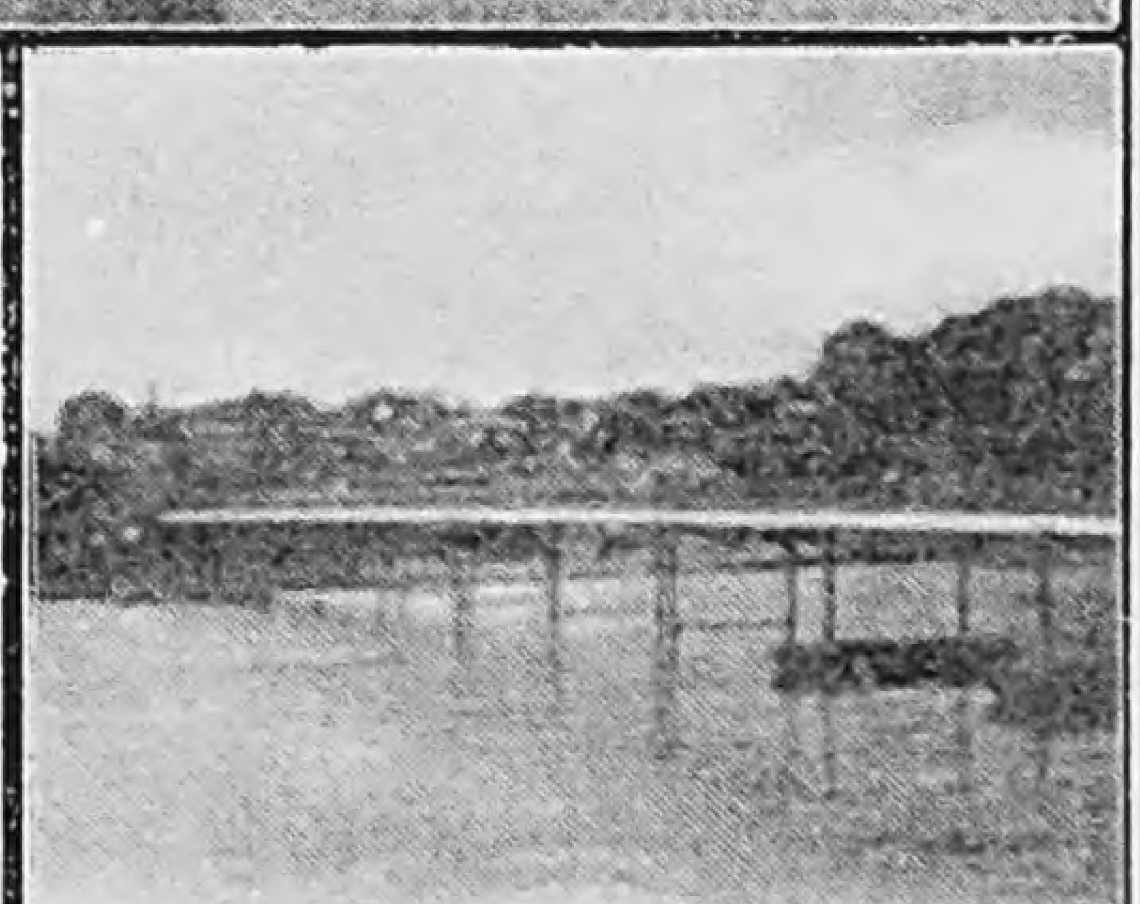
桃山御大葬鹵簿（二）



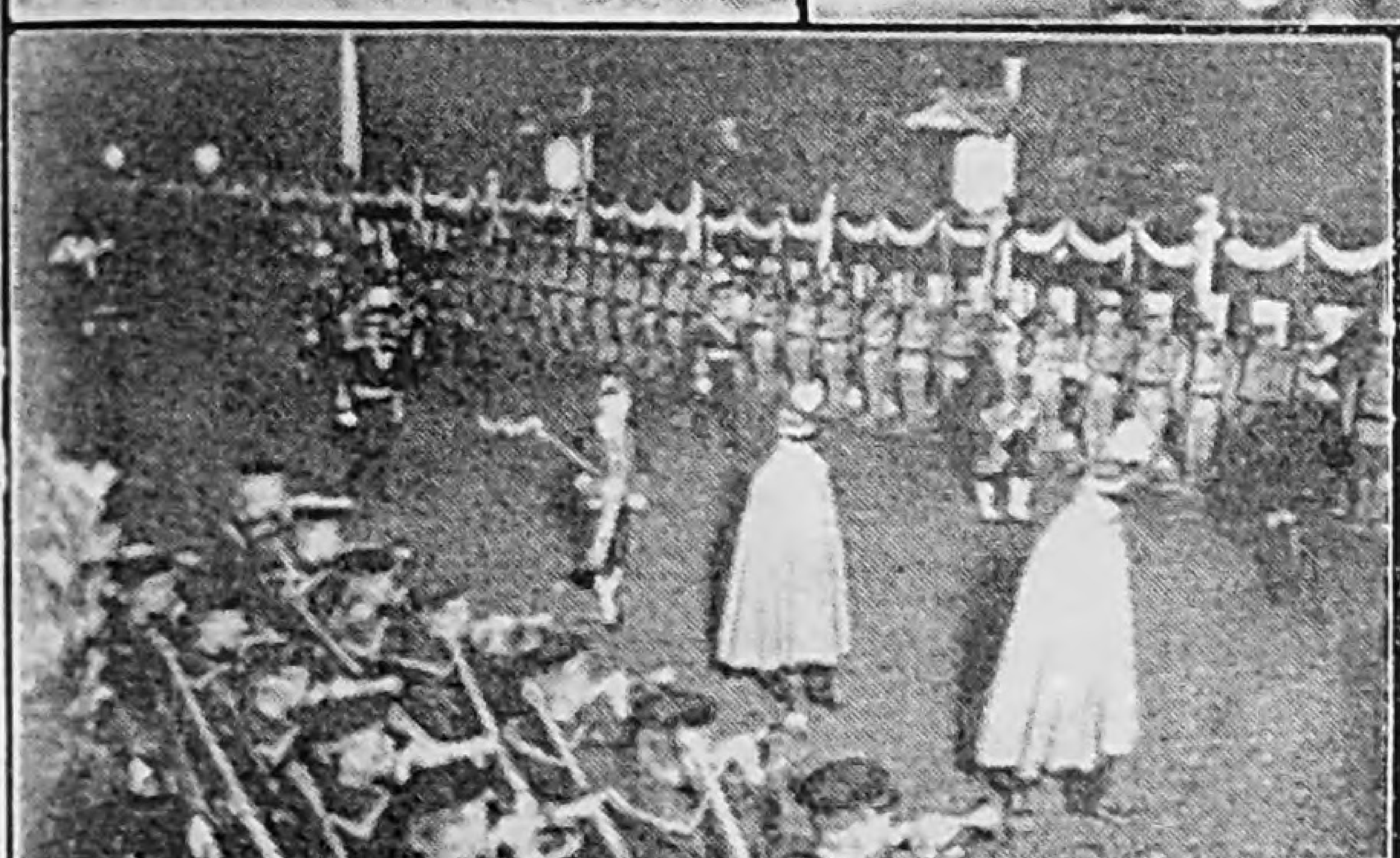
桃山御大葬鹵簿（三）



桃山山中の一部



観月橋より御陵を望む



桃山御大葬鹵簿（四）

皆さんタツタ**廿錢**でこんな面白い雜誌が見られ升

講談世界

十一月一日 初號發行｜價 二冊 貳拾錢（送料二錢）半年分 一圓二十錢 壹年分 二圓三十錢

口繪

俗謠潮來節（石版密畫二十四大判）……鰭崎英朋筆

○帝劇女優 森律子 河村菊枝○團十郎芝居 草摺引○幡隨院芝居 馬場信久（左團次）鼠小僧（菊五郎）其他新舊、淺草、赤坂の美人十餘名……（以上アート紙密版寫眞）

△武士道銘々傳 神後伊豆（古洞畫）一立齋貞山

△天保水滸傳 俗謠潮來節（英朋畫）神田伯山

△喜劇三幕物 意外の成功（春帆畫）檜田朝夢

新講談 **乃木將軍** 桃川若燕

△吉原奇聞 怪談手振坊主（春帆畫）邑井貞吉

△探偵實話 車中の毒（春帆畫）燕々齋葉柳

△落語 ゑびす講（古洞畫）柳家小さん

△義士外傳 名刀稻荷丸（春帆畫）有田梨葉

剛膽界……岡 鬼太郎

雜錄

○落語のモデル○空板氣焔○芝居茶屋の今昔○落語研究會評判記○待合女將の見たる客○屁風戀風の上野公園○氣拔な手紙○藝界おぼえ帳○活動寫眞○總ざらし○講談文藝

發行所 東京神田旅籠町一丁目 文光堂 電話下谷（四八一九）振替東京一九五五五

（賣捌）東京堂○東海堂○北隆館○至誠堂○良明堂○上田屋其他全國各書店

白珊瑚



伯爵小笠原長幹氏夫人貞子



（同、御令嬢）

眞珠



工學博士須田利信氏令嬢すみ子

「お姉様どちらがよくッて」

と花さんが両手に清書を二枚持て駈て参りました。

近頃はこんな幼い御子供衆でも字の巧拙を知つて居るやうになつて参りました。之れを見ても今の世に字が何れ位必要になつて來たかゞわかりましよう。殊に御婦人方の字の拙いのは損なばかりでなく、實に一生の恥です。今の中に例の評判の高い特許習字速成法で練習なさい、僅六ケ月で他人からうらやまれるほどの能筆家となられます。殊に手本の書者は小野鵞堂先生であります御希望の方は東京本郷區大學正門前帝國習字速成學會へ「ハガキ」を御出しなされば見本附會則を無代で差上げます。尚本月中の入會者に御姉妹方の特許水書草紙を差上ます。近來類似の會が續出御注意なさいませ。



●萬世不朽の紀念至寶!!

人格と技術と（に於て新界の）巨人（たる）帝室技藝員（東京美術學校教授）正五位高村光雲先生（が、畢生の光榮として）一切（の世）を拋ち　先帝陛下（御在世の砌り屢々）咫尺（に並び）拜謁（を仰ぎ深く腦裡に銘せる）御英姿（と、曾て拜領せる）御眞影（とに基づき齋戒）沐浴一刀三籟謹刻（し奉れる）大元帥御正裝御胸像（にして朝野の）貴顯紳士（より其の）龍顔の崇高（なるに驚歎せず）頭を垂れしむ眞に天下無二の傑作（なりとの）贊辭（を辱ふせる）名實兼備（せる）御尊像なり

先帝御銅像

御像既成

頒布元

博文館代理部

博通社

東京日本橋區本町一丁目

電話本局六百四十番
振替口座東京五十番

實費頒布

▲御寸法（總御丈は寶算に因みて玉座共六寸一分　龍顔は一尺八寸の御立像同様の大きさ）

●青銅色鍍金合御像（御鐙共）金五圓
●青銅御像　金廿五圓
●純銀御像　金二百圓

（送料　内地は五十錢臺灣樺太朝鮮滿國は各八十錢）

▲御筺の樣式（御製及御事歴を謹撰せる、尺呎の御紋形鍍金に刻抜き御壽を彫れ二重菊の金具付の静々しき桐材白木造）

▲頒布趣意書（先帝御銅像御寫眞光澤紙刷挿繪入美本御申込次第贈呈り）

▲便宜申込所（全國有名書店各新聞雜誌社代理部）

●注意

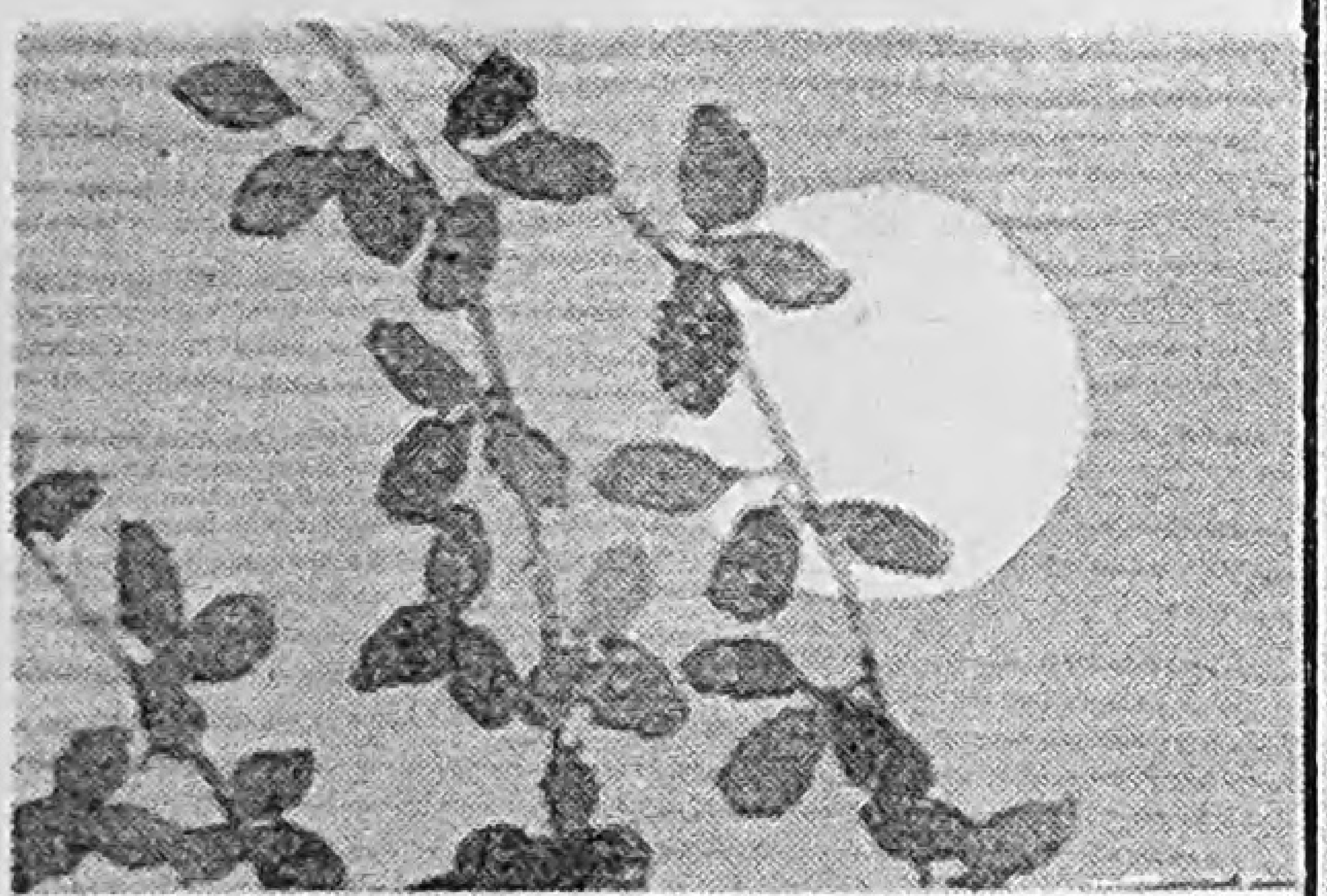
防間散見の粗製模傚品とは全然其趣異れず百聞は一見に如ず兎に角現像御拜觀あれよ

初紅葉



帝國劇場女優河村菊枝子

蟲聲





川久保修吉氏夫人ふさ子





三菱合資會社鑛業部副長植松京氏夫人もさ子

銚子で
犬吠岬と
君ヶ濱
よい景

山十印

日本と
醤油



醸造元 千葉縣銚子港
岩崎重次郎
(電話銚子三〇番 振替口座五七二番)

毛ぬき新劑

從來脫毛劑の類頗多きも之が製劑の原料は洋の東西を通じて硫化劑を配合して發賣せられつゝありと雖も皮膚に有害にして惡臭を有する不利あり先年所主數種の脫毛劑を研究して皮膚に無害なる一新脫毛劑ヘールピンを發明せるに多數の實驗成功者を生じたり本劑は皮膚に害なく脫毛せしむる唯一の良劑なり毛深き人毛多くして苦む人達は速に本劑を試用せられよ

原名ヘールピン
定價 壹圓
特製 參圓
內地送料 十五錢
海外 三十五錢

飲(ん)で色白くなる藥

近來美白劑としては外用的化粧水の類頗る多きも其確効あるものなく色黑き人の種々なる藥劑に迷ふの時代は過去り日進の醫藥學は一日も休止する事なく美白劑の製法も已に一變し內服劑應用の時代となれり當所製藥の惡液排泄劑ピオール錠は極て強度の清血劑にして一般惡血惡液性の人本劑を服用するときは血液を清浄となし惡液を排泄して皮膚を艶麗美白ならしむる美白劑となりあらゆる賣藥に外用的化粧水を用ゆるも目的を達せざる人速に本劑を愛用して天賦の美白を保存せられよ

藥名ピオール錠
壹劑 壹圓
參劑半 參圓
內地送料十五錢

東京市牛込區
北山伏町壹番地
百合園製藥所

賜天覽

典侍従三位　柳原愛子君序

掌侍正五位　小池道子君題歌

故御歌所長男爵　高崎正風翁述

遠山稻子編

歌ものかたり

定價金壹圓

送料（市内四錢地方八錢 滿鮮臺灣樺太十二錢）

齋藤松洲畫伯裝幀　菊判總クロース　金文字函入美本

本書は故樞密顧問官兼御歌所長男爵高崎正風翁が、和歌に關する種々の趣味深き物語を輯めたり。翁は御歌所長として、

明治天皇陛下の御親任深く、特に御製の拜見を仰せ付けられしこと多年　陛下の御製に就て殊に臣民の仰ぎ奉るべき御物語を初め、御製拜見の動機、和歌の精神、詠歌の心得草、翁の交友、翁が歌人としての閲歷等、面目躍如として恰も翁が溫顔に接するの想あり。

而も本書は翁が生前に出版せられんとして、門人遠山稻子女史に講述、筆記せしめられ、一々翁が校訂せられしものなれば、翁の遺稿と稱す可きもの、翁が深き含蓄と閲歷とは本書を俟つて初めて世に公にせられたりと謂ふ可し。行文平易、趣味横溢、巻を掩ふに暇あらざらしむ。敢て紳士淑女の座右に薦む。

發行所　東京市麹町區飯田町四丁目四番地
電話番町　二三三九　振替東京　一一八一八
東京社

各地書店に在り

第十二巻第十四號……十一月一日發行

女學世界

菊判紙數二百八頁　口繪石版寫眞版數葉　正價廿錢　郵税二錢

東京　本郷　博文館

和氣瑞氣



高橋德治氏の家庭





豐國銀行營業部長濱口祿之助氏夫人

菊の蕾



子爵園池公静氏令孫純子



岩垂邦彦氏令孃廣子



ドクトル曾根龍造氏令孃八重子

●少年少女達の家庭最良讀物

佐々木邦作 好評

天やんちやん

再版

▼中判美裝 武田春氏石版彩色畫 大阪信氏挿畫六葉入　正價金參拾五錢 送料金六錢

いたづら小僧日記で有名の、佐々木邦先生の作ですから大人にも小供にも面白いことと請合の書物です。世の中に出ると、到る處評判になつて、何處の家庭でも爭ふて購求され。此頃の好著として、持て囃されて居ります。

（諸新聞好評あり）

◎出版元 東京 京橋區大鋸町十一 振替東京七貳九 女子文壇社 どこの本屋でも取次販賣して居ます◎

色白新劑

本劑は近時佛國パ、ス[illegible]女間に最新流行の發明劑にして生來色黒き男女にても本劑之を用ゆれば本劑の主成分たる皮膚漂白性作用により漸次肉體**白色**となり肌を滑にし[illegible]を伸しあれ及吹出物を治し**艶美**の容貌となる効果を有す世上種々雑多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑特製分式劑を試みよ偉大なる奇効完全に顯る價非製實劑[illegible]廿錢 特別製實劑貳圓貳拾錢

色白飲藥

英國及獨逸國輸入二種の全身清血劑にて飲んで體內の惡血毒血惡液を體外に排泄し血液を淸淨にし完全に肉色を**白色艶美**ならしむる奇効顯著の藥なり價英國製壹劑貳圓九拾錢獨逸國製壹劑九拾錢雙方併用せば偉大の奏効容易に顯る着金即刻送藥す

腋臭根治劑（わきがこんじざい）

本劑は腋臭症に對し最近の學理と實驗とにより研究發見せられたる**斯病唯一**の理想的卓効新藥なれば他藥にて全癒せざる患者は早く試み病源を去り**苦惱を脫**せよ輕重症は特別製を用ゆれば完全著効を奏す 價輕症用九拾錢重症用貳圓拾錢頑固慢性症用特別製分五圓卅錢小包送

あざ ほくろ そばかす 及入墨

（最新發明藥）

ず。なまづ。いぼを美麗に除去すること**著効**ある新藥あり患部の大小輕重を問はず容易に治癒し假令顔面たりとも**痕跡**を殘さず除去し得らる但し其製劑を二種に區別し一はあざ。入墨。ほくろを除去し又一はそばかす。なまづ。いぼ除去するものとす故に注文者は各自除去せんと望む所の病名及患部の寸方を明記し申込あれば其症に適應する藥を撰定送付す價は各試用劑壹圓拾錢小劑參圓拾錢中劑五圓拾錢大劑拾圓拾錢とゝにて郵券代用貳割增し（患部の面積大なる人は大劑を求むるを適用とす）着金即刻送藥す

月やく通經劑

本劑は胃腸を害せず子宮を痛めず月經とゞこほりを容易に**通經**す長き滯り及び血塊には特に[illegible]製分を用ひよ極安全に快通**流經**す且つ月經不順より起る子宮病血の道を治癒し惡血古血を一掃す患者は早く試み偉大なる**特効**を知られよ近時無効類似品多し御注意を乞ふ價は壹劑七拾錢貳劑壹圓廿錢寶劑壹圓七拾錢 特別製分貳圓卅錢郵券代用貳割增し

婦人病の福音

本劑は最新の學理と多年の經驗とにより發見せられたる婦人病唯一の靈劑なるを以て頑固なる月經閉止及血塊杯と稱へ永年經水なきを快通流下するは勿論月經不調に基因して續發する逆上頭痛眩暈腰痛攻に子宮に痛ある人腹腰子宮部の疼痛等に用ひ偉大なる卓効顯著なり早く試よ

毛生新藥

（奇効斷若藥）

本劑（藥名ヘアーグロース）は多年研究實驗の結果發見したる**毛髮發生藥**なり即ち男女共禿頭病の人各種の病氣にて脫毛する人頭髮及はえぎはの薄き人陰部毛なき人まゆげ口ひげの薄き人其他總て毛のあるべき所に毛なき人用ゆれば毛髮早々と**發生する特効**あり本劑は世にありふれたる種々雑多の毛生藥とは其効大に異なるに付常に玉石混同視することなく速に試み偉大なる奇効を知られよ價小瓶壹圓廿錢中瓶二圓卅錢特別製分五圓卅錢着金即刻送藥す郵券代用は二割增しの事

やせる藥

實劑壹圓廿錢貳劑六圓二十錢特製九圓拾錢

本劑（藥名ヨードチリン錠）は學理實驗に徵したる唯一の**瘦身劑**にて血ぶとり。水ぶとり。あぶらぶとり。顔赤くほてり。の瘦せ症。本中症等總て肥滿貧多血質脂肪過多の人用ゆれば體質を强化して著しく過量を減じ脂肪を適度に保ち輕よくやせる**美容健康**に脫し見苦しくふとりたる患者は特効藥なり故に彼の偉大なる特効を知られよ速に本劑を用ひ其偉

以上七藥 **專賣**

東京市神田區五軒町十九番地

日新館藥房

電話下谷五百四拾六番
振替東京壹九貳四六番

秋錦



太田時子孃（女子大學出身）

清水やす子孃　古岩井春子孃

庭の草原



福岡縣大川町淑德技藝女學館卒業生

女子文壇顧問 化粧問答
藤波芙蓉先生
實驗發明

コールドクリーム

「コールドクリーム」の美顔料としての効用は、之をお化粧なさる前によく御顔なり、御手なりに摺込み、紙か軟かい絹で拭き取りますと、アブラ性の方は、アブラの出るのを防ぎ、アレ性の人はアレを直し、皮膚を艶麗ならしめ、光澤を出し、おしろいを翌日までも剝げずに落付かせ、殊にシワを延ばし、色を白くさせる力を持つて居ります。『但し此クリームは美顔劑で、世のクリーム類の如く御化粧下の用には立ちません、「艶肌劑」と「コールドクリーム」とは艶肌美顔の姉妹劑です。

一瓶 價金壹圓
送費 市内四錢 地方八錢 清韓臺樺各參拾錢 (郵券代用一割增)

速に試用

女子文壇顧問 化粧問答
藤波芙蓉先生
實驗發明

艶肌劑

「艶肌劑」は顔のシミやオデキの痕を取り、キメを細かにし、皮膚のツヤを綺麗にし、化粧下にも、白粉下にもなり、而して白粉のノリをよくし、お化粧を落付かせる化粧料であります。

一瓶 價金六拾錢
送費 市内四錢 地方八錢 清韓臺樺各參拾錢 (郵券代用一割增)

有効珍品

女子文壇顧問 化粧問答
藤波芙蓉先生
實驗發明

純植物性洗粉

此「あらひ粉」は石鹸に代るものとして皮膚を美化するのみならず、洗髪料洗粉として髪のツヤを出し、毛をサラ〱とさせます、即ち先づ此洗粉で、顔やおくしを洗つて「美顔劑」を塗け「コールドクリーム」をスリ込み、其上に「艶肌劑」を御つけになれば、四劑互に相たすけ合つて、根本的に自然美を發揮する譯であります。

小袋入金卅貳錢
大袋入金六拾錢
送費 市内四錢 地方八錢 清韓臺樺各參拾錢 (郵券代用一割增)

を知れ!!!

以上六種 發賣元 東京市京橋區大鋸町 振替口座壹七六九番 (電話京橋六〇七番)
女子文壇社代理部

好評 一巻三號

十月號

最寄書店につき内容御覧の上御購讀を願ます

本社に一二號少々揃有

毎月一日發刊

お伽世界

家庭最良讀物

廉價無比

◎こんなよい雑誌は外にない

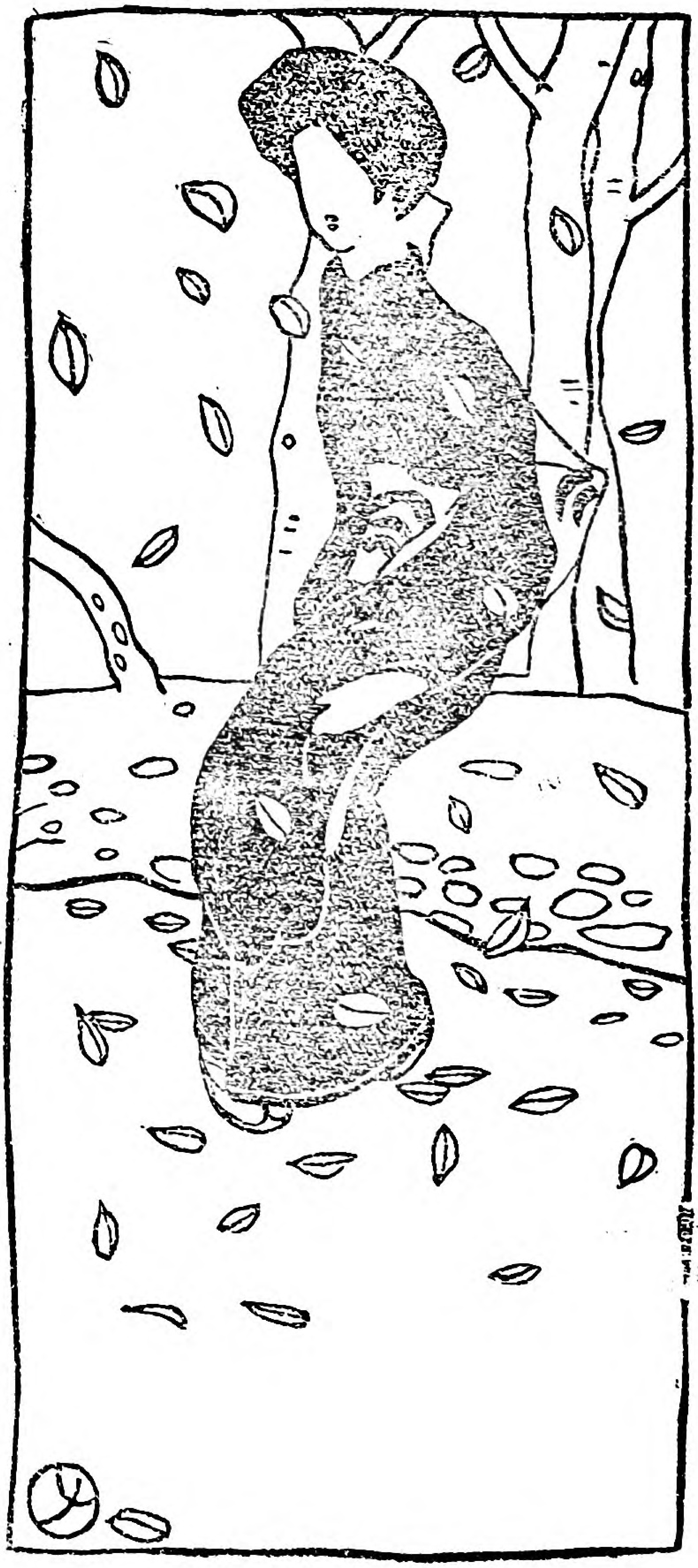
價一冊金七錢 郵税五厘

少女

挿畫 山澤

發行所 東京市京橋區大鋸町二番地 女子文壇社 (振替口座第壹七貳九番)

賣捌 全國書店



女子文壇

十月特別號

（第八年第拾號）

乃木大將の妻

軍事參議官陸軍大將從二位勳一等功一級伯爵乃木希典、及び夫人靜子が、大正元年九月十三日夜八時、明治天皇御靈柩御轜車發引と同時に、自刄して果られたことは、國民全般に甚大の感動を與へました。

大將の殉死が誠忠無双の赤心より出たことは勿論、夫人靜子も亦死を共にされたことは、人の妻として渇仰すべき立派な最期であると思ひます。夫人の自刄は吾が婦人界全體に尊い敎訓を遺されたのでありますが就中吾人は左の二個の重大なる意味が、其うちに含まれて居ると考へるのです。

熟ら惟ふに夫人は純日本式の婦人でした、失禮ながら夫人は深い智識を持つて居られたと云ふのでもなく才氣の優れて居られた方とも思はれない。要するに溫良貞淑、女は人の妻として其夫に同化すれば足りると云ふことの外に何等の念はなかつた。此の故に、大將に習ふて家庭を守ることと嚴肅且質素、內に軍人の本分を自覺しておられたから、外に飾る必要を見ない、固く自信の上に立つて、乃木家の爲に――換言れば大將の爲に、眞に精神と身體を獻じて仕へた、此誠實な心は、何んな世界であらうと、何んな時代であらうと、

苟くも人間の世の中に於ては尊重せねばならぬものである。夫人の家政が時代後れであらうと、頑固であらうと、然んなことは此際問題にならぬ、只誠實な心が尊いのです。社會の變遷は婦人を何んな思潮に乘せるか知れないが、此眞に夫を理解し、夫に同化し、夫に獻身し、其死の最期に至るまで夫の精神の中に包まれたる夫人の誠實なる行動は、仰ぐべく、尊ぶべく、且學ぶべきものだと思ひます。

今一つは、夫人の行ひが飽くまで質素を守られたと云ふことです、近頃貴族令夫人など云はれる際は勿論地位身分の低いものまでも一般に物質的贅澤に流れて來て居るのは確かな事實で、夫人の行ひは多少此潮流に反感を抱かれて居たかと思はれますが、吾人と雖、此潮流には反感を抱いて居ります。內に虛しきものほど、外を飾ると云ふ風が一般に行はれて、曰く生活難曰く結婚難と、いろ／＼な難義を持出すやうですが夫人の如く泰然自若として獨立した考を、實地に行つて行けば決して難義はありません。身、大將の夫人でありながら、每に木綿の着物を着、臺所に立働かれたと云ふことを聞けば、他は推するに難からずで、一事は萬事、夫人の摯實な態度は、蓋し根柢より深いのでした。

之を綜合するに、乃木夫人は如何にも舊式なるに拘はらず、主婦としては獨立した考を持ち、妻としては同情を解し、人としては其行ひの誠實なる點に於て、立派なる生涯を終られたのです。新式ならんことを希ふの餘り、兎もすれば人生の根本まで搖がうとする昨今の婦人社會には、何よりも有りがたき活きた敎訓であらうと思ひます。惟ふに夫人だとか、奧樣だとか、令孃だとか云ふ言葉は、乃木夫人を稱する場合に適しません。記者は殊更に『妻』と云ふ字を選びました、實に『妻』と云ふ文字に痛切にあてはまる婦人は、乃木靜子其人であらうと思ひます、記者の微衷の存する處も其處に在るので、なほ二三の名流婦人の方々のお話と、乃木夫人の二三の逸話を左に掲げて、讀者と共に夫人を愛慕するの料にいたしました。（記者）

夫人はお話の好きな方

陸軍大將川村景明氏夫人　川村せい子

今度乃木大將御夫婦の自殺は、何と申上てよろしいでせうか、誠に不憫な至りでございます。大將は長府の藩士でございまして、夫人は私と同鄕(薩摩)で貴族院議員湯地定基樣の實妹でいらつしやいます。おとう樣は漢方の醫者でございました、御兩親にも早くにお別れになりまして、たしか大將が明治十年の戰爭から凱旋になられて後、結婚遊ばされたのでございます。

威名赫々たる大將、その大將をして毫も內顧の憂をなからしめ、一意國家につくすを得せしめたのは、全く靜子夫人の偉大なる功績であると私は信じます。夫人は愛國婦人會、篤志看護婦會、將校夫人會の評議員、又た幹事でをられますが、夫人のお得意となさる場處は、それ以外でした。電燈輝き香水薫る交際場裡は夫人の眼中にはございませんでした。夫人の仕事の場所といへば、その嚴肅にして溫良なる家庭の外にはなかつたのでございます。

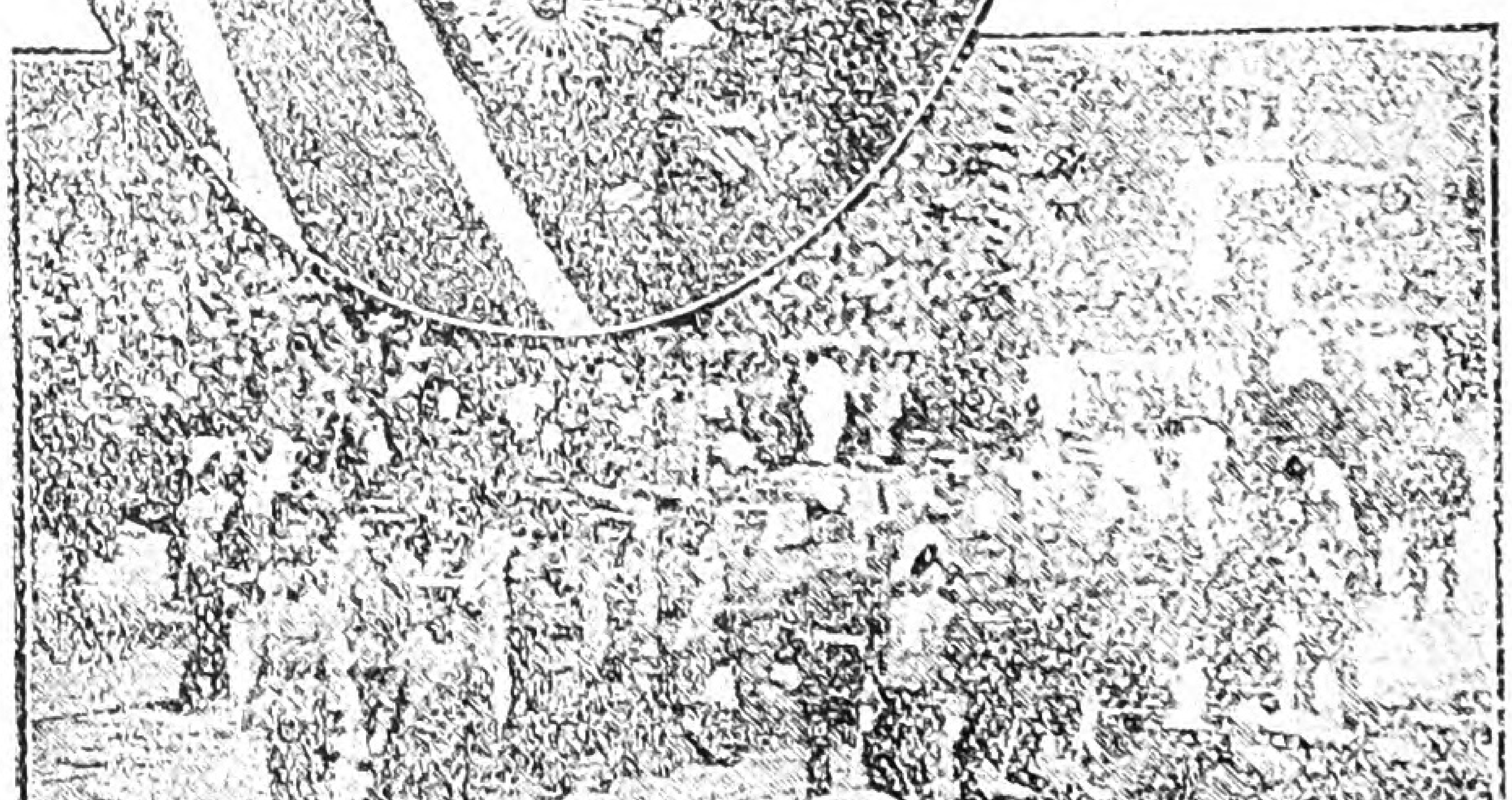
家庭を處理なさつた方針は、所謂實踐躬行主義で、立派な位置に進れまたる今日でも、夫人は一切の家政を自ら行はれ、三食の世話、衣服の洗濯、盡く御自分で先に立つて行つて居られたので、三十餘年間一日の如く眞に倦むこと知らず、夫人はこれを當然婦人の義務として行はれたのでございます。

此大將にこの夫人あるといふべきでございませう、中々の賢夫人で、大將と共に殉死されたといふことは實に悲壯の極でもあり、他の人々には到底出來ぬことでございます宅へもよくお見えになりました——私もよくあがつたものでございます。

今更いふまでもないことですが、彼の旅順の戰役にお二人の子達の戰死なさいましたのは、人情として誠に忍び難い處でございます。深く覺悟していらつしやると見えて、只の一言も、おなげきの意味の言葉をきゝませんでした、大將もおつしやつたお言葉ですが、他人の子を多數殺して、自分の子供が無事に歸つて居ては濟まないとは、夫人も能く仰いました、大將と共に國家の爲に私事をかへりみぬところは、實にお偉い方でございます。斯う申すと、如何にも涙のない方のやうですが、中々情に厚いお人で、一度知り合つたものには何處までも親密にして、その身上に就ても、常に心配するといふ方で、召使などゝ我子供のやうに憫んでいらつしやいました。在世中のありしことを、それからそれと考へますと、涙の種でございます

うつし世を
神さりましゝ大君の
みあとしたひて
我はゆくなり

臣 希典 上

乃木大將と葬列

夫人は中々お話好きな方で、私なども一寸御訪ねしようと存じて伺つても、御閑な時ですと、一時間と思つたのが、ツイツイ半日も掛ると云ふ風でした。その話はと申しますと多くは經濟上のお話や、那須野の御地面の御話などで上流夫人の交際談などや、時折の娯樂のお話などは少しも承はりませんでした。

伊勢の神樂料に驚かず

陸軍中將比志島義輝氏夫人　比志島雪子

二十七八年の役、大將が少將より中將に進み、第二師團長に補せられまして、遼東半島に滯陣せられた頃のことでございます。或日伊勢山田の神宮司廳へ一人の男兒を伴つた婦人が案内を請ひました、取次の禰宜がその風體を見ますと、至つて粗末な綿服を着まして持物は甚だ質素で、子供は中學校の粗末な制服をつけ母なる人に引添ふて居る。禰宜はあやしみながらさて用向を問ひますと、婦人は慇懃に手をつかへまして、私は唯今外征の王師に從軍して居る軍人の家内でありますが、我軍の大勝を得ますやう、二つは出征者の無事凱旋を得るやう、太々神樂を執行して頂きたく存じますが、費用は何程かゝるでせうかと申されましたその時禰宜に心中に生意氣なことをいふ婦人だ、太々神樂といふと莫大の金がかゝるのに此んな人がどうしてそれだけの金は出せるものかと思ひ、輕蔑の色を現はして、鼻あしらひに、それは御奇特のことであるが太々神樂といへば二十五圓、三十圓、五十圓、それからまた特別のもありますといつて、婦人が定めて驚くであらうとその顏色を窺つて居ると、一向に平氣で、それではどうかこれで萬事宜しくたのみますと、手垢のつかない十圓紙幣幾枚かを出されたので、禰宜は膽をつぶし、にはかに言葉もていねいになり、して貴殿樣はどなたの御內室樣で、御出征のお方の御名まへは何と仰せられますか、太々神樂には承はりませんではと問ふに、夫人は再三辭したが是非にといはるゝに然まで秘すべきこともないから、自分は乃木希典の家族でありますと答へました。この一言に禰宜は驚いたのでございませう、乃木中將の奧方さまでしたか、左

様と存せず唯今までの無禮は平に御容赦下さるべしと平蜘蛛のやうに謝罪したので、夫人は却つて迷惑を感せられまして、モチモチして居らるゝと禰宜が引込でしまひまして、間もなく今度は身分の餘程高い神官が立出で挨拶をいたしまして重ねて取次ぎの無禮をわびさて太々神樂は明朝執行しますから、御參詣なさるゝやうにとあつてその翌日滯りなく執行して夫人は歸途につかれました。この時同伴せられたのはたしか日露の役に戰死なさつた乃木少尉であつたのでございます。

出でまして
かへります日の
なしときく
けふのみゆきに
逢ふぞかなしき

希典妻　靜子上



乃木夫人と葬列

その年神宮司廳より、戰地へ慰問使を派遣されましたが、その派遣使が金州の乃木將軍の陣營へ參り、慰問の詞を述べた後、過般夫人に對して不行屆であつた事情をのべ、宮司よりよく／＼おわびを申上げるやうにと申付りましたから何卒よろしくおねがひ申上ますと云ふので、大將もにこつと笑はれつまらぬ事をどうか御心配なき樣、申上て下さいと申されたさうでございます。

*　*　*　*

日清戰役も終りまして、凱旋間近になりました時、

夫人は居宅を定めるために仙臺に行かれたことがございました。その時、仙臺には、宮城婦人會といふ師團將校方の夫人令孃を中心とした會がありまして、夫人の御來仙については、御近附の爲とあつて、仙臺第一の料理店、遊翠館に大會を催ほし、婦人を招待いたしました、會員の婦人達は今日を晴と着飾り、花紅葉を一時に集めたやう、眼もあやなる美觀を呈しました、斯くて一同夫人のおいでを待受けて居ります處へ、辻車を乘りつけて、徐々と降り立ち、案內に從つて正面に着座せられました夫人は、いつに變らぬ極めて質素な木綿服で、悠然と控へられました。之を見た會員はアツと許りに驚いて、銘々の服粧を顧れば、花恥かしき立派な服粧をして居る、而かも彼の綿服の人よりは遙に下級の者が多いのですから、何にしても自分ながら氣が咎めて、夫人の前に出ることも出來ぬ、困りはてゝ俄に自宅へ使を走らせ、木綿の着物を取寄せて着替る人があるやら、漸く挨拶を濟まして、其日の會も終りました。同地では、之に懲りて、夫人令孃の美服を好む風が、大變質素な風に改まつたと申すことでございます。

大義名分をわきまへたる夫人

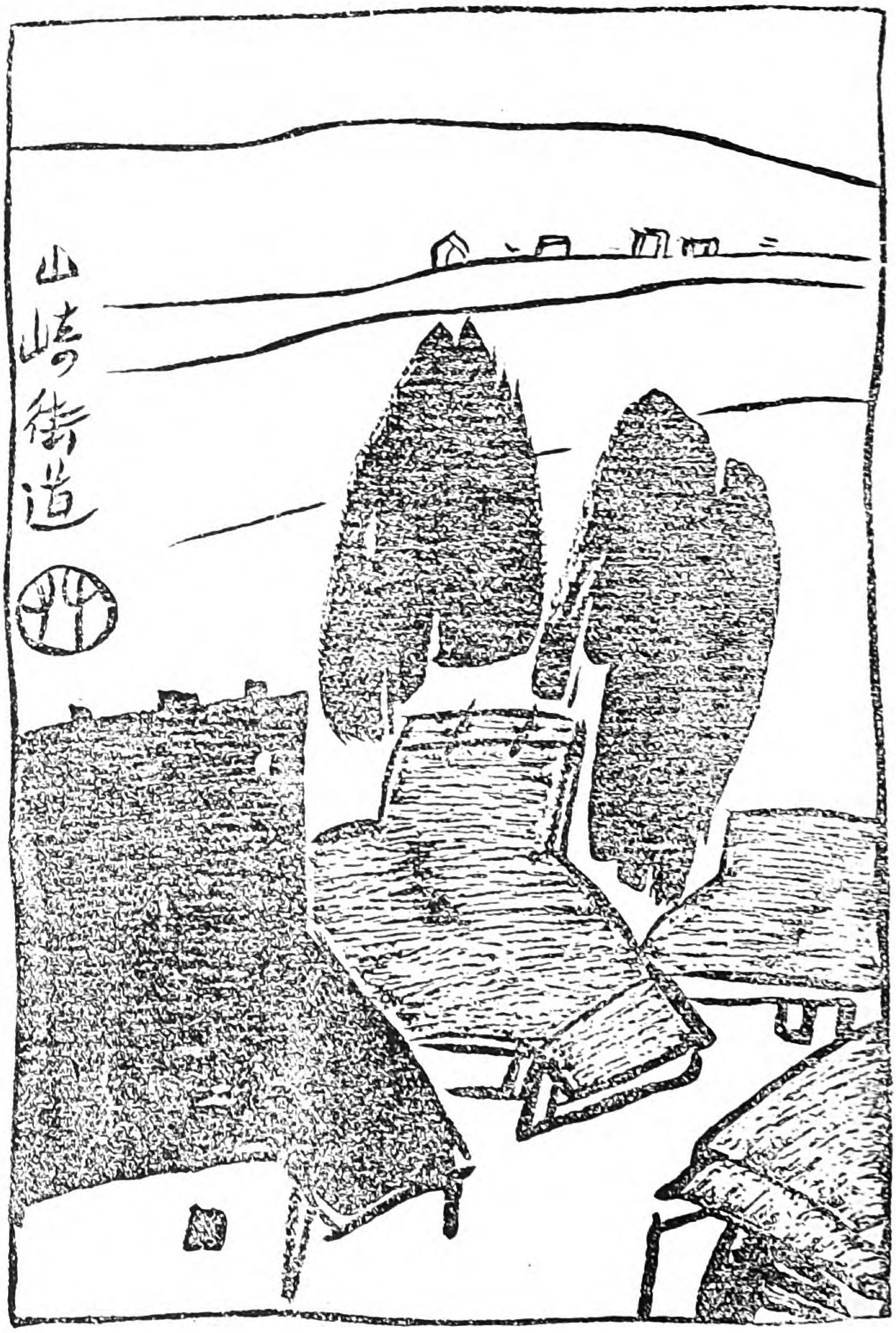
陸軍少將澁谷在明氏夫人　澁谷知和子

私は乃木大將夫人の事は能く存じません、御承知の通り、會があつても滅多においでになりませんから、お會ひ申す機會も少く、細く申上るやうなこともございません。

只、自殺なされたといふ刹那に、私の感じましたことは、先帝陛下の崩御に遭ひ奉り、國民の淚がまだ乾

かぬうちに、また大將夫妻を失ひましたのは、國家の上から一大損失であると思ひました。あの美しい水晶のやうな御氣象の御夫婦が御大葬と同時に割腹されたといふことが今も目の前に見えるやうで只もう高潔な死と云ふ外に言葉がございません。

二人の御子さんの戰死に就いても、口に出して悲まれなかつたといふことは、能く夫人の氣象を表はして居りますが、夫人が今日あることを思ひますと、決して涙がなかつたのではございますまい。此大將にして此婦人ありで、二人とも誠忠無二の模範として、末代までの語りぐさでございます。



近頃世間の風が浮薄に流れ、自由勝手な思想が横行いたしますが何うか此を動機に健實な思想を持つて頂くやうにしたいものでございます。昔の婦人は凡て大義名分と云ふことを深く心に銘じて居たものでございますが、今日の婦人の取る

方針は、凡て利己主義を本として居られるやうです、昔の婦人は大義名分の爲に出所進退を明かにし、今日の婦人は利己主義から割り出して、行動するのでございます。昔の婦人の例は細川忠興の妻、楠正行の母、いくらもございませう、乃木夫人もそれらの一人でございます。

夫人の最後は男も及ばぬ立派なものでございます、大將の書置から判斷しますと、最初大將から決心のほどを聞かされ、それならば私がお後の始末をしますと快く大將の最期を見とゞけた上で、心しづかに御自分も刃に伏されたのでございませう。その健氣な擧動は古の女丈夫に優るとも、劣らぬもので、親しくお話をしたことのない私でも、思へば思ふほど感涙に咽ぶの外はございません。

最後の十分間まで自若たり

乃木夫人の姪　馬場玉子

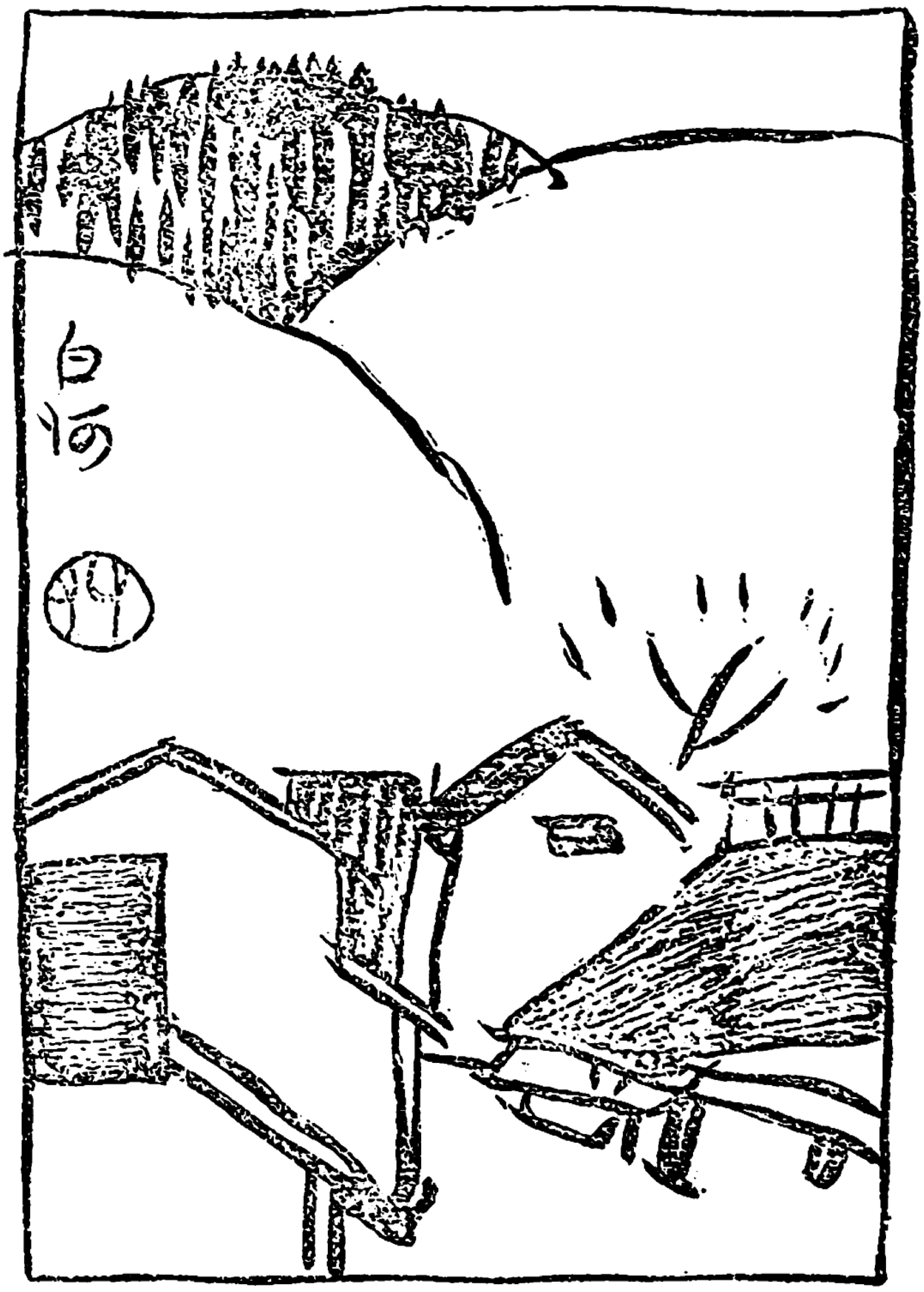
私の母（乃木夫人の姉）は今年七十四歳でございます、母の同胞は七人でございまして、父は湯地定基と申しました、叔母（以下、叔母々々と云ふのは凡て乃木夫人のことなり）は其七人の末子でした、七人目だからと云ふので、幼名はお七と申しました。子供の時から外の子供とは性質が違つて居りまして、何事をするにも他の手をかりない、自分ですると云ふ風で、潔僻な性質でございました。

其性質が乃木夫人となつた後の今日まで、失はれずにあつたのでございませう、毎も叔母は女は女大學式でなければならぬと申しました、ハイカラな西洋風は大嫌ひでございました。ですから萬事が質素で、家庭

などにも少しも華美な風がでございませんでした、親類づきあひも質素な方で、親類以外の交際に好んで出かけるなどいふことは殆どございませんでした。

叔母の不斷の行ひの質素で、愼み深く、派手嫌ひであつたことは、新聞や何かに出て居ります通りでございますから、改めては申ませんが、私共で新しい悲哀の種になるお話が一つでございます。

それは去月の末、私がお產をいたしまして、それが恰度叔母のやうに七人目で、而かも女の子でございました、すると二十九日でしたか叔母が見舞に參りまして申しますには、私も七人目だつたし、此度の子も七人目だから私の處で名を附けてあげようと思つて、叔父（大將）が考へたのですと言はれて、志津江と云ふ名を持つて來て下さいました今までに例のないことでございましたから、私共でも欣んで頂きましたが、今思ひますと、それも悲みの種でございます。



亡くなりました十三日にも、叔母夫婦が二人で揃つて參內するとの話でございましたので、母も叔母が參內する模樣を見たいと申しますると、娘（十六歲になる馬場氏の令孃）も參りたいやうに申しますので、朝から二人で乃木邸へ參つて

居たのでございます。
大將の様子も、叔母の様子も少しも不斷と變りなく御所からは正午頃に歸つて、四人一緒に晝飯を頂いたさうでございます。お夕飯も亦四人一緒に食卓に向つたのでございますが、大將はお蕎麥を召上つたさうでございます、而してパンも召上つたのださうで、娘に『お前もパンを食べないか』と大將が言はれたのでしたが、娘はパンより御飯の方を頂きますと云つて、樂く晩餐を濟ませたのでございます。

晩餐が濟みますと、大將は馬丁も、書生も御大葬を見に行けと云つて出してしまひ、二人の女中だけには少し後から行つたら宜からうと云はれて、大將も叔母も盛粧のまゝ二階の西洋室へ入つたさうですが、八時少し（五六分）前に叔母は降りて來て、葡萄酒の壜を持つて又二階へ上つたさうです、それから十分も經つか經たぬうちに、其室の方に當つて、叔母のたゞならぬ呻き聲が聞えました。
あゝ、もう後は語るまでもございません。

乃木夫人の逸話

▲男子も耻かしき覺悟

石黒男爵は語つて曰ふ、私の考へでは、最初妻を刺殺して、次に乃木が死んだものであらうと思つて居たのに、豈に圖らんや、實際は乃木は先づ切腹して咽喉を刺して死し、夫人は乃木の最期を見屆て心靜に死だものらしい、それは遺書の中に夫人の宛名があり、又私に宛てた遺書中に『愚妻も納得して居る』と云ふことがあるのを見ても明かである、それで乃木が死ぬるに先立つて、俺は死ぬと云ふことを夫人に明したに相違ない、夫人の平常の氣象を察して見たならば、最初乃木の決心を聞いた時には、一度は止めたかも知れぬ、

併し乃木の斷乎たる決心を聞いて、それでは私も御最期を見屆けてから、自殺しませうと云つて死んだのだらうと思ふ。それのみならず、夫人は如何云ふ風にして死んで居たかと云ふと、第一期の喪服で、鈍色の袿を着、柑子色の袴を穿いて居た、自殺に用ひた刀は一尺餘の懐劍で銘は月山貞一とある、これは明治三十七年頃に鍛へられた新刀で、白鞘に納めたものである、創は四ヶ所であるが、一ヶ所は創と云ふ程でもない、先づ三ヶ所の創に就て云ふと、第一創は胸の眞中を刺して居るが、胸骨があるから深く入らぬ、第二創は右胸骨の脇を刺して居る、深さは一寸五分位で、肺を刺し、心臟の一部に觸れて居る、併し未だ死きれぬ。大抵の男子でも、此處等までやれば、我慢が仕きぬれものであるが、夫人は尚我慢して、劍身を握つて、左胸の心胸部に當て、最う刺す力もないから、體でもつて其上に乘りかゝり、體の重量で懐劍を心臟に突通した其壯烈なる有樣は驚き入る許で、これも男であつたらば、普通の男ではないと私は思つた。

▲夫人の死支度

乃木邸に出入する麻布の女髪結、岩崎つる女は、十三日の事變に就いて語つて曰く、奥樣の髪を結ふので乃木樣のお邸にお出入を致してから、本年でモウ十一年になります。今度奥樣は旦那樣と御一緒に、御自害遊ばされた相ですが、誠にお痛はしいことを致しました。妾は十二日の正午頃、乃木樣の大高といふ書生さんが來て、十三日の朝七時までに來て呉れとのことであつたので、其刻限に伺ひますと、奥樣は御入浴中でしたが、間もなくお上りになりまして、今日は二階で結つて貰ひ度いと申されました。何時もは束髪ですが其時は宮内省の方へ伺ふのであるから、お下げになさいましたのです、お年に似ず白髪もなく、拔毛も少なく、長い立派なお髪で、束髪の時より一層御見上げ申しました、隣室で煙草を吸つて居らしつた旦那樣は『寫眞屋が來から早くせよ』と仰られたので、間もなく喪服に着替て、旦那樣とお玄關の處で寫眞をお撮になり

ましたのですが、何時になくお頭髮の事を氣にお掛け遊ばして、今日は宮內省から自働車が來るので、夫で參內して還つてから再び夕方から青山に御見送りをせねばならぬが、髮の形が崩れねば好いが、とお氣掛りの御樣子が見えました。一體奥樣は世話好きなお方で時には他家の御嫁樣の世話抔も爲さいましたが、其時には、妾がお髮を上げに參りましたもの丶、平常は大體御自分でお上げになりましたから、妾が伺ふのはお式でとか何かの時で、月に三四度で御座います。

元々無口な方で御座いましたが、永年御出入をして居たので、妾の氣心を御存じなので、時々打解けた面白い事を申されますことも多かつたのですが、旦那樣は何時も學習院の方にのみお出でになつて、日曜日にお歸りになります、其時は必ずお馬に召されて、御親類先や其他の御用先へお出かけになりましたさうです日露戰爭の當時に戰死なさいました二人のお子樣のことは時々お話しになつても、決して未練がましいことは申されず、戰死したのは常々弱かつたので、人樣が餘り可愛がりすぎると言はれたのが、これで安心することが出來ると、御國のために戰死されたのを、滿足に思召して居られました樣で御座います。

妾が十一年の長のお出入をする中に、奥樣のお話中に面白い方と感じましたのは、奥樣がお嫁にお出になつた時、旦那樣は大尉であつたさうですが、媒妁人に連れられて來て見ると、旦那樣は隊の方にお出でに爲つて居て、お留守宅であつたさうですが、旦那樣はその花嫁樣をそつち除にして、隊から歸つて來ると直ぐとお酒を飲んで、其夜は一言の御挨拶もなく、寢込んでお仕舞になつたので、奥樣は初めての家ではあるし花婿には寢込まれるし、其時程お困りになつたことはなかつたと承はりました。

▲田舍婆さんの參詣

或年大將は演習の歸りに、伊勢神宮に參拜したる事あり、謹嚴なる將軍は正服にて參拜せんとし、東京の夫人に『大禮服にて伊勢神宮へ參拜する考へなれば、

大禮服を持參して、何日までに停車場へ來よ、又お前も紋服で一緒に參拜する事にせよ』との書面を送れり。依りて夫人は將軍の正服を整へ自身は木綿の紋服にて名古屋に着し、停車場前の旅館支那忠へ泊らんとせるに、支那忠にては質素なる夫人の姿を見て田舎婆さんの參詣と思ひ、薄暗き一室に通し、先づ宿帳を出して姓名を問ひしに、夫人は『今日は良人も來て一緒に泊る筈なれば、宿帳は其時にして下さい、先づ湯に入りたいから』と頼みしも、目端の利かぬ番頭は鼻先で待遇ひ、湯にも案内せず、熱き茶も薦めず、頗る不待遇ひなりし處へ將軍來着し、『家内が來て居る筈だ』と云ふ事になりて、始めて先刻の質素なる木綿紋附の婦人が大將夫人なりと知れ、旅館の恐縮一方ならず、直ちに部屋を取替るやら、茶菓子を出すやら、大騷ぎをしたる事あり。

▲飽までも日本の服

乃木將軍が臺灣總督たりし頃と覺ゆ、夫人は觀菊の御宴に列したる事あり其時御苑内を歩く總ての貴婦人は何れも美々しき洋裝にて、嬉々として飛び廻りゐる中に唯一人袿に緋の袴、恰も神子の如き姿せる婦人の靜かに歩めるを認めたり、近づき見れば乃木夫人なりき、夫人は他の婦人が悉く洋裝せる中に立ち交りても少しも恥づる色なく、從容迫らず、悠々として御苑内の菊花を拜觀しつゝ心を慰めゐたりしなり。

▲下女下男を呼捨にせず

お出入の魚屋某曰く、能く聞くてつてすが、此肴は大きいとか、小さいとか言つた樣な事は、乃木さんの夫人に限て言たアとはありませんよ。買はうと定れば値を訊てお鳥目を下されます、お客があつても是は煮物、それは刺身と澤山の肴を買はれません、いくら立派なお客樣でもキット一品と定つた者です、臺所へ行つて見ると夫人が御自分で煮燒をして居らつしやる、お座敷へ出る衣服の上へ上つ張を着て働くんです、夫をお客に出す時も御自分で膳を運ぶと言つた風、それ

にアノ夫人に限つて、下女や馬丁書生さんの事を呼捨てにした事はありません、敬するてんですかね、御夫婦仲のいゝと言つたら又別段でしたよお兩人とも眞實に好い方でしたがねえ‥‥

▲焼芋を運ぶ無名の婦人

宇都宮地方に大演習のありし折、多量の焼芋を露營地に運び來りて、軍兵を犒ふ婦人ありき、名を問ふも微笑するのみ、後に乃木大將夫人と知れ美譚として膾炙せり、是も日露戰後なり、愛國婦人會の總會東北の某地に開かれし際、乃木東郷兩夫人に臨席を乞ふも容易に應ぜず『此御方が乃木夫人、此御方が東郷夫人‥‥』と紹介の際單にお頭を下げて下されば澤山なりとの事に漸く納得せりと。

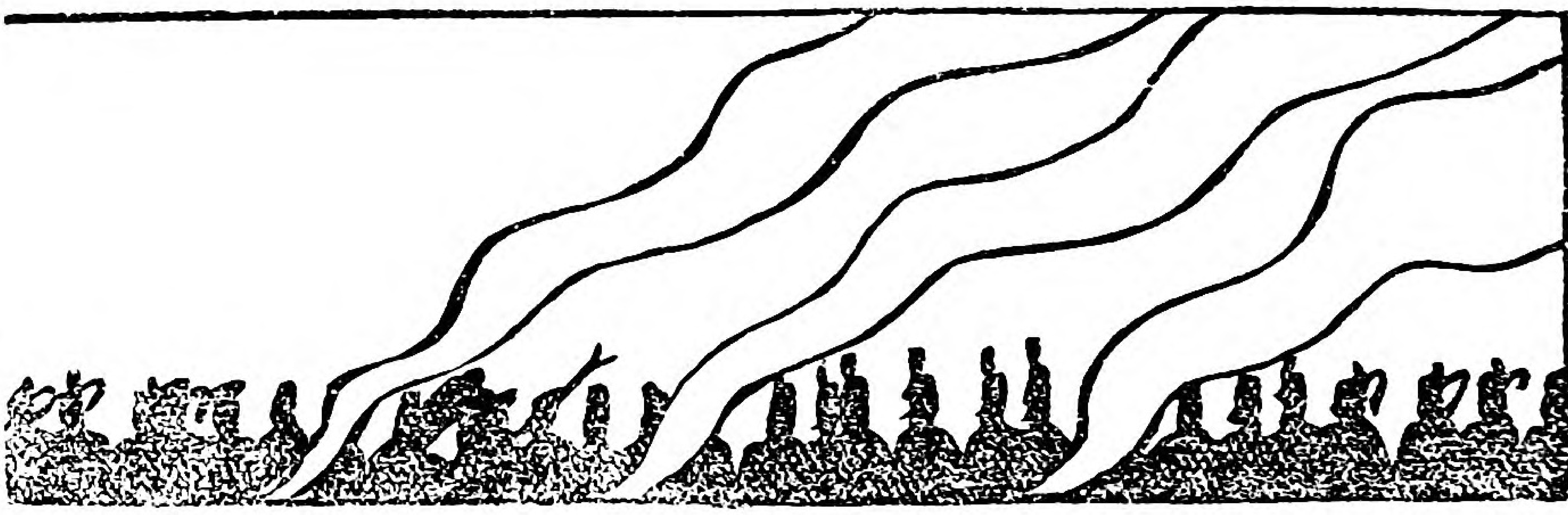
夫人は家庭の人なりき、社交界に出でて吾物顔に振舞ふ事を蛇蝎よりも忌めり、適々逢び見し事なくして夫人を訪ふ人あれば、大將自ら夫人に代つて面接する程にて、夫人は家庭外の空氣に觸るゝを喜ばざりき。

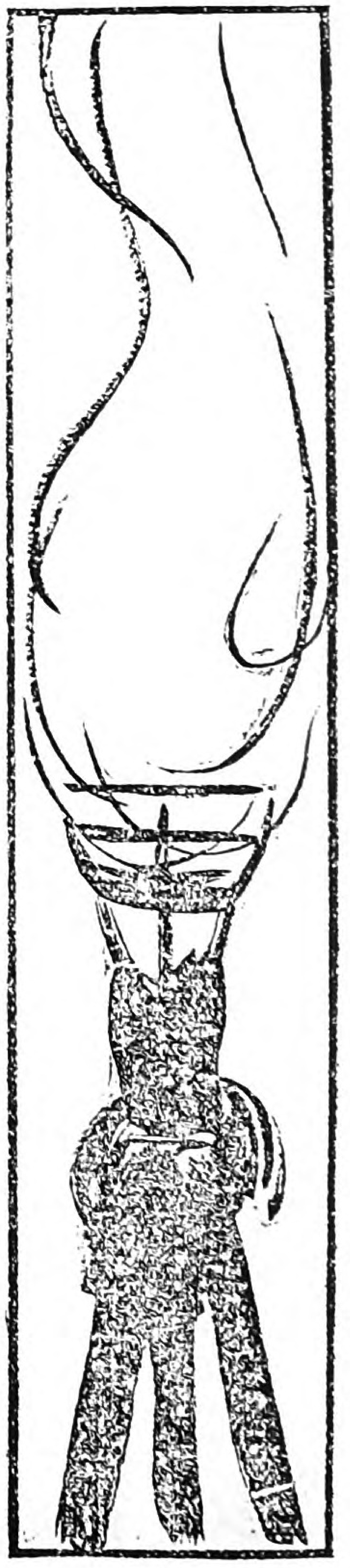
▲夫に知らさぬ守札

日露戰爭當時一般軍人の如くお守札を懷中されたしとは、靜子夫人の將軍に願へる所なりき。然も將軍は素と斯かる事を好む可くもあらず、容易に夫人の乞を容れざりき、兎角して戰雲終りし後三年、將軍の戎衣は御出入なる芝露月町の洋服店に修理の爲め送られたり、鋏は入れられぬ、洋袴の縫目より現はれしは數個の觀世縒なりき、這は言ふ迄もなく、將軍の身を思ふ餘り、夫人の密かに縫込みし守札なりけり。

▲邸宅調度の質素

凡てが右の通り質素な生活をされたから、乃木邸の内部も質素一方で、華美虚飾の風のないことは、人々の意外とする處で、客に出す座蒲團のやうなものでもけば〳〵しい絹物を避けて、殆ど木綿ものを出された隨つて室の粧飾とか、調度品とかの質素であつたことも推されるのである。



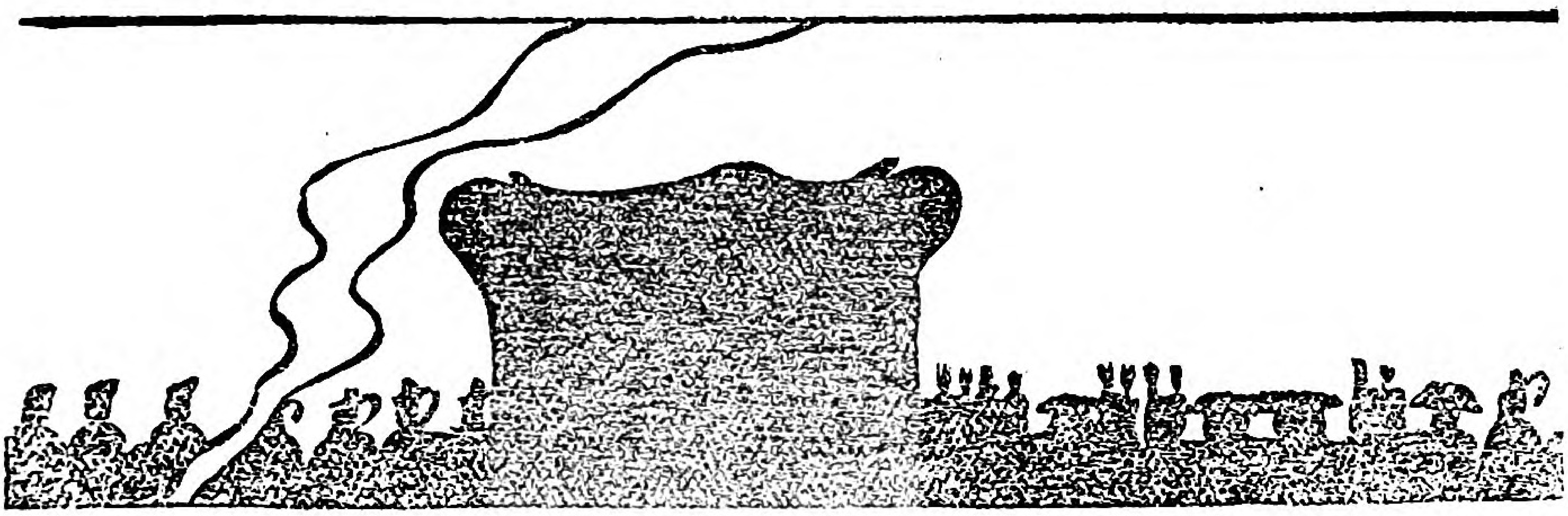


御大葬拜觀記

河井醉茗

あさみどりすみわたりたるおほぞらのひろきをおのがこゝろともがな。と詠ませたまひたる大御心にも通ふらん秋の天高く晴れ渡りて、浮べる雲も陰をひそめ、薄日の光さし添ふ都の大路小路は、悲くも、おほけなくも此日を終の大御幸を拜送し奉る群衆に埋れて了つた。

傳手ありて自分は鍋島公爵邸內、林泉の後方なる溜池を前にした稍傾斜の高まつた處で拜觀することが出來た、眼界の展望、約三町に渉り、御路筋は一目に見渡された。距離の稍遠き遺憾はあれど、流石に邸內の事とて群集に揉まるゝ係累もなく、只しめやかに、つゝましやかに、轜車御發引の時を靜かに待つことが出來た。



二時、三時の頃は未だ拜觀の群衆が、潮の流るゝ如く、御路筋に動いて居たが、三時前後より車の數も少くなり、御用を帶びて馳走する自働車、二人挽の人力車などの馳せ違ふばかりになつた、愈よ交通遮斷は勵行されたと覺しく、引去る人ばかりで、群衆の動く數は次第に少くなり、溜池の家並は十重二十重の人垣を作り、此處びくとも動かじと身がまへした人々の顔が犇と押つまつた。

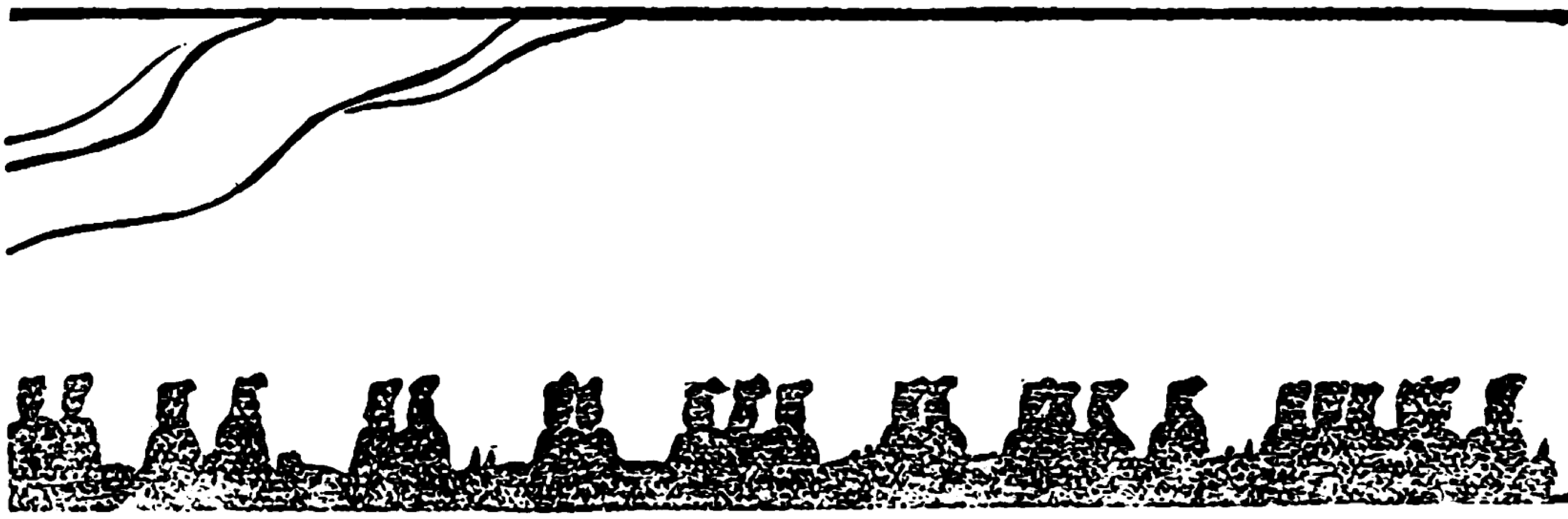
兩側に堵列兵が並んだ、暮色は漸く迫らんとす。

處々に盛られたる清めの砂は平らに均らされた、交通は全く杜絶えた、見渡す限り幾萬の群衆は鳴を鎭めて立つてゐる、靜かに動くものは只白服の巡査のみ。

空は未だ明るいが、電燈がついた、家々の軒下には白張の提灯に火が點いた、引渡した黑の幔幕は折々の秋風に搖めく、黑白の布もてだんだらに包める電燈の飾柱には、鈍色黄色或は白色の旗、菊の花環の間にかなしげに下り、同じ布もて包める間の柱には、日の丸の旗の上にかけたる黑き布淋しげに垂れ、柱より柱にかけわたしたる白と鈍色の布は、はてなき空につゞき、日暮るゝと共に薄紫のアーク燈の光は愈よ輝く。

自分は嘗て此の如く沈默せる群衆を見たことがない、事ありげに見えて而かも靜肅なる、靜中、動かんとして動かざる一道の氣ありて、森嚴且沈痛、聲あるものは只脚下の草に鳴く蟲の聲のみ、仰げば天に星稀なり。

時計を見るに八時に早きこと正に五分、今こそ、畏くも殯の宮を出でたまひし御靈柩の、ときはかきはの御宮居よと祈り奉りし甲斐もなく、宮城を出でゝ歸らぬ旅路に立た



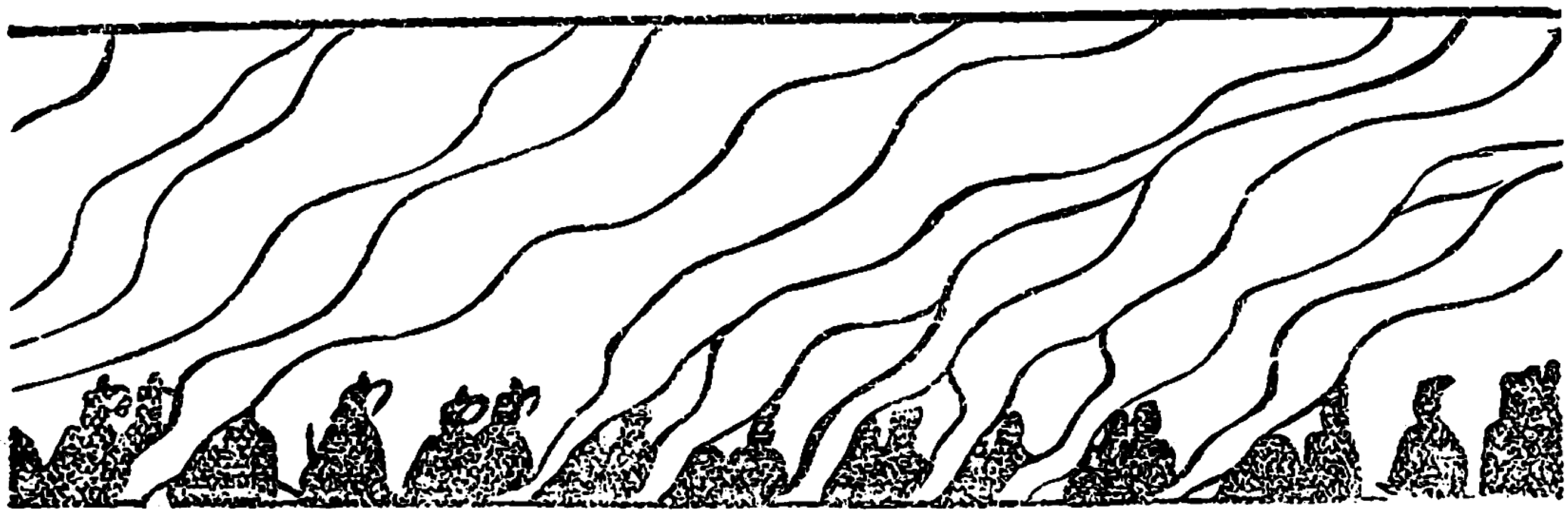
せたまふ刹那の時、皇太后の御名殘は申すも恐れ多し、竹の園生の御方々にも玉の御涙やそゝがせたまふと拜察すると、胸先づ痛きを覺えて、そゞろに暗涙のはふり落ちんとする折から、號砲一發、全都二百萬市民の胸を轟かして、餘韻は天空遥かに響き渡つたと同時に兩側の群衆の上を、聲なき聲の走れる如し。

暫くにして以前の靜寂に歸つたが、分時を隔てゝ打ち出す弔砲の響は、殷々として聞えて來る、何處かの寺々で撞き出す鐘の音、夜闇を縫ふて幽かに響く、待つてと二十分三十分、藤棚の下に足爪立てゝ彼方を見やるに、未だ何物の影も動かぬが、哀むが如く憂ふるが如き樂聲の、次第に近づき來ると思ふ間に、行列の先驅は音もなく前の御路筋を通り過るのであつた。

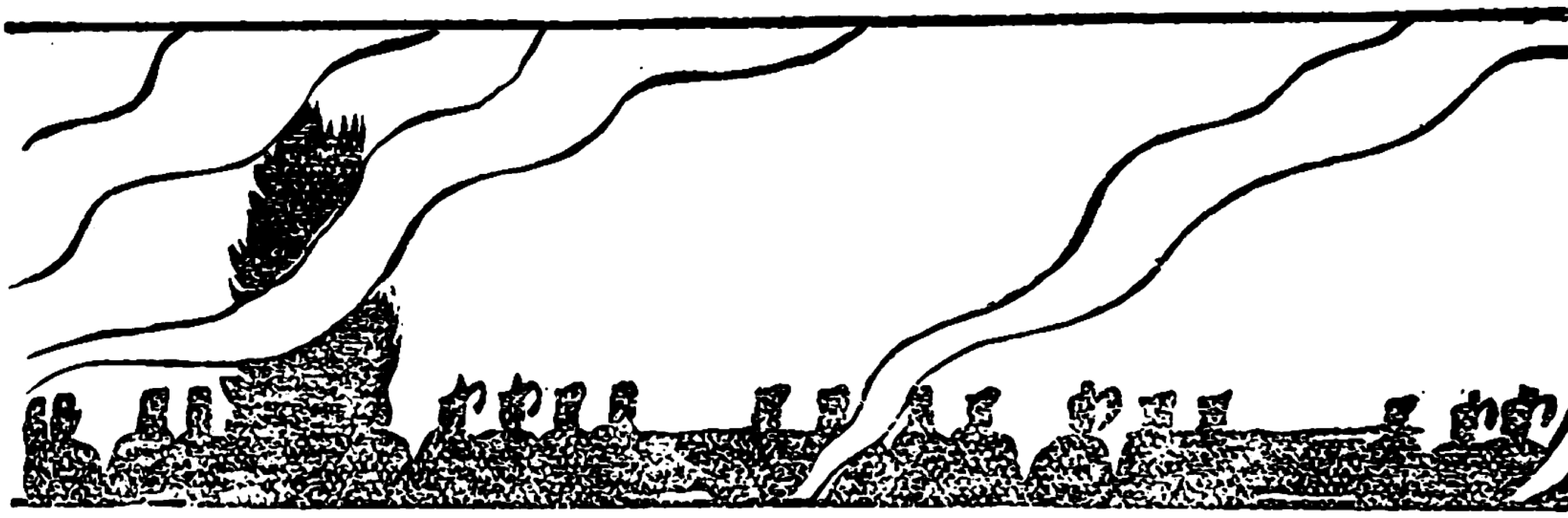
最初の軍樂隊が奏しつゝ行つたのは『哀の曲』であつた、續いて儀仗兵、蜒々長蛇の如く、遠くより目送するに、一つの長く描ける布を引き去るが如し。

哀の曲の哀音、遥に赤坂の大通りにや曲りたる、其音もたえ〳〵に周圍の蟲の音にまぎるゝばかり幽かになると、また遥か後ろの方より、新しき哀音ぞ起り來る、其喇叭の音の悲しさ言はん方なく、宛然死の階段を下る如き想ひに、身も心も引しまつた。これぞ近衛の軍樂隊が奏する『哀の極』であつた。

鈍色の布衫着けたる仕人が、兩側の路を照らしゆく松明の火の淋しさよ、火光地に落ちて、或は暗く、或は明るき間を八臺の皷、十臺の鉦、黄白の大旛二十旒、胡籙、楯など次ぎ〳〵につゞき、アーク燈の影に閃くは十基の大鉾、闇にもしるきは錦の幡旛、次



で一對の大眞榊には白き木棉幣の神々しく打かけられたる、此等舁き持ちゆく仕人の古代めいた服裝のゆかしさ、もの〳〵しさ、行列は肅々として進んで行く。
笙、篳篥の殊勝なる樂の音、『萬秋樂』の道樂は、わが雅樂寮の樂人の一列に依つて、ものしめやかに太古よりの悲哀を訴ふるが如く奏し行く、其後より御轜車はしづ〳〵と軋り來る。
十二本の松明、あか〳〵と御路筋を照らし、觳觫たる牛の歩みに連れて、御轜車は進御あらせらる、栗色の御漆、黄金の御金具、夜闇の遠きあたりまで、沈みたる御光を放ちて、恐る〳〵草莽の一微臣も、永久の御別を告げ奉るべく、額を垂るゝこと霎時、御轍は緩かに軋り行けど、あはれ止め奉るべくもあらぬ神路の御行幸こそ、實にや心に奏づる哀の極なれ。
御轜車の左右、後ろより守護し奉るは何れも國家の干城、續いて御名代宮殿下、大喪使總裁宮殿下、總裁宮殿下は衣冠束帶、其他の各宮殿下、今日の悲哀を御胸に湛へて、力なげに玉歩を運ばせたまふ。
後につゞく文武百官、何れも正裝のことゝて壯觀は云ふまでもない、陸軍の兵、海軍の兵、英國の儀仗兵、鹵簿は幾十町に渉るか知れない、殆ど何時果るか分らないと思ふほど續きに續いて、御葬列の拜送、約二時間を要して漸く終つた。
あゝ空前の御大葬儀、之を眼前に拜觀するの光榮に會つた幾十萬の群衆は、如何に之を感じたであらう、『哀の極』と云ひ、『萬秋樂』と云ひ、其哀音はなほ耳に在り、松明の



光と云ひ、王朝の衣の色と云ひ、其色調はなほ眼に在り、自分は此の聲と色の印象は永く忘るゝことはあるまいと思ふ。

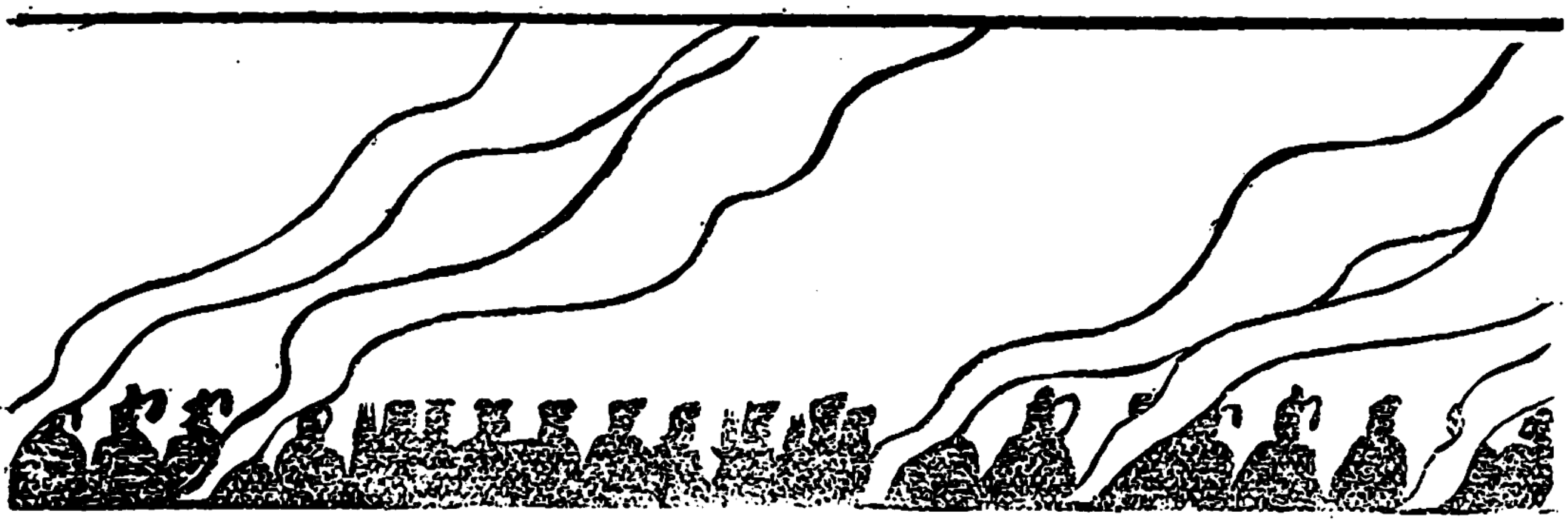
長時間の拜送に衣服は夜露にうるほひ、足は聊か疲れたが、一時間ばかり休んで、群衆の散ずるのを待つて歸らうと思つた。

邸の裏門が閉されたので、邸内の山を迂廻し表の通用門から外に出で、溜池の通りに立つたのは十二時に近かつた、警官は嚴重に柵を構へて、御通行の路筋は向ふへ横切ることは許さぬと云ふ、若し何處でも御路筋を横斷することを許されなかつたら、青山へ歸るには大變な時間を要して、夜が明るかも知れない、自分は其處を去らなかつた。

只見る、兩側に犇と集つてゐた拜觀者の群衆は、殆ど散じ盡して、歸路に迷ふ男女が三々五々通るばかり、兩側に整列せる堵列兵のみ嚴として御路筋を護つてゐる、夜氣森森、劍影暗うして、秋天、肅殺の氣に迫る。

一將校、時計を見て曰く、もう時刻だ!。忽ち帶劍を拔いて列外に立ち、『氣を附けイー』と號令す、其聲は聲を逐ひて、彼方此方に『氣を附けイー』の聲、或は遠し、或は近し。

忽ち青山の方角より喇叭の聲を傳へ來る、一隊の喇叭は一隊の喇叭を受けて、次の一隊に傳へ、瞬間にして青山より二重橋まで一里に餘れる堵列兵が吹奏する悲しき喇叭の音は、靜寂を破りて深夜の空氣を顫はすこと約三分間、此時青山葬場殿に於ては、御誄を奏し、全國津々浦々に到るまで、歩める者は歩を止め、座せる者は座を正して、明治



天皇の御靈を遙拜する時であらう。
柵を護れる警官、綱を解き、顏を柔げて曰く、靜にお通りなさい、と。向側へ渡らねば家に歸られぬ二三十人の人達は欣んで通る。

　自分も直ちに路を越えて赤坂に入つた、新坂の方に送つて行く婦人があるので一旦其方に廻り、交通遮斷の爲め、六本木を迂廻して青山の通りへ出た。

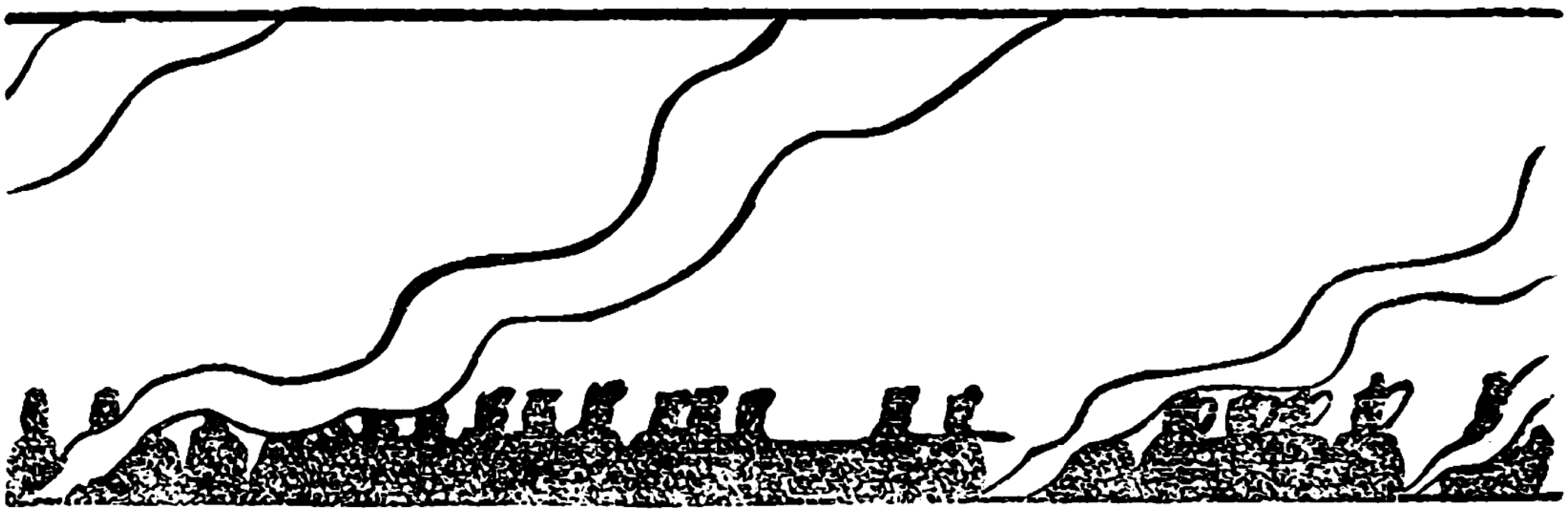
　大通りを横に逸れて、原宿に歸ると流石は郊外、殆ど人影を見ないが、偶ま參列より歸る人を乘せて自働車、馬車の走るばかりであつた。

　ゆつくりと生垣添ひの路を歩いて居ると、夜は更け、人は靜まつたが、代々木の練兵場と、品川の軍艦とで擊出す弔砲の音、交る〲時を隔いて響く、彼方式場の空には、電燈の光反映して晝の如く明るく、山の手線の方に當りて、汽車の蒸氣を吐く音手に取る如く聞える、今しも御靈柩列車が通過したのであらうか、供奉列車が發車したのであらうかと思ひながら、靜に、閉されたる吾家の門を叩く、時に大正元年九月十四日午前二時三十分。

別記

佐野天聲

△無位無勳の僕は到頭　明治天皇の御大葬を拜む事が出來なかつた。といふのは緣因を



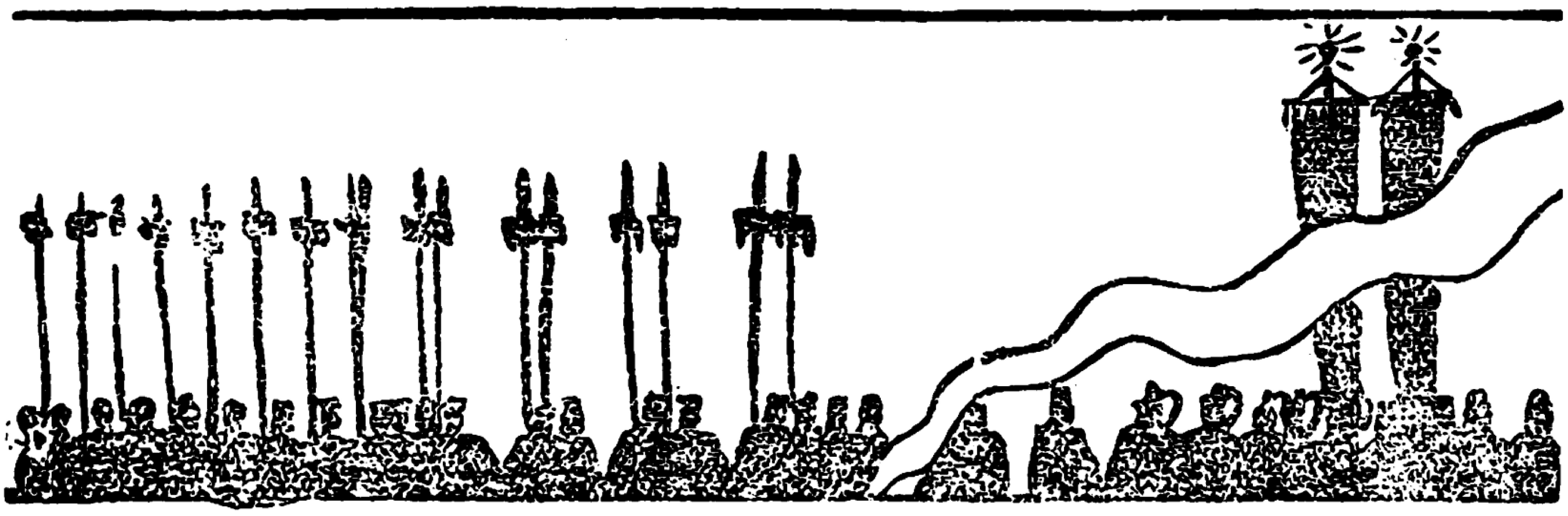
求めて情實を拵へず、唯一人、交通遮段區域を突破しようとしたからである。

△虎の門へ行つた時は夜の七時、もう數萬の群集は潮の如く警官の振ひらめかす、提灯の動搖につれて動搖してゐる。五六町も先が御通行道だから動搖したところで何の役にも立たないが、其動搖たるや、皆赤子の誠心の發露である。松明の光でも拜觀したい、御旗の先なりと拜みたいとの心から此動搖の渦中にもまれ〱て靈轜發引の號砲を今か今かと待つてゐるのである。

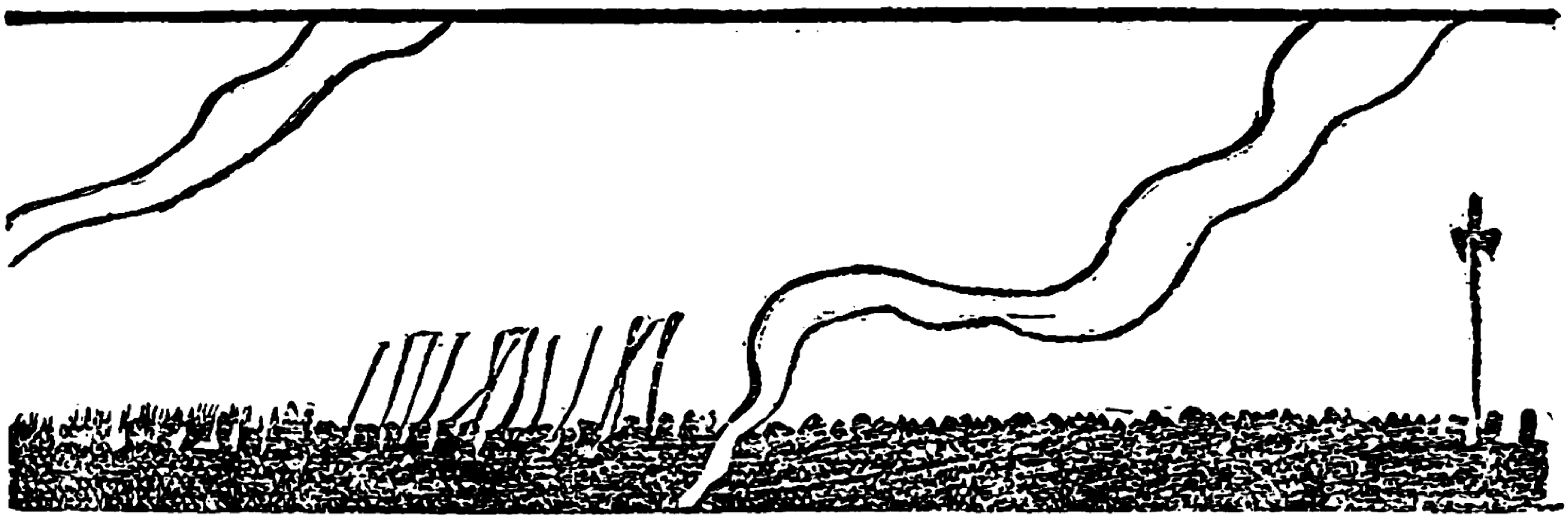
△八時何分かになつた。宮城の方に號砲が聞えた。すはとばかり赤子の胸は波と騷ぐ。併し、電燈の光は輝いても、夜は矢張夜である。五六町先から何ものも見えないのは當然で、其れを足を爪立て、首を長くして一心に見つめるといふのは馬鹿の骨頂であるとは誰も知つてゐよう、知つてゐねばならぬ筈だ。可憐なる數萬の赤子は自ら馬鹿の骨頂と知りつゝ其馬鹿の骨頂を盡してゐる。氣の毒なものではないか。

△僕は背丈が五尺五寸三分ある。日本人としては可成り高い方である。伊藤公爵の國葬の際、五寸の高足駄を穿いて、人垣の後から充分に葬列を見た事がある。今度も其經驗で高足駄を用意して來た。機を見て其れを穿いた。卽ち約六尺の身長である。

△伊藤公の時の樣だつたら（伊藤さんの時は交通遮斷をしなかつた）恐らくは失敗には終らなかつたらう。廿、卅の人垣があつても、御轜車の全體を拜みはづすなぞの事は萬無かつたらうと思ふ。然るに警視廳の拜觀禁止は、僕の苦心をも經營をも、忽ち水泡に歸せしめて、六尺の身長徒らに御旗の先を拜送したに止まつたのは何たる遺憾ぞや。何



たる不愉快ぞや。
△僕の隣に上背の僕とひとしい人が居た。足元を見ると白足袋に表付の駒下駄を穿いてゐる。僕の繼足し身長とは違つてゐる。其人卒然として僕に向つて曰く、『此れだけの身長があつて見えないといふのは殘念ぢやありませんか』と、成程此れだけの身長があつて拜觀が出來ないのは殘念な事であらう。僕の樣な付燒刄でも六尺の身長には少からず自信をもつてゐるのだから。
△で、僕は其人に言つた『私の身長は足駄ぐるみだが、貴下のは親讓りでいらつしやるから殘念なのは御尤だ。併しお互ひに柔順羊の如き日本人に生れたのが不幸なんだから仕方がありません』
『左樣々々、何うも仕方がありません』。
△御旗が我々の五六町先を音もなく通つたのは正に九時十五分、間もなく御靈轜が通つたのだらうが、其れは見えなかつた。何時迄經つても何も見えなかつた。唯團體奉送者の眞黑な頭が眞黑いばかりである。
△マグネシヤが光る。ラッパが聞える。大砲が時を限つて轟く。其れつきり、何ものも赤子の赤心を滿足せしむるものは無い。みじめである。ミゼラズルである。
△動搖は鎭まつてゐる。諦めのいゝ日本人はもう歸り仕度をしてゐる。些の不平の聲も聞えない。傑いものである。
△彼六尺氏は何ものを期待するのか、前方を覗つめて搖がざる事山の如く屹然として立

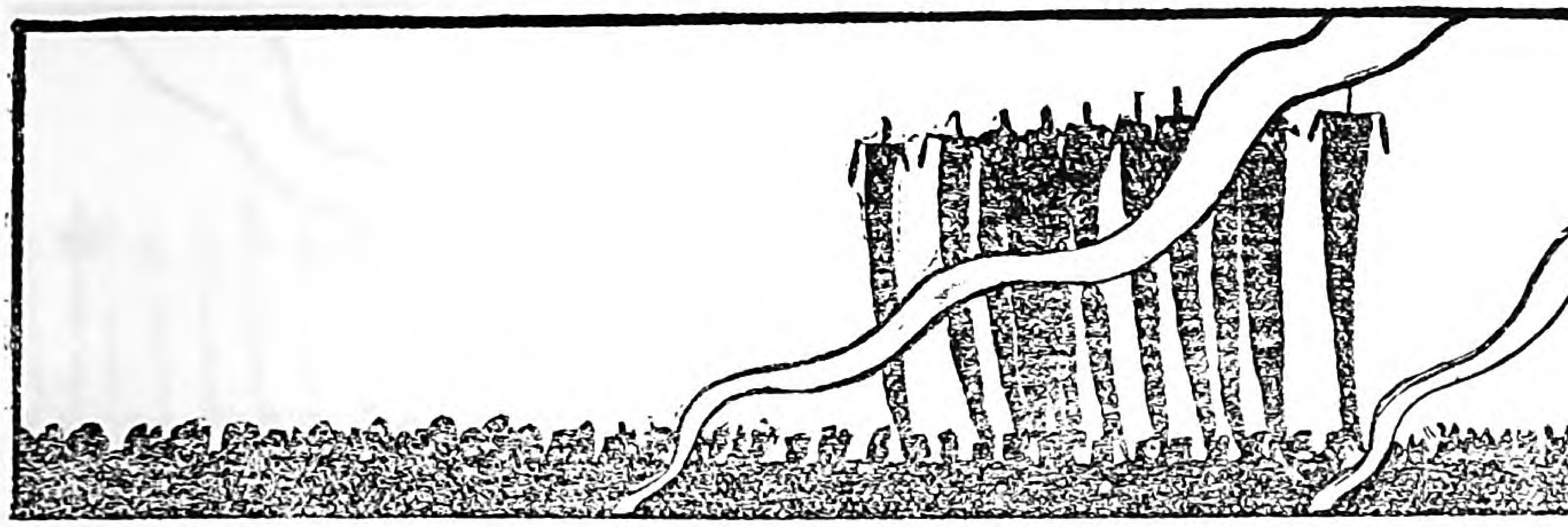


つてゐる。パナマ帽を冠り、五紋の羽織にセルの單衣、でつぷりと肥つた所は、ひよろつと高い僕の樣でなく寔に押出しが立派だ。併し無位無勳無勢力の僕と同じに此處に立つて御旗の先を拜送したのから推すと我黨の士かも知れない。一樹の蔭一河の流、袖すり合ふも亦他生の緣ならずやと、僕は其人の何となく他人で無い樣な氣がしたが、其れきり、先方が默つてるから僕も默つて其人のするが如く、矢張り前方を視つめてゐた。

△幾ら視つめてゐても何も見えないから仕方が無い、僕は六尺氏の樣に何時迄も立つてゐる根氣を有たない。其うちに足が痛くなつて來た、厭にもなつて來た、寒くもなつて來た、おまけに腹も減つて來た。歸去來と踵をくるりと向き變へた。とある小路でもとの低い下駄に穿きかへて電車通りへ出た。電車は人の鈴成りである。とても乘れない。何處まで行つて乘れるか知れない、乘れる處までは步かねばならぬ。何うせ步くならば步き序でに今一度前方に進んで、何處まで赤子の赤心を傷ける設備が設けられてあるかを點檢するも一興と、變な意地を出して又虎の門の方へ引つ返した。

△今入町から左折右折して色々の町を通つた。榎坂へ出た、通れない。仲之町から一木の方へ出た。矢張り通れない。行通遮斷は何處迄も續いてゐる。前日の各新聞に行通遮斷圖といふのがあつた。其圖の通り、正直に行通遮斷を勵行してゐるのであるから警視廳は責任を全うしたものである。

△何十萬の　陛下の赤子中の一人は恁うして午後十時半迄徘徊禁止區域を徘徊した。そして十二時の默祈遙拜時間に先立つ十分、疲れきつた足を引ずり、神田は小川町の電車



交叉點に到着すべく餘儀なくされた。鈴成の電車に鈴成る勇氣が無かつたから、已むを得ず壕端線をてくついたのである。

△三分間の型の如き電車の一齊停止があつて、歸りを急ぐ人々も此刹那ちよつと歩みを止めがちに見えた。僕は角の時計屋の鐵柵に凭つて、暫時默祈遙拜した。

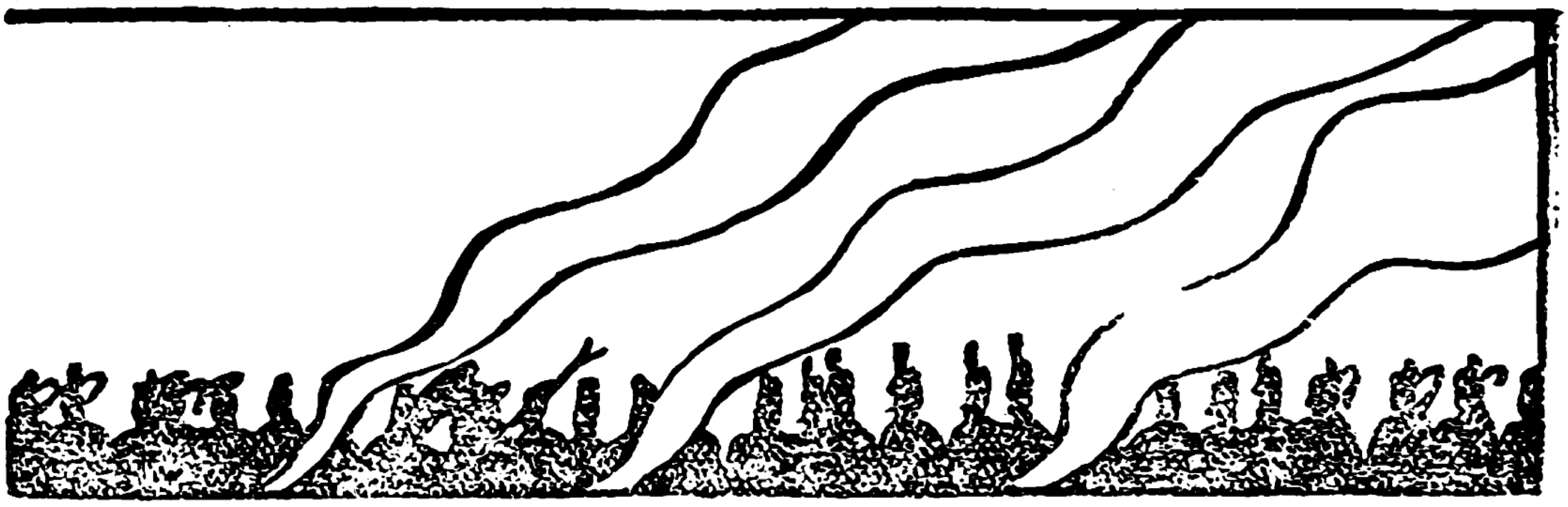
△家兄の家に歸つたのは大正元年九月十四日午前一時一分だつた。腹が減つて仕方が無い。下婢を煩はして茶漬を二三杯搔込んだ。酒を飲みたいと想つたが止して其まゝ寢た。家兄は未新聞社から歸つて來ない。

△夜が明けたのも知らず『新聞が』と言つて下婢が枕頭へ新聞を持つて來て呉れたのも知らずにぐつすり寢て物の音に眼があくと徹夜して歸つて來た家兄が枕頭の廊下を歩いて『今日の新聞を見たか。』と言つて此方へ來る。起上ると姉の聲で『未、何かありましたか』といふのが聞える。

『大變な事があつた。乃木さんが死んだ。乃木さん夫婦が死んだ。』

次室から出て來た母を蚊帳越しに見るともう眼を眞赤にして、涙の跡が頰に光る。

『御靈輀發引の號砲を合圖に、大將は軍刀で割腹し、夫人は白鞘の短刀で心臓を美事に刺貫いて死なれたといふ事です。遺書も數通あつたといふが其れは未發表されない。原因は勿論先帝のお跡を追ひまつるといふのでせうが、英國皇族殿下の接伴員や、先帝から御委任になつた學習院長や、左樣した責任を果たさずに自殺されたのには深い覺悟があつた事と思はれる。彼人が西南戰爭當時軍旗を賊に奪はれて死處を其處に得なかつた



事は或一部の人に知られてゐる有名な事實で、旅順に數萬の子弟を肉彈にした事も亦有名な事實、其れらと、人情に戻るとは知りつゝ、人情に戻らねばならぬ浮世の義理から公然と悲しむ事の出來ぬ二愛子の戰死によつて將來された老後の絶望＝家庭の寂寞＝といふ樣なものとを綜合すれば、大將の死因に略理路の通徹が窺はれる。無論問題にはなりませうが、大將の死に不潔分子のともなはなかつた事は事實で、此點ばかりでも讃嘆するに足りる。何しろ偉い事を遣りました。』

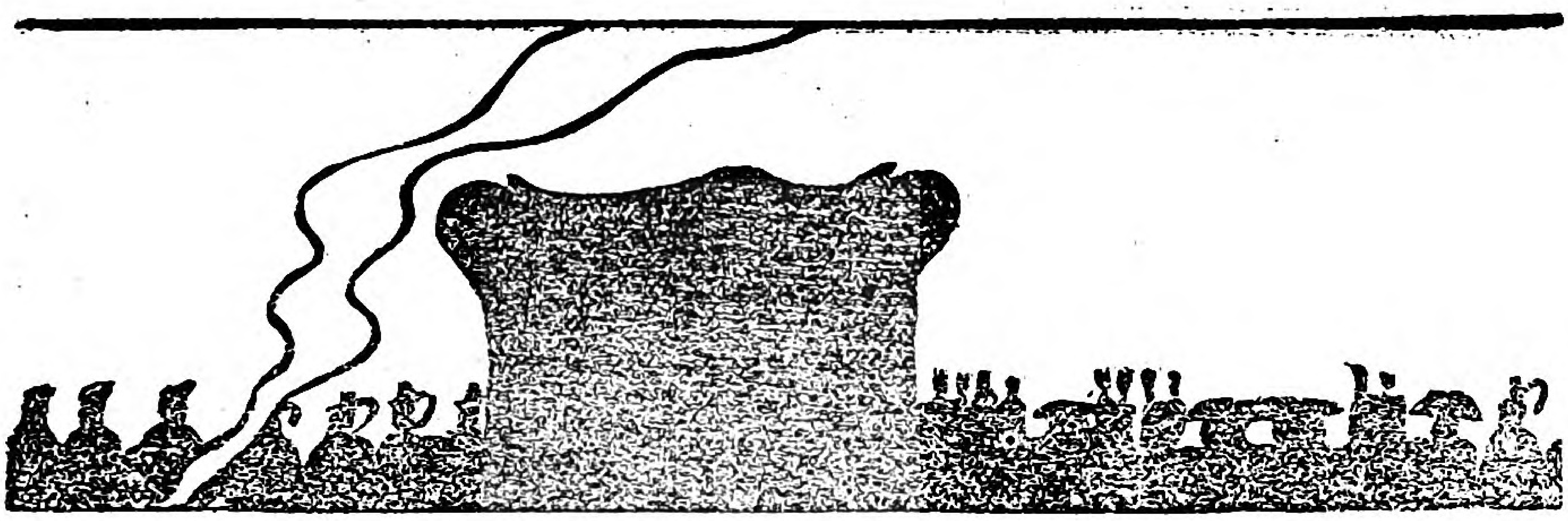
母に語る家兄の言葉は平生の快活に似ずしめりがちに聞える。

△女連は皆歔欷する。鼻をかむ。新聞にある大將の肖像を視て涙を拭く。蚊帳を出て團欒に入つた僕は、平生乃木さんの旗幟鮮明を嫌つて、ぶる、ぶる、ぶるといつて其日常の態度を非難してゐたにも拘らず、母と姉の涙顔と涙聲とを笑ふ譯にいかなかつた尤も平生の持論だから一寸攻撃はして見たが何うも氣乘りがしない、手強く皮肉る樣な旨い言葉が見出せない、何だか此方が大將に嗤はれる樣に思はれる。至誠至剛の二字を大將に奉獻せねば濟まん樣な氣がする。乃木式の一貫、大正元年劈頭の教訓は是!!

△僕は此樣事を考へて急遽顔を洗ひ飯を食つた。勿論藁を噛むが如く旨くも何ともない昨夜の不運の不平と今朝の持説破壞の不平とが混亂になつて胃の腑の働きが鈍つたものと見える。

△食卓に向つた人達を見ると誰も旨さうに食つて居ない。殊に母などは御飯に茶を掛けて無理に呑み込んでゐる樣に見える。小學四年生の家兄の惣領迄浮かぬ顔をしてゐる。

△大正元年九月十四日の朝、此の凶變を耳にした日本中の人民の家庭が僕の兄の家庭同様だつたか其れは知らない。が、大和魂の何様ものかを解し得る大和民族の胃の腑は確かに此朝自己の職責の幾分を怠つて一飯の棄權を敢てしたに相違ない。



御大葬の夜

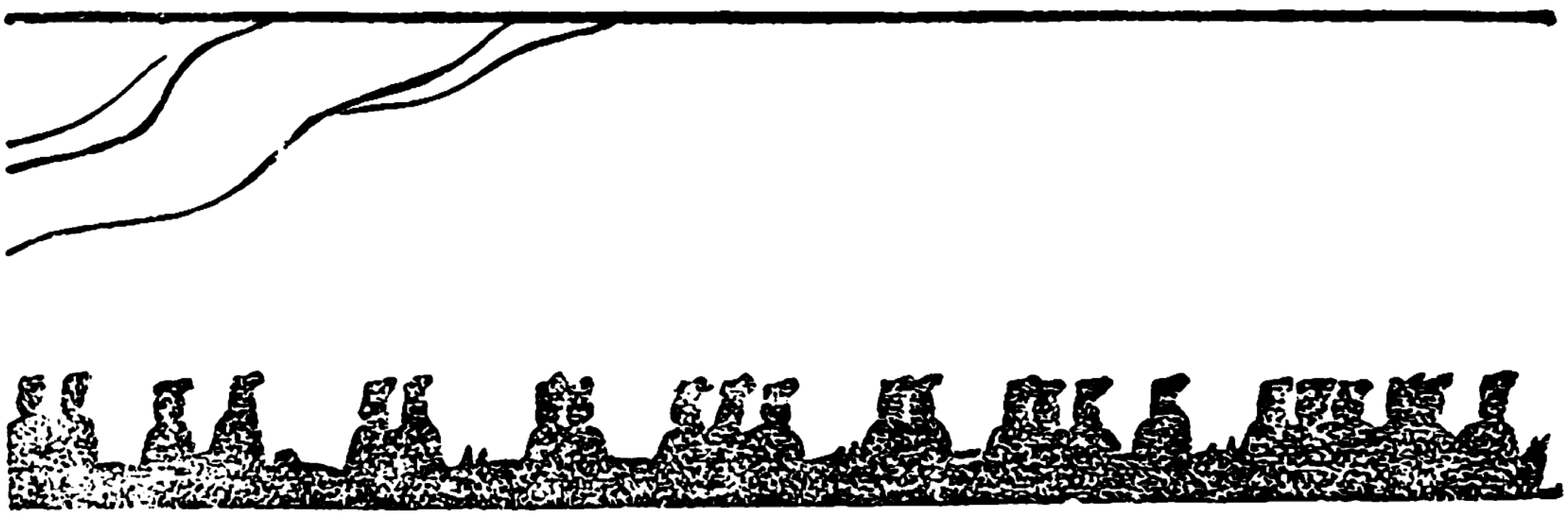
西崎花世

私は幾千人と云ふ群衆の潮の様に流れ入る日比谷公園にまじつて入つていつた。其の時は晝少し前であつた。幸門一帶の外廓の鐵柵にそふた樹木の間に綱を引き渡して、曉から待つて居るらしい幾百といふ人々の間に私も坐つた。そこは或る生命保險會社の黒幕で總ての窓を蔽ふた建物と對ひ合つた土地で、私の坐つたのは、花綻び初めた秋萩の二株ばかりある、櫻の老木の側であつた。

私は其の萩の花の隣りで十一時から夜の八時まで靜坐して、御發引を待つた。十時間の端坐は私の感情を、清純に漉し、至誠の一點に凝集させるには十分であつた。私の眼の前には、午後三時に至るまで幾萬の人々が靜寂に混雜して、音もなく右往左往した。

私は恐らく、一生の間にかゝる奇蹟に近い幾萬のひつそりした混雜を見る事がまたとあるまいと思つた。

白紫色に輝く沿道の千二百燭光のアーク燈。鈍色の旛と、黄色の旛とを飾つた中程に



かけたる八咫の鏡、或は白菊の大花環、其れ等が夜色に沈んで、此の世ならぬ幽玄を醸する頃になつた。

八時が來た。而して、微かに公けの悲哀に顫慄ふ胸を打つて、宮城御發引の一發の號砲が聞えた。千萬人の群衆と丶もに私も呼吸をのんで暫く待つた。

目の前へ、二列に並んだ影が、粛々と徐歩して來る。正装した前衛の警視の一隊が動くのだつた。微響も洩れず動いて來るのが歩いて居るのとは思はれぬ程だつた。

槍旗を肩にして儀仗の一隊……。

歩いてゐる御行列からは微響もなく、うち鳴らす弔砲が、空に轟き兵士の足並にもつれて遠くから、哀哭する樣に聞えた。此の分時砲は、二時間にわたる間たえず空を動かした。

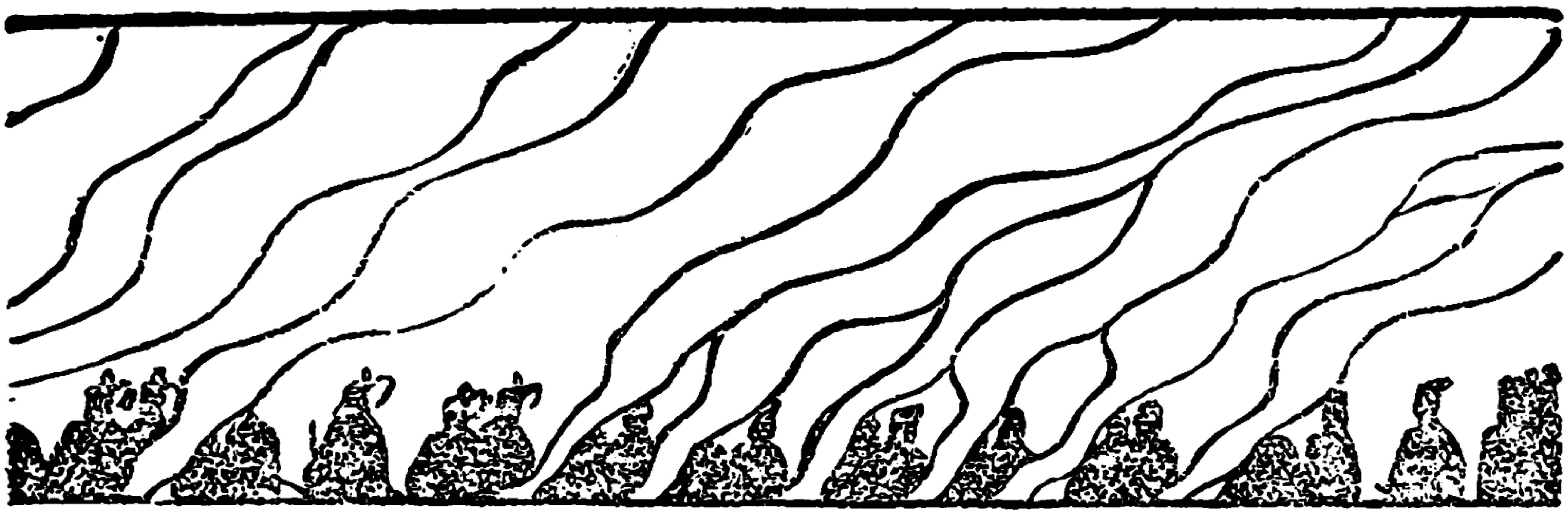
緋羅紗の洋袴の近衛軍樂隊。

吹奏するラッパの響につれて、ター、ター、ター、ターと云ふ哀切なる音律が千萬人の心臓に高まりゆき、またひき沈めてゆくのだつた。

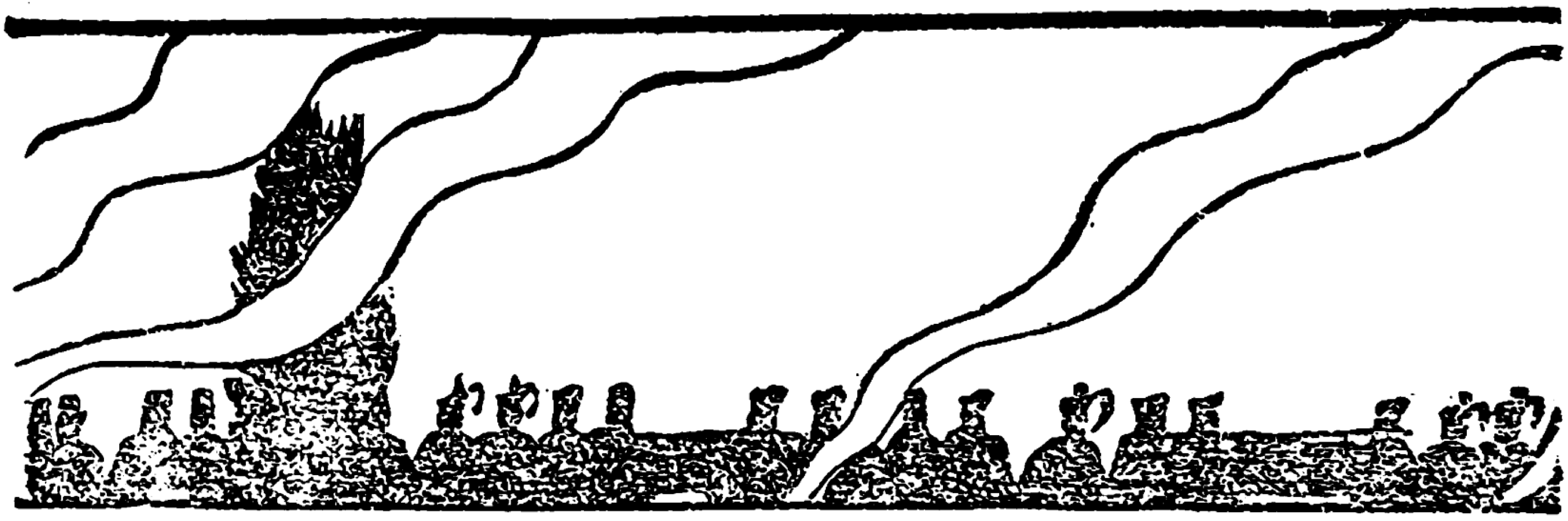
銃をさかさにしたる水兵の一隊……

濃緋の上衣を着、白翅の帽をいたゞいた海軍々樂隊。

この頃に、千萬人……それと丶もに私も、宮城の方から、蕭篳篥の『萬秋樂』の、鋭く細く、腸に沁み徹す道樂の遠き音を聞いた。目の前をゆく御行列は此のまゝ　先帝の御供を、冥府の宮殿まで仕候まつるかと思つた。



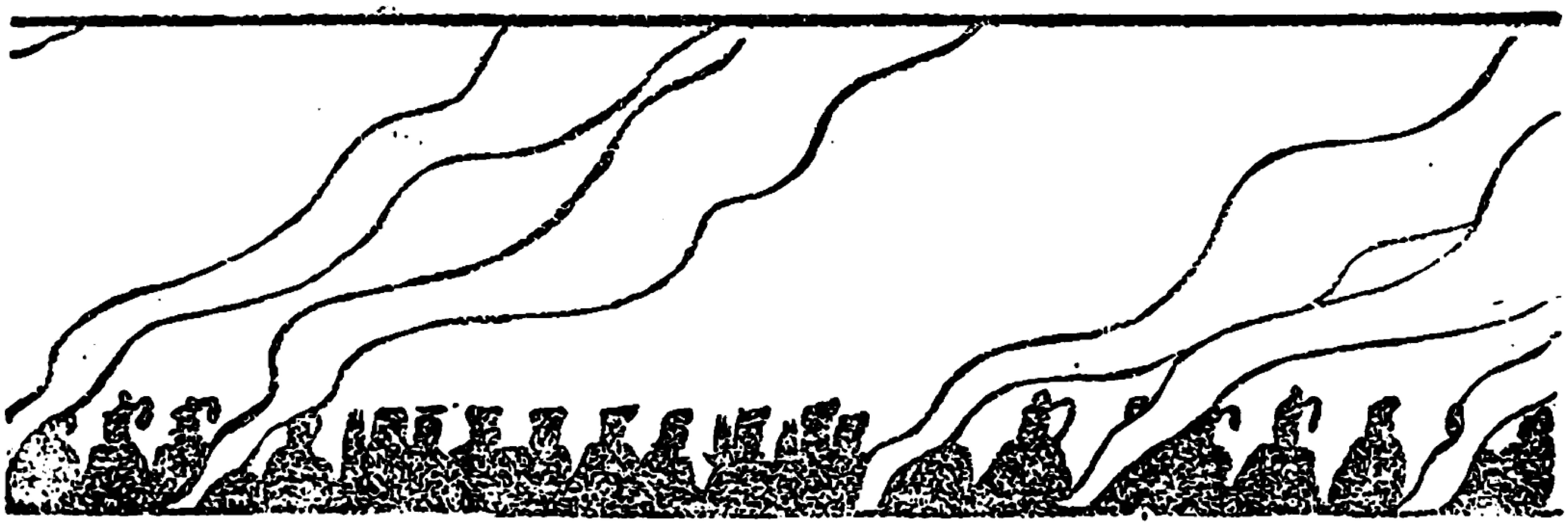
『松明……松明……』
と誰かの唇から響いた。
細立を頂き、鈍色をつけた仕人二人の手にもつた松明の朱よりも赤い灯、それが繪巻物の初めて開かれてゆく印象だつた。千萬人の群衆とゝもに私も、眼を御行列に集めて水そゝがれるやうな靜寂の感に沈んだ。
衣冠單に、佩劍、巻纓の冠を頂いた二人の人。それを圍む松明……。
黄白の絹を垂れ、御劍、御鏡、勾玉をかけた二基の大眞榊。
神饌櫃を荷ふ四人の内舍人手代。
紺青、青、胡粉の色に、中央を色どり、丸緣を漆黒の澤消しとし、鈍色のしらべ緒をつけた皷。
紺青、青、胡粉にて雲形をあらはした鉦。
緞子地の白旛と黄旛、すべて二十旒。
御箙、胡籙、弓、楯。
七尺八寸ばかりの御梓の雪白の色は、アーク燈の光りに照り合ふて、輝くのを見た。
樂師が二十五人、鈍色布衣の古代姿に、篳篥樂を奏づる姿の悲しさ。高く鋭くほそき『萬秋樂』の調べは、今にも絶えなんとする一絲の哀音をあげ、堵列のものゝ血を脈に張らさしむる道樂。涙を催さぬものもない。
御牛飼の手綱持つ姿。



御靈轜車。仰ぎ見奉るも眼は曇る、心は慄ふ、永久に御還なき大御幸の御名殘の惜しさと思ふとき、數ならぬ胸も張り裂けるばかりに悲しい。
夕顔形の御屋根、蠟色清く、網代は黑色の漆つや〳〵しく、上からかけた大きい瓔珞は車の軋む毎にゆら〳〵と搖いだ。
燦として光る金具、二丈に近き御轜車は、道樂の哀音の漂ひ悲しむのに包まれて、御幸ましきます。
御轜車のいづこよりか長くほとばしり鳴りては絶え、また車の廻るにつれて、溢れ出づる音は、道樂の綿々たる悲哀に應じて起り、此の世ならぬ響きをあげ、呼び奉り、呼ばれ給ひ、慕ひ奉り、慕はれ玉ふ如くであつた。
遠くから軍艦の弔砲も亦、此の呼應する音律にまじつてひゞいた。
瓔珞の響きと御車の鳴りとは、誰れ一人、死ぬまで耳を去るものはあるまい。
御行列は、なほ長くつゞいた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

御大葬の御列を送り奉りてからの日比谷公園の夜景、此れ程感激に充ちた夜景を見ることは私の生涯に絶後の事であらうと思つた。
奉送の千萬人は一人として其の心悲しみその血燃えぬものもない。興奮の極に達した顔を、樹木の陰から起る初秋の冷氣に冷やしながら、くも手になつた公園の路を、潮路をつくつて動いた。廣い道から漸く、狹い道に流れ集る時は、五十人、百人と云ふ人數が皆、針金ひきわたした。植込の陰や、芝山の上に溢れていつた。
私は始め、幸門の方に歩いていつた。然しそこには十數名の巡査が、赤い提灯を振りかざして通行を禁ずる。亂れた帶の形をなほして、宮城に近い櫻門の方に歩いた。歩く



といふよりも、何百人の人の勢ひに流されてゆくのであつた。然し足音は火事場のやうに音を立てゝも、一人として大聲を發するものはない。

左右の芝山に散らばつた人々は、原野に放ち飼の羊群の樣に寢たりくぐんだりした。

是れ等の疲れた人々は此の夜天の下に夜を明さうとする樣に見えた。

大花壇の中の道から櫻門に行くと、こゝにも十名ばかりの巡査が一人と雖出る事を許さない。青山の御式がをはるまでは。

門の外にはたゞ櫻田門が黑く輪廓を見せ、宮城の松影、墨よりも濃く、神々しく淋しい景色を整へてゐる。

私はもと來た道を引き返して、又た花壇の中に出た。常には人を入らせぬ隅の芝地をさがして花壇の緣に腰をかけた。休んで見ると身體は綿のやう。

空を見上げた。夜の雲は層なりかゝり、重く憂ふる樣に垂れ、アーク燈の光力に燃えて、白青色に燒けてゐる。そのものぐしい雲の顏色へ、東京灣にゐる軍艦のサーチライトがサッと電光々する。

私は疲れた身體を横にした。じつと芝に頭をつけてゐると、幾百といふ人々のそこにこゝに黑く塊まつてゐる形が目に悲しく淋しく、滲み入るやうで、御大葬の夜といふ一種の悲壯な情調を奏でる。

私のゐるところの花壇は、右はカンナ、花が多く咲き凋んでゐた、左は薔薇の木が多かつた。其の花壇の草や木の懷になく蟲のこゑが、呱々として、胸に忍びこんだ。

私は、かうしてゐる中に夜が明けるに違ひないとおもつた。

しばらくして、大砲が空に鳴つたのをきいて私は、身體を草から離した。そしてあてもなく、花壇の道を噴水の方に歩いた。何百人の群れは、絶えず無言で動いて居た。

明治年間　婦人社會の變遷

其一

山路愛山

▲第一期の新しい女

私の知つて居る範圍で、明治時代の婦人の變遷をお話をすると、まづ明治の十年頃迄と云ふものは、維新の改革の後を受けて、一體に世の中は風俗を始め、萬事に亘つて、突飛に變つたのであつた。其の時代の人氣と云ふものに、田舍に居た古い思想を固守する士族或は漢學の先生等は、此れは別だが、東京に居る者とか、多少世間に其の當時は羽振りのいゝものは、盡く西洋に心醉してしまつた。漢學であらうが、國學であらうが、西洋の學問に越した事はない。一にも西洋二にも西洋と云ふ鹽梅に、無暗と西洋崇拜に傾いて了つて、何によらず西洋の眞似をしなければ、見るにも足らぬ樣に思つたのが當時の人氣であつた。

世間がさうであつて見ると、勢ひ婦人にも其の西洋崇拜熱が波及しない譯にはゆかなかつた。そこで女仲

問でも西洋の話をする樣になり、西洋の學問をしなければならないと思ふものも續々現れて來た。私等も其頃は小さい時だつたがやはり、西洋の學問を歡迎した時代の影響で、親父から、ＡＢＣを書いてもらつて、大に喜んで其れを學んだやうな事であつた。私の國の靜岡でも、其の頃、女で洋學をするものは可成多かつた。

ところが其の女達が頗る突飛な姿をしたものであつた。書生羽織といつても、今あのやうなものを見る事は出來ぬが、一寸搔巻のやうなものを着て、リーダー等を、脇に抱へて、西洋人の家に稽古に行くと云ふ風であつて、女も男も、極めて、突飛に、一面ハイカラになつて來た。その中に男子の留學生が出てゆく。女子の留學生も亦ゆくと云ふ事になつた。其の女子留學生が、世間にも知られて居る通り、彼の津田梅子とか大山大將夫人等であつた。一體に女が、今迄の古い思想の束縛から離れて、變つた事をするやうな氣運に向つて、ぽつ〳〵新しい女が現れやうとした。此の時代即ち女が書生羽織を着て、英語の稽古に行つたと云ふ時が、明治年間の新しい女の第一期、新しい女のさきがけであつたのである。

當時の珍しい實例の一をあげて見ると、何でも舊來の日本の習慣を改造しなければならないと云ふ考で結婚の式にも其の考案が現れた。それは森有禮氏と細君の結婚式の時に、今迄の日本の禮式を廢して、結婚契約と云ふのを作り、式の當日それを立會人になつた福澤先生が新夫婦の前で朗讀したこと等があつた。

其の當時廣くよまれた英讀本は、ジエームスがどうした。ワットがどうしたと云ふ樣にすべてが西洋の風俗、西洋の事態を直ちに知らせたかはりに支那や日本に於ける學問を漸く日本人が忘れやうとした。

それから當時英語を學ぶ樣な女の中から女優になつたのがあつた。そのころは女優とは云はなかつたが、私の知つて居る女で、靜岡の士族の娘で、おけいさんと云ふ美人が芝居をした。おけいさん芝居と云つて、今も其の事を記憶してゐるが、まあさう云つたやうに

萬事が破壊的、革命的であり、ハイカラであつて、何事も不思議の狀態であつたのが明治時代の第一期であつた。

△第二期の新しい女

然るに其の婦人の新しい氣運が間もなく一頓挫した。それはどうかと云ふと、明治五六年と思ふが日本全國に小學校が出來る事になつた。此の小學校の開設が日本の人の氣質を一變化させるに大きい力を持つたのである。

小學校を始めると云ふ事になつた當時に困つたのは其の校舍であつた。しかし何もかも間に合せに、お寺を借り込んだり、古い宿屋を使つたりするのもあつた



私共が行つたのは、寄席を一時用立てた校舍であつたが、もう古くなつた家で、疊も破れてゐて、私共が相撲を取つて、轉んだり轉がされたりしてゐる中に足が疊の穴に入つたりしたものである

然し更に政府の困つたのは教師であつた。學校は始める事にしたが、肝心の教へる先生がないと云ふ譯になつた。仕方がないので、所在の漢學の先生や、士族

の人達を引張り出して、一時どうやら先生を作つた。漢學の先生が到るところで小學校の校長になつたので、漢學の先生の勢力が盛にならざるを得なかつた。そこで當時の文部省は、新しい敎育をしようとして、小學校を全國に作つたのであるが、直接の敎育者が、古い思想を固守する敎師があつたために、儒敎主義の思想が廣く日本に行はれるやうになり、多くの子弟は皆、漢學敎育を受ける樣な事になつた。段々漢學の勢力が、西洋崇拜熱を打消し、英語の思想を衰へさせる樣な工合になつて來た。

隨つて國民の氣質も保守になつて來た。擊劍會が起つたり、報公會が作られたり、犬追物等と云ふ古い遊戯が復活されるとか、詩文學會が開かれるとか、謠曲をうたふものが出來る等と云ふ事になつた。漢學の先生は、國體の擁護とか、義勇奉公とかを唱導する人氣になつたので、女の氣質も同じく變つて來た。書生羽織を着て、リーダーを抱へて、西洋人に稽古にいつた樣な女は少くなつて、再び深窓の下に、柔和しく起居する、女大學式の婦人に立返つてしまつたのである。

然るに其の婦人の一部に僅か一脈の新しい女の系統が殘つて居た、それが何であるかと云ふと、ミッションスクールに育てられた女であつた。一體此のミッションスクールは、外國の傳道師の爲めに方々に經營せられたものであつたが、彼れらは其れを宗敎の爲めに經營すると云ふよりも、日本の當時の女子敎育の爲めにすると云ふ樣な、一種の博愛仁慈の爲めにつくつてゐた。外國ではミッションスクールが今でも日本の女子敎育をひきうけてゐるやうに思つてゐるものもある

此のミッションスクールは一時は中々盛大になつたのもあつた。今の年輩の婦人であつて、ものを書いたり、新聞を讀んだり、世界の大勢を理解する頭腦をもつてゐる婦人が、多くは此のミッションスクール出身の樣である。此れ等の婦人は、多く耶蘇敎によつて、其の心を訓練して居つて、男に接近する事等もさして何とも思はぬ方であつた。アメリカ婦人にかぶれた女も出來、ずゐぶん突飛な行動をするものがないでもな

かつたが、概して、品行の方面に於ては、宗教の力が預つて、批難を受ける樣な事は少なかつた。

此の時代の女は、第一期の新しい女とは違つて、どてかから獨立して考を持つて居つた。此の頃、東京朝日に連載せられて居る『主義の女』の中の狀態がよく其の頃の有樣を明してある。

ミッションスクールの出身ではないが、此の當時、ミッションスクールの遣ることに同情を持ち、其の獨立した考を守つ女に同じ傾向を持つて、それらの中心になつた人達の中で今に殘つて居るのが、彼の矢島のお楫さんである。



あの矢島楫子の型が當時の女の傾向であつた。其の他、木村とう子と云ふ女性もずゐぶんしつかりした女であつた。今は死んでゐるが維新當時、夫の木村が洋行をしたので、靜岡に歸つて居た。とう子は其の子供を寢かすのに、唐詩選を歌つて寢かしたと云はれてゐた漢學で養成せられた女ではあつたが、ミッションスクールのする事をよく同情してをつた女である。此の女達が其の時代の新しい女であつて、第二期とも云はるべきものであつた。

此の女達は、男女の交際と云ふ事についても自由な考をもち、男女は交際すべきものと思つてゐた。假令實行はしなくても、さう考へて居つた。結婚についても、結婚は自由であるべきもので、親の差圖に盲從して、夫を定めるものではないと云ふ事等を、實行をしないまでも考へては居つた。

今は一般に行はれてゐる婦人の束髪も、此の女連が始めたやうに思ふ。

明治二十年頃までは、順風の勢に乘じて、此の女達が、日本の女を指導する地位に立つて居た。一面政治界に於ても、條約改正の爲に、なるべく日本の民衆を、ヨーロッパに近付けるやうに努力をし、頻に英語を奬勵すると云ふ事もあつて、第二期の新しい女はいくらか發展の道に就かうとした。

△第三期の新しい女

第二期の新しい女が發展しようとした時に再び、退歩の浪が打ち返して來た。それは井上さんの條約改正

が失敗をしたのが原因となり、政治でも教育でもすべてまた保守的に歸つて來た。

殊に一部の人は耶蘇教が、日本の國情に反すると云ふ事を云ひ出し、宗教と教育との衝突と云ふ事を論ずるやうになつた。それらは總べて、新しい女の行く道に痛撃をあたへた。女子の新氣運は再び閉息して舊態にかへり、今までの英語の稽古が、生花、茶の湯になり、バイオリン、オルガンが、三味線や琴に立返つて枕草紙や、源氏物語がひもとかれるやうな世間になつた。

然しそれも一時の現象にすぎなかつた。改革の氣運はいつまでも動かずには居らなかつた。女學校が設けられて、學問を奬勵すると共に、政府は、いくら保守的の女を要求しても、教育せられたところの女は、可成世界を知る事の出來る女であつた。

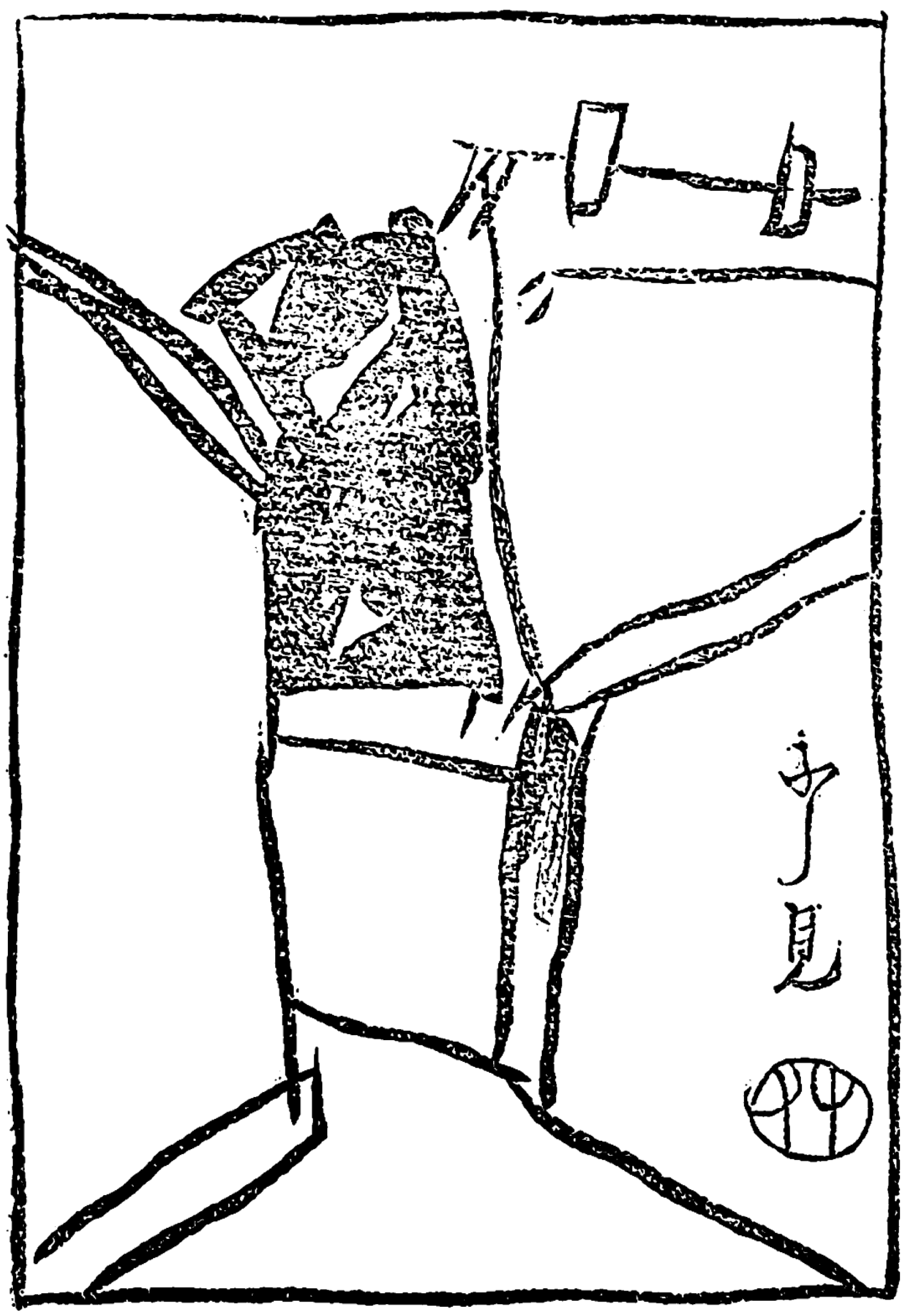
それと同時に明治三十三四年頃から、日本は、國民の生活にたいする考へが一般に變つて來た。三十三年頃までは、百萬圓の資本をもつた會社といへば決して

見る事が出來なかつたのが、今日では何千萬圓と云ふ會社が五六に止まらぬ有樣である。日本の富が增進したのとともに、富の勢力が增して來て、今まで位置とか、名譽とかを思つてゐたのが、富を第一とする樣になつた。女の結婚にも財産を商量するのが何よりの事になつて來た。女の風俗は華美になり、我々の一身代位を着物で背負つて電車にのつてゐるやうな、盛裝の婦人を見掛ける樣になつた。貧富の程度が非常に隔たつて來たため、近頃の女の氣質が此れによつて、變つて來た、變らざるを得なかつた。

此の頃の新しい女の著るしい傾向は、第一期の書生羽織にリーダーを抱へた女とはちがつてゐる。

第一期の新しい女は西洋の崇拜に夢中になつただけの事で、論外である。第二期の女は、宗教をもつてゐて、天下の事を考へると云ふ氣慨があつた。現今の新しい女は、それとも違つて、何よりも、自分一個の滿足する生活をしようと思つてゐる事である主我的の女が極めて多くなつたのが特徵である。

明治年代の婦人の變遷はまづ以上述べたとほりであるが、靜かに其の變遷の跡を考へてみると、世の中はだん／＼明るくなつて來たのを感ずる。而して、婦人の樣々に變遷して來た事については私は、さほど悲觀をしては居らないのである。



其二

成女高等女學校長　宮田脩

(一)

明治の婦人が社會的に認められて來たのは、明治十四五年の頃に、伊藤さん等がしきりに歐化主義を唱へた時の風潮がもつぱらそれに向つて進み、今の華族會館――其頃は鹿鳴館といつた處へ、宴會を開いたり、舞蹈を始めたりして、つとめて婦人を出入させるやうに企てたのが、明治最初の、婦人に取つての覺醒であつたらうかと思ふ。

其の風潮に伴つて現れた當時の婦人の中には、すばらしい人があつた。大阪事件の影山英子、(今の福田英子)、或は中島湘煙女史等が其の大きい一人であつて、此の婦人達は、今日の新らしい女子の、解放とか自覺とか云ふ事よりも、寧ろ激烈な運動を起さうとしたものである。もし其の傾向が發展して行つたならば、イギリスあたりの、參政權運動を起す婦人には劣るまじき有樣になつたかもしれない。殊に此れらの婦人の中には、東京で演説をしたり、地方を巡回して、女權擴張の爲めに講演をするやうな事もあつた。

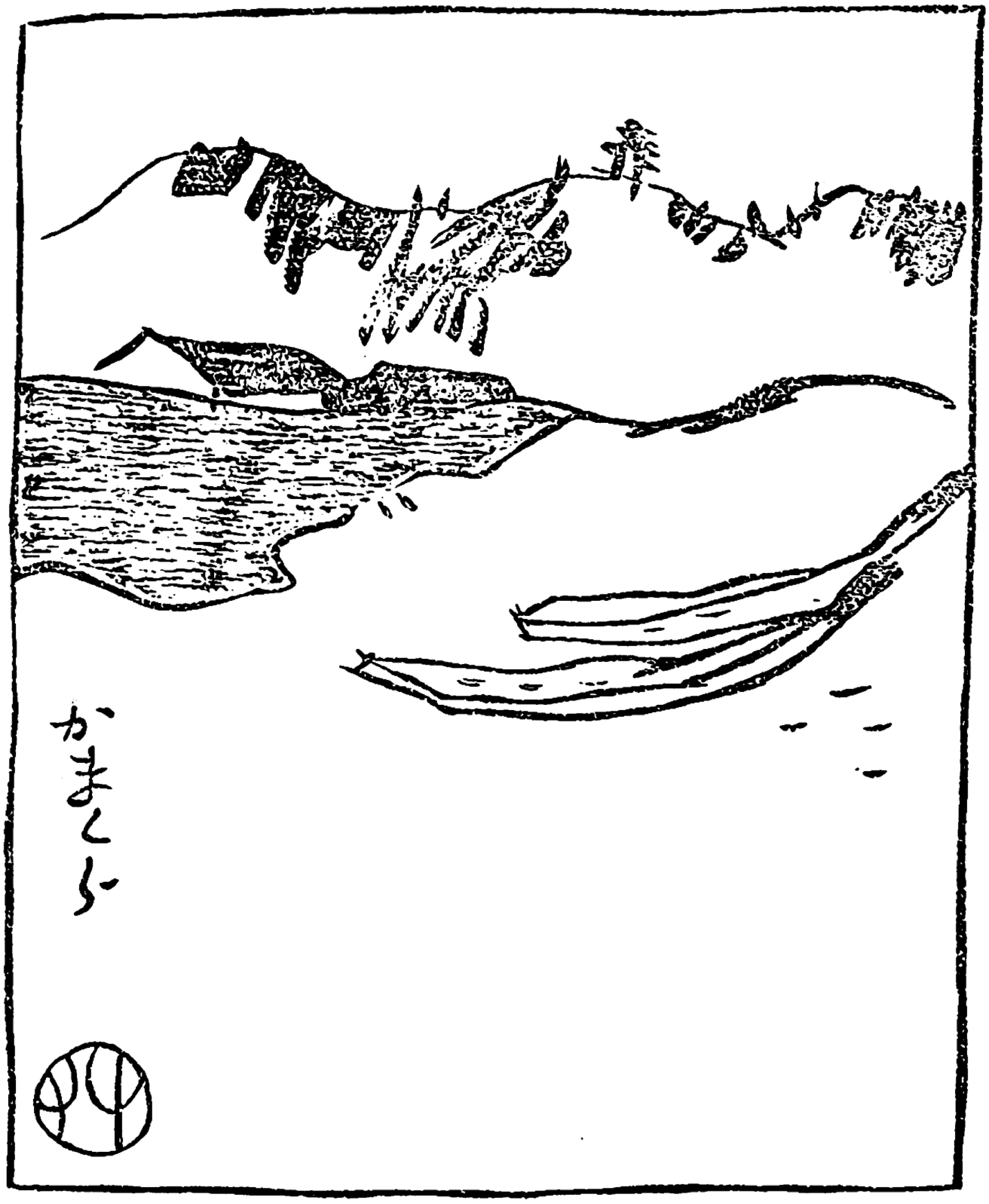
それと云ふのも、當時は一般政治界に於ても、民權自由の聲が頗る高かつた。其の思想が、婦人社會に直譯的に入つて來たのではないかと思ふ。隨分うら若い女子が、有髯男子を、前にひかへて、滔々と議論をした事も聞いたところである。此れが日本の婦人界に、覺醒の早鐘を打つた最初であつたと思はれる。

(二)

然しながら、一面には演説、一面には舞蹈或は宴會等の形をとつて、外國の狀態に似たものは出來て來たが、是れは數の上からは、きはめて少數の勢力であつて、猶大多數の婦人は、從前の如く女大學を墨守して琴三味線の許しを貰ふ事を女子唯一の能事のやうに考

へて居たのであつた。

現に明治十五六年頃に、婦人を教育する學校としては、今の音樂學校の分教場であるお茶の水師範の女學校があつて、此處に當時の女子教育家であつた矢田邊良吉、茂瀬榮等といふ人達が、新しい教育の試みをしたのに對しても世間の注目はえらいものであつた。其の一擧一動に對してまで、人の口の端に上つたものである。私の母等も、其の頃は、所謂束髮の最初に出逢つて、束髮の輕便であり、且經濟であるのを知つて、割合に早く束髮にいつたものであるが、其の束髮に結ふと云ふ事がもう世間の人の口の端にかゝるやうな樣子であつた。



束髮といつても其の形は今から見ればをかしいもので、ひきつめに結んで、髮を三つに編み、頭の眞中で丸く巻いて上から網をかけてゐた。いかにも不恰好なものであるが、當時に於ては、よほどハイカラで、耶蘇教でもなければしないものゝやうに思はれた。その束髮で往來を歩く

と、無智な人が笑つたり、子供が石を投げるやうな事をしたさうで、新しい事が婦人の一部には行れたが、大體に於ては、婦人界に徹底しては居らなかつた。

中には束髪に結つて見たが、往來の防害にあふのに辟易して止めて了ふ人もあつた。まして若い婦人は、唐人髷に結ふとか、銀杏返し或は島田に結つた。かう云ふ外形のありさまは婦人社會に、新しい運動が徹底してゐなかつた事を證してゐた。

其の頃の女の書生の風俗を、まづミッションスクールの學校で、今の女子學院、――其の頃の櫻井女學校の生徒等で見ると、薩摩絣の羽織に着物と云ふ姿で、袴は着けなかつたが、髪だけは、西洋風に束髪にして一寸男の書生かと思ふ様に質朴にして、往來を行くのにも、英語まじりの談話をして、肩で風を切つてゆくと云ふ有様であつた。

けれども其れが廣く行はれてゐたのでなかつた。

其の中に今までの歐化主義の反動として、極めて頑固な國粹保存主義が行はれるやうになつて、女書生のさうした風俗等はひどく反抗を買ふやうな有様になつた。其の爲めに學校通ひをよす婦人なども生じた様であつた。

（三）

其の後に起つた婦人の覺醒は、日清戰爭以後であつた、女子の教育は、やうやく新氣運を起さうとして、其の中心となつた女學校が明治女學校であつた。

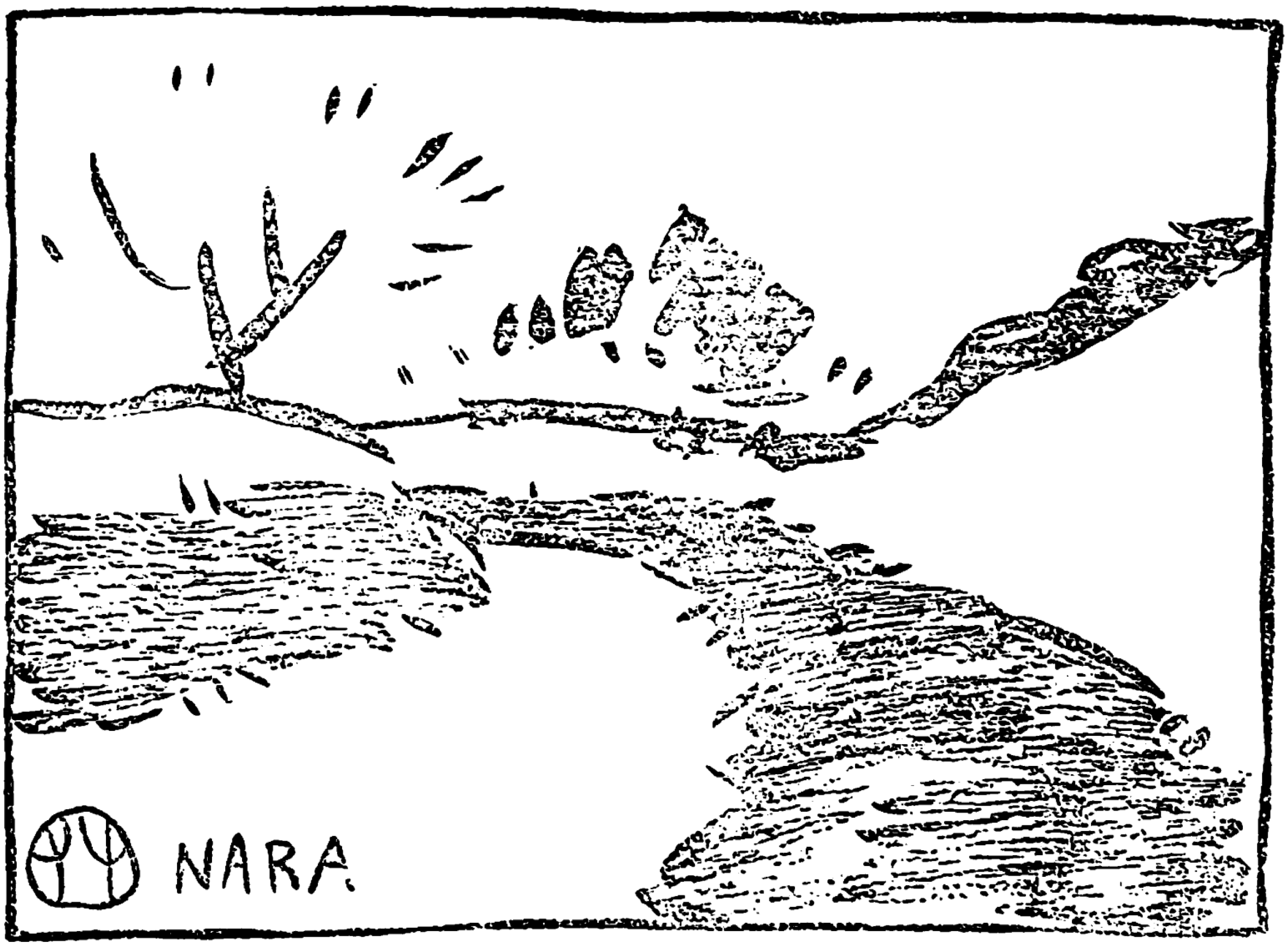
此れは今はなくなつてゐるが、校長は巖本善治氏で其の妻君は若松賤子といつた巖本かし子女史であつた此の學校は單に、學校の經營にのみ止まらず、社會的の勢力もあり、一方には、『女學雜誌』を機關にして女子教育の爲めに大きい勢力をもつてゐた。

今日世に知られてゐる、或る派の文學者、たとへば戶川殘花であるとか、櫻井鷗村であるとか、內田魯庵星野天知、戶川秋骨も其の中にはひるが、これらの人が一團となつて、『女學雜誌』の上に筆を取つて、陰々陽々、女子教育を奬め、明治女學校の行く道を助けたのであつた。その爲めに明治女學校は當時の女學校を

代表するやうに思はれた。

其の外の女學校には、女子學院の櫻井女學校もあつたし跡見女學校もあり華族女學校等もあつた。それらをつなぎとして、段々婦人の教育と云ふ事が必要視せられるやうになり、ぼつ／＼と新しい女學校が出來かゝつた。女學館はたしか其の頃に出來たやうに思ふ。

此の時代の趨勢と云ふものは、日清戰爭の當時に、男子の多數が海を渡つて戰ひ、殘る婦人が、留守の仕事をひきうけなければならなかつたので、自ら婦人をもすこし道理のわかる女にしなければならぬと考へるやうになつたからであらうかと思ふ。



（四）

三十年から、三十四五年にかけては續々女學校が開かれるやうになつた。女子大學の起つたのは三十三年。女子美術學校もやはり其の頃で、私どもの成女學校の出來たのも三十二年、其の翌年、或は翌翌年には、三輪田女學校の如き、實踐女學校の如き新しい學校が後から後からきびすを接して生じて來た。

是の婦人社會の運動は、前の鹿鳴館時代の婦人の覺醒とは違つて、餘程必要に迫られたものであつたが、然しなほ

これが、婦人を是非とも教育をしなければならぬと云ふ止むに止まれぬ傾向であつたとは受取れなかつたのである。

どうも一種の流行であつた、女子教育に對する理想はないが、女學校の數が少いから、一つやつて見ようかと思ふ教育者と、隣りの娘が女學校にゆくから、家の娘もやると云ふ樣な譯から、此の狀態になつたのであらうと思ふ。世の中に役立たしむる深い必要から、女子教育が盛になつたとは思はれぬ疑問があつた。

現に女子大學が開かれた最初にあつては、多くの婦人が其の門に群り集つたが、つゞいて、其れだけの多數の志望者が來べきであるのが、一二年の間に著しく減少して、一時は極めて、少數しか收容されなかつた事がある。

それを見ても、流行に追はれた一つの現象であつたと云ふ事が考へられる。大學と云ふ名の下に其の虛榮心を滿足させる父兄なり本人なりが動かされたのもあつたであらう。

當時の女子教育は、世間から、突飛な事もするやうに思はれたやうであつたが、決してさうではなかつた。女子大學に於ても、世間に批評せられた程、我々の目から見ては突飛ではなかつた。

女子大學は元來がアメリカを學んだものであるから國粹保存主義の人の目から見れば、飛び放れた藝でもしてゐるやうに見られたかもしれないが、當事者に於ては仲々苦心のあつた事で、日本に近くしよう。成可く日本流にと試みた跡は明らかであつた。

ところが何して理想はあつても、經驗の淺い女子教育者をはじめ、監督官廳に對して、社會一般の輿論もまち〳〵であつたので、其の間の教育が完全無缺のものでなかつたのは云ふ迄もないことであつた。隨つてこゝに養はれた女子も、能へられた教育で、眞に自覺して世に役立つと云ふものは、多數に於てなかつたのも止むを得なかつた。

(五)

かういふ有樣で來た明治の婦人なるものは、屢々自

覺といふ域には觸れては來たが、眞に、自覺と云ふ鍵を握つて居らなかつたと思ふ。

今日、新しき女とは何ぞやと云ふ問題が隨分。素人の間にも論ぜられてゐて、議論は盛んであるが、まだ定まつた意見は出來てゐない。殊に實際にあたり、眞に自覺する婦人は、幾何あるかと云ふ事は疑問で、今猶世間の風潮に漂はされてゐるものである。

此の頃の女子が、餘程實際に觸れて來たのは疑ふべからざる事であるが、兎に角女子の敎育も、女子自身が、自分等の尊嚴と云ふ上から云つて、眞實の域に達してゐなかつたとは云はれる。

今度女子がどこまで發達するか、又何時の時代になれば、大膽に立派な行動をとるやうになるか、それをあらかじめ知る事は出來ないけれども、明治年間は、搖籃の中にあつた時代であつた。

女子敎育も、婦人の自覺もともに、此れより來らんとする大正の時代に於て、大正の婦人に對つて見るべきものであつて、大正の婦人の前途は實に多望である。

明治年間 婦人の雜誌

自分一個の記憶ではあるが、我邦最初の婦人雜誌は矢張博文館の『日本の女學』かと思つてゐる、『日本の女學』は其後『婦女雜誌』となり、更に『女學世界』と改題して、現今に及んでゐる。故山田美妙の『いらつめ』と云ふ婦人雜誌も、明治二十二三年頃に盛んなやうだつた、此は間もなく廢刊した、別に新派の婦人雜誌としては巖本善治の『女學雜誌』が一部の讀者間に有力だつた、『女學雜誌』から文學に關する一派が別れて『文學界』を出した、藤村、一葉を初め幾多の文士を出した有名な雜誌である。また『女鑑』といふ婦人雜誌があつた、年數に於ては此も餘程舊い雜誌だ、保守主義だつた、『女子の友』と云つて、文藝を主とした婦人雜誌もあつた。わが『女子文壇』は明治三十八年に出た現今の婦人雜誌は大抵三十七八年の日露戰爭後に創刊されたもので、最近五六年間には幾多の興廢があつた。



萬國赤十字總會より歸りて

伯爵　小笠原長幹

第九回萬國赤十字總會に參列し、歐洲漫遊を終へ歸朝されたる、小笠原長幹伯を牛込河田町のお邸に訪ひ、旅行談をおたづね申しますと、福々しい豐かなお身體を安樂椅子に投げながら旅愁の裏にもいつもの快活な調子で、左のやうなお話をなさいました。（婦人記者）

米國婦人が社會の表面に立ちまして、種々公共事業に盡力して居りますことは、これまで聊か見聞して居りましたが、今回は妻も同行し、接近してその活動振を目擊しましたが、實に敬服するより外はないのであります。赤十字の主腦であるボードマン嬢デラノ嬢等に會ひましたが、眞に花中の花とでも言はうか、デ嬢は看護人會長で數萬の看護婦を指導監督し、ボ嬢は赤十字の常任幹事で事實上の米國赤十字社長であります。各國委員に應接して、一人殘らず滿足させ、複雜なプログラムを順序よく處理し、自ら實行の衝に當つて連日連夜孰れの場所にも、その姿を見せざることなく、その愉快な高潔な風姿に接するものをして、自然と敬虔愛慕の念を生ぜしめました。會議が終りまして最後の大宴會が催されました時、各國の代表者は言ひ合せたかのやうに、偉大なる德を稱揚したのです。

日本にも各種の婦人會がありますが、かういふ婦人

を見たいと思つても、殆んど一人もないといつても好いのです。それは無理はないのです、歐米婦人になると一人で數十萬、數百萬圓の莫大なる金を持つて居るのです、それで慈善事業でも仕樣とすれば、金持の婦人が集つて、又は一人で金を投じて、自分の終生の事業があると自覺して、各々どこまでも責任を以てかゝるから、男子も及ばぬ程實に完全な立派なものになるのであります。それで居て、その謙讓にして奥ゆかしい有樣を見ますと、日本では米國婦人は皆所謂ヤンキー式だと思つて居るのでありますが、中々さうではないと云ふことが分ります演説をするにも、高尙に優雅に述べるのであります。

又旅行中の話ですが、桑港で、國の者が私を招待してくれたが、この時は實に感動しました。彼等は國を去つて八九年にもなるのに、今にも私等のことを思つてくれるのは實にありがたく思ひました。

それから珍談ともいふのは、私が以前米國に行つた時は、ミンガンであつたか、湖水の上を汽車を渡すのに船に乘せてやつたのですが、それで今度もこの事を思つて妻に前からこの話をして居つたので、やがてその湖水口へ來たと思つた頃、頻りに今船で汽車が湖水を渡つて居ると説明して居つたのに、その附近の停車場に入ると、汽車が自分達の乘つて居る列車の隣に居つたので、變だと思つて、後で紐育で聞きますと、數年前の湖上の汽車渡し船は今は無くなつて、湖水の下を通ずる隧道が開かれて居るといふ事でありましたが實に米國邊の發達進歩には驚いたのです。

英國に行つて驚いたのは、私が九年以前居つた學校リースを訪問した時です、その九年以前と今日と何一つ變つて居らなかつたので、たゞ數人の教師の一人が死去し、モウ一人が傳道に出かけて居らなかつたばかりで、他は九年前の教師が熱心に教授され、殊に感心したのは給仕小使園丁までが、そのまゝであつて、衣

服は教師はじめ、以前居つた時分と同じ色同じ形のものを着て居つた事であります、これが英國人の長所であつて又短所であるか、いづれにしましても英國は斯うした風があるのです。

先帝陛下の御不例のことは、蘇士で拜承し、いたく御案じ申上て居りましたが、伯林で御崩御の報に接しどうしても信じられませんでした。それが漸く事實と確かめられた時は、何とも申しやうのない驚きに打たれました、それに私は式部官を務めて、陛下の御傍に奉仕いたしましたので、旅に遊んでゐる心にもなれませんので、早速歸國のことに定め、一方妻の喪服調度を求め、自分も喪章を求めたやうな次第で、今も崩御遊ばされたとは思はれぬやうな氣がいたします。

外國新聞雜誌は今更のやうに同一の語調を以て、無限の讃辭を呈して居りました、と、同時に日本國民の御平癒を祈つた有樣は、一々目擊するやうに詳しく記載してその忠君愛國の國民性を稱讚したのであります

妻は歸朝してから少し加減がわるくて、なにしろ伯林から直ちに汽車に乘り續けで歸朝いたしましたのでその疲れやら、それにこの際でありますから、非常に憂愁に沈んで居ります、話した所がロンドンでアレキサンドラ皇太后宮の御誕生日の薔薇の祭 位 のことでせう。

この祭は上流社會の夫人令孃達が、化粧して白色の服を着けまして、野薔薇の造り花を賣つて、その收入を慈善事業の資にするのでありますから、上流は勿論或る程度までの下流の者までが、高價なのを承知して求めるのであります。その美しいこと、まるで天女達が天降つて來て賣つて歩くかのやうに思はれました

夜の蘭香にかくれてや花白し　蕪村
人賤しく蘭の價を論じけり　子規
香をふんで蘭に躓く山路哉　月居
鉢になれ折人あらば蘭の花　蓼太
痩たるを悲む蘭の苦みけり　太祇



柳はみどり花はくれなゐ

原田琴子作



此頃あちらでもこちらでも告白が流行る。讀んで見ると一樣に苦悶の聲である。生きぞこなひ死にぞこなひ、さては食ひぞこない。かうも世の人は暗いかげに押しつぶされてうめいて居るのであらうか、可愛相なが通り越してそろ〳〵可笑しくなつて來た。何故平氣で美しく明い日の下に生きて居る人の告白が流行らないのであらうか、私は物足らない。

こゝにあるが如く無きがごとく、食ふて寢て起きて居る娘の告白を聞いて下さい。

私も多聞に漏れず、人間以外の事を考へて苦しんだり、柳の緑をたらずとして紅の花を戀ひ、松の常磐さへそへんと悶えた。考へれば考へるほど分らない、自分さへ分らなくなる。悶えれば悶えるほど何もかもを否定したくなる、片端から打ち壞して笑まんとした身が、却つてその下に身動きもとれなくなつた。あはれ娘の十八も十九も二十も、かうしたかげに世は墨染いの花ざかりと思ひ過して、おのが濁る涙に腐らせ果てゝ、人を呪ひ、世を呪ふた。疲れて私は終に眼を閉ぢた。再び靜に見開いた時には、まづ自分といふものがかつきりと見えた。周圍の如何も分つた。おぼろげながらも世の中さへ見える樣になつた。今迄自分に必要のない事を考へた愚も、いづれの木にも同じ花が咲かねばならぬ、同じ實が結ばねばならぬと不自然な注文であつた事をも悟り得

た。汚れた着物を洗ひ張りした樣な、久しく垢につゝまれた身を浴して肉色の肌に風のやはらかくふれる、心地よさ涼しさを覺えると同時に危い淵から自分を救け得たのを喜ばずには居られなかつた。

私は出來るだけ大きな聲で笑つた、始めて自分の手を取つて踊つた。此の時世は花咲き、鳥鳴き、風吹き水流れ、面白くも悲しくも私の心のまに〳〵ひゞくのであつた。憂き世か浮き世か住む人の心次第で、人の心を他から左右するものではないと思ひ知つた。心頭滅却すれば火もまた涼しと。

私は二人の兄、四人の妹、一人の弟と共にわけもなくすく〳〵と親の許に生ひ立つて居る二十あまりの娘である。あまりむさ苦しい長屋であれば、小さくても高塀構へで少し高い甍は黄金銀ならねど光つて見えるらしい。產着にもう四つ身をこしらへる中に、十年の壽命はこちらの身が知らねばと、年に合せて好きに染めた花模樣が出づるに入るに、人目を驚かせて、私も鳥なき島の蝙蝠の娘になつて居るらしい。賑かな街に出ては囃やされたり、ステッキの先きでつゝかれたり、亂暴にも抱き付かれたり、爺にさへ手を握られた事もある。馬の蹄にかゝる名もなき小草でもない樣な。

安政生れの父も、文久生れの母も、明治生れの私も大正の空氣を共に吸ふては、共に大正の人である。父母は決して私を鎖で縛め樣とはせぬ、自分は自分で立てと幼き者、可愛き者をよそに見て過ぎる家鴨の無慈悲でもない、我が子を育てられぬ樣な意氣地なしでもなければ出來るだけ大きな園に、自由に花のごとくに香らせ、小鳥のごとく歌はせて、過ちなかれと保護して呉れるのである、尚園は私につれ世につれて大きくなる。私は感謝せざるを得ない。

不安も恐怖もない私は大抵家に居て、同じ事を繰り返して居る、その仕事は極めて單純なもので母や妹と共に拭掃除をするのと、臺所の用を働く外は私の自由であるから大抵讀書をして居る。

おだやかな空氣の中に生れた者は、勢おだやかに平

凡でなくてはならない。毎日家にばかり居て氣がつまりはせぬか、平々凡々と生甲斐がないではないか、と御親切にも心配して下さる方があるが、私はたゞ微笑を以て返禮するより外を知らない。外に用が無ければ行きたくもなければ家にあるは當然のこと。家に住むべき者が家に居て氣がつまれば、草枕世を流れあるく宿無しの類になるより遁るゝ道はあるまい。平々凡々は無念無想である、みだりに刺激を求めてさわぐが何程の甲斐であらうぞ。平々凡々の妙味がすなはち本來空の眞理に近くはあるまいか。



一休和尚と蜷川新左衞門との問答が面白い。

「汝は何處の者ぞ」

「和尚と同國」

「國には何事も侍らぬか」

「烏はかあかあ雀はちうちう」

「此處を何處と思ふ」

「紫に染めたる野邊」

「如何が染めける」

「尾花、朝顔、紅菊、紫蘭」

「散りての後は如何」
「宮城野が原」
「原には何事か侍る」
「水は流れて沈々、風は吹いて颯々」
「善哉々々」
私は人生もいと易いと考へた。自分が生きて居る間が人生である、死ねば終るのである。そして私は生れたから生きて居る。生きて居るから死なゝい。これ以外に何の意義もない。
始めから人間に生れたから、改めて人間になる道を考へる必要もない。男でもない女でもない一個の人間として云々といふ人があるが、私はそんな分らぬものを望まない。私は女に生れたから女であるより仕方があるまい、そこで又女といふものはと人から教へられる餘地もない筈であると思つて居る。私は既に女に生れて居る。
もう何も考へる事がなくなつた。仕事もなくなつたたゞ死ぬまで生きて居ればいゝのである。それも自分の力で生きるのではないから苦もないことである。心の欲するに任せ、成るだけに成らせておくのが一番貴い賢い生活法だと思ふ。
所謂事業は遊び事に過ぎぬ。食はんが爲に過ぎぬ。お米の價も知らぬお目出度い人をあはれとしない譯には參りません、とみち子の君はいつた。お米の價を知つて如何とするのであらう。お米の價を知らなくても食べてゆける人が貴いではないか、霞や夢ですむ人があれば尚更貴い譯ではあるまいか。食ふから生きて居るのではない、生きて居るから食ふのである。
意氣地のない生活難を稱へて、得たり賢しこれが人生で候と力み返つて居る人を、お米を食べにわざ〳〵生れて來たのかと笑はずには居られない。この世にはお米が散らばつてはゐない、いつそもつと小さく人の貯へた米藏を天地に、蟲にでも生れて來られなかつたのをあはれまずには居られない。
みち子の君は尚お七やお染を笑つた、私は笑ふ人を笑ふ。戀は自然の力である。戀しいから戀をするので

はないか。笑ふ人、たゞその人に戀しいものが無いだけ、或は戀の程度が違ふだけではあるまいか。私は戀しければ直に戀をする、させられるのである。一人と限るわけにもゆくまい戀に心を奪はれ、熱き接吻に抱擁に身の燃えつきんとも私は悔いない。醒めたる戀は立ち所に捨てるこれも醒まされるのである。自然に逆ふ事は出來ない、自己を曲げた人工的生活を望まない。



自然に逆らはず、自己を曲げざるを以て正しき道とする。人の心に標準はない、自己を以て他を量ることが出來ようか。

若い人の誰しもが問題として難しがつて居るらしい結婚についても、私は何も考へない考へたとて知らぬ人は知らぬ人であり、緣不緣自分の自由ではない。私は自分の嫌ひな人でなければ誰でもいい。戀人にでも飽けば別れんことを始めから互に契つ

てゝおきたい。まして知らぬ人と知らぬ人との道連れ、嫌になり困る様になればさらばのみ、人から苦しく見えても自分に苦にならぬ嫌にならねば死ぬるまで。

良妻たらんとするよりも良夫を得んとする。

毒だみの君は友の自殺に依つて心機一轉したといふ而して權威ある死を知り、父母の行爲にさへ虚僞多し方便多しと見るに到り、己は日夜苦悶に心を責めて居る。私はこの一轉のしかたを吹き出して笑ひたいほど哀れむ。身の如何を忘れて翅なきに天がけらんとするの愚ではあるまいか、我を見て我と知らざるの無能ではあるまいか。友が最後の一言單純なほどが幸福だといふのを、再三再四味つて見ながら、何故それを眞直に受け入れることが出來なかつたのであらう。單純なほどが幸福だと知りながら死んだ友は、死を戀して死に到つたまでゝある。

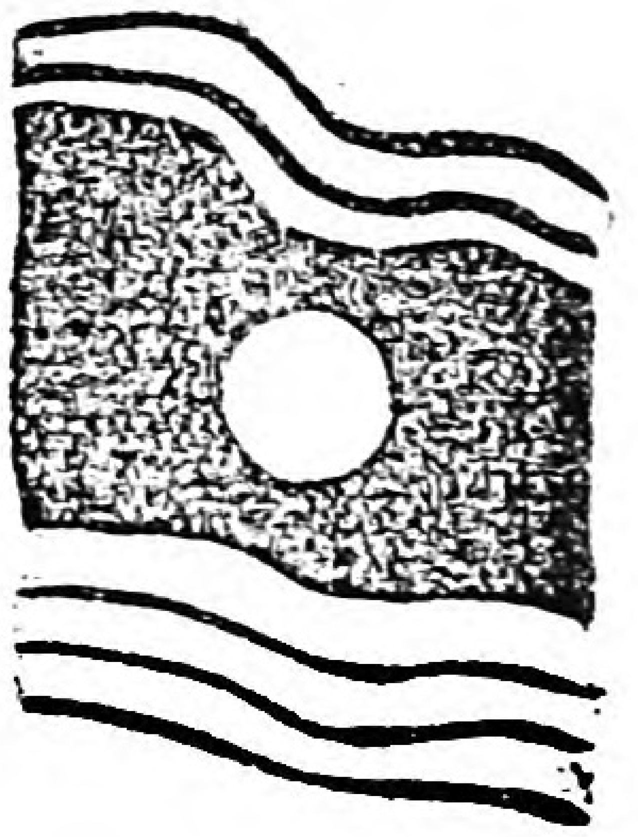
死を戀する人よ、死は自由である。

自然に逆らはんとする人よ、たゞ死あるのみ。

毒だみの君は曾つていつた、「私どうしてもお嫁なんかにゆく氣にはなれない、束縛されるのがいやだ、もつと女子大學にでも學びたい、そしてお終ひには黒衣の人にでもなつて……」と、それが自分の心の欲する處であれば、それも一種の享樂主義である、私は双手を擧げて賛成する。墨染の袖にも丸き頭にも吹き來る風は同じ世の風、心が變らなければ又同じ境遇の人である。黒衣の人と限つただけ自分で自分を束縛した樣なものであらう。尙君は禪を學ぶと聞く、私は思ふやがて君も昔の無意無念、平々凡々の花のごとき毒だみの君に歸られるであらうと。

解脱するに敢て出家の姿をかりるにも及ぶまい。

筑波根の君は、われ不斷の坐禪にあり、寂しけれど淸し（寂やかで淨なれば淋しけれど淸しか）……我が夢は湖の水のごとし、動けども終に鎭まり、行けどもやがて歸る」といはれたが、これでは君の坐禪もまだ貴からずと思ふ。坐禪にある人何を樂しとして何を淋しといふであらう、淋しと思ふは既に淨からずさわがず垢れざるまでゝある。



御前試筆の記

（今上天皇陛下、未だ東宮殿下に在し〻頃、東北行啓の砌、名もなき草の一少女が御前試筆の光榮に浴したる當時の實記）

粒木　つね

花壇の花は美しく透いて見える窓際に、紫や紅の書包抱へたま〻、まだ群を解き得で餘念もなく、殿下行啓の話に耽つて居た後から、突然「××さん――」から呼ばれた私は、一齊に赫く瞳に送られ乍ら、野川先生の後に從いて人氣なき涼しい廊下に連れて行かれた。ハッとした、なぜか只ハッと頂垂れて仕舞つた――、衆人の前、貴人の御前で繪筆をとつた事は今迄も一度や二度ではない、學藝會にはきつと談話や朗讀に引出される、その度何彼と故障を云つて拗ねては先生や友達を困しめた、その我儘が今日はなぜか出なかつた。中庭の緑樹を通して時折ワーッといふ笑聲が何だか耳擦しては自分を嘲笑つて居る樣だ、友に對して何か濟まない樣な、申譯がない樣な――それにこの喜を見透されるのが何より嫌だ、私はそこからすぐ拔出て唱歌室、裏の栴檀の樹下に隱れて居た、皆が歸り盡して周圍が薄らと暮れるまで――。

私一人を仲間外にした樣に友は忙しさうに樂しさうに毎日大掃除をしてゐた、背後の廊下を、はしやいだ笑聲や面白さうな高話が引切なしに通る。茶目さん（先生のアダ名）を先に立て〻ドヤ〱五六人侵入して來た、麥稈帽の上から手拭を被つたり袴の上に裾細を着けたり道化た姿を黒板の前に並べて何か徒書を初める茶目さん私の筆を引取かへして自慢の左書で縮れた前髮の私の顔を寫して頰の所へベタンと素晴しい書印―廻つて立つてた人達がドッと囃す。私は急に自分が高い樣な氣がした、若し…假に私の此光榮をこの人達

が得たつたら…、この幸福の圏外に立つた人達に今の私の心持が解る筈がない〳〵。昨夜も、新聞社に勤てる從兄が湯貰に來て、「先づお目出度う、千載一遇かナ、振ひ給へ、ウンと書いて進せるぜ—」つて、何の三文文士が…、幼稚だろが單純だろが私の此の純な大きな明るい喜が貴兄になんぞ解るものか——。ただ父樣と母樣だけは…それは喜んで下さる、嘗て主上の行幸あつた時、四割の紅い木綿博多を小さく貝口に結んだ痛氣な母が見窄らしい祖父の手にすがり乍ら無情な群集に押出されて一番後になつた、其處は堺市の松の高い根本だつたのでよくお行列が見えたけれども「正面に拜んでは目がつぶれる」といつて豆絞の手拭で爛眼を拭いてゐた祖父に、無理矢理屈ませられた——と古い話を持出して母は思ひ設けぬ娘の光榮に幸福を泣いた。ジヤラ〳〵と廊下の方から校長の雪駄の音が聞えて來ると、皆の影はスイ〳〵と次の眞暗な理科實驗室へ消えてしまふ、そして復あたりは賑かなけたゝましい拂塵の音——。

も一人の席書のN子さんは、華美な友禪メリンスの袱紗に包んだ雪の樣に赫く筆洗と青い簀垂に收めた高價な筆の幾本を持つた人、緋毛氈の上に片手をついて今一筆を下さうとする瞬間の腰付のしなやかさ！靜かにゆれる前髮、白い額、堪らなく美しい人、今度のお繪なども私よりはズツと手の込んだ目立つたもの、毎日サツと歸宅つて勝手に自分の御師匠に上つて稽古して貰ふ。後に私はひとりぼつち、窓前のグミを目覺しく赫かせて夕陽が斜に差入る頃になると、もう手も頭もしびれて仕舞つて…、筆投出すなり朝顏のお繪の上に俯伏して仕舞ふ、脆い花！爛つた葉！お前は私に相應しい花だ、だから私の心中も解らう、私の此の、無垢な熱烈な努力は…最後の日、最後の日にこそ、君の御前にこそ、きつとお前の色淡い蕾にも強い燦を見るであらう。——苛々して室に居たゝまらなく〳〵と飛出して裏の花園に入つてしまふ。と見る、滿目の濃綠、萬點の星を抱いたまゝ唯しん〳〵と強い白光に打れて園は眠れる樣な奇しき靜けさ——、針葉薔薇に又

ルリと抜出た眞紅の花が誇らしげに我が袖に纏ひ、眞白の脆きがハラ／＼と海老茶袴の裾に散る、塵にまれた白足袋すら小草の中にクッキリ映立つ。深碧の天上に伸々と這つた梧桐の枝からはスヰートな小鳥の樂が絶えず降灑ぐ、―王者の様に立つた自分の前には凡ての物――凡ての物があらん限の赫きを見せて此身を讃美つてゐる。黄色い衣に紫の袴着けて當て　主上に御茶參らせたと聞く當舊藩主の姫君、雪白のリボン頭一ぱいにかざして××の宮の御車近く侍つた△△家の令孃――そして野育のたゞヒヨロ長い女郎花の此身‥‥、あゝ、我が身が拙ければ拙い程、仰ぎ見る雲井の空は遙く見える、それだけに一層身の幸福をいやまして覺えるのである。かうして歡喜に醉ふた我が魄が思ふ樣、ほしいまゝに驅廻つて上句の果がガッタリと疲れ靜まつた時也と室に戻つて筆をとる、と初めてシンミリした色彩も出て來るのである。あたりが暮かゝつてるのにいつもビックリ、そてから直ぐ下り立つて長い軒下をハタ／＼と廻ると今し淋しい眠に落込まう



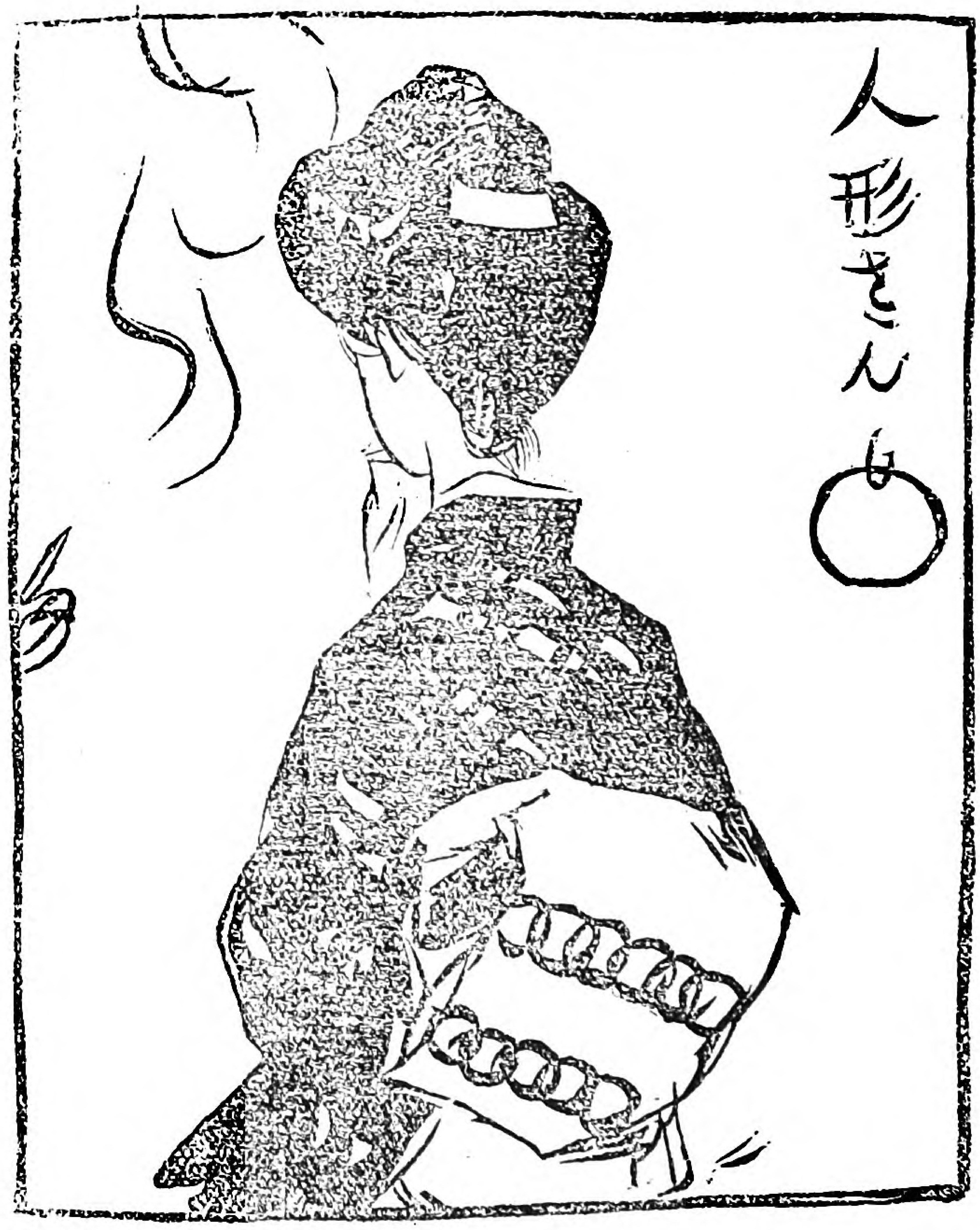
として居る大建物が俄然雷の樣な大反響を立てる、恐ろしさに土黑々と廣いテニスコートを一直線、頽れた垣を潛拔けるとすぐ草場、草場の縁を廻つて近道して林の中にポカリと見える我が家の灯を目がけて走る、きまつて、遙の草の上に水色の大きい星が私をジッと見つめて瞬いてゐる、友にも離れて、一日一室に壓迫され通しであつた我が苦惱を慰め顏に——。

私の繪具皿ば小さい、溢れる程繪具を溶いといても葉一葉かくうちに吸ひ盡されて仕舞ふ。N子さんのは女子大學在學の姉さんに買つて送つて貰つたのだと聞いたけれども、若しや當地にも…と思つて探しに出かけた、父樣が例の首から掛けた大きな革財布の中から三枚出して下すつた大きい銀貨を持つて——。無い！生れて以來まづ通つた事もない山上通の奥の小路まで探したけれども——。失望と疲に私はガックリ相生橋の手摺にくづ折れたまゝ泣入つてゐた、暗い瀨音が噎ぶ樣に足下を流れてゐた、求められないあの皿が憎らしい程浮んで來る、五つ揃ひの、水晶の玉を眞二つにして中をエグッた樣な——若し、彼に私の綠色を溶いたならどんなに綺麗だらう——。

その前夕——私は中庭の小川に下立て手馴の二つの菊形繪具皿をば新しい白木綿で氷の樣に磨き上げた、もう地に這ふた薄暗には夏菊が微白く浮き出て居たが高い土藏の屋根からかけて淡碧の空には晴れた餘光が朗かに美しく流れて居た。一番がけに湯に入つて、紫蘇を放して香氣高な味噌汁に落込んだ卵二つと、それから初摘の裏の林檎の雪の樣な一片とを食べて早く床に入つた——明日はもう何も腹へは入れないつもり、「お腹許りシッカリこしらへておいでよ」とくれ〲も先生から注意された事だけれども、私は——きつと強い意志でもつて明日一日は淸い我が肉體を支へて見せる。涼しい洗髮が筋よく枕に流れた、——明日はきつと癖の多い私の髮もシャント立つ事だらう——。シーンとした中に拍手の聲が高く響いて來る、老年な二親は神佛に御燈上げて今宵一夜を祈つてくれるのである、燦い下には三方に、供へた白布に包まれた繪道具

や、仕立直してもらつた黒紋付に白襦袢――と明日の我身に附く一切の物が淸らにかざられてある事だらう――。餘計な事は思ふな、もう眠よう尊き御姿!!我が繪!!

紺の香の高い揃ひの新半被の人二人、並んで幅の廣い塵拂機械を押して行くとスーと後に幾千筋の箒の目が心地よく〳〵――。道の向側に並んだ小學校の生徒の花の樣なリボンを超して、果しもない薄の浪!その浪の末に、ア、今御汽車の煙がモク〳〵と上つた――。ヒシと靜まつた人並の中にサラ〳〵――サラと淋しい音が忍んで來る――刻――一刻我が胸にも高鳴る浪が――。



肅々と廊下を此方へ近付いて來る大勢の嚴かな靴音!!!立並んだ十一の少女の息が忍びやかにはづんで、二十二の瞳はヒタと強く向ふ二双の金屛に灑ぐ。

「鄙の里もへだてなく‥‥」友の御讃美申上ぐる和いだ唱歌の聲が嚴かな一室の空氣に溶けて行く、五分‥‥十分‥‥怖ぢ固まつて居た我が魂もいつか懷しいいみじい夢に吸はれて行く樣――さあれ我が腕はたゞ震ふのみ‥‥。

仰ぎ奉るよしはなきも、我が心の瞳はヒタと許り殿下の御身邊に添奉つてゐた――。

殿下に續き參らせし方々のうちには、日頃わが、名をきゝその寫眞などをも見知つてゐた方も少くはなかつたらうに……、我が心にはたゞ、大方は髭白く溫和に赫く眼、腭の太き方達よとのみ――。

最後に在つた漆黑の髭美しき人が、師の一人を呼び留めプログラムの上を指して「これは何と讀むのです？」「ツブキ……」罷出ようとしてふとこれだけ漏れ聞いて、ハッと我が胸は動悸した、あゝゝ、讀みにくゝ可笑しい我が姓名がこの高貴の人達の眼に留まつたのだ――。控所に歸るや皆は倒れ樣床の上に俯伏して仕舞つた、袂を濡るゝ頰の色はまるで炎の樣――、やがて、△△さん×さん出て行つた、N子さんはまだ杜の下にくづ折れたまゝ泣入つてゐる、私は靜かに窓に立つた、吾妻がよく晴れて、そが紫の峯近く今日も日は舂いた、松川は北に流れる、鬼面川も北を射して走る何とはなしに、暗い寒い北の海に向つてのみ憧れた我が十七年の……、思ひ設けざりしいみじき此の一日も終つた。今になつてどうなるものぞ、手震へて花は形をなさずとも　殿下は――田舍少女の技をのみ觀給ふのであらうか？拙き技をのみ――、「……あはれ九重の御わたりに住む優しく美しき人達とはくらぶべくもあらぬ我等、やがてこの里の秋守る野の花と殿下が畏き御心に訴へん……御前に演ずるわざの出來のよしあしはとまれ、我等は永くこの御思召を生命として我が道を進めん……」一番上に綴ぢられて別室に陳列されて殿下の御台覽を賜ふた筈の我が作文の一二節を暗誦して見た。

淋しい山かげの寒き濕地に、葉も莖も拗れがちに生育つた白い小さい花――やがて　殿下の世をしろしめすその日には、數ならぬ此身も髪長き女となつて、平和な淋しいこの野から、遙に　殿下の萬歳を祈るであらう――。

簞笥の底より

海上萬里子

私は昨夜東京に歸つて來た、あの沙漠のやうな海岸の沙地、私はあの夜、はてしもない暗黒の沙原に立つて、怒濤の叫びを聞いた時は、すさまじき海と陸との自然の力が、二つに裂けて、人間の知る能はざる戰鬪を開始したかと思はるゝまで、極端な怖しさにとらへられ、唯もう小兒のやうな戰慄をおぼえた。

そして、俄盲人のやうな手依りなさ果敢なさと、暗から暗を歩き廻る亡者のやうな、物珍らしいゆきつめた心とを、味ふ事が出來た。

月なき夜の水面、黒い魔の影のやうな背後の沙丘、私はあの踏みごたへのない沙山を、ズルリ〱と、蹠裏草履を踏みしめて、あの渚へ引つ張り出された時は聲をあげて知れる限りの人の名を呼びたかつた。

私のこの潔癖な性分では、田舎の生活は迚も〱出來ぬ、まだ書きたい事はいくらもあるけれど、今夜は是で根氣が續かない。

――十三日夜――

私は今病氣でゐます。午後から來訪の人があつたので、無理に身を起しました。

自らの呼吸の音と、心臟の波とが手にとるやうに聞えます、晝夜私はこの持病に苦しんでゐます。

私は結婚してから、自分の心になつかしいと思ふ人の影が少くなりました、ですから手紙といふものを書く事も稀になりました。無暗に手紙を書く事が、道德上の罪惡のやうな心持がするのです。

けれども今夜は、この淋しい切ない自分の呼吸を聞いてゐるのが苦しくてなりません。それで無理にペン

をとりました、どうか思ふやうに何事も云はして下さい。これが私の云ひじまひになるのかも知れないんですからさ。

私はもうこの頃、文章を書くといふ心持にはなれません、從つて文章を書くといふ事も出來ず、仕方なしに、病み疲れた心が、時折こんな世迷言を速記させるに過ぎないのです。

思へば、私はまあ何といふ大膽た事ばかり仕出かして來たのでせう。今はもう身も心も縮み上つて、我ながら哀れなものとなつてしまひました。弱い音を吹くやうですが、この頃では何の氣力も持ちません。

たゞある權力に壓しつけられて、手も足も出ないのです、悲慘なありさまでせう。けれども素より救はれて欲しいとは思ひません。

『さうですよ、それが貴女には却つて幸福なのですよ』

さういふ冷語も聞き馴れては、さのみ冷くも響かないのです。

『私はそれでも宜う御座います』

たつた此の一語の中に、私の此の頃の悲しみも苦しみも決心も含まれて了ふのです。精々是だけの一語を發するやう他にどうする事も出來ない程、弱々しいものになりました。

厭です〳〵こんな意氣地のない事を言及するさへ、いやになります。

お汝も知つてるでせう、私がこれまで持つて來た、形なき世界を、苦しい時にはいつも其處へ逃げて行つた事も。然しそこが決して私の安住の地でもなければ長居すべき處でもなかつたのです。

けれど、まあ〳〵その逃げ場を持つてゐた私の心はどんなに強かつたでせう。

それが早、悉く破壞せられ失はれた今日、このみじめさを恥かしく思ひます。

今は唯、子供のやうな心にかへつて、戲れ散らしたり、あまえた言葉づかひをしたりして、苦しみの忘却を計つたりします。長く〳〵私の心を知りぬいてゐる

日記帳よ、女といふものゝ浅薄な事を、決して笑つては下さるな。

――苦しきある夜――

杏竹桃の花が、すつきりとした幹に、緑色の癖のない葉の中に薄紅く咲き初めた。これを見ると十七の夏が思ひ起される、方々の別荘の庭でよく見かけたもの、一名を慥に、ロールデントラムとか教へられたやうに覚えてゐるけれども。



そんな風の怪しい記憶を辿つて行かうならば、それからくと走つて行つて、何處の涯へ落ちるかも知れぬ、もうそんな危ふい遊戯はしますまい。

何といふ事なしに一日が過ぎてゆく、故郷が時折はなつかしくなつて思ひ起す事多く、遂には其がおさへられぬか、相手に向つて、その人の見も知らぬ私の故郷の事を話すと、相手はいつも又かといふやうな、なま返事をして受け流して了ふ。

故郷の話なんか聞く人にはそんなに辛いものかしら

こんな事をいふ私はまだおぢよッちやんなのだ。

―七月二十六日―

唯一の同感と、寂しき人の誰しも、嬉ぶべきそれぞれの、みやげとを持て、ゆたかなる客人は來るべき頃ほひを、今年は如何になせし。

春秋のゆきゝには、襤褸剌すおゆびのみ、せかれせかれて力なく打ちなやみつゝ、客人の厚情にも逢はざりしか。

その過去わが心住むある寺院の、塔の上にてまみえたる、君が近づくしめやかなる、衣摺れを數ふれど行き摺りにせめてもの一言を云はましと、脣は打ち顫へども、見捨てられたる我なれば、紫の葡萄の露を血の如くすゝりつゝ、今日も生くる。

そは汝の煙草かと、わがつまは今朝も問ひにき、また問ひぬ酒かとも。

さりながら默しつゝ、燃え殘る夏の力を、屋上の瓦の色に、乾きやむ地盤の龜裂を、見詰め入る心のたゞれ。

何ものぞ影を掠めて、我を追ひ追ふかと見れば、世を擧げてすべてのものゝ、足早に過ぎてゆく陰影をのみ仰がるゝ。

身悶えて泣かるゝまでに。

―蟲の泣く夜―

さらば日記帳よ、おとなしく簞笥の隅にかくれてゐよ。

綿入羽織の樟腦の匂ひの中に。

*　*　*　*



私の好きな小野小町

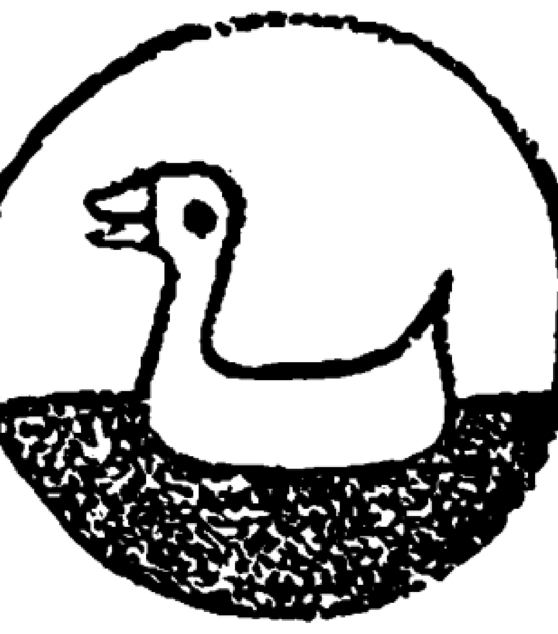
日向きむ

私は古今の日本婦人の中で眞々の手兒奈と小野小町が大好きである、眞々の手兒奈は勝り劣らぬ二人の壯士の戀故に死んだその優しい溫かな可憐な、露にたわむだ萩の花の樣な、ねぐらにいこふ鳩の樣ななつかしさ女らしさが忘れ難いので、小野小町は又ちがふ。美人だから？歌人だから？一生獨身で通したから？と友は種々な事を問ふ、私は第一の問ひにも第二の問ひにも第三の問ひにも否とは答へないが、その美にもその歌にもその生涯にも、汲みつくせない趣を見るからである事を云ひ足さずにはゐられない、小町の美には美以上のある物がある、その歌には歌の生命その物が感じられる、その生涯に至つては美と愛と詩を一つにした理想の女神の眞姿である。

彼女は七色の傳説に彩られて十二一重の袖口よりも華かな名を流して居る、其中には悲しい名もあらう、口惜しい名もあらう、心のほかの名もあらう、誰か小町の心を汲んで共に泣き共に語る。

私の好な小野小町は、詩の國、美の國、愛の國を永遠に治る女王である、私の小町は私の心があやおつた幻の影かも知れぬ、しかし又其他のがどれだけ眞と云ひきれやう、あらぬ姿が後の世にあらはに殘る位なら心もとない斷々の歌や物語がつゞりあはせた朧のかげをそこはかとなく見る方が、小野小町を偲ぶのはふさはしいわざかも知れぬ。

私は此頃ある人の家で其處に來合せたある文學者から種々な故事？を聞いて驚いた、その文學者もその家



の主人も、文學の意義を知る事に大さう勉めて居るらしいが、私は其時古事附といふ言語の意味を文字の意義を學者に聞かずに見出した、その學者は日本は昔時希臘にあつた、故に神話中のアポロはわが日本武尊で橘媛はダフネである、在原の業平とバプテスマのヨハネと使徒のヨハネは同一人でキリストはバッカスの神、ポーロは假空の人である。雲林院に默示錄の斷片があつて、默示錄中に白馬にのつた業平がゐる。伊勢物語中に新約全書のなかにみえるヤイロの娘がゐるではないかと云つた。話はよこに外れたけれど詩や文學はさう分析すると中々故事も附いて來る。

私の小町はさういふ風に調べあげたものではない。また、あげる力もない、たゞ心に立つた俤を、而も自分丈は固く信じたその俤を、いひあらはして見たいと切に思ふばかりである。

「筆のすさび」の著者のいふ通り小町は一人と思はれぬふしもあるが、さりとて「兎園小說」にかいてある樣にあなめ小町は小野の正澄の女で、文屋の康秀に浮草の歌を贈つたのは高雄國分の女であるとハッキリきめてしまひたくもない。動かぬ證據のない限りは矢張小町の性格と歌の姿を主として考へてゆきたいと思ふ。

小町は釆女であつたかも知れぬが又なかつたかも知れぬ「町」は內裏の局とか殿とかいふ樣に用ひられた名に違ひないとしても、後町(後宮)が小町に轉化したにしても、小野小町が釆女の職にあつた證據とは云はれない、宮中の人々との贈答歌や其他の歌や言がきから考へてたしかに宮仕した女性であると思はれるので、殊に父は出羽の郡司、其上小町の容色が絕代であつたとすれば、釆女の職は動かぬ處と後世の人がきめたのではあるまいか。あの容色で、あの天才で、而して釆女の職にあつて人の云ふ樣に功名心の盛な女であつたとすれば、その釆女ぶりが、あまりに平凡ではないか平凡以下に平凡ではないか、憂身を歎いて猿澤の池の水屑となつた人だけも帝の心をひいたあとがあるか、歌集にまぎれこんだ山の井の歌など問題にするにはた

らぬ。美濃や尾張に小町塚が幾個あつても何々小町と固有の姓を標してないかぎりは『牛馬問』の說も直には信じられない。現に靜御前の墓が三つあると云ふではないか。けれど又職名でないからといつて小町は一人に限つた譯もない、花子露子も澤山ある樣に同じ名をつける事は今も昔も變りはない。又彼の平家物語に妓王が淸盛の寵をうけてから、白拍子に妓の字をなのるものが多くなつた一例もある、今我々の住んでゐる此世間にもこんな例は澤山ある、それから又時代時代の流行名といふ事も考へて見たいとおもふ。數かぎりないマリアといふ名もたゞマリアといへば聖母の事になる樣なものである。形式はかまはない、雅號などうでもよい。職名でも局の名でも同名異人が幾人あつても、單に小野小町といへば最早それで受けられる、他からは一分も冒す事の出來ない個性



明らかな小野小町は一人である。

限りなく高い彼女の自尊自重の念を低い世の人々には野心家位にしか買へなかつた、彼女は此世を超越してゐる、女后の位など歌一首にも比べてはゐない、彼女は自身を知つてゐた女性といふものを知つてゐた、多數の男を惱ましたといふのは多數の男が惱んだので小町が故意に惱ましたのではない、何故多數の男は惱んだ？理想的の女性であつたから、心ない者は悶え心あるものはあこがれたのであらう。

誰か小町を戀しらずと云ふ、戀に眠り戀に覺め戀に死戀に生きた小町こそ、神秘の詩それ自身神聖な戀の權化ではないか、彼女を眞に知る事は物語より傳説より矢張歌による方が確實であると思ふ。歌は自己を僞らぬ神の御前の告白である。

さらば小町の愛の對象は何者であつたか。

夢にのみ逢ふといふ戀人は單に抽象的なものであつたが、或は此世で見た面影を人知れぬ夜の通路に移したものか、前者ならばあまりに空の空なるものである後者ならば、早や亡き數に入つた人か、さては同じ世に同じ情を分けながら逢ふても逢はぬ宿世の人か、是が千古の疑問である。

私は後者であると思ふ、而も折々の消息は他ながらにも通ふてゐた悲しいあはれな戀ではないかと思ふのである。假に深草の少將の百夜通ひを事實とすれば、普通いひふるされてゐる樣な動機によるとは思はない後に亭子院のかくれ給ふた時悲歎のあまり出家して「皆人は花の衣になりぬなり苔の袂よかわきだにせよ」と詠んだ情操麗はしい少將と、あくまで聖い小野小町と實事なき九十九よさ戀語はあり得べきとよりはむしろあるべき事である、小町は何と歌つた

結びきといひけるものをむすび松
　　いかでか君にとけて見ゆべき

松を結んだその紐は呪の紐か祝福の糸か、

小町は自ら傷ける樣な女ではなかつた。

やよや待て山ほとゝぎす言づてむ
　　我よの中に住みわびぬとよ

思ひつゝぬればや人の見えつらむ
　ゆめと知りせばさめざらましを
戀わびぬしばしもねばや夢のうちに
　みゆれば逢ひぬ見ねば忘れぬ
百くさの花のひもとく秋の野に
　おもひたはれむ人なとがめそ
あはれてふ事こそうたて世の中を
　思ひはなれぬほだしなりけれ

流石女の人知れず思ひに泣いた涙の跡が見えるではないか。

わたつみのみるめは誰か苅はてし
　世の人ごとになしといはする
よそにても見ずはありとも人ごゝろ
　わすれがたみを見つゝしのばむ
いとせめて戀しき時はぬば玉の
　夜のころもをかへしてぞきる
夢路には足もやすめずかよへども
　うつゝにひとめ見しごとはあらず
はかなくも枕さだめずあかすかな
　夢がたりせし人をまつとて
宵々の夢のたましひあしたゆく
　ありても待たむとぶらひにこよ
妻戀ふるさをしかのねに小夜ふけて
　わがかたこひをありとしりぬる
難波江の釣するあまにわかれけむ
　ひともわがごとそでやぬるらむ

こんなにして小町は人のほのみる事もゆるさぬ戀を心に秘めて、胸に抱いて過すうちに世の人の心の花のうつろふのも見た、たのみ空しき世の中も知つた、蜜の香を慕ふ樣な人々はかひない處へこりずまに寄つて來ては、うらみ言を殘して去つた。彼女の浦にはみるめはなかつた、萬一彼女が人妻となつたといふ一說が事實とあつたと假定しても、彼女は自らを保つてゐたに違ひない。一般には信じられなくても、ためしがなくても、小町自身には何でもない事である。その爲に月並の男の心がつひにとゞめ得られなかつたとしても

是も又ありさうな事ではないか。

秋の田のかりほにきぬるいながたの
　いなとも人にいはましものを

みるめかるあまのゆきかふみなと路に
　なこその關をわれはすえぬれ

名にし負へば名をなつかしみをみなへし
　をられにけりなわれがなだてに

ともすればあだなる風にさゞなみの
　なびくてふごとわれなびけとや

あまの住む里のしるべにあらなくに
　うらみむとのみ人のいふらむ

うきことをしのぶるあめの下にして
　我がぬれぎぬはほせどかわかず

この可憐な運命の謎を小町は、誰にとかるゝのであらう。

絶えて久しい少將に歌を贈つた時の事を、小町は自らかう書いてゐる。

　いそのかみといふ寺に詣でゝ日のくれにければあけてかへらむとてかの寺に遍照ありときゝてこゝろみにいひやる。

岩の上に旅寐をすればいと寒し
　こけの衣をわれにかさなむ

返し　　へんぜう

世をそむく苔の衣はたゞひとへ
　かさねばうとしいざふたりねむ

小野小町はつひに尼になつたと云ふ。

私は小町が大好きである。小町の歌に、

花咲きてみのらぬものはわだつみの
　かざしにさせる沖つ白浪

はなのいろは
うつりに
けりな
いたづらに



わがみ
よにふる
ながめ
せしまに

婦人が聲樂家に適する理由

澤田順次郎

婦人方の婦人に關して研究すべき問題は、甚だ多くありますが、是れまで發表せられたものは、主として家事に關する實際上の問題で、婦人の目的だとか、教育だとか、世帶の持ち樣だとか、交際の仕方だとか、子の育て方だとか、或は處女の心得とか、妻の心得とか、其の外禮儀、作法、料理、裁縫から遊藝等、あらゆることにまで研究が行き屆いて、居る樣ですが、一方身體上に關することを見ると、これは前者の割合に開拓せられて居りませぬ。それで予は斷片的ながら並に身體上に亘ることで、面白くもあり、又爲になると思ふことを述べて見る意で、先づ聲樂家としての婦人に就いて述べます。

柴田環女史が聲樂の天才だとか、日本一だとか、今度同女史が帝劇を退いたに就て、其の跡に代はるべき聲樂家がないとか、再び環女史を復活させるとか、甚だ心細いことを新聞で傳へて居りますが、果して日本人は環女史と並ぶ聲樂家がないでせうか。

それは兎も角もとして、何故帝劇では男の聲樂家を採用せぬであらうかと、訝かる人もあるでせうが、これは矢張女でなくては面白くないことがあるから、止むを得んのです。と言ふのは何も美人を標榜して人氣を引く爲の計略でもなければ、環女史に限つた譯でもないのでせうが、他の技藝は別として、聲樂丈は女でなければ、何うしても眞の樂聲が出ぬから、女の聲樂家を探すものと思はれます。男にも隨分聲の美いもの

もありますが、併し女に比べると、一歩も二歩も劣つて居ります。

それで聲樂家に、女の適當する理由を知るには、先づ女と男と其の聲に差のあることから申さなくてはなりません。男の聲は太く濁つて、女の聲は鋭く淸くあることは、人の皆知る所で、一寸聞くと、男の聲は高く、女の聲は低い樣に思はれますが、これは男の聲は濁つてるから元來は低くとも高く聞え、女の聲は淸いからもとは高くとも細く聞えるのです。之れを譬へて見ると、男の聲は破鐘を叩く樣で、女の聲は鈴を鳴らす樣です。能く女の聲を黄色いとか金キン聲とか申しますが、これは寧ろ女の特色です。

斯くの如く男の聲と女の聲とは根本に於て異つて居るから、其の聲を聞けば、其の顏を見なくとも、直ぐに彼れが男、此れは女と識別することが出來ます。そこで男女の區別の中で、音聲は故意に之れを變化しなければ、確かに區別の標徴となります。

聲樂上より男女の音聲を論ずれば、各々之れを二種に分かつことが出來ます。其の男子に屬するものは低音と次中音とで、女子の音聲は中音と高音とです。低音とは音律上下二點十二律(ヘ)より十二律(バ、ル)に至る間の音で、次中音とは下一點十二律(バ)より無點十二律（ハ）に至る音です。又中音とは下一點十二律（ヘ）より上一點十二律（バ）に至る音で、無點十二律(バ)より上一點十二律(ハ)に至る音は高音です。

女子の音聲が、男子の音聲よりも高きことは、是れで判明ります。尙男女聲帶の各一秒時間に於ける振動數を示せば、次の如くです。

	音階	聲帶の振動數
男聲	低音	八二、五 — 三二九、七
	次中音	一四八、五 — 四九五
女聲	中音	一九八 — 七〇四
	高音	二六四 — 一、〇五六

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

面白いことは、音聲は生殖器と關係して、一種の性的作用を有することです。小兒の際は男女とも同一で

すけれども、發情期の頃に至れば、男子は其の喉頭大となり。殊に甲狀軟骨即ち西洋でアダムの林檎と稱するものが、著しく前方に挺出して目立つ様になり、随つて音聲が太く濁りますす之れを俗に聲變りと申しますが、女子の聲は此の頃から却つて清く愛らしくなります。

斯様に音聲は生殖器と關係を有するに依り、生殖器に異狀があると、音聲に變化の生ずることは、久しき以前から人の知る所でした例へば男子にして、其の睾丸を截去するか、或は之を毀損して役に立たぬ様になると、其の音聲は細くして恰も女の如く、單聲のみでは、其の男なるか女なるかを判斷し難くなります。女子も或る病氣で止むを得ず其の卵巣を切つて了ふことがあると、其の音聲は太くなつて男のに似て參ります



それで昔歐洲の或る地方で、聲樂の名手を出さんが爲に、男兒を去勢して、之れを養成したと云ふことです。さうすると其の男兒が成長しても、音聲が小兒の時と同じで、何時までも清く美しいからです。

さて是れから少しく發聲器の構造を説いて、男女の音聲に差ある所以を述べようと思ひます。

人の發聲器は喉頭の前部に存する甲狀軟骨から、後方に位する胚狀軟骨に向つて、斜めに橋渡しにかけた一雙の靭帶で、左右相對して居ります。聲帶と謂ふのは、卽ち此の靭帶のことで、其の中間の狹い空隙は聲門です。此の聲門は呼吸の際空氣の出入する所で、平常は廣く開いて居る爲に、空氣は唯だ此の間を通り拔けて行く丈ですが、物を言はうとすると、其處に存する一定の筋肉が收縮して、兩聲帶を接近せしむるので肺から出る氣流が、強く聲帶の緣邊に觸るゝこと、恰度笛を吹く時に、息氣が竹緣に觸れて、音を發すると同じく、聲帶を振動して茲に音聲を生ずるのです。

發聲器は男女固より同一ですが、然し聲帶の長短は等しくありません。ランドアと云ふ生理學者の說に依りますと、女史の聲帶は弛緩的には十乃至十五ミリメートルで、緊張すると少し延びて十五乃至二十ミリメートルとなります。然るに男子の聲帶は弛緩的とは十五乃至二十三ミリメートルで、緊張的とは二十乃至二十五ミリメートルです。聲門も此の長さに準ずるもので、女子に於いては弛緩時は十七ミリメートルに緊張時は二十ミリメートルで、男子は弛緩時にありて二十三ミリメートル、緊張時には二十七、五ミリメートルです。女子の音聲の比較的高いのは、全く聲帶の短きに依るもので、聲帶が短ければ緊張の度自ら強くして、高聲が出來ます。便利の爲に聲帶及び聲門の長短を表示すれば次の如くです。（單位ミリメートル）

		女	男
聲帶	弛緩時	一〇—一五	一五—二三
	緊張時	一五—二〇	二〇—二五
聲門	弛緩時	一七	二三
	緊張時	二〇	二七、五

小兒の聲が大人に比べて高いのは、聲帶が短い爲で小兒の聲と女の聲とは同調子です。然るに妙齡の頃から變ずるのは、前に言ふ通り、喉頭が發達して聲帶が長くなるから、反比例で聲の方は低くなつて行きます。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

それで、人工的に喉頭の形を變じて適宜に聲帶を弛

張せしむると、種々の聲が出來ます。これは俳優や講談師や義太夫語りなどの常に應用する所で、最も能く聲を使ひならす者は、一人で五人も八人もの假聲を使ひます。八人藝といふのはこれで、啻に人間の聲ばかりでなく獸や鳥の聲を眞似る者もあります。一つの喉頭から斯う違つた聲の出るのは、何う云ふ譯かと言ふと、唯だ喉頭の變化であるのです。即ち細い聲を出す時は、喉頭を成るだけ後の方に押し附けて、聲帶を引き緊め、又太い聲を出さんとする時は、其の反對に喉頭を前の方へ張り出せば出來ます。女で男の聲を使ふ時も之と同じです。然し何と言つても自然ほど旨い聲はありません。假色では何處かに足りない所がありますから、男は何れほど習練しても、眞に女の聲が出來ません。それで天然に美しい聲と言へば、前に申した通り女に限ります。此の點に於いて、女子は確かに聲樂に成功する素地があると謂



ふも誣言ではありません。環女史の天才なるものも是が爲で、西洋でも聲樂家は男よりも女に多くありますけれども唯だ素地がある許りで之れを練習しなければ良くなりません。すべてのことは練習に依つて發達するものですが、取り分け聲樂は練習を積まなければ出來ません。

然らば何うすれば聲樂家になれるかと言ふに、先づ聲樂家の資格を心得ることが必要です。これに三要件があります。即ち

第一　高音なること
第二　清澄にして濁らざること
第三　長く連續すること

是れです。如何に聲が美でも低くては駄目です。聽衆を感動せしむる聲は高くなければ不可ません。然し又聲ばかり高くても錆びたり澁かつたりしては、尚更不可ません。美音とは清くして澁味のない高音で、此の二點さへ完全なれば、先づ聲樂家の資格があると謂つて宜しい。併し聲が續かないで、途中で切れ〴〵になる樣では、これ又缺點です。

それで聲を高く美にするには、何うすればいゝか。これは他日に讓りて玆には第三の長く聲を持續させることに就て、お話を致しませう。

* * * * * * * * * *

さて聲を長く持續するには、身體を健康にして、胸廓を發達せしめなくてはなりません。胸廓を丈夫にするには、矢張食物と全身運動と、呼吸運動とが必要です。食物は成るべく滋養分のあるものを攝り、運動は規則正しく適度にするのがいゝです。過激なる運動の大害あることは申すまでもなく、緩慢な運動でも長く續けるのは宜しくありません。

規則正しく適度の運動は胸廓を丈夫にすること勿論ですが、聲を長く續けるには、矢張練習が必要ですそれでは呼吸運動即ち深呼吸が適當ですが、普通の深呼吸とは少し違ひます。そんなら何う云ふ仕方で呼吸するのであるか。諸嬢の爲に秘密を明かしませう。

此の深呼吸は水を潜つた時、永く息をつかずに堪へて居る樣に、十分に吸收した空氣を長く肺に蓄へ、之れを吐出してからも、直ぐに吸收しないで、出來る丈肺を休ませて、然る後ち吸氣をすることを練習するにあります。恁うすると肺が強くなつて、呼吸が切れなくなる許りでなく、力のある聲が出ますから、長時間歌つても疲勞することはありません。聲樂ばかりでなく、演說でも講義でも辯論でも總じて聲を使ふ者は、手足を動かすと同じ樣に、疲勞するものですが、喋舌つてる中に早く疲れの來るのは、胸廓の弱い證據です。胸廓の丈夫な者は、其の疲勞の來ることは晩く練習を積むと、何時まで歌つても、喋舌つても途中で音聲の續かなくなる樣なことはありません。

それから音聲の震へることですが、これも身體の弱い爲に起る現象です。諸孃の知らるゝ如く、何か驚いたり、恐れたりすると、急に其の聲が震へて如何にも聽き苦しくなりますが、これは聲帶の振動が亂調になる爲です。詰り精神作用ですから、聲音を美しくしようとするには、能く心を落ち着けて、如何なることが起つても、動かざること泰山の如しの意氣込みで遣らなければなりません。爾ふ云ふことは一朝一夕に出來るものでなく、平素の行ひにあるのですから、精神修養は、一日も怠つてはなりません。

動もすれば、聲を美しくする藥はないかなど問ふ人がありますが、未ださう云ふ藥は發見せられません。予の實驗では聲を美しくするには前に言ふ如く、胸廓を丈夫にすることゝ、練習するとにあつて、藥などを用ひる必要はなからうと思ひます。尤も飲食物の中には發聲を助くるものと、害するものとありますが、すべて刺戟性のものは良くありません。特に酒、煙草は著しく害があります。之れに反して甘いもの卽ち砂糖を水に溶かしたものは發聲を助けるから、時々用ひるがよい。それから扁桃腺炎、咽喉加答兒、齒痛等の如く咽喉或は口腔の病氣は發聲を害するから用心しなくてはなりません。感冒、鼻加答兒、氣管支加答兒等も同樣です。

大川端より

大川端の女

大川端！　大川端ときいてなつかしいと思召す方がありまして？。

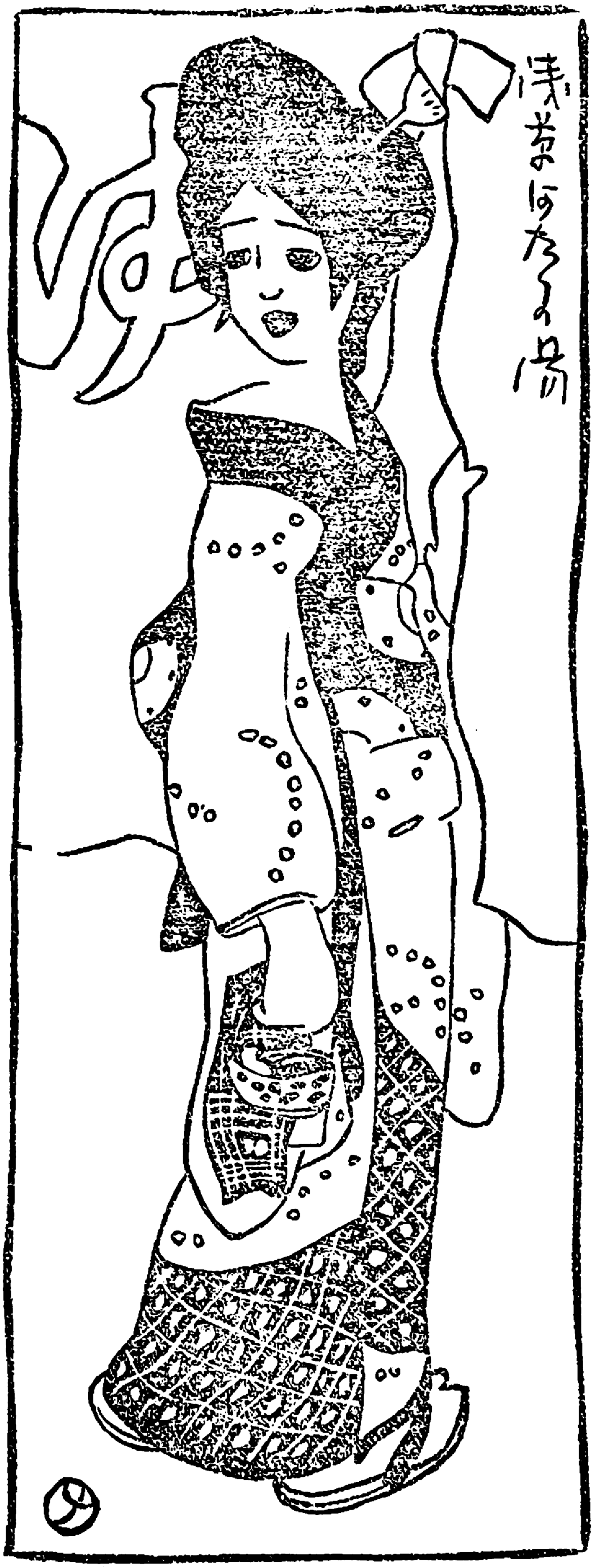
幾分でも殘つて居る江戸趣味を味いたさに、はた、やるせないこの胸をなぐさめ樣・毎夜追はれる樣に庭からそつとぬけ出ては、この川端をさまよひます。複雜した夕方の忙しさに、すつかり疲れてしまつた私の心のよい慰め場でございます。只、この河畔に生れたのをたつた一つの幸福と思ひます。

黒く濁つては居るが、却つて沈痛の氣を起さしむる川の面に並んだ多くの船の中から、ポカリ、ポカリと青や赤の燈火が燃えて、その光りはキラ〳〵と波に入つて紅の波をたゞよはせる。岸近くよれば蚊やり燃きつゝねそべつて居る船頭の多くを見受けます。さす月影にキラ〳〵と光るマストの上には、何處のとも知れぬ小旗がしづかにうなだれて、都鳥が時々來ては小旗の上に休みます。昔のノアの舟、ノアの舟に似て居るではありますまいか。未だ新しいK橋の欄干によつて月を仰いでは、或は唱ひ或は吟ずる若き群れの中をそとぬけて、右手の岬に佇むと、廣い廣い川口の彼方の沖に架せられた相生橋の中島の洋燈が、青い力ない光りを、橋に、川に、投げて、橋行く人が手にとる樣に見える。橋下を絶えず往來する大船小舟、ほんとに江戸名所の一つにかゝまほしき風情です。けれど、私の拙筆にはとても十分の一、百分の一も寫し得ないのが口惜しい。せめてもの願ひには誌友の方の一人でもこの景に接して、その才筆でかくれし景を書いていただきたい。

何時も何時もかうして同じ樣にこの岸に來て想ふその種も、岸の景色の變らぬ樣に同じ事を考へます。一態、人間と云ふ者は勝手なものですね。

いつもかういつて笑はれるのは私の常です。しかし其口からすぐ身勝手な事ばかり言つて、よい事一つせぬ所謂世ふさぎの人間なんですが、枯れても何でも青春十八！　世の常の少女ならば、自動車の、リングのとくだらぬ望も持つたかも知れません。けれど、小さい時から逆境に育つて來た身には、幾分かは母の苦心

の程もこの心にわかつてゐます。で、身はづれた望なと思つても見た事はありませんし、今の私の境遇としてそんな暢氣な事を思つてる程の心に空虚がないのです。日々の從事に追はれて一日一日と淋しい日を數へて行く私は、脫化せずして凡化してしまひました。次第々々に詩だの歌だのゝ美くしい世界なら追はれて、その義理とか人情とかの荒波の中へもまれて行くのです。美の世界の落第者は現實界の新入生となりました



そして、段々と歌も詠めず、詩も作れぬ、木偶の樣な人間になつたその時の私は、必らず世辭も巧に世渡る妙處も知つて卒業生となる事でありましやう。私の心は決してその日の來るのを待つては居ませんが、私といふものゝ境遇は早く早くとあせります。悲しいではありませんか。つまり、境遇に寄つて身をまかせて居るなら、不平も悲觀もありませんが、そこが人間の勝手な所、複雜した人生を不可解だのと叫んで死んだ若

人の轍を蹈む人も出來るのです。少しばかり得た教育が身の邪魔をして、盲從し樣とすれば聞き覺えの民法や刑法が口もとまで出て來る。從順なれといはれても常識や理想が手を廣げて聞かない。ずゐぶん自身をもてあまして苦しむ時もありますが、生きた教育はいやといふ程うけました。むしろ、順境に育つた中年の奥樣方より或は多くの活教訓をうけて居る?!と信じます。かうした家業の家に生れた身の幸か不幸か、人の見わけもつきました。うつかり人の手には乘らぬ女となつてしまひました。下宿屋風情の娘で感想など〻大それた事は申しませんが、この小さい帳場の隅から見て居ますと、幾十人となく人の心は千態萬容。輕薄と言はれる東京人も、情の深いと許される田舍人も、皆數多くあつかつてからの事です。ろくに人も扱つた事のない人間が、やたらに輕薄の、厚情のといはれたわけではありません。

ずゐぶん客などは勝手なものです。といつては失禮ですが實際勝手なものです。自分の可愛い〻子、妻でも思ふ樣にはならないのを一夜泊りの旅館の下女の一寸した失敗を目も光らせ聲も荒だて〻怒る人もありますが、氣の毒な性質ですねえ。日本はもちろん、アメリカの人も、ドイツの人もあらゆる人を扱ふその苦心はやはり人にはわかりますまい、並の人間の樣にぼかんとして居ては見る見る失敗してしまひます。二十餘人の女と男をつかつて、わづか二十に足らぬ私の細い手できり廻して行くのは少なからぬ苦みです。ですが、心の底には何時か希望の光りを求める時がありませう。でも今は苦痛です。といつてしなければ生活が出來ません。

まア、旅館や下宿屋にお泊りになりましても、低級の下女や娘達に深く包んでゐらつしやる心の奥まで見すかされては殘念でいらつしやいませうから、お氣をおつけあそばせ。人情學を學ぶにはこの上なき商賣。といつて決しておすゝめは致しませぬ。ならうといふ人もありますまいが。

「アヽ、暮れてしまつた。人の休む夕方は私の活動の時です。打水した庭の緑も涼しげに、夕顏も月見草も美しく咲き出しました。草といふ草、木といふ木、それ〴〵活動して居りますのに。アヽ私は四肢そなはつた人間でしたに。働きましやう、働きましやう。疲れた私の心もこの夕風によみがへりました。この緑に慰められて私は働きます。

無名婦人傳



（九）不幸の中にも良い子供を持つた爲に世に出た婦人

（和泉）西村野菊

子を持ちて泣く人の多い世の中に、私は子供達のお蔭にてゝまで成功いたしましたと、××の叔母さんはお自慢として、又若き人達の教訓にもと、或日ての樣なお咄をして下さいました。ある事情の爲に私等はとうに夫婦別を致しました。其時の私の決心は如何なる苦境に落ち入る共、子供達を決して手放すまじと堅く決心いたしまして、八人の足手まとひの子供を連れて、幾年住馴れし懐しき故郷を立ち退いて、東都に上りました、其の出立の當時、家道具一切賣拂ひましたが、何分にも失敗の上にも失敗をいたしました折柄とて、別に目新らしき品とてもなき事故、賣上代は極く僅少でした。詮方なくそれを持ちて旅立ちましたが、新橋に下車致しました時は、殘金僅に八錢五厘となりました、芝區には知己の人もありますので、其の人を便り、萬事の相談にもあづかつて、貰はんと、幼き子の手を引いてぼつ〳〵歩きました。私の後方から十九歳を頭に八人の子供は力なくぞろ〳〵と續いて來るのですから、人樣の眼から嘸可笑く見えたでしやう。小さな子供は電車や人力車の通行するのを見ますと、母ちやん車に乘ろうよとはては泣き出す、他の子供等はと

振り返り見ますと、常に歩きつけないものですから、各自ぴつこを引いて早や泣き出し相な顔、その時の私の心中の苦しさ、血の涙を流すとはあの樣な時の事でしやう、フト立ち留つて私は考へました、噫知らぬ他郷にて斯くゝ悲慘なる思ひするよりも、いつそ親子諸共死をと、むら〳〵と腦に湧き出し暫時茫然といたしました。姉娘は容易ならぬ私の樣子を見て、母さん何處が惡いの、それぢや早く行きましやう、〇〇さん迄行けば何とかして下さるでしやうからと勵まして呉れましたので、オヽさうだ、たとひ石に食ひ付くとも最初の決心を忘れてはと再び勇氣を出して歩き出しました。漸くに尋ねあてましたが、又もや落膽いたしました、軒傾いた晝さへ薄暗き長屋住居、疊はちぎれ窓は朽ちた三疊と四疊半の主人公だとは是は夢かうつゝかと、うたがひましたも道理、此の家とてもこゝ二年前迄は、洋反物問屋を商んで澤山の召使ひもあり芝區での屈指の資産家なのでしたが人の運命程はかり難いものは無いとつく〴〵思ひました、それでもお人好の〇〇さんは、心配なさるな、決して遠慮するに及ばぬと昔に變らぬ程親切に言つて下さいましたが、目のあたり悲慘なる有樣を見ては、親切にいつて下されば下さる程、居られなくなつて、家を借りる事に致しましたが困つた事には四圓五十錢の家賃と敷金も出來ないのでしやう、又世帶を持つにいたしましても、矢張いくらかの道具が入用ますので、着替として持つて來ました衣類を悉皆賣り盡しました、家をやう〳〵持つたので、飯炊き道具を買ひに行きました、極安い土鍋を下さいと申しましたらお內儀さん「是れですとへりが少しかけて居るので九錢にまけて置きましやう」と言ひますので、それと外に茶碗三つ求めました、やれ早く歸つて子供達に物を食べさせてやらうと、餘り急いで來たものですから、一寸の小石の爲に倒れて、大事の土鍋を割つちまひました。泣き面に蜂でした、又引返して買つて參りましたが、八合程しか炊けませんでした、食臺がないので、しきを臺にして、三つの茶碗一家九人の家族は三度に別れて食事をいたしましたが實に淺ましいものでした。何分食ひ盛りの小供計ですからまたゝく內に八合の飯は平げますので、又第二の御飯をたくのです、小供等は母さんどうぞあなた先に召し上つて下さいと頻にすゝめる、いや〳〵私は後で好いからお汝たちはゆつくりと食べるが好いと言ふ、每食事ゆづり合ひましたが互の心の淸さは巨萬の富を有せ

る紳士の家庭も迚も及ぶまいと常に思ひました、それから女の子供三人を電話交換局に務めさしましたが、毎日困りましたのは當時四つの末子でした、子供の無邪氣さ、家計の困難を知らないものですから、豆屋が來ると母ちやんお豆買つて下さいとせがむ、今お金がないから姉ちやんが歸るまでお待ち、姉ちやんは澤山持つて歸つて下さるよと一時のがれに言つて聞しますと、眞實にうけて、一日何度となく門口に出ては小さな首をさし出してまつのでしやう、噫歸つたとて月末でなければ金は持ち歸らぬものをと、僞りと知つたらさぞ落膽するだらうと思つ

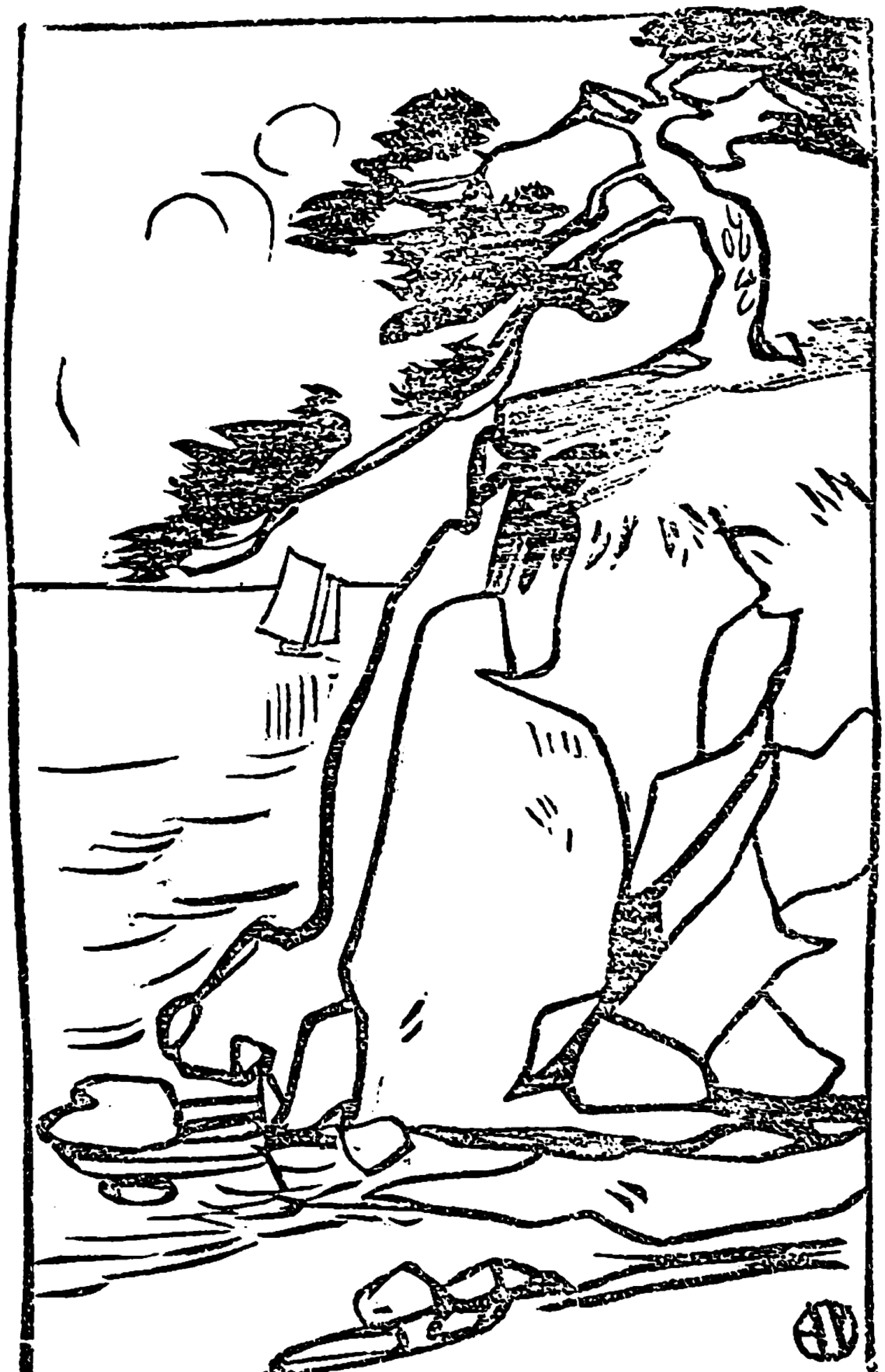


て、其れぢやねお君さん處へ行つて十錢借りてお出でと言ひますと、喜んで行きます、歸は喜んで門口から母ちやんお君さん處ではね二十錢貸してくれてよと大聲でどなつて來ますので、かべ一重の御近所へ聞えるだらうと、びくびく致しましたよ。又翌日になりますと、母ちやん妾におさつ買て下さいなとせがむので、又お君ちやん處で借りてお出でと申ますと、小供心にもさすがに毎度氣の毒と思つてか、今日はお君ちやん處へは行かないとよ、此の着物を屑屋に賣りましやう、そらこんなに破けてるねと穴の處を見せるのです。坊やはその着物一枚しかないことよ、是れを賣つちやこの寒いのに

裸で居なけりやいけないよと言つて聞して、それから千代萩御殿場の千松に話しを言ひ聞しますと、妾も千松だわ、母ちやん何にもいらないわと淋しい笑ひ方をしたので、私は感極まつて思はず抱き占めて泣きましたよと、當時を忍んで叔母さんけ泣かれる、私も共に涙に咽びました。

それから幸運の向いて來ましたのは、日露戰爭前でした、カーキ色の軍服下縫の內職が出ましたので、娘たちと晝夜の差別なく働きまして、日々二圓餘りの收金が出來ました、私たちは便所に行きます外、少しも立たないで働きますので、やつと小學校卒業いたしたばかりの長男は、すゝぎ洗濯と世帶をして呉れました小供達はみな骨身も碎かぬ計りに能く働いて、少しでも暇が出來ますと、母さん腰をもみましやう、妾は肩を叩きましやうと、私を能く勞つて呉れました。長男などは學校でも能く出來ました方なので、末賴しく思ひ、是非中學校へも入學いたさせたいのは山々ですが授業料は出來ましても、本代諸雜費に困るといふ體裁今暫らく我慢してお呉れ、屹度お汝の宿望を叶へさせるからと申聞しますと、イヽエ僕は二年や三年遲れましても宜敷しいから、母さんはどうぞ身體を大切にして下さいと、年に似合ない事をいつて、私に心配させないやうにするのです、而して晝は世帶小用使に追れますから、夜分になりますと、薄暗きランプの下にて一時、二時頃迄も、勉强いたしました。かうして日を送つて居ります中に、少し許りの蓄へも出來ましたので、下宿屋を營みました處が、幸ひにも日露戰爭當時とて、面白い程來客はあります。暫くの中に大變家計もゆたかになり、尙少し計りの貯金も出來てきましたので、やつと長男を中學に入れましたが、成績誠に宜敷、いつも優等で卒業いたしました、又海軍が希望なので、十七歲の少年にはちと困難しいだらうと思ひましたが、試に受驗いたさせました處、幸福にも入學が出來ました、そこで斯る商賣して居ては、長男の將來の體面にもかゝはると思つて、只今の商業に替えましたが、海軍學校の方でも、能く出來ました方でして、一番年少者でありながら、分隊長を拜命して居りましたが、本年首尾能く卒業いたしまして、只今は遠洋航海いたして居ります、又その他の小供達もみな〱中等教育を受けさせました、次男は矢張海軍志望なのですが、さあどうなりますか知ら、私が今日を安樂に送られるやうになりましたのは、全く小供達の陰です、子

實とは能く言つたものです、エ、皆で十一人の子福者ですが、打揃ふての親孝行者ばかりです、大臣がゐらひの、岩崎が金持だのと申しましても、幸福におきましては私は第一等でせうと何共言へぬ嬉し相な顔してニッコリ笑はれました。實に此の叔母さんは、見るからに雄々しき氣象が現はれて、人々の世話はあく迄もよくなされます、實に感心なる婦人といつも私は敬服して居ます「野にも山にも子は生んで置きやれ萬の藏よゝ子はたから」と云ふ俗謡も嘘ではないと思ひます。



(一〇) 氣むづかしい祖母に仕へた少女

(高知) 藤村紫草

私の家から西へ三軒目、棕に取り圍まれた藁屋根が秋さんの家です、秋さんの祖母さんのお吉さんと云へば町内では顔を知られた上手の髪結、手八丁口八丁立べき義理は明日の物に差支へても必らず立てる、其替り曲つた事は少しも赦さぬと云ふ仲仲物堅い昔風の人でした。

秋さんが八つ、弟の義さんが三つの時、父さんは病

で死にました。

家計は豐かではありませんでしたけれど、姑と嫁が力を協してかせげば、親子四人はさう不自由はせずに暮せて行けましたが、どう云ふ心の迷か、柔順で怜悧で仕事したと町内で評判だつた秋さんの御母さんは、月の薄暗い木枯吹く夜、お高祖頭巾に面を蔽み横町の松三と云ふ弟の樣な年若い男と、手に手を取つて逃げました、其時早普通ならぬ身體だつたと聞きました。

お吉さんは二人の子供を膝元へ呼付け、あの樣な不らちな女は親でもなければ子でもないから、今後道で行き逢つても決して言葉を交す事はならぬとかたく／＼誡めて、其夜すつぱりと籍をぬいて離緣してしまひました、それは秋さんが十二の冬。

物價の高い今日此の頃髮結の瘦腕一本で、三人の糊口を過して行くのは餘程六づかしい。

健氣な秋さんはまだ十一二の遊び盛を、朝早く薄れ行く星の空を仰いで牛乳配達。

祖母さんは毎日得意家を廻り、秋さんは學校へ出かけて行きますので、後には乳離れをしたばかりの義ちやんが、一人きり、幸に學校がすぐ前なので、休時間に一寸一寸と歸つて、弟の樣子を見、お茶をわかして義ちやんと一所に晝食をすませて、又學校へ出て行きます。

祖母さんの歸りはいつも夜に入るので、癇癪持の弟を遊ばすかたはら、洗濯から夕飯ごしらへ、一切の事を引受て、可憐らしい程忠實して立働くので、高知の某新聞へ二度も非常に讃られて掲載られました。

勉强も十分出來ませんのに、一二を爭ふ好成績、沈着て眞面目で、そして此の樣な逆境にある人に似ずのんびりとして無邪氣な子でした。

けれどお祖母さんは妙に毛嫌をして、一寸とも秋さんを愛しませぬ、其のみか、夜中に秋さんの悲鳴が手に取る樣に聞えて來た事も一二度ではありませんが、いつ見ても祖母さんには優しく仕へ、にこ／＼と笑顏をしてゐる少女でした。

夢から醒た秋さんの母さんは、今迄の不心得を非常に後悔し、昔の樣に二人の子供の世話がしたいからと幾度も／＼人を頼んで詫ましたけれど、すげなくはねつけてがんとして聞入れませぬ。

親思ひの秋さんは、一夜まんぢりともせず考へ明した末、祖母の膝に縋り付て、母樣の歸緣を迫りました、默つて何事も語らなかつた祖母さんはしばらくして

「赦してくれ秋!! 餘りに私ががんでであつた」

流石に氣の烈しいしつかり者の祖母さんも秋さんをだきしめてホロリッとしました。

翌日からは親子四人睦じ氣に食卓をかこんで笑ひさざめく聲が戸外に漏れてきます。

今年の三月學力優等賞、善行賞、功勞賞、精勤賞と無上の光榮を擔つて、江の口小學校を卒業し、目下師範學校に入學せんと日夜專心に勉强してゐます。

（一一）孤兒から生立て一家を持た後も内に夫を勵まし、外には慈善を專とした金物屋のおかみさん

（京都）壽賀子

此の人は決して高い敎育を受けた立派な人ではありませんけれど、この人の境遇は自然にこんな方へ導いたのです。おやすさん、年は四十餘り、ある金物屋のお神さんで御座いますけれど、この人の經歴はたしかに手本としては恥かしくありません。幼ない時兩親に死に別れて其の時十に足らぬ妹は親族へ引きとられておやすさんはあるお寺に小女として雇はれましたのはまだ十二の幼さい時でした。毎日洗濯やとき物をしては少しづゝ手習をしてはわづかづゝ文字をおぼえました。さうして十四五になつた時、自分は女である、女に裁縫が何より必要だとつく〴〵悟つたのです。そしてお坊主の着物を解いては見て熱心につとめました。二三年も後は三年五年師について習つた人よりもはるかに上手でした、それから間もなく今の夫に嫁いだのですが、その時その夫は慘めな鍛冶職人でありましたおやすさんは他所の裁縫をしてともに未來のために奮闘しました。追々と夫の業は運好く發展して來ましたおやすさんの胸には自分は孤兒だといふことが深くありますから、人を雇ふにも皆孤兒院からでした、院から引取つて學校へ通はしては、業を敎へます、だんだん業の基もしつかりなつて來ましたが、その夫は目に一丁の字のない人でした、おやすさんは一日疲れ果てた身も闘はず、何の樂しみもない夫に夜は新聞の隅から隅まで讀み聞かせ、時には講談や小說等を讀むでは聞かせます。夫とてももとより馬鹿ではありませんし自分は目に一丁字のないのを殘念がつて居りました、ことに發明界の事などをよろこんで聞いてゐました、そしてある時三日程火鉢の前にぢーつとしたまゝ考へ

込んでゐて、自分で一人こしらへて見ました、それは落ちても變へらぬつりランプつりでした、特許を受けて賣り出して、多く世に益しました。勝氣な夫とともに力を合はして、奮闘した幾年後の今日は多くの富を作りました。しかし夫婦の中に子はありません、孤兒院から十二三年前引取つた一人を家の後として、圓滿に暮して居ますけれど、世には二ついゝことがないもの、夫は中風性を病つて昔の元氣なくなりました、今は孤兒院から引受た四人の男子も、夫に別れし自分の妹の小供三人とを引取つて家事一切を切りまはして夫と二人の役をつとめます、急がしい中にも孤兒院や養育院のことにはどんなことでも盡してゐます。

現今の世には自分は立派な地位にありながら慈善等は夢にも思はず、只自己の果敢い虚榮心を滿足せしめて得意の婦人が多いのに、こんな美くしい心の人があるかと思ふと敬服いたします。

（一二）十六で大庄屋に嫁入り二十六で一家離散の悲境に泣く

（山口）卯花子

國と國との境にある高い峠の麓村、舊藩主樣の御分家があると云ふので、少し許りの士族屋敷に續いて、往來の旅人の宿場の樣な町が、流れに沿ふてありました。

清い小川がゆる〳〵と流れて、村端れになつて二つに別れ樣とする川邊にある家屋敷、東から南にかけて長い倉の三棟からは、いつも糀の匂ひがプン〳〵と漂ふて居りました、門口にある大きい銀杏の樹は、超然と雄々しい姿を見せて居ります。

その醤油屋の末娘に生れた叔母は、小さい時からの器量よし、鈴を張つた樣な瞳に地藏眉、色白の頰に笑窪を刻むで、房々とした黑い髪をかぶろに切つた幼い時分は、ほんとにお人形さんの樣だと云はれて居りました。

三つの時に母に死別れ、なつかしい乳房離れては不運の子と、父はまたなく可愛がりました、晝は遊びに紛れて欲しいとも思はなかつた乳の、さすがは夜の寂しさにつれ、抱かれて寢る父の乳房を夢現にさぐつては、父は涙の止度なく、あらむ限りの愛をそゝぎました。

翌くる年秋九月、父は不圖した風が元となり、僅か許りの病ひで、五人の子が泣き叫ぶ聲を後に、逐に朝

の露と消えました。
淋しい春秋は幾廻り幾廻り、色白細おもての高島田品よう、黒繻子に紅友禪の帯艶なる、叔母が十六の娘盛り、器量好しを望まれて村での長者元は大庄屋とかをした家に貰はれました。小姑があるではなし、親二人人好しとも云ので、大兄大姉は進んで嫁かせました振袖ながき十六の春の夜を、銀燭まばゆく人妻となつた叔母の、樂しい夢は暫くさめませんでした、獨り息子の嫁として初々しい若妻は、舅姑の愛を恣にしました、數多ある召使にもつひぞ顔を見せぬ樣、若い夫婦は離れの居間の奥深う



幸福な日を送つて居りました、翌年玉の樣な男の子を產み、御家御繁昌と、一家は上を下への大喜び、好きなもの食べねば乳が出ないからと、さらでも幼い子の爲に、あれよこれよと叔母は勞られました。
平和な月日は三年四年とたち、七年振りには叔母はもう四人の子の親となりました、其年舅は腦充血で卒倒し一言の遺言も殘すひまなく逝きました。
夫は亡き父の後を相續して、一家の萬事萬端處理せねばならぬ樣になりました、と同時に親掛りの時とは違ひ、金錢も思ふがまゝ自由となりました。

或年の春三月、若い人達の親睦會が、一里へだてた城下で開かれました、絃歌亂れて杯盤狼藉の揚句は、二次會とやら、蘭燈ほのゆらぐ門、歸ると云ふ夫の車は無理やりにおろされました、世なれぬ夫は美くしい女の甘い口に乘せられ、其夜から紅燈緑酒に親しむ樣になりました。

嫉妬は女の愼しむべき一と、夜毎日毎を家を外への遊びも、叔母は笑顏もて送り迎へしました、見て見ぬ振りの妻が心に、少しは針さゝるゝ思ひして、狹斜への足のゆるまむかと、願つた甲斐もなく、ます〳〵繁くなるのみでした

第一世間の聞えもあり、さほど御氣に召した靜香なら家にいれてと、たつての叔母が意見も、空吹く風と聞流され、せめては我が子に、「父樣今宵は坊が淋しいから、よそへ行かないで頂戴」と、夫の袖にすがらせば、「おのれが知つた事か」と、下駄音あらく出て行きました、これがわれに厚かりし夫かと、昔を思ひ今を思ひ、かよわひ叔母の涙は絶えませんでした。

一夜を金札幾枚、湯水の如く使ひ果しては、有り餘りし金もいつしか消え、家藏を抵當に諸方へ借金しました上、何百町の山や田は皆人手に渡りました、沈み行く我が家の有樣に、淺ましかりし我が亂行を思へど今更家の破滅を償ふ術の無きにつれ、自暴自棄となつた夫は「是ればつかりは先祖代々からの寶」と、叔母がとゞむるも聞かず、床の下にうづめられて在つた、大判小判さへも皆賣り盡してしまつた。

昔優しかつた姑も子の亂行には、お前の仕打が惡るいから息子の此有樣と、昔の榮華をかへすによしなき家の衰微に、はては狂氣の樣になり、大酒を煽つては罵りわめきました。

突然夫は借財の責にたへ兼ねて、行衞をくらまかしました、五人の子と狂氣の母を抱へた叔母は、夫を恨み不運をかこち、今の憂きつらきに泣かむより、いつそ消え果てむと思ひながらも、五人の子の行末を思へば、あゝ取亂したとはいへ淺薄な心であつたと、決然と震ひたちました。

程經て夫は米國に居る事がわかりました、情れなかりし夫淺間しかりし夫、ましては異郷に漂泊ふ身の、何に助けを求めましやう。

それ〴〵親族とも相談の上、家財道具を賣拂ひ少さい所に引移りました、叔母は其時廿六でした、身に餘る憂き悲しさに、さしも美くしかつた昔の面影もなく

憔悴れ果てましたけれど、猶殘むの色香褪せで、みだらな心を持つて近よる男のあると見るや、まさかの用にと銀簪はいつも頭から離しませんでした。

一家七人飢を凌ぐだけはと、取止めて貰つた田地幾反に、かよわき身を朝は早く乳呑兒負ひて田に働き、日の入るを待つて歸りては狂氣の母を勞はり、夜はまどろむ隙なき賃仕事に身を碎きました。

昔は人を使ひし身の、今は使はるゝ身の不運、あれが長者の御新造かと笑はれても、父なき貧の子のあの行狀と、人に後指さゝるゝは、此母の胸に鋭どい庖丁たつも同じと、五人の子を集めては涙ながらに、云ひ聞かせて居りました。

苦しき悲しき内にも、幾星霜を送り迎へ、一番大きい子は今年廿三の歳を數へる樣になりまして、叔母も幾分か安々と寢むる事が出來る樣になりました。

渡米して十三年、叔母の夫は昔の家名を揚げんとせず、儲ける金は酒の代に替えられて、放浪て居りますとか、我れに悲しかりし夫なれど、最愛の子の爲には現在の父、ましては末三人の子は父の顏さへ覺えぬ不運の子なれば、父と名のらせ喜ばしたければと、歸國の程をすゝめますけれど、未だ歸らうともしませむ。

是れから先何年待つたら、叔母の前に昔の亂行を詫びるでしやうか。

『無名婦人傳』原稿募集

本誌に毎號掲げて居る無名婦人傳の原稿は、毎號募集してゐるのですから、好い材料のある方は、投稿して下さい。

無名婦人傳は事實隱れたる美談佳話を紹介するのが第一の目的ですけれど、必ずしも美談佳話でなくとも、或る處の、或る婦人の經歷ならよろしいのです、但し何處までも事實に主きを置きますから、つくり話や、空虛は許しません、それだけは心がけて頂きたい。

餘り長い原稿は困ります、長くも百五十行以內、百行內外が尤も望ましい處です。二十四字詰に叮嚀に書いて、振假名をつけて置いて下さい。

掲載したる以上は、投稿者に輕少ながら金五圓以下金壹圓以上、正金でお送りすることになつて居ますから、原稿には必ず住所本名を書添て下さい



白衣の歴史

桂華

今更八年間の失意の歴史を繰返して、他人に迄一滴の同情の涙を強いようとするのでは無いけれど、我が心の徒らに苦しみ、徒らに悶える事の少なからんとを願ふて止まない私の爲に、今告白仕様とするてとを止めないで下さい、そして、死兒の年を數へるの愚を笑はないで下さい。

先づ八年を語る前に、少しく私の生立をお話しする事をも許して戴き度い。

私は今から廿一年前、結城紬で名高い下總の結城の或る町で生れました、父は其頃結城で一人の眼科醫で私は其四人の兄妹の末の子と生れたのです、私が二歳の時、父は停車場附近に其頃眼新しく見えた洋風の家屋を新築して其處へ移りました。屋上に避雷針の立つた瓦葺の白堊の家――。側に栗木皮で葺いた平家造りの病室が一棟。入院患者の少ない時は、祖母が一番奥まつた室に居りました事を覺えて居ります、其の入口には赤い綺麗な實の澤山成る棗の木が一本と井戸が御座いました、私はよく其下で熟した棗を拾つては玩具の手桶に一杯ためて喜んで居た事など思ひ出します。前庭と中庭ゝ奧庭と、庭は可成廣う御座いました。前園の築山に植ゑてあつた泰山木の白い大きい葩が、幼ない眼にも上品で御座いました。裏の畑をめぐらして四つ目垣に沿ふて枸杞が植ゑられて、葉蔭から青い實赤い實の覗いて居るなど最も懷しい思出で御座います斯うした中に私は八つまで育ちました、それから父は急に結城が厭になつたかして、其年千住へ引移る事になりました。又千住から笠間へ――水草を逐ふ群のやうに中一年を置いて再び茨城へ歸りました。此處で私の十四の春まで何事も無かつたと云つて置きませう、其六年の間、私の夢を守つた裏山のお稻荷樣も、庭の泉水の水も昔の儘で御座いますけれど、十二の年既に逝く可かりし私を、寢ねもせで看護つて下すつた我が父の俤は、永遠にかへす可くも御座いませぬ。

其の十四の初夏には又笠間を見捨てゝ東上せねばなりませんでした、父は府下三河島村に開業したので御座います、それが所謂八年前なので御座います、そこ

で父は私を九月の第二學期の始めから、上野新坂下の上野女學校へ入れて呉れました、恰度彼の學校が設立した許りの年で、生徒は漸つと八十人許り、華美な都の女學校には珍らしい質素な學び舍でした。

其時の同級生で今も記憶に殘る人々を擧げようなら日本橋の根本きん子さん、米川玉子さん、深川の長谷川さん、此方は純下町ッ兒らしく齒切れの良い東京語で誰にでもお前さん〳〵と呼びかける、前髮を深く切つて下げた可愛いゝ人でした。千住の櫻井壽子さん、伊藤さく子さん（私は今女子文壇の和歌欄で折々御名を見受ける伊藤さく子樣を此方ではあるまいかと思つて居る）三河島の伊藤いか子さん。先生では校長の小林先生、教頭の小西老先生、國語の森本樵作先生、其他習字の先生、圖畫の先生、音樂の先生、裁縫の先生……先生達の御顏はまざ〳〵眼の前に浮ぶのです。

三河島から學校への道すがら、上の級の田村さんが私の成績を、先生が、今の處五番位だと仰言つてならしつたとさゝやいた時、私はどんなに快心の笑を洩らしましたらう、嘗て都に出でない前、田舍の優等生は都の普通の生徒にも及ばないと聞いて居つた其言を、打破せでは止まない決心をきはめました、努力せよ、奮起せよ、そして首席を占めよう――。一學期遅れて小學校から割込んだ田舍の子は叫びました、心密かに――。それが私の學校を休むやうになる五六日前の事で御座います。

忘れもしない十一月の十三日、つひぞ床に就いたとのない母は、腰の悩みに重い病の床に伏す身となりました、母は若い内からリヨーマチスが持病なので、其時も其れと許り思ひ込んで、治療に手を盡して居りました、けれども益々重ふ許り、土地の醫師にも、兄の懇意な醫師にも二三人見せましたけれど、矢張りヨーマチスだらうと云ふ他は確固した診斷が御座いません、さうする内に病はだん〳〵進んで、身體は見るかげもなく瘠せ衰へ、日夜痛い〳〵と呻吟して、寢返りする事も出來なくなりました、人手はなし、女中は見付からず、詮方なく本郷の或る看護婦會から面倒の良い老年の看護婦を頼みました、其れから一週間許り經つた或る夜即十二月の十九日の夜です、母が幾分か快いと云ふので父は大變喜んで、珍らしく麥酒でおすしなどを食べて休みました、間もなく父は非常な腹痛を訴へ始めました、私は唯假初の事と思つて居りましたにそれが父の命を永久に奪ひ去つた恐しい病なのでし

た。看護婦は職務柄たゞならぬ病と見てとつて、私に人を呼べと命じました、寒夜を照らす物凄い月影を蹈んで私は同村の親戚の家に走つて、其頃下谷に住つて居た兄姉の許へ急を告げる事を賴んで、又元の道を歸つて參りました。

翌日朝早く兄や姉は參りました、醫と共に――。醫師は兄に何か囁くと兄は顏色變へて跡の事を醫師二人に賴んで、俥を何處へか走らせました、あゝ前夜から其日へかけての父の苦しみ！私はもう詳かに語る事は出來ませぬ、父が腹部は氷に冷やされて紫色に皷脹して居りました、私は其氷を求る爲に二度迄根岸に走りました、二度目に十斤の氷を提げて漸く家に辿り着いた時、明治病院の鳥井學士と、醫科大學助教授の鹽田學士とが父の枕頭に耳語するのを見て、如何樣に私は心を痛めたでせう。「手術……」「釣臺」……其れはこんな言葉を洩れ聞いたからで御座います。間もなく二人は歸られました。それから一二時間の後、釣臺の着する一時間程前、父は遂に不歸の客となりました。當時某師團に軍醫奉職中の長兄を除いた三人の同胞と、二人の醫師に守られて臨終は極めて安らかで御座いましたけれど――、母は終に其顏だに仰ぐ事は出來ませんでした、恐らく其前後すら辨へなかつたでせう。あゝ私は父の死に就いて餘りに多くを語りました、けれども許して下さいませ、之れが私の八年を語るについて最も大きな出來事なので御座います。

母は初七日の後、大學病院に入院して手術を受けました。病名は「內癰」と此時敎へられました。

母の重患……父の死……私は遂に女學校を退學れました十四の子の希望も抱負も此時限り滅茶〱に碎かれて、再び抱く可く何物をも許されない私となつて了ひましたのです。

あくる十五の春、母は目出度病院を退院しました。そして身體の漸く舊に復する頃、次に養はるべき長兄の許へ……東北へ九十里未だ見ぬ嫂の故郷へ旅立ちました、古へより歌に詠まれたみちのくの千賀の浦曲！思つたより賑やかな港の町で御座いましたけど、人氣の荒いなつかしみの無い處で御座いました、其とある町の黑塀をめぐらした嚴かな構への家！其處にわが三年の夢はつゝまれたので御座います。

頑固な、頭の古い長兄と、無敎育な冷たい血の人と、其等の人に能く似た三人の甥等とに依つて形造られた家庭の一員として、私は遂に學問する事を許されませ

んでした僅かに針持つ術は學ばせられたけれど——。彼の冬は暖かく、夏はひんやりと冷たさが襟元から流れ込む樣な、裏の穴藏の岩壁に倚つて、幾度不覺の涙にくれた事でせう、それは寒夜十二疊の玄關兼茶の間のランプの下に對座して、姉と共に足袋の底を刺した遣瀨ない氣分とゝもに、いつまでも忘れ難い思出で御座います。

斯うした中に二年の春秋は夢と流れて寒い東北にも花咲く五月が參りました、其頃から再び私は都の人となつて溫い姉の手許に又一年は更に短く過ぎ去りました、折から中兄の本署詰となつて一家を擧げて東京に引き移つたものですから私は又其方に引取られて半藏門に通つて居りました、其年も將に暮れようとする頃私は業を終へて府廳の試驗にも首尾よく合格し丁年未滿の假免狀を握つて白衣を身に着けるやうになりました。新らしい患者に接する每に、經驗の淺い身の胸を躍らせ乍らも馴るゝにつれて、他人の飯の味も知り、憂いも辛いも分るやうになつて、私の心は不用意の中に放縱になつて參りました。



けれども、さうした中にも私の懷中は常に淋しかつたので、友達との交際も自然うとく、何時も獨り除者のやうに取り扱はれて最後迄親友一人造りませんでした。

病院の十時過、病室から退けて來た皆さんが、ひそ

ひそ囁き合ふと其内の一人がコッソリ電話口に立つ、稍暫らく經つと滑稽た蕎麥屋の擔男が、「引部屋さんは此方で――、お待遠樣――」なんて引部屋の扉を明ける、待ち構へた二三人がお箸を半分づゝに折つて、掛蕎麥などをすゝる音がしのびやかに枕に通ふ時でも、私は蒲團を被つて强いて眠つた、斯うして私の友は居常我が預れる患者で御座いました、「引部屋に居るよりも病室に居た方が心安い」之がいつも私の心で御座いました。

斯うした人に容れられない性質の私でしたけれども足掛三年間他人のやうに鄉里から小遣を送つて貰つた事も無く、さりとて呉服屋に借金も造らず、些か乍ら母に小遣を送り得た事を私に密かに誇り、且つ自らに感謝して居ります。

或る時、フト病を得て會の寄宿舍の二階に呻吟して居りました折、友は多勢居りましたけれど誰一人慰める者も無く、病める人を看護ると云ふ人達に交り乍ら、不自由さに泣いた時、いつか家を思ふやうになつて、堪らなく母や姉が戀しく、たうとう行李を調へて兄の假寓に歸つたのは昨年の四月でした、彼樣して斯うしてと種々な想像を胸に描いて歸つて見れば思つた程でもない、矢張心に滿たぬ節が多う御座いました。

一里の道を裁縫の師に通つて、一通りの衣縫ふ事は覺えましたけれど、わが願ふ女藝の先端だに學ぶ事は出來ませんでした、けれどもそんな我が儘を云ふものおや無い、ひとりで自分の着る衣を縫へるやうになつた事をせめて兄姉のお陰と悦ばねばならない。

才なく藝なく價なきわが生……何の興味もない平凡な生活では御座いますけれど、之迄の境遇に比れば遙か安らかな生活では御座いませんか、「今」に滿足しなければ終に滿足すべき日は御座いますまい。私は無言の尊い事を知つて居ります。賢い女は多くを語らないことを知つて居ります。只多くを語る人が厭はしい、敢て淺學の身を以て、自分と同じ位の學力のある「人」を咎めるのでは御座いません――。

然し斯うした安逸は何時迄續くものではない、「今」は畢竟一時の肩休めにすぎない、早晚又前よりも更に大きい荷が私の双肩に掛るであらうと云ふ覺悟を持つて居ります、大いなる苦しみも來よ、悲しみも來よ、私は汝を恐れない。

私は現實は平凡である、そして私はそれに滿足して居ると云ふことを繰かへして申します。

八人同胞

初鹿野道子

父様と母様と奥で召上つて被居るまに、清と二人で茶の間に大食卓持ち出して、七人分のお膳立をする。薄玉子色の淡路焼の鉢に色のよいお茄子をつけ、キヤベツは別に線にうつて置く。私が煮物をつけてゐると芳子が先頭で皆出て來た。今朝は勝手がおそかつた兄様から順に、三郎芳子鈴子虎雄五郎不二子とやつと一廻りつけ畢つたと思ふと、
『文ちやん、お代り』ともう兄様が
『姉さま、何卒』『僕にも』『私、お汁を』『不二ちやんは御飯』
隨分賑やかだ。一時に云ひたてられると逆上せて終ふ、お夕飯には芳子等にも手傳はせるが、朝は學校があるから私一人だ。
『さあさあ、お湯の者はお出し、注いで上げるから』
お藥罐を持つて兄様がお廻りなさると、不二子はあわてゝ御飯の半分もあるお茶碗を出す。皆が立つた後は清に下げて貰つて、私は片隅でコソ〳〵濟す。
下女部屋で御飯の間に、勝手の黒板に今日の注文を書いて置く。
八百政。玉ねぎ、玉子十五箇、茄子胡瓜。
西川。挽肉一斤半(四時半迄に)
甲州屋。山吹酢五合、鹽五百匁。
奥に御挨拶にいつた者は又歸つて來て『兄様姉様いつて參ります』と云ふ。中學三年の三郎も一緒に可愛く頭を下げる。三郎には五十回券を買ふやうにキツチリ二圓五錢持たせてやる、終日持つてゐないで朝お買ひなさいと云つたが、門を出てから　聞えたかしら。
芳子は永坂へ、鈴子は小原さんと××小學校へ。
虎雄と五郎は内玄關に背嚢置いて、裏の廣場でボールやつてゐたが、高杉さんの聲であわてゝかけて行く不二子を母様にお願ひして、自分の受持の三間丈掃く清ぶきすますともう八時半。

初が勝手が片附いた樣だから、淸の洗濯のゆすぐのを手傳つておあげと云ひつける。私分業で各々キチキチするのも厭ぢやないが、自分一人飛んでもなく手が廻つて遊んでゐるのは嫌ひ。お互に助け合ふのは側の人迄氣持がよい。人にして貰つて横着になるのは其人が惡いので助けた人の害にならない。近所では僅か三人位で二人の下女を使ふ家もあるけれど、此大人數で書生迄で三人しかゐない。中井がお使ひの時は淸が默つて庭を掃く、勝手で初の忙しい時は私だつて芳子だつて、茶碗洗ひやお香物出しもする。鈴子は去年から自分のはだ着を洗ふし、張物も少しづゝ習はせる。三郎はぶつきらぼうだけれど取次をして呉れ、兄樣と中井と三人で雜巾の切れる程廊下をふいた事もある。母樣も初めの中は吃驚してゐらしつた。

郵便函には端書が二枚に大阪時事と市内特別で丸善から端書は、皆父樣あて。丸善のはオートストラップ安全剃刀の着荷廣告。

『米國へ持つて被居いな』と兄樣に云ふと

『十一圓も出せばまだ〳〵欲しい物があるもの』つて。

此頃お手慣しに毎朝シエービングをなさる、其れも食後おまけに縁側で大つぴらに。お鼻の下や眼の縁の危い所でチヨツチヨツと試し斬りをなさるのがお上手。お氣の毒な剃りあとにはミセスPだつてお驚き遊すだらう。ミセスPはミシガン大學の講師ドクターPの奥樣、今度あちらへ行くに就いて兄樣が寄宿させて戴くお家、迎へに出て上げ度いから着く時間は屹度電報で報らせて呉れと、一昨日呉れ〴〵お手紙があつた。

厭だと仰有るのを無理にすゝめて、今日は服でお出かけなさる。駿河臺の先生にお暇乞して高輪の阿邊さんへ寄つて來ると仰有つた。表玄關の大掃除を中井に賴んで、自分の部屋で五郎の白飛白を裁つ。

父樣十時お出まし、今夜六時から鳥居樣の送別會があるから、少し遲くなるかも知れないと仰有る。

一生懸命針を運んでゐると、母樣が御呼びだと不二子が來る。立ちかけてカチリ指ぬきを投げたまゝ急いでお部屋に伺ふ。鈴子の絽友染の袵つけて被居つた。

『何も用はないんですけれど、私一人で淋しいから、お文さんも此處で一緒にしませんか』と仰有るので、早速お引越して、種々なお話し乍らお午迄に、袖とあげだけ殘して縫ひあげた。いつか何かの雜誌で、夕刻から袖なし二枚綿入れ迄なさつた與謝野先生の日記を見た樣に思ふ。只針だけに心を集める樣にしても

此麼まだるい自分の手が恥づかしい、小さい子等の世話から三度三度の御副食物でしらへ迄、一々自分に懸つて來た二年前も全然母樣にお委せした今日も一寸も變らない。今といつて筆持つひまも無ければ、考へをまとめる心のゆとりも失くなつちやつた。

　十一時が打つとまもなく、五郎と虎雄が歸つて來る續いて芳子と鈴子がかへる。靴の者は只今と云つて置いて、靴下をとり荷物も側に片よせて、直ぐに其儘靴を磨いてしまふ、女の子等も着物を替へ顏を洗つた後でなければ奧へは來ない。是は兄樣



が御自身きびしくなさる。おひるは母樣も御一緒に召上るから、夜の一時間もかゝるのに引替へお客にいつた樣におとなしい。

　仕事がと切れたから、霧をふいて洗濯もの丶引のしをする手傳してゐたら、六番町の母樣のお實家から、お祖父樣がお惡るいから直ぐにと、急のお使ひが來たお顏色かへて『危篤なのかい〳〵』と使に仰有る。『其麼でなくても御老人なので、今と云へば今遇ひ度いと、一時もお我慢なさらないので——』

ときいて餘程安心なさつた。直ぐお支度遊して車でお出まし。皆で門迄お送りする。

『お父樣にはあちらから電話で申上げますけれど、何卒、お文さん、家の事をねえ』と繰返して仰有つた。二時半頃兄樣おかへり。阿邊樣は一寸のぬかりから徵兵猶豫が失くなり、市役所では卒業したのだからと聞かないので、一時取止めとなつたとか、よいお同行だつたんだけど。

まもなく三郎が赤い顏して暑い〳〵と云つて歸つて來る。兄樣と二人して井戸に下げて置いた麥湯を二瓶明けてしまつた。お腹が水で一杯にならないかしら。夜は注文の肉でカツレツ、瓜もみなどの手輕なものだから、淸と初にすつかりまかせて、芳子と私とお座敷掃除、芳子が四間はく間に小さいのもあるけれど七間二度宛はいてしまつた、中井が一人で廊下ふき、兄樣が御大將で五郎も虎雄も庭の水うち。鈴子も一緒にはだしの騷ぎだ、家の庭は掃くにも何にも面倒で困る、石河樣のやうにずー―つと芝生に花壇でもある文明的のぢやなくて、庭一杯に棚こしらへて松許りでも三百鉢の餘、柘榴や、樅や、萬年青なんか、一向花のないものばかり、緣日の植木店だつて兄樣も仰有る。仕方なしに子供等は裏の草原で遊ぶ。父樣の旅行先から來るのは皆苗木許り、歸つておいでると其儘庭にいらしつて、其れ〴〵鉢に移してゞ無くちや、私等のお土產も出して下さらない。

母樣からお電話、いつものはつきりしたお聲で、

『お文さん大變でせう、御苦勞樣ですわねえ、えゝお祖父樣はそんなお惡くはないのですよ、だけど久しぶりだし是非三四日ゐて呉れつて、祖母樣も仰有るんでね、今父樣にも申上げましたけど、まだ暫らくお文さんにお願ひしますよ、其れからあの雪子があなたに宜敷つて』

不二子が私の聲をきゝつけて來て、母樣にお話があるつてどうしてもきかない。抱きあげてやると大きな聲で『あのね母樣、不二ちやんは今夜おそく迄おきてゐますよ、いゝでせう』だつて、御返事もきかずさつさと行つてしまふ。母樣も笑つて被居つた。

麴町の祖父樣には私でさへ四度しかお目に懸らないけれど母樣の父樣だものやつぱし私等の祖父樣、早くおよろしいとよいけれど、雪子さんは母樣の末の妹、私より二ツ年嵩の、私などゝ比べもつかぬ美しい方、音樂學校へ通つて被居る。すまないけど私は氣が合は

ない。僅か五六度かお話した許りだのに。
お湯に順々に入つて、少しふくれた七時に御飯、久しぶりに私も一緒に賑やかだつた。
廣盆にのせて後始末のものを下げてゐた芳子が、勝手の板戸に當てゝ五郎のお茶碗のおきせにひゞ入れた
『不作法な、お氣をつけなさい』
と云つたけど、眼尻に一杯涙ためてゐる顔をみると、自分が泣き度くなつた。どうして芳子はあゝ弱いだらう。鈴子は一人で大きくなつてるけど、同じ血を分けた同胞の僻に、誰にでも遠慮してゐるやうな、家の子は皆召使には心切だが、分けて芳子は優しい。三郎が生れた後母様が大變弱くお成りなしてからだつたので、間もなく里子にやられて、里親が惜しんで五ッ迄返へさなかつた者で、他家の子の様だつた。やう〳〵母様に馴れるともうお亡くなりなさつて、其から私に許り頼つてゐる。不二子は全く今の母様になついたし鈴子は父様の秘藏子だし、後は男の子でよからうけど兄様がお留守の間ほんとにどうするだらう。



『今は只のお文ちやんで送つてくれたつて、四年も經つて僕がかへる時はミセスXに成つてるのだらう』つて此二三日前兄様が仰有つたけれど、芳子の事許りだつて、私には其麽氣になれない、同胞八人かうして仲よく暮

らすのも幾日かと思ふと、兄樣を送るのも辛い。氣樂相に云ひ乍ら兄樣だつて――。

明け放した八疊では、中井も一緒に皆頭あつめて大騒ぎ、兄樣があちらのお金勘定で困つて被居るのだ、あんな事で切手一枚買ふにも大變だ、氣のきいた汽車なんぞ發車してしまふだらうに。

五郎が持ち出した線香はな火を小さいものが寄つてたかつて、不二子も恐し相に先をつまんでゐる。三郎の吹くハモニカにつれて、細いとほる聲で芳子が大好きな佛國々歌を歌つてゐる。家で佛語をするのは此二人きり。なだらかな言葉が羨しいけれど、私がするなら羅典が習ひ度い、同じ外國語でも西班牙語科等に入つて、どうするかと思つた從兄は、今南米にいつてゐる。女なんてつまらないものだ。

茫然と一人籐椅子に深く深く腰かけて、いろんな事を考へてる中、淋しく樂しかつた二年前の此頃が思出された。

是れで乳母やと百合子さへゐれば、其頃のまゝだけれど、他家へやつてしまつちやつまらない。每朝私を追つては、いつでも乳母に抱かれて、三ノ橋迄きつと送つたくせに、此間日本橋くらぶで遇つたら、梅本の伯母樣が姉さまにおじぎなさいと仰有ると、泣き出しさうな顏して、伯母樣の後にかくれるんだもの。見ちがへる樣に大きくなつて、髮を眞中から分けて、可愛い純白な服をきてゐた。眞實の母と思ふかと可愛相だつた。

今夜がいつ迄も續けばいゝ。勿體ないけれど、母樣がおるすだと、何でも自分が爲なけりやならなかつた二年前のやうな氣がして、悲しくもなつかしい。

此麽にするのも僅かの間、後二週間足らずで兄樣は遠くミシガンにいつておしまひなさる。ことしのお盆は波の上でお迎へなさるのだらう。

『文ちやん、何を考へてるの、一緒におあがりな』

不意に兄樣がお呼びなさる。

竹細工の盆にのせて、淸の運んで來たガラス鉢には恥づかし相に水蜜が浮いてゐる。

『えゝ、有りがたう』

僅かに答へて立上つた時、意氣地のない泪がはらはらこぼれた。

涼しい風が植込を渡つて手洗の笹がさらさらと鳴る。



桔梗ヶ原（三）

太田喜志子

田植茱萸と云つて、早く既に赤く可愛いらしい果は銀色の葉裏に吊されたやうに熟し、土龍おどしが、螢とりの心を脅やかすやうに鳴る時分は、いつでも田植が終つて、甘草はおいらんの頭のやうな花を開き、栗の花は睡たげな晝に勁い香を吐き、遠い高嶺の雪も斑になつて青い朝明にはヨシキリがけたゝましく啼いて其の日の晴天を告げ、野茨のほのかに咲きつゞく土堤をへだてゝ水かひ場には、紫陽花色の霧の中に、栗毛が勢よく嘶いてゐた。

そして打ちつゞく田の面に針のやうな風の動きを見つゝ、私共もおそろひの浴衣を着せて貰つた。

農休みが來て、草山へ蕨とりにゆく人々には梅干を包む筍の皮ができ、廣く柔らかい槲の葉は、粽と共に新夫婦が里がへりの竈の子餅をかをらせた。

初夏に一度、秋に一度と定められたやうに、家内の女連れは蕨折りと茸狩とに、松林につゞく所謂桔梗ヶ原へ遊びに出かけた。

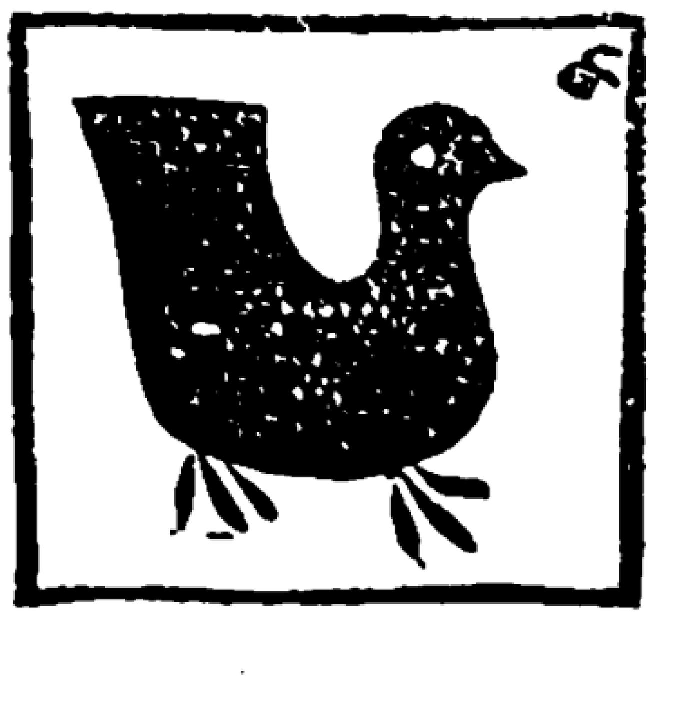
それも皆、祖母の指圖で、野原でお辨當を開くなどはどれほど嬉しかつたか。

そのほか決して單獨では出して呉れなかつた。

「いゝえ、女の子ばかりなぞ決してやりません、原には膽取がゐます、そしてあの隣村の婬亂野郎が隱れてゐて、お前達なんぞ行かうものなら、直ぐ捉まつて仕舞ひます、」と、にべもなく叱り付けた祖母の、すべてに几帳面な昔氣質が、何につけても恨めしく厭はしかつた。

それ故、兄も弟も一緒になつて、庭の古い松の下でさま〴〵、と遊びの創作に腐心した。

一夏、母屋の方は養蠶の忙しさに皆手古舞をしてゐる最中、土藏の二階で暮した私共は、内裏雛から、義



經、巴御前に至るまで、二目と見られぬやうな物にして仕まつた事もあつた。

蕗畑の廣い葉かげからは、露にぬれ〱、雲母のやうな翅もつ蟬が出れ出で、朝日が金色に露を染める時、朝顔の花はしづかに顫へ、すべての綠は生氣漲つて恰も深呼吸をしてゐるやう、庭つゞきの蓮池には蓮の葉が、上を亘れる松の枝をも越して尚高く銀の皿を並べ舊暦七月七日の星祭には、必らず其の露をば硯に受けたものだ。

あゝ、誰れが知つてゐやう……あの柘榴の花が眞紅に咲いて、碧梧桐の果がさびしく鳴り、ほのかな濕りを帶びてゐる朝の庭に立つて、蓮の花の咲くかすかな響をきゝ、靈ふるはした私の生命の秘密を……。眞、秘密であり謎であつた。

其の、理由知らぬ涙を見た七歳の女兒は、青い青い朝明の天地に對してはかなき、すゝり泣き、祈禱、それ等に依つて、生れながらの負債を忘れようとしたのではあるまいか、夕ぐれは夕ぐれとて高空を五位鷺が啼きわたり、足もとには曼珠沙華が謎のやうな色に映えてゐた。

九月が來て養蠶の忙しさも終り、稻は青い穗波を打つやうになつたらば、疊が青く匂ひ、葡萄や梨が大皿に盛られ、座敷が初めて落ち付いたやうに、秋草の花も床の間に挿された。

そのうちに蒼暗い松林を背後に、チラホラ幟が見え辻々には、燈籠の黒い枠がギーチギーチ鳴る村の祭禮が來た、が、私にはその年のお祭は、すべての物が黄色く光り、太陽は眞赤に笑つて焦げつくやうに足の爪先まで射し込むやうな心持がした。

幾日經ての事やら、目醒め心地に傍を見まはすと弟も寢てゐる、姉も…兄も…都合五人、十五歳の二の姉をはじめに、兄弟姉妹は皆枕を並へて悲しく呻く熱病に罹つてしまつたのであつた。

病氣がすこし怠つてくるにつれて物が珍らしく、知らぬ間に柿は色づき、鬼灯の赤いのまでがまだ不思議な笑ひをしてゐるやうに思はれて、漸く腰が立つやうになつたころは、すでに十月末で、豆の莢はカラ〱と鳴り、高い檜の梢に夕陽を浴びて啼く百舌鳥や啄木鳥が、何か言葉の種でも殘してくれるやうに懷しかつた。二の姉の黒髮が、桃割のまゝガックリと落ちて仕まつたのを眺めて、母も共泣いてゐた蒼い横顔は巡禮の子に似てゐた。

子供ながらに烈しい熱に苦しめられた身體は、全く恢復するまでにはずゐ分苦しい思ひを爲た。

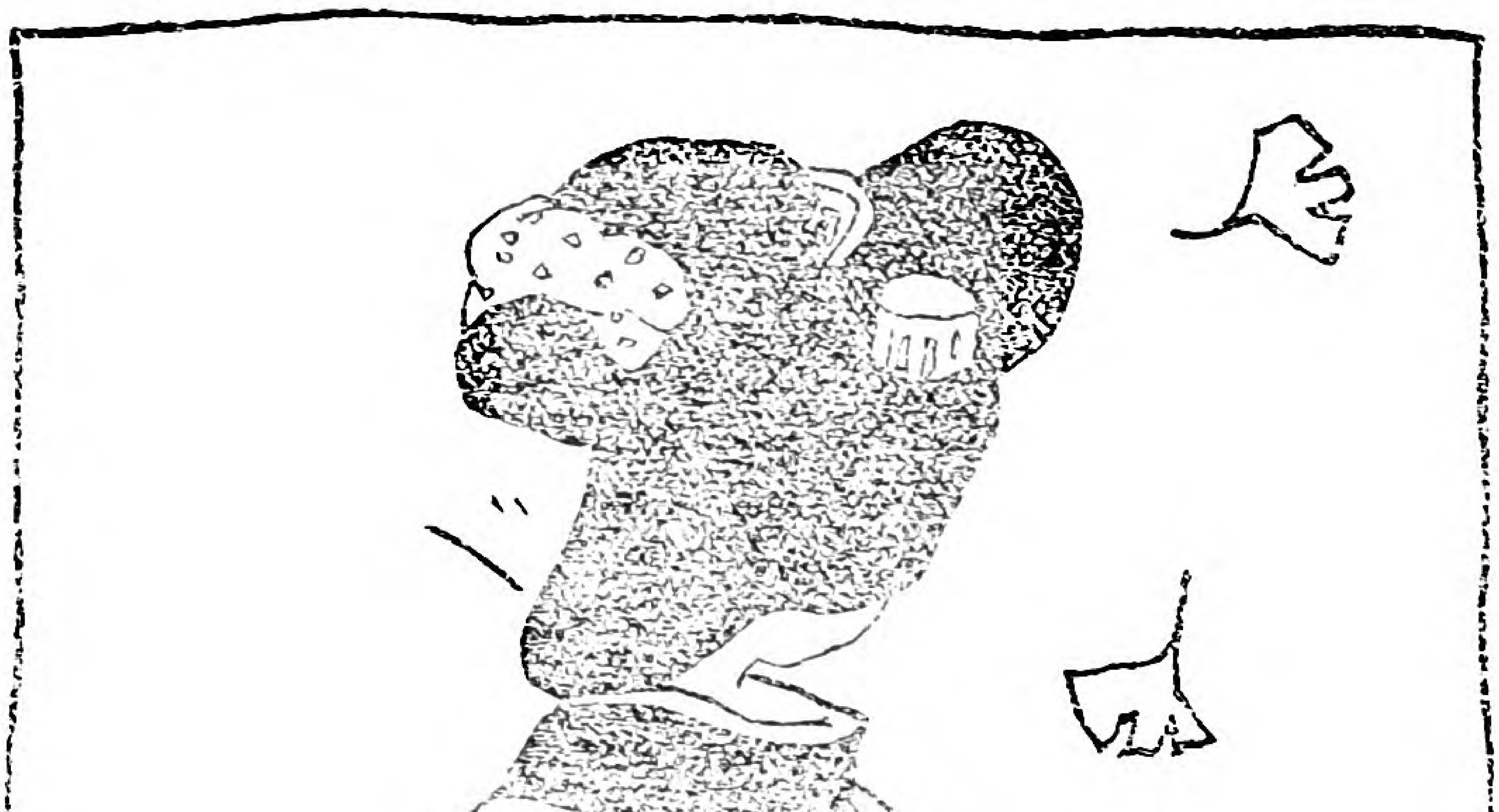
其翌年、五加木が悲しい芽を萠くころ祖母は突然に死んだ。まこと、容易く死んでしまつた。

生憎、母は流產の後で、恐ろしい貧血症に罹つて腰も立ちかねてゐる中へ――祖母の死は、あまり容易く襲つて來た。

ひきつゞき祖父は心臟病を患つた。

それや、これやで、我が古家は一層暗く憂鬱の影はほしいままにはびこつた。

病氣、死、などいふものが感傷的な自分の心の上に襲ふ事があまり急であつたためか、病後の兒童より以上に、變則な或る知識は發達し、狹いながらもある幻想界から追はれる事が早かつた。



まもなく小學の兒童となり、はじめて自分以外の不思議な世界に出た。

曇り日のある朝、登校の途中、遠く草山の燒けるのを見て此の世で一番最初に火を焚いたといふ處はどこの地であつたらう、どんな人間であつたらう、どうして火の始は出來たのだらう。

此世の中で、一番最初種蒔をしたのはどこの地でどんな人が爲たであらう、それを知る事ができたら、見る事ができたら、……と、そんな事を想ひつゞけて歩いた、

自分ばかりは、なぜこんなに、お喋舌りができないのだらうと、それぱかりがさびしいものに思はれた、思ひ出はなつかしいものである、そんな、さびしい眼をする幼い私の歩く路傍には、よくいろ／＼の羽蟲が居たり、小さい草花は、埃にまみれながらも頭を擡げてゐてくれた。

邸の隅には水車小屋があり、それに隣して製絲工場が在つたが、父が俄の失敗のため程なく取毀たれて仕まつた。

その火夫に、得、といふ男がゐて、冬春の閑散な時は雑博勞をして、さも暢氣らしく目籠を天秤に吊してブラン／＼とあの枯れた畷路を、風の日など殊におかしく隣村へと渡つた、その母親のおきぬは、若い年頃、はる／＼と、伊勢は松坂在から流れて來て、當時鎮守の杜の脇に一家を構へ、女一人の細い生活を立通して來たもの丶、漸く取る年波の心細くてか、それも同じく流れもの丶得をば拾ひ上げて愛しんで育てた甲斐もなく、其の男、大の、しれ者で、いつ知らぬまに盗みに爲て遠く常陸へ脱走し、まもなく重い熱病に罹つて死んで仕まつたといふ。

で、どこまでも獨者のおきぬは老いの身に似げもなくあらゆる勞働に從事し、あらゆる自我を燒きつくしてもなほ生命は亡びなかつた。

「得の餓鬼奴、生けてる生けてるツて事ですけれど、あの罰當りや、どうせろくな往生はしるもんぢやありましねエわ、」

「ふ、しやしら構ふもんか、俺や俺で、惡い事爲て置かなきや、人樣は看て下さる、昨夜も夢を見ました死んでゆく時にや、八間間口の家からお葬式が出して貰へるツて、ね、人間の一寸先は闇の世界だ、明日の運も判りやしましねェ。」

ある一年、秋も漸く嚴冬に移るころ、彼の女は眞に「生のどん底」を觀た、ゆく手に殘る悲しみを恨みもなく唯一の光明――死――を待つたが、その救ひの手は容易に降らなかつた。

斯くしておきぬは、其の年の寒さが解けゆくと共にもえさしの生命が蘇生つてゆくらしく元氣付いて來てまた夏を越し、冬を迎へ、奇しくも生きて來たが、齢のおとろへにも似ず、心は僻まず濁らず、不思議な女であつた。

――ずつと後、彼の女は矢張冬の日病み疲れて村の人の温情に生命をつないでゐたが、一夜、吊りランプ

からでも起つたのか、小さい家諸共燒け死んでしまつた。

雪の斑に殘つた燒跡には、黑焦の死體が、何神かの祀祠を抱いてゐたとやら——村の人々は丁寧に林の奥へ葬つたと云ふ。

＊ ＊ ＊

白樺の多い丘の彼方に、夕日を浴びて、いかめしく輝いてゐた家は叔父の家で、富雄だの八郎、敏、などいふ從兄がゐた。

野田の叔父さん、と云へば鳥打帽に背廣服を想ひ出す人ビス、グレー、バン、などいふ犬を伴れては、山へ銃を持ち出す人、雞を愛玩した



り、馬を飼つたりわざ〳〵田地をつぶして、氷床を造つたり、さま〴〵な事を起しては片端から癈めて、他へ〳〵と異つた事を爲る人であつた。

或る秋の日、庭園の瀧開きの披露をするからとて、父も母も招かれて往つたが酒宴の最中大騷動が起つた、叔父は醉ひつぶれて物の役にも立たず、居合せた親類の人達は、マアマアと事の委細を訊すまでは、ずゐ分なさわぎであつた。

奥の間に引きこんだ母は

「まア、何うしたんですつて、あの石は・・・・」

「實は、斯ういふ譯で…あの石のため、大變な事になつた、今はじめてゞはないけれど、そう、旦那のする事には口が出ません、呆れ返つて！」

「え？…まア…。」

「いづれ斯うなるだらうとは見えすけてゐました、エーエ、どうでも成るやうにしきやなりません、今度だつてまた、五百や六百は出さなきや、片付きッこないでせう」

「何て無鐵砲な事をする義兄さんでせう」

「それがねエあんた、一體あの石といふものは、窪村で由緒ある、君石とかいふ石だつて云ひますよ、そんなものを、さ、ね、無斷つて持つてくるなんて埒もない事があるもんですか、それも夜のうちに、あれからの道程を運搬んで來るんですもの、大方八足の二十人も連れ込んだでせう、さうして夜から彼處へ据ゑてんでさ、やれ飲め、やれ唄へッて、…幾樽底をたゝいたかわかりやしませんわ」

「…………………」

表座敷の方からは

「エヽ、昔ならお代官樣で押し通せたでござんせう、…が只今ぢや…」

「さうらまた始まつた、お代官樣の旋言が、醉ふといつでもあれで押し通すんだから…」

と起たうとする叔母をまア〳〵と母は引きとめた。

八郎さんや鐵三さんは、目につくあの白い指で白蠟細器に餘念なかつた睫の長い眼を上げて、「きいちやん面白いや、見に往きませう、ね、」と私はその平氣さ加減に目をみはッてゐた。

ある夜、その叔父は、突然戸を叩いて父を起し、「どうかこれを賴む」と、幾本かの簞笥を下男に運ばせて、ピンと錠を下して置いて往つた。

それからまもなく、叔父夫婦は東京へ出て、寒天の取次をすると云つたが、

あの從兄達は今、どうしてゐるだらう、消え失せたものゝやうに消息を知らぬ。

白樺の丘の家は、いつのまにか見えなくなつた。

そのをばさん、といふのは日本橋邊の賣ッ妓であつたといふ。

* * * *

秋になるとよく私は落葉のカサ〳〵するあの丘を踰えては、菊と、カナリヤの雛の籠をさげて、お祖父さんのお使ひに行つたものであつた。



廣島地方の俚謡

廣島縣　葵の花

當地では盆踊の歌は昔からあり來りの、鈴木主水だとか、八百屋お七だとか云ふ樣な長ものをくどいて踊つて居ます、田植歌も思ひ切つてわいせつなじつ〻きいて居られない樣なのを平氣で歌つて居ますが、中には一寸面白いのもあります。其の内二つ三つ左に上げて見ませう。

「音戸の瀬戸を切り開いた清盛公と云ふ人は、日の丸の扇を持つてお日を招き戻した」、

「宮島のみこしの鈴が音戸が瀬戸迄きこえた、ようもようもきこえたよ、音戸がせとまできこえた」、

「海船の帆の上に羽根の白いとりをる、口はにしきにしようれんげ羽根の白いとりをる」、

「金の幕の張られたのへ風がぱらり吹きかけた、風がぱらり吹きかけて中の殿が見たいよ」、

「天ぢくでは蓮の花、花からでは牡丹げの花、日本では櫻花これが花の王とやら」、

これは上の一節を誰か一人音頭出して下を衆人和して唄ふのです、次は子守歌です。

ねんねこさんねこ酒屋が子、さかやが厭なら嫁りさせう、嫁り道具になに〳〵か、たんすに長持挾み箱、これ程仕立てゝやるからにや、後へかへろた思やんな、後のやしきはやをやしき、やをいやしきに藏立てゝ、くらの前へ松植ゑて、松の小枝に鈴さげて、鈴がジャンジャンジャンなる時にや、お父さんもお母さんもおよろこび。

ねんねんやあてころやねんねん守やはどこへ行たあれはお里へ茶々呑みに、お茶々を呑んだら早戻れ、早う戻つて子をすかせ、子をすかさんにやいんでくれ、いんで何を食べようか、棚の端をかじりやあれ、棚のはしはかたいよ、かたけりやかたぎの實を食やれ、かたぎの實はしぶいよ、しぶけりやしぶ皮取つてくへ」

これらはずつと古くから未だに唄はれて居ます。

うしろ髪



野にふる雨

逢はじと思ひ極めたりしを、はからずも我その捨てたる道に立ち歸れば、別離の塚は脆くも壞れた。

なつかしき我組よ、遂々私は皆樣とお別れの期が參りました、私の親は飽くまで女として生きよと云ふ、藝術を前に小さき命を終れとは云はなかつた……と曾つて私はお話したことが有ましたね、いまそれが目前に切迫して了つたのです、……それで此度の事に就ても私は、何の意義も權式も有りません、全く昔の理想的な柳の枝の樣に靡きました、從順な女でありましたの、もう明日から當分お目に掛りませんが、いづれ最後にもう一邊辭職屆を持參がてら、心ゆくばかり御別れの辭を繰返す積りで居ります。私が這麼詰らない女であつたと御存じになつたら、屹度お笑ひ遊ばすでせう……私はもう疲勞れて了ひました、面倒な義理だの世間體だのといふ家にじつとして居られなくなつたのです。

這麼手紙をあとに、×××を去らうとしたが、遂ひに辭職を許されなかつた、同僚の涙やあつき上官のお志しが、私の肉に深く沁み徹つて、血管の血を湧きたゝせた、私はまもなく再び解きかけた袴を穿いて、出勤をした。

「あゝ被入つてね」と友の一人に聲をかけられると、もう堪らなく涙が込み上て來て、たゞ唇を顫はすのみ何の挨拶も出來なかつた。

「貴女が居ないと、淋しかつたわ」

「でもまあ、よかつた」

「本當に、無理でせうけれど、出來得るだけ務めて居て頂戴」

遂々私は皆樣にとりまかれた、中には何も言はないで、私の手を確乎と握つて泣いて下すつた方もあつた、あゝ溫かき歡迎！私はそも何等の力があつて斯くの如き知遇に逢ふの光榮あるか、と省みれば自ら耻しい事ばかりだけれど、現在たらはぬ身を這麼に思つて居て

下すつたかと、思ふと堪らなく嬉しいのである。

數ふると、私がこの事業にあること六年餘、一朝放擲つて了ふのも惜いけれど、さう云つて決して我命を終るまで捧ぐべき業ではなかつた。遲かれ早かれ別離の秋は期して居たのだが、現在かく及ぼして見ると、例の云ふ甲斐なき執着の絆、何時まで思はぬ道に逡巡するを自ら冷笑しながら、強いて此經路を脱するほどの決心が着かなかつた。

……月に入れば私は、わが處女の名を捨てねばならぬ、わが名！其貴かりける處女の誇よ、さらば、私はたゞもう、無言のうちにお前を送らうと思ふのである。果してわが纖弱き手、衰瘦たる肩に家庭てふものを荷ひ得るや否や……。其上私は依然として袴穿ちて日々通勤しなければならないのである。

○

うつゝなく軒場に立つと岐阜提灯の火影ありて、蚊が細く唸つて居る。

千駄木あたりも近頃開けたるもの、わが陋屋と眞向に、煉瓦塀あり、高き小山より水道の瀧落つる仕掛けで、大かゝりの湯屋が新築されゐ、少しく濕ひ持つた夏の夕に、檜板欅板の香新らしく、狹てましい中に眞黑な煙突が巨人の樣に、すつくりと立つて居る。

夕雲はさながら、薄鼠の布張りの樣にふくらんで、少し風あり、釣忍の風鈴の涼さを呼ぶけれど、汗は心地惡く浴衣を濕す。

人が私の樣な運命の折柄、現在か未來か知らず、樣々なる空想に耽るべきか否や、私は何の思ふ事もなし何の感應もなし、全で路傍の石の如く冷やかである。處女を讃美すべき宿望もなく、心を飾るの色彩も無いたゞ閉ぢ籠められた、封建時代の道德其儘、親より命ぜらるゝがまゝ、一日々々と運命の定まるを待つのみ……。娘より妻への過渡期をば遠くの人の身の上の樣に、傍觀的の態度なるを……たゞ私が性質と知れ……我家の空氣は重苦しく私を壓迫した、筆に親しむといふ心持が、だん〳〵遠く放れて行く、而して夢中で逃遁の巷を尋ねてばかり居た。

長屋の庇合に群つてる蚊が、時々襟や顏にぶつかつて來る、溝の臭ひもすれば、軒別に木切れや杉葉などを焚いて蚊を追ふの火影が、古障子をいぶして、如何にも熱苦しく感じられる。

其濁り切つた、じめ〳〵した空氣を、私は寧ろ心よく呼吸つて、石炭殼の道を踏みながら、いつでも古い

燈の暗い寄席の前に立つのであつた。

この寄席は丁度、鏡花の「三味線堀」にある樣な恰好で、紅框とつた行燈には朧ろげに、演藝大會と讀まれる、本當に其邊からお腹の赤いやもりでも這ひさうな……。私はよく横手の板塀に身をよせて、内から洩れる、鶴賀の新内を聞くのである。

義理や恩愛や、まゝならぬ戀を泣く、甲斐ない世上の述懷が、しんみりとした三味線に搦んで、噎び泣く如く私の感應に迫つて來る、と、込み上る樣に悲しくなつて來て、淨瑠璃の中の女性が本當になつかしくなつて堪らない、けれど畢竟私は、さうした柔しい情調を洩らすべき女には生れてなかつた、さあそれが矢も楯もなく悲しくなつて、胸を掻きむしる樣な思がする、時々暗い處で泣いてるのを、母に發見だされた。

私はいま、空虚である、利害得失を判ずる理性もない、全く逃遁の巷へ走る積りでゆく、其巷は果して私に適するかどうかはまだ疑問である、明るいとも思はなければ、美しい花園とも觀じて居ないのである。

何もかも朧ろげなる夕まぐれ、我門の往來は俥も並ぶことを得ぬほど狹かつた。

夕涼みの人が幾組も通る、白地飛白の男、中形の袂つらねし女、意味もなく私は羨ましいものに眺めた、菩薩わが心に化生せしか、この折、男も女も、生なき四邊の物みな、悉く美しいと思つた。

偶と彼方の人の上を思つて見たが、依然わが心は根本から石の如く堅く――冷たく――。

K樣より御祝だと仰有つて、朱塗りの香箱を頂いた。家の中には簞笥がある、長持がある、千草の油團が異樣に感じられた。

奈何してたか、私は這麼身になつて了つたのだ、私は空に逃遁るべき巷を畫かうとした、と其輪廓の一端に大きく母の顏が映つたので、もう何もかも厭になつた、其處へ、べつたりと坐りくづれて、

「阿母さん、阿母さん……」

と叫びながら罠にでも篏められた樣に藻掻きながらしく〱泣き出した。

私は早晩、唯一人放れて了ふのだ……。

○

關の小刀身は細けれど　　椰苴美那子(報)
切れた思ひは深でざる
關と小倉とたすきにかけて
縞を織ります巖流じま

若き婦人の旅行記



高原より

▼高原の草花
▼高原の牧場

平塚白百合

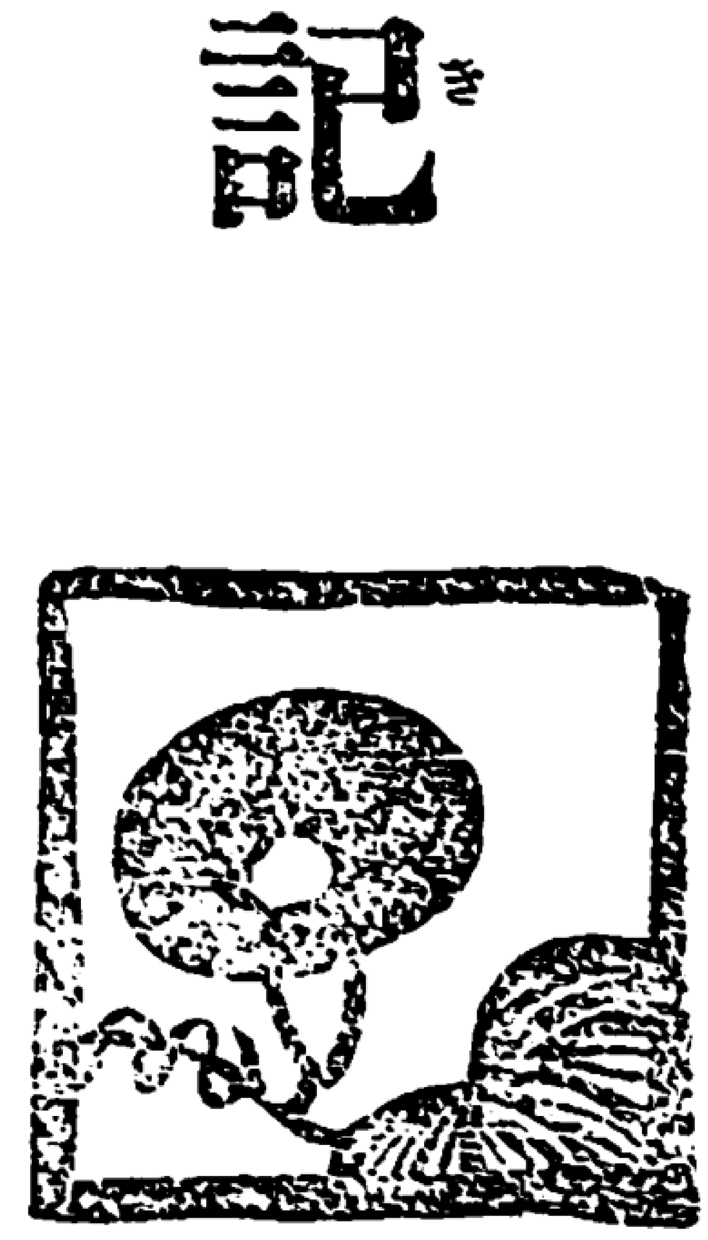
雨上りの地面からは柳の花のやうな青くさい草息がホッホとくゆつて、高原の草原は牛の背のやうに輝いてゐる。何様に晴れてゐると思つても此處にくると浮雲がボンヤリと浮かんでくる。海月のやうな半透明な一塊の雲は、スウッと線になつたり伸びたりして、二つ三つがよく手と手をつないでしまふ。

見すゑてゐると動くとも見えない位かすかなものであるけれど、足元から咲きつゞいた桔梗、かんぞう、百合、女郎花、乃至は、りんどう、月見草、萩その他名もしらぬ色々の淡い柔かな情緒を包んだ、さうした繪具を塗つた畵面に心よい溫柔な憩ひを、ほんの少しむさぼつてゐる僅かなうちに——

高原には殆ど樹がないと云つてもいゝ。

澁へ越す赤黒い道のうねる邊に一列の並木が見える又谷へ崩れる邊に漆黒な林をつくつてゐる。

カラリと明け開いて餘りあかる過ぎるとは云ふものの、百花からしとやかに虛空へとひろがる芳香がふつとり澱んで、立迷ふてゐる故か、程よく光線を調和して細い風が花の間々をくゞりぬけて行く後に、集中した光線が泡立つて輝く。



高原からは遠い谿を隔てゝ幾つかの丘が芝山かと思ふ程なめらかに連なつてゐる。同じ線でも濃淡のけじめをつけて、光の光線を異にしながら遠く近く脈打つ

てゐる。その後を遠まいたのが國境の果なく走る山脈である。信州の山々である。

こんな廣い眺ながら一つの村も一つの町もない。山岳と谿谷をもつて對してゐる。正面に圖ぬけて高い山は吾妻山である。

山の線には非常につよい力がこもつて、只かうしてゐると、不安とか恐怖とかは少しも影を見せない。軟かに血液の循環が一音から一音に連つて、タク〳〵と鳴つてゐる。

いち早く都のがれし――

そんな歌を口ずさんだ強度な刺戟につれての疲勞といちじるしくとがつてしまつた神經との殘骸をはてんだ數日前の心とは何といふ懸隔があるのだらう。

平靜な此の内心と外界とを傷ける何ものもなかつた澁への道からはまれに旅人が來た。其の多くは辛抱強いと云はれる溫泉場から溫泉場をかせぎまはる越後の人たちである。その他往來するものは、たまに炭をつけた荷馬が下りてくる。刈り草つんだ馬がくる。女は殆ど通らない。

此の岡つゞきの一段下の岡には廣い天與の牧場がある。入り口にはいさゝかの畑物がつくつてあつて、月見草がかたまりさいてゐる。

此の岡にくると谷川の流れが白く樹の間に鳴つてゐる。それが只白い許りで、折々思ひがけもないやうな冷たい大氣が裏葉をひらめかして肌にふれる。

川を隔てた向岸は赤く剝つたやうに崩壞して、四五丈の杉が逆さに崖にすがつてゐる危い。

低くなつたせいか眺望は小さくなる。その替りこまかくなる。吾妻山は向ふ山の額が影して殆どその山頂が鮮かなコバルトにのぞかれる位、丘陵のやうな山にも樹がかぞへられる。上の丘から芝山のやうに見えた丘は針葉樹のしげり合つた山であつたり。丘の皺襞の間には白布を下げたやうな瀧も見える。

小雨坂へ行く栗のしげつた道が向ふ山をくねつてゐる翁仙瀧へ行く牧場傍の道も走つてゐる。此の邊は樹の間から透す縞光線が小さい錢形の影をいくらとなく並べて、野ばらのしめつぽい白い花も甘く咲きこぼれてゐる。

牛は飼はれてゐるといふ感じを殆どもつてゐないかと思はれる。彼方の柵際に立つ牛は目に入りさうに小さい。一寸ゐかけて小屋の上の小高い、大きな槐の樹の涼しい蔭をつくつてゐる下に來て休息んでゐると、

赤い塗ぼんにミルクを一ぱい盛つたコップをのせて女房がくる。――若い娘であつたら美しい詩のやうであらうと思ふ。

ミルクは極濃厚なドロ〳〵した位なもので甘味はむしろ淡白なものである。甘く淡い都會の牛乳になれ切つた舌は、一合をほすのに二合飲むだよりも舌さわりが重い。

しづかにのみながら向ふ山を見てゐると、溫泉から小雨坂へかゝる山籠が小さい人にかかれて行く。牧場の東端に行くと小雨村の人家が遠く一目に落ちてゐる。馬で入つてくる人もある。此の道は常に人通りが多い。



溫泉の質のせいか草深い中にも蛇がゐない。又高原一面の花でありながら、蝶や蟲の一つもとぶのを見かけない。けれど夥しく雉が居る。

澤渡りへ「溫泉たゞれ」を直しに歸る人達を送つて行くと大方それは曉で、水の底のやうな蒼明な靜かな四邊は墨畫のやうに並木や森が靄にからまれて、草花はしとゞに露にぬれて、水にひたつてゐるやうな靜けさ、別れて行く人がふりむきふりむきかたみにこゑを掛け合つてゐる。と、銳いたまげさせる程唐突な朗らかな啼聲が近い丘から一つすると、次へ〳〵と送られて鳴くお日照りだ、から云つて籠舁きや馬方はよろこぶ。日照りをつげるそのこゑは旅人

にもどんなに心安さをあたへるであらう。靄がしつとり濃くなつて雨になりがちな高原には溺れかゝつた人にあたへる岩のやうな心強さである。

日中は殆そのこゑをきかない。

靄の晴れ工合によつて右手よりに見える淺間山の山色が青くも紫にも見える。

青く見える時は畑も純白にムク／＼して廣く引まはした裾迄もハツキリと見える。

紫に霞む日は夜となつて折々鮮紅の火をけぶりの中にチラリ／＼とひらめかす。此樣な日は必度溫泉の熱度が高い。

朗らかに晴れた日、草の香をかぎながらウツ／＼してゐると、はれやかに桶の箍のはねたやうな音がするそれは淺間山の小噴火である。

濃さました熕煙は奔騰して山の巔をかくしながら西になびく。

「偉大な自然の力よ」、山容は又いつ變るともわからぬ絶えず／＼破壞に破壞をもつてするタイラントのやうな淺間よ。漂泊する浮雲は恐れ氣もなくその山頂に白線をのばした。

あざやかなコバルトの空と青黝き山容と、風の音もなければ何物の響もふくまぬ高原に、日光のかなでる音樂が山の線に緊張してふるへてゐる――。

鑛山 坑内探檢

▼地下三千尺の暗黑界
▼深さ四町の水だまり

松韮紫花

私は兼ねて希望してゐた〇〇鑛山の坑内を見る機會を得て、今日夫と共に行く事になつた。

堤手の青葉に川風かをる吉野川の堤上を、空行く雲に、走せ去る水に、種々な想ひを續け乍ら、午後四時頃、〇〇といふ鑛山の監督者の家に着いた。

夫とは知己である此の家の子息は兼ねて夫から便りをしてあつたので喜んで迎へて呉れた。

又後で休息せて貰ふ事にして兎も角もさきに見せて頂きます、と夫が云ふと、二十にも足らぬ愛嬌のある無邪氣な子息は、さうですか、ぢや直ぐお供しませうか、斯う云つて奥の方へ行つたが、軈て勝手口から柄の長いカンテラを提げて、絣のチヤン／＼の輕るさう

なのを着て出て來た。
二人は子息に從いてつひ近い坑の下まで來た。
さきへ行く子息は急に立ち止つて、
先生こゝから溫度がもう違てゐますと、と云ふ内にも、もう秋風の樣な爽かな涼しい風が吹き下して來た上を見ると坑内から流れ出た水が飛沫を飛して居た。
秋の樣ですネ――と云ふと、
なか〳〵坑内はこれどころぢやありません、足など凍る位です、ネー先生、先生は經驗があるけれど、あなたは始めてでせうから冷たいのにキット驚くでせう、
マンそんなに寒いんですか、萬事はじめてである私の好奇心は子息の一言一句毎につり上げられる樣である。
事務所のそばまで行くと、「一寸待つて下さい」、と云つて子息は事務所へかけ込んで行つたがカンテラを、最一つ提げて直ぐ出て來た。
その邊はもう坑内から運び出した鑛石が山をなしてゐた、丁度今、暗い坑内から鑛石を積んだ箱の車がレールを通つて一臺だけ出て來た。
門の樣になつてゐる坑の口は、山からきり出した丸太の木をそのまゝ並べて拵らへてある、その上を青い青い蔦かつらがズッシリとからみついて、じめ〳〵とした朽木の香がなんとなく深い坑内を思はせる、左側は打ちつけられた板には(無用之者入事禁ズ)と書いてあるのが、もうだいぶ風雨にさらされてゐる。
子息は二つのカンテラに火を點して一つを夫に渡した、力ない疲れた樣な、白晝の點火はけだるさうな光を流してゐる。
先生下駄では行けません、オヽさうぢや、皆跣足になつた、私は裾を少しかゝげて二人の後から歩いた。
レールに添つてお歩きなさい、子息は振り返つてかう云つた、私は只もう些の影も、かすかな物音も、坑内にあるとあらゆる現象は決して見落すまいと、神經は鋭く冴え渡つてゐる。
坑門からさし込んでゐた夏の强烈い光線は次第々々に遠ざかつて、いつの間にかカンテラの火の勢が活き活きと盛んになつてゐた。
雨後のぬかるみの町を夜あるく樣な――、ともすれば辷りさうで氣持が惡い、それよりももうさつきから足先が冷たくて〳〵今に全身までも凍りさうになつて來た。
ほんとに冷たいこと、冷たいナア、冷たいでせう、

三人が斯う云つた聲が非常な反響を起して、頭の上から狼が吠える樣でゾッと身慄ひした。

恐しい反響——、思はず聲を出すと又忽ちウワー——と岩が吠える。

あの吠えること、岩が……ウワーン〳〵ホホ、、、ハ、、、、、皆が一時に笑つたのでウワン〳〵〳〵ワーン、丸で狼のかみ合の樣である、後へ向いてごらんなさい、もうどこにも光がないでせう、聲と共に振り向いて見た私は立ち止つてかたくなつた。

前にも後にも全く光といふものは更にない、その上頭上には怪物の樣な黒い岩窟が低う蔽ひかぶさつてゐる、言ふべからざる壓迫を感じて、窒息しはせぬかと思つた、只奥の方にも尚人が働いてゐるといふことゝ坑内に詳しい子息の案内と、夫の同伴と、この三つを私は賴りにして元氣に歩いた。

もうどの位來たのですか。

大分來たナア二町位か君、と夫は云ふ。

さうです、二町は來ましたでせう、と子息は答へる

奥へはどの位あるのですか、

これからまだ五六町以上です、と云ひつゝ子息は絶えずカンテラを岩にさしつけて鑛脈をしらべてゐる。

突然——、アッ……仕舞ッタッ……子息は叫んだ、

何ッと夫は直ぐ問ふた、私は耳を澄して目をすゑた。

先生、金槌を忘れて來ました。

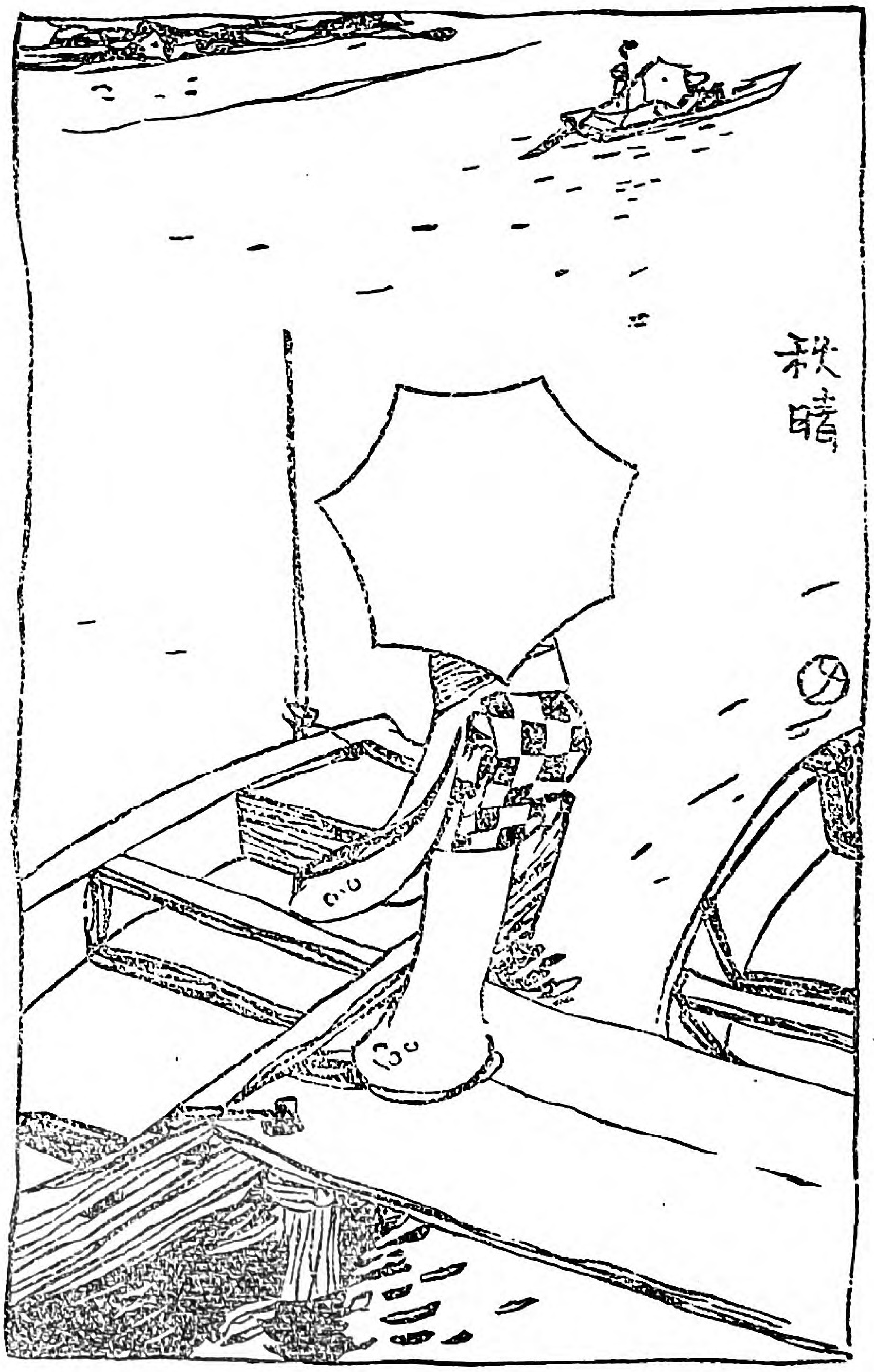
さうぢやすつかり忘れて來たナア……

さうですかマアと云つた時は私はもう胸なで下した後であつた、賴みにしてゐる案內者の口から出た仕舞つたの一言は私達には心配な聲であつた、常なら私がとつて參りませうと走るべき所であるけれど、此の場合さう云つて見たところで云ふ計りである事を知つてゐるので私は默つて居た。

こゝは車よけです、子息がカンテラをさしつけてゐる所を見ると可成り廣い車よけが巧に拵えてある。

軈て坑は左に分れ、又右にも分れてゐた、左の方は今仕事を止めてゐるといふので行かぬ事にした、右の方の上層へ行かうと云つたけれどそれは又歸りに、とも角も奥へ進むことにした、その右の坑の入口のところに一坪半程な黒いところがある、何を蓋してあるのかと思つて尋ねると、蓋ぢやないでせうと子息が云つてさしつけたカンテラの光の下を見ると、油の樣にドロドロとした、眞黑の水溜であつた。

マア恐ろしい、水ですか……、
水です、深いですよ、
深いってどの位、……
四町あまり、
オ——オッ：：とびのいて私は立ちすくんだ
折からゴウ〳〵と凄じい音が奥の方から次第に近づいて來る。
車が來ます、左を來ますから右のレールの上に、三人は貴人の車を奉迎する時の樣な調子に正列した、忽ち車は近づいて汚れた仕事着に鉢巻をした坑夫は射る樣な眼光で一行を見つゝ忠實に車をおして通つた。長い暗黑を一人で往來するのは心細い事だらうと思



つた。
冷氣はます〳〵強くなつてもう膝までも凍つてゐる折々冷たい、みじめな雫がポタリ〳〵と頭や肩に落ちかゝる。
急に前が白く見えると思つたら：
先生この菌どうですか、白いのをさして子息はかう云つた。
大變な菌だナア：：雪降りの中にゐる樣だナア、私の好奇心は益々動いた。
菌の樣な氣がしませんわ、全く銀世界、その上冷たいのでもうすつかり冬の樣ですわ、私はかう云つて襟かき合した。
その菌といふのは、坑内を包んだ朽木一面に、只も

う綿の樣な、眞白の菌の一種が無數に集つて、雪が積つた樣になつてゐるので、全くの銀世界、他に何ともたとへ樣はない、恰も冬の夜に、屋根も木も道も草も一面の銀世界と化してゐる雪降りの光景に接した時の感じ――、それと些の差もない、――、が只それが菌であるといふ感じのきらめく刹那に堪へ難い不快な感じがおそふて來る、そこがちがつてゐる計りである。

妙ですネ――、

綺麗だナア……

非常な菌だナア……

度々來る僕でさへ來て見る度に感心します、それに奧の方はまだ〳〵ひどいですよ。

足元も空になる位上下左右の銀世界に見惚れて歩いた、そんな光景が四五間も續くと、又忽ち岩窟が迫つて來て、物いふ度に岩は反響して吠えさけぶ、又忽ち銀世界來り、又々岩窟となる。

五丁目の標ももう餘程後になつて鑛石の車は引き續いて二つ通り過ぎた。

もう奧か近いのだらう、瓦斯が臭い、夫がいふ。

さうですもう三町位でせう。

急に厭な〳〵臭氣の瓦斯が霧の樣に立ちふさがつた窒息するのではないか知ら、又こんな氣がした、然し同じ人間が奧で呼吸しつゝ働いてゐるのだ、カンテラの火も益々勢よくもえてゐる――、ではないか、

それでもどうにも苦しい、苦しいと思へば思ふ程苦しい、――もう堪へられなくなつて來た。

お二人共苦しい事はありませんか、

私はもう心細さのあまり問うてみた、

苦しい〳〵息が塞がる樣だ、……夫はいふ。

今に馴れます、子息は何げなく云ふけれど、もうどうしてお苦しい、私は急に氣をかへて無神經の樣になつてそして大きな〳〵呼吸を續けてみた。

不思議にもいつの間にか苦しさも臭氣も忘れた樣に馴れて仕舞つた、ふと又左の方に引込んだ岩窟がある

先生又車ヨケがあります、云ひつゝ子息はカンテラをさしつけて眞先に進んでいつたが、跳ね返る樣に飛びすさつて、

イカン〳〵、コレハイカン、先生お止めなさい!

イカンです〳〵雪隱です。

皆か一時に大笑ひ、其の反響に岩は吠え叫んでカンテラの火はあわたゞしうまたゝいた。

暫く來ませんでしたから、こゝまで便所を持つて來

てあるのを知らなかつたのです、惡い事しました、子息は猶殘る可笑しさに一人笑つてゐる。

見に來た以上は何でもかでも見て置かな解らんぢやないか、然しこの樣子ではたしかに奥が近いナアと夫はいふ。

さうでせう……。

先生近い證據です…今のが…子息は矢つ張り笑ふのである。

その内に坑は稍圓形に曲つて又一臺の車が通つた。

先生、火が見え出しました、奥の…子息は叫んだ

ヤア火ッ！

マア火……

嵐の夜の黑い〳〵海上にいさり火を見る樣なカンテラの火――、三つほど――、

此時の私の瞳孔は如何に輝いてをつた事であらう、

トチン…トチン…、かすかに〳〵に金槌の音が響いて來る、暗にはもう馴れた足元は急に元氣づいてともし火を慕つて足早に進んだ。

トチン、トチン、トチン、カチン、トチン、カチン

トッチンカッチン、トンチンカッチン〳〵〳〵

音は次第に明晰になつてカンテラの火は存外近いところに三つ釣り下げられてあつて、大きな金槌を持つた三人の坑夫の姿がもうろうとして見えるのであつた。

おぢさん今日は…眞先の子息が云つた。

ヤア今日は、ようお出でやした。

今日はお邪魔に參りました、夫と私は斯う云つた

イヤ――ッようお出でやした。

眞暗の中に火を點して今日はなど云ひ合つたのは始めてゞある、常にはよく夜更た人に逢つた時に（お早よう）と云つて見たり、朝早く逢つた人に（今晩は）と云つたり、夏の土用にお寒うございます、などいつて滑稽けてみた事はあるけれど、その場合とは何だか調子がちがつてゐる、暗中にともし火を提げてをりながら、しかも眞面目に今日はといふのであるから妙である、まさか今晩はといつてゆく人はあるまい、どうでも今日はといふのが至當なんだから益々妙である。

三人の坑夫はダイナマイトを仕掛けるべく、熱心に岩に穴をほつてゐる、今磐石として惡魔の横たはつた樣な黑い大きな岩頭は、その三つの穴に仕掛けられるダイナマイトによつて眞夜中頃岩はみぢんに碎けるのださうである、千年萬年不言の岩石も恐しい激烈しい藥の力に堪へられず天地も碎けよと大絶叫するのであ

ちう、三つの穴はもう皆一尺位穿れてゐる。

さつきから見てゐると、左の方の人計りは、なぜか左で金槌を打ち込んでゐるので左利の人かと思つてゐると、右の方にゐる坑夫が。

この人は左でなけりや飯が食へんのです……私達ア右で食べます、云ひつゝクツ〳〵笑ふと、他の二人も一しよになつて皆でクツ〳〵笑つてゐる、わけをきくと、其の人は上穴をほつてゐるので、これは金槌を左右自由に扱ふ人でなければ出來ぬ藝で、誰にも出來ぬ六ヶ敷い仕事であるさうで、それで左で飯を食うといつたのであつた、さうと聞いて見てゐると、アノ重い金槌を左に持つて調子亂れず打ち込む働き振りには感心して仕舞つた。

色々と尋ねる事を、三人は少しも面倒らしい顔もせず、何やかやと詳しく説明してくれる、然しその間も仕事は決して休憩まうとはせぬ、説明してくれる間は三人で笑談をいつては私達を笑はしつゝ矢張りトッチンカッチン〳〵と續けてゐる、折々長い管の樣なものをさし込んでは穴の水を吸ひ出してゐる、吸ひ出された汁は烏賊の墨の樣に黒い。

三人共尻に俵のふたの樣な丸い尻あてをつりさげてゐる、腰かけてほつてゐる人は、ちやうど尻の下に敷れてゐるのでいゝけれど、立つて働いてゐる人は其の丸い尻當が、眞後で時計の振子の樣にブラン〳〵してゐるのが甚だ滑稽である、普通の場合にこんなのを見たらきつと吹き出さずにはをられぬ所であるけれど、場所が場所だけに何だか滑稽なのが飛びこえて、可笑しくも何ともない、反つて哀愁を感じて氣の毒になつて來た。

坑夫の中には中學校卒へた人、高等學校中途退學をした人もあるとか、五十年の人生を半は眠つて過す尙その上に殘る僅かの光明を、尙暗黒の世界にカンテラ一つを頼りに働く運命の人々よ、私は何とか充分に慰藉の言葉がいつてみたくて堪らなかつたけれど、遂に適當な言葉は出なかつた、殘念で堪らぬ、何とかありたい、ア、何とかもすこし何とかありたい心はいらいらと悶えた。

お土産を上げませうか、坑夫の一人は斯う云つて、ダイナマイトで粉碎された鑛石の中から小さいのをとつてくれた。

子息と夫とはもう歸らうと云ふ。

私はまだ見殘したり聞き殘した事が澤山ある樣な氣

かして殘り惜しかつたけれど——、
どうもお邪魔いたしました。
有難うございました、口々に禮を云ふと、
もうお歸りですか、ようお出でなさい。
御苦勞さんで……、又どうぞ。
有難う、有難う……、
五つ集つたカンテラの火が三つと二つに別れて、二つは動いて三つが又淋しさうに殘つた時、後からゆく私は最一度その邊の光景を振り返つて見た……暗黑の奥よ、さらば——。
と、急ち聲はり上げて追つかける樣に、
イヤヨ〳〵と畑の芋は……トッチンカツチン



かぶり振る〳〵子がふへるウ……
トツチンカツチン〳〵、かぶり振る〳〵子がふへる
トツチンカツチン〳〵
腕に力を込めて打ち上げ打ち下す快絶勇絶の槌の響、一致の調子、歌の拍子、響と歌とがこんがらかつて環の樣になつて後から追つかけて來る、華やかな送り聲の樣で胸がすく樣に快い、歌へ歌へ聲の限りに歌へ、暗黑の人よ。
トツチンカツチン、トッチンカツチン〳〵トチン、
次第に音は遠くなつて、再び銀世界へ歸つて來た、銀世界に別れては軈て又銀世界が來る、其間をからの車が歸つて來る、歸りには（オンニヤク）を澤山に見つけたが金槌がないのでとる事が出來なかつた。

上の穴へ行きますか、子息は上層の口に立つて斯う云つた。

もう止しませう、今ので充分解りましたから、と夫がいふ、殊に深い水溜りのある上はあぶないといふので止めた。

坑外へ出たら暑いのに暫時苦しみますよ、子息が云ふたので私ははじめて今日は夏である、七月六日であるといふ事を思ひ出した、今の今まで夏といふことをすつかり忘れてゐたのであつた。

アヽ今外は熱いむさ苦しい夏である。

青葉もない、白雲もない、蟬の聲も、鳥の聲も、何にも聞えぬ暗黒の世界に、暫恍惚となつて萬事を忘れてゐた私は、坑の口が近くなるに隨つて、花咲き鳥啼き、幸不幸の光明の世界を思ふと同時に、又複雑な社會を思はずにはゐられなかつた。

子息の云はれた通り坑の口を出た時の暑苦しさ、暑いところから涼しくなるのとちがつて不快で堪らない暑い〳〵。

外の暑さはどうですか。

暑いナア……今更の樣に口々に云ひ合つた、鑛泉で足を洗つて事務所へカンテラを返して挨拶をしてそてを出た。

明るい〳〵幸福なわが世界の明るさを、突然暗から出た今日初めてしみ〴〵と感じた、この光明の世界よ、彼の暗黒の坑内よ、思へば夢の樣である。

蝦夷富士登山

▽此處で野宿します

▽助け給へや地藏尊

萩香

「姉樣！ 其麼に、お結びどうするの？。」「だつて四食分ですもの！。」と、皆の笑ふのも聞かずに十程の結びを肩にして、袴に草鞋といふ仰山な扮装――。

じり〳〵と、てげつく樣な日をあびながら、二里の田舎道を淋しいとも思はないで歩いた。二時間程で良子さんをお誘ひする事が出來た。此所からは、話相手が出來た故か、同じ程の里程ながら非常にはかどつて小澤に着いたのは十一時であつた。

十二時の列車に乗り、三十分餘で倶知安へ着いた。停車場には、思ひ掛けなくも靜江さんと、君子さんと

が迎ひに出てゐらしつた。これ幸と、晝食は君子さんのお宅で濟し、三時半頃、愈々良子さん、靜江さんの三人で、目的地へ向つて、發足した。目指す山は、手に取る樣であるが、霞の爲に僅に頂を見せて居るに過ぎない。

皆道不案内であるが、君子さんに敎へられた通りに六つの草鞋を急しく運んだ。第三學校を眞直に、燕麥の多い道を行く事一里餘。登山目標の所を、左に折れて、行く事半里程で、登山事務所、並に半月湖がある途中さゝいな泉があつたので、十分咽喉を潤す事が出來た。

事務所の方が「途中で日が暮れますから提灯お持ちなさい。」と、親切に言ふてくれたが「邪魔になりますから。」といふて借りなかつた。事務所からは、そろそろ上りになつて居る。仰ぎ見るも恐ろしい樣な雜木林を行く事十町程。此の邊りから道は、愈々本物となつて曲り〳〵行く其途中、白く青く紫陽花の、彼方此方に咲亂れて居るのが目を惹く。

事務所から、半里程の處に休息所がある。見ると、登山した人の名が、天井、梁の差別なく、隙もない位に亂雜に、書きつけてある。此所を出た時は、最早、黃昏時であつた。

三人は飴玉を頰張りながら、威勢よく唱歌を歌つたのも僅かの間……。靜江さんは、もう疲れて一坂づゝ遲れる樣になり、遂には二間も行くと一度づゝ休むといふ始末。其中に、日はだん〳〵暮れて、小手翳して見たが、雲の爲に下の樣子が少しもわからない。

「あゝ、私等は、雲の上を歩いて居るのだ。」と思ふと急に心細くなつたので、二人は、靜江さんを勵して進むうちに、益々險しくなつて來た。然し漸やくの事で先に敎へられた「是より六丁目」といふ目標を見つけたので、一安心はしたものゝ、此所からは一層險しいと聞いて居る故、なか〳〵安心どころではない。

「私は、此所で野宿します、もう一歩も歩けませんから。」とヘト〳〵になつた靜江さんのいふのを、無理に勵まして進ませた。

あゝ、どうしませう！あれ、星が……。あそこにも此所にも出ましたよ……。

お腹はすくし、夏とはいへど、夜中のこと。殊に山中に單衣一枚ですもの、其寒い事、深く骨髓にしむ。

前後には、すゝり泣きの聲が起つた。石童丸だか何だか知らないが――、自分はたゞ「助け給へや地藏尊」

を繰り返し乍ら行つた。然し暗い爲に道は見えず、たま〱、胸を突く樣な所へ行くと、意地わるくも道は二つに分れ、何れに足を踏んでよいかわからない。今は之迄と、唯心の指す方に進んで行つた。

益々、物悲しくなつたので、聲を揃へて「宿は何所ですか——。」と幾度となく叫んだが、答へるものとては、唯、霧や、小鳥の兩側の笹に葉摺れする音ばかり最早之迄…野宿しませうか？とはいふものゝ、「折角此所まで登つたのに…。」と互に勵しつゝ、袴や、手拭を被ぶつて行く中に、靜江さんも少しく元氣づいて來たので、多少心強くなつた。兎角する中に、僅な目標が見つかつた。漸やく、星光に透して見ると、「左に行くと宿所」と讀まれた。墨の跡も薄れて居るが、三人の愁眉は一時に開き、六丁の道を一里も歩いた心地した足の痛みも、忘れる許りであつた。

あれ〱、燈火が幽に見えますよ…。

「賴みます。」オーと答へた時の嬉しさ。嬉し泣きとはかゝる時の事かと思はれた。

宿に入つた時は、三分心の光は千燭の電氣の如く見えた。廣くもない室を見廻すと、柱時計は最早十時近かつた。棚には、ビール、サイダー、煙草等が淋しげに整列で居る。宿り人は私達の外に二人の中學生で、「蚤が居て眠られないナ。」なんて騷いで居た。私等は、爺さんの沸してくれた麥茶を呑みながら、むすびを食べた。而して、名簿錄に名を記した。其時不圖思ひ出したのは、先日宅へ宿つた宗大學のK樣!。爺さんに「こんな人は來ませぬか」と尋ねると、「あの方は木の上に野宿したさうです。」——

三人は、一枚の掛布團を引張り合ひして居たが、いつの間にか眠りに落ちた。

* * * *

何だか騷しくなつたので目を覺して見ると、隣の學生は起きて居るのであつた。それッといふので、靜江さんを宿に休ませて、二人は道を知らぬ故中學生の後について頂上へ登つた。三時頃だつたので、四方はほの暗く、寒い事夥しい。頂上に達した時は、二人ともガタ〱顫へて居た。

道々には、鹿角の樣な木が鐵條網のそれの如く、橫たはつて居る。右には三つ四つの噴火口!!中には青々とした草が生えて、落ちやうものならあがれさうもない。左には一面の雲!!折角樂しみにして居た湖や、村村は皆其雲に包まれて、僅に遠近の山頂が見えるばか

りである。けれども、其雲の美しい事!!!いつか見た。女神のお掛圖にあつた雲！それにも優る此の生ある雲!!想像ふて居る女神が今にそ現はるゝかと、疑はるるばかり、何だか雲上に一飛びしたい様な氣がしてならなかつた。

薄紅の空に、何やら動くものを認めた。薄光のあるもので：：暫く見詰むると、光は強くなつてたうとう雲をわけて現れたのは、三寸程の太陽!!それが飴でも延す様に次第大きくなつてとても見る事が出來なくなつた。丁度、長髄彦が、鳶の光に恐れたやうに、目をつぶつた。



頭上に此光を受け、眼下に此雲を見下した時の心!!!一點の汚れのない清い此心を、永久に持ちたいと思つた。

珍らしい蘚苔を僅かばかりとつて、登山の印に持ち歸つた。兄様の迎へを受けねばなるまいと、思つて居た靜江さんは非常な元氣で三人打連れて宿をでたのは五時――。先の學生は米とぎかゝへて歸つた時である。下りの早いこと。兎の山登りの様だ。昨夜の泣蟲？今朝は餓鬼大將、といつた樣な勢である見易い枝には、登山した人の名等が書かれて居るのを

ある。

だんく下山するに連れて、登山する人の苦しい息が聞えて來た。三人…五人…十幾人…。何れも堂々たる男子ばかりである、意氣揚々たる私等を見て皆魂消て居る。勢に乘つて猛進するけれども一個の飴玉！、一切りの林檎も既に盡きたので、半月湖に着いた時は、生ぬるい、然かも蟲の居る呑まれさうもない水をのんで少しく咽喉を潤し、昨日の泉で又十分のんだ。靜江さんにお別れして、ステーションに向つた。二人は、又もや此所でのんだので、もう狸の腹鼓宜しくといつた風になつて、プラットホームを出てからはうんくいひながら家路を急いだ。疲れた目に、暮れ行く空を眺めながら歸宅した。

日光

▼若き女の二人旅行
▼旅館と別荘の二泊

うきふね

旅行といふのも嗚呼がましい、僅か二泊の日光見物それでも見聞の狹い我等には、立派に旅行と思へるから可笑しいぢやありませんか。

七時×分發の列車に間に合ふやう早くから起きてさわいだけれど、女の支度の面倒さ、二輛の俥の停車場に着いたのは發車に先だつ七分前、慌てゝ買つた乘車券の改札口に飛ぶよと見るまに、汽車は早や炎々たる黑煙を吐いて進んできた。

三保樣と向ひあつて乘つたボギー車には、各學校の徽章つけた學生が多かつた。眼は膝の雜誌や新聞に注がれてあるけれど、心は皆戀しい故鄕の空に彷徨うて居るのであらう。門に待ちます母さま、妹ごさま、中には美しい約婚の君も在すでせう。

此等の人は大抵小山驛で乘替へてしまつた。

小金井石橋夢のまにすぎて、雀宮と呼ぶ驛夫の聲に思はず眼をみはつた。噫流水女樣!!! レールを染めし紅の血潮は消えても恨みは永久に消ゆる時はないのであらう…。思ひは同じ三保さんと、只顏見合せて深い、深い、吐息をついた。

宇都宮で乘替へて無言の中に日光驛へついたのは十一時すぎ、わざく停車場までお出迎へ下すつた百合さんに飛びもつきたいおもひを、人目を耻ぢて袂のか

げで握手した。すぐ別莊に、と仰しやつて下すつたけれど後刻を約して××旅館の別館に、一先づ足を延した。

ＷＣかと思つた三保さんの足音が階段を昇つた時、手には當地名所の繪葉書を澤山持つて居られた。何處で求めていらしつて？ときけば、下で賣つてるのよと仰しやる。手を拍てば雑作もないものを、女ばかりの旅はこんな事にまで氣がおけて、わざ／＼下まで出張した。

ＡさまとＢさまと、それから都のＣさまと……若き詩人には殊更、華嚴の瀧を選んだ。けれど裏には態と何も書かなかつた。

お約束に隨つて百合さんのお宅に向ふ。大谷の激流を渡つて、初めて山地らしい感がした。僅かの微風にも吹き飛ばされようとするパラソルを、雙手にしかと握れば日光に燦めくダイヤのリング、わが里人の前にこそ羨望の的ともなるけれど……。

「よくまあお出で遊ばしてねえ」百合さんと小母さんと共々玄關までお出迎へ下すつた。「さあお兩人とも何卒此方へ……」請じて下すつたのは見晴しの好い十疊の奥座敷、お床には百合さんのおすさびであらう？つぼみの百合が三輪、投げ挿しに活けてあつた。

別莊とは思へぬ程行屆いたお室の設備、あゝ私も世が世であつたなら……思はぬ愚痴をおろかよとばかり身を叱して、またもや青磁の花瓶に眼を移す。

「ヤアご兩君」快活に庭木戸から入つていらしつたのは百合さんの兄さま、春夫さま――。今の母さまとはなさぬ仲ときくけれど、どうしても義理ある間柄とは思へぬおん交りの美しさ。

兄さま／＼と百合さんの冊づけば、百合さん／＼とお可愛がりなさる。萩香さまとやらのあこがれ給ひし一高の健兒よ。

「明日は霧降の瀧ですつてね、華嚴の方がいゝぢやないですか、僕案内者になりますよ」「は、有りがたう、けれど遠いんでせう」「なあにそんなでもないですよね百合さん」「えゝ」百合さんの返事は曖昧だつた。

話はつきねど明日の用意もあればと、皆さまの頻にとめて下さる御親切を無にして旅宿に歸つた。街はすでに電燈か點されて、往交ふ人の足音しげき。

なれぬ山路に旅寢の夢も圓かならず、雨かと驚く水聲にいくたびか枕もたげつ、起き出でたのは四時すてしすぎ。

朝起きし君が亂れし髪よりも、もつれ烈しき我心かな。ふと、思ひ出すまゝ急ぎノートにかきとめて、洗面所に向ふ。

「何書いてゐらしつたの？」三保さんがきく。「つまらないものよ」「拜見ね」「ホお目にかける程のものぢやないわ」「でも…」ザッと髪結ひかへて、昨日のみちに俥を走らせた。

百合さまも春夫さまも、すでに支度が整つて兩人をまつてゝ下すつた。種々に異議もあつたけれど結局、矢張霧降と定つた。

女の足の急ぎがたう。しば〳〵姿かくるゝ春さまの微吟し給ふ新體詩をたよりに、喘ぎ〳〵昇る山路、深溪を渉るゝ清水を掬んで渇をうるほす心地よさ、プッと吹けば刹那にあらはれて、刹那に消ゆる虹の彩、うちふる百合さんのハンカチにローズの薫り淡く漾ふ。

あゝ嬉しき夏の旅路よ。笑ひつ、興じつやう〳〵辿りついた山の上、憩ふまもなく「僕お先へ」とばかり嶮しい斷崖をはせ下る。寫生機出してスケッチしてる三保さんを殘して、百合さんと二人おあとにしたがつた。

サッと滿身にふりかゝる飛沫に、いひ知らぬ凉味をおぼえて、奇しき水の行ひを飽かず〳〵眺めいつた。

「もう上りませう」瀧を背景に徐ろに上りゆく三人の姿、春夫さんの白浴衣と、二人の紅の帶とのコントラストを美しいと思つた。

若き閨秀畫家？三保さんは已に筆を納めてまつてゝ下すつた。休憩所でお辨當喫べて、しばし幽遠なる自然の美にあこがれた。噫何といふ美しい活畫なんだらう、この偉大なる眞景をモデルに、筆揮る三保さんが羨ましい。

やがて神橋まで引き返し、大谷川の奔流に添ふて、東照宮に向ふ。

先へ、先へ、とばかり進む行者の説明を遠くにきいて、しばし佇む陽明門、奥宮の入口の眠り猫の思つたより小さかつたのには、三保さん落膽したらしい。

金色燦爛たる宮殿の美觀と、崇高なる四邊の幽邃とに心を奪れつゝ無言に刻む砂利道は、いづこが涯とも覺えなかつた。やう〳〵に拜觀はをはつた。

美觀——莊嚴——むしろ私はいふべき言葉が見出せないのである。

美しい夢から覺めたやうな、云ひ知らぬ思ひを抱いて私は深い吐息をした。氣の故か、皆さまのお顔にも

聊か疲勞の色が見えた。

「おや大そうお早いお歸りでしたこと、如何でした、さぞお疲れなすつたでせう」あいそよく迎へて下さる小母さまと、お兄妹に、あつくくお禮を述べて暮れぬ内にと、其まゝお別れしようとしたら「いゝぢやありませんの、是非今晩だけお泊り下すつて‥‥」切におすゝめ下さる皆さまの御親切いなみもならず、お言葉に甘えてたうとう泊めて戴くことにした。

つきぬ話に夜を更かし、枕につけば情緒徒らに亂れて、眠りもやらぬにはや告げ渡るくだかけのこゑ。



罪とは知りつゝ暑くなつてはと、よく眠入つてゐる三保さん起して、顏を洗ふべく百合さんの後に從つて谷へ下りた。自然の成せる蒸溜水——山から引いた筧の水に亂れし髮かき上げて、御飯戴くと早速ながらお暇を告げた。

重ねぐのお志又もやいなみかねて四輛の俥は勢よく停車場へと走りゆく。發車まつまの十分間、氣の弱い百合さんの美しい眼には、もう露が宿つてゐた。

「暫しのお別れぢやありませんか？——お歸鄕の節は是非まへにお通知なすつて‥‥」「‥‥停車場までお迎へにまゐりますわ」

さても春さまお心強や、別れを惜む三人に眼もくれ給はず、お知己らしい方としきりにお話してゐらつしやるのだもの。

情なき汽車は用捨なく我等の前に進んだ。春さま先に立つて扉あけて下さる。「カムイン」「御免遊ばせ」輕く會釋してそのまゝ中に入る。

「それでは百合さま……春夫さま……」「御機嫌よう」「御道中お大切に……」こんな單純な言葉が取りかはされて汽笛一聲列車は徐むろに進行した。

見送る人も、見返る我も、共に千萬無量の思ひをこめて、打ち振るハンカチの漸次にうすれゆく時、山途下る列車は全速力を出して、瞬くまに優しい君たちの面影をみどりの山へかくしてしまつた。

北伊豆にて

▼花野に仰ぐ富士の山
▼水は美しい三島の町

みさを

よく晴れた、富士はいつもよりはつきりと透明な朝の空に美しい曲線を描いて裾野のあたり輕い〳〵霧が浮んで居た。松原橋にさしかゝる、狩野川の紺を含んだ水の色は平和に流れて居る、北條の町を通つて來た私は其所に見た紫の菖蒲の花と、たつた一房咲いて居た藤の花とにまだでく夏になりたてのなつかしさを味はつた。八月の日光が野をも山をも燒いて、黒ずんだ綠色に精も根も疲れはてたといつた松や杉の林を忘れてしまつて、淺綠の若々しい青嵐吹く山を思つた、早稻はもう花が咲いて居る。百日紅が崩れかゝつた土塀の上から赤い花をつけて半分枝をつき出した門や、少しよごれた白壁の土藏のある小村を過ると遠かつた山が、だん〳〵近くよつて來て、田圃にも倦き〳〵した頃、やつと岩山はすぐ前に來たのだつた。此所にも自然の破壞者が居る、深く深く山の根本を切り込んで、心細いカンテラの火を目當に、せつせと石を切出してゐる、何處迄堀つてあるのやら、カアン、カアンと響いて來る槌の音も幽かだ。あの天井がどつと崩れて入口を塞いでしまつたらと、怖ろしい樣な、又左樣なつたら好い氣味だとも思つて見た。切通しを拔けると高い磯の香が鼻をついて、濕つた汐風が吹いて來る。海だなと思ふ間もなく目をやる空に天を區劃つて瑠璃一

碧、白い浪のうねりさへ見えて來た。山の裾の漁師町をぐる〱と廻つて、四つ手網や簗の籠や澤山積んである所を拔けると靜浦の海だ。そして淡島が夢の樣に浮んでゐる。東京から來て居るといふ學生の群が一團靜浦館の一間に陣取つて居た。二階にも二人許り、どれもこれも眞黑に染められて皆同じ樣でちつともわからないとり立てのうづわの燒いたのでお晝をすましてしまふと裸體の儘でごろ〱ところがつて唄ひ出す。緣側に腰をかけて藤棚の下に眞晝の海を見ながら、うつらうつらと夢の國につれられて行かうとしたのを又ぐいと引張り戻されてハッキリと目をあいた。其の唄聲に。

「人の歌ふ時うたはぬ奴は、何か心に思ふ奴」「ヨーイヨーイ、デッカンショ」二階と下とで合唱する、どしんどしんといふ足音。

「あゝ草臥れちやつた。」「もうよしませう」「よして妥協しませう。お菓子を持つて下に入らつしやい」「ワハヽヽ、アハヽヽヽ」東京などは「時節柄だぞ」といつて睨みつけられるだらうが浮世離れた此漁村誰も咎める人もない。松原を拔けて浪打ち際に出て見る。巖と巖との間にぴた〱とせる水の色すきとほる樣な中に潜んで居る魚をついて歩いて居る少女、白手拭に赤裳裾、私等は一寸踏んでも痛い巖の上を平氣で飛んでゆく、綠の水に赤い色がチラ〱と散る。伊豆の山山は綠色に、紺青に、赤みを帶びた紫に見て居るうちに變化して淡島の蔭からついと出た白帆が波の上にすべつて行く。燃ゆるが如き光をなげた白日の海の面、きらり〱と沖の方から銀色に畝つてよせて來て、燒けた砂の上にざあつと白い花をふりまく。午後三時、

「此暑いのにお歸るッてか、孃やとんでもねえ、病んだらどうするえ」と言つて呉れるけど之から又一里半山をこして伊豆の眞中迄歸らねばならないんだもの、無理に出かけた私等は山の中に這入つて行く、滿ち來る潮の遠鳴も聞えなくなつて、右も左も白や樺や紫や色彩の鮮かな花野をゆく、美しい夏の山路、眞白に輝く野の小石、薊の花の刺さへ光る小峠をのぼりきると追分に出る。葦簾張の一軒茶屋お定りのお婆さんが澁茶を汲んで出す。百合咲く山を幾曲り暫くすると村里に出た。之があのよく聞く穢多村といふので好奇の目を以て眺めて見る。人の足音に顏を出した女も思ひなしか美しく見えた。車坂で轉んだら片袖をとられると言はれてゐた急な坂も轉びもせずに降り切ると古奈の

山が見え出してやつと遠くに裏山の森が見える。

南條の停車場から西へ十丁、乘合の馬車にゆられて田を走り山を廻ると新らしい湯の町がある、町を圍んだ山々は點々として美事に百合が匂つてゐる。

透明なさら〳〵と湧き出す湯の中につかつてゐる時に窓から來る初秋風は白百合の花の幾輪かを動かして高い香を運んで來る、洗ひ髮さらりと市松の浴衣の肩に亂したまゝ裏山に花摘みに入れば桔梗の紫に、女郎花の卵色に秋は近づいてゐるのだつた。山の中の小さな町、溫泉場につき物の刳拔き細工賣る店と二三軒の菓子屋と二三軒の旅館とで長岡の町はつきて居る。

ピーポーピポー、馬車の笛の音がむかふの山の後から聞えて來る。と間もなく淺黃の幕を引廻した黑ぬりの屋根が現れて旅客の二三を運んで來る。夕日が傾きかけると西に山を脊負つた長岡の山の向ふの古奈の村は早く暮れてしまふ、長岡に湯が湧き出してから古奈の湯は少くなつたといふ。二町が程も續いた葡萄畑にゆく。棚の下にはひると紫したゝる長い房は緑の葉のかげから累々とさがつてゐる、手をのばして一房をほきりとちぎると露が、はら〳〵とふりかゝる。そして幹によりかゝりながら甘い汁を吸ふこゝろよさ、葉と葉との間からまるで木の葉をふりまいた樣に日の光が散らばつてはつきりと白く濕つた土の上に輝いて居る夜になつて星がふる樣な晩には、山からたかい葡萄のかをりを慕つて無數の蛾が汁を吸ひに飛んで來る。それを松明をつけて追つてゆく、其の火が木の間を通して遠くからちら〳〵と動くところ、何とも云へぬ快い感じがする、私に詩が出來たなら此こゝろよさをうたはふものをと口惜しい樣な氣もする。一帶の山脈は洋畫の樣に北から南に走つて富士は左に愛鷹を裾にして之はまた日本畫の樣に夕の空に聳えて居る。

山から湧き出す水は至る所清流をなして三島女郎衆の化粧の水と唄はれた、全く三島町は美しい水の町である、潺々として涌く清流はゆるやかな水車をめぐらして夕月白くにほふ時、薄紫に富士の嶺の暮れゆく空に煙る時、月見草のほの黃浮べてはら〳〵と開くかげを、此美しい水は悠々とくゞつてゆく。此所から小松の宮の御別莊のあたりに出ると、箱根山は遠くててから起つて、東海道の松並木はずつと續いて箱庭の途の樣に見えるは冬は雪を頂いた山々に風があたりで海岸の砂山に波をたてる樣に雪の波を立てるといふ。新緑の山も美しい、初秋の山も美しい、冬の山も美し

い。一番汚ない夏、今さへも色美しく襞を疊んでゐる彌次郎兵衞が胡麻の蠅にやられたところ、三島の宿はやつぱり追分の唄面白く鈴をならして行く馬の脊に旅人が腰をかけて富士を眺めてゆく圖が適はしい。

「あの向ふに面白い岩山がありませう、「あれがロダンの彫刻だと云ふんです。丁度仰向いた顏の樣に」成程さう言はれて見るとそつくり。大空に刻まれた巨人の顏、如何してももう顏としか見えなくなつてしまつた田の道をどん／＼と行くKさんのあとからついてゆく。名にし負ふ韮山城趾、老松を渡る風許り昔の面影を忍ばせて　お堀の　あとは半分埋つて破蓮が騒いで居る。



葦の葉そよぐ池の向ふは江川氏の邸宅、山の峽に其の代官たりし時牢屋だつたといふ小さい家が戸をぴつしやりしめてしめつぽい、薄暗い場所に立つて居る江川邸は、日蓮上人が古い普請だといつて驚いたといふからどれ程古いか只もう何處も彼處も黒光り黒いと言ふより外にはない。幕末の偉人江川坦庵がつくつた反

射爐はまだ屹然として韮山村鳴瀧のほとりにそびえて居る。

潺緩として流れてゆく溪川の音を聞きながら此平和な山かげに永久に昔をかたるのであらう。蛭ヶ小島は田の中に一株の老松碑を抱いて立つて居る。こちらの山の瀧の邊に文覺上人は居て、其の蛭ヶ小島の頼朝に旗上げを進めるといふ。Kさんは遙かむかふの山を指さして「頼朝はあつちの山の上に登つて兵をこちらの江川の邸のあたりに送つた、北條の館は彼方の田の中にあつたといふ。そして火の手が擧つたら勝つたのだといつて山の上で見て居ると、忽にどつと上つた火は炎々と天を焦す。之を見た頼朝は勝つた〳〵とあの山の上で踊ををどつた」と話して呉れた。

韮山中學はこの古蹟多き山かげに四百の健兒を養つて居る。校舎の壁に運動場のポプラの並木はふるへたかげをうつして居た。はなやかな夕の空にたつ十國峠之を越したむかふには相模灘の水があつて熱海伊東の地があるのだ。



入浴日記

▼伊豆の修繕寺
▼滯在十二日間

貞水女

私は今年三月下旬、伊豆修繕寺温泉に十二日間靜養しました、同字で四十路のお内儀と、五十餘歳になる一人住のお婆さんと私と同行三人。左に記す所は即ち其日記なので。

三月二十三日(半曇)午前六時、實家出立、掛川驛十時何分發三等室に乘り、沼津乘替、又三島乘替、豆相線大仁驛下車、馬車で一里八丁修繕寺温泉宿、虎溪館橋本屋の軒下迄、午後五時着、入浴二回。

同二十四日(陰晴)朝飯後近所を見乍ら運動、私初めて來たので珍らしい。『菊屋』『大川旅館』『淺羽樓』『養氣館』など皆三階造りで一軒の宿屋でも六疊の間五六十宛ある、四棟五棟を一構へとしそれは〳〵すばらしい構へである。入湯兼夜七回。

同二十五日(陰晴)起床五時、朝飯後、修繕寺奥の院

へ參詣に行く、一里計の路を十一時半歸途、後室内起居、入湯内湯外湯合計九回、八時就床、夜中入湯二回。

同二十六日(曇)五時頃起床、朝飯前後入湯二回、八時頃より下狩野村字大平、旭の瀧へ見物に行く、土產にせんと瀧下の石一個拾ふ。旭瀧觀世音へ參詣し、後茶屋にて休む、茶代を置きびんのほつれを涼風に嬲らせ乍ら宿へ歸つたのが十一時、道程半里少し餘、晝飯後近所散歩、夕方只一人ぶらりと出て大川旅館の左手から裏屋敷へ出て見ると、前日見えた見晴別莊があるので登つた『菊屋遊園西路御散步御隨意』の木標があるので只一人構はず登つて見ると、之は又廣々した立派な山莊が幾つもある(其一二を東屋といふ)東屋から下を見ると怖ろしい崖、向ふを見れば修繕寺村の各旅館、宿屋魚屋小間物店、又本山の寺が一目に見える眺望絕佳、すばらしい所よ、又此山をズン／＼登つて行くといろ／＼な山莊があつて別天地である、一人で氣味が惡くなつたから急いで歸つた。入湯兼夜合十一回。

修繕寺村の山と山との間を一の川が流れる、之を桂川と云ひ、川の兩側に宿屋は棟を並べ軒を接して思ひ思ひの趣向を凝らし來客の便を計つて居る、前云ふ菊屋などは客間五六十もある其他見晴山莊があつて誰が遊んでも構はない、すばらしい構へに出來てゐる。

同二十七日(小雨、夜雨)起床前同樣、夕方例の東屋へ行く入湯兼夜十二回。夜中頃から雨盛んに降る、桂川の溪流と相戰うて物凄まじかつた。

同二十八日(雨天)起床六時頃、朝よりの降雨でどこへも出る事ならず室内起居、同伴のお婆さんは洋傘で遊びに出てつまみ喰する、三時頃より雨霽れる、夕方例の東屋に行く、湯疲れの所爲かだるくて仕方がない

「湯疲れの其湯疲れのくしやみかな」

同二十九日(晴)起床六時、此所へ來てから始めての上天氣、午前は故鄕へ葉書を二枚出し、室内起居、咽が燥いたので卵二個買ふ、午後は、去る二十五日奥の院へ參詣に行つた時珍らしい石があつたのに拾つて來なかつたからわざ／＼只一人又もや奥の院へ行く、石の破片一つ拾つて三時半歸途。入湯八回、九時過就床、電氣の下に寢て居て三人共に毎夜咄をする。いつの間にか熟睡て私はとんだ夢を見た、修繕寺溫泉宿でみた夢だから紀念の爲に日記に加へた。(略)

同三十日(陰晴)起床氣候前同斷。土產にせんと『伊豆溫泉名所案內』『修繕寺鑛泉誌』『地圖』及び繪葉書な

ど買ふ、價合計三十七錢。入湯兼夜十回。

同三十一日(曇)起床六時、湯疲れの所爲か今日のだるさ非常なものよ。近所散歩。夕方今日は四方樓の別莊見晴山より見晴富士へ三人して散歩に行く、別莊では留守居の女がすゝめる茶に澁茶一二杯呑んで茶代を置き、見晴富士は細路の草ンぶく、ドス曇りで富士は見えない途中で歸る、當地へ來てから氣持よく晴れた日はたつた一日、入湯兼夜十回。

同四月一日(雨天)起床五時室内起居、午後より時々雨降り、一日大曇り、遊ぶ所が少いので籠の鳥同前、僅かの日數で倦怠て了つた、晩、達磨山の松竹園へ散歩にゆく、射的場、粘笑園、とり〴〵に面白し、雨に降られて大失敗、束髮頭に頰冠り、駒下駄で馳足、雨又止む、修繕寺を經て『乳兒の湯』に入り、大川旅館の傍通つて福壽館へ一廻り、又雨に降られて馳足我居間へ飛込む。夕御飯の後、隣座敷の客來り念佛と和讃を申し雜談高笑に刻を移し、八時就床。入湯八回。

同二日(時々雨)起床起居前日の如し、午前十時頃より十數丁東の町はづれへ散歩に出る、春風の肌心地よいこと此上なし。明日歸鄕べく、隣家への土産物など買ふ。夜に入りて明日立つから今迄の御勘定をする十時就床、入湯兼夜八回。

同三日(朝雨、半曇)大仁驛一番汽車に乘らうと六時發のがた馬車に大仁迄乘り、六時五十分大仁發の列車に乘つて牛の吠えるやうな汽笛と共に物珍らしい田方郡を後に殘して走り出した。沼津より原驛の間桑畑非常に多し、蒲原より興津の間、南は海岸を汽車が通る蒲原の前後砂糖畑が澤山あつた。江尻灣では小蒸汽が三隻投錨してゐた、私等には物珍らしい。靜岡で下車し、淺間神社へ參詣し、境内散歩後、練兵場前から監獄邊迄散歩。午後一時晝食。同三時四十七分發の汽車で掛川下車、實家へ二里のがた馬車にゆられて八時歸宅。あしかけ十二日間總費用金十四圓餘。

修繕寺滯在中お婆さんに、修繕寺奧の院弘法大師の和讃と、七福神の和讃を敎はつたが略す。

臺灣　北投と淡水

▽北投の山
▽淡水の海

春子

八月七日　曇天

ものみな未だ寢りよりさめず、電氣の光ばかり輝く今朝は一番先に床をはなれた、ゆつくりと仕度に取りかゝつて靜さまを、もう〳〵一生懸命せかして家を出た停車場につくと、未だ一番汽車には三十分程間がある。昨日屆いた女子文壇を包の中から出して讀んだ發車鈴に大あわて脊の高い人にチヨキッと改札してもらつて、ホームに飛び出した。おくれ勝な靜さまの袂を引ぱつて車中の人となつた、曇りの爲か朝早いのか一等室は靜さまと二人、何だか淋しい、靜さまは横になる、私は窓から首を出した。右に基隆行の線路を左に青草茂れる野をながめつゝ、いつしか汽車は長き鐵橋の上を進行して居る。見下せば基隆河の流れ、水清うゆるう〳〵。右方をのぞめば高き地に北白川宮殿下をまつれる圓山神社、樹木の間にほの見ゆる。圓山驛へ着いた時、岸樣のゆかた姿が戸口に見えた。何處へと伺へば北投へと、あゝうれしい、御案内願はんとお賴み申した。岸樣は頭をかき給ふ、彼方は此方はと伺ふ中に士林の驛も通り越した。線路のほとりの貧しき一つ家何となう心を引いた、土べいはやぶれ屋根は半ば落ち人の姿は見えず只鷄の二羽三羽樹の下に餌をさがしてかクック〳〵と鳴いてゐた。

なほ進んで行くと此のあたりは白さぎの群をして居るを見かくる、美しき白き鳥よ、そら北投と岸樣のお言葉、急ぎ包を下すやら洋傘を手に持つやら、一番に降りた。三等車からぞろ〳〵と出てくる人にまじつて田舍には少ないきれいな道をたどつた、岸樣はどんどんと行つておしまひに成る姿はいつの間にか消えたおやと思つて進む中にわきの竹やぶがさく〳〵とまあびつくり岸樣ですもの二尺ばかりの細竹をステッキとはブン〳〵廻しながら先へ〳〵と私等は一生懸命追ひ通して目ざす溫泉へと着いた。休む間もなく湯瀧の落口の下に行つた頭の毛からびつしより、まあおはねですねえと靜さまが何んとでもおつしやい御自分だつて私位の時にはと云はうとしたが許して置いた、山登りしようと荷物なき身にはたやすく急ぎ飛び出す丁度岸樣もいらつしやつたのでてゝ三人そろつて登り始めた。陸軍の要地と云ふ樹木の美しゆう植ゑられ道芝は平らかにかつかうよき綠の松も珍らしゆう、ほんたうに日本の松を見しは去月渡臺して始めて今日見た。あへぎあへぎ頂きへと、今來し道も溫泉も細う小さく、岸樣はさあ歸らうとまあ少し休んでと云つても手製ステッキをふりまはしながら、此んな所へ殘されたら其れて

そ大へん、靜さまとはあく〳〵云ひながら下りかゝつたもう〳〵下へ着いた時は何と云ふ事も出來ない、のどはかわくしあせはしつとり女は弱いなあとしみ〴〵岸樣はおつしやる、靜さまと顏見合せ笑つてしまつた時計を見れば二時半、靜さまの袂をひつぱり停車場迄來ると未だ發車に二十分餘り、驛前の噴水のそばに坐つて遊んだ頓て發車、小さいけれどトンネルの苦しかつた事、淡水の海がと一聲に、じつと目をやればはてしも知らぬ海原の、知らぬ鳥、舟の帆。かんのん山の頂は高く向ふにそびえて居る、毎しか淡水驛へとついた群衆にまじつて町へと歩を早めた、まあ淡水の町は山の上ねえとあまり大きな聲なので前の人がふりむいた靜さまは丁度馬關の樣ねえとおつしやる、某國の領事館稅關などほとんど山の上、小さい土人造りの家はぎし〳〵とつまつてゐる、此の薄暗き惡臭鼻をつく所に朝夕すでせるものと感心した。市場の混雜の烈しい事其處も通り越し、勞れてある家へよつて休みました又汽車に乘る、疲れた足は捨てたい樣、外の空氣は沈んで來て、水牛の一つ二つ恐しい身體を水中に、草中に横たへて走る汽車をのろつてる樣、日が蕃界の山にかくるゝ頃我が住居に着いた。

若狹の俚謠

里　子

戀し〳〵と鳴く蟬よりも鳴かぬ螢が身をもやす
花の咲くよな氣安めいふてわたしほどよくだます氣か
私ほよどくだまされよまいと思ひながらもだまされた
わしとお前さんと別れの時は五尺手拭共しぼり
殿の江戸行き浴衣を縫へば涙じめりで糸ひけぬ
殿の江戸ゆき浴衣のはしへさいておきますまち針を
盆がきたならをどろとおもて樣とまちます七月を
いつも七月盆ならよかろをどりかこてつけ樣に會ふ
をどり子が來た七人連れで婆さん出てみやれ孫つれて
そばにゐてさへ戀しいものを遠くへだつる身のつらさ
わしとお前樣は舞子の濱よいつも青々まつばかり
おもひ出しては机にもたれてぼす涙は硯水
わしはお前樣に上紺なれどお前樣は浮氣の水淺黃
添はれよまいとは其や氣が弱い岩に矢の立つ事がある
お手を引き合ふて中山寺へ離れよまいとの願がけに

倫敦の塔を見る記

花山院貴美子

『倫敦へ行かれたら、是非記念に見て置きなさい』漱石先生の紀行記以來、誰知らぬ人もなき此の塔、叔母樣が呉々も繰返しておつしやつたのが、未だに耳に殘つて、先から心窃かに望んで居た所……、今度米國の大學を卒業し、バチラー、オブ、アーツの、學位を得た伯父樣が、歸朝の途立寄られたのと、來月上旬にはどうしても、ゼノアへ行かなければならぬのを幸にたうとう見物ことゝなつた。

二時頃からといふ約束なのに、朝から待たれてならない、仕度をすつかりして、待ち倦んでたところへひよつこり、從姉がやつて來た。

サア行きませう、水色の淡い絹地へレースで、大きくギヤダの取つた處女服に、同じ上衣を着て、縁に黒く條のはひつたボンネットの下から、大きな瞳と笑靨が覗いてゐる。脇の下へ抱かれる樣にして外へ出ると馬車の中にはもう、伯父樣や兄樣が乘つて居られた。テームス、エムバンクメントから、クレオパトラス、ニードル、ブラックフライアース、ブリッヂの邊りを過ぎて、倫敦市に入ると、蜃氣樓の如き高層な建物や黒く大きな煙突が、空に聳えて汽笛の響、車の軋る音につゝまれた、たあいもなく動搖しつゝある大都會の街を往來する人は幾百萬であらう。

うよ〱蟻の樣な群集が、たゞ警察官の手の動かし方によつて、左右縱横に整然として通行する樣に驚きながら、タイムス社、英蘭銀行、株式取引所、さては市長官舍、紀念塔のほとりを曲ると、テームス河も下流になつた、ドックの近くにある、これぞ有名なる倫敦の塔である。

灰色を帶びた密雲が、いくつも重なり重なつて、倦み疲れたるがごとき日光は、ときをりにぶき光りを放ちてこれから秋――來春へかけて名物の濃霧が、たちこむる初めかと思はるゝ憂鬱なる空は……、古き石を堆積せるこの塔に適はしく、塔も人の心までしつとりと灰色に化した樣に、云ひ難い愁氣に襲はれる、角々に四つの櫓のありしといふ角塔を中心に、其の左右には、やゝ低き圓塔や角塔がつゞいてゐる。獅子の門となづくるそこには昔二疋の獅子が飼養されてあつたとやら、その門の跡で馬車を降りて、右側の切符賣場で札を買ふて中へはひると、折柄幾組にも分れた學生の群が、教師に伴はれてぞろ／＼、その混雜は一通りではない。

伯父樣を先頭に皆で手を繫ぎ合つて、人雜沓の中を拔けて、今は涸れ果てたる濠を越し中塔をくゞる。バイワード塔を這入ると、左側に瓦斯タンクみたいな高い圓塔があつて、其上に鐘樓がある。鐘塔とて、エリサベス女王が、即位せられぬ前に幽閉された處で、鐵栓格子を篏めた小窓が二つ程ある。

血塔に至ればビーフイーターとて、美麗な金線で縁を取つた服をつけた番人が立つて居る。中世紀の面影のこる……疎らな白鬚を撫しつゝ、鎗を突き立てゝ屹然として構へてる樣は、ふるき物語りのある此の塔と共に、過去の悲慘なりし名殘を止めて居る。

この塔に向ふて謀反人の門といふがある。門は塔と塔との間を架する行廊の下で、大きい暗い拱門になつてゐて、ウエストミンスターで裁判かれた罪人は、橈舟でテームス河をくだり、再びこの門を潜つたのである。

今私達の佇んでる所は、アーチの中央に當る高處でそこから、數段の石級があつて昔は其の盡きたところまで、水が浸つてたさうである。此處を潛れば最後、今日か、明日か、早晩來るべき運命の宣告を受けることである。サー、トマス、モーア、アン、ボレーンやバツキンカムの、エドワード公爵、カザリン、ホーワード等が、逆手に斧をふりかざしたる、殘忍なる衛士

に護られて、矢張この石級を上下したのではあるまいか？、靜かに眼を閉づれば、蒼き顏、髮ふり亂したる憤怒の形相すさまじく、齒をきり〳〵とくひしばつたさま〴〵の姿が浮んで、ぞうつと、冷水を浴せかけられた樣に、思はず立ちすくんで了つた。

ビーフイーターの立てる門の上は血塔で、かつて幼帝エドワード、其弟リチヤードが、叔父に當るリチヤードの爲に弑された場ときく。

父王エドワード崩じて、幼王エドワードが今や卽位の式に臨まんとせる日、暴逆無道なる叔父リチヤードは、之を道に要して奪ひ去つた。驚ろいたのは母后のみではあるまい、僅かの近侍に守衞られて、幼き弟なるリチヤードを伴ひ、からうじて、ウエストミンスターに逃れたのを、またもや追ふて遂にうばい取り、此の塔へと幽閉したのであつた。

其の後叔父はリチヤード三世と稱して王位に登つたけれども、可憐なる二皇子の消息は杳として、誰知る者もなかつた。

夫れより二百餘年を經て、この塔を修造するとき白塔の入口の階段の下から、小さな二個の櫃が出た。その頃にはリチヤード王の骸も朽ち、母后の淚も涸れ果てたのであつた。

人々は只小さき二皇子の枯骨を前に、舊き秘密を語る當時を胸に描いて、雨の朝、風の夕、空ゆく雲を仰いではたがひに泣き合ふた光景を、追想して止まなかつたであらうに……鐵格子かたく閉ざした塔の窓は、今もなほ依然と存して、見る人をして思はず顏を掩はせる、血塔の下を拔けて、白塔に行く階段の傍に眞鍮の揭示板があつた。

「二皇子の遺骨、チヤールス二世の御代にこの下より發掘され、後ウエストミンスターに移さる」と書いてある。抑々この塔が倫敦塔の起原で、千七十八年、ウイリアム王の造營にかゝり、チヤールス二世の御世まで歷代、皇居となつたのである。

壁の厚さは十二呎乃至十五呎に及び、狹くて二人とは並んで通れない。暗い階子をまがり曲つて二階三階

になると、その大部分は陳列所になつて武器の中にはかつて、罪人に使用した拷問の器械、處刑の斬首臺などが並べられて、斬首臺の上には刃物の痕がある。かたはらの說明書には、何年の何月何日に誰々の首を斬つた趾だとか記してあるけれど、黑ずんで塊まつてゐるものは、若しやよく見たならば、當時の血の塊ではなからうか？。

手帳片手にいそがしさうに說明書と首引の、伯父樣や兄樣は、私達のずん／＼追越すのも構はずに、一心にかいて居られる。私達は極意味の判然やすい言葉や詩句の節を、ちよい／＼認める丈けである。今から思ふともつと詳しくかいて置けばよいにと、口惜しいことをした。

なんだかあまりに、神經を刺戟させた故か、心持が惡くなつたので、『早く出ませう』と急立てる樣にして外へ出た。

ラレーが十四年も、押こめられたのはこの塔の下なる土牢であつた。

少し行くと其處は廣い石甃で出來た庭で、ポーチヤムプ塔に至る通路に當り眞中に鐵柵をめぐらした、小さな四角い場所は、千五百四十一年の五月二十七日、サスベリーの伯爵夫人が、亂れた白髮を捩ぢ伏せられて獄吏の斧の爲に敢なき死を遂げたところである。

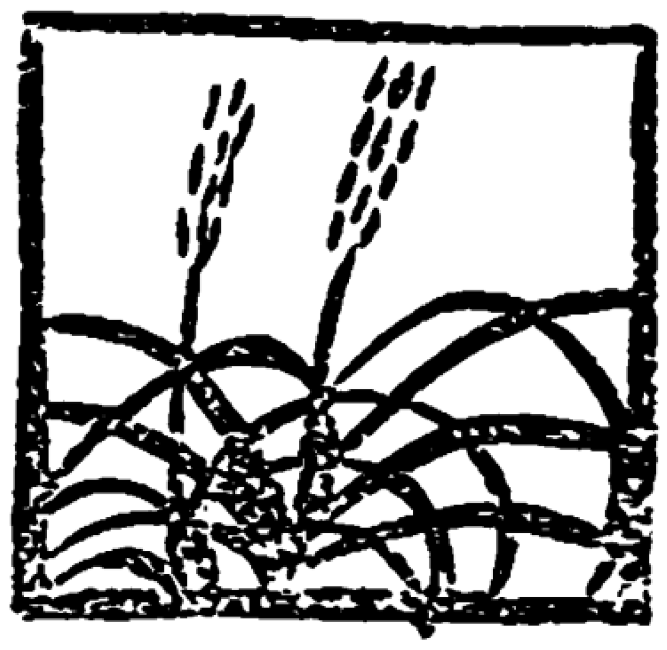
昔は首斬臺が据ゑてあつて、アレ、ボレーンや、ジエーン、グレーや、カザリン、ホーワート、或はエソクスの伯爵、ロバートなどが皆茲で悲慘なる最後に逢ふたのであつた。

ボーチヤムプ塔は多く永き恨みを抱いた薄命なる志士等が、憂き歲月を過した記念の塔である。

壁のところ／＼に短かい文字の、彫り殘つたのは、明日とも期し難き生命の、せめて盡きざる後の世に、形見として滿身の力と氣を込めて彫つたのであらう。

その中に短かい詩の一句がある。

T. A. と彫られたその下に、June. 22. 1587. と附けたのがある、Jane とジエーン、グレーを意味するので、その夫ダットレーの仕業とか傳へられる。



北海道の山火事

常磐子

今春は雪が融けてから、未だ風らしい風が吹かないので、農家では安心して畑の塵焼きをして居るだらう。

「今春は山火事がなくて、良いあんばいですね……」と皆の者が喜んで居る。殊にも、歩む事の出來ない私に取つては、何より有り難く思つて居る。けれども未だ未だ安心は出來ない。五月二十八日、夜明け頃から吹き出した南風は、夕方に成つても止まない、だん／＼と強くなりさうである。

「愈吹くんでせうか」と私は幾度も斯う言つた。次の日には、いよ／＼本式に吹いて來た。「困つた風だ」と私ばかりでなく、壯健な人でさへ、心配して居る。

茶の間では、お客樣が二人入らしつて、叔父と母と四人で去年の山火事の話をして居らつしやる。私は一人で此室に靜まつて聞いて居た。

甲「北海道は毎年の事だから火事は珍しくは無いが、日中に提灯を點して歩くなんて事は、先々前代未聞の事ですな、神代に有つた事はマア格別ですけれども」

乙「左樣で御座いますよ、三十八年の火事の時にも、隨分心配しましたけれども、去年の樣な事は有りませんでしたものね……」甲「彼の時のは、兎に角、火も低いし燒けばが知れて居るのですから、三方から責められて居てもどちらか一方燒けて終つた跡へ逃げ樣と言ふ考へもありましたが、去年は山の陰でもあるし火も未だ遠い樣だからと思つて居る處へ。急にあんな事に成つたもんですから、どうなるのかと思ひました。其れでも、せめて暗闇に許りも成らなければ、同じ心配でも心配の仕樣も違ふんですけれども？……何だつて氣味が惡くて逃げ度と思つても逃げられませんでしたものな」

乙「ほんとに左樣で御座いますよ。田中樣の御隱居が生れて八十三年にも成るが、斯樣な目には逢つた事も聞いた事もない、之は唯事で有りませんと言つて居らしつたですよ」。

丙「私共でも困りましたよ、良人は留守だのに、此樣な嬰兒を抱いてどうする事も出來ませんのですもの、其れでもねえ此の子を泣かせ泣かせ漸くの事で裏に三尺許りの穴を堀つて、大切な品だけは埋めましたよ。

其所へ秀子が來て誰のお話を聞いたものですか、世界が引くり返るんですとよつてマアネエ一郎までがなんとか言つゝ泣いて居るぢやありませんか。斯樣子供を三人も連れて、どう仕樣かと思つて、私まで泣き度く成りましたよ」などゝ其當時を思ひ出しては、皆銘々に語つて居らつしやる。

私も思ひ出さずには居られない。夫より夫へと聯想した。自分も去年の春は、二十里距つた南の方で、やはり山火事に圍まれて居た。けれども、當地の事は手紙や、新聞や、歸つてから、人の話を聞いて唯想像するだけであつた。

五月九日からの火事騷ぎは、二十七日迄靜まらなかつたさうな。山は三方一面に燃えて居たけれども、二方面は餘程遠いので、一方許り守つて居たさうな。すると、十五日の午前十一時少し前に、俄に草色が變つて來て、何事かと驚く暇もなく暗く成り始めたさうな愈煙の爲と知るや、警察の鐘は鳴る、消防組は走る御用人夫は走る、市街は一時に沸き返つて來て、皆逃げる用意をして居たが、益々暗く成り出して十二時頃からは眞の闇、一間も離れゝば物陰も見えなかつた。實に何とも譬へ樣のない氣味の惡さ、內はランプ外は瓦斯燈提灯をつけて皆狼狽したと云ふ事である。午後四時少し前に晴れかゝつたが、約二時間も暗闇騷ぎをしたので、皆欲も財寶も打ち捨てゝ、命だけでも、助かり度いと神佛を祈つたさうな。秀子さんが世界が引くり返るつて、泣いたのも、田中樣の御隱居が唯事でないと、仰しやつたのも、尤もだと思つて聞いた。

燒け場まで四里も隔つてあつたので、幸に市街は障りなく終つたが、隣村では四十戶燒かれ、人死も出來、砂金山では煙に卷き込まれて立つ事も叶はない爲に、一晝夜は、食も用ひず地べたへ臥して居たが（最早之れまで）と決心したと云ふ事である。

丁度其頃は、彼の地でも、山火事で大騷ぎであつた自分は親戚も無く、知人もなく、日は梢から出で梢に入る彼の森の中に居るのが、唯恐しくて、何か良い折を見出して歸らう／＼と思つて居る矢先であつたので、怖い乍らも今こそと竊かに嬉しくもあつた。同じ九日から燃え初めて、三日目には前後左方に黑煙が上つた。「近い處だッ」と農夫等は皆連れ立つて消しに走つた。ドン／＼バチ／＼の轟きや、上る煙は隨分凄じかつた。其れでも炎は見えない。深林の爲なのである。

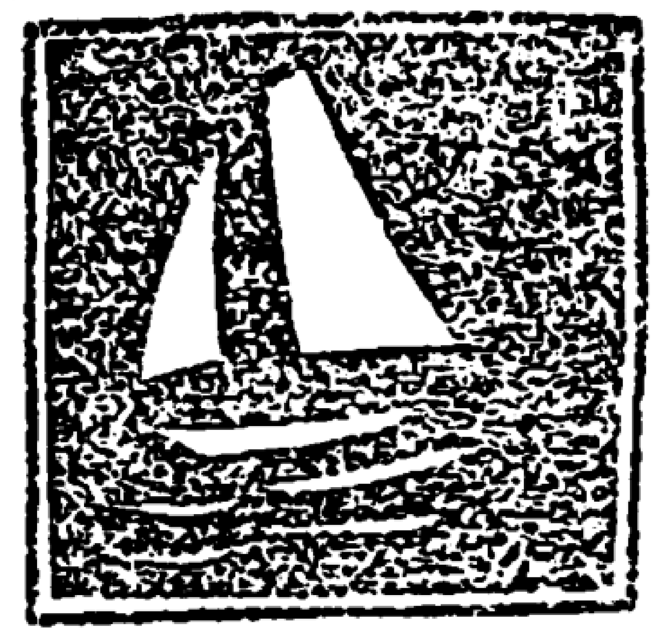
自分は大切な品だけを一つの鞄に詰めて、イザと云ふ

時には、此れを脊負つて右の方へ飛んで行かう、三里丈け無事に行けば其れで宜いのである。心配は道中だけの事であつた。夕方には農夫等の眞劒な働きと、風の變つたのとで、後の方は安心に成つた。が前の方は順次に廣まつて來て、次の日の正午頃には、面前一里許りの間に、白い黒い煙りは、切れ目なく續いて、此方へ〳〵と靡いて居る。風も可也有つたけれども、其丘と吾々との間には、此邊で有名なノトロ湖が横はつて居るので、風も、飛び火も、烈しく來ない限りは安心して居られるのである、日暮頃、ポッ〳〵と見え出した火は、宛然提灯行列の様であつた、燒け埃は雪の様に降つて居る。湖水は之等を殘りなく寫して靜まつて居る。實に美しい眺めであつた。

美しい眺めと言へば、八年前の時のも其内に數へ度くなる。烈しい風と共に三方から責められて、逃げ場もなく、オッチス山から下りた火は、既に町へ二三丁の處迄近よつた。火消しは、必死となつて働らいて居る、関の聲、右に左にかけ廻る人の叫び聲、稲荷神社では御祈禱の大皷、町の内外は大雜沓を極めた。私は船へ乘りませう、と言つて泣いて叱られた。けれども幸に、風も穏になり、町も辛うじて助かつて、人の顔も色づいた後であつた。其の夜の空は星一つ無く黒いけれども、町は火の光で、電氣色に光つて居る。遠く隈なく見える、大山の巣の、白く赤く燃えて、下る火足は稲妻の様に早く〳〵忽、山は一面に火ぐるみとなつた。唯明るく煙さへ見えなかつた。大木は皆立ちの儘に根本から光つて、火の花が咲いて居る。花瓣は風に舞ひ上つて八方に降つて來る。生溫い風は、微に袖を拂つて、遠の眺めは實に美しいものであつた。とは云ふものゝ彼れが若し近くで有つたなら、と思へば、今更ながら却つて恐ろしいのである。

此邊は山火事の爲に、隨分種々な騷ぎがある。けれども私は夫を滿足に云ひ現す事が出來ない。毎年々々の事が皆もつれて、只々恐しい、此山火事は一體何時頃から始まつたのだらうか。私がまだ幼い時であつた赤く黒く燃え上つて居る火は、可也近場であつた様だ皆大騷ぎして屋根に水を打つたり、軒に水筵を掛けたりなどして、私は誰にか御負されて泣いた事を、淡く夢の様に覺えて居る。いやだ〳〵、追想したゞけでも身振ひが出る。

今春は幸に無かつた。どうか來年もない様にと祈つて居る。



蜜柑の產地

宇田すが子

森も丘も、野原も、川原の石も暑に蒸されて、木々の葉の綠は一層色こく銳さをます、地上からのぼる水蒸氣はかたまつて、林に丘に白くかゝつて居る、空には雲が色々なかたちをして動亂する。

幾十町歩となくつゞいた蜜柑畑が、北方へゆるく傾斜した山の面にひろがり、しなてい強みを示した蜜柑の樹の幹が、たいしや色をした粘土のボロ〳〵した上に根ざし固く何物にもゆるさぬ權威を現はして居る。惡どい程濃綠な蜜柑の葉が一面ギラ〳〵と鱗のやうに光りを射かへして居る、その葉の間々には銀ばつた青玉の樣な小さな手まりほどの蜜柑の球がさゝへられて居る。

水晶の水をたゝへた樣な紀伊の急流を眼下に見た此の山は、今あざやかな綠の色に埋つて居る、谷々の松林を鳴して風は終日吹く、最初ケ峰の頂と東にそば立つ紀州富士山上には折々雲がかゝつたり晴れたりする雨模樣になつて、雲が濃く山の姿を包んでしまうと松林と蜜柑畑が浮出た樣に眼前に迫る、雨が晴れると山際が澄んで空色は濃くなる。

山のふもとの河の岸、白蛇の樣にうね〳〵した一すぢの小路をおいて、山を背にした二十戸ほどの村がある、女がおるネル機のおさの音がきこえる。

こゝらの山の裾は蜜柑山と桃畑とを除けたあとは大方松林で上部の方は多く草山だ、五月の頃はつゝじの花に山が赤くなり、夏は百合も咲く、秋の七草は友禪模樣の樣に染め出され、目ばかりギヨロ〳〵光らした獸の樣な山行き男の渡舟においた柴荷の中にはほしい樣な美しい花が他の柴と一所にかりとられてある。

はるか東の方に龍門山と云つて他の連山よりはなれて、孤立して居る、紀富士山と名づけたこの山の姿は妙になつかしい、いつも登りたいと思つてるばかりでまだ登つて見たことはない、海拔二千數百尺の山上には、異つた植物があると云ふ、大きな磁石岩もあり八合目あたりには千古塵にふれたことのない湖の小さい明鏡があつて、雲や月や星の外に親むものがないと云ふ、秋はれた日には西の方はるけく淡路島山夢のごとくまぼろしの樣に見え、北方葛城山脈を越して和泉の

平野一目の中にありとか。

この山へ雲がかゝると、雨の降らないことはない、東の峯へ雲がにじんでくる樣に湧いたかと思ふと必ず雨がくる、「そら雨だ」と家々では干物などを取入れて小さい雀は幾千となく群れて空を暗く舞ひ出したかと思つたら、後から追かける樣に大雨がはしつて來る。

夕方には此の連山にうすく靄がかゝる、これが西へまはると落日を包んで炎の樣にもゆる日は眞赤で何ものもやきつくさうとする勢を示して居る、みかん畑や松林にあか〳〵と射入ると各々の樹の幹をてらし、蘚苔を赤く染める、夕日がしづんだ後でも、夕やけ雲が紅くかゞやいて、餘光はやはりこのあたりをしんみりと照す、川面にも金の波がチラ〳〵と潮の樣に迫る、川千鳥は高く鳴く、眞白の鳩が數羽とんで黒い山に模樣を染めぬく。

夜風はもう冷たい、月が照つて峯々の白雲に輝く、うすい靄にそこ黒い一帶の松林やみかん畑の中には、山番の家の燈はほたるの樣にともされる、ふもとの村にも灯影はゆれて、いう〳〵と水銀の水に長く引く、星を散らした玻璃の空と、魔のやうに山の尾を被ひかぶさつた蜜柑や松林と、灯と銀の水と、私はいつも云ひ樣のない心持になる、あゝ我が田中の村よ、紀水のほとり山のほとりの我が住家、私は何物にともわからぬものに向つて感謝をする。

裏の木せいの花が白茶色に咲いてしめつぽい匂が恰度香水の目にしみる樣に、苔にしみ渡る頃ツク〳〵ほうしが柿の木に來てなく頃、スク〳〵のびた稻のほにうす黄色の實がやうやくふくらむ、田の間をでばんの樣に流れた小溝を埋めるものは、眞白な夕デの花だ銀色をした鮒がピン〳〵はねて居る。

路ばたや、堤には、彼岸花は鮮血を流した樣に見せる、ボキリ〳〵と折れやすい其のくきを棒きれをもつた男の子供は、みな殺しにせんばかりの勢である。

紀の川に鮎が澤山とれるのもこれからだ、秋の夜のさえて雲一つうでかぬ時などは各々持ちはこんだざるの中にきれいな香魚はうづ高くもられる、なめらかな皮、白いかるい上品の味のする肉、鹽やきにしても刺身にしても、田樂にしても佳い、永くたくはへやうとするには素燒にする、香ばしい鮎の燒く匂が家々からもれ出る、泥地に水流ののろい長良川や有田川などのよりは、砂利地の澄みきつたこゝの急流の方が美味しいのだと云ふ。

秋やうやく老いて、山や林や森にまじつた落葉樹は色づいて、赭色、黄色、茶褐色、紅色、常綠木を色どつた頃になると、みかん畑の葉かげの球は、ふつくりと圓みをもつて、ふくらんで黄金色にも枝もたはゝになつて居る。

これらむしりとられた蜜柑は一時それ〴〵家々の土藏の中や納屋の板敷の上に山とつまれる、それから上中下と云ふ風に選られて、白木で造つた四角な箱につめられる、舟に高く積まれて白い家の樣なのは、スルスル油のやうな水の上をすべつて行くのも見える。

近頃はこの連山の彼方から川の上を通じて北岸に達した策道はある、幾モートルの發動機か知らんけれどもすゑつけられて、盛に運轉して居る、山の彼方から引張られて太い二本のラインが、はつきりして居る、小さい白いみかんの箱のいくつもたばねられたのは一荷となつて、一方のラインにそつて、よろこびにみちた樣にいそ〳〵と降つて來る、後へあとへといそがしさうに追つてくる、ゴロ〳〵ゴロ〳〵と輕い音をたてゝひろい空地に草をばみながら角ふりたてゝ待ちうけてゐた牡牛のいくつかは、わだちの厚い牛車につながれて、みかんの箱はのせられて、驛へ行く。

陸路をすぎてすぐ都會へ行く蜜柑もあるだらう。

沖のくらいのに、白帆が見える——

あれは紀の國、みかん船——。

眞黒な潮路をさして海外萬里、小さい箱の蜜柑が、息をもつかずにゐるのもあらう。

紀州の人は蜜柑を食べる時は、一々きれいに、むきはせんのです、十字形に四つにパッと割りまず、一房づゝおもちやになんかしません、何かにつけて人前の假面を裝ふて居る人前でならいざ知らず、私共はふだん、ねそべて雜誌なんか見ながら食べる時は其の四分した一部を一度に口に入れます、これの方がどんなに美味しいでせう。

都人士たるみな樣方よ、みかんの皮の黄色い色を、花がすの光りですかして見て、オレンヂ色の一房づゝ白い雲の樣なすぢもきれいにとつて、ちゆうと舌で、甘酸い汁を吸ふ時、せめても紀の國の山野我が蜜柑の產地をせめても想ひ見て下さいまし。

眞白なるみかんの花のこぼれては
海に入るなり紀の川の水

秋の風山より吹けば葉かげなる
みかんの影はあらはれにけり

家出の記

毒だみ



……私は、私は、えゝ口惜しい、もう〳〵一層のこと死んだ方がましだわ……

ふん何だつて、死ぬ、おい死ねるんなら死んで見な立派に死んで見なよ、ふん死ぬだけの勇氣もない癖に口幅つたいことを云ふなよ。

えつ何で御座んす、死ぬ力がない、只死ぬ力が、ええ死にますとも死にます立派に私は。

うん死ね！勝手に。

はい死にますとも！。

かつと逆上せた血潮に手の先迄ぶる〳〵とふるへる蹶然と立ち上つた私は部屋に引き取つて手早く着物を着かへて門涼みの人の眼をさけ、宵暗の町を忍びやかに家を出た、せつせと足許ばかり見つめて二丁目の角迄辿つて來た時、其處に俥の帳場を見出した、一臺ね驛まで行つてお呉れ、早く急いでねと聲が妙にふるへるのをやつと言葉らしいものに綴つた。

ゴム輪が静かに風を切る、私は目を瞑ぢた、わくわくと烈しい鼓動、何の條理も立たない悲しさ口惜しさの縺れ合ひ紛糾がつた胸裡の底に、私の死は勝利だ、死は勝利、さうださうだと叫ぶ聲がする。

唯參りましたお孃さん。梶棒はまさに下されんとしつゝある、さうどうも御苦勞さんあゝもういゝのよ歸つてお呉んなさいと、隨いて來る俥夫を二等待合室の入口で返し、私は手近な椅子に投げ出す樣によりかゝつて深い吐息と共に四邊を見廻した時、私の周圍には種々の顔があつて、その何れの一雙の眼も私に向つて投げられてあるのを知つた。つとめて何氣なき樣を裝ふて正面の大時計を見ると、まさに午後八時十分過ぎ直ぐその側にとりつけた煽風機がきいと左に廻つては又右に轉じて來る、その度毎に眞中につけられた細長い眞赤な紙がひら〳〵と水中の花の蕋のごとく動いて居る。私は時間表を見にと立つた、西下り大垣行、八



時四十分、東上り新橋行九時五十分發。突嗟の間の決心に私は行く先さへ極めて居なかつた、家を逃れて何處かの山の隈水のかげに死なうと云ふ大ざつぱな考へは在つたけれど――元の席に戻つた私は又目を瞑ぢたお前に死ぬ力があるか、死んでおしまひ。え丶死にます死の勝利、さうださうだ私は死ねば強者になる死!死!!、かう一順繰りかへして行く中に熱い涙が瞼に滲むのを覺える、雜多に入り亂る丶足音叫び聲、その一つ一つに私は深き注意を自ら傾けた、時々眼をあげては灯列らなる驛の外を見て半ば恐る丶様な、半ば懷しい様なある者を待つ心地を湧き立たするけれども――何者も來ない私のひそかに期待する何物も來なかつた大垣行きは間もありません、西行きの方はありませんか、と驛內係りが知らせて廻る。

私の心待ちに待つ陰は何も來ない、え丶見殺しにするつもり、私を皆で見殺しにするの?……

留むる人なしと知つて私はいよ／＼腹立しい、行かう水美しい美濃路へと!蠟細工の様に透き通る水死の人の膚と紺碧の渦く淵に亂る丶帶の紅とがちらりと眼の前を走つた。水死身投げと口の中に繰り返しながら私は岐阜迄の切符を買つた。

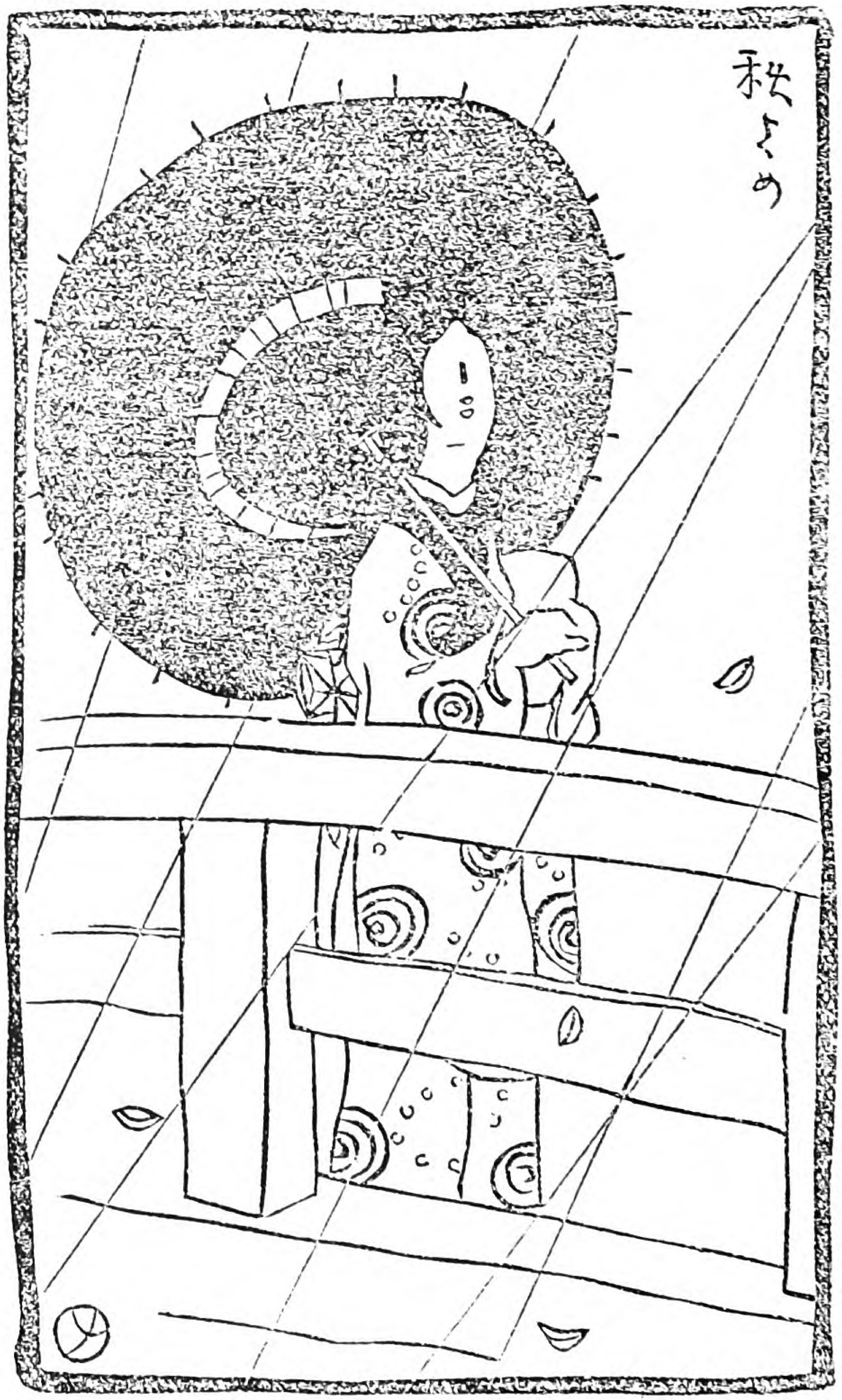
私は車中の人となつた、かなり混んで居る、二等室の一隅に腰かけて窓越に眞黑なそして透き通つた夜の世界を見た時、今夜私が歸らないので流石に立ち騷ぐ家人の姿を想像して何やら勝利を感ずる様な微笑を口許に浮べた、私は强者になる、生の執着見事に絶つて――名古屋枇杷島稻澤一の宮、次に止つたのは木曾川驛、なつかしき名よ木曾川、渦巻く淵もあらう碧を湛ふる瀞もあらう、私は此處で下車りよう。

小さな煤けた木造の停車場構內を出ると、邊りは眞暗ださく／＼と踏む路も砂が深く川近きを思はする、暗の道盡きて鍵の手に曲らむとするとつ、、、つきに一膳飯と大きく御定宿と小さく勘亭流に書いた掛行燈を出した家がある、私は煤けたその障子をあけて、

今晩は御厄介になりますと聲をかけた、へいと暗い帳場から此方を見た亭主は、肉付のい丶一癖ありげな四十男だ。お一人ですかと怪見な顏?「あ丶一人なんですよ、岐阜まで行くつもりだつたけれど木曾川つて名がいかにも好いから下車りて見ましたのよ」。へいとます／＼疑晴れぬらしい眼付、でも奥に向つておい御客樣だぜと大きな聲を出す、へ――いと長い返事と共に大形の浴衣に白粉あやしい女が顏出して、これまた意

外の面地、早く御案内しやしよか、新座敷が宜からずに。へいと女は私を導く、夜目には確とわからないけど些かの木等植ゑた中庭らしいのをぬけて、棟の低い二間つゞきの座敷に案内された、新座敷と云ふ丈け木口は新しい。

姐さん、私ねお湯も御飯もいゝからね早く宿帳持つて來て頂戴、さうして床を取つてね、ああ次手に此の硯箱置いて行つて頂戴な、少し書きたい事があるから、へいさうですきやあも、おやすみやす、と女は出て行く天鵞絨襟に垢の着いた厚ぼつたい夜具と木綿蚊帳はこの家に相應はしいさもしさだ。



がりがりと音のする墨を磨つて、禿筆にふくませ懐紙に覺束なくも書き出した、——廢さう、沈默ほど大きい意味を語るものはないから——。

生きてなべてを遂げ得ざりし心弱き私も、強き生の執着を離るゝ刹那、始めて何物にも囚へられざる強さを得可く候、七寳壯嚴をきはめたる寂光の淨土は私の行く手に見えて候、

されば私の死は歡びに御座候——。

短夜の白むまでにこんな反古は出來上つて居た。

○

旅の一夜はともかくも明けた。

「あの朝の御飯前まで一寸いと散歩に行つて來るからね木曾川つて何方なの。」

「川かなも、こゝの横の街道を眞直に行きやしてなも十五六町位はありますがなも」と宿の女の敎へた道を私は辿る、沿道の家はほんの一列だけでもう後は田になつて居る、それでも可成の構への雜貨店もあればガラス戸に赤い軒燈の出た巡査の駐在所もある、怪しげな菓子屋の隣に白壁の肥料商も並んで居る、今仕事を始めたらしい鍛冶屋の店では眞黑な小僧が私を見送つてぼんやり立つて居た。

間もなく家は途ぎれて松並木と成る、兩側は稻田が廣く展開して間々には桑畑や紫の穗をつけた黍の畑やら交つて居る、快くのびた穗の出まへの稻の葉には何れも何れも白露が結んで風もないのにはらゝはらゝとこぼれる、東から南にかけて朝日をうけた銀色の雲が地平線近くたなびいて、その間を美濃邊りの山々がなだらかな姿をうす紫に隱見させて居る、その中に一段濃く近く淡墨を以て手強くゑがき出した樣なのは見覺えのある金華山だ。西から北の空は平野の國なる尾張だから見あての山さへない淺黃色の空は廓然として居る。向ふの方から赤い裳の村娘やら瓜を車につんだ村の人達が二三人づゝちらほら遣つて來る、かの廣重の五十三次の繪を、現在にかへした樣で昨日來昂奮し切つては神經は妙に和いで、反對に輕い淸らけささへ自然に覺えた、繁華な人いきれのする名古屋から二六時中出た事のない私は、久し振りに美しい自然の手に抱擁せられ、淸いその接吻を得たのだから、何がなしに嬉しくなつた。精一ぱい息をして、ほつと立ち留つた時に、お前は死に來たんだよと裏切る聲が耳許にする、私は猶もゆき〱する、間もなく橋が見え出した灰色に塗られた長い鐵橋が、あゝ川に來た、かねて目指した川へと。

○

私は長い長い橋の眞中の邊に立ち留つて下の流れをじつと凝視めた、うす濁りして流れて來る水は橋杭にせかれて喰ひ込む樣に渦となる、その名殘の小波はゆるく波紋を作つて次へとつたはり目も及ばない邊で消え失せる、かくて斷間なく消えては出來、出來てはきえ、微になつたりのびたり私の眼を奪つて行く、遂にはから〱と身軀も吸はれて行くやうだ、流れはまさしく私の爲め死の誘惑の言葉の綾である。倒れかゝつ

た欄干は私の胸乳の上てすまで高かつた、さうして左から右へ右から左へとうち交した鐵の板の間も密で身をどらせる餘地がない、私はじつと赤凝視めた、熱い涙はぽた〳〵と川の面に落ちた。

私は身うごきもしなかつた。

緊張し切つてた神經か漸次ゆるみ出して、總身から力と云ふ力をなくしたかと計りがつくり欄干で身を支へた死！死!!死!!!と暫くして口の中でくりかへした、私は慄然として身を退いた。

○

それより一時間の後再び木曾川の驛に出た。

私は死ぬまい、美しい自然に歡喜を感ずる若さのある中は私は未だ死ねない、私は死ぬのは早過ぎる、不



可能の事らしい。私は生きて再び戰はねばならぬ、精進せねばならぬ、然し名古屋の家に歸るのは遠い後の日と期し樣。私は葉書を買つた、只一言生きて居ますと兄と嫂とに云ひやる爲めに。

かくして私は生きねばならぬ、烈しい渦まく東の都か千古の夢やはく懷く西の京か、いづれを選らばうとせまい待合室の一隅に孑然として一人で立つて居た……。

美濃の俗謠（節子）

桑を摘む〳〵十八娘、白い手拭姉さん冠り、若い衆迷ず里唄すゞし、男そつとよる桑畑ヤレコラ
岐阜はよいとこ金華山の麓お城下まで船がつく
ほれた〳〵と皆さんが仰るいつの水出て何處ほれた
太田八代は畑どて田どて娘やりたや婿ほしや



紫野の思ひ出

かうほね

紫野には、夕毎に大德寺の鐘が清爽な響を齎した。彼の鐘の音を數へながら友と草をふんで校庭を逍遥つたむかしがなつかしい。

夕になると、白楊の梢から見える空は黄櫻色であつた。

今頃は、野菊が淡い紫の色を一面にこぼして居やう。その中に横つて大空を仰ぎ、故郷を思つた頃よ。

春は彼の階上の窓から見ると、菜の花が一面咲きつづいて、加茂の松原もその黄色の中にうづもれさう、遠く遠く比叡の裾まで、北山の麓まで、續いてゐるのではないかとまで疑はれた。西は村家の屋根が南へ南へ、花の中を縫つて京の町へつゞいてゐる。

菜の花が褪せて綠にかへる時分には、燃ゆる様な彼岸花が、どの畔にも〲咲く。それを遠く眺めると、朱色の所もあり、濃い紅の所もあり、何ともいへぬ美しさ。春毎に如何にか胸を躍らせたらう。此處から飛び下りてあの綠の畠の上を辷つていつてあの花を一掴み取つて來たい、なんぞいつて友に笑はれたことさへあつた。

こゝの村の子は象牙の様に白い花の柄をプチ〲折つて所々を取つて丁度瓔珞の様にして弄ぶ。生垣めぐらせる村の家の前を過ぎ、ほゝゑみゆたけき子の小さな唇に、この花の燃ゆるを見てはら〲したこともあつた。あの畔を蔽つてゐるのは彼の花ばかりかと思つたのに加茂に詣でた友は誰も〲木瓜の花を挿してゐる。それは歸るとすぐ机の上の小さな白磁の瓶やコップにさゝれて喜ばれる。彼の明るい應接室にこの花の大きな枝が映えてゐたことも覺えてゐる。京の子はこの近い所にかゝる美しい郷あることを知らなかつたでせう。春淺い頃、行つてごらんなさい。あの神々しいまでに美しい比叡の峯の聳えてゐる下には、里の子が摘つて食べさうな茅花の穗のまだ柔かいのが裾をさばき得ずして至る所になびいてゐるし、蒲公英に似て少し優しい、枝のある花が風に搖いで居るし、紫の菫の

花、香のあるのやら、ないのやら、濃いのやら淡いのやら、稀には白いのなどが畔といはず、叢といはず、麥生の中にも清冽な水のほとりにも咲いてゐる。麥の穗波に分け入つてはよく摘んで歸つたことがあるあの野を紫野といふのは一休和尚以前からではあらうけれど、私は彼の峰の紫の露が朝に夕にあの野邊にちらばふのでかく紫の花がさく、それで紫野と名づけられたのだとかう解釋してしまつたふる理屈に生たいと思はぬこの少女だけにはかくいはせて置いて下さい。



昔は彼の大宮人の衣を染むる料となつた紫草とやらが、咲き匂つたといふけれど、今は何處にいつても見つからない。清女の筆に上つたおどろなる垣根は何處であつたらう。葵かざす美しい加茂の祭に、櫻かざした公達を偲んだ人達の歸路には賤が垣根もふり返らるゝであらう。

卯の花咲く夏のはじめ、菜種がらやく時の壯觀は都の人の夢にだも知らない所でせう。月のない、星のまたゝきのみ忙しい夜、あちらにも、こちらにも、山の樣に積みあげられた菜種がらをもやす。誰かゞ音のない大海戰だといつたので南寮も北寮も窓といふ窓から私たちは爭つて眺めた。それが月の夜ならまた格別である。月光はさし

込んで來て窓硝子を乳色に見せる。菜種がらたく煙はこゝにまで漂つてきて何ともいへぬ色をなす。焰のあとに煙がゆる〳〵と月光の下を立ち昇るにもまことによい。私はどうしてもその景を忘れることが出來ぬ。時々は加茂の森を過ぐる時鳥の聲を、夢ともなく現ともなく聞いた曉もあつた。

紫野に近き糺の森に、暑さを忘れてのかへさ、夕暮を加茂の河原で遊んだことがあつた。水は少いけれど透つて居た。河原のあちこち、全く月見草でおほはれてゐる。我が友の（夢の國への道しるべではなからうか）とまでなつかしんだ、あの花。微風そよぐてこの河原で、この花に埋れて眠つたなら、きつと〳〵美しい夢を見ることが出來たであらう。

少し秋風たち初めると、こゝには川原なでしこが礫にすがつて夢の樣に咲く。友の月見草を愛する如く私はこの川原なでしこを好む。瞿麥のさきほこる時分にはもう時々雁が鳴いて空はすみ渡る。常は賑かな校庭のテニスの騷も靜まつて誰も〳〵故郷がなつかしいといふ。

蕭條と雨のふる宵や雁鳴き渡る夕には家を遠く離れた少女の身には淚ぐまるゝも當然であらう。

紅芙蓉しぼむころほひには、萩の花のこぼれる處に名知らぬ蟲の喞々歌ひすさぶ叢に、私は極みなき天空を凝視し、或は雲の色の美しさに見入るのが常であつた。まことに、京の町に生れて町に育つた身には何よりもそれが嬉しかつた。大いなる空よ、澄明なる心ゆくかぎりひろき空よと嬉しき時にも悲しき時にも慰めとなつた。紫野に來るまで生れてかゝる大いなる空を見たことはなかつたのである。この頃には寢るに惜しき月のよい夜が續いた。消燈後の窓に月沈むまで心あひたる友と語つたことがあつた。二人の憧るゝ世界を幾度夢みたらう。彼のなつかしき友よ、も一度かの窓に心の絃を共鳴させて見たい！秋深うなると、かれがれな秋草の下葉も色づいて、しばし晩秋をかざる料となる。この時、私の最も好きなのは犬蓼で、穗の先から莖の根元まで何ともいへぬ美しい紅を潮する。また、よく石垣のほとりなどに豆蔦の紅を見ることもある。あまりの美しさに取らうとすると葉がほろほろと落ちてしまふ。それを大切に拾つて來て書物の間に挿んで置いたら、惜しいことに二三日で光澤が失せてしまつた。その石垣の下の水清い小川には目高が群をして泳いでゐて私が傍へよつた時にはその可愛い影

はなかつた。歸つてきて其話をすると（眼に星の出來た時コップの中へ入れて泳いでゐるのをそのまゝ飮むのよ、不思議になほるつて……）眞面目に敎へてくれた友があつて（お腹の中で泳がなくつて？）と大笑ひしたこともあつた。

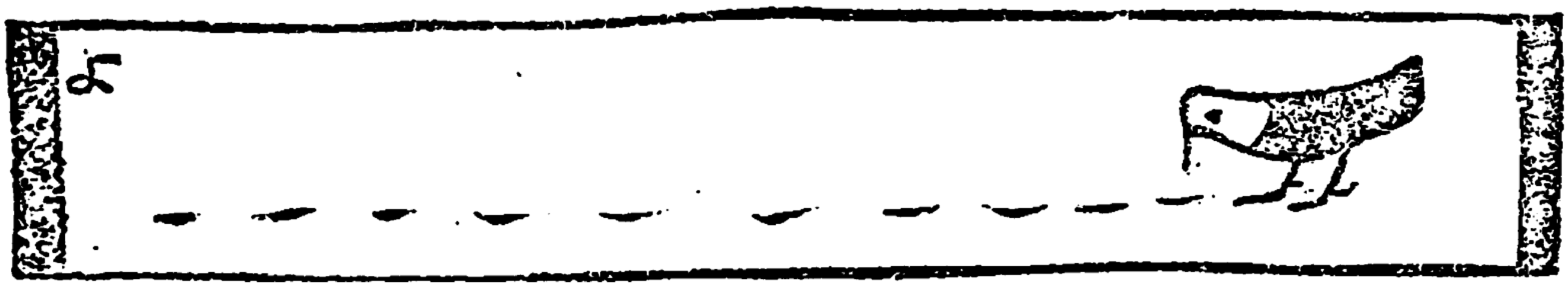
手の冷たさに明日あたり霜が降るだらうと思はれる日、比叡の峯の後から比良山の雪が銀色に光つてゐるのが見える。同じ窓から私の肩ごしに眺めてゐた友は（紫と白とのだんだら染、きれいね）と感に入つてゐた野には夕陽に輝いてゐた黃金の稻波が跡形もなく退いて、さびしい比叡おろしが吹き荒んでゐる。舍內の野菜畑を駒下駄で步くのに足が痛い朝には、比叡の峯が崇高な姿を上の方だけ眞白にそめて半天にかゝつてゐた。

全く、比叡の眞の姿は、この紫野をおいては見られまいと思ふ。同じ紫といふけれど、朝に夕に幾度か色をかふるといふ、なつかしき彼の紫の色よ、私はかつて夕の色に眺め入つて彼の紫の色に溶け行かばやと願つたことさへあつた。この里に一度住まん者恐らく一生彼の嶺の姿を忘るゝことは出來まい。

少し寒い日にはきつと北山から東山へかけて、山々は薄化粧する。息の凍る樣におぼゆる曉には（雪が降つてるのよ）と友が告げてくれる。起床の鈴の鳴らぬ先からそつと廊下へ覗きに行く。まあ（綺麗！銀世界よ）自分の聲の大いのに心づいて自らの口を抑へる友もある。鈴が鳴ると皆廊下へ走つて出て眺めゐる。（遲くなるわよ）と階下へ走り出す。さういふ朝は一番快かつた。理髮室でかじこむ手に息かけながら髮をいつて、洗面場へ行くと水蒸氣が窓硝子に凍りついてゐる開きにくいのを無理に一枚開くと東山は正面。（まあ）驚歎した樣な聲を出す人もある。棒の樣に凍てた手拭を取つて、清冽な水で身體を拭つて、唱歌など小聲でうたひながら室へかへる心地よさ。着物着かへながら眺めやる中庭、雪の下には水仙もあるし、赤い實の南天もある。蕾ふくよかな梅の樹もあつた。

鞍馬の雪もとけそめると日の光や、草の香や、土のあたゝかみ、水のさゝやき、春に蘇つた紫野の若さに天にも、地にも、限りなき光明と共に、みちあふれる。

夏には雲やく　　あたごの夕日
冬には雪吹く　　ひゑのねおろし
しのびてそだちし　のぞみの草の
今こそ花さく　　春となりぬれ……



その折り〳〵

英子

生れ出でし日のよろこびを思ひつゝあるかなきかの今を悲しむ。

何故に我は女と生れ來し口惜しきことの多き身なれば。

墨うすく走り書きせる文机に涙と共にひなげしちりぬ。

アカシヤの花ほろ〳〵とこぼれ來て悲しき思ひと胸をつく。

入日する黄金の色のはなやきて青き廣葉のざわめく夕。

さ青なる綠の梢はてもなく續くを見ては涙しぬ我。

さ青なる疊の上を吹きわたりさて我をふく六月の風。

乳のあたりかろき痛を覺えつゝ若葉のそよぎそぞろ聞きてあり。

はしたなく馴るゝがまゝに本性をあらはしたまふ君を憎みぬ。

美しき夢を見せたき更に又毒蛇を見よとすゝめつる君。

二百里の海山越えて君來むといはれし時の心おどりよ。

かりそめの言の葉ながらしみ〴〵とわすれかねたる心かなしき。

やる瀨なく思ひみだれてつと出づるおばしま近うまたさみだるゝ。

忘らるゝ身とは知りつゝわすれえね不思議の心解しがたきかな。

我死なば諸人なげくたゞ中に死ぬるもよしと一人はほめむ。

果もなき大野が原の朝風に君吹かれつゝ摘める鈴蘭。

夏來れば大野に匂ふすゞ蘭をつみつゝ君は涙すといふ。

君こひし君かげ草のほのにほふ皐月の夕ものをおもへば。

うす暗き窓のポプラのはら〳〵と音する時のたへぬさびしさ。

藍色の心理

故 小泉八雲

一

鳥昆蟲及び花が自然から受けて居る色の內、パッとした純藍色は最も稀である。藍色の花は他の五色の花よりずつと長い順境な發達をして來た植物と云はれてもいゝ。園藝家が藍色の薔薇とか、藍色の菊を作る事が出來ないのを見ても此の色の大なる價値はほゞ計る事が出來る。

ハッキリした藍色は或る不思議な鳥の羽又は熱帶地方の奇妙な蝶の翅などにあらはれてゐる。其れらの花鱗苞、又は羽毛の進化して最後に發達したのが此の色の樣に思はれ、また天色を認識する力は赤青黃を見分ける力が既に出來上つた後で得られたものであると云ふ確な理由がある。

此の假想の眞僞はさしおき五色の內で、藍色丈が今迄高尚な開化した人類の視力に、此上もない氣持の好い色として殘つて居るといふのは眞に着目すべき價がある。パッとした赤とか青、橙黃菫色は十九世紀の衣服や裝飾に極く僅に使はれて居たが、感覺に烈しく來るために其の七色素の純粹のものが厭はしくなつて、今では子供とか又全く無敎育な人間や野蠻人の幼稚な美術的感情にだけ滿足されて殘つて居る。

現代の美は赤を着けたり綺麗な青を飾るやうな事はしない。今の人は部屋を紫や深黃色で彩る氣にはどうしてもなれないが、天の色はやはり前通りに私共を悅ばせて居る。而して一番美しいものと云へば、藍色

を着けて居るものである。藍色の天井や壁がある適當な程度の光と廣さとを持つて居る場合には人を引き付ける力があると云ふ事は尙認められてゐる。

『然し私共は建築の外面を天色では塗らない。天色の正面は橙色とか眞紅色の正面よりももつと不快であらう。』とある人は云つたが最な事である。然し廣い表面に於ける此の色の印象が必ず不快であると云ふ理由ではない。それは唯私等の經驗で、藍色が他のパッとした色と異り、大きな不透明な堅いものと關聯して居ないと云ふわけなのである。山が藍色に見える時には幽玄に且つ半透明である。家の正面の藍色は近く觸れる事の出來る大きな藍色の靜止した堅い物、――即ち不自然なものと云ふ念を與へるわけで奇妙に見えるに相違ない。

然し藍色の天井、圓天井及び廊下の壁は深さと透明とに此の色の眞の關係を暗示して、空間、夏の光りの悅ばしい幻想を私共に作るのかも知れない。他方に於いて、黃色は青味がゝつた廣い表面に沒し樣として居る太陽、美はしい印象が記憶に聯つて居るから、家屋の正面にはよく適した色である。

藍の次に黃色は五色中一番心持の好い色ではあるが藍の樣に其の光彩の力によつて、美術の目的として使用される事は出來ない。黃の青味を帶びた、殊にクリームの色合は美術的の使用が色々あるが、輝いて燃える樣な黃色はさうは行かない。藍色は堅牢、或は不透明を表すものには似つかはしくないと云ふ事が分る上は、此の色は唯最もはつきりした純藍色がいつも氣持がよいのである。（藍色の寶玉、藍色の眼、藍色の花は心地よく思はせるが、其等には透明又は柔さの何れかを伴つて居る。天色の裝釘をした本を見て耐へられない厭な感じのするのは堅い不透明と、藍色との不調和なわけからである。これよりももつとしつこい厭な色を想像する事は出來ない。）

色に對しては全然好い趣味を持つ國と呼ばれてもよい日本で、西洋の影響から多少不調和な一時的の現はれはあるが、大方の市街を見ると、色に對する種族の

經驗がよくあらはれてゐる。通景の一般の色合は白つぽい落ち付いた黃色が種々に混じて、上の方は藍がゝつた灰色で、下の方は黑ずんだ藍色をして居る。此の配景で、藍味を帶びた灰色の瓦屋根や、日除をあらはし、黑ずんだ藍は店の掛布を、光ある白色は漆喰をした表面の白い條をあらはし、靑がゝつた黃色は大抵滑かな白木と、疊の光りである。掛布や看板に書いてある澤山な記號の輝きは一層趣を添へ、且つ融合させてゐる。例へば白に對する黑とか、時には赤又は藍の上に白とか金色とかの樣に、強い黃とか靑橙紫色は見られない。着物でも灰色と、落ち付いた藍色が一般に占めて居る。子供や若い女の子が着けて居る袴は天色か又は藍色をぱつとさせる丈けに赤を加へた菫色、即ち鋭い光りのある虹の紫色か何れかである。

二

然し私は技術や工業に關する藍色の價値とか、又は一秒間に明るい空氣の五百億の振動を起す藍の視覺上の意味について話さうとは思はない。私は唯色の心理學卽ち主觀的の進化の歷史について少しく述べて見たいと思ふ。

實際藍色のあらはれは各々の心に異つた情を起し、不等の經驗の換想や、めい〱違つた想像の仕方によつて働き始めるのである。然し斯樣な心理的の不同、主に個人的、又は皮相の事には關せずして、此の藍色は一般の人心に普通の樂しい感情を呼び起す快活な刺戟であり、又知覺力と想像力との一層高い場所に關係して居る情緒的活動の色合であると云ふ事は疑ふ餘地はない。

私の場合を云へば明るい天色の光景は色の光りの度合によつて多少强弱はあるが、通常漠然として悅びの情が伴ふのである。アメリカの熱帶地方迄航海した時の經驗では此の感情が極度迄上つた。それは始めて私が此の世界中で最も宏大な藍色の現はれである、熱帶の海の華かさを見た時であつた。その燃えて居る天色は私の感覺を疑つた程奇怪な立派さで恰も百萬の夏の

空が其の色を拵へる爲めに純流動體の色に凝結したかの樣に見えた。船長は私と一所に欄干によりかゝつて居たが、二人共默つてその不思議な海と長い間見入つて居た。

其の時船長は、十五年前新婚旅行で當地の方に參りました時に妻は此れを不思議に思つて、是れと同じ色の絹の衣服を拵へてくれる樣に賴みました。私は隨分あちこち尋ねましたがなか〱思つた通りの色を見付ける事が出來ませんでしたが、毎日々々支那の吳服屋をさがしまはつて、やつと廣東で見付け出しました。と語つた。

今まで時々きら〱して居る藍色の不思議な大海原を南の方へ浮んで行き、急に方向を轉じて、忽ち世界を渡り遂には込み合つてゐる支那の薄暗い奇妙な町を船長と一所に絹を探し廻つて居る夢を見る。藍色によつて起る悅びの理由について第一に考へ及んだのは此の熱帶へ旅行した時の記憶であつた。

三

藍色の華かな表はれによつて激される愉快な情緒の波動は多分他の色の濶大な光景によつて起る感情と同じ位に複雜ではあるが、藍色の方はその複雜の性質が一層高いのである。

藍色は吾々の星、卽ち地球の靈魂を表す色であるから、晝の無窮、夜の深淵を示す色でもある。從つて藍色の感覺は高度、廣大、深玄の念に訴へ、又距離とか不確の色であるので、時の隔りの觀念も起す。又藍は消滅とか出現の色であるから運動の考へも與へる。峰谷、入江、岬等は離れて行くと藍色に變り、遠ざかるに從つて際立つて來る。

故に藍の感覺によつて起る感情の容積中には變化の經驗卽ち祖先傳來の離別の非常な悲哀と聯絡してゐる情緒の何分かゞ混じて居るに相違ない。然し實際にかやうな曖昧な習慣が殘つて居るとしても、夏とか溫かさとかに連つて居る愉快な情緒の遺傳、卽ち過去の人

類が曇りなき日光を悦んだと云ふ晴れやかな方面に全然壓倒されて消滅して居る。

藍色は神聖な色ではあるが其の色が起す感情の優勢な心狀は喜悦と柔和であると云ふ事實は、なほ明かである。藍は死とか神を思はせるが、決してそれ等の畏ろしさは語らない。

今藍色は尊敬と正義、義務と渇望との感覺に屬する思想に、最も深くひゞく神聖の色だとか、萬有神教論を表す色だとか、或は倫理的の色であるとか考へる他方に於て、何故藍色が引き起す情緒がもつとも、悦ばしいのであるかと不思議に思へる。蒼天に對する感覺の人種經驗、即ち有機的の記憶によつて、吾々各自に傳はつてゐる光と温かさに於ける死の限りなき悦びの宗教思想より遙かに古くあつて、それが色の感覺に關係してをる、或る倫理的の感情を沒して終ふ丈けの濶大であるといふ理由であらうか。確に幾分かさういふ所もあるであらうが、私は他の理由を付けて、極く簡單な説明をしたい。

藍の印象に應ずる遺傳的感情の波動に於ては、全人類の脉搏は信仰の美しい和かな狀態にのみ屬して居るこれだけいつて尙ほ少し云ひ足したいと思ふ。

私等の過半數には藍の光景がおこす愉快な情の此の大波動中、もつとも有力な元素は倫理的の意味を充分含んで居る精神的のものであると私は想像する。

換言すれば、經驗上、色に對する個人的情緒の血管の叢の下には、幾年とも知れぬ年代を傳つて來た宗教的情緒が波の樣に搏つてゐる。此の神秘的の光彩、即ち永久の平和の色として、藍が遺傳的に輝く大喜悦は美としての藍色の遺傳的感覺を振起し、且つ活潑にするのである。死後再會の約を信ずる靈魂存在説、或は死後いつまでも終らない若さと祝福との實現があると是れ迄想像されてゐた樂園を渇望する全人類の感情の幾分かゞ天色の此の悦びの響きによつて、微かに私共を醒起さすのかも知れない。

消えては寄せ來る浪や泡を以つて沖からの波動を傳へる如く、此の熱帶地方の光りある藍色の光景から起る情緒により無限即ち一瞬間に、藍色の感覺が作る十億程の空氣の振動の無窮から、古の信仰の幾分及び、消えた神々の力、又は人間の發したすべての祈禱の激情及び美をわれ等に幾分か響き返すのかも知れない。

花壇

窪田空穗

前に此家に住んでゐた人が、花壇だけを形見として殘して行つた。それは何ういふ人であるか、何所に行つたのか知ら無い。

私は在るがまゝに花壇を眺める。眺めてゐると愛着の念も湧く。何時か花壇と私とは、淡いながらに離れ難い關係となつて來た。

……朝毎にシレンの花の
咲きぬやと見る……

此れはロシアの詩人の詩の一句である。絕望の重き唸きを歌つて中にまじつてゐた一句である。

早春の花壇を見ると、忘れてゐた其句は思ひ出された。私はたゞ、來るものを待つ輕い期待の心に其句を口にした。

花壇には何も無い。門と裏との狹い庭を占めて、四つも五つも設けてある花壇には、一點の青も無い。霜が白く結び、黑く解けてゐたのみ。醜い花壇は、春の日光に乾いて、土は浮き立ち、苔は枯れて、一層の醜さとなつた。初めて此家で春を迎へる私は、花壇の中には、或は去年の草の種の、こぼれて、守られて、暖い日光の廻つて來るのを待つてゐるものがありはし無いかと思つた。あるやうな氣もした。

日は次第に明るく暖かに、空も青く濕ほつて來た。大地にも濕ほひが加はつて來て、花壇をめぐつて雜草は、ぽち〳〵と青い芽を擡

げて來た。

が花壇には、何の芽も見えない。

思ひ懸けずに板塀の下から福壽草が芽を出して來た。家の者は其れを見附けて、眼を見張つて喜んだ。其芽の數を數へもした。福壽草は伸びて、やがて黄な花を附けた。日光を仰いでは開き、日沒を送つてはつぼんだ。葉が出て、繁つて、日に照らされると柔かい銀色にきらめいた。

買つて來た鉢植のスノー・ドロップが、花壇の前に置かれた。水仙によく似た青い葉と青い莖、其莖のさきに、丁度一しづくの露のやうに見えて咲く純白の花。イギリスの早春に落ち栗の中に見出だすと云ふ詩の句が思ひ出されて、私の眼の前には、見ぬ國の野の樣が描かれる。強くそしてつゝましい其花の、曉の星のやうに散らばつてゐた樣が描かれる。

花壇には何時まで待つても、何の芽も出ない。

「今途で花屋に逢ひましたから――」親しい一人の人は、兩手に三色菫の鉢を三つまで持つて、にこ〳〵してはひつて來た。そして裏へ廻つて其鉢を花壇の前に置いた。

其花は直ぐに私の庭の中心となつた。寂しい庭には初めて濃い色が點じられた。紫に黄に絞りに三色菫は咲く。暖い日光に抱かれて限りなく夢を見てゐるもののやうに咲き續く。咲きつゝ伸びつゝ、鉢からあふれて行く。

其花を花壇に下してやつた。

或る時私の胸に、その三色菫は默つたものとして映つた。美しき花よ、しかしながら餘りにも色濃き、餘りにも或はし深き花よ。今にして思ふと、寂しい花壇には清淨があつた深い安らかさがあつた。三色菫は其れを奪つてしまつて、代りに、美しき惱ましさをして

ゐる。

清淨の安らかさと美しい惱ましさ。一つは消え、一つは擴がつて行く。

丁度その頃、隣りの家の處女椿が咲き初めて、板塀越しに此方の庭を覗いた。薄く曇つた空には日光が醉つたやうに見えて、天にも地にも、物思はしめる靜けさがある。

私は花壇を眺めつゝ、よく家の者と一しよに食事をした。明るい、輕い眩しさを覺えしめる庭、其所から眼を移して、家の者を見ると、女の物を食べる口もとに、しなやかに箸を持つた手に、捉へ難いやうな一種の媚びの漂つてゐるのを新たに發見した。

梅も櫻も無い庭ではあるが、連翹があつた黄な花は一時に咲いた。柔かく輕びやかな花は、涼しさを含んだ風に躍る。袖垣の彼方に山吹があつて、靜かな鄙びた花を附けて來る

花壇にも俄かにいろ／＼の草の芽が出て來た去年植ゑた百合が、緑の鮮かな芽を出すと、マーガレットも芽を出す。ダリヤも痩せた芽を出す。松葉牡丹、紫苑、秋海棠、薊に似て黄のつゝましい花を附ける草、葉鷄頭、去年の夏より秋へかけて見た程の草花は、其時の來るのを待つてゐたるやうに、次ぎ／＼に地の上に現はれて來る。去年の秋、郊外へ散歩に行つて歸りに拔いて來て植ゑて置いた露草多くあるが故に愛されなくなつた花、我々の祖先のあはれんだ花、と思つた其草は、今年は夥しくもふえた。何所に種があつて生えたらうと怪しみながら、日陰の場所を選んで移してやると、後からも／＼、限りなきまでに生えて來る。

此庭に生えて、此庭で育つて行く草。私はそれだけで滿足が出來た。門に賣りに來る花屋の花も、通りの花屋の店さきに咲いてゐる美しい鉢植も、買つて來て飾らうとは思はなかつた。（つゞく）



變り面

工森美子

はからずも變り面をば五つ六つ造り上たる六千日かな

我われをすて遊びつゝ樣々の夢にやふけれ命あるまは

我が顏の白きが嬉し白蓮のみだるゝ庭に月見ゆる時

かまくらや大古へに人生を歎きし君の黒く露座せる

我が魂のぬけ出でしとか夜のへやを舞ふ美しき蝶にふるへぬ

微笑ぬ唯ほゝゑみぬ何事もむほんに生ける驚きの後

花の如きやからなれどすてとあらば最すぐれたる武者ぶりも見ん

生けるとぞ思ひし日より天地をば背景にせるおほどかさかな

白刄ふらば皆かたよらん其ひまにふめつの道をかため行きなば

火の如き道に向ひて水に似し道に向ひて足ずりをせる

うつ向けば涙のとけぬ熱湯の如くにえつゝ無量無限に

何事ぞ死を給へ等はるかなる心の末に願日あるかな

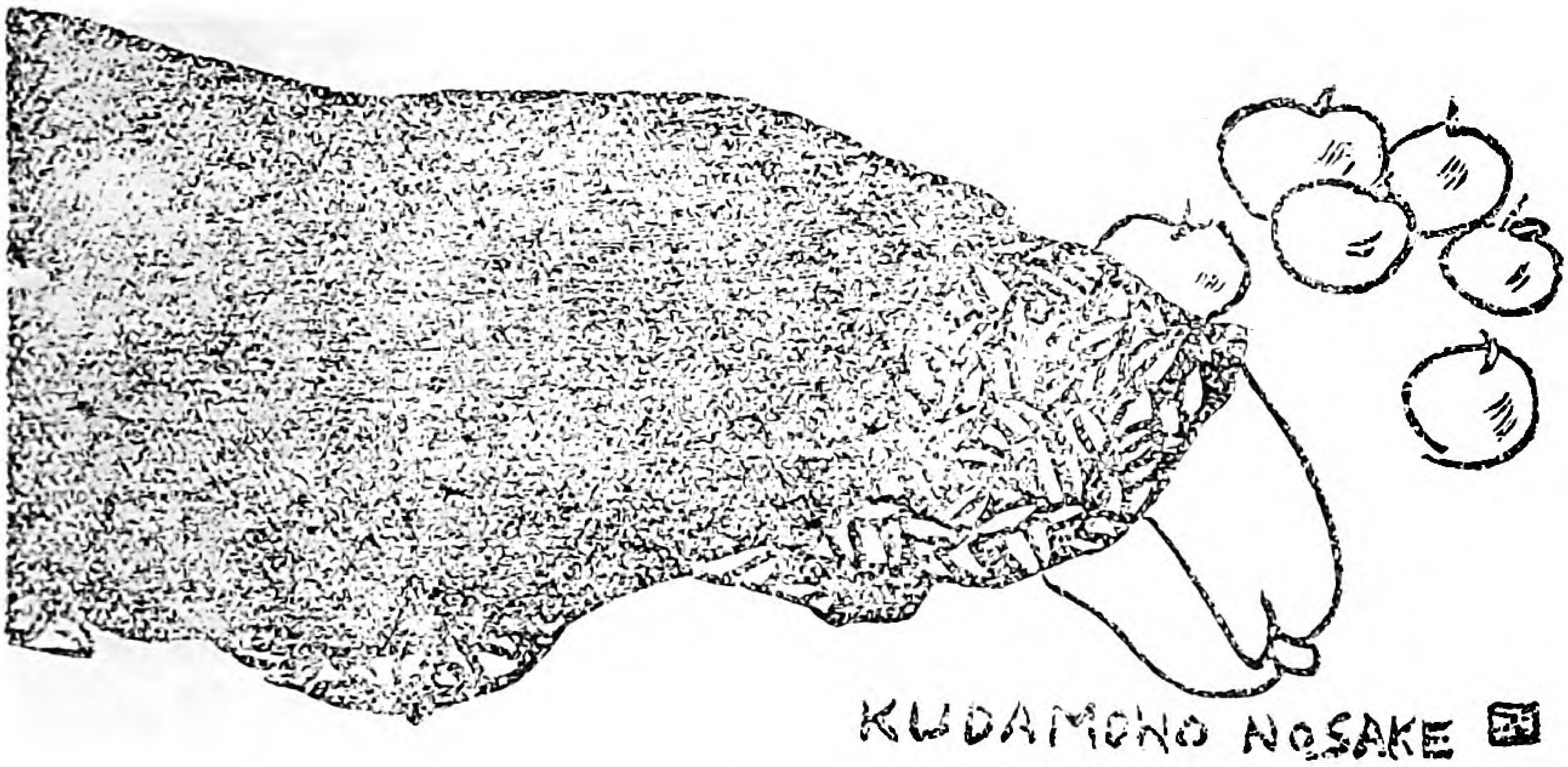
我が戀は百歩の先に美しくちら〳〵歩め死する日もなほ

みなつきの眞ひるに白き姿して小川の水の閃きを見る

めづらかに赤き香油を手の平にたゝへてありき水無月の朝

しどけなく人情本をくりひろげ湯上りのみをなつかしむかな

狂亂にまかせて寢入りさめつれば母はさびしくいたはれるかな



紅梅燒

兒玉花外

淺草仲見世で夏の午前
わたしが買つた紅梅燒。

わたしの腕に抱かれて
紅梅燒が小さな紙箱の中で
重なり合ひヒソ〳〵と囁やく
じぶん等は何處の家に往くのだらう。

淺草仲見世の火に生を得た
薄いかるい命の紅梅燒
せめて美しい可愛いゝ齒に
あの赤い唇に觸れて死にたいと。

わたしの腕に抱かれて



紅梅焼がさめ〲と箱の中に泣く。

螢

下谷の夜の途で
わたしが拾つた傷いた螢、
掌の上で熱くもない火が
柔かにいぢらしく燃え乍ら。

お尻の方で弱い小さな火が
まだ消えぬ魂のやうに光る、
机の上に仰向けにねた螢よ
わたしの思はこの小動物に注がれてる、
多情なわたしは淋しい夜を
蟲の姿とは見たくもない。

起き出れば強い朝の光に悲し
机の上に病だ螢は死んでゐた、
小さな動物は眼のうしろに
艶な赤き首巻をのこして。

當世流行鼻歌見立角力

御免　不同次第

大關　いよぶし
關脇　こんど幸斷
小結　櫻兵衛が種まきや
前頭　裏の窓から
前頭　いんしゆいなば
前頭　捨てたての子が
前頭　酒はけん酒
前頭　くせつして

同　梅は北野の
同　一そも二そふも
同　花を見よとて
同　伏見京の斷
同　かゝぽんさん
同　柳ばしから
同　わたしやりんきで
同　あれみやしやんせ

大關　赤いものでいはふなら
關脇　松まへ殿さん
小結　一ぽんめには
前頭　かん〳〵のふ
前頭　十日戎の
前頭　御所の御庭
前頭　逢うた夜は
前頭　三つ又川の船の中

同　さくら〳〵
同　こゝは島原
同　戀のおもひは
同　愚僧が住家
同　いたてでじま
同　きのは北風
同　かさいたゞかあらひ鯉
同　あはにやならぬわいな

行司　木津川　淀の川瀬　大つゑぶし

勸進元　春さめ
差添人　御所車

世話人
げいしやしやうばい
いくらたゝいても
ゆふべの×××
姉さん本じよかへ
われたもあれば
ひろどでのふて
いつきてみても

頭取
京の田舎の片ほとり
おまへとしらずと
西行さんのひるね
かにどん〳〵
醫者の羽織は
宇治は茶所
はこくらべ

和田信二郎氏藏

女優になりたいと云ふ女

森律子

斯ういふ職業をして居りますと、若い女子の方からは、女優は暢氣な愉快な面白い境遇のものと思つてか女優になりたいから世話をしてくれと、地方から御手紙が來たり、東京にお住居の方は直接に訪ねて來られたりします。この間も九州から十七になる女の子が突然に訪ねて來まして、是非面會したいと申しますので座敷に通しまして話を聞いて見ますと、三歳の時に母に別れ、その後繼母に育てられ、家庭が不和だから、女優になりたいと思つて家を逃げて來たとのことで、女優になれなければ下女に使つてくれと、動きませんので、隨分困つたのでございます。私も母も種々の方面から女優の苦しい境遇であることを細かに話しますと、はじめて理解したと見えて、歸國しますといひますから、わざ〳〵上京したのだからと思ひまして、そのあくる日に帝劇を見せて歸國させましたが、その日に左の手紙が來たのでございます。

昨日は參上仕り御多忙中誠に失禮いたし申候その時には、又た身に餘る御親切の御言葉を頂き、誠に有がたくうれしく、深く御禮申上候。御情にあまえ御遠慮なく拜觀仕候、さすが天下の一大劇場の美しき事、只だ〳〵夢見る心地致候、ことに貴孃樣の御うつくしき御手なみには思はず聲を發せんとまで致し候、ながく劇場の名を世に止め人と共に、御名を御殘し遊さる事を祈上候。御孃樣の芝居を一度見しなれば、例へ女優の望は切れても以後は如何なる世を送るとて、少しも心殘りとてござなく候、例へ地球のはて野の中に住ひせばとて、たゞ御孃樣の御こと奥樣の御親切は夢わすれ申さず花の日月の夜私も同じくながめて貴女樣を御偲び申候、あゝ昨夜は天界に遊びし心地して、色々と感に打たれて涙

をこぼし候、右は亂筆にて御禮まで

七月十一日夜　柴田玉枝

この柴田玉枝さんといふのを歸國させると、まもなく北多摩郡內の小學校の教員で、女優志望の方がたづねてこられましたが、その時は丁度私は外出して居りませんで、母がお會ひしたので、その不心得を話しましてお歸しすると、そのあくる日に左の手紙が來たのです。

拜啓、昨日失禮とは存じながらも、はがきにて取あへず御禮申おき候が、先日は御留守中へ參上いたし、御母堂樣の御親切につひ〳〵長居仕候段、あしからず御ゆるし下され度、御貴姉樣よりわけてもよろしく御詫申上げ下され度御願申候、まことに種々と御母君樣よりかたき御決心のほど承はり、御貴姉樣の高尙なる御思想と、岩よりもかたき御決心に感心仕り、たゞ〳〵朝な夕なに御祈り致す事は愈々御すこやかに渡らせ給ひて、劇界に英名をとどろかし給ひ、海外にまでもかゞやかし給ふことのみに御座候。御母上樣には遠くに御出遊ばす御良人樣として內顧の憂なからしめ給ひ、內にありては御貴姉樣をはじめまつり、御令弟樣の御くんたうよろしきためての御母上樣にしてさすが御貴姉樣でとき御方あることゝ御母上樣には御孝養あつく、御兄弟の間がらもさぞかし御したしく入らせ給ふ事と一しほ御令弟樣ハ御上までも忍ばれ申候。かゝるたのしき家庭に人とならせ給ひ、たのもしき前途にむかひて、日々めざましき御活動遊ばさるゝ御貴姉樣の御身を御祝ひ申上げ、併せて御健康を深く祈上候、何とぞ〳〵ふく樣にも末ながく御見すてなく御引立て下され度伏して願上奉り候。

承はれば私を實子とも御いつくしみ下さる仙波閣下とは、御同縣にてあらせらるゝ由、私も目下は親類も同然となりて、餘計にえんこ深き次第なればよろしく御引立下されて、仙波家へも休にはいつも手傳ひにも參りしやうに、この後ともに召使ともおぼしめされて私にて出來うる事はずん〳〵仰せつけ下され度願上候。嘸かし御多用にてお忙がしくいらせらるゝ事なれば、とき〳〵參上致し、手傳ひ仕らんものとぞんじ候も、こよとも仰せ下さらぬのに、あつかましく參上する譯にも參らず、心には山々思へどもみ心いかにとわざと參上いたさぬ始末なれば御用の折にはずん〳〵御用命のほど願上候、せひと

も貴姉様にも御目にかゝりたく存じ候まゝ、いつも御多忙中へうるさきことやつかいものよと思召されず願上候。

私ことも實は女優になる事を元は費用萬たんは日本橋蠣殻町の米穀取引所の仲買人なる××に凡てを話し、御願ひすればとにかく人並みには負けず交際は出來る故とぞんじ、先づ第一に御貴姉様の御心づくしによりて採用されし上にてと思ひつめし上、御願ひいたせしわけなれば、もし御貴姉様の御考へにてよろしくは

モデルの女



御取立て下され度願上候。せひ〳〵御母上様にも御令弟様にも一度鮎漁にお出かけ下さるやう待ち居り候、いづれ後日参上の折には、鮎を御目にかけ申べく候、先づは御禮かたく〳〵右御伺ひまで末筆ながら御母上様によろしく仰せ聞け下され度願上候。たゞ〳〵殘念に思ふてとは先日御貴姉様に御目にかゝる事の出來ざりし次第に御座候。

なほ一つ御伺ひ致し、御願ひ申上ぐる事は、御貴姉様には來春かねて御望み通り、御洋行遊ばす由、決して口外はいたさず候が、もしや旅費は今より何んとか心がけ

私方よりさし出すべく候が御出かけの折に、私を供として御連れ下されまじくや、いかなる事にても御貴姉様の事なれば、途中も相勤め申べく候まゝ、なほ希望いたす事は、御同行遊ばす御方が、また御交際ひろき御貴姉様の事なれば、知己の御方に御願ひ下されて、彼地へ奉行致す處を御周旋下されまじくや、もしそれを御きゝ下されば、今夏の休みに岡山の仙波閣下にも御願ひいたします。何とぞ人一人助けると思し召し給ひて御心づくしのほど願上候。ての厚情を御きゝ下さるやうならば、九月より英語とその他語學を勉強いたすべく候まゝ、それに女學校時代より英語は至つてすきなる學科にて、他の語學は御休みに仙波様の御令孃様につきて相學び、また歸京いたしてよりも調べ申すべく候まゝ、何とぞ何れか一つの願ひを御きゝ下され度願上候。まことに御多用の御姉上様にかゝいろ〳〵御願ひ仕るも、義氣にとみ給ふ御貴姉様をみこみ参らせての事なれば惡しからず御許し下されたく、なほこの事は御奥様より御とりもち下されるやう願上候。三十五歳になるまで彼の地に居住いたしたき考へに御座候、一生他家へ嫁することの出來ざる獨身ものにて終る身なれば心を御憐察下されてよろしく願上候。

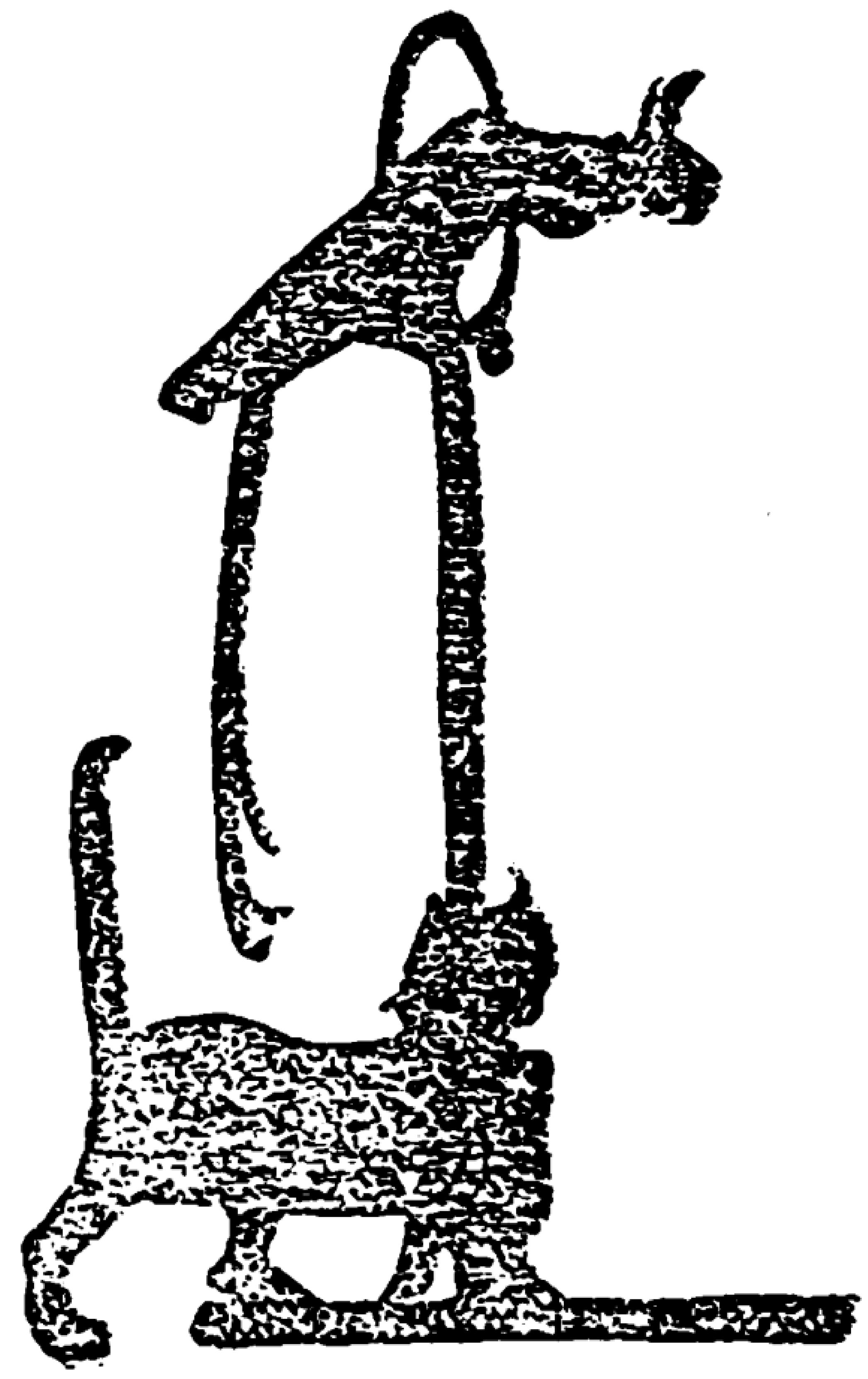
本年の冬休みには、必ず〳〵御手傳ひに参るべくそれをたのしみ居候、まことにまはらぬ文にて御恥かしき次第右御願ひまで、かしこ。

七月九日　　久　和子

御孃様
御許へ

この外毎月幾通となく、女優志望の手紙が來るので實際手紙ならまだよろしいが、當人の方がたづねて來られるので困ります。かういふ人達のその心理を解剖して見て、却つて氣の毒の感に打たれ、人が泣いたり喚いたり騒いだりして居る時に、私は案外澄し切つて冷靜にその徑路を觀察する事が出來る、穢ない人を見るときれいにしてやりたいと思ふ、自分ながら人事によく氣がつくと思ふ位でありますが、扨自分で手を下してどうかう仕様といふ氣は出ないので御座います。

それに女優になつたのも、私一人の希望でなつたのでございまして、この後志願する若い女子があつてもお成りなさいとはすゝめないのであります、それは自分が志望したのですから、非常な樂しみの半面には人の知らぬ非常な苦痛がありまして、この身心の苦痛に打勝つだけの度胸がなければなりません。



青鞜の女

こいそ

とかく良くは云ひたがらない世間から、御定例にもれず、やれ新らしき女、青鞜派の女のと、飾つた裏にかくれて居る嘲笑的の言葉をあびせかけられながら、それでも確固として自信とブレーブなハートとを抱いて文學といへる翼の上に乘つて、細いかよわい腕を大きく振つて、飛びまはつて居るそれ等の女達は、かうしたものだと云ふ事を今云はうとして居る。餘計な事をと叱られるかも知れない。やはらかに物にしなだれかかる雨の夕、あの女のいつたといふくすぐつたい言葉にふれた。

我は神なり神は我なり——といふ意味を異つた形で……云つた許りでなく、あの女はまつたくさう思ふて居るらしく振舞つて居る。

さうした態度を手や足の上げ下げ、目のうごく瞬間瞬間にも忘れてはならないと氣を配る樣に、我は神ならぬ人々の目にうつる。

或男の人がそれを大變氣にして居た、云ふべき口の形、思ふべき心のうごめき、でないもの丶前になんで誰がひざまづかうぞ、借用して來た言葉の前に、ひれ伏す馬鹿はまだ世間にないと、まつかになつておこつて居たさうだ。

私があの女の人を見た或時、兎の眞白な毛を思ひ出した、さうして前から見るあの女も、後から見るあの女も、どうしてもあの過去に引ずつて居る影といふものがうそのやうに考へられてならなかつた。

老人の口をかりて云つて見ると、魔がさした——といふ言葉にかこつけて、やつぱり普通化してしまひたかつた。

けれどまたあの女を見た或時、あの女として忘れがたい強い印象を頭にのこさせた。

さうして黒板に白く書いた平塚明といふ字をふき消して赤くなほさにやならぬと思つた。――なほして後あの女につきそふてくるそのまゝのかげを、影のオーナーと共に平然と眺めることが出來た。

一度あの切れ目の深くくひ込むだ厚い唇に接した誰の目も、美しい顏の人として忘れやしまい。

或月の何だかにあの女を忠實なる文學の批評家として譽めてあつた事を覺えて居る。

あの女の小説も、詩も、あんまり見て居ない、評論の外、「雜」の部に入る樣なものをよく見る許りであつた。

平塚さんはメーカーとしてよりは、むしろよき讀手として自らも重き貫目をつけ樣として居るのではあるまいか。

「私は荒木と申しますどうぞ何分よろしく」と挨拶されて、ヒヨッと頭をあげた時、まあ何て小供つぽい女だらうと思つた、さうして通りがゝりの人でさへもチヤーミングする事に遠慮のない人なつこい性の女として、別れた後まで殘る春と夏の間の樣な感覺を人の胸になすりつけておく。なすりつけるまではどんな事があつてもはなしはせじとかたく相手の袂の先をつかまへて居る。

さうしておさへつけられたものに袂の先と、おさへた女の顏とをじつとみくらべて薄いほゝゑみを片頰に浮ばす度胸をあたへるだけの力を持つて居る。

僅かの月日ではあるさうだが、新らしき女優となるべき苦しみにふれて來た人だといふ事を聞いた時、それ等の力、それ等の色のあらはれにさして目をみはらなくなつた時に其の人の前に坐つて居て「そこだ〳〵」と目をちら〳〵擧げて其の人のゆつたりした頰の肉のうごめきをあへてするわけではなく、せないわけには居られないのだつた。

まだ大してこの人の創作を見た事がない。

一度この人の作の爲に、青鞜が發賣禁止になつた時荒木さんは女らしく「どうもほんとに皆さんに申譯が御座いません何とも――」と實際すまなさうにあやまつた。

當代の人氣者すま子孃に次ぐ要材として芽を出した千歳さんは、實際野心家らしい、次々の二字が氣にいらないで頰をふくらしたと同人等が噂し合つたといふ

事だ。野といふ字のつくものにろくなものゝあらうはずがない、野郎、野人、野卑、野心。

けれど野心も、或程度まではなくちやあなるまい。今の世の中ぢやあ野心を人並以上持つて居なくつちや御話にならない。

「ね、あれだけの臺詞を覺えつちまふのは隨分骨が折れたでせう」「いゝえなに自然に覺えてしまつたんですよ―かう云つてのけてすまあして居たさうだ。その時女は、きつとあでをしやくりあげて目許り下に落して卷煙草の灰を人指ゆびてはたき落して居たにちがひない。

美しい、けれど表情ハ乏しい目と鼻と、かうした顔立の其の人にもと高い脊を與へたなら、舊い芝居にあてはまつた羽左衛門よりも、ずつと立派な立役者が出來上るだらうと思ふ。

この人に會つた多くの人は、つよ過ぎる薔薇の香をまともからあふられて居る樣な氣がして、醉ひにのぼせる頭を抱へて紅らむだ頰を平手でおさへずには居られないといふ話だ、話許りではない。

「まるで男の樣な人です」と或話の序に出た尾竹紅吉といふ人を、彼のよく小說や喜劇に出て來る頭も足もすつかり男性化された、いけすかない女を想像してこはぐ作らそととあげて見た目には、鴨居につかへさうな脊ハ高い身體に單羽織をはおつてセルの袴をつけ流した大きな大きな柄の紅吉さんが飛び込むで、オドオドして居た感覺を妙にオッと驚かせた。

けれども可愛い目と、子供らしい口とが驚いて飛び上つた感覺を、じつとおさへつけて、私は膝を紅吉さんの側へにじりよせた。

人並はづれて高い脊と、女並はづれた性格とが其の人をすつかり非凡な女にしてしまつた。毛色の變つて居るといつてあれ程變つた色はめつたにやあない。女もあばずれゝば蓮の葉に變り、人の子も豚に變れば豚兒に變る。

變つて居るといふ言葉もさうした意地惡い意味にとらずに、男に近い女として、人はむしろ面白がらねばなるまい。興味のうすからぬ新時代の產出物として、たてから横からようく見てもらひ度。

かうした女性の手から、流れ出るあの純然たる日本畫の繪の具の色を、私は煉瓦の積み重ねを切りぬいた窓にかゝつて居る岐阜提灯を思ひ出して眺めずには居

られなかつた。

孟宗竹を縦に切り破る時の叫びの樣な、すつぱりした態度と、貝の柱をかみ切る時のやうな齒切のいゝ言葉とが、人をしつかりと抱擁してはなさない。其の代りはなすとなれば、未練もへちまもなく綺麗にはなす。冬、會へば寒い、夏會へは涼しい樣なあの高い處から低い處へおしげもなくどつと落ちる瀧にたとへ度女だ。

とてまでも男のやうな性格を抱いて、淺草の十二階下なんか歩いたことが幾夜もあるさうだ。

程なく男の樣な戀に落ちて、或女の膝にのしかゝる事があるかも知れない。

この人の創作についてはまだまつてなければならない、なぜといふにまだ數へる程しか味つた事がないから。

世の中の或一部の人は未だに尾竹紅吉といふ人を男だと思つて居る。「いゝえさうぢやあないたしかに女です」と云ひ譯しても「なにそんな事があるものか」と張り通して居る。どういふわけか私は知らない。

夢から出て夢を通り夢に入る。さう云つた樣な永沼さんといふ人。

永沼智惠子——かう書いて私は永から手を出さうか智から手をつけて見樣か迷つて仕舞ふ樣なまぼろしの女、其の人の話をじつと聞いて居ると、何處からどう聲が出てどう通つてどう耳に流れ込むのか判然しない樣な調子で話されてぶつつり、かと思ふとぼうつと尾が切れて仕舞ふ。暗い時に、人の居ない處で、かう云ふ聲でかう云ふ調子で話しかけられたら、氣の弱い女はふるへ上るかもしれない。

綿をまるめてぶつつけたやうに、フワリとぶつかつて後は、ヒトダマの消える樣に消える永沼さんと云ふ人は、すべての人をうつゝにおびき出す魔女の樣だ。

不意味で手の出しにくい小さい目と、椎木鉢をさかさまにして、その上に石をのせたのをかぶつて居る樣な髮の後形とが、自身の性格の、いつはりなきあらはれぢやあるまいか。

夏の眞晝になまぬるいサイダーを齒の奧でかみしめる時、其の目とその髮形とを思ひ出さずには居られない。

こゝまで書いて私は筆のゆきなやみを感じた。

あと書くべき人の數はあれど、だるい手首のはたらきを物うく思はれて來た。

長き日はよういに西に入らうともしない。

長き日を一日なすべき事もしないで圓窓に隣りの職人の歌を聞いて暮した。

職人達も、もう歸つて行つたらしい、歸つた後も圓窓をはなれずに居る。

肩やすそにからみまはるすべての物をふりもぎつて私は獨り歩いて見度。さうした氣持を昨日もけふも、もちつゞけて居た。

青鞜の同人等の噂さ、いくらかしてつかれたからといつて中休みのやうに自分の事を云つてしまつた。

發刊後やがて一年になる。「なに初刊でだめになるにきまつてらあ」「きつと三號がせきの山さ」から云はれた世間の口を押し破つてこゝまで漕ぎつけた。「名までも男の樣な名をつけたがる女達だ」と小言やが云つてるさうだが、男にもよりけりでいゝ加減のなまぬるい男共よりも、金ばなれがよくつていくら好いか知れない。私はあの人達がいつまでもあゝして若くつて居ればいゝと思ふ。けれどももう今でも眞晝間平氣で人の前で、しかも高い舞臺に乘つてラブをすることの出來るだけの老込さかげんになつて居る。

或一つのかたまりはかうして寢度時に寢、起き度時に起き、あるき度場所にあるき、さうしてすね度時にすねて居る自由勝手な仲間を、まあ何てづう／＼しい女達だらうと橫目でにらみ付けて居る。

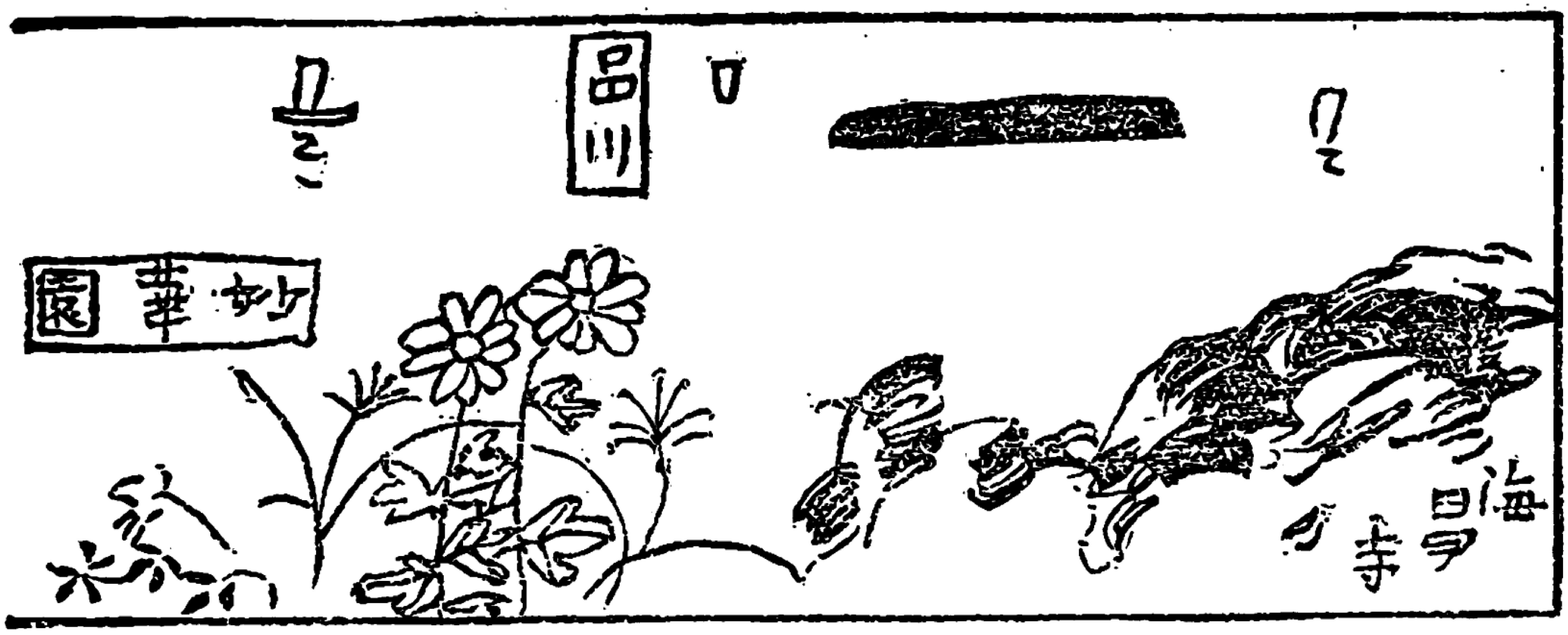
或かたまりはその解きはなされた境遇を、指をくはへてながめて居る。どつちがどうとも云はれない。見るまはりの人達の目の色によつて赤ともとれ樣、白とも見え樣。こないだ讀賣新聞だかに同人等のすつぱぬきが出て居たさうだが、私は見なかつたからどんな事が書いてあつたか一向知らない。

同人の間から手を出してふるわけではないが、たつた一言辯解しておき度。

どうのかうのと云つた處でやつぱり一貫した女といふ流れにのつた女は女、――男にはとても出來ない曖かみ、柔しみといふものを皆相談した樣に持つて居る。

女の味方はやつぱり女でなくてはならない。

昨日初めて聞いたヒグラシをまた今も聞いて居る。日がだん／＼長くならうとする、前の苗屋の聲と思ひ比べて見て何となくせゝこましいヒグラシが氣持惡く耳にひゞく。



東京往來（外篇）

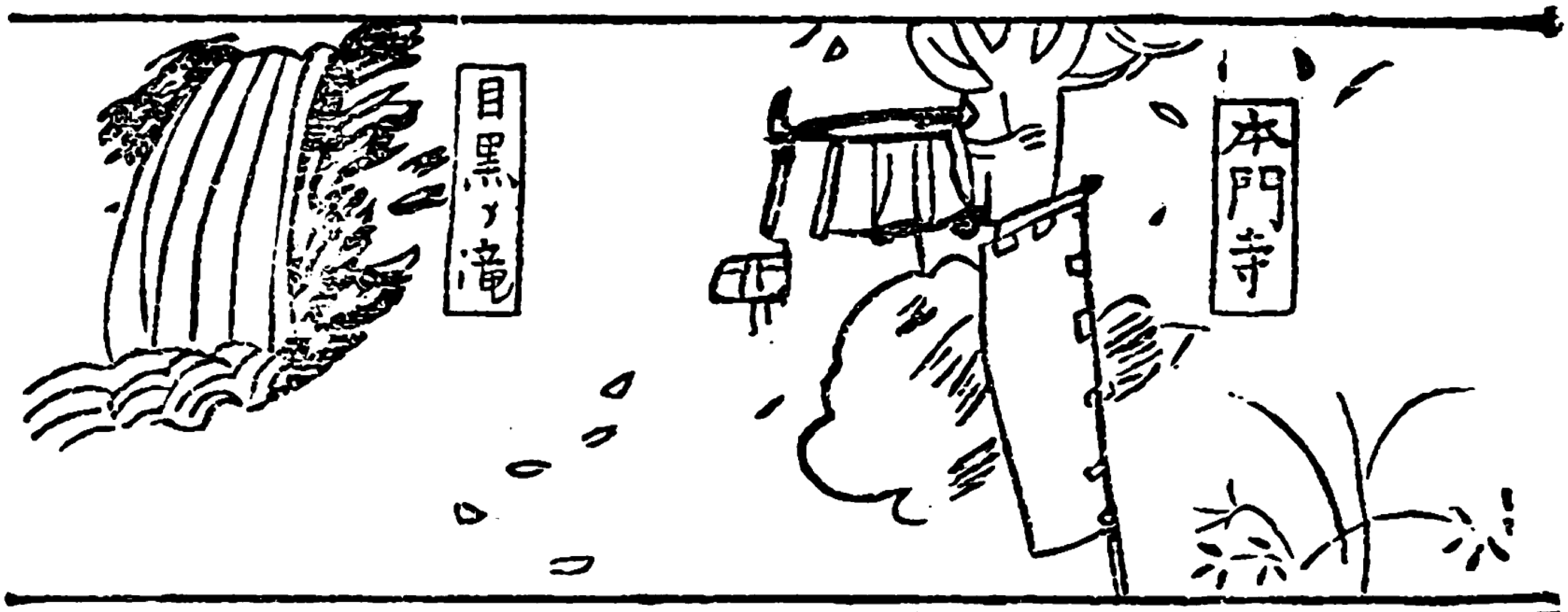
郊外一週記（上）

外島浪之介

▲市街電車の品川八山終點で降りると、右側に見える丘陵が太田道灌の城塞の跡で「御殿山」と稱し、櫻樹多く、徳川時代は享樂の巷であつたが、現在は私有地となり多くの家が建つて昔の面影は少しも無い。

▲鐵橋を渡ると既に郡部である、南品川町になる。東海道五十三次の第一驛停で江戸に登る西國の人々の感じ――江戸に着いた第一印象――の場所であつた。今でも舊い感じのするのは大きな妓樓が多い爲である。町の中頃を右に折れるとテオドラ夫人と前市長尾崎行雄氏の散歩姿を、松並木の邊に見る事が能くある。左側に牡丹と鎌倉權五郎景政の塚とで名高い東海寺がある。中央の小丘は東海寺の末寺、小林院の墓地で俗に澤庵山と云ふ。

▲此處に澤庵漬の發明者で徳川時代の政治史宗敎史を飾る可き偉人澤庵和尚の墓がある。墓も幅三尺程の自然石が澤庵石の樣に一つだけ置いてあるのは頗る趣味がある。此の墓地には國學者の賀茂眞淵と本居内遠漢學者に服部南郭の墓もあり。橘千蔭の歐文（眞名）の碑もあり、此邊に行つた人は是非一度は訪はなければならぬ岡



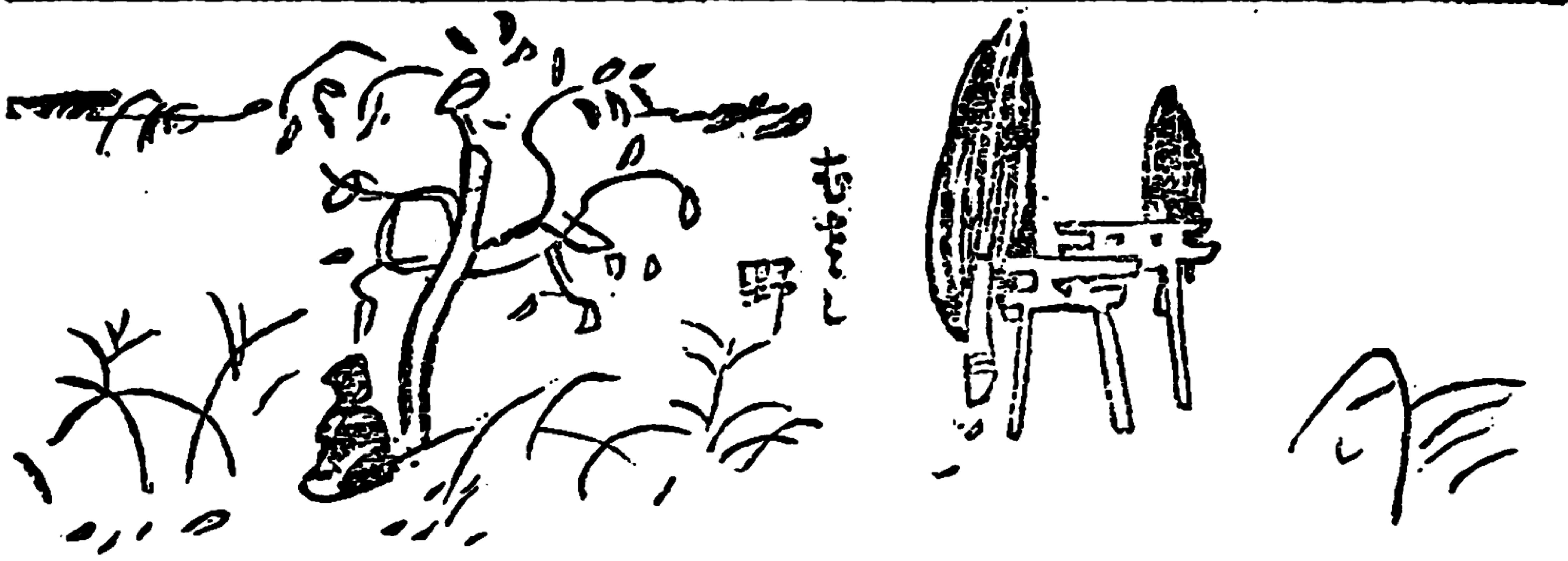
である。

▲目黒川に架せる品川橋——南品川と北品川の境——を渡つて十町許り、右に徳川時代から楓葉と雪と櫻とで有名な海晏寺がある。墓には執權北條時頼や蒙古兵を玄海に沈めた北條時宗や、二階堂出羽守、維新の大立物松平春嶽、明治初年の大政治家岩倉具美など、歷史上の大人物の墓が澤山にある。住職山本探薫師は學識あり且温厚な人で誰にでも叮嚀に教へてくれる。

▲紅葉岡に馳登つて品川の海を展望すると、常には市内のあらゆる不潔物の押し流されてくる泥水とのみ想像せる海も、秋晴れの心持と共に、水も清く白帆汽船も畫中のもの、靜な海の感じがする。殊に七の舊臺場は歷史的に考へても自然の風景から觀ても、靜な淺い海には無くてならない。猶、破壞された第四臺場の造船所になつて居るのと、第二臺場の燈臺になつてるのとは共に西洋畫の趣がある。

▲汐會川を越ゆれば松並木になる。松は年々枯死するけれど、猶流石東海道の道筋だけに昔の面影は忍ばれる。松の木陰に甘酒賣の翁が悠然と煙草を吸ふてる處などは名所畫其儘で、大名小名の行列姿も目前にちらつく樣に思はれる。

▲其の松並木の盡る處が「戀の品川女郎衆に、袖引かれ、乘懸お馬の鈴ゲ森」と唄はれた鈴ケ森刑場の處で、幾多の悲劇が演じられた處であつた。數年前迄は屠牛場で、やはり血腥い風が漂ふて居たけれど、今は濡佛石地藏と巡査派出所になつて、小い庵がある。



▲大森町は數軒の大海苔問屋と、漁師の家があつたばかりだけれど、日清戰爭後、横濱と東京とに務める紳士の邸宅が澤山出來、又砂風呂や料理店も出來てから京濱間の遊び場となり、夏向は海水浴もあり、街道に沿ふて殆ど軒が並んでしまつた。又海苔の採取者や、製造者も多く住んでゐる。全國に冠たる「淺草海苔」は此地で產出するのが本場である。

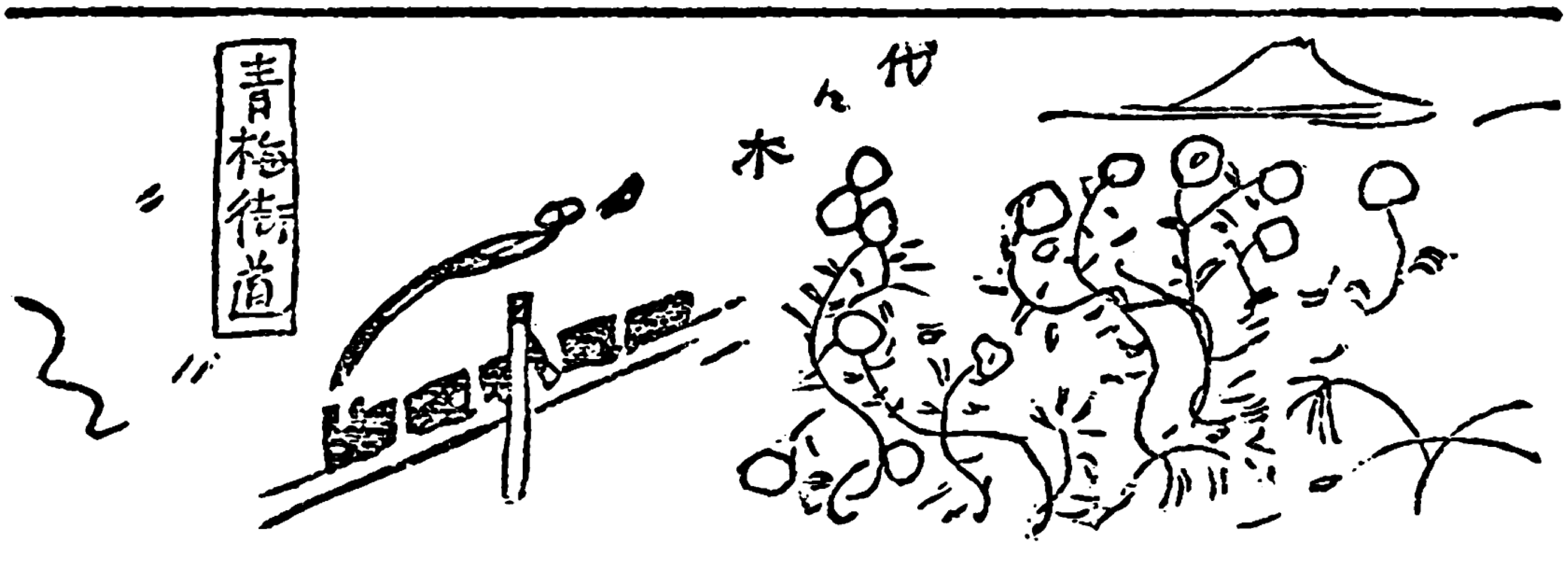
▲昔から大森細工といへば麥藁細工を謂ひ、麥藁細工と云へば大森と云はれた位に有名であつた、今は女房や娘が兒守の片手間にするのと、麥藁帽子の需用の爲とで古風な濃い色彩の籠や虎などの大森細工は殆ど見られない。

▲蒲田には菖蒲があり梅がある。雜色、六鄕の諸村は淡雪の梨畑、淡紅色の天津桃畑が多い。

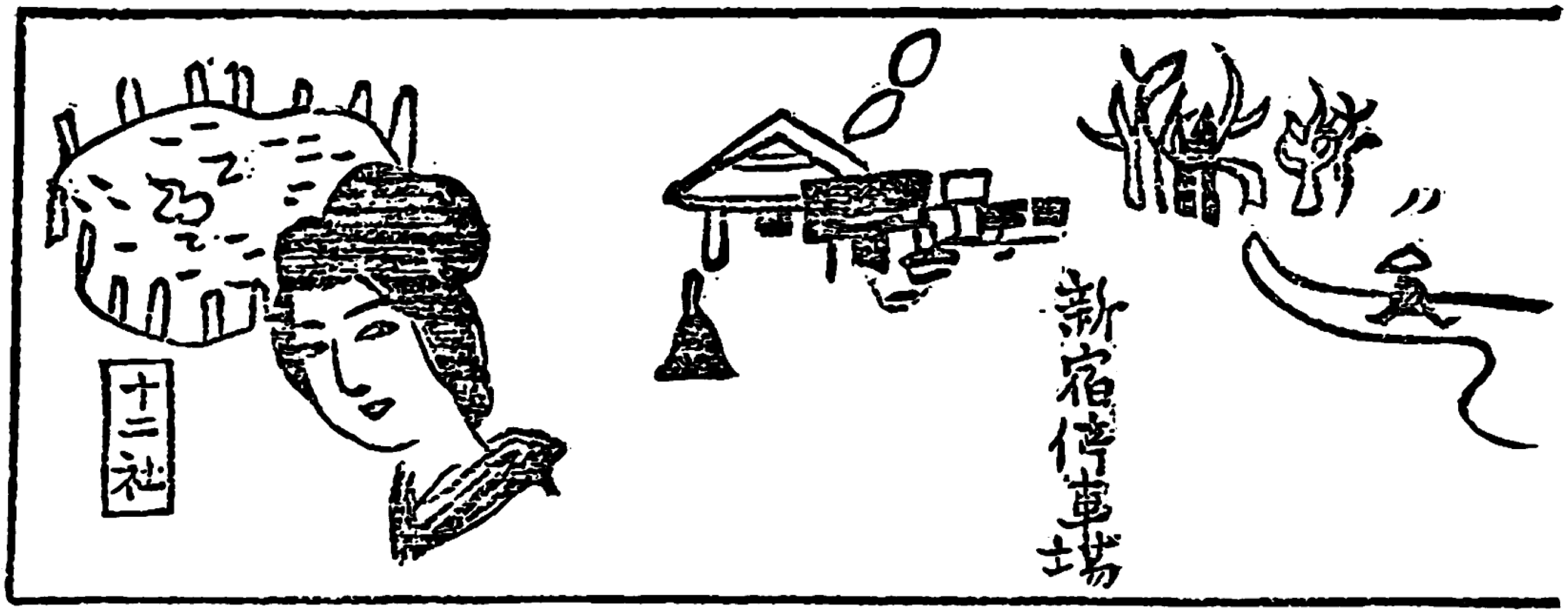
▲糀谷村から左折すれば羽田の稻荷に出る。狐の居ないのに穴が澤山あり、穴の入口に砂を持つて歸る藝者があれば、穴を拜む商人も多く、神占を引く紳士もあり、常に京濱の參詣人が絕えない。數萬の赤い小さい鳥居は、羽田稻荷の全部を語るもので、拜殿、岩山、料理屋、大運動場等は其の附錄に過ぎない。

▲要するに品川方面は梅（八景園蒲田園）櫻（六鄕）梨（雜色）桃（萩中）菜の花、海水浴紅葉、牡丹等春から夏の間迄、到る處に吾々の散步に可ならざるはなき土地である

▲少し遠くではあるが六鄕の鐵橋邊から多摩の淸流を望むか、上流數丁行けば新田義貞の謀られて沈められた矢口の渡もあり、新田義貞の靈を祀る新田神社もある。



更に下流には平間寺、川崎大師の本堂の棟が見える。
▲新田神社から戻つて平凡な畑道を過ぎ池上競馬場から本道を北に行くと、大森停車場に出る。西側の小丘は八景園で、古いだけに梅も龍虎の樣な古樹が多い。此の裏の方に猟友會の射的場があるがつまらぬ。
▲池上競馬場から北方一里の處に長榮山本門寺がある。本尊は大藝術家運慶の釋迦佛ではあるが、開帳の前後百萬の日蓮信徒花萬燈をかざし、題目を唱へて集まるのは本堂よりも小さい祖師堂の爲である。本堂の丘を少し下ると、北に二丁餘の古池洗足池——とその側に勝海舟の墓がある。
▲本門寺から本街道を東に進めば谷垂の丘に伊藤博文の墓がある、更に東し又北に行くと大崎の妙華園に出る。近郊品川方面の花園として唯一のもので池に睡蓮咲き岸に水鳥浮び丘には百花盛に、緑樹毎に茂る美しい花園である。
▲三井邸を左に見、稻が重り合ふた水田の小徑を行くと桐ケ谷火葬場が在る。近郊四火葬場中最少のものであるが、猶一晝夜に二十八の死骸は焚かれる。
▲目黒不動の不動堂は丘の上にある、堂の傍に冷たい清い瀧が間斷なく落ちて居る數年前は岸の木の間の竹筒から落ちて河に流れて行たが、今は崖や瀧壺を石で疊み脱衣場迄出來て居る。本堂の横に青木昆陽卽ち「甘藷先生の墓」と大きな「甘藷の碑」がある。然し不動と甘藷の關係は知らない。丘は雜木林であるが青田を隔てゝ白金臺の緑翠を眺望される。坂の下には數軒の料理屋と十數の掛茶屋がある。いづれも



名物として春は竹の子飯、秋は栗飯を主として比較的東京風な料理を出す。

▲白井權八と小紫の美しい戀の悲劇は今、角屋と云ふ料理屋の庭に比翼塚となつて古き昔を語つて居る、柵をして大切らしくしてあるが、昔の本で見ると桐ケ谷の安樂寺にある連理塚が權八、小紫の本當の墓だと云ふ。然し、どちらにしても比翼塚を大切に保存される事柄が面白味があるので塚の眞僞や保存の理由は問はぬ。

▲目黑村は竹子と栗が名物でありながら竹林栗林が殆んどない。昔は少しあつたけれど市に隣接して居るので地價の騰貴に由て林を開いた爲で今は近村碑文谷、深澤等のを使用して居ると云ふ。

▲行人坂を登り白金通に出て西に行き、右に入れば苔香園や目黑競馬場があり、猶行けば祐天上人の墓のある祐天寺もあるが、街道を西へ品川用水を渡つて二里餘も行けば九品佛があり等々力村の滿願寺に細川廣澤の墓もある。滿願寺の少しさきから多摩の上流二子渡は眼下に見える春の頃は近郊第一の眺であらう。

▲大山街道に沿ふてもどれば三軒茶屋、之から若林村の松陰神社は西に當る。此地何等の風致もない、平凡な畑の中の森であるが、杉林の中に吉田寅次郎、頼三樹三郎等憂國の七志士の墓がある、丁度泉岳寺の義士の墓の樣に列んで居るが、日も射さず濕潤した處で鳥さへ鳴かぬ靜さに、泉岳寺より遙に莊嚴の氣に打たれる。此林を抜けると勝國寺で、戰國時代城趾で空堀もあつて寂しい處である。崖を下り田を隔てた森が、豪徳寺で幕末の偉人井伊大老が櫻田門で斃された遺骸は此地にある。

耳袋（一〇）　猿丸太夫

▲細君も有り子も有る住持が、隣の禪宗寺の、髪は無論、眉毛も睫毛も無い和尚が、ひしかくしに女を寺に隱してゐるのを知つて怪しからぬ話せないと罵つてるといふ事が何かにあつた。自分の事は棚に上げといて他人の爲に業を沸かすのは氣が知れねど、これよりも面白いのは或佛敎雜誌の編輯にたづさはれる先生が「佛誡を守つて自今禁酒する」と廣告した事だ。其うち佛誡によつて細君を禁止する時も來るだらう。

▲眞珠貝の眞珠は池田龜太郎君の祖先だといふ珍聞がある。眞珠が光輝燦爛として、頗る美麗なのは、生きて居るからで、次第に美しき艶が失せたり、又は暗綠色を呈するに至るのは、病ひに罹つて死に近づきつゝあるのだとは、西歐の寶玉商等一般に信じられて居る處だが、眞珠が漸次其美しさを失はうとする場合、唯一の藥とも謂ふ可きは、美人の肌理濃かな皮膚であつて、此美麗な寶玉が、其生存力を持續して居るのは、美人の肌に觸れて居るからで、若し美人の肌を離れて居る事が久しければ、饑ゑに迫つて疾病を發するのだ。尤も婦人の肌を離れる事なき眞珠が、病ひに罹つて光澤を失ひ、次第に土塊の如き色を呈するに至る事もあるが、之れは其婦人を嫌つたのであるから、他の肌理濃かな美人の肌に移せば、必ず病ひ癒えて、又美しき艶を持つやうになる、以前は光輝の減退した眞珠の艶出しを、客から命ぜられゝば、海中に投入して置いたものだが、今日では極めて女好きな眞珠の特性を利用する事にし、肌の美しい婦人を雇ひ入れて、何千圓何萬圓の腕環や、頸飾を交る〳〵肌につけさせて、疾病を未發に防ぎ、又斃死を免れしめ、其光澤を恢復させる事にして居る、これを又本氣に取るばかもあるまいけれど。

▲淑女に對して左の手を差し出して握手をするのと、室内でも電車でもまづ『お先』にと云ふのは、女性を崇拜する西洋人の美德だと考へられるが、此程外字新聞に彰はれたその由來なるものを讀むと、握手の禮は餘程古いもので、古代フェニシヤ人がブリトン人に傳へたもの、商業に長じたフェニシア人、錢勘定に不足のあつた場合に手を握つて離さなかつたに始まり、婦人

を『お先に』と謙遜するのは、それよりもずつと古く、人類が穴居をして居た時、どの洞に這入るにも叉樹の陰に行くにもどんな猛獸が居たか判らぬ、そこで先づ女を這入らせて見て、はじめて男も安心して這入つたことから來て居るのだといふ。しかし天飛ぶ鳥、地を走る獸、流れにさかのぼる魚はおく彼の蠢爾としてうごめく蟲類すら、先づ敵と戰ふものは雄性である、原人――太古の人類のみ果して男がさう弱かつたらうか

▲倫敦ではハンガーストライキを企てゝ、パンも喰べぬバタも要らぬ、餓死してやるのだと言つて獄吏を困らしてゐる女連があるが、同じ程度において支那の鼻つまみもこれに劣らぬほどで。廣東省議會の李佩蘭といふ女議員は、ある日休憩室で襯衣一つで涼んでゐたのを、新聞記者といふものはドコでも同じで人が惡いから早速と素破拔いた。李女史ヤッキとなつて怒り出し、見當違ひにも警察署長に喰つてかゝつて曰く、天下何人が厠に上りて、裙裾を脱せざる者有る、況んや妾、室に有りて襯衣のみとなるとも事、他人に關せんや、妾老親堂に在し、郎君門に待ち稚子亦在矣、今人の辱しむる所となれり、何の面目あつて鄕に歸るを得んや、公悉く天下の上聞者を罰せよ、われ瞑すべき也と親や亭主を忘れぬだけまだしもだが、これには英國の女豪連も天晴同志よと感嘆するわけにもいくまい。

▲東大史學科出身の文學士堀田璋左右先生は、頗る愛嬌談に富んで居る、いつぞや、さる集會の席上で鷄卵の話が出ると、先生自分の經驗から割出して「鷄卵を六ッ食ふと胃に惡い」と云つたので、一座大笑ひ、それからまた美人の話が出て、誰やらが「水の垂るゝやうな女」と云ふと、先生其「水の垂るゝ」を寢小便と解し大眞面目で「イクラ別嬪でも寢小便を垂れては困る」先生の誤解するのも尤だ、頭や顔からは垂れる筈がない。

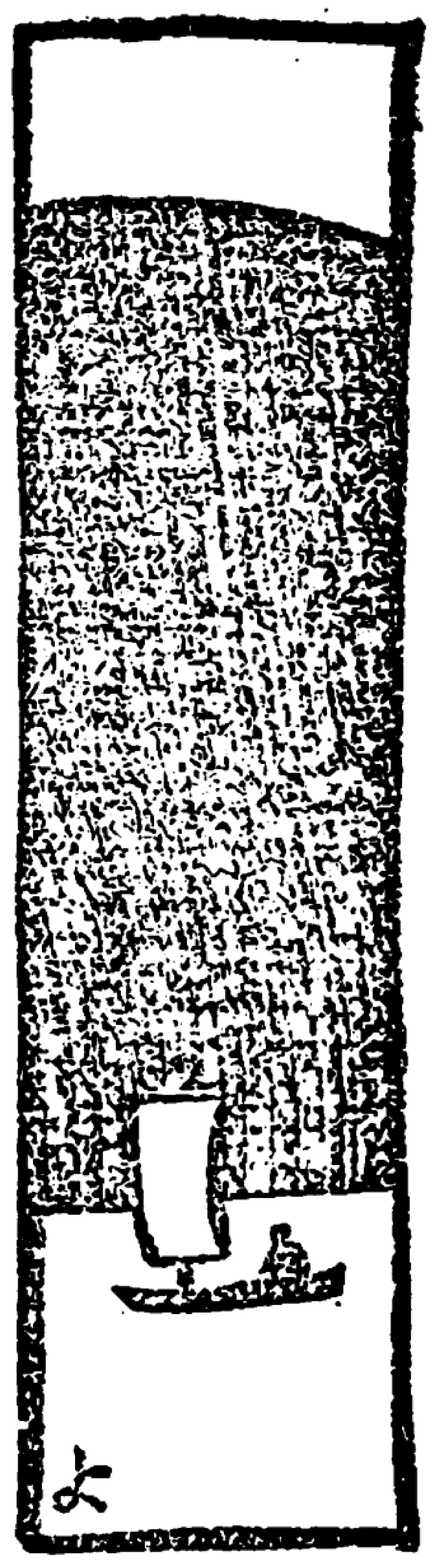
▲會津日報の記者痛嘆して曰く、河沼郡臙生村附近を通行する際、裸體の藁人形の木に懸れるを見る、之れ魔除けと稱して幾年の間の習慣なりと聞く、かゝる迷信は一日も早く撤廢し度きものなり、教育あるの士は顔をそむけて過ぐ、若し夫れ外國の紳士でも過ぎなば我國の教育を疑はん、村に識者なきか、一讀して何等肉感挑發の文意なき書さへ、風俗攪亂の罪を以て發賣禁止となる今の世に、この人形に氣付かぬ査公もあるまじ、と、裸體の藁人形はわかつたが、藁人形に着物を

着せる者が有るか知ら、神經衰弱もこゝまで來ると、今に、馬に腰卷をさせざるは、恥辱だ位はいひ出すだらう。

▲善光寺の開帳やら本願寺の遠忌やらで赤毛布の珍談がうんとある。三月十九日の暮れ〴〵だつたが西本願寺附近の人通繁き道路を、…………一絲の掩ふ所もなき一婦人、ノサ〳〵歩いてゐる。ソレ氣違ひよと往來の人々寄つて群つて、何彼と言葉を掛くれば、件の婦人は高聲に喋り出すもの〻、何をいふか薩張り判らず、巡査が來て取調べると、氣違でも何でもなく岩手縣稗貫郡湯口村字中根白藤さだといひ、西本願寺の團體參詣に加はり來京し、油小路に止宿中、湯屋へ入浴に行き、イザ歸らんとせしに着物の入れある柳行李がどれだつたか判らず、番臺のものに問へど何分ズウ〳〵の一向言語の通せぬ所より、家に歸りて判る人に取調べ貰はんと、扨こそ赤裸々の儘何一つ纏はず往來へ飛び出したるものとわかつた。裸で道中がなるものかと奴でさへうたふ。況んやこれはズウ〳〵國の大年増ながらはゞかり乍ら女である。

本號入賞 作物の順次

▲一等、原田琴子作、柳はみどり花はくれなゐ
▲二等、こいそ作、青鞜の女
▲三等、小林たか子作、物足らぬ世界
▲四等、小宅てう子作、森　乳
▲四等、初瀬野道子作、八人同胞
▲四等、野に降る雨作、うしろ髪
▲四等、紋木つね子作、御前試錬の記
▲四等、森だ　み作、家出の記
▲五等、常盤　子作、北海道の山火事
▲五等、桂　華　作、白衣の歴史
▲五等、大川端の女作、大川端より
▲五等、宇田すゞ子作、蜜柑の産地より
▲五等、かうほね作、紫野の思ひ出
▲無名氏入選二等、西村野菊。
▲同三等、森村紫苑、浮草子、卯花子、
▲紀行文、平塚白百合、松亜紫花入賞、萩香、うきふね、みさを、貞水、雅子（以上五名女子文壇叢書一部宛贈呈）
▲愛讀書目十種は發表したる通り



毒乳

小宅てう子

「とにかく貴女のお乳は一滴もおあげにならぬやうに……」

處方を書いて使ひの者に渡すと、二言三言の注意を與へて後、靜かに會釋して醫師は出て行つた。

赤兒の病氣の氣付かれたのは七夜目の朝であつた。四日目の頃からやゝ激しく泣立てるのを、產婆は笑つて「駄々泣き」だと言つた。今度も初產の時と同樣、生家に戻つて母の看護のもとに產の紐を解いた私は、肥立ち次第良人一人の家へ歸らねばならぬ。人手のすくない中で、お守りにばかりはかゝつてゐられぬと、下に寢る癖をつけるつもりで泣かせて置いた。抱けば泣きやむものを氣強くも泣かせておいた。

六日目の朝、お腹の繃帶を除つて見ると夜の間に臍の緒が落ちてゐた。それと見た產婆は

「これが終夜お腹を刺して痛かつたんですよ」

と言ひながら、默く乾固つた臍の緒で自分の掌をおして見せたので、皆安心の微笑を湛へた眼に、代る代る赤兒の顏をのぞき込んだ。

むづかりながらも赤兒はよく乳を吸つた。ふくよかな頰をうごかしていのちの糧をむさぼる唇には、貧しき父母が持てるすべての物を奪ひ去るべき力を秘めた我等が足手にからむいと強き鎖の端は、胡桃ほどの小さい拳に握られてるかとも思へて、一種の壓迫を感じる心は時々暗い中を迷つて行つた。自己をはなれて何ものにも赴くことの出來なかつた私の心は、いつしか幼きものゝ上にまつはりついて、世をも我身をも忘れはて……居るに心付いた時、淋しい姿になつて物を思はずには居られなかつた。

子の生れるといふ事は、私にとつてよろこびでも何でもなかつた、我身一つをすらもてあます病弱の身に永く負ひゆくべく重きにすぐるたからであつた。子を產む爲めに嫁いで來たのではなかつたけれど、人妻となれば子も生れる。私は私の負債をはたすべく默々と

地にうつむいて歩まねばならなかつた。併し、この樣な女を母として生るゝ兒のいたましさを思ふ涙が、あるに甲斐なきいのちをすら强からしめて、巣につく牝鷄に見る樣な執着を私の心にも植ゑつけたのであつた

「おまへは母さんの涙をおのみ！」

丸く肥つた赤兒の耳へ、最初にさゝやいた私の言葉はこれであつた。私は我子に自分と同じ道を歩ませることが悲しかつた。長子を生家へあづけたのも、切なる醫師の勸告によるとは言へ、等しく此世に生をうけた一個のいのちを尊重する餘りの意に出たに過ぎぬのであつた。此の子をも……と思つたのだけれども、いろ／＼な事情は、二人の子に一人づゝ乳母を雇ふことをゆるさなかつた。今度からは病み衰へた私の肉を絞つて養ふことに決められて了つたのだ。乳母は健康な乳房を與へられて、祖父祖母の愛護のもとに何者の手をも加へられず、家中一杯におしひろがつて、のびのびと生立ちつゝある長子を見るにつけて、私は自分の乏しき血をもて育まねばならぬ赤兒の身をいとをしむ心がいや深くなるのであつた。

　七日目の夕刻から病兒の容態は俄然一變した。熱に灼かるゝ苦惱と、折々來る腹部の痙攣とは小さき肉をさいなんで見る者の心を惑亂させた。八日、九日、病勢はつのるばかりである。其間にも、おり／＼と燒きつく樣に舌をからんで乳をむさぼり吸つた。

執拗き病魔はたえず襲つて、尺にも足らぬ肉體を苦しめぬいた。かつては輝く空の一部を映しておだやかにうごいた瞳は、滿身の力を集めて捩ぢむける苦悶の顏に、さながら灼かるゝ眞珠の樣な色をして燃えた。

「助かるものと決して思ひなさるなよ、お前は今大事なんだからね、もうかうなつてはあきらめるより他ありません」

と心强くもはげます母は、苦しむ兒の上に顏を俯せてはら／＼と泣きながら念佛をとなへてゐる。

「お母さんのお乳が毒になるなんて、こんな例しがあるもんでせうかね」

「ほんとに聽いたことがないねえ。併しお母樣の仰しやる通り貴女のお身が大切でござりますよ、貴女が今お産後の日も淺いのにお惡くでもなつたら、大きい坊ちやんがお可愛いさうですからねえ、しつかりなされましよ」

「さうでござんすとも、赤ちやんは又出來ない限りもないものですからねえ」

さゝやく數多の聲の底を、重く沈んだ私の心は極めて冷やかに、鳴りを靜めて赤兒の泣聲が語る言葉の意味を聽いてゐた。胸に激しくうたるゝ鞭の、ひとつひとつを數へる樣に――

まだ人妻とならぬ前、草深き野のふるさとに埋もれて、慈愛深き母の手に介抱されながら、淋しい病床を守つて暮す頃から、私は赤兒の泣聲をきくほど不快な思ひを誘はれる事はなかつた。病勢の比較的緩漫である爲め、死に對する恐怖の觀念もやう／＼鈍れ、いつか空想を樂しむ心が一種の甘い涙をそそつて、なつかしい冷たさに浸るのをよろこぶ樣になつてゐた。茫然と空虛の樣な心持に居る時、愕然として死の隣りに在るを意識させられては、血も凍るやうな寒さにふるへることがあつた。隣人の死がそれを運んで來る。

赤兒の聲はそれにも劣らぬ皮肉さを持つてゐた。他人の死によつて思ふそれは、單に恐怖さに伴ふ淋しさの、深く大きなものではあるけれども、それには暗い冷たい中に自己を見出して、蒼海の底に獨りぼつ然と生きてゐる我てのいのちを、じつと靜かに抱きしめつつあるやうななつかしさがないでもない。嚴肅な中にもしみ／＼と思はしめる親しさがあつた。彼の泣聲に至つては、弱者の前に暴威をたくましうする意地惡き强者の嘲笑を思はしめるやうな響きがある。夢もなき夜更に眼醒めて獨り物思ふ頃など、突如として闇の底から湧き上る赤兒の聲をきいてゐると、憎惡の念が頭腦の血も狂ふばかりにこみあげて來る事があつた。

死。敗殘。老いゆくいのち。やるせなく逐はるゝ者のかなしみは、あらゆる新らしきもの、幼きものゝ上に嫉妬となつて表はれた。

「ちつとも子供と遊ばないねえこの人は、女の癖に子供ぎらひなんだね」

「えゝ、私好かなかないんですけど、怖いんですの、可愛い赤ちやんだと思つても、手を出して抱く氣になれないんですもの」

「妙だね」

苦笑ひして二人とも默つて了つた。嫁いで來て間もない頃の事だ。

人妻となる餘程以前の事とおぼえてゐる。久しぶりで一冬を過した南の海岸から歸つて來た時、第一に幼い頃からかゝりつけのお醫者の許に走つて、諸肌ぬがされて其前に坐ると、醫師は胸から背へかけて一面に

聽診を試みながら、右肺の或部分の處へ來ると、
「うむ……」
と首をひねりながら、聽診器のさきで印でもつける樣に強く押した。私はそこに肺が腐れた穴をさながら見せられたやうな心地がして、力なくうつ向いて了つた
「もういゝ、なに大丈夫だ。お嫁におなり、お嫁に、……すれば病氣なんか癒つて了ふ」
「でも、赤ン坊と命のとりかへつこぢや仕方がないわ」
「いゝぢやないか、子供の命だけが自分の年齢だと思や……」

子供は命をとりに來るものときめてゐた。

只單に赤兒の泣聲によつて思はせらるゝ憎惡、嫉妬の念は、母の命を減らす爲めに宿された胎兒の上にも注がずには居られなかつた。

破傷風でもない赤兒の病氣が、全く私の乳の故だと知らされた時、私は慘忍な心の毒が、乳房をはしつて刄物よりも鋭く、小さき生命をそぎ去ることをおもはぬわけにゆかなかつた。

病兒の苦悶と、見てゐる母の懊惱と、悲しきはいづれ親と子が生のあらそひの結果に他ならないのであつたらしい。五日の間、一分間の間もおかずに、呪はれた悲しみを訴ふるが如く、晝夜に泣きつゞけ、叫びつづけて、生後十二日目に私の赤兒は世を去つた。

朝露や鬱金畠の秋の風　凡兆
初雁に行燈とるな枕もと　落梧
はたおりや壁に來て鳴く夜は月よ　風麥
影法師にぶさ見送る朝月夜　卓袋
僧正の妹の小屋の砧かな　尚白
菊を切る跡まばらにもなかりけり　其角
行く秋の四五日よわるすゝきかな　丈草
蔦の葉や殘らず動く秋の風　荷風
秋の夜や夢といびきときり〴〵す　水鷗
鶺鴒や走り失せたる白川原　氷固
あれ〳〵て末は海行く野分かな　猿雖
松たけや知らぬ木葉のへばりつく　芭蕉
肌寒き初めにあかし蕎麥のくき　惟然
行く秋を鼓弓の絲の恨かな　乙州
きり〴〵す燈臺消えて鳴きにけり　素秋
名もしらぬ小草花さく野菊かな　素毫
何處となく地に這ふ蔦のあはれなり　越人

物足らぬ世界

小林たか子

過去を顧みれば慚愧である、未來をのぞけば、むらむらと立て込める煙の奥を見極め様とする如く、とりとめもない、現在を――只毎日生きて動いて居ると云ふ事實だけである。

はかない、記憶の舞臺に現はれる自分の姿毎に、見苦しいみじめな影がつきまとつて居る、私は自分のこんな、あはれつぽい様子をじつと見入つて居るに忍びない、然し私は華やかな幸福な過去をもつたと云ふ人たちをうらやましいとは思はぬ、華やかゞ何であらう、只美しい着物をかざつただけではないか、幸福が何であらう、只順境に育つて世間知らずのお姫様として、かしづかれたゞけではないか、要するに上邊にすぎない。

時の間に消え失せる幻影の只赤いか青いかにすぎないではないか、こんな華やかさなら、こんなのが幸福と云ふものなら私にも決して貧しくはなかつた。

如何な場合でも自分が其中に織り込まれて居る時で自分の行動、自分の言葉を考へて見る時に「あゝよくした立派に言つた」と思ふ事は一度もない。

もつと大膽に云つてやればよかつたとか、もつと皮肉に出ればおもしろかつたとか云ふ悔恨ばかりである記憶をたどつて善にしろ惡にしろ見苦しい自分を見出さない人、自分の思つた通りに動いたと云ふ滿足のある人は、ほんとにゑらひ人、幸福な人であると思ふ。人のもたない或は或一部の人にのみ神から許される或物をもつて生れたかつた。

何も出來ずに、世の常の人と同じ様に死んで行くのは堪へられない。

變化に富んだロマンチックな色を帯びた過去がもちたかつた、平和な一色の生活を美しくするために、引き立たせるために、思ひきつた悲劇か、喜劇にぶつかつて見たかつた。

その中で自分が、如何な行動を取つたか、如何な情緒を味はつたかゞ見たい。

一度深くしみ込んだ悲しみが時が立つにつれて、うすれて行くと云ふ事實を悲しくも、あさましいものである、其當時の身も世もあらぬ悲しさの情の流れを其

まゝ未來の國におし流さずとも、せめては尊い寶物として、胸の奥に、人知れずひめ隠して、世の中の單調にあきたとき、人の世のつまらなさかげんがいやになつた時、自分の無能に泣きたくなつた時の隠れ場にしたい。

今の新らしい時代に、今の忙がしい世に、そんな夢の樣な事に大事な時をささげて居るひまはないと或一部の人は思ふだらう、そんな過ぎ去つた悲哀をもてあそぶ間に新人のする事はたくさんあると思ふだらう。

然し、それは詩と散文との違ひである。

或人が現實にてぴりついて新人の名の下にあくせくして居る間に或者はイルージョンを追ふて詩境に別天地を作る。

他人の意見を理解して、それを容れる人は廣い人である、自分の懐く意見と他人の唱へる意見とを比較して、こんな世界もあるかしらと驚ろく人は罪のない人だ自分一人が世の中で一番正しく自分以外の観察、自分以外の理解をもつ人は語るに足りない自分と一致しない説をはく人は邪道に迷ふ人であると云ふ人に致つては、あはれの極みである。

只私には現實のせはしさに嘗てと云ふからつぽの記



憶ばかりとなつて、それすらも終には意識せぬうちにむなしく人の心に朽ちはてゝしまふと云ふ事を、あまりに情けなく思はれる。

私の今迄の平坦な命のうちにも、少しの趣をそへる出來事もあつた、然し今の私の心が現世を、むなしくしてなつかしい思出にしみ入るには或物はあまりに古び、又或物はあまりに淡い色彩であつた。

私を一番可愛がつた父樣は、私がまだ赤を赤いと見白を白いと見る外何の趣をもみる事が出來ない頃に死んでしまつた、私は只悲しくて涙のあるかぎり泣いた事だけしか覺えて居ない、母樣や外の人が如何な感をもつて居るかも解らず、自分も悲しさをしみ〴〵と味ふ事さへも知らず只泣いた。

泣いたけれども日數がたつにつれて、不自由のない生活に――淋しいけれど――なれて、いつしか涙がかわいてしまつた、かうして暮して居るうちに、私は女子學院の寄宿舍の朝夕に起ふしする事になつて居た。

八時から三時迄ある、教場では色々の事を教へられた、來る朝も迎へる夕も同じ、單調さを繰り返して、毎日古びた日々を消して居る間に、かんてんつきの中のかんてんの樣に後からおされて終に卒業間近までおしつけられた。

卒業と云ふ事實も只今迄と異つた生活――それすらもまたゝきの間に消え失せる――に到着すると云ふ極めて淡い刺激の外は何の快感をも與へない、それかと云つて決して寄宿舍生活がなつかしいと云ふ理ではない。

床の高さ二尺以上、床下に風ぬきを設くべし。

採光窓は生徒座席の左方にあるべし、其外の窓を補助窓と云ふ、採光窓の面積は床の六分の一なるべし・・・・・と云ふ小學校の建築法を教育の組では習つた、先生は私たちを小學校の大工にしなくては生き甲斐がないと思つて居るのではないかと心配になる程熱心に且眞面目に小學校の建築法を生徒に傳授する。

てんな風で數ある學課の中でも二三をのぞく外は趣味を見出す事が出來なかつた、只西洋史と英文學と二週間毎に一度出して評をつけて返してもらう作文とだけは親身になつて勉强した、それでもたりなくつて他からしらべたりして、せめてもの毎日を送つて居た。

最後の日が來た、永劫に學校を去る日が。

卒業を喜ぶ事が出來ない自分、寄宿舍に愛着をもた

ない自分は、せめて今別れてはいつ會ふともない友だちとの別れを惜んで、痛切に悲しみたい思ひきり泣いて見たいのだ。

其夜いつもの通りライブラリーにかたまつて寒くもえるストーブの火影に見入りながら、誰れからともなくこんな言葉が交された。

「これが最後ね」

「ほんとに今度會ふ時は如何なにかはつてるでせう」

「東京の人は同窓會に會へるでせう」

「私めんどくさいから來ないの」

「自由になれて嬉しいわ」

「あゝ、お芝居が見たい」

誰れも泣く人もない、悲しむ人もない、皆笑ひながら話して居る、もつとしんみりと別れの情が味ひたい數年間一所に住んだ友だちの別れがこれかと思ふと、何となく物足りない、泣かずとも、わめかずとも、もう少ししみ〴〵と話したらよいではないか、私はだまされた樣な氣がして、むやみに腹たゞしい。

かうして、たうとう學校を後にした。

私は手紙もかきたくない、切れた絲をむりにつないだとて何にならう。

二十年も住み古した家を東京に對して凡ての興味を失ひつくした私は、東京をはなれ、家を遠退かなければ生きられない樣な氣がする。

私は自分の住む世界の中に暖かみも冷やかさも感じる事は出來ない、涙もなく笑もなく私の此頃は化石しさうだ、家の人たちの態度があきたらない、もつと親身にしてくれるか、それでなけりや容赦なくいぢめてほしい、人たちの胸と胸とがとけ合つて一つの生活を暮すのでなけりや冷やかな朝夕を淋しさと苦しさのうちに物悲しく送る自分の姿を眺めたい。

もう私は何もいらぬ、どうしなくつてもいゝ。

只何か一事のうちに自己をひたして、其物にのみ熱中したい、其物のために生きたらいゝ。

古寺や栗をいけたる緣の下　鬼貫

生栗をにぎりつめたる山路哉　其角

兩方へ手開く栗の別れかな　涙化

古寺や寢覺に栗の落る音　存義

大きさや人の拾ひし栗の毬　一茶

栗一つ握つてまろき子の手かな　五明

栗落て鼬の道は絕えにけり　子規

手まり唄

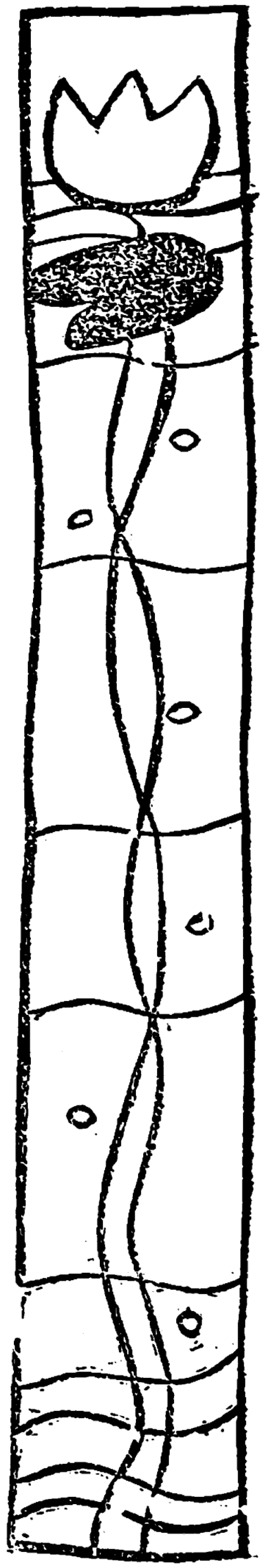
信濃　建花ひで子

むかし信州上伊那郡
或日獵師が猿擊ち歸る
その夜子猿が三匹四匹
親の傷をば癒そと思ふて
罪な獵師の小家へと忍び
夜目に臺所透して見れば
親は逆さに梁木につらる
子猿ひそ〳〵何物語る
母を擊たれてさぞ悲しかろ
やがて一つの兄子の猿が
梁の下へと手をつき這へば
ほかの子猿が一匹二匹
兄の上にとさる膀がれば
いつちそ中のちひさな猿が
傍の爐の炭よくかきおこし
兩手溫めて幾度となく
胸の傷所によく手をあて〻
早く眼を開くその時待てど
あはれ親猿はその眼をあけぬ
かくて夜明も近づきたれば
名殘惜しくも小家立ち去りて
山の我巢にすご〳〵歸り
木の實一つを喰はうとせずに
親の來る日を待ちわびたりと
子猿ながらに親戀ふ心
さても哀れなこの物語

出雲今市の盆踊歌

出雲　三吉よしみ

今夜どこで寢よか生姜の中で、そらせ
生姜の匂ひでそりや風ひかぬ
　そりや、やあはとない、やあはとない
お母盃が來た酒手がたらぬ
酒手どころかうどん粉がたらぬ
　そりや、やあはとない
　　やあはとない



愛讀書目十種

▲水沫集　（森　鷗外）
▲テニソン詩集
▲アーノルド詩集
▲ポケット　（ロバートルイス、スチーブンソン）
▲基督傳　（ロバーツソン、ニコル）
▲カウンテス、クラシンスカの日記　（英譯者 Kasimir Dgiekonska）
最後の日記はポーランドのカウント、クラシンスキーの第二女フランシンス姫のもので英譯者の名はよめません。フランシス姫は彼の有名なヴイクトル、インマヌエルの曾祖母で御座います。（一八九七年倫敦に於て印行）（入賞）

愛讀書目十種は、誌友諸嬢が平素愛讀してゐる書物の名、十種を選んで投稿されたものです、之に依つて讀者諸君が讀書の方針に新しい進歩を見出されたなら記者も満足です。なほ参考の爲め、本誌一記者の解題を加へました、之は明治に出版されたものばかりを選んで、未だ其書物に接しない諸君の爲に、概略的な解題をしたもので、書目の悉皆に渉らなかつたのを遺憾とします。（一記者）

○　青山　初鹿野道子

書名	著者
▲萬葉集	
▲徒然草	（吉田兼好）
▲土佐日記	（紀　貫之）
▲忘れがたみ	（若松賤子）

○　京都　いろ鳥

▲伊勢ものがたり　（在原業平朝臣）
▲方丈記　（鴨　長　明）
▲徒然草　（吉田兼好法師）
▲西鶴文粋　（伊原西鶴）
▲山家集　（西行法師）
▲雨月物語　（上田秋成）
▲一葉全集　（樋
▲露伴叢書　（幸田露伴）
▲ツアラトウストラ　（ニイチエ）
▲クロイチエルソナタ　（トルストイ）　（入賞）

○　向島　小林たか子

▲文學論（夏目漱石）
▲漾虚集（同）
▲鶉籠（同）
▲返らぬ日（鈴木三重吉）
▲赤い鳥（同）
▲影と聲（小宮、森田、阿部合著）
▲自叙傳（森田草平）
▲血笑記（アンドレーフ作 二葉亭譯）
▲死の勝利（ダヌンツイオ）
▲物言はぬ顏（小川未明）

（入賞）

○　紀伊　宇田すが子

我が親族が大方讀書好であるために與へられるまゝすゝめられるまゝに何でもかでも讀んで居ります從つて自分が是と目星をつけてまだ本を求めたことはありません。主に小説の類

▲崖（アンドレーフ、相馬御風譯）
其の初め頃にある田舎の美しい景色の所などは全く絶品だと思ひます。迫りくる夕やみの中に語るネモフエツキとチノチカと其の周圍の空氣は何とも云へない。信仰も好きです

▲あめりか物語（永井荷風）
この人のは何んでも物輕くてハイカラで上品で好きです、冷笑もよい

▲八犬傳（瀧澤馬琴、幸田露伴校訂）
さすがに感心して讀んで居ります、大きなホラにも文のきれいな所にも思はずつりこまれます

▲多情多恨（尾崎紅葉）
山人の苦心のあとを思ひながら味ふてよみます、初め頃の心理小説として、金色夜叉よりも好きです

▲一葉全集（樋口なつ子）
みな好きです中でも、にごりゑ、たけくらべは最もよろしいと思ひます

▲太平記
新らしい雜誌なんか讀みあきた時には味ふて見てます、榮華物語も、源平盛衰記なども

▲虞美人草（夏目漱石）
この人の猫も坊ちやんも三四郎もみな好きです

▲獨歩全集（國木田獨歩）
どれもこれもみな好きです、中にも第三者、少年の悲哀、運命論者、鎌倉夫人

▲常夏（よさの晶子）
ほんたうに感心してます

▲赤い鳥と女（鈴木三重吉）
（近頃よんだ中でこれが一番好きです、くろい花――蜘蛛――バンドールの像の動き出す日のために――白いとりの國――たまらんほどすきです、赤い鳥よりも女の方が――。

（入賞）

○　京都市　花村白百合

▲思ひ出（北原白秋）
▲春泥集（與謝野晶子）
▲藤村詩集（島崎藤村）
▲萬葉集（大伴家持）
▲源氏物語（紫式部）
▲枕草紙（清少納言）
▲自然と人生（徳富蘆花）
▲卽興詩人（森鷗外譯）
▲武藏野（國木田獨歩）
▲セニリヤ（ツルゲーネフ）

○　信濃　建花ひで子

▲藤村詩集（島崎藤村）
▲みだれ髮（與謝野晶子）

▲舞姫（與謝野晶子）
▲春泥集（同）
▲思ひ出の記（德富蘆花）
▲天地有情（土井晩翠）
▲霧（河井醉茗）
▲夜雨集（横瀬夜雨）
▲泥人形（正宗白鳥）
▲哀花熱花（兒玉花外）

○豐後　吉田夕草

▲獨立自營（森村市左衞門）
▲婦人の修養（鳩山春子）
▲婦人文庫（諸名士）
▲新式化粧法（藤波芙蓉）
▲午後三時（吉井勇）
▲思ひ出（北原白秋）
▲路上（若山牧水）
▲收穫（前田夕暮）
▲別離（若山牧水）
▲南方の花（近藤元）

○花山院貴美子

▲聖書
▲支那文學全書詩經講義
▲日本文學全書第二編
▲校註神皇正統記
▲修紫田舍源氏
▲湘煙日記（故中島湘煙女史）
▲ふところ日記（川上眉山）
▲リヤ王（沙翁悲劇、坪内逍遙博士譯）
▲黄昏に（土岐哀果）
▲歌行燈（泉鏡花）

○尾張　うつせみ子

▲樗牛全集
▲平家物語
▲藤村詩集
▲一葉全集
▲紅葉全集
▲源氏物語
▲太平記
▲やどり木
▲春日局
▲椿說弓張月

○熊本縣　本島とよみ

▲みだれがみ（與謝野晶子）
▲佐保姫（同）
▲春泥集（同）
▲新譯源氏物語（同）
▲一隅より（同）
▲別離（若山牧水）
▲路上より（同）
▲南方の花（近藤元）
▲酒ほがひ（吉井勇）
▲ロミオとジユリエツト（沙翁作　坪内逍遙譯）

○長野縣　和野晃

▲夜雨集（横瀬夜雨）
▲藤村詩集（島崎藤村）
▲霧（河井醉茗）
▲思ひ出（北原白秋）
▲路傍の花（川路柳虹）
▲舞姫（與謝野晶子）

▲春泥集（與謝野晶子）
▲思ひ出の記（德富蘆花）
▲返らぬ日（鈴木三重吉）

○大阪　河盛よしの
▲ひゞき（水野葉舟）
▲惡夢（同）
▲獨歩集（國木田獨歩）
▲白鳥集（正宗白鳥）
▲舞姫（晶子歌集）
▲常夏（同）
▲テニソン詩集（テニソン）
▲近松全集（巣林子）

○千葉　あらゝぎ子
▲不如歸（德富蘆花）
▲春泥集（與謝野晶子）
▲佐保姫（同）
▲ロメヲとジイイリツト（坪内雄藏譯）
▲美辭學（島村抱月）
▲源氏物語（紫式部）
▲お三津さん（鈴木三重吉）

▲榮華物語
▲新古今集（勅撰）
▲家（島崎藤村）

○大阪市　貞子
▲紅葉全集（尾崎紅葉）
▲魔の曲（高安月郊）
▲黴（德田秋聲）
▲哀花熱花（兒玉花外）
▲思出の記（德富蘆花）
▲寄生木（同）
▲泥人形（正宗白鳥）
▲仕合者（田口掬汀）
▲それから（夏目漱石）
▲彼岸過まで（同）

○神戸市　みどり
▲破戒（島崎藤村）
▲魔の曲（高安月郊）
▲泥人形（正宗白鳥）
▲平家の人々（高須梅溪）
▲浮草（ツルゲーネフ原著 長谷川二葉亭譯）

▲オルレアンの少女（シルレル原著 藤澤周次譯）
▲アルネ（ビヨルンソン原著 矢口達譯）
▲蘇生の日（イブセン原著 千葉掬香譯）
▲どん底（ゴリーキ原著、昇曙夢譯）
▲毒の園（昇曙夢譯）

○德島縣　杉山雪子
▲修養（新渡邊稻造）
▲家庭節用（女子裁縫高等學院）
▲自然と人生（德富健次郎）
▲古今和歌集（紀貫之）
▲聖德餘聞（三省堂）
▲千山萬水（大橋乙羽）
▲益軒十訓（西田敬正）
▲家庭衛生講和（糸左近）
▲新譯伊蘇普物語（佐藤潔）
▲肉彈（櫻井忠溫）

○金澤市　歌の宵女
▲思ひ出の記（德富蘆花）
▲古今和歌集評釋（金子元臣）

▲論文及和歌集（大西　祝）
▲南方の花（近藤　元）
▲藤村詩集（島崎藤村）
▲醉後の花（高濱長江）
▲煉獄へ（同）
▲霧（河井醉茗）
▲思ひ出（北原白秋）
▲俗曲評釋六冊（佐々醒雪）

○姫路　九十子

▲續一幕物（森鷗外譯）
▲新譯源氏物語（與謝野晶子）
▲一隅より（同）
▲病床録（國木田獨歩）
▲女と赤い鳥（鈴木三重吉）
▲夜雨集（横瀬夜雨）
▲あらゝぎ（水野葉舟）
▲修養（新渡戸稻造）
▲キイッの詩（田山花袋）
▲野に山に（竹久夢二）

○岡山市　矢木武子

▲紅葉全集（紅葉山人）
▲自然と人生（德富蘆花）
▲一葉全集（樋口一葉）
▲新譯源氏物語（與謝野晶子）
▲豪傑の子（江見水蔭）
▲朝（田山花袋）
▲スヰートホーム（内藤千代子）
▲ホネムーン（内藤千代子）
▲歐洲見物（櫻井鷗村）
▲夜雨集（横瀬夜雨）

○失名

▲花袋集（田山花袋）
▲ゴリキー集（相馬御風譯）
▲壁畫（水野葉舟）
▲さよなら（竹久夢二）
▲日用女禮式（中島義式）
▲女ばかりの衛生（糸　左近）
▲婦人國（桐生悠々譯）
▲女子の修養（下田次郎）
▲夜雨集（横瀬夜雨）
▲さびしき戀（松美佐男）

○山梨縣　望月とし子

▲思ひ出の記（德富健次郎）
▲泥人形（正宗白鳥）
▲北米の花（田村松魚）
▲婦人常識の養成（下田歌子）
▲小姫君（前田雪子）
▲一葉全集（樋口一葉）
▲卯の花月夜
▲枯野の雪｛故落合直文／池邊義象｝
▲少女思ひ出の記（竹貫佳水）
▲わか草（沼田笠峰）

○伊豫　行々子

▲女と赤い鳥（鈴木三重吉）
▲土（長塚　節）
▲沈鐘（ハープトマン著泉鏡花譯）
▲額の男（長谷川如是閑）
▲背教者ジユリアノ（メレシユフスキー著　島村苳三譯）
▲故郷（ズーダーマン著　島村抱月譯）
▲水滸傳（小杉未醒譯）
▲虚子小品（高濱虛子）
▲田舍教師（田山花袋）

愛讀書解題

△忘れがたみ　（若松賤子）

『小公子』で名を知られて居る若松賤子女史の短篇の飜譯、處女作、絶筆二十二篇を遺稿として編纂せられたものが此の書です。島崎藤村氏の序文が次の樣に語られてゐます。

『自分は若松女史を知つて居ますが夙くから耶蘇教の信徒となり、教育から嬌風慈善のことにも深くたづさはつた人で、家庭に新しい理想と宗教と、趣味を持つて居られた事は實際目に見て感心しました。是は「忘形見」の讀者に覺えていたゞいて本を讀む場合には其人の生涯をも讀むといふことをしてもらひたいのです。』

卷頭にのつて居る「忘れ形見」は一人の少年が幼い時お城の奥樣の悲しい臨終を見た事を哀れ深く書いてあります。お城の奥樣の忘れがたみが此の少年であるのです。セーラ、クルー物語は、可憐な少女小説です。セーラと云ふ少女が、貧しい苦しい身の上から幸福な令孃になつた事がかけてゐます。其の他のものも凡て、最善な家庭の讀物ばかりです。

△水沫集　（森鷗外）

『即興詩人』と並んで明治文學の最初に多くの人に讀まれました。『二夜』『舞姫』『悪因緣』『地震』『緑葉嘆』には、それぞれの悲しき戀や、優にやさしき男女の物語が流暢な和文調で書かれてあるのです、其の他、『瑞西館』『戦僧』『浮世の浪』『文づかひ』『洪水』いづれも面白いものですが、水沫集中の壓卷は『埋れ木』の一篇です。埋れ木の主人公は、ゲザ、ファン、サイレンと云ふ天才ある樂人で、幼き時に母に別れてから數奇なる生活の中に、音樂の才能は漸くあらはれて來ます、其の中に美しき少女と戀をし、結髮の夫としての歡樂の夢もまだ僅かの間に、ステルニイに云ふ其の師に少女を奪はれてしまひます、少女は其の身の罪を耻ぢて自殺し、ゲザは失望に失望をかさね、落魄の果てにあはれや天才を抱いて發狂の人となつたのです。飜譯の文章はよく此の悲慘な樂師の一生を述べつくしてあります。

△漾虚集　（夏目漱石）

此の書には名文として傳へられてる、『倫敦塔』が收められてあります。倫敦塔は英國の歴史を讀む人に少なからず感興のある建築物で、そこへ見物に行つた事を書いてあるのです。其の他『カーライル博物館』『まぼろしの楯』など「遠き世の物語である。バロンと名乘るものゝ城を構へ濠を環らして、人を屠り、天に驕れる昔に歸れ。今代の話ではない。」

と云ふ書き出して、武士の物語が書かれてあります。次のは其の一節の文です。

『盾の縁を繞りて小指の先程の鋲がきれいに五分程の間を置いて植ゑられてある。鋲の色も亦銀色である。鋲の輪の内側は四寸ばかりの内を盡して、百人の巧をつくしたる唐草が彫り付けてある。模樣があまり細かすぎるので一寸見ると只不規則の漣漪が肌に答へぬ程の微風にかぞへがたき皺を寄する如くである。花か蔦か或は葉か、所々が劇しく光線を反射して、よそよりも際立ちて視線を蒐ふのは、昔象嵌のあつた名殘でもあらう。』

△即興詩人　（森鷗外譯）

『此の家は我が爲めに世の常ならぬ面白味あり。そをいかにと云ふにわれは此の家にて生れぬ。首を回らして我が幼かりける程の事を思へば目もくるめくばかり、いろいろなる記念の多き事よ。』

と自叙傳風に書きはじめられてゐます。主人公のアントニオは即興詩人です、幼い時に母の非命の死に逢ひ、カンパニアの野のはづれでまづしき老夫婦に育てられます、其の後、ふとした事から某侯爵家に出入するやうになり其の保護の下に青年期に入ります。此の間に詩人たる天分を人にも知られ、自分も其の詩に心を寄せてゐる時、當時有名の歌姫アヌンチヤタに戀ひし其の友と戀の爲めに爭ふて、打倒し逃走します其の間種々の危險ををかし流離艱難の中に幾年かを送ります。第二の戀人は、可憐な少女マリヤで、遂に樂しき結婚にをはります。然るに一方アヌンチヤタは、アントニオに思してゐた戀に破れ、遂に聲をも、姿をも病の爲に失ひ、虹のやうな光彩を昔の夢に止めて、はかなく死んだのです。

譯筆の優れてゐるのは云ふまでもありません

△虞美人草　（夏目漱石）

主我的な美貌な藤尾と云ふ女が主人公です。外交官志望の青年が腹がはりの兄の親友で、求婚して來たのを拒絶して、小野さんと云ふ青年に戀ひして、クレオパトラの話をしたりします

ところが小野さんには師匠の娘がもう結婚する事になつてゐるのです。藤尾は其の事を知ると同時に、前に拒絶した青年に近付いて行き、小野さんに渡すといつてゐた銀時計を青年に渡すと受取るや打ち碎いてしまひました。藤尾は卒倒して、虞美人草を畫いた屏風の中で、眼を閉ぢて永久に眠つて了ひます。

其の外に、兄と、藤尾の母との間に葛藤があつたり、外交官志望の青年の妹との戀があつたりします。

文章も極めて艶麗です

△一葉全集　（一葉女史）

『我れから』『行く雲』『闇夜』『別れ道』『經机』『丈くらべ』『濁り江』等が收められてあります。『たけくらべ』は少年少女の無邪氣な交際が漸く年とともに覺めてゆき、少女は處女に、少年は青年になつてゆく徑路が描かれてあるのです。『濁り江』はお力と云ふ女を中心にした人生の葛藤が巧みに描かれてゐます。

『行く雲』には、お縫と云ふ少女に戀ひした桂次と云ふ男の心の中が、

『あはれなるは繼子の身分にして、不甲斐ないものは、養子の我れと今更のやうに世の中の味氣なきを思ひぬ』

と云ふやうに寫されてゐます。今度出た一葉女史の日記と、小説とをあはせ讀むと、一層此の天才の影にしたしまれるでせう。

△ふところ日記　（川上眉山）

長谷川二葉亭氏とともに十二月三十一日の夜東京を出で、眉山はそれより、相州の南端を志し逗子に至り、更に房州の山河幾里を經、つぶさに絶勝美景をさぐる紀行記です。其の一節をあげて見ます。

朝またき空打曇りたれど結束して立つ。相馴れたりし相模灘をも、三崎も今は後にして、滴松ケ枝を引結ぶ名殘の愁もなかりければ、柳の蔭に振返る家居も其のまゝ眺めすてゝ、向が崎より岡幾つ例の藪椿、麥畑蘿蔔畑の中を過ぎて、道稍高く浪遠き小山かゞりの松原に出づ。梢を走る白帆の影、葉越に浮ぶ小島の姿も、目には飽きたる風情ながら、流石無下にも捨てがたし。』

所々に感激に富んだ文字が光るやうに見え美文調の紀行文としてすぐれたものとせられてゐます。

△別離　（若山牧水）

若山牧水氏の歌集は最初『海の聲』と云ふのが出ましたが、それは餘り世間に知れなかつたので、次に『海の聲』よりと、新しい作歌とを一冊に纒めて出版したのが『別離』です。自分の作を一冊に纒めて出すのは自分との別れであつて、自分は又新しい方向へ旅をつゞけるといふやうな意味で、『別離』と名づけたものでせう。歌の數も多く、皆氏一家の異性的な感情を強く歌つたもので、明治時代の歌集中では、二段と下らないものでせう、『別離』の後から『路上』と云ふ歌集が出ました、やはり同氏の歌集で、『別離』と同じ價値を持つて居ます。

△浮草　（長谷川二葉亭譯）

ロシアの片田舍の素封家の未亡人の家に一人の客が來ます。それがハーヂンと云ふ青年で此の主人公です。立派な言説を持つた人だと一家族の人々から信用せられて、遂に未亡人の愛孃ナターリヤまでひきつけて了ひます。ナターリヤには一人の男がやはり戀着してゐたのですがハーヂンが勢力を得てから、ナターリヤの心が其の男からはなれたのです。

愈々その戀を斷行しようとする場合になつて娘のさし出した手を、ハーヂンは卑怯にも押し返しました、ハーヂンは、萬事そのとほりに、口では種々尤もらしい事を並べるが、いざ實行となると手も足も出ません。未亡人の家を離れてハーヂンは再び放浪を初めました。遂に一生浮草の様に漂ひ歩いて了つたのです。

入つて來たのを見れは、年頃三十五六の脊の高い少し猫背で、縮毛の、色の淺黑い男である男前が好いのではないが、締つて活々とした面相で、鋭い青黑い眼に、しつとりと光を持つて微つた大きな鼻で、唇はくつきり際立つてゐる着てゐる衣服もさまで新しくもなく、而も窮屈さうで、着たまゝ成長したとでも云ひさうである。

此れはハーヂンが、始めて未亡人の家に現れ出た時の風貌です。二葉亭氏の譯筆はその原作

にもまさると云はれてをります。

△夜雨集（横瀨夜雨）

『我れは不斷の坐瀨に在り、寂しけれど淸し、『誰か我が日中の靜寂を疑ふや。我が夢は湖の水の如し、動けども終に鎭まり、行けどもやがて反る、誰かわが床に覗き影をうかがふや。』

と著者は其の自序に書いてあります。病軀を守つて、絕えず苦悶を書くと云ふ事に慰められてゆく此の人の感情はあくまでも讀者の胸に迫ります『七本櫻』『傀儡子』『お才の國へ』『蘇生』等は最近の創作で、卷末にあるものは、『二十八宿』と云ふ詩集の出た頃の前後の作です。

其文章には凡て正確な用意を見せてあります

△自然と人生（德富蘆花）

十年前には小品文集と云ふ名ではなかつたが『自然と人生』は小品文集の多く出る樣になつた此頃も矢張廣く愛讀されてをります。『自然に對する五分時』の中には二十九篇の短文があります『此頃の富士の曙』とか『相模灘の落日』とか『田家の煙』などは殆ど暗誦してゐる人さへもあるでせう。『寫生帖』には十一篇『湘南雜筆』には四十七篇、をはりに風景畫家、コロオの傳があります。卷頭には『灰燼』と云ふ西南戰爭を背景にした小說があります。

『思ひ出の記』『不如歸』等にもゆづらず多くの人に讀まれて來たやうです。

△女と赤い鳥（鈴木三重吉）

『女』の方は、ある西洋料理店に一人の男がいつた時、フランス語で落書をした紙片を落して行つた女を見た。其の後女は、男が來たのを迎へて、談話をした。夜になつて女が、男の居る家に來たが志を得ずに歸つていつた。翌日西洋料理店には其の女は居らなかつた。

『赤い鳥』は一つの挿話がある。女が戀人と一緒にその家を離れる時に赤い鳥を籠から飛ばしていつたことをよんだ、若い男が偶然の奇禍にあつた眼を打たれた。病院に入つて、治療してゐる間に隣室に女が居て、女は鳥をかつて居た。女と赤い鳥に對する一種の憧憬が男の胸にわいた然し女はその赤い鳥を離す事もせず退院をしてしまつた。その顏すらも眼の惡い爲に見なかつたのである。春陽堂の文藝叢書の中の一編として出たのです。

△響（水野葉舟）

小品文に獨特の名を稱へられてゐる人の小品文集で、この前には、『あらゝぎ』後には今度『森』と云ふのが出たのです。

著者は其の森の序文にかく語られてゐます。

『自分は野の草の葉の一枚にも、林の木の枝の一つにも、人の顏の皮膚にも、その表に消す事が出來ない力をもつて『生命』の力が光つてゐるのを感じた。感ぜざるを得なかつた。しかもそれら凡てのものは此の自然の中に同じやうに生きてゐると思はずにはゐられなかつた、人間のもつてゐる靈魂は木も草も持つて居る。人間が聲を發してものを言ふやうに、木も草もものを言ふ。自分にはどうしてもさう信じて思はずには居られない。この心は決して過去のものではなく今日の今の時にも確と自分の心に生きてゐる信仰である。』

『響』に收められてある重なるものは『蛾』『忘却』『赤城つゝじ』『猫兒』『泣き聲』『落日』『嵐の後』『たき火』『赤兒の瞳』『某月某日』等です

△收穫（前田夕暮）

自序の一節に次の如く書かれてをります。

自分は技巧が拙い。修飾することを知らぬ。藝がないのであるから思つた事感じた事は、思つたことと感じたこと以上に歌ふことを知らぬ。唯正直に歌へたらよいと思つてゐる。自分は無論藝術を尊重する、愛する、然し自分は何時も通例人であらん事を願ふ。唯一箇の人間であつたらそれでよいと思ふ。通例人の思つた事、感じた事を修飾せず、誇張せず正直に歌ひたいと思ふ。集の中から二三の歌をしるします。

魂よいづくへ行くや見のこしゝうら若き日の暮に別れて

わすれ行きし女の貝の釦止のしろう光れる初秋の朝

をりをりは別ればなしもまじる夜の氣まぐれ心こほろぎをきく

君ねむるあはれ女の魂のなげいだされしうつくしさかな

△泥人形（正宗白鳥）

泥人形の主人公は、さんざ遊び歩いた男で女に對する感想等は全く精神的でなく、結婚と云ふ事に對しても一種の見解を持つた外には好奇心があるばかりであつた。此の主人公に、田

舍の家に育つた、何も世間を知らぬ初心な女が嫁して來たのです。

多くの女に荒んでゐる主人公と、初心な若い妻との間の新しくいとなまれてゆく生活が觀察せられてあるのです。泥人形の後にのせてある『死後』と云ふのは、父の死後の兄弟の身の方向を考へる中に一人にて立切らない、働きのにぶい主人公があつて、樣々の周圍との交渉が生じてゆく事が描寫されてあります。現代文藝叢書の第一編として出たのです。

△おもひで　（北原白秋）

小說が自然主義を唱導する事のあつた前後に於て、新體詩も亦一種の變動があつた。有明の詩風の後を受けて、官能的感覺的の詩が詩壇の勢力となつて來た。而してその官能的の詩を作る人の大きい一人の作家が『おもひで』の著者、白秋であつたのです。此のおもひでは、抒情小曲集と書き加へられてある。中に收めてある詩はいづれも、白秋獨特のものであるが『おもひで』を開くと先づ其の自序の文章に目を惹かれます。其の一節に、

『時は過ぎた。さうして溫かい苅麥のはめきに赤い首の螢に、或は靑いとんぼの眼に、黑猫の美しい毛色に、謂れなき不可思議の愛着をよせた私の幼年時代も何時の間にか、慕はしい『思ひ出』の哀歡となつてゆく』

官能的の白秋でなくては得難い匂ひを味ふ事が出來ます。

△霧　（河井醉茗）

『霧』は散文詩集として最初のものです、詩が文語より口語に一轉しようとする際、試みた一新體の詩で、數十篇の作があります。別にをりをりの小品文も添へてあります。

散文詩とはいふもの丶『霧』にある諸作は、今では詩と云つて差支ないのです。散文詩といふと範圍が狹く限られてしまひますが、今日のやうに詩が自由になつた時代には、『霧』の諸作も詩と稱して少しも不都合はありません。

『霧』の諸作は皆印象の明るい、感受力の明快な作ばかりで、詩といふもの丶心持を知るには極めて適當です。

△藤村詩集　（島崎藤村）

逐に新しき詩歌の時は來りぬ。そは美しき曙の如くなりき。あるものは古の預言者の如く叫び、あるものは西の詩人の如くに呼ばはり、いづれも明光と新聲と、空想とに醉へるが如くなりき。

此れは藤村詩集の序です。明治年代の文學は小說に於ても短歌に於ても皆異數の發展をしたものであるが、殊に新體詩に於ては、明治の特產物と云ふ觀があつた。多數の新體詩家は、樣樣自己の詩風を立て丶一家を成した中にあつて藤村の詩は、『若菜集』『落梅集』と出るに從ふて當時の詩を愛する人の間に吟誦せられて止まぬのであつた。其後、藤村は小說の方は努力して行つたが、藤村詩集一書は、今猶愛讀者を持つて居る。

處女ぞ經ぬるおほかたの
われは夢路を越えてけり
わが世の坂にふりかへり
いく山河を眺むれば
水靜なる江戸川の
流の岸に生れ出で
岸の櫻の花かげに
われは處女となりにけり。

是れは卷頭にのせられてある『おえふ』の詩の一節です。

△舞姫　（與謝野晶子著）

『舞姬』は明治三十九年一月の出版で、同年の秋に出た『夢の華』と姉妹集とも見るべき、晶子夫人歌集中の双璧です。それ以前の歌集は稍若々しすぎて物足らぬやうなところもあり、それ以後の歌集は、稍おちついて花やかさの足らぬやうなところもあります、蓋し『舞姬』と『夢の華』とは夫人の集中で最も花やかな時代を代表して居ります。而かも才氣煥發と云つたやうな獨創的の歌は此二冊に集つて居るので、此二冊の歌は一首々々何の作を見ても、きつぱりとした獨創の態度が表はれて居ります。

兩書とも歌の數はさまで多くありませんけれど、歌に價値がありますから、却つて永遠に尊重さるべき歌集でせう。體裁なども誠に女らしくて好い書物です。

△春泥集　（與謝野晶子）

『春泥集』は晶子女史が、花やかな時代を通り過ぎて圓熟渾成の域に達した後の代表的歌集です、此前後に『常夏』『佐保姬』『靑海波』など出

居りますが矢張『春泥集』の歌が最も勝れた作が選まれてあるやうです。殊に本書の巻頭にある上田敏氏の序文は、晶子を批評して最も力ある文章です。

『日本歌壇に於ける與謝野夫人は、古の紫式部清少納言、赤染衛門等はものかは、新古今集中の女詩人、かの俊成が女に比して優るとも劣る事がない、日本女詩人の第一人、後世は必らず晶子夫人を以て明治の光榮の一とするだらう』と其序文にも斷言されてあります。此上田氏の序文は單に『春泥集』の序文として見るばかりでなく、晶子の歌を評したものとして、全體に渉つて居りますから、苟も夫人の和歌を愛讀するものには何よりの福音であり、同感であらうと思ひます。

△ツアラトウストラ（ニイチエ原作 生田長江譯）

生田長江氏の飜譯が出來て居るからそれで説明すると、はじめに森鷗外先生の、沈默の港といふ序文があります。第一編・ツアラトウトラの緒言の一節

『ツアラトウトラ、年三十の時、其の郷里もて郷里の湖とを去りて山に入れり。そのところに彼れは自らの精神と、自らの孤獨とを樂しめり十年を經てつかるゝ事なかりき。されど遂に彼の心は一轉せり。ある日の朝、黎明とともに起き出でゝ、日輪の前に歩みより、かく彼は日輪に語りき。』

ツアラトウストラの語りたる問題の一斑をあげますと、『超人と末人と』『徳の講座』『肉體の侮蔑者』『歡樂と欲情と』『讀書と述作と』『丘上の樹木』『死の説教者』『朋友』『小兒と結婚』『自由の死』『與ふるの徳』等百数十項にわたつてゐるのです。

此書は他の小説集と異り、一氣に走讀しても得る處はありません、充分讀み味ふべき書物です、ニイチエの超人的思想は此一冊に精神を籠めて書き表はしてあるので、一部には第二の聖書とさへ稱揚されて居ます。本書は少し大部ですが別に『ニイチエ語録』といふ小さな書物もあります。

△花袋集（田山花袋）

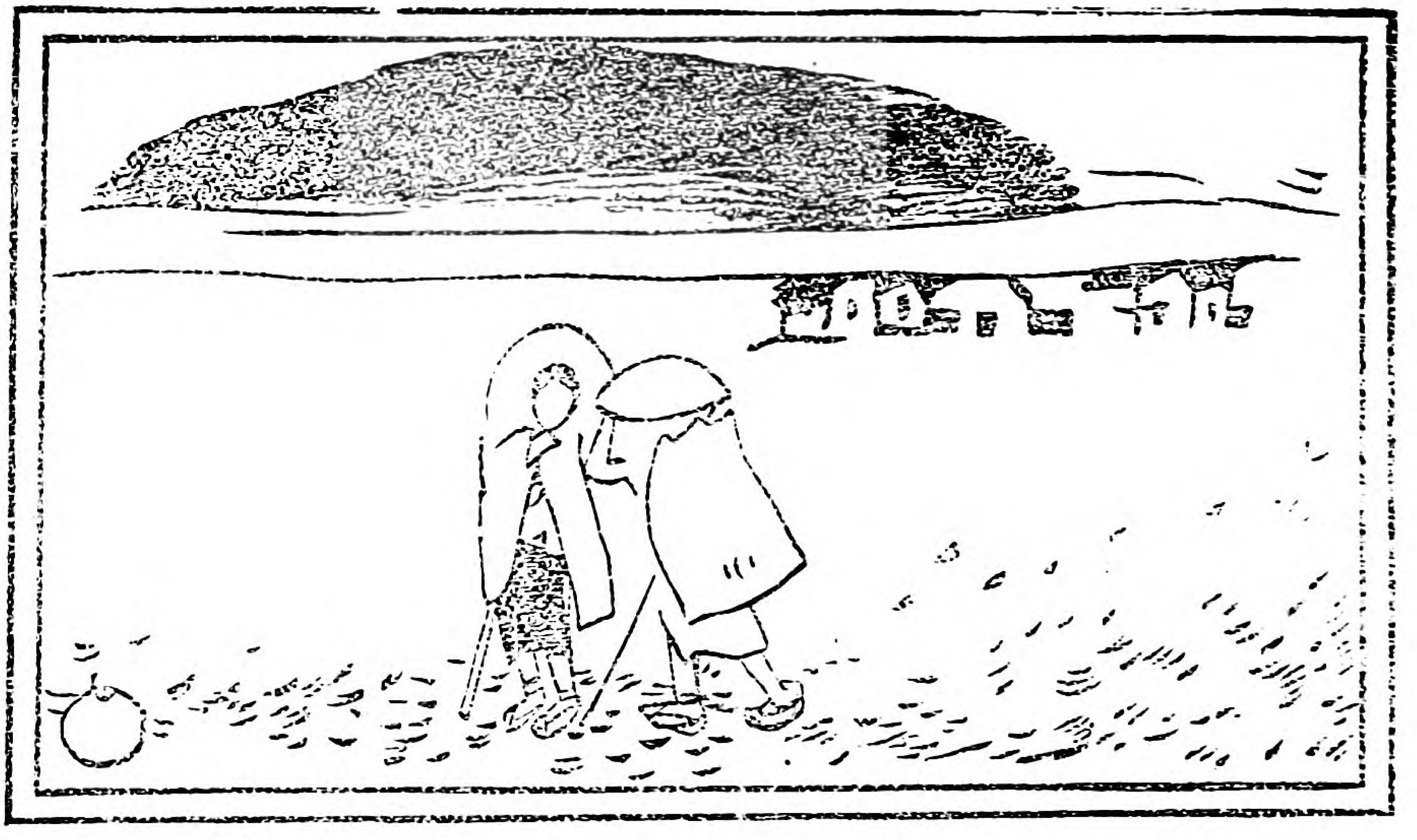
『花袋集』の巻頭には、自然主義の運動を起した最初の作として、當時評判の高かつた小説『蒲團』が收めてあります。『蒲團』は所謂僞らぬ自己の告白をした處に他の小説に見ない新味があつて、それが當時には世を驚かしたのです。今から見れば花袋氏の諸作中必ずしも第一位のものとは斷定出來ないが、當時の問題となつただけに氏の態度は人より進んで居たのです其意味に於て『蒲團』は意味があります『花袋集』には『蒲團』以外幾篇かの小説が收めてあります。

△血笑記（二葉亭譯）

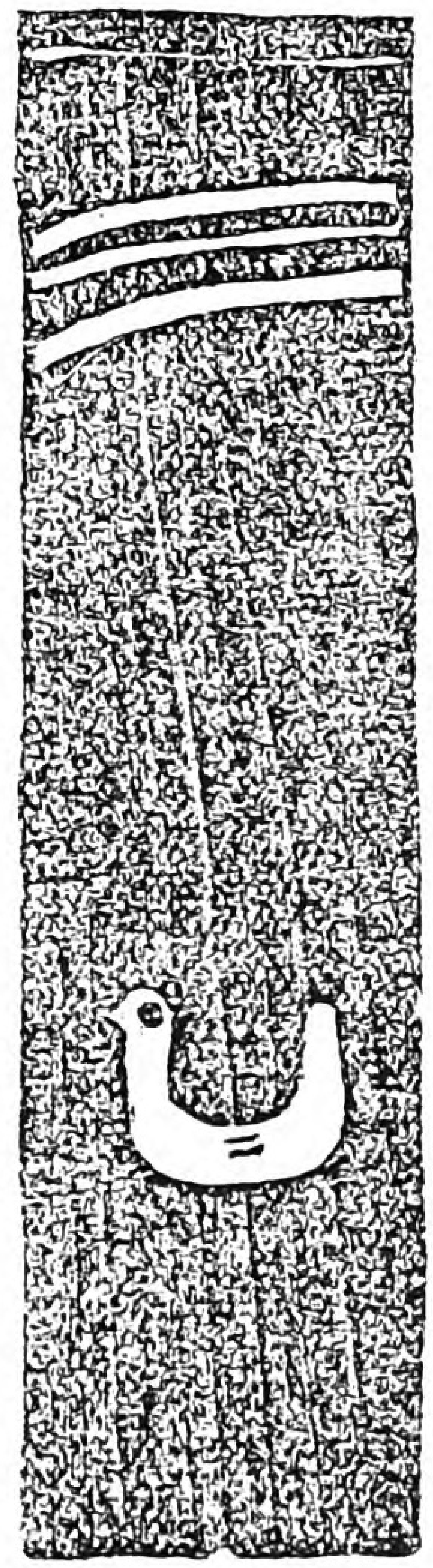
ロシアのアンドレフの原作です、或る狂人の感想記ともいふべく、戰爭の如何に人間の心を殘酷にするかといふことが恐ろしいほど穿つて書いてあります、わけは分らずに凄いやうな處があつて、如何にも氣が狂はしくなるやうな心持が表はれて居ます。

古書に就いて

愛讀書目中、萬葉集はあるが古事記はない古事記は嘗て夜雨氏も語つた通り、我國古典中の貴重なもので、女でも讀まねばならぬ書籍であらう。萬葉は代匠記と、略解と、古義と三種の註釋書が活字本になつて行はれてゐるから、やはり註釋のある書物に據つて研究したら好からう、太平記、平家物語の類は成るべく校訂の正しい本を選ぶのが必要だ、源氏物語は與謝野夫人の新譯に依つて見るのは成程好いことだがそれと同時に原作と對照することを忘れてはならぬ湖月抄が一般に行はれてゐる、枕草紙は春曙抄が好いが之はあまり譯はない、抄で見れば澤山だらう、徳川時代のものでは、無論近松と西鶴だが、西鶴は主たる部分が發賣禁止になつてゐるから、世に行はれてゐる分だけ、一讀して置くと宜い西鶴は何の作を讀んでも相當の價値を有してゐる。それから近松ものは澤山の種類がある、近頃早稲田大學から出版されたのが、尤も讀み宜いやうである、註釋も完全に近いものだ、近松ものも是非よむべきものだ。俳句では、七部集を第一とす、個人的に云へば、芭蕉、蕪村、一茶を推したい。



誌友欄



小說

水野葉舟選

○寂寥

近江わかば

「姐さん、おほきに」と舞妓の桃子は、幾度も禮をいつて、舞扇を、蔦の紋を白く染め拔いたちりめんの赤い伏紗に包んだ。物臭さうに煙草を吸ひつけながら、何氣たく其手許に見入つてゐたお柳は、其れが某俳優の紋所なので、ふとからかつて見たいやうな氣がした。桃子はもう一人の小八重といふ舞妓と一所に某俳優を大變贔負にしてゐて、其俳優の紋所や名に因んだものを、頭髮の物から足の爪先までお揃ひにして着けてゐた。外見はそんなにしてゐながら、お互の胸の中では、矢張年相應な柔かな角を突附き合つてゐることをお柳は知つてゐた。

是れが平常だと、厭がる兒を無理に擽つたがらせて面白がるやうに、其薄皮な柔かい頰にぼうと血の色を染めて、眞向になつて云ひ解くのを、さんざんに嘲弄つて遣るのだか、斯うした氣分の惡るい時には斯んな子供を相手に燥ぐ氣にもなれずに、だるさうに疊に片手を突いた儘、鼻から白い煙を吐息のやうに出してゐた。

「これですいとした、すつかり固まつて了ひましたわ。もう家の姐さんにも叱言を言はれやしまへん」と桃子は遠慮がちな調子でいつて可愛いゝ眼に感謝したやうな色を見せた。

「もし分らん處があつたら、何遍でも浚つてあげるさかい、何時なとおいなはい。」と其しほらしい樣子に引入れられてお柳はつひ優しくいつた。何だか物臭さうに、自烈體さうにして居たのが、可愛さうになつて來た。

華美な渦巻絞りの長い袂と、少さく貝の口に結んだ赤い帶が葭戸の影に隱れると、お柳はさも疲れたやうに大きな欠伸をしながら、側に置いた三味線の袋を取つた儘で壁に立てかけて、思ひ出したやうに、先刻女中の置いていつた冷し麥湯をコップに注いだ。そして

一口ぐつと口に含んだが「あゝ氣味が惡い」と顏を顰めながら呟くと其儘緣側の方へ膝寄るやうにして、ゴト〳〵と含嗽でもするやうに庭石の上へ吐き出して了つた。燒け切つた石は、見る〳〵吸ひ込まれるやうに乾いて了ふ。少しの風もないので、狹い庭の青黑い木の葉は滓のやうに淀んでゐる。お柳は此暑さうな、日射しを見た丈でもうんざりするといつたやうに、眉を寄せたがらぐたりと肘枕で橫になつた。丁度今が晝寢時で廓中は三味線や鳴物の音も止絕えてゝ暫くは、水の底に浸つてゐるやうな靜寂を示す時である。どの藝妓家でも皆、開け離した室の簾の影で浴衣に伊達卷や細帶の儘のなまめかしい服裝した藝妓達が氣儘にでろ〳〵してゐる。窓下の狹い橫町をふれ歩く冷し飴湯やを呼び止めたり、晝下りの暑さに削り氷や水菓子をむさぼつたり、肘枕でしびれた腕をもみながら、もう話すのも物懶いといつたやうに、うつとりと柱に背を持たせて爪彈で小聲に歌つたりした、二三年前のまだ斯うして自前になつて家を構へない頃の放縱な賑やかな藝妓部屋の樣子が思ひ出される――ふとお柳は耳を止めると、何處からか濕つぽい爪彈の音が靜かな空氣を顫はすやうに流れて來るのであつた。遠くから聞えてくるのだらう、低いゆるやかな音色は、時には空耳かと疑はれる程止絕がちに聞える。お柳は柔かな胸の肉をそつと搔挘しるやうな其やるせない哀音を、夢とも現とも聞きながらつひうと〳〵とした。

眼を醒ました時は、もうずつと日が西に傾いてゐたいつの間にかいゝ風が出て、軒の青簾がハタ〳〵と涼しさうな音を立てゝゐる。沈みかゝる前のカッと明るい大きな日輪は銅色の光線を室の中に漲らした。お柳は流してゴト〳〵と含嗽しながら

「先刻から、電話は一寸もかゝらなんだか、そしてお養母はんはまだ？」と小女に訊いた。

「へい、何處からも、いつもお講やと遲うなりますな」と何かコト〳〵働いてゐた小女は斯う一所に返事した。

「また熱が出て來たやうやわ、舌がザラ〳〵する、地のことで桃ちやんや、玉吉つあんから彼丈賴まれてるのやけんど、明後日は行けるかしらんて」と獨言とも誰にともなくいつて

「お湯は沸いてるのか」と鐵瓶に觸れて見た。

「仕樣がない、辛氣な」と舌打しながら

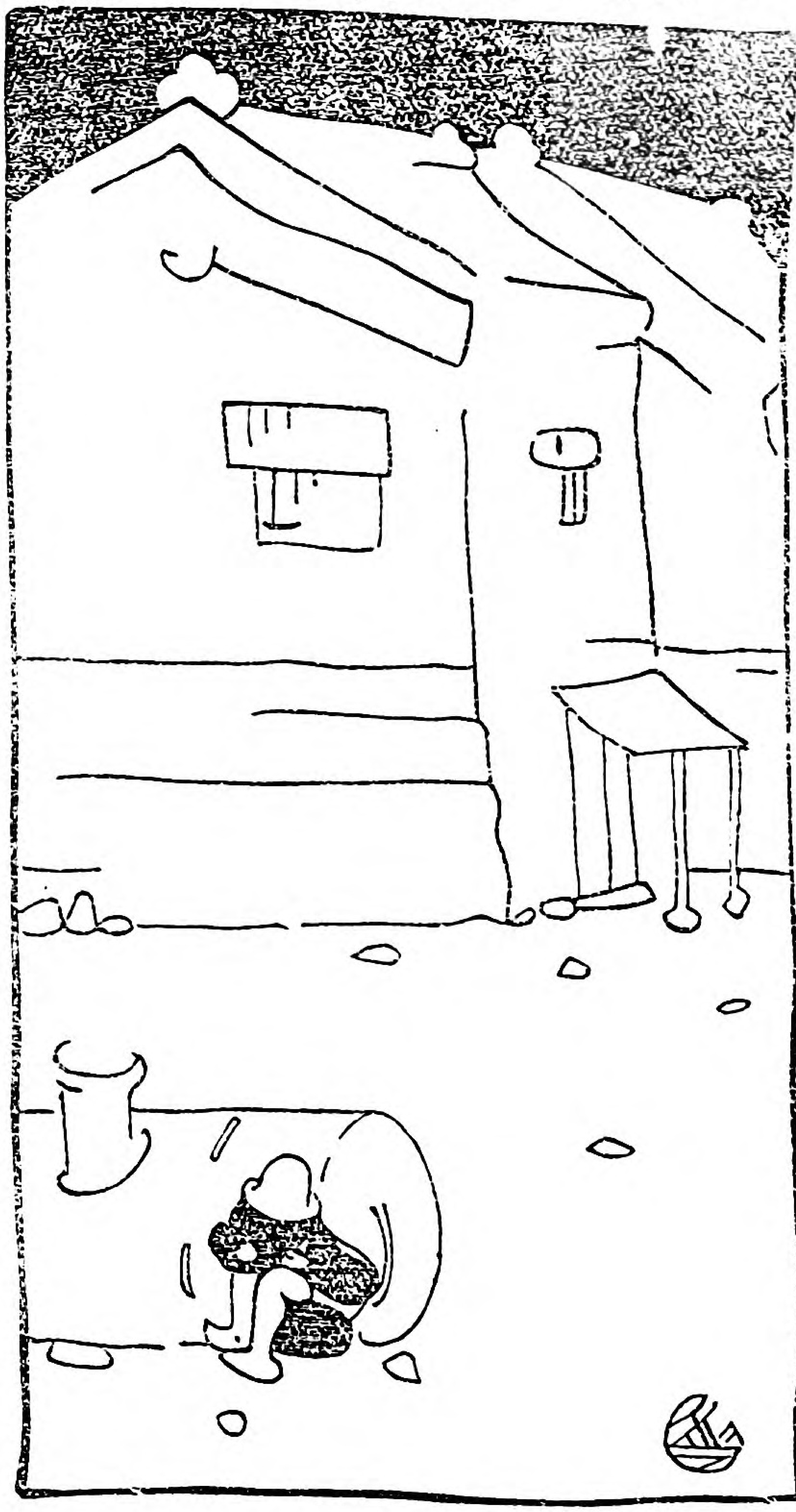
「熱があるさかい、お湯で身體を拭く丈にしておかう

と思ふたけんど、錢湯へ行つて來う」とわざと掛竿から手拭を手荒くはづして出ていつた。

　錢湯から歸ると反つてサッパリした心地で鏡臺に向つた。いつも夕暮に感ずる心の沈默が原因でもあらうけれど、お柳はこの澄んだ鏡に映る眼の衰へを見るにつけ、頰の窶れを見るにつけ、寂しいとも悲しいとも何ともつかぬ一種の悲愁が、心の底から細い絲をたぐり寄せるやうに、泌々と沸いて來る。絢爛な春の色彩の漸く褪めんとするなやましい晩春の哀しみのやうなやるせない心持に閉されるのであつた。いつだつたか此春のことだと思ふ。病氣に罹る前で身體の衰へて居た故でもあらうが、ある朝起きがけに何氣なく手にした小鏡に、パッと映つた青白い窶れた顏、稍凹みかゝつた薄黑い眼縁には、昨日の夕化粧が汚ならしく消え殘つてゐた。其パッと瞳を射た瞬間の感想――寂しいとも、淺間しいとも、悲しいとも一種名狀することの出來ぬ――蕋の黑くなりかけた、もう何處となしに倦怠の氣の潛んだ牡丹の花を見るやうな感じであつた。斯うした寂しさに襲はれるやうになつたのも其頃からであつた。お柳は病氣の故かとも思ふ。又自分のやうなもう二十五と云ふやうな中年の女の誰もが感ずる寂寥ではあるまいかと、自分の周圍を見廻して見るけれど、朋輩達の中でも、そんなことを考へてゐるものは、自分の他にはなさゝうである。皆呑氣な顏をしてゐる。此頃でいつたなら、お盆の晴衣裳を新調らへることが、馴染のお茶屋や贔負先へ中元の配り物をする事位より他氣に掛けることゝいつては、なさゝうであつた。里子といつて、十年前お柳と一緒に舞妓のお披露目をしてから此方へ出るにも入るにも二人の姿は影と形のやうに、お神酒德利と噂されたお柳の半身のやうに思ふ朋輩も、二三年前さる辯護士に落籍されて、今では令夫人らしく澄ましてゐる。お柳は自分もさうした身分になつて居れば、今斯んな寂しみも感じまいかと思ふ。だが自分のやうな者がそんなお爺さんのお內儀さんで、一生おとなしく燻ぶつてゐられさうにもない。

「あゝつまらんなあ、相手でもあれば、いつそ情死でもして了ひたい」とお柳は時々絶望したやうに、こんなことを思ふ事がある。芝居や物の本で見たいろ〳〵の男女の、さま〴〵な戀の繪姿が心に浮んだ。いつそそんなことでもすれば、持て餘した身體の早く解決がつくやうな氣がする。だがそんな相手がありさうには

思へない。今の世に治兵衛や忠兵衛は幻の他には見ゐることは出來ぬ。それは長い間にはちつとやそつと、戀しいとか懐しいとか思ふやうな男はあつた。けれど今になつて甘い思ひ出の殘つてゐるのは一人もない。どの男もどの男も皆草紙に樂書するやうな心持で自分を弄んでゐたに過ぎぬやうな氣がする現在だつて矢張さうである。一しきり味はつたやうな若い醉心地の醒めた此頃では、どんな男に對しても、何だか一種の物たりなさを感ぜずにはゐられない。これから先だつて矢張斯うした心持は續くだらう。——では一度でい〻！一生にたつた一度でい〻からと願つた眞劍な男の味にも觸れずに了ふのか——お柳は病み上りの昨日今日を夜となく晝となくうとうと斯んなことを思ひつゞけた。（天賞）



（天賞）雪夜　赤坂　大橋こま子

○お房

濱千鳥

鐘の音の淋しい響をきくでもなく聞かぬでもなくお房は今日もまた窓に佇つてぼんやりとしてゐます。黄昏の重い空氣の中にお房の白い顏はくつきりと浮いて無ざうさに結つた銀杏返しの後毛が輕く風にゆれて居ります。お房は此の頃何とはなしに昔がなつかしくつてたまらないのです。いつもこの窓

によつてはまだおかゝつぱさんであつた小さい時のことを美しい繪卷ものでもくり返すやうに靜かに頭の中でくりかへして思つて見るのが樂しみなのでした。

…………

祇園の櫻も二つ三つほころびそめた或日、お房は母樣とお芝居を見にゆくとになつたのです、眉のあとの青い母樣はお房の可愛らしいかほをお化粧して下さいました、短くそろへて切つたおかゝつぱさんの髪は若い束髪の伯母樣がいゝて下さつたのです、乳母は紅友仙の晴着を藏から出しました何事よりも美しい晴着を着るとのうれしくつていそ〳〵と小さい手でえりかき合せれば乳母もうれしげにきりゝと赤地の帶は胸高にしめられました。京染の紅友仙、振袖のおもいのを兩手にうけて朱塗りの木履かろ〳〵と敷石をふめば鈴は音してちりゝと鳴りつ……幼な心のたゞもううれしさにあつちこつちと飛びあるきながら

「母樣まあだ？」

と幾度も聞いたものでした。

先頭の車に母樣のひざに抱かれてお房は乘りました其のあとに伯母樣も乳母も車をつらねました。

車はやがて○○座附の茶屋に運ばれました、茶やの女將や出方に迎へられてお房は車から下りました、母樣と伯母樣の手をしつかり握つて芝居の出方が急がし相にお茶やお菓子を運んでゐる廊下をつたはつて東の棧敷に陣どつたのである。

白、赤、緑のだんだらの幕、棧敷の上にずらりとならんで下がつて居る紅提灯などはお房の心をどんなによろこばしたでせう、其等のものをお房はうれしさにかゞやいた眼をパッチリあけて見まはして居ました隣の棧敷に居る年取つた丸まげのかたと話をしてゐらつしやるずつきりとした高い鼻の母樣の横顔をお房はぢつと見ました水ぎわ立つた丸髷の手柄をお房はいゝ色だと思ひました母樣は

「もうぢき幕が開くよ」

つて帶の間から蒔繪のついた櫛を出してお房の髪をかいて下さいました。

お房は眞紅な唇を凜と結んでおとなしく幕のあくのをまつてゐました、拍子木を打ち出して今までざわついてゐた人たちが申合せたやうに靜まつて下座で調子を合せる三味の音がしだすと面明りが幕の裾をぽつと染めて幕が開いた。

やゝ面長の瞳の優しい十郎と丸顔の元氣のいゝ五郎

とのしぐさをお房はうつとりとして見て居ました、舞臺が〇〇〇丈えと書いた派手な幕にかくれるまで……再び拍子木の音に幕があけば御殿の場でした、美しい姫君の簪が電氣にキラ〳〵とかゞやいてやさしい二重まぶたの眼には露の雫がやどつて居ました、ふつくりしたいかにも輪廓のいゝ頤のあたりの面明りにぽーつとさくら色になつて居るのにお房はじつと見とれるのでした、紫の着附の木ぼりの人形の樣な殿樣の聲の透きとほるほどなのがお房の耳につきました。

美しい姫君の袖に顔をあてゝくづれる樣に泣く時後毛のはら〳〵とふるへるのにお房も眼があつくなつて思はず母樣の膝につゝ伏したのでした、幕の內にお房は半玉や藝者の懷鏡を出して大勢の見物人の中でも平氣でお化粧してゐるのを見て居る時髮をきれいにわけて色の白い人が黑の紋附を着てお房の居る升に來ました母樣や伯母樣は親しげにお話してゐらつしやいますお房は其人がさつき姫君になつたといふ役者だと乳母に聞かされて驚ろきの眼を見張りました其人は優しい笑をほゝにたゝえてお房を膝に抱き上げ

「孃樣お何歳？」

とききました。お房はこれがさつきのあのキラ〳〵した簪をさした美しい姫君かと不思議で〳〵なりませんでした、じつと穴のあく程顔を見て居るのに役者はをかしがつて美しい齒を見せてニツコリ笑ひましたつけ……

お房はこゝまで考へてきて思はず輕く笑が頰にうかんだ、あゝもう一度あのやうな昔に返り度いと思ひました、皆に孃はん〳〵と大切がられた自由氣まゝにそだてられた幼い時代を考へてほんとに〳〵なつかしくなりましたたゞもう華やかな賑やかなその時代がおもはれてならないのでした。

東の都の母樣とたゞ二人、一日一日と老ひゆく母樣をお房は淋しい〳〵心地してながめて居る今の身を考へて寂しい悲しい、やるせない思ひが胸にひし〳〵とせまつて來ました。

「あゝつまらない!!」

お房は思はず云つて自分の聲に驚きました。

透き通るやうな襟足にかゝつたおくれ毛はらりとかき上ると冷い夕風がさつと袖をかすめて桔梗の葉を吹きました。（入賞）

○寂しさ

横濱　つきぐさ女

裁板の前にベッたり坐ると縫ひかけの長襦袢はそこに投げ出したまゝ、突伏してあやめはよゝと泣き沈んだ。

夕方である、おしろいの花の斑なのや、微白い夕顔のゆるくからんだ垣の邊りへ打水を濟せてホッと汗ばんだ面を後に振向けた芳子は又かと云つたやうに默つて緣に腰を下した。頭の上で風鈴がチリヽ／＼と鳴る

廣く枝をひろげた銀杏を通して吹く風も何處やら秋めいて冷たく身に染みて來た。

「如何したのよ、あやさんさう泣いて許り居ちや折角の髮がだいなしになるわよ」

「もうおめでたい日も明日にせまつて居るのに何が那麼に悲しいんです」わざと強く斯う云つてくるりと後を向いた。けれど心は寂しかつた。

此人が嫁けばもう今度こそ處女として殘るのは自分許りなのである、明日は愈々彼女の結納の日と思へばチクリと胸をさす樣な妬ましさも交つて居た。

「まあ、芳子樣てば、貴女まで那麼てと思つて居らつしやるのねえ」涙の眼を擧げて恨めしさうに芳子を見た。

白丈長の島田の根がゆるんで鬢がほつれた眉の濃い顏がだん／＼迫つて來る夕闇に淋しく浮いた。

あやめはもの三日も泣き續けて居たのである、今は涙もうるさくなつて來た、何故か芳子の心には意識されない冷たさが漲つて其美しい女をもつと、もつと、辛めて遣りたかつた。

「何故よ、あやさん、お目出たいからお目出たいと云ふんだわ、ぢや貴女は會社員が不足なのね、エ、あやさん」

「あら、何といふ酷い事を、……奥樣に聞えたら如何しませう」と又咽び入つて、

「あ、あなた許りは此胸を解つて下さると思つたのに」後の言葉は口の中で飲み込まれて止度もない雫が頰から滑り落ちて單衣の膝に冷たく染みた。

實は芳子とて滿更譯を知らぬでもない、伯母も隨分壓制がひど過ぎると思つた。いくら小さい時から引取つて之迄に育て上げた娘とは云へ、二十にもなれば少しは人の意志も買つてやらなければならないのに、自分一個で取極めた此緣談、向ふがいつの間にか垣間見

たといふのを楯に見合ひすらさせないのはあんまりだと思つて居る。

それにしても何時も氣のしつかりした彼女が何故何にも云はなかつたらう、秘めた思ひを打明けて伯母の袖にすがつたなら其れでもと云ふ程の頑固な女でも無い筈である口には出し得ずに唯しく〱と泣いて刻ませた眞の俤を捨てゝまで義理には負くまいとする。



（地賞）　編物　群馬縣　新井冷花子

芳子は是が焦立しかつた。

「おや、なぜ反抗しなかつたのよ」と云つて見たが今更何を云はうと追付かない。

「もう眼をつむつていらつしやい、ね」此言葉はかつて、渚に泣いた友に書いて遣つたことがある、芳子は自分ながら其口から出る言葉の矛盾に驚かない譯には行かなかつた。「果して自分の運命としたなら、默つて

自分は眼をつむつて行くであらうか」と考へた。遠からず自分の上にも降りかゝるべきさだめである、自分は默つて嫁かれる女ぢやない。反抗！絶緣！あゝ近い內に來るべき悲劇は自分のものだ、かう思ふと心の底までじめ〳〵として來た。

そつとあやめを見る、生際はクッキリとした美しい女だけれど、何處か矢張り淋しい姿の女である、芳子は可哀想になつて來た。

「わかつてゐるのよ、あやさん、もう止して、燈火でもおつけなさいな」もう日はとつぷりと暮れた。

「……」と草むらに放した鈴蟲が細く鳴きだした。

「すつかり忘れちやつて」とマッチをすつて岐阜提灯に火をつけた、ホッとうすら明るくなると共にすらりと立つた彼女の泣きそぼれた肩のあたり、細そりとやせて無理に微笑んだ笑顔は矢張り淋しかつた。（入賞）

○戀知らぬ人

かすみ

大方のお客樣は解散の後となつた。店には雜種の商品が不順序に取り散ら張つて居る。簿記に記入して居る貞ちやんに「一番お終ひに歸つたね、彼の男鳩貝樣の店員なの？」と優ちやんは聞いた。

「ツム……然だよ」とペンを耳の間に挾んで此處を覗るなり、貞ちやんは「好い男だらう」と微笑作らいふ。

「だけどね妾、彼の男厭なんだわ。横眼造つて自分の事覗て許り居るのですもの、本統に氣障だつてありやあしない」

「夫は優ちやんが餘り女振が可いので見惚れたんですよ」番頭が貞ちやんに組して横合から合槌を打つと一時にドッと笑ひが起る。

優ちやんはやつきとなつて「可いわ……妾……何言はれたつて本眞に受けないから呆らしい」

「優ちやん此處はね、大阪ではないのだよ。大阪辯はお遠慮なすつて下さい」と貞ちやんは厭に詞を叮嚀にする。冷笑するらしく。

折しも郵便屋樣は封筒の二通と端書三通を如何にも多忙想に置いて行つた。小僧逹が我れ先にと飛んで行くのは、もしや自分のが其の中に交つてゞも居やあ仕まいかと思ふからだらう。すると其の郵便物はお氣の毒ではあるけれど、皆商店宛の許りなので小僧逹の面には、稍失望の色が淡く刻まれた。氣が効き過ぎて間が拔けたとは、此麼時の事を例えだと謂ふものだ。

貞ちやんは二十三の好男子だ、優ちやんは十九の捨て難い器量の女だ。男女とも全くの他人だ。けれど男女は全くに戀を知らない。否、自分が人に戀を仕ようと思ふてとを知らないのだ、獨男は奥深き良家に人となり、獨女は厳格なる商家に、浮世の風にも當てられず育てられたる身の上だ。

とある機會で、貞ちやん獨では不可ないと云ふので、商店の夫人の愿人に當る人の娘を（優ちやんを）暫らくの間留守居に賴んだのだ、貞ちやんとても無論、商店の家の者ではない、唯主人の友——で店の支配を仕て居る樣なものなのだ。

夜になると、「今日の仕上りは?」ペンを執り作ら、貞ちやんが小僧に工場の仕上り反数を聞く。

聞かれた小僧は「今日は××反です」と。明らかに答へる。夫から女工の缺勤者の姓名を一々擧げる。

すると又貞ちやんは、それを日誌に印す。

店の多忙さに優ちやんは、貞ちやんの手傳ひもすれば下女の手傳もする。優ちやんも可成にいそがしい。けれど世に汚まぬ、優ちやんには、此多忙さが面白くてならない。優ちやんには面白い一日だが貞ちやんにはどんな一日だらう。(人眞)

○階上の書齋より

葉舟生

今回は書く事が澤山ある。第一に前島優梨子の短篇が一冊にまとめられたに就いて、これに對する世間の評價を聞く事の出來た事である。その中で一番滑稽で無智な言葉が書いてあつたのは東京日々新聞の新刊批評であつた。今こゝにはそれを覺えて居ないが、この人は失戀をして泣いて居る人であらう。その中で何と言ふ作は作者の實情だらうなどゝ書いてあつた。或る意味からは斯う言ふ言葉は僭越な事だ。又一方から見ると、今の多くの小說の讀者が、紅葉、露伴の時代又は蘆花、幽芳の時代と大差なき低級のものである事が暗に示して居ると思はれる。こゝらが眞に開柄されねば、決して進んだ藝術は味はれはしない。

しかし、自分はこの言葉を「町むすめ」の作者の辯護の爲めに發したものと思はれては困る。この作品はまだ幼い。また夢を描いて居るに過ぎぬ人である。この一冊を讀んで見て、筆巧者な若い娘の心覺えを書いた日記を見るやうな感じがしたに止まつて居る。又この書にある面白味はそのゆるやかな靜かな心持にある。自分はこの作者に注文したい事は、これ以後の事である。これを一區劃として、更らに一轉して進んで行かれん事である。

△次に今月になつて多恵子から、二つ新しい製作を受け取つた。この中の一つは十月の本欄に推薦し度いと思つて居る。それは「處女」「夏の數日」の二篇である。「處女」の方には處女の持つ感情のディレンマが書いてある。この人のオリヂナリティーが曇つて見えた。しかし例のやうに暢達した筆が、自由に動いて居る處が面白い。この作はこの人のレベルの處にある作と思つた。自分はこの人にも少し沈思してものを見る事と立體的に人生を見る事とをすゝめたい。それは眞實を自己の感情より以上に愛すると言ふ事の爲めである。人の感情はこれに考察が加つて居ない場合には、多く人間の「生」の背景が薄い。力が足りない。たゞその人の狹く小さい生活の影が見えるに過ぎない。更らに自然の中に突進して行くと言ふ跡が見えない。この點に於てその藝術的の價値も薄い。又、實際の生活に於ても、さう言ふだけでは、生活に深さがなくなる。ものは凡て立體的に、自然の中に織り込まれて居る姿を、出來るだけ複雜に見ねばならぬ。「夏の數日」の方はその眞から面白いと思つた。快く直寫した處に、生活の一部が表はれて居る。今回はこの方をとる事とする。

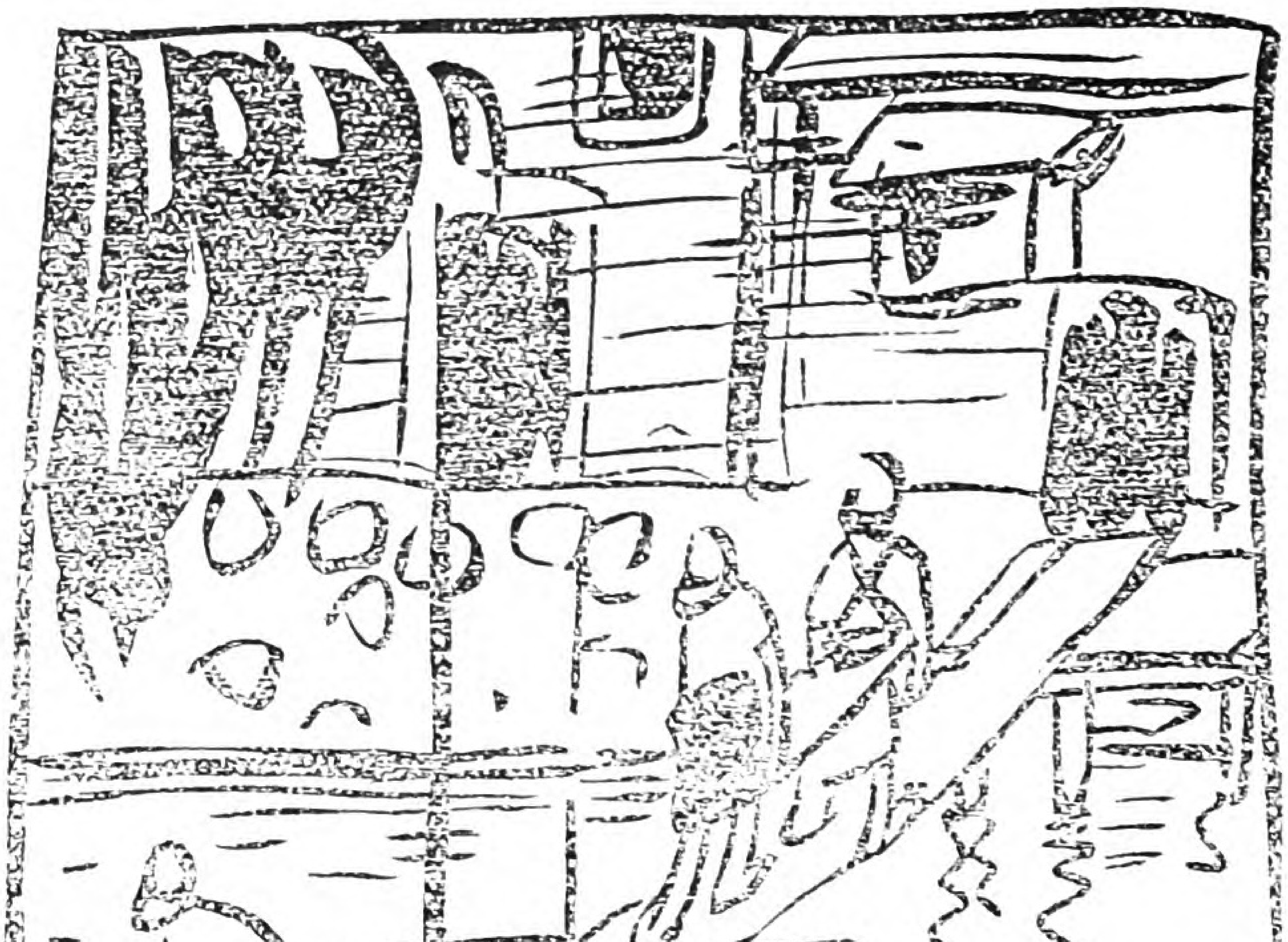
この夏は私には疲勞を感じたばかりで過ぎ去つた。この選を終つた後に「葬式」と「羊」の終篇を書かうと思つて居る。この暫く製作に遠かつて居る中に、種々な計畫をして見た。「妹に送る手紙」といふ書の終りを書いた。この書は多分近い中に一冊になつて公になる事だらう。その續きの「若き夫人に送る手紙」

を書くつもりにして居る。これ等の書折にふれた私の婦人に對する感想である。第二冊の方はこれからぼつ〳〵書いて、種々な雜誌で公にしたいと思つて居る。前の方は一方の妹を擬して、それに送つた體になつて居る。後のは、多數の人に送る書として書く心づもりをして居る。何れその一部は、本誌に載せて貰ふつもりで居る。

正宗白鳥氏の「毒」が一冊になつた。それについては德田秋聲氏の批評が國民新聞の紙上に公にされた。かなり同情の厚い批評であつた。その中に含まれて居る氏の感情が面白く讀まれた。しかし「毒」は自分にとつては稀薄な作と思はれた。ヒロインのおたよも朧氣である。副主人公××も朧氣である。主人公だけが、その感情の移り行へ處がかなり忠實に書いてあつた。全體としては、その色彩が混濁して居た。深い必然性が缺けて居る。烟の迷ふやうに動いて居るが、その根本の處にある、ラ、ギーが不確定であつた。そこから眼の光つて居るものがない。その爲めに、その烟に力が無いと自分は思ふ。この缺點はこの作の、力を非常に弱くさせて居る。次に自分の讀んだのは窪田空穗氏の「空穗歌集」である。これについては別に小論文を書いて「新小說」に送つてあるから、何れ公になる事と思ふ。この作については、自分には客觀的の判斷を失はせる程、親みが深い。特にこの歌の持つて居るのは、澄んだ露の光のやうな寂しさがある。この味を、自分は深く愛する。今の歌の潮流に比べると、クラシックの臭がありすぎる。しかし、全くの處から言ふと、この古典の味は、作者の生活から出て居るものである。その爲めに、讀者は、歌に盛られて居る内容と、歌との間に不自然な作爲を感じる事は決してないと言つてもいゝ。たゞそれが、狭くせばめられた、或る情感の世界に限られて居るのを不足に感じるだけである。

さて、選評に移る事とする。今回は分量は多かつたが、作の標準は上つては居なかつたのを殘念に思ふ。かすみの「戀知らぬ人」はしつかりした心で書かれて居る。も少し精細に書かれたらばいゝ短篇であつたらうと思はれた。月草女の「寂しさ」はこの人の進境を示す作である。まだしかし、根本の處に目がひたと行つては居ない。その心全體が、脈を打つて表はれて居る作ではない。それとこの人の作が少し巧みすぎる。世良田優子の「此日頃」筆に亂雜な處が出て來た。やりつぱなしの癖がついた。あまりに簡單に易々とものを思ひすぎる惡い點が出た。もつと心をしつかりとして立たねばいけない。中﨑松京の「父惑」には因念小說めいた臭が何處かにある。しかし、かなり思ひ込んで書いてあるのが面白かつた。神枝の「辨慶縞」はまだ本當ではないが、中々捨てられぬ處がある。まだ作者の心が浮ついて居るのが缺點だ。長谷川英の「寂しい心」はセンチメンタルな心で、勝手に作つた作である。妙子の「宇治」は中位の作である。蒼い感情で書かれたものである。貞子の「電話」、輕薄な作であつた。この作の中にもひどいアテ字がある。學生と書いてヒトと讀ませてあるなどはその一例である。これをガクセイと讀んだとて、何の差支へも不愉快な處もある筈はない。むしろこのやうなアテヨミの方が不自然で、不愉快である。このやうな點は女の人の作に多い。嚴密な注意を拂はれたい島田京子の「旅から旅へ」淺薄を極めたもの。これを見ると、女子の仕事に眞實の氣の無い事を感じる。どんな重大な事でも、簡單にいゝ加減にしてしまふ。この人はも少し眞面目に成らねばいけない。わかばの「寂寥」落付いたしつかりした作であると思つた。これ位書けると、賴毋しい。この人の進境がも少し、確實になつたらば、小笠原貞子、村上多惠子、梅子、前島優梨子について、本欄に推薦する事が出來ると思つた。靜に波を打つて起つて來る感情の描寫が特にいゝ。一女の「敗殘」は例の感傷に近い感情が纖々と書いてある。それに文章がいやみた。自分は新

う言ふ種類のもの丶言ひ方を嫌に思ふ。「或る勝利を得たい爲めにすつきりと捨て丶しまつた、まだ十七の僞飾「大柄な浴衣が憎い程よう似あつた」など。僞飾もをかしな言葉だ。もつとすつきりと明かに、書いたら如何です。新免さかゑの「後姿」氣かきいて居る作だ。中々骨を折つて書いたと思はれる。しかし、まだこの人の持つて居るものは貧しい。森田順子の「新婚」、何と言ふガサツな言葉が使はれて居る事だらう。それだけでも心持が惡い。大體に平凡である。それと、この人の原稿は非常に讀みにくい。長谷川永女子の「寂寥」こんどの中にはこの同じやうな題の多いのに驚いた。この作はこの人のとして稍い丶。大分書き古るされたものではあるが。それと便宜の爲めに題を「ひとり」と換へた。濱千鳥の「お房」、古いとは思はれるが、快いなだらかな文章で書いてあるのが嬉しかつた。柳子の「逢へぬ夜」、初戀の人の書いた日記を見るやうな初々しさと快さとがある。この人も原稿を叮嚀に書かれたい。汚い上によみにくい。葵の花の「かづら」堅くなつてしまつて居る。



（入賞）河岸　芝區　後藤明あさ子

以上で今回は終つた。以上の中から左の九篇をとる。「寂しさ」「お房」「寂寥」「戀知らぬ人」「逢へぬ夜」「辨慶縞」「後姿」「ひとり」「父親」（八月廿六日夜）

○逢へぬ夜

柳子

此節の心の苦しみを思ふに付ても戀なんてするもんぢやあないと染々考へ乍ら照子はゴム草履の足を止て川面をヂツト見た。川の水は黒く重い色に沈んで向川岸の灯が書割の樣に美しく流れてゐた。

一週間も立た樣な心持はするもの丶數へてみれば中二日たつた。それにしても電話位かけてくれてもよささうなと思ひ乍ら向ふから來た電車

の中を見た時フト若しやこの留守の間に來て此間の樣に待てゐやしまいかと氣が付くと追はるゝ樣にスタ〳〵と歩き出した。電車の中には飛白にムギワラ帽の逢ひに行く樣な若い男許りが乘てゐた。來てゐるかもしれないと考へると夕方左耳の痒かつたのを思ひ出して辻占がいゝわと滲無いことを迄心頼みにした。それにしても殘念だつた。と此前の夜の行違ひを思ひ出した。

其夜男は旅行する友を送るのをかこつけて照子の家で二時間も待た。照子は照子で白晝から親戚を二軒廻てそれも買物をするからと端折て男の所K橋で電車を下りた。別に云ひ合した驛ではないけれどよそ乍ら男の姿丈も見たいと思つたのである。東京での問屋許りの所古風な塗屋の並んだ町は半ば大戸が下て若や逢れもするかと僥倖を祈た人には丁度よかつた一度前を通た。五六人の店の者が居た樣だつた。引き返して又通り直した。それらしい影も見えない。暗の夜乍ら戀の弱味に恥しく成てパット獨で面を熱くさせ乍ら思ひ切て電車へと急いだ道すがらも若やと行ずりの男に注意した。夏の夜の電車は比較的女が多かつたので照子は心強く感じた。

××町で照子は下た。其夜は寒い位風の涼しい夜で有つた故常に照子を何所の娘と見知つた人達も外には出て居なかつた。若い娘の夜歩き、それを見られないでよかつただと思ひ乍ら急ぎ足に成つた時、フト停留場の蔭の電信柱に人影の有るのに氣が付いた。若しやと凝と立止て見つめると其人、直覺的に行違ひと思つた。そして逢へた機會を逸した口惜しさに照子は殘念でならなかつた。

「何時頃いらしつたの」照子は聲をかすめてジッと伏目に成り乍ら聞いた。持つたオレンヂの洋傘がほの白く見える。

「七時半頃から」「待つたのね」「家の中の二時間待つたより停留場の一時間は辛かつたよ」男は優しかつた。ハンチングを被つてた。「左樣すまなかつたわねえ」「隨分遲かつたのねえ」「えゝ」照子はこの行違ひを男に云はなかつた。兩方で待ち合つた程上つた此の戀をコミカリーにしたくはなかつた故。けれど御互に是程迄思ひ合ってるのが嬉しかつた。

照子は云ひたい事も何にゝかも影をひそめて胸に一杯だつた。冷たい風が照子の鬢や袖を搖がして過た。「オ、寒い」と胸を抱た。男は「寒いね」と冷い手を女の女の上に重ねた。「家へ行きませう」「いや、だつて一時間も前にさよならを母樣にしたんだもの」ジッと面を見て「面を見りあ滿足するわ又逢いませうね、ぢあさよなら」「いや」女はより添つて「も少し待てらつしやいよ」となつかしさうに云ふ。照子は別れるのが辛かつた。そしてこの儘別れて仕舞ては何か物足りない。次の逢瀨迄染々印象に殘る樣な嬉しい言葉も聞きもしたい云ひもしたいと思つたが扨何と云ていゝか其心持を云ひ表す事が出來なかつた。男は思ひ切つて「ぢやあ又ね」と來た電車に乘つた。照子は凝と腰かける男の横面を見守つた。電車は男を連れ去つて仕舞つたボンヤリとはかない氣持で歸つた彼夜たよりない事を當にして急ぐ此宵若や來て居なかつたらと不安に胸をドキ付せ乍らも何卒來て居ます樣にと祈り乍ら家の近く迄來た。門の前には女中達が涼んでた「お歸りなさいまし」「サア御かけなさい」とどいてくれたのも「いゝよ」と拒絶つて家へ這入た。照子はもう落膽りして仕舞つた。女中達が涼んでる樣ぢや誰も來てない。けれど若しや若しや電話でもかゝってはこなかつたらうかと只一縷の望をかけて、わざと只今と皆の面を見廻した。皆輕く受け流して名々自分の事許考へてた照子は絶望して仕舞つた。今買て來た雜誌もよむ氣が出なかつた。ボンと投げ出して机の前にグタりと坐つた、前栽の健仁寺に楓や杉が黒く影を投げてゐる。軒の岐阜提灯がゆらめく。照子は一つ所を見てゐられない手當り次第に雜誌を探て

行と男の買つてきてくれた三田文學や新小説が出て來た。そんな物迄がなつかしくなつてジツと表紙を見詰め乍ら持つてきてくれた夜を思ひ出した身をねぢつて本箱から深紅の帛紗に包んだ一束の男からの手紙を出した。長い長い繪卷紙に男の手蹟は美しかつた。瀟洒やとき色のエンベロープも有つた。どれの終にも「私は如何したらいゝか戀しくて、身も心もない」とか「私は戀しい」とか書いてないのは無かつた。それをみて照子は稍滿足したものゝ筆の上だもの男は今頃如何思つてかあゝ此遣瀨ない心、だけれど此間の樣に待つてゝくれる心中立を見れば萬更思つててくれない事も……と思ふとたまらなく戀しい、あゝ逢ひたい逢ひたいこんなに思てゝも今夜は逢へないかしらと思たら情なさにハラ／＼と熱い熱い淚がこぼれて來た。

○辨慶縞

禮枝

光枝はどうしてもいつもの樣に寢られなかつた。

今迄何か黑いかげでも見つけたかの樣に吠立つてた隣の犬が、クシユン／＼鼻を洗ひ乍らおとなしく自分の小屋に歸て行くらしい足音が、霜板の上を小きざみにコト／＼踏むで行く。枕の四方が再び眞夜中の樣にシンとして見ると、却つて一層寢つきにくゝなつて、肥つた身體をあつちこつちにゴロ／＼やつて見た。が明の三時を聞くと思ひ出した樣に添寢の子を抱きしめてモヨ／＼動かして居る赤い唇に頰付した。オヽまあこの柔かい唇、桃の實の樣なこのほつぺた。私は可愛い坊やとこの羊の毛の樣な髮の毛を撫でることを忘れることはないんだよ。

光枝はする／＼してくびれて居る手首を、さすり乍ら夜具の袖を引つぱり寄せてしつかりお腹にだかせて薄いランプの光りを後に寢返り打つた。

もう明けに近い雨戸の色を、細目に明いた目で見て寢る間なんかありやあしないと思ふともう眠ることに勉める必要がなくなつた。

やつぱりだ、やつぱり私はあの判官樣になつた仲七の事が忘れられない、男が女を戀する樣に舞臺の上の仲七にあこがれて居るんだ、あの女の手を引いてそこいら中、步き廻つて見度のだ、こんな事が人に話したらきつと笑ひこけるにちがひない。人もあらうにあんな稼業の、しかも女を、さうしてまあそんな事をする筈のない、しては惡い身分の私とした事が、人が云はなくても私にも馬鹿なと叱る事は出來る。けれど人が何といはうと、自分でどんな氣を變へて見ても、どうしてもあれだけは思ひ切て考へずに居る事が出來ない、小供の時分から熱し性な私は、あゝあれはよかつたなだけで、すますことは出來るものか、好きとなつたらどうしても自分のものにするまでは、一方ならぬ氣をもむのだつた。

朝起きて學校へ出かけて、敎壇に乘つて、喋舌つてお午になるまで光枝は何日もより大變迅速に仕事を運むで居た。

光枝は今朝家の床の中の女とはまるで變つた山田先生となりすまして生徒と一處にアルミのお辨當の蓋を開いて、昆布にしみた醬油の香が、もあ／＼ともち上ると同時に小供を背中の方に寢かして考へて居た時のことを思ひ出して急に仲七に會ひ度なつて來た。けさ家を出る時、さう云ふ下心の更にないとはなかつたが、まさか本當に行つて見樣とは思つてなかつた、たゞ行けたらいゝな位にしか。光枝は自分の思つてることを誰かに讀まれはしまいかと、ちよつと目をあげるとたんに、一番前の列の生徒が、いけすかない氣取つた口に、白いかたまりを運び込む處だつたのを見た。お午過ぎ一時間の受持をソコ／＼にすませると、敎員

室の机の上だけをざつと片付けて、亂脈な引出しは其のまゝ鍵をかつてから、小使に袴をあづけて帶をしめなほした。——なり門を出ると、とぶ樣な氣を電車に乘せてはしつた。其の間小供のことも、夫の事も、家の事も奇麗に忘れちまつてうその樣な若々しい氣分の光枝はやうやく水道橋で降りた。

「秀さんを呼んでもらひ度ですがね」と云ひ乍ら、入口の處に立つて居る時、向ふの花道を歩いて居る秀さんを見付けて手招ぎした。秀さんは急いで飛んで來て「良くいらつしやいました、大變御晷くなりやして——ヱヱ今日はお一人で」と光枝の後をのぞいた。「ア、今日はね内密で來たんだからね」「ア、左樣で——ヱ、あの邊がよう御座いませう。」

秀さんは先に立つて行つて土間の中程の升に坐らせて、あたりさはりのない話を一言二言云つて義經千本櫻と赤く書いた、小本を置いたなり「どうぞ御ゆつくり」と立つて行つてしまつた。とすぐに明いた幕の下から、さびれた大道具や小道具を氣にしながらも、小芝居のわりにはねとかばつて見ないわけには行かなかつた。厚く塗つたお白粉の下に、うごく皺のいくつかを見るにつけあの仲七の張りつめた肉のしまりや淋しみと、品のある面ざしを自分のもののやうにはこらずには居られなかつた時々は思ひ出した樣に、あんまり多くもない、觀客の目の動く筋をさぐつて見ても居た。

隣の升に男と女の二人連をつれて、秀さんがまた來て光枝に云つたと同じ樣にお晷う、よういらつしやいましたをくり返して居たのを呼んで氷と親子丼を注文した。秀さんはそれを持つて來てくれた時「奥さんお宅はどちらで」ときいたので「どちらでもいゝよ、きたない家だから來たりしちやいけないよ」とさすがにかう云ふ者に來られてはといふ懸念から、さう答へておいた。幕の明く度明く度光枝はあの舞臺のまゝの仲七が、此處の土間に降りて來て、私の隣りに坐つてくれたらねと、そんな事を思ひつゞけながら、もういやでも出なくちやあならない時になつて仕舞つた。電車までの通を坐りくたびれた足を引摺つて歩いた。ふと硝子越しの荒い辨慶縞に目をつけて、留る氣もなく足をとめて居る内、何時か店にすべり込んでしまつた。番頭が硝子の戸を明けて、引摺り落してくれたのを、手に取つて見るなり「あの仲七に着せたらねヱ」としみじみ思ふともうたまらなく氣に入つて何の氣もなく、二反も買つてしまつた。「さうだおしたの朝無名の小包で送つてやらう」お金を拂ふ時さう思つた。

三田行の電車に乘つて風呂敷包を膝の上に置いて、ホツとつくと、急に今迄忘れて居た事が氣になつて來て歸つたら何と云つておかうと、第一それが苦になつた。さうして風呂敷の上から二反の反物にふれて見て今更とんでもない事をして仕舞つた樣な氣もする。惡い事をした後かうした、妙な氣おくれがして「こんな事をしてもいゝのかしら」と弱い考を出した。何時か乘換なけりやならぬ神保町へ來た。光枝はあたふた降りて、線路の向ふで新宿行をまつて居た。

○後　姿

牛込　新兎さかえ

明日は又熱からうと、皆んなを思はせた彼の夕燒雲も名殘り無く消えて、澄切つた空に白い星の三つ四つ、瞬き初める明るい夕方だつた。

夜涼みの人を當込みの、はゝづきやだの植木屋だの蒸饅頭屋の屋臺だの、涼し相な夜店はもうぞろぞろと仕度に掛つて居る。神樂坂通りの商店はもう大抵燈りが灯てある。お絲は重い風呂敷包を抱へて、羨ましく

客を呼んでゐる。魚屋の聲や、夜店商人の店張りの事で爭つてゐるのたの何となく喧しい夕方の町を、グッタリ根の抜けて凹んだ丸髷を氣にしながら、みすぼらしい風姿をして、さつ〳〵と神樂坂の方へ足を運んだ。

恰度、毘沙門前迄來寛た時、左側の魚屋と下駄屋の横で何とか云ふ奥まつた湯屋の細い小路からつと自分の前をかすめて出て來た女が有た。年は二十歳位か、湯歸りと見えて眞鍮の小さい金盥に手拭掛けて持てゐる。振下りの銀杏返しに結つたぐつと出した長い髱の下から、夜の化粧した美くしい襟足を惜し氣も無く見せて、華美な瀧縞の浴衣に、白の繻博多の半幅帯を投げ遣りに伊達結びにしたのが、きやしやな小作な身體によく似合ふ。浴衣の纏る裾から見せて居る内輪に歩るく小さな圓い踵と、黒塗のひより下駄とはもつれ合てお絲の眼に映つた。

花柳街の近所で見る此麼姿は些とも稀らしくは無いけれど、お絲は何か無しに引付けられる樣に、二三間の隔を保つて、此度は緩くり其の髷の後に付て歩いた。そしてまじ〳〵と其の女の後姿を眺めて居た。眞黒な水を浴びた樣な髮の毛は、湯氣の濕味でふくらむだのか、ふつくらと形合よく白い頸に被ぶさつてゐる。

匂やかな髮、ふつくらした白い頸、お絲はじつと其の面差しを想像して見た。而してふつと、其の後姿が自分の知てる誰かに似てる樣に思つた。

けれ共、其れは只漠然と其那事を思つただけで似て居ると云ふ人が、お絲の小さい時分の友達なのが深川に居る時分のであつたか、其れ共、多い從姉妹や遠縁に當る人なのか、それすら殆ど當が付かなかつた。お絲は其れから其れと古い記憶を辿つて見た。

女は石川呉服店前の横町を入つて、直ぐ右側の藝者屋町の細い横町を入つた。お絲も無意識に其の女の後について曲つた。ハッと思つて立留つた。けれ共直ぐに、津久戸に歸るのに此處の道を抜けても大して廻り損で無い事を思つて安心した。

女の家は横町の出口の小坂の手前で左側だつた。



背の夢　　岡山市　矢木武子

女は江一格子に手を掛けて片足股いで入りがてに、つと振り返つてお絲の顔を見て意外と云つた面持で、ニッコリした。

お絲の思ひ出さう思ひ出さうと思つた女の顏は其れだつた。

「あつお葉樣だつ!!」と思はず小聲で叫けんだ。女は再び振り返つたけれど何とも云は無かつた。

「……ぢやないのかしら……だけど肖似だわ、お葉樣が藝者なんて、まさか」、とお絲は思つた。而して驅け寄つて其の格子の前に立つた時、もう先の女の影はなく、御神燈に靜かに火が灯て、其の女の拔散らした下駄を淡く照らして居た。

お葉樣、其れは三四年前、お絲が深川の或る工場に通つて居た時分の友達なのだ。

下膨れの白い頰の、而してじつと人を見返す眼は露のした、る樣な黒い瞳で小さい口元に、經るゝ樣な愛嬌を持つた女だつた。

多い女工の內で一番若くて、而して一番容色よしと男工の間に噂されたゞけ、いつも多くの朋輩の嫉妬と羨望の的に成つて居た。年嵩の朋輩なんぞは、あの子を彼の儘置くのは惜しい物だなどゝよく噂しあつた物だ。

其のお葉樣が、十六の春も暮れる頃から、ふと工場に顏を見なく成つた。後に人の噂に聞けば、牛込の神樂坂近所の商家へ、嫁づいたとやらさうすればお葉樣も今頃は小供でも抱いて、可愛い細君に成つて居るはず。お絲は何も彼も紛亂にからむで、譯が解らなく成つて了つた。けれ共確實に今の女はお葉樣だと思つた。

而して其の人をも一度見たら、確然と定めて了ふ事が出來るだらうと思つた。そして其れがお葉樣だつたら甚麽に嬉しいだらうと思つた。

お絲はあたりに人の居ないのを幸に、其の家の前の板塀に凭れて暫時佇んだ。

パッと迸ばしる明りに、故一やと胸を跳らせて、其の家を差し覗くと人の出る氣勢は無くて、白い頰の唐人髷に結つた、雛妓の顏が覗いてたそしてお絲と瞳が合ふと突然、ピシャンと障子を閉切つて、自分い事か人の事か。

「ほ……姐樣まだよ、御苦勞樣……莫迦にしてるわねえ、」と今の雛妓らしい皮肉な笑ひ聲、

お絲はハッとして前後の意識もなく前の小坂を驅け降りた。

○ひとり

信濃　長谷川未女子

兄の嫁が來てから三日目の朝お澄は朝飯の跡始末が濟むでから嫂の謹ましく入れてくれたお茶をソリ〳〵しながら一杯丈飮むとそこ〳〵にて二階へ駈け上つた、西向きに付いてゐる二枚障子をガラッと開けて滑りよくピッタリとつめると急に今迄のクスグッタイ壓迫とでも云ふやうな重い手を一時に取り去つた樣な氣がして何處となく氣が伸びりした、そして目の前に開けた十五疊の間の未だ疚の香のしさうな青疊を氣持よく見入つた、午前の陽は小さな丸窓の隙から細く〳〵ても鋭く〳〵さし込で其所に浮てゐる塵を金色に光らせながら上下にまはらせて居た。

お澄は今迄とはまるで變つてチットも煩はしい心づかひや雜音のしない何となく落付きのある其部屋の空氣に浸つてゐるとキユット張詰めてゐた身內がやう〳〵に溶かされて行くやうな氣がした。

「あゝくたびれた——」思はず斯ういつてグッタリ其所へ坐つた、そして新しい思ひで又部屋を見廻すと昨晩着た白っぽい明石の單衣や鴇紅色の

繻珍の丸帯や夫から兄の黒絽の五ッ紋の羽織だのが互々に見え隱れて噂つ子にあるのが目に寫つた。

お澄は夫を見るとふと未だ婚禮の披露だの仕度だのゝ事に忙はしく暮らしてゐた近い前の日を思ひ浮べた。

いよ〳〵酒が入つて××日に來ると定まつた時誰より先へ喜んだのはお澄だつた、お澄はもう二三年前から深い憧憬を東京に持つて居た、凡てに華やかなそして濃い色彩を物の上に染めて行く都會の生活といふのも其幾分かの原因になつて居たかも知れないけれどもつと深い理由といへば只此上勉強したい、そして此上よく何かが解り度いといふ事なので有つた、夫はお澄だとて兄の情で地方では得られる丈の教育は授けられて有るのだから何々無教育だと自ら恥ぢなくと共好いので有るけれど智識欲の盛なお澄は日毎に進歩して行く社會の有様を見てはいくら學問で世に立つ身でなく共圖書館一つない地方にゐて平和といふより寧ろ平凡な生活をしてゐるのが耐らなく口惜しかつた、強いて規則的の勉强でなくても好い自分で修養出來る備の有る所――東京――其所を夢見ては兄に迫つた末とう〳〵兄の心を動かして仕舞つた、が扨今の所自分に代る女の手が無いので何うする事も出來なかつた。

「噫嫂さんさへ出來れば……」お澄は明け暮れ願つてゐた、其嫂が向ふ



しやぼん玉　長野市　秋丘こずゑ

幾日かの後には來て自然自分の前途も限りなく開けて行くのだと思ふてはもう何を考へて見る餘裕もなく今迄行手を遮つてゐた大きな魔の手を打拂つて明るに日の下に立つた時のやうな活々した表情が屡々其淋しい顔に浮むだ。

「之で漸く兄さんの身も定まつたと云ふもの、澄ちさんもお樂で御わすなア」

御祝に來てくれた親類の人逹が定まつた樣にいふ言葉を聞いてももう嬉しいと思ふより外には何もなかつた、そして亡母の實家の祖母や本家の叔母等が結納事や家の中の仕度などの世話をしてくれるのを見ると自分の事でも有るやうに喜んだり平常は氣が合はなくて居た×町の叔母が解り切つた事を敎へて行くのですら親切の籠つた言葉のやうに感じられて一々手帖へ書き留めて置いては時々懷から出して見たりなどした、夫から妹に髮を結ふてやつたりしながらも「ねえ君ちやんお嫁さんがいらしつたらもう音なしくして今迄の樣に剛情なんぞはるのぢや有りませんよ……」などと云ひ聞かせたりしてもう少しも氣を休める閑はなかつたけれど苦痛といふ樣な感じは少しも伴ふ事なく却つて夫が樂しみのやうな本當に暖かい柔かい氣分に浸たつてゐた……」

お澄はもうウツトリとこんな事を思つてゐるを突然

「ハ……」といふ男の笑聲に混じつて女の謎ましい笑聲——親類の人らしい——聲が聞えて來た、ハツと驚いて殆ゝ無意識に立ち上つて其着物の側へ行くとあわてゝたゝみ始めたけれど何だか自分一人きり取り除かれた樣な便りない寂しさが打消しても〱腦をついて上つて來た、そして兄の紋付に手をかけた時熱い泪がハラ〱と膝の上に落ちた。

「アヽもう今日から私は獨ポツチだ兄さんは私の義理の姉さんの夫だもの私は妹だつてどうする事も出來ない——噫もう東京へも行き度くはない——一度丈でも今迄のやうに兄さんと呼びたい——」泪は又泪を誘つてお澄は身をふるはせて其所へ泣きふした。

○死後

岩代明子

ながい、冬の眠から覺めた蛙が、いき苦しい穴を出て、始めて、雪どけの水をあびた時のやうな、お新の心の奥底迄も、深く刺擊したのは、父親の死であつた。

落ちくぼんだ眼、やせたほゝ、かうした父親の顔が、眼に立つて見えるやうになつたのは、此半年あまり、年の故許りとも思はれない、ふきぬいて、黑光りする戸棚を脊にして、たき火しながら、ごほ〱と力のないせきをきくことは、少なくなかつた。

「ぢき近くなんだもの、村井樣に見てもらつたらいゝのに」、妹娘のお菊が、心にかけていふことを耳に入れなかつた。「醫者樣に診察してもらふ程に、よわらねえ」、二言目にはかういふて、勉めて元氣さうによそほふて居た。

お新が十五、お菊が十四の年、母親が死んでから、いろ〱と、後妻を世話する人もあつたが、父親は、たうとう、頭をたてにふらなかつた。只二人の娘、育ち盛りの二人を、男親の手一つで、育てあげようとする事の無理であることも、知らぬではないが、半生の努力で、きづきあげた此家と、田地と、財産とを、二人の娘にあたへようとするには、後妻をむかへるのは、好ましい事でない、「子供さへ出來ねえなら、もらつてもいいが、ひよいと男でも生れたら、それこそだ」といふて、仲人を笑はせてかへしたこともあつた。

お菊は母に似て、すつきりとした、顔のとゝのつた子供であつた、きり

つとしたいゝ眼で、遠くをながめる顔は、母親に生寫しだといはれて居る。年よりもませた心その妹のまへにはいとしい程に、姉のお新は、茫やりに育つて居た、腦病をわづらつてから、眠つて居るやうなお新の頭、何をきいても見ても、刺戟が少なく、氣のまはる妹に、さしづをされながら、右に左に、夢の樣に動いて居る、父親はそれが、又可愛さうでならなかつた。「お新をよいやうにして、」時にお菊をにらまへる時にも、お新は茫やり妹の後に立ちすくんで居た。それから四年の年月は、夢のやうに立つて居る。前川の流れをへだてゝ、むかひ山のまばらな木の枝がみどり色につゝまれてしまつた頃、ふと風をひいて床についてから十日あまりで、肺結核と、診斷された時には、より集つた親類中の誰れ彼れが、變る〱夜通しで、病人を看病して居た。

「なんといふても助からねえと、村井樣がいはしつた、あきらめるより他はねえだあなあ、お菊ばう、」父の弟になつてる繁造叔父は、ちびり〱と酒を口にしながら大きな眼にいつぱい涙をためて、お菊を相手に、しみじみと話しこんで居る。

「お新ちやんがもちつと、昔の人だとどれ位いゝか知れないんだけれども」、涙ぐんだ叔母は、いぢらしさうにお新の姿を見守つた。それから二十日許りで、まつしろな敷布の上にひなげしを散らしたやうに、血をはいて父親は死んだ覺えてから、しみ〲と味はつた骨肉の別れ、すべてにかんじの薄いお新も、さすがに、ないて〱なきぬいた。それでもつきない涙を佛前にちやんと坐つて、手をあはしてはほろ〱とながして居る、仕事をするでもなく、動くでもなく茫やりと佛前に坐るのがお新の日課となつた其ころから、お新の心が妙に變つてきたやうに思はれた氣が狂ふのぢやあるまいかと、氣づいたお菊は、いら〱した心になつて、お新の看視をおこたらなかつた。

四十九日迄は、七日々々に、お茶を入れるにも、十八といふお菊の手一つでは如何にも仕方がないので、叔父夫婦が、しばらく、此家に共に居ることになつた。四十九日の法事をすましてしまふと、重荷を下したやうに誰れの心にも、ゆるみが出てきた。梅雨があがつてから十日許りのうちにめつきりと暑さが加はつてきた、はりかへた許りの障子に、ぢかぢかと日が照つて、前庭のくりの木に、やかましく蟬がないて居る。さき殘りのやぐるま草が、照りつける日に堪へられないやうに、ぐにやりと、頭をさげて居る。

叔父夫婦も、いつ迄もかうして居るわけにも行かなかつた、第一、若い夫婦にまかせきりの家が、叔母にはどうも氣がもめてならなかつた。「嫁なんて、おれたちが居ねえので、命のせんたくだなんて、いふて居るべえ」時折、誰れにとなく話して居る中に、だらしなく、わい〱話しながら居る若い者の姿が、眼に見えてくる、さういふ時には、「一はしりだ、ちよつくらいつてくべえ」と、二里餘りのみちを、かけるやうにして、行くのが常だつた、叔父は、又かといふやうな顔して、それを見送つて居る。

かうしたことも四度や五度は好いが、二里餘りのみちのゆきかへりは、女の足には易いことではなかつた。それが家にかへるとしても、只二人を置くことはならない、十年から働いて居る老人も居れど、それに畑の方の取りしまりをまかせておくにしても、父親が生前に貸しつけておいた金などのこともあるので、誰れか、ものゝわかる者をといふて、他人はたのまれぬし、つまり養子をもらふより他には方法がなかつた。此叔父の次男が丁度好いだらうと、親類の誰れかれから、いひだされては、叔父も勿論望む所だつた、軍人あがりの從兄をお菊とても不承知ではなかつた。

それにしても、姉のお新を如何したらば好いか、皆これには思ひなやんだ、馬鹿でもそうりやうだ、いつ迄もかうしておくことはならぬし、それといふて、もらひ手は勿論ない、來る人があれば、それは財産をぬすみに來る男だ、と思つては、今更に困つてしまつた。まんざら感じのない人間でもないものを、眼の前で妹に養子しては、如何したことがおこらぬとも限らない。

「おれがあづかつてもよいが」といふ話をしだしたのが母の妹になつて居る叔母であつた「財産も何も入らねえ、お新ちやんさへ承知ならいくらでもおれが引とる、ほんに何の因果で」と叔母はほろ〳〵涙をこぼして居た。

お新は相變らず、佛壇の前に手を合はして泣いて居る、無口なお新はます〳〵無口になつてしまつた。ぶら〳〵外に出て居つたかと思ふと、半日も何處にいつたかわからぬこともあつた「お新ちやん、いつ迄泣いてなんだい、泣いたつてお父樣がかへつてくるもんぢやない死んだ御父樣より、もつといゝお父樣をもらつてやる」と氣なしに叔母が泣いて居る後から聲かけたのが、よく聞えたのか、お新はしやくりあげて居た顔を叔母にむけてにつこりと笑つた。

夕立の後は、思ひがはれた時のやうに心地がよかつた、生かへつたやうに、すが〳〵と勢づいた草花の上に、夕の光線がまぶしく照らして居る「涼しくなつたもんだ、日の中もこれ位だといゝがなあ」叔母はどつかと縁に腰を下して、見るともなく、めつきりと色づいたあんずの實をながめて居た。

水たまりの中で、じやぼ〳〵と、心地よささうに、子供のやうにして無心にあしでかきまはして居たお新は、叔母の聲をきくと、さつさとあるいてにや〳〵笑ひながら、叔母のかたへに腰かけた。

「おばさま、いつお父樣、もらふのたべ、」叔母はなさけなさゝうにお新の顔を見たが、をかしさうに笑をこらへて、柱によりかゝつたまゝ二人を見て居るお菊の顔を見た。お菊はこらへられぬといふ風に、くすりと笑つて下をむいた。

「あゝ、もすこしすぎたらもらつてやるさ、お新ちやんはどんな人がよいか！」からかふやうに叔母はきいた。

「あのな、叔母樣家の友樣のやうな人よかんべえ！」叔母は驚いたやうにお菊と顔を見合せたが、何も知らずに居るお新が、たまらなく、いとしかつた。

「友吉かい、つれてきてやるからね」叔母ははつと、いきをついて母屋に立つていつた。

畑の中を一散にかけて、白犬がきた、お新はよろ〳〵と立ちあがつて小犬に近づいた、「白、白！、」膝の上にだきあげると、きたないあしを、丁寧に紙でふきとつて、ほゝづりをして居る。

「なあ、友樣がお父樣にくるんだとよ、白ッ！」お菊は堪へられない恐ろしさを感じて、がた〳〵と、叔母のあとをおふた。

「友吉樣がお父樣になる、はゝゝかあいさうなこつた、お菊ちやんの婿になることも知らねえで」作男がなぶるやうに、お新をからかつて通り過ぎた。

「白、白、」にげまはる犬をおひかけてお新は畑の中に入つた。お菊は叔母の顔を見ると、かけよつてしく〳〵なき出した。



入賞（散文）　編輯局選



○青い李

米澤ほゝづき

冷い風がスーと來て片々外れた蚊帳の天井が大浪紆り乍ら、ジネ〳〵油汗した額の上に落掛りさう。切ないかえ―――取散らした枕元から母の白い顔が差寄つて來る、夫に重つて立つたり坐つたりしてる兄弟の顔がボンヤリ高く低く……暗がりに咲く月見草を見る様に暗い、壓される様な油煤臭い部屋の空氣に、ウト〳〵した思ひから覺めてハッとした。爽かな明い〳〵窓下に安らかに自分はねかされてゐる、いつの間に連れて來られたのかしら、洗濯しかけの敷布も枕掛も眞白い動く度ゴワ〳〵と音のする床の上に私は暫し嬉しい極惡さにモヂ〳〵してゐた。美ちやんが生れて私が此お部屋から兄弟の方に移され、毎晩むづかり〳〵したのはもう十年になる。戸のない押入にチラ〳〵黒く光つてゐる母の手道具や足元の繪入の二枚屏風が甦る様に遠い〳〵昔の夢の甘い香をゆり起して來る……

銅像の西郷が笑つた樣な、老醫の大きなお顏がすぐ目の上に見えた。枕が高いので自分の體がよく見える、さつき母に着代させて貰つた襦袢とお腰――緋ネルの中に青白い腹がヒク〳〵喘でゐる、大きいお手がグニヤリと其處を一もみ「フウ―李食つたナ」圖星を指されて蹙めて居た自分の顏が思はずニコリとした、と、簀戸の陰でもクス〳〵と皆の忍び笑ひ――、急に其處が懷しくなつて憎らしくなつて――。

賑かな祭禮の群を離れてたゞ一つ、赤暗いカンテラが――それはまゝ石の間に挿込んだ葦ンボの先にブラ下つて居た。暗い瀬音を背にして、枯木の様に震へてる膝を兩手で抱へてフラ〳〵頭を落し込んで居た翁の前に、淋しく光り乍ら青い李が山と積れてゐた。

見るから中毒しさうな瘠せた眞青な細いのを汗手で握つてヨレ〳〵になつた紺飛白の袂からひろげ出して大人の居ないお部屋の空机に集つて、兄弟して白い鹽を付け〳〵喰べたのだつた、酸つぱい澁い飛上りさうな思をしば〳〵。

體ごと溶けて落ちてしまふかと思はれる程下痢し盡した後の我が肉體は、どこを見てもいやに青白いカサカサした色に變つて深い疲といぎたない眠に落込んだ

まゝいつ覺め樣とも見えない樣な――、窓の方に吸はれて行つた我が魂は瞳は、何を思ふでもない――、軒近く垂下つた、六月初の鮮かなおほらかな光がまんべんなく行渡つてる青空をそのまゝ映してゐるだけ――やがて暗緑の暮色が一皮づゝ増して行つてポッと開いた水色の明い星が嬉しさうにまたゝくまゝにつれてゆれてるだけ――外に何物もない……。

明い青葉の中に脈の樣に黒く透いて見える細い枝にコツ〳〵凝つて喰付いて居る所は剽輕なイタツラ小僧の樣でもある、けれども――しぐられて街中の小店の蓆の上に曝されてゐるのを見ると、孤兒の物妬ましげな恨めしげなそして弱々しい瞳の樣にじつと私を見つめて咀つて居る樣だ、瘠せた青い實!!私はそれでもお前が懷しい――もう一生喰べはしまいけれども――、お前の瞳を通して今も私の魂を吸ふあの大空の色が懷しい――。（天囂）

○夜

京都　廣江曉子

五月の短夜なれども、明しかねさせ給ひつゝ、おのづから打まどらせ給はねば、昔の事をば夢にだにも御らんせず、壁にそむける燈の盤の影かすかに、夜もすがら窓打つ暗き雨の音ぞさびしかりける。

ほろ〳〵と熱い涙が指先きで輕く押へた紙の上に落ちた、涙に茫としてそれから先きはもう讀めぬ。

さびしき明暮讀み馴れた灌頂の卷を膝に伏せて、わづかな庇合を洩る蒼い月を仰いだ、廿日の月の高くなる迄一人おき居て、人の知らぬ事を思ひ、妨げられざる悲しみに醉ふうれしさ、心は今淋しけれど隱かに、あらゆる苦痛も悩みも形なく和らげられて、冷かなれどなつかしき初秋の風のやうに、水の如き月光に和して限りなき世を限りなく、行く思ひ。

寂寥と悲愁の中に見いづるやすらひよ、慰めよ。もしもこの情緒がなかつたら、私の生はどれ程荒漠な物であつたらう、このこゝろによつて死より救はれてこのこゝろによつて苦惱の極度に立てる時もなほ狂せんとはせず。

庇合を洩る月光は細くわづかに肩を流れて、疊の上に落ちて泉のやうに漂ふ、河かしら其處に眼に見えぬ程の小さな幻が無數に躍つて居るやうに思はれる。

かゝる夜外へ出れば夢のやうに眠れる家々は小さく鉢を伏せた程に、東の山脈は湖の國をへだてゝ薄き一重の帳とも見えわたらう、朧の處々にきづかれた寺々の塔は見るよしなけれど、受くる夜の沈默の底を音高く落ち行く加茂川の瀬々の水は雪とくだけて、川床の

石は眞蒼にかゞやかう。

男ならば、男ならずとも、底知れぬ月光の中にさ迷ふて思ひのまゝに興じようもの、心ばかり行き行けど我家は高き家と家との谷間のやうな裏住居の更けては向ひの軒に泣く籠飼ひのきりぐずの青野の露を慕ふ聲のみ、おぼろかな初夏のある夜、細い路次に蓋を踏みかけてから、月夜にも心ゆるしてはあるけなくなつた。



猫と女　京橘醉花

いとせめて低き軒端のすそは落ちても洩れくる光の多かれ、秋近き空吹きめぐるなつかしき風よ、庇に鳴る音の、より強くてゝに落ちて我が胸の悲しきひゞきに通へ。

靜に眼を閉ぢてねむる時、魂は自由に廣い夢の國を馳せて、このわびしい低い軒端にも、明るい町に出ようとすれば必ず踏まねばならぬ細い路次もない。

眠りはせめてやすらひの國である、その夢もさめたる夜半は、燈火かき立てゝ、馴れしこの平家をひもと

く、かくて辛き思ひを逃れて、鐵漿黒く薄化粧の頰のかゞやくばかりうつくしき公達に逢ひ、黑髮長う、艶に淑やかに、泣き濡る、戀の女房と語り明かす、人知れずゞだえく、人知れず慰められて、便りない私の生はつゞいて行く。（地貧）

〇月光

豐前　みね子

柱の有る方へ腰かけて兩手を凝つと膝に組んだ。落ちてくる水色の月光が、紺絞りの浴衣の白拔の花模樣から小さな織目を潜つて、柔かい膚に觸れた時私は靜に目を閉ぢた。――廣い野である。どの隅から里に續いてるのか目のはては皆一つの直線にくぎられてるそして月はこゝ計りを照す樣に眞中に冴えて、一面に生えた短い黃い草を金色に輝して居る。此廣い野を若い女が步んでる。細い葉先へどれも〳〵下つた銀の珠が、動く度にほろ〳〵と其白い脛に薄い裾に亂れるが女は月計り見詰めて足を運んで居る。柔かい自然の抱擁は此女の、群集に壓され〳〵て疲れ切つた悄々してる心に、潤ひと、物を正視し得る餘裕とを與へた。雨の日に赤い毬、膝の發した五色の絹絲が昔のまゝに、美しう今其胸に甦れたのである、女は珍らし相に黃の一筋を引いて見た。

會ふ人毎に賞めらるゝふつさりした株切の髮を、未だ紅をつくる若い母は嬉し相に撫せ乍ら、土藏の白壁を晝の樣に照して昇つてくる月を見て、いつも話す、生れた夜。父なる人は女の兒と云ふに少しは力を落したが、若い母は早、赤い帶を締めてやる樂しみを想つて微笑んだ時、硝子戸の所まで傾いてた月が面白い樣にづん〳〵疊を這うて、紅入友禪の小抱卷の傍まで來て一寸躊躇つたが、又其上を越して、眞綿にくるまつた嬰兒の赤い顏を見恍れる樣に、其手觸りも分らぬ柔い頰に一寸さはつて、母家の屋根にかくるゝ時、殘り惜し相に月は産室を忍び出た。若い母はきつと月が美しい情と清い目とを授けに來たのだらうと思つた。と「だからお前、立派な女にお成り」と、笑つてた。

女はこゝまで、現在を忘れて、緩つくり思ひ出でゝ目まで動かして美しう笑み乍ら月に向ふと一所に、サッと顏色更へて車のまはりを見廻した。

吁、私の影が、私の影が、あの、前に來樣としてるあゝ、蒼い色と、鼠色の目を想はせる貧しい私の影が！　このまゝ。このまゝ。と、兩袖を顏に蓋うて草に倒れた時、月は其白い頸と青い帶とに寂しい喜びの目を流して居た。――音もなく風もなく夜は更けてゆく空を見乍ら私はふと、庇から五寸餘り離れてる月が、かくるゝまで此處に居ようと思つた。（人實）

○八月の夕暮に

牛込　磐田順子

また灯を入れるには早い岐阜提灯が、フラ〳〵動く縁側に五人の子供がズラリと並んで、缺けたのや、汚れたのやそれ〴〵洋盃をすゑて、叔父様がそれへサイダーをついでゐる「やあこりや六ヶ敷いな！、一イ二ウ三イ四ヶ五イ――」と十まで数へる調子でついでゐる、一つ入れてもらふとホッとしたやうな顔をして小い二ツの瞳がきつと隣のと見比べて光る、私は鍵形になつた縁の此方の柱に凭れてそれをみてゐた。男の兒の貞ちやんだけは針で面白い程旨く調子づいて氷を割るのに餘念もない。やつとお父さんはつぎ終つた。

　ホッとして上げた子供等の瞳がすぐ私を見付けた。初めつから姉さん姉さんとつきまとふてゐた稲ちやんが「あゝ姉さんは!? 父ちやま姉さんには? かう云ひ出すと、皆の子が云ひ初めた。まあちやんは洋盃を取りに立つ、貞ちやんは姉さん！　つて氷のかけらをつかんでくる「まあちやん、早うのまないとサイダーが腐るぞ！」と叔父さんの顔は澁い



ひぐらしの聲　矢名

私は貧しい家の食客はいやだなあ！と思ふて其儘下りて門の方へ出た。後では又姉ちやん、と呼んでゐる。稲ちやんによく似た土佐の妹の美代の事など思ひながら、思はず西の空を見上げた。

　あゝ美しい夕焼！、一しきり燃えた色の褪らはふとしてゐるところであつた。向ふの高く築き上げた墓地の緑の深い木立が、空の薄桃色にはんのり限どられたまゝざわ〳〵と輕く輕く自由に揺いでゐる。杉の木が殊にデリケートである。青色に透いた空の處々には桃色の褪せた白雲が静かに浮いてゐた。私は門にもたれて故郷の此頃を思ふた。此頃もう夕飯を仕舞ふてから又、日が沈んで後の長い薄明を傾りにあの田の中の小道を通ふて川端の畑へ父と母と、みよも、花政も行つて居るのであらう、きつと！。私もよく行つたものだ。揮いた鍬の刃にチラと薄くうつゝた夕日の色か、まだ瞳に残つてゐる。父も母も默つたまゝ私の事ばかり思ふて居るのだらう。あきれもしよう、怖れもしよう、憎くもあらう、然し、可愛さうだと思ふてゐるのだらう、あゝ早く時がたてばいゝがなあ！、としみじみ思ふ、私は故郷でそんなに思ふ人よりも惨めでたまらないのだ。

　神楽坂の夜店に出る貧しげな車が、ぞろ〳〵通る。湯衣の女が薄化粧

した皮膚と、湯衣の肌觸りの一番美しうみえるのは此頃だなあ！と思ふて私は通ふ人を眺めてゐた。ぱちぱちと彈ける音がして青臭い匂が何處からともなく流れてくる。隣の堺の杉垣が、靜かに動いて鋏の音がする、白い手の動くのもみえる。

墓地の木立では、何かしら小鳥が聲も立てず騷がしげに止つたり飛びたつだりしてゐる、たゞ一つ木立を發つて、スーツと何處かへ流れてゆくのもあつた、重くるしい荷車の響が、だんだん數をましてきた。夕燒の色がうすれて空は深い水色に澄んでゆく。

○面影人

京橋　扇花

弘法樣の御緣日の晩、柳の木がくれに淡く三日月の影が覗く黃昏時、その下には必ず、尺八の音が冴えて聞えます。遠くから眺めると黑山のやうな人だかり、私は何日も其の中に、もたれながら、涙ぐんで、耳をかたむける一人でした。

「山つ風……別れの……風だよ……。あきらめさんせ、何日また逢ふやら、逢はぬやら……。」

若き血潮の高なりや、情に迫る其の音色、嫋々として高き空にすみ昇つて、颯々たる松風より高く、瀏喨とあたりに冴え渡ると思ふ間に、忽焉として絕えた、と思ふ間に、再び消さかへる幽かな聲。十のみびも細りさうな……故鄕を遠く離れて異鄕の地にさまよふ遊子の耳にはそもいかに胸をえぐられる思ひのするであらうか……。最うもうあの音色と深あみ笠に面をかくした奧ゆかしい書生殿のシヨンボリした淋しい影を見ると、何日も涙がこぼれます。今晩も早く行きますと、もう一ぱいの人だかり。角のアーク燈は、青白い光を浴びせかけて無言に見て居る。風少し出て、柳の葉がサラサラと鳴る下に、古びた小倉袴のやゝ短めに、幾度か水をくゞつたらしい白がすりの袂もしほれて、よく見ると、何日もかゝさず顏かくしに被つて居た笠の、今夜は珍らしく取られて、何日ものやうに淋しくは見えぬ。黑目がちな、鼻筋の通つた、色白の細面、少しのびた黑い光澤のある髮の毛の額にフサフサとかゝつて居る美しい新派俳優にありさうな上品な青年の、どうやら私の胸には、小栗さんの纖慕流しのヒーロン、純之助の面影が偲ばれました。女こそ見えね、此の姿、果して彼れのやうな、青春の燃ゆるがまゝに熱して、空想を畫いて、とてつもない悲しい運命の神にもてあそばるゝ一人ではあるまいか……果してさうでしたら……あゝ私は他人た、人の過去を調べて何なる、馬鹿のものずき……と誰やらに笑はれるやうに心がとがめられるけれど、けれど……私は何んだか聞いて見たい、知つて見たい奧ゆかしい路傍の人とだけではものたらぬの、でも可憐さうねえ。一錢二錢の惠を貰つてくたびれた足ずりで、體を橫たへる家はどこ……。深川か……本所か……、しがない運命ねえと心につぶやくと、いつの間にやら、涙が流れて居た。

「オイ雨だぜ、南無光つてくれるない。」と印絆天着た、いなせな奴の橫つとび。同時にバラバラと人の頭は雲を散らしたやうにかけてゆく。憎らしい急雨、さつき迄三日月の見えて居たのに……私も歸らうと、きびすをかへす眼の前に、細蛇の目の半開きにかたむけた女のスラスラとかけかけて「お氣の毒さま、失禮ですが……。」オヤと目をみはつて居ると傘はサツと大きく、笛の主にさしかけた。なるみ絞りの裾長う、湯上りらしい手拭を下げて、つやつやとしてなでつけられた潰し島田の根元にはグツとさした銀すぢ棒、スラリとした仇姿の後を見せて、モジモジ初心らしく赤らめた顏には、めいわくさうな色のたゞよつて居る青年に、半身をよせて、世なれた樣のはゝゑみさへ浮べて、うながして、しづかに人込の中に消える。ぼんやり見送つた私は、なんとなく彼の女が妹ましかつた、イ、エ憎くかつたのです。次の緣日には、柳の下には笛の音はしませんでした。若い美しい樂手の、いづこにさまよつて居る事でせう。折々あふ面影とゆかしい音色を偲んでは、二階のおばしまに凭つて、ホロリとしますのに……。

○ミスメッグ

大阪　河盛よしの

薔薇色の頰、黃金色の髮、睫毛の永い美しい眼、水色の上衣に白のス

カートなど懐しい印象を殘して、ミスメッグは輕井澤に行つてしまつた淋しい中に其月も暮れて、私は八月中、埃に照りつける大阪の暑さを、濱寺に避ける事にした。ミスメッグと腕組みして歩いた濱邊、松林の中には、蜜柑を食べたベンチも、茶を呑んだホテルもある。思ひ出多い海岸の潮風に吹かれて、私は毎日ミスメッグの手紙を待つて居た。遠く突き出た砂洲の松に夕霧がかゝつて、沖に星がちらつく時、「グードナイトマイディヤ」といふ柔かい聲のもるゝ可愛い唇を思はずには居られなかつた。

九月初旬、私は歸阪したがミスメッグは歸らなかつた。何の音信もなく暮れて行く秋がたまらなく寂しかつた。かうして自分を離れて行く友の心を捕へようとする醜くい私の姿を、心の底で何者かゞ冷笑して居る。「お前は弱者だ」と叫んで居る。十七の少女を慕ふ少女の淡い戀を葬つてしまふ殘酷な人は忘れても、顔づりした時踊つたフレッシユな血が私の心に殘つて居る。

捨てようと思つて、取り出したピンクの手紙を愛されて居る時の心づもりで讀んで見ると、あの美くしいほゝゑみが思ひ出されて、今の私にとつては、此一片のレターペーパーが寶石よりも尊いと思つた。私はやつぱり強者にはなれなかつた、イノクアーデンの樣な美くしい詩になつて世の人が見てくれなければ永久に眠る事の出來ない戀をいだいて、何時まで私は悶えぬ事であらうか。

○「火の鞭」に打たれて

麻布　八　雲　琴

……今日になつてお姉樣のことをあなたから聞かうとは思ひがけなかつたと仰しやる。

お恨みは深からう、お怒りも強からう、それと共にいふ許りなき懐しみもおはすに違ひない。せん方なく嫁ぎし人に總てが幸福なものならば傷手も忘れられやうものを、若き妻として、若き母として、なほ御やつれの見ゆるは如何に、やさしうさるれば却つて切なくてと、泣いて告げ玉ひしこともありしを。姉の心にはこの君あるがためではなからうか。せめても、よき家に人となりし君を兄上と呼び得たならば、私もどんなにかしあはせと思つたらう。拙なきは君のみではない、われればかりではないと思へと、かゝる悲しみの中をゆくとも知らであゆみ來し、姉と妹の道がうらめしかつた。

「綠の蔭は深かつた、大きな黒ばくのかげに、ダアリヤが咲いてゐた、姉さんはその石の脇にかゞんで鳩のやうに泣いていらしつたのです。」

私は眉秀でたる若き君のほのかに面あかめて怒れる顔を仰ぎみるに忍びなかつた。

悲愁は近づけど、――歡樂と幸福は夢に見るさへ稀になりゆく人の世に、弱き力ともろき命を與へられた女に、私も生れたのが涙ぐまれる。姉の上に起つた心うたるゝローマンスを耳にしては、ながゝるべき御命の此後の御幸をこそと心から祈るのだけれど……。

……「他人の爲に結婚する勿れ。われは人なり女なり、この身、この心何人も左右すべからず。汝何の爲に、をとめの世を捨つる。」と鋭き刄は又しても胸をえぐる。握られたるゆくての曇り知られぬ恐れをのゝく子の力なき手と疲れた身とをいたはりたすけて導く君あらばと思へど、……冷たき人の目は永久に熱をもたず、唇に浮ぶはあざけりのみであらう。

あゝ、私も遂に嘲笑をあびせられる身である。苦しき惱みは人も知らずに……。純潔を守り得ぬいくぢなき子はわれも立つて踊りたいけれど、徒らなる人妻の誇をもつ女には、冷やかな目を投げるけれど、處女の誇の永久に續くものでない世に、生れたのが、女と生れたのが、私も不幸なのであつた。

大なる使命のもとに生れた身を、かぎりなき幸を誇りうとするのさへ――自己の力をより以上にみせ、寂しみをおほはんとする切ない虚飾であるかとさへうたがふ。

軟かき兩の乳房を、荒々しい手で、力強くかきさぐられる如な恐怖と苦痛は一ときも去らず、厭き苦しき世をわづかの事にも目をうるませて恐れながら慄へながら、をぢをぢと進みゆく始の弱々しい姿が、人にはいたいたしくうつらないのだらうか、男と云はず、女といはず、多くの人の鷹の如な鋭い目で少しも見逃すまいとにらまれて。

七擒八縱

張三、李四、

△昔の娘、木曾月見草、昔娘だつた人を汽車の窓に見て、花束を放りつけて、娘さん變らぬ妹でござんする十年百年一千年今日を最後にいつ迄も逢へぬとて、としはとしはあなたの妹でございます」と相手が武夫さんだと芝居にもなる人だが△若きなやみ、鳥取夕美香、胸がかきむしられる程戀しい兄さん、それが兄さんであるとは受取れぬし、ヒトの事は嗇いたつて詰りません△逸題、神田古海しずえ、落葉の上をピヨロ〳〵した木影がまよを△行方、岡山桃の村女、一しよに逃げよと言はれてよう逃げなんだ爲行方不明になつた男をおもふもの、△其夜の夢、本所花びし、逢ふまじき人に不圖逢つた、嚙締た唇は二點の紅となつてハンケチに血のあとを印してゐる、其夜見しは其人の夢でもなくなつかしき友の夢でもなく恐しい馬の夢だつた、凡これ位ふるつてる文章も無いでせう△佛人、大宮桂の花、其頃私はよく胃出血をしました君はそれで平氣なのか聡くなア君は死ぬぜ」君は死ぬぜと俯いでゐる私を覗き〳〵したS先生…あゝ私はまだ生きてる…」死は一切をはらしむ、醫師なるS氏の言が驗あるものならば夜雨も長からぬ命である、況んや惡戀やうやく積りて蔦々自ら生くるの望みなきをや△土鼠、横濱たけし、早くより生母の手より放たれて人となれる身は悲しく寂しく冷たい心の女となつた、肝生みの母、地もぐりのかゝとを嚙むと夢みけむわれを逐ひつる母のくるしみ△人の家にて、若松百合世、既來何苦不須臾繰綳悠揚遜滅亡、去哥迹今來何進、是耶非耶雨不知の詩があけてある、學者らしいからうつかり批もうてない△わが愁、鳥取田中春、夕にゆう、消されたきえされ青白きにあをしらき、分たんにわかんのふりがなあり△聽講、德山若菜いやでもあらうが辛からうがたつた一言親樣といつて安心さしてくれ、いゝかなつ皆さん如來樣はこれ程迄にして逃廻る衆生を追てゐなさるのだぞつ」たつた一言…とは如來樣大芝居ならずや、名木千代萩そこ退けに候△洗濯、土佐あや、病た付き、足袋が五束、痒い處に手の屆く、正后の光。名句如山、△別るゝ汀、下谷米香、須磨寺の門前で笛のねを聞いた、海に浮ぶ白雲を仰いで、雲よお前も浦鹽へ行くのかいと結んである、ロマンチツクは餘程の手腕がいります△追分、岩見濱清川強、海の遠鳴が松前追分の欲のふしに聞えるのが餘りに神秘である△宅巷のおもしに、美作いさ、それで重しの足りない時はあなたが上つておいでなさいと講習會の敎師に言はれたとかで大いに憤慨してゐる、澤庵を宅巷と敎へる先生も先生なれど、若いお嫁入前の娘さんをたくあん漬のおもしにしようといふは、よしんば尻餅をつくのは上手にしてからが全く無禮です△從妹へ、茨城田村はつ、男ぶりが氣にいらぬとじぶくる從妹に、××は大家なんだから行く方がいゝと情を盡し理をつくせるもの、しかし平凡は困る△妙な女、下谷石非まこと、森ヶ崎へ行つたら友が尋ねて來た。敵本主義で友は實は同宿の江戸子の室に夜を明して去つた、平氣なる女よ、つかはれ菜もせぬダシ△書きたくて書けぬ私、備中大西ちとせふりさうもない雨がふつたからとて時候の間違を天つ神に申込まうとある、無線電信は布哇へすらきかず況んや天帝の高御座においてをや△掛川八景、貞水ときは御前を貞烈世に稀なるといふは考物でせう、尤其操を賣つたのは操を全うせんが爲だとあるが常磐が淸盛の意に從つた爲に今若乙若牛若の三人が死を宥されたといふのが事實とすれば、賴朝範賴其他多くの兄弟はどうして斬られなかつたでせう、賴朝は尾張の名家大宮司氏の出である、靜や常磐や氏素性なき賣笑婦と違ふ、それですら平氏は手をつけなんだぢやございませんか△珍客、山口卯の花、米國に渡れる友の仔細ありて歸れるに逢ふ、どちらもお禿しだから上つ面も上つ面どこを撫でたのかわからず△意外、水口鈴蘭、友の轉勤を意外がつてるけれど、私はこの人の文章のかねて聞いてゐたよりは拙いのに驚いた、今まで怠けてゐたせいでせう△追はれし果、佐渡草巷、紀ノ川の河原に立つて人と別れを惜めるもの、紀ノ川は名の示す如く紀伊の川でせうが今宵限の旅人夕は夜土の群に入て我は行かん北の海へがわからぬ、まさか夜にのつて太平洋から日本海へ渡つたのではないでせう、國子に乘過

るからえて失敗するのです△友、王子高木たか、荒川の岸でせい子さんと泣いてゐたら通りがゝりの職人らしいのが何がそんなに悲しいんだこの頃は女どうしの心中がはやるからそこらで川へ飛込んぢやいけねえぜといはれた△狂女、姫路九十子、氣が狂つてまでも其の戀人にふみを書いてくれと自分を呼んでる女を書けり、氣がちがつてゐるのを氣がちがつてるとしか言はないから何にもならないそれから九十子くそ子とは妙なお名前ですね、ごめんなさい△塑像、佐賀花の栞、あれ〳〵それ〳〵おゝ〳〵あゝ〳〵。これは病人がマドンナだやらそれとも戀人だやら何だか知れぬ塑像にうなされてゐる堅です△月光、大分みね子、月光に浴びて夢の如き大野の露を踏んだ女と、子を生ある時軒の穢よりさし入る月光に其顔を照し見て祝福した若い母と二人はおなじ人であらうか、それともさきの女は今膝を斂めて縁に坐せる作者とおなじ君であらうか、いづれにもせよ、めでたきは蒼茫たる月光に托した神秘的物語である。月を假りて多少人をおどかす氣味も無いではないが、この君到底池中の物ならず△夜、京都廣江曉子、センチメンタルに過るを告むる勿れ、この人はまことに苦しめる也、建禮門院の榮華は夢にも見まじけれど、京の人なれば美しうはおはすべし、尼になりて大原に籠れる味氣無さは知らず、隘巷にかくれて庇を洩るゝ月光に平語を繙くやさしさを見よ、かつて此君を高工の生徒なりと告げたる女人ありき、いづくんぞ知らんこの君の心に火の鞭をあたへて遠く東に去りし詩人あり、湖國の霞茫乎として比叡の山夢のごとき夜、さびしきうたは薄命の人によりてうたはれん、豈月にのみ流るゝ涙ならんや△宵の片町、金澤中崎お京、たゞ散歩を散歩と書いたゞけでは誰が見誰が感じ誰が思つたのかわからない、十二から自由な生活をつゞけた浪花の里もお煙草の頃跡や歌で尊した名越もの名越は餘波の積りだらう、字ではナゴシナゴヤと立派な地名になつてゐます△去行く人、信濃世良田優子、白桔梗を求めんと花市をさまよひつゝ不圖逢つた友の言葉だにかけずなれるを悲んで、蟲が鳴いて風が冷たい、今宵遠く筑波根人のなやみを思つた天の川がはつきり見ゆるまで縁に泣いたとあつた、詩人に背ける某々は知らるゝ如く今も女子文壇におく面なく出てゐる、そしてそれをじつと見てゐるのだから友に背かれたやうな小さな怒りではない……しかしそれもこれもあの男が不遜なのである、しかしもう人をうらむことはあるまいと思ひます△病室にて、札幌茅夕、今死なうとする病人の着物を取りに家へ歸るのは有りうべきことでせうか、足を病んでたつた一週間で死ぬといふのも受取れぬ、切烈なる胸痛など、拙劣ならずや△火の鞭に、麻布八雲學、多少の熱七分の嗔目三分の衒耀、女なる哉△李、米澤はゝづき、期待ます〳〵しるしあり、ひいき目で見ずともすぐれた文章たといふことは否定されぬ、癖は外の人が皆持つてるやうにこの人にもある、ソツト、テツキリ、ハツト、スツクリ、コソコソなどわづらはしいほどよく使ふ、しかし幼き目にうつる窓からの青空の色を描いて、それを李の色に照應せしめたあたりは水際立つてるといふよりもズバ拔けてゐる△兄さまとり、神戸みどり、兄さんのとこへよく女の方から手紙が來た、端葉書へ兄さまなんてかいてあると腹が立つ、兄さまどろぼうよ」私は父子の愛も夫婦の情も知つてはゐるが妹が無いので妹の可愛さだけは知らない、兄さん兄さんも河岡湖風に甘つたれたなにがしの似而非才媛のやうなのは眞平也、この眞平はシンペイと訓む事、心配だらうぢやありませんか、口質は千も萬もあらうけれど、まことは法師の所謂男はしさの戯れである、私の妹が外の男を兄さんなんて言へばタスケテオキマセン△琵月、茨城浮舟、月がかくれた、灯をふきけして十三紅をかきならしたとある、夜雨君の緣家ださうだから惡る口は愼みたいのだけれど、月もかくれた灯もきえたその眞暗な中でよく十三絃の琴が見えましたこと、但ムーンライトといふのはメダマライトの間違で暗の中でも眼光炯々として十三本の絃が見えたといふのですか。まさか目しひた時の用意でもないでせう。矢口さんいゝ事を敎へよう、あなたは若杉はま子さんと同じ土地に生れて同じ學校に學んだ方でせう、昔利かん坊のはまちやんと喧嘩したことさへ書いてごらんなさい△いかり、若松百合世、父らしき人より心操を疑はれたるを怒りて激越なる情緒を文字に托してかき送れるもの、アドレッスの××といふが父とすれば嗚咽なほこれより甚しかるべき筈である、且父ならば膝下に呼んで詰問するだらう、壯亦典雅の候文で情を訴ふるもいかゞあらんか、侮辱は父と雖も加ふべからず、君いからば何ぞ直に其膝に縋りて告訴せざる、吁長かりし十八年の夢、この行先はそも如何などは打こはしなり▲お榮さん、岡山中西りか、こんぐらかつた話なので中々

のみこめない、よみ返せばわかるかとも思ふが第一印象で讀者を失望させては損でせう、奥さんは姉さんなのかこの人なのか、どうして又お榮さんと知合になつたか△屋根の草、小石川しづ香、屋根のペンペン草をあはれむ、おひたちを書けばよかつたに△死の影、横濱彩羽、友の病めるを訪ひて、往年鎌倉の海で死んだ兄を思つた記、Sweet dream の絶えない世だから海の底に沈める兄さまは Sweet and nice dream を人一杯見て下さいとある、私のやうな英語のよめない者は恐入つて評も何もできません海の底ではスヰートドリ云ふところではあるまい、鹹辛い夢にむせてゐるでせう。

＊　＊　＊　＊

大阪の趣味

嘗つて島村抱月氏が大阪を評した通り、東京には既に憧憬の的となつて遠い過去に過ぎ去さつた所謂江戸趣味、其の江戸趣味に對すべき大阪の京阪趣味とも云ふべきものは、まだ過去のものとならずに、生々として現代の空氣を形成して居る。江戸趣味は既に歴史的懐古のものだが京阪趣味は現世的活動のものである是れと同じく東京の女は既に時代錯誤になつて居るが京都大阪の女は舊日本の社會が硏きあげた光澤を輝かせて居る。生きた傳説の女である。

それは種々な年中行事の際などに特に彰れて來る。僕が大阪に來てから略一年半ばになるが始めて觀た昨年の天滿の天神祭の情趣の如何に舊日本的な色彩に富むで居るかは今までも深く刻まれた印象の鮮明なのに驚かれる。東京における兩國の川開などは江戸的ならずして東京的になつて居り、強いて江戸的なるものを憧憬して始めて情趣の滿ちて來るのを覺えるのであるが大阪の天神祭に憧憬はない。直接に端的に僕等の情趣が滿ち滿ちて來る。是れはノラやマグダやを演じても東京では之を問題の眼を以つて迎へ大阪では驚異の眼を以て迎へるにも見られる。

七月廿五日の天神祭―、昨年の梅雨晴であつた。鬼灯提灯や岐阜提灯が堅固な大阪の家々によく相應して夕方東方に微かに懸つた虹の消えると同時に夢の樣な光を投げはじめた。川をおりる大皷船の中には、騎士の冠るやうな赤い兜…それはかの白秋君の詩集にある『緋のだんだらの尖帽の』と云つた樣なのをかぶつて大皷をうつ。大篝船は四隅に笹を樹て、七五三を飾り神鉾、御旗、牛童、鳳輦、蕭々と續けば囃したてた地車の響と共に拍手は急霰の如くに聞かれる。斯ういふ空氣の間に久榮講の御菅蓋、松風講の流花傘、など出て來る。中にも新町から出した八乙女、扮裝は白麻の一重離袖の小袖に無地精巧織の緋の袴を穿ち竹網代の常磐笠を頂き、金地梅花模樣、銀地瓢模樣丹骨の扇子を手にして、赤地錦の御守を肩にかけ、紫紺の羽二重足袋に、藺の三枚重ね小櫻皮の鼻緒付けた草履を穿いて歩む有樣を見て、僕は思はずも大阪なる哉と心の躍るを覺えた。ウヰルキンソンやラッカー博士の京都女はいざ知らず、僕は京の大夫の道中と云ひ、大阪の斯う云ふ女と云ひ、京阪趣味の生きた現代の中心の興味であると思ふ。東京に居て深川趣味なるものに俠斜の心をやつた後ならば、須く一年を京阪に送れと云ふに躊躇しない。（あさどり）



詩

河井酔茗選

はぐれし心

豊後　吉田夕草

そして私の心はもう何者も求め様と
しなくなつた、地の哀愁に哭き叫ぶ
鋭どき音響も——日かげの花の、苦
しげな息づかひも——たゞ目で見て
脳の或る一部に傳へるのみ
——更にあはれとも
何とも思はない

からくり人形の様に……人に
あやつられ〳〵て
ひと日〳〵を送つてゆく……自分が
あはれで、可愛想で、仕方がないけ
れど——さて、どうしようと言ても
仕方がない
私は思ふ。
私に!!!
若し私に!!
いゝえ、私の家に——地位と——財
産と——名譽——とが……なかつた
ら……と
——切に思ふ——
八月の午後は——今の私の心を
げら〳〵と嘲笑ふ
まあ、にくらしい、いやらしい
あの表情?
……………
そしたら私も——かうまで
はぐれた——ひねくれた——女には
ならなかつたものを?
あれあの凄い笑ひした地位が——
おそろしい目した財産が——名譽が
——三方から私を責める——
——責める——（地賞）

若き日の心なるかな。（評）

○病める月光

筑紫　饒子

生白く病めるが如き月光はひそかに
も忍び來て窓に倚れる女の顔を青く
てらせり
花瓦斯の色美しき夜の町、店頭の蓄
音器さへをかしき曲を奏する、行人
は胡蝶の如く舞ひ狂ひ〳〵つゝ消え
て行く、その白きつばさにうつろふ
火影に目くるめく女は惚然と眼のみ
きつと張りて、何を見るらん淋しき
顔よ。
月光はその生白き腕もて、うなじの
あたり、腰のあたり、優しうもかい
抱きてあり。女よ知れるや——（人賞）

見かたは好い。（評）

○河の響

信濃　夜司子

濡れ衣の被衣した美女の
そが薄絹の柴の隙より
かいま見し絲の黑髮
そのなつかしき色に似て
靜かに流れよる朝靄に佇める山の姿

はづかし人に對居か
薄絹に被して面伏な其姿
そと瞳あげて盜見する初心な少女の樣な其姿
つゝましやかな女のやさしい影に似たる姿よ

紫はやゝに濃く
森の遠きはおぼろげな寫し繪の 如くかすかにも
うすれゆく
あゝ濃き霧の下に
萬象の死したる如き沈默はつゞけり
しばし忘れて立ちよどむ空氣を
かすかにふさはしとふと聞ゆる低き低き響
底知れぬ深井の底の底を流れる河の響
悲しき歔欷きのしのび聲に似て
あやしく我額にふるへ入る
夢よりさめし我靈の
ふるへをのゝきよ
曉の日の出前の其一時

力の入れどころが少し違ふ、此作をつまらぬと云ふのではないが、舊い思想と、新しい思想とが、混交して如何にもつぎはぎしたもののやうでをかしい。(評)

○木蔭の百合

靜岡　石垣靜子

少女子は
花が咲いたら
蝶が來るだらうと思つて
木の蔭に
紅い花の百合を植ゑた

花は咲いた
もう今日で五日目だ
少女は毎日眺めてゐた
――が蝶は、只の一度も來なかつた
そして、其の日の夕
黑い闇が包まうとしたとき
ほろり、ほろりと、涙の落ちる如かすかに薄闇をはうて、一片づゝ、百合は崩れた。

雜念のない無邪氣な詩だ。(評)

○誘惑

本所　汀子

彼の意地惡な
夏の西日が――氣味宜さ想だ
夕闇に迫られ
後の山に沈み入らうとする。
折しも
机の上に面伏せて
迷想する私の耳に
ピユーツと――聞ゆる!!!
何だらう?口笛!
誰だらう?裏庭の方……
何日私を迷はして
果敢なき夢に
泣かしめし
彼麼人ではないかしら?
誰が呼ぶとて
行くものか。
闇路に描れた黑い人!
オヽ……あなたは何用で
私を呼びに來ましたか。
答へは唯――思ひ出した樣に鳴る
口笛の音ばかり。
何となしに
寂しさと苦しさが胸に沁みる。

心持は能く表はれてゐる。(評)

○ふたつの花

高知　藤村紫華子

浦若い少女の胸をめぐつてゐる血潮の如に眞紅な太陽は地平の彼方に消えて行く……
尺八の聞こゆる小窓から
淡ぼんやりとさして來る
夢の光を全身に浴て
眞暗な――暗の中で
白い花は震へてゐる
黃色い花は泣てゐる
私の心はふるへてゐる
而し私は泣てゐる
自から戀を捨た罪の子は白と黃との二つの花を
冷たい胸にいだきしめ
光明の斷た暗黑を迷つて迷つて迷ひ泣かふ

○我心の悲愁

千葉　花蝶子

もの想ふわれ悲し
胸の血は波立つ
我神經は顫ひ
我胸は悶えつ
彼方より吹きくる風生ぬるく
夏の夕日を背にうけて
丘にたゝずむ
あゝ思ひ出多き梅ケ丘よ
君と愛を語りしもこの丘よ
破れしもこの丘よ
夕日消え行く彼方に
せめて心をなぐさめれど
淋しさは依然として變らぬ
今日も梅ケ丘の空はくもりぬ
なやましげに立つ我姿よ
やるせなき過去の涙よ
辛き追憶よ

○奇しき靈感

周防　若葉

このころかすかに衰え、仄かなる夕暗にうなだれてあればいみじうも湧く靈感よ

柔かきうす紫の霧、いとおほらかにしも

わが周圍をとりまけば、わが吐く息の一つ一つ

ひたとこの胸に兩手をやれば、そこの血潮朱の

圓かなる弧を描きつゝ、ほの甘き香に
そこはかとなく翳りてぞゆく



湯段の月　失名子

海ひさゝらさゞ波深ふごとく
いとゆるやかにおだやかにもの なつかしき音に流てぞゆく。かくてあえかなる世の一切の色はあたゝかき潤澤もつ瞳にこれを招き、めでたき一切の物の音は、しめやかなる韻もつ唇にわれを呼びぬ。あはれ奇しきこの靈感よ、そは錦繍の床の秋の夜の寂ざめに覺ゆる、美しき悲哀といふか——あらぬか——あらぬか——とまれ我はわが心身の、あらゆるすべてを投げ出すべければ、たらちねの乳房に縋るゝ夢心地のなつかしみある汝が懷に、永遠に——永遠に——眠らしめずや…

○蟋蟀の鳴く夜

千葉　あららぎ

しと、しと、と
雨はふる、雨は降る
可愛小萩が花をぬらして
私の淋しい思出をぬらして
しのび泣くよに雨はふる
なぜ今夜はこんなに淋しいだらうね
あれまた蟋蟀が
あのやさしい小萩の下で
あの悲しい淋しい聲で　コロコロコロと
いつまでもいつまでも鳴き續けて行く
もう。もう、蟋蟀
鳴かないでお呉れ
私の虛な心は
おまへの悲しい聲と

むせびなくよな秋雨とて。
充されてしまつたの
なぜこんな夜こんなに淋しいだらうね。
むせびなくよに雨は降る
悲しい聲でこほろぎはなく。

○蟲泣く野にて

羽前國　長澤美也子

焼くが如き夏の日は落ちてより――しばし――
草深き野に立ちて蟲の音を聞きし其の時
我が心は顫ひて――靜に笑みぬ
邪なき少女の心の如
圓やかなる葉月の月は
蟲泣く原に照り返す。
あゝ我が弱きハートよ
人なき所を此の上もなく
好めるなり――か弱きを見て……
幾多の魔は襲ひ來れど
防ぐものなし
すがるべきたしかな道もなし
我は只此の暗き心を
月に訴へ蟲に訴ふるのみ
こほろぎは泣く――

○寺院の薄暮

越後　白菊子

疲れし日　しめやかにこそ

暮れかゝる　山の小寺の
屋上の　薄暮の一時
何處より　漂ひ來るや
夕暮の　悲しき色
その中を　響き渡りて
鐘は鳴る――
鐘は鳴る　更に鐘り響く
やはらかき　餘韻のしづく
しかすがに　何ともわかぬ
哀愁や
聖燭の　光青白く
聖壇の　沈默
しづ／＼と　入り來る僧侶
うちなびく　法衣の裾
ゆるやけき　讀經の節

○夏の頃

稻子

赤い苺の珠のやうに
美しい思ひ出よ
ほの青いあけがたの
空氣の中にふるへてゐる月見草のやうに
やさしいはかない私の思ひ出よ
現實の苦惱に疲れた胸の片隅から
汝の姿を見出でた時
私の心は美しい夢の國に蘇る
濕つた空氣の中を通して

泣くやうに囁ぶやうに
響いてくる氣笛の音の懷しさ……
葉蔭に物思ふ青い無花果か
冷い渚の紅色の小貝か
やるせない此のなつかしさよ――
緑の木蔭に眠つてゐる
ゴールドの髮の兒の美しさ
白いレースの胸飾に――
水色の洋服に――
軟い髮をなぶる微風に
私の思ひはゆれてゐる……
ホト／＼と熟れて落ちる楊梅か
眞白い乳房の柔かみか
あまへたいやうな
なきたいやうな
私の思ひ出のやるせなさ――

○青葉

神戸　なでしこ

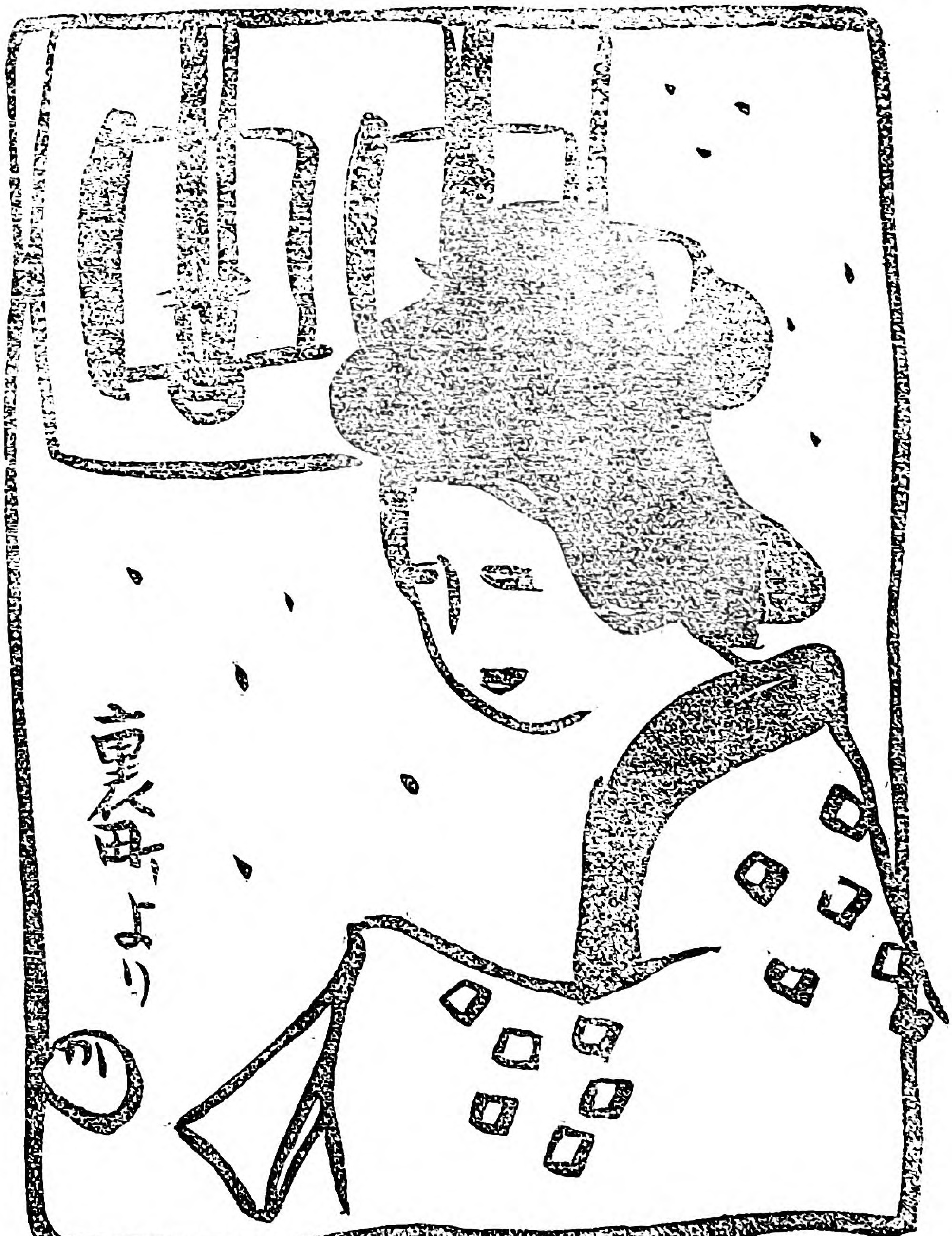
庭の木の葉よ
お前はなぜそんなに泣くのか
何がそんなにかなしいのか
さあ私にも行かしておくれ
木の葉よ私も悲しいいつしよになつて泣きたい
のよ
うるさい浮世にからまる千すぢの糸は
たうとう私の命の樹をかくしてしまつた
一重へだてた夢の國へ
とりのこされて私は毎日泣いてゐる

木の葉よ
お前は何を泣くのか
亂れ亂るゝ雨の糸になやまさ
れるのかはたそれがうれしい
のか
よう私にだけきかしておくれ
あれあんなに身をふるはして
泣くよ大きな涙をぽろ〳〵と
こぼして

○雨

横須直子

雨
靜かな雨
青き芝に赤き家に輕き其歩調
やさしき小歌。
窓の赤き花はほゝ笑み
青き葉は恍乎と聽く
白き窓掛のうちに黑きピアノ
に
少女は眠る。
雨、
靜かな雨！



裏町より　淺草　石川一枝



自然（散文）　編輯局選

○初秋

伏見　病葉

今日は單衣を着てゐる。氣持が堪らなくいゝ。

私はそゞろに勞れて、雜草の中の少し崩れた木柵へしづかに倚つた。凝として居てもグラ〳〵する如で頼りない。

此處は町外れ……？　柵の内には、荒い土の中に赤い毛を吐いた唐もろこしのひよろ〳〵延びた畑がある。大きな石を乘せて密閉してある古井戸がある。其の井戸は全部荒い石を積んで築いてあるのでその裾の方は最うしだらなく崩れて、ころがつて、薄紫の花をつけた螢草が痛ましくも敷きにじられたのが、石のあはひあはひからはみ出してゐる。繩屑や蟲の着いた柿等も其の邊りに散らばつてゐる。

邊りは、薄黃なさゝやかな果實を鈴成りに着けた蔓草が縱橫に纏らみ亂れて、木立にも草叢にもフワ〳〵と蜘蛛の巢が光つてゐる、紫の小さい蝶を一つ囚らへたかなり廣く張つた巢が斜に射す夕陽を受けて七色に有るともわからぬ程の微風に輝き閃めく……？　木立の幹や土に亂倒せるあらゆる陰影には、云ひ知れぬさびしさが潜んでゐる。

ふと、何やらしづかに流れる幻が瞳にうつつた。見るとそれは、青黑いとほすみ蜻蛉がス……ス……と淀みなく辷るやうに飛んで草から草へ渡つてゐるのであつた。何處かでこほろぎが啼いてゐる、他に物音も無い。

直ぐ前は川になつてゐる。私はつと柵を放れて、洗濯するに都合のよさゝうなだら〳〵と土の凹んだ先に据はつてる石の、グラ〳〵したのを踏んで、水際へかがんだ。

對ふの岸にも此方の岸にもみつしりと蘆が茂つて靜かに、靜かに、囁き交はしてゐる。

しんみりと青い中から半ばはみ出して傍に蛇籠が在る。その邊りの水は、キリ〳〵と、小さく渦を卷いてゐる。水打ち際にはチヨロ〳〵と黑い小魚が寄せては

ちきに見えなくなつて了ふ。

水面は鉛色に輝いて、すぐ目の前だけが薄黃い——に何處ともなき夕空の色をとゞめてゐる。

歸らうとしてくびすを返した刹那、何處からか飛び來たつた石ころが、カチンと、後の木立の幹を打つてどこかへ消えて了つた。（天賞）

初秋の自然が忠實に描かれてある、際立つて才氣が閃いて居るといふではなく、自づとつゝましやかな眼で觀て居るといふところに、女性らしい弱さがあつて、一入ものあはれに思はせる、佳作だ。（評）

○照りつゞき

金澤　松田たま子

ふつと眼がさめた時は、もう明るくなつた室にものものしくつられた蚊帳が間抜けて見えた、あかるみは嚴しく雨戶に迫つて、今日もまたお天氣。うんざりしてしまつた。二三日前の新聞に「高氣壓は…………一體に晴天をつゞけ所々に驟雨あるべく……。」とあつたのでその驟雨が此地にもあれと願つた處、昨日の夕方はるかに雷の音を聞いたから、そら明日は雨だと植木の水も好加減にして置いたのに……。

お隣りではもう子供が起きて騷いで居る、金魚が二つ出て居るとか三つ見えるとか云つて居る。涼しい葉陰の池にスイ／＼と朝からおよぎ遊ぶ金魚こそ果報者私達は今日も又終日汗みづくになつて張物やら干物やら……。

流しに立つ私を、垣越しに、干物しながらチラと見た裏の家のお內儀さんに一寸會釋すると、「御免遊ばせ」と肌ぬぎの肩をすぼめた、見る方が却つて氣まりの惡るい思ひがされる。でも私も、熱い時はなりもふりもあつたものでないとあつて、まはりをつめた束髮にがんぢやうな束髮櫛は、煩さくさがる後れ毛を時々かき上げるためである、ツンツルテンにはしよつた着物に、昨日洗つて糊てわ／＼の白前垂姿、張物の切れとふのりの溶いたのを緣側にもち出して、カン／＼と照りかへる庭を見ると、もう全身の汗が皮膚を流れる。

三枚の張板を日向に並べて一先づうちに入る、座敷では母が、幾つもの衣紋かけに、もみ裏の着物をかけて、彼方此方につるして居る、斜に張つたなわには未だ何もかゝつて居ない。

人は蟲干を樂しみだといふ、私はかうして紅紫とり／＼のきぬを亂した、女の着物の土用干を何だか氣恥かしく思ふ。

蟬時雨ふる眞晝間は一入の暑さではあるが、時々寄

せる涼風になだめられて、する事だけは何れして仕舞はなければかたがついてゆかぬ。

終日の汗と疲れを行水に流して、團扇を持つて縁にひざをくづす頃、きまりで隣家の吉ちやんが第何課何々と大きな聲で、節をつけて本をさらふ。

いくら堀つても土は白くかわいて居ようと思はれる程の照りつゞき、花壇に水をどつさり遣つた。(地賞)

整つた書き方だが、うまみが乏しい。(評)

○明るい國

紀伊　林口和歌

くつきりと午後の太陽は、川向へ移つて了つた。さながら、明るい國と、暗い國との區別を、川でつけた樣に――。縁側に立つて見て居ると、明るい國の殊にかつと太陽の照りつける方面で、銅色の背中を、惜しげもなく日に向けて、肉桂の根を掘つて居る、振上げる度に、唐鍬の先がキラリと光る、三人交る〳〵振上げたり下したりするので、キラ〳〵ッ、キラ〳〵ッ、と引つきりなしにやる、じつと見て居ると、稲妻の樣だ。

すぐ上の密柑畑で、草引して居るのは、お秀さんだらう、白い姉樣かぶりが、葉隠れにチラ〳〵見える。

行儀よく松の並んだ山際の、それに沿ふた街道を、馬や人が上つて行く。フー〳〵と吹く馬の白い息や、手拭を鷲づかみにして、汗を拭いてる人の樣子が、見える、街道を上りつめた頂の、杉山のこんもりした間から、白い煙が氣持よくゆら〳〵と立上る。でもあの煙の下では、火が燃えてるのだと思ふと、いやに熱苦しい感を與へる、青い杉の上へ、白雲が流れる樣にすうつ〳〵と、上つては後から〳〵と立上る。石炭を燒いてゐるのだ。

最前大きな籠を荷つて買ひに行つた隣の人達も、田圃へ入れに行つて居る、入れる度に白い粉がパッと立つ。

一昨日の夕立で、稲が蘇生つた樣に、青々して來たとの田もゆつたりと、水が溜つてゝ嬉しい。「これで、ひどい風が來なんだらお米も少しは下るだらう」と、お父樣が話してた。雨で、土が柔いうちにと、大勢畑へ出て居る。珍しい向ふのお母樣もお芋の蔓さしに行つて居る。畔に踞つて、赤坊に乳を呑まして居るのは、嫁樣だらう。健兄さんの五重塔見たいな帽子が、身體につれて動く。

太陽はもう川を越して、大きな枇杷の木の、五つ六

つ殘つた紅い實を照して居る。かうして明るい國はだん〴〵狹められて行く。（六月の日記より）（入賞）

特に明るい國らしい印象も見えないやうだが、描寫は確かだ。（評）

○涼しい色

信濃　百瀬美水

眞夏の暑い日盛り、私は川邊に咲いてゐる合歡の花を見に行つた。雜草の生ひ茂つた小川に沿つてゆくとちよろ〳〵と流れの音が小さく聞え、水はわづかに草の間から見えてゐるばかり、叢の中には、可愛い空色の帽子花が咲いてゐる。雜草にからまつて思ひのまゝはびこり咲き誇つてゐる晝顏の花を踏みながらゆけば、優し



宿屋の女　金澤露子

い美しい野菊の初花も見える。

畔道へ入ると、あるかなしの風に稻の葉がさら〳〵と鳴る。水田の中をのぞいてみると、金魚藻をくゞつて鯉子が遊んでゐる。畔には蓼の花が亂れ、畔豆の赤い花が咲き、ふわ〳〵と蝶々が舞つてゐる。

瀬音もたゝずにゆるく流れる川へ入つてゆくと、兩岸には、丈高く蘆がしげり、それにからまつて赤紫の蔓藤袴の花が咲き亂れ、水に映つて美しい。アカシヤと合歡の木が左岸に並んでゐる、紅に、ぱつとさいた合歡の花の美しさ、あるともない風にその絹房のやうなのがゆらぐ、私は仰いでじつとみとれた、たゞ美しさに、しばらくみとれてゐた。

川へ差し出て咲いてゐるねむの花の幾枝かを折つてまた蓼の畔を分けて歸つてきた。

庭木に圍まれた池、太藺が其まはりを取りまいて、茶色のさびしい花が咲き、青く見える水中に、緋鯉が靜に泳いでゐる。瓶へさし殘しの合歡の花を、この池の中へ入れると、葉も青く水も青く、水に濡れて花の紅のみいよ〳〵紅いのである。

夕暮近くなると、喧しく鳴いてゐたみん〳〵蟬の聲が止み、ひつそりとして、遠くの森からカナ〳〵といふ蜩の聲が聞えてくる。夜になると、垣根の草すぐりの白い花が月に照らされて、匂をあたりに漂はせる、池畔の木の下に、ひとり、たゝずんで青葉洩る月光を半面に浴びながら唱歌をうたつてゐると、池の上や庭木の間を、チラ〳〵と螢がとぶ。弱い〳〵光、消えてしまつて、また先方へ行つてかすかに光る。夢のやう。チラ〳〵チラ〳〵と。私は木の枝にゐるのをやつと手にとり、よくみればその小さいこと、ちやうど米つぶの位である。

美しいほど自然の恩寵を受けてゐる人の四圍だ、其まゝ再現はされて居るが、これだけの物を見ながら心がそれほど働いてゐないのを殘念とする。(評)

○夕　暮

大阪　小さき泉

緣拭く手を休めて、ふと空を仰いだ時、土藏の屋根を通して夕日はもう高い松の梢に薄れてゐた。一生懸命に拭きこんだ緣側は、日頃の丹精のあらはれて、二筋三筋後れ毛がかゝつた横貌を白くうつしてゐるのをちらと見た時、思はず微笑れた。

足下の庭石の傍に、あじさゐの圓い葉が重り合つて石の半を覆ふ計りにばあつと擴がつてゐる。稚い時分、よく下駄の葉、げたの葉と云つて、この大きな葉を採り莖ぐるみもぎ取つて、中央に穴をあけ莖を通して、下駄の樣にしてはいた。飯事などする時は、母にねだつてはかして貰つた朱い塗下駄も傍におしのけて、あじさゐの下駄をよくはいたものである。其下駄の葉は、餘りによく茂つて、庭石も蔽る計りになるので、邪魔になると云つては、紐でからげたりしてゐたが、それでも擴がつてな

らないので、石を蔭らす丈になると、直ぐ爺の手でばつさりと苅られて了ふのである。それが又思ひ切りよく僅に地から五寸計り殘して、葉も莖も苅つて了ふので、飯事の下駄を取られた私等は、坊主になつた其莖から、柔らかい若葉の出るのを樂しみに、段々大きく綠色の葉の黑ずんで行くのを待兼ねた。其頃、飯事の連だつた友の誰彼も、今はもう取つくらふたおとな姿に、あどけない昔の面影はないけれど、美しい惱みの多くなるにつれ、思ひ繁き胸の内にも時折は、幼い記憶も懷かしく湧くであらう。稚い日の思ひ出を忍ぶによき、其あじさゐは、年毎に、夏毎に縛られ、苅られして今猶、わが足下に蒼きまろき葉をのばしてゐる。

緣の前の手洗鉢の水を庭にまく。はら〳〵と輕く我手の動くまゝに小さな水珠は散る。ひよろ〳〵と高く伸びた八つ手の葉の、一枚一枚に杓の水をかけてやると、薄い塵の積つた葉の表は、美くしい鮮やかな綠色に輝いて行く。悉くの葉に水をかけをへて、汚れた葉の一枚も無くなつた時、ほつとした樣に杓の手をとめた。夕ぐれは室の隅からかけそめて庭に立つ足下もやゝ暗くなつてきた。

緣に腰かけたまゝ、かすかな風にも、ゆら〳〵とまたゝく岐阜提灯の灯を背にうけて、綠の色と夕暮の色のだん〳〵濃くなつて行くのを、見つめてゐる前に、細い薩摩杉の葉から、葉へ、キラリと白く露の珠がおちた。

奥深く籠つてゐる大阪邊の商家のお孃さんを想ふ。(評)

○夏の夕

静岡市　石垣靜子

夕陽が棟へ隱れたので裏はもう蔭つた、緣側から塀越に見ると北から東へかけてひろく連つた山々が見える、靑く茶の芽が夕陽が光つてゐる山の所々にはコンモリとした、小さい森がいくつもある、頂上からクツキリと仕切られた空には少し白い雲が浮いてゐる。雀の群がすぐ前の、田の中の森の上を走つて行つた、やかましく囀り乍ら……。

私は緣から庭下駄を穿いて下りた、庭には橙の木がこんもりとして、塀を出ること二尺ばかり、梅の木はもう靑い實もとられて、葉はしなえた色をしてゐる、其の前に二間程の長さの棚を三段拵へて、松や、もみぢ、欅、錦木等色々の鉢物を並べてある、これは父さんが樂みとしてゐる、一番下の段には朝顏が二十鉢ばかり粗末な瓦鉢に植ゑてある、夕顏もある、朝顏は今朝五輪程咲いた、白い大きいのが二輪、綠紫が一輪赤いのが一輪、飛白が一輪、明日の朝咲くのを數へると七つある、さぞ父さんが喜ぶだらうと思ふと、朝顏が懷しくなる。

先程の東の山を見ると、もう日の光りも薄くなつた、私は赤い襷を掛けてジョロに水を入れて、植木に水を掛けはじめた、これは私の毎日の勉である、水口を下げると幾筋も〳〵細く勢よく出る、一番下の段と中段はらくにかゝつた、……が上の段は高いので容易にかゝらぬ、根の所へ少しばかり掛つた、下の段の朝顏や、中段のもみぢ、ひば、錦木、萩などはよくかゝつて生々として、先程とは見違へるやうになつた、眺めてゐると思はず涼しさを感ずる。それに引きかへ上段の松はほこりで灰色氣のある樣な色をしてゐる、これだけはあとで父が掛けてくれる。水を掛けてしまつたので今度は、二十分ばかりかゝつて庭をすつかり掃いて水を撒いた、かうすると四邊が靜まつて落付がある、それが濟んだので湯に入つた、かう働いて汗ばんだ身體をあまり暑くない湯に入れるのは氣持の好いものである、肩まで沈んで身體を洗ふと懷かしい樣な若い血がをどる。

湯から出て緣側に來ると、父が上の段へ水を掛けて終つて涼んでゐる私も其の側に腰をかけた、湯上りのあたゝまつた身體に涼しい風が沁み入るので、たへられぬほど氣持がよい。

別に變つたこともない、何處の家も同じやうな夕暮を同じやうな文章で書いたばかりだ。(評)

○微風

筑後　栗山寬子

掃木の手をやめて、眼を上げると相變らず、あの飛形が美しい形を現はして居る。今朝始めて咲いた、朝鮮朝顏が、たつた一ツ眞紅な小さい花を南の方に、伏すやうにして咲いて居る。露を含んだ綠の葉が、かず

かに動いて、よべの露を少しづゝ、少しづゝ落して居る。

其竹にまつはる蔓の細さ?痛々しさ?

靜な朝である、何だか庭から畑にかけ、山にかけて、人家の遠い自分の家、樹木の多い私の家が、淋しくて堪らない。

晝間になると蟬もきてなく、百合の香焉ふ、揚羽の蝶もおとづれるけれど、朝は誠に靜である。

霧に包まれたやうな、東の方の森から、後に廻る竹林、南は田と畑と其果てが肥後と堺の山である。

山は美しい、其形は富士に似て居る。向つて左右になだらかに、幾里かの村々を坂になつて、末は坦々たる平野である。

其裾野を巡る川は、やがては有明海に注ぐといふ、砂の多い、石の多い、岩の多い川である。

物に倦んだ時、又は悲しい時、淋しい時、私はいつも後の丘に立つてこの山に對するのである。

机の前から見た時の低いのに較べて、丘に對する飛形は高い。薄藍色に、深緑色に、いくつかの襞(ヒダ)を疊んで、いくつかの、小さい峰を形造つて居る。

そして、其峰と峰との間から、樵夫が焚く煙が、訝しさ告ぐる人のたよりか、往々薄く〳〵累々として立ち昇る煙を見る事がある。

かの都の空に漲るどす黒い烟煙ならで、淡く〳〵夢のやうな其けむりは如何にも尊く、果敢なく、情ない。私は幾度やるせない胸を抱いて、其煙に對し、幾度止度ない涙に泣いたであらう。

今、うつとりと夢から醒めて「お早う」と、いふやうな其姿の尊さ、茜もさゝず、雲又なく、清々しくも純なる姿よ……あゝ?眼を遮つて鳥が過ぎた。

グア〳〵と、相呼應して啼く蛙の聲が、漸やく騒々しい晝間の活動を促すやう?

栗子の一葉、桃の一葉、吹くともなく風が渡つて黒ばんだ青い柿の果實が、我が立つ足許にどつさりと落ちた。

噫!!鳥が啼く、鳥が啼く、靜な朝は破られて、鷄頭の一株が、ホロリと眞玉の露を地にこぼした。微風は頰を辷つて、袖を翻つて、私は思はずほゝゑんだ。

通例の作。(評)

○牧草の花散る頃

北見　大出夢衣

北見と、根室の國境に、天空高く、そびえて居る、あの斜里岳には、まだ雪があると見えて、處々頂上から、中腹あたりへ掛けて、殘雪が、白い筋をなして、女の帶を引いたやうに見える。山麓の野は、早くも夏晩れんとして、見境もつかぬ大平野は、只暗緑の色まさるばかりである。この大廣野の中に、只一つ世に忘られたやうな、我の家は、今頃に成ると、丈高い秋草や、白樺の、コンモリ茂つた影に成つて、遠くからは屋根さへ見えぬ。玄關のガラス戸は、いつも眞つ青にそめられて居る、南に向つた廻り緣(えん)を繰つて臨くと、中庭越しに青草の、それは云ひやうのない香ひが室に流れ込む。障子や壁には、緣先から茂つた芒の影が、陽が西にまはると、ハツキリとうつる。緣先からそとは、もう牧草がやはらかに、生えた原になつてゐて、素足のまゝどこまでゞも行ける。つひ此間まで、朝起きると緣の草履をはいたまゝ、朝露にぬれながら、赤い星の散らばつたやうな車百合を尋ねて歩いたのが、もう萎れて了つたのか影さへ見えなかつた。夕方などは隨分涼しい風が吹いてくる。野つゞきに、遙か彼方の、今ついたばかりの、牧舍の灯を見ながら、此の緣に腰掛けて居ると、蟲の音がチヽロと、ごく近くで、迫るやうに聞えてくる、あゝもう蟲が鳴く、牧草の花も散つて了つたし、やがて野には秋風が吹いて、雜草はザワ〳〵と、そのゝく時がくるのであらう。

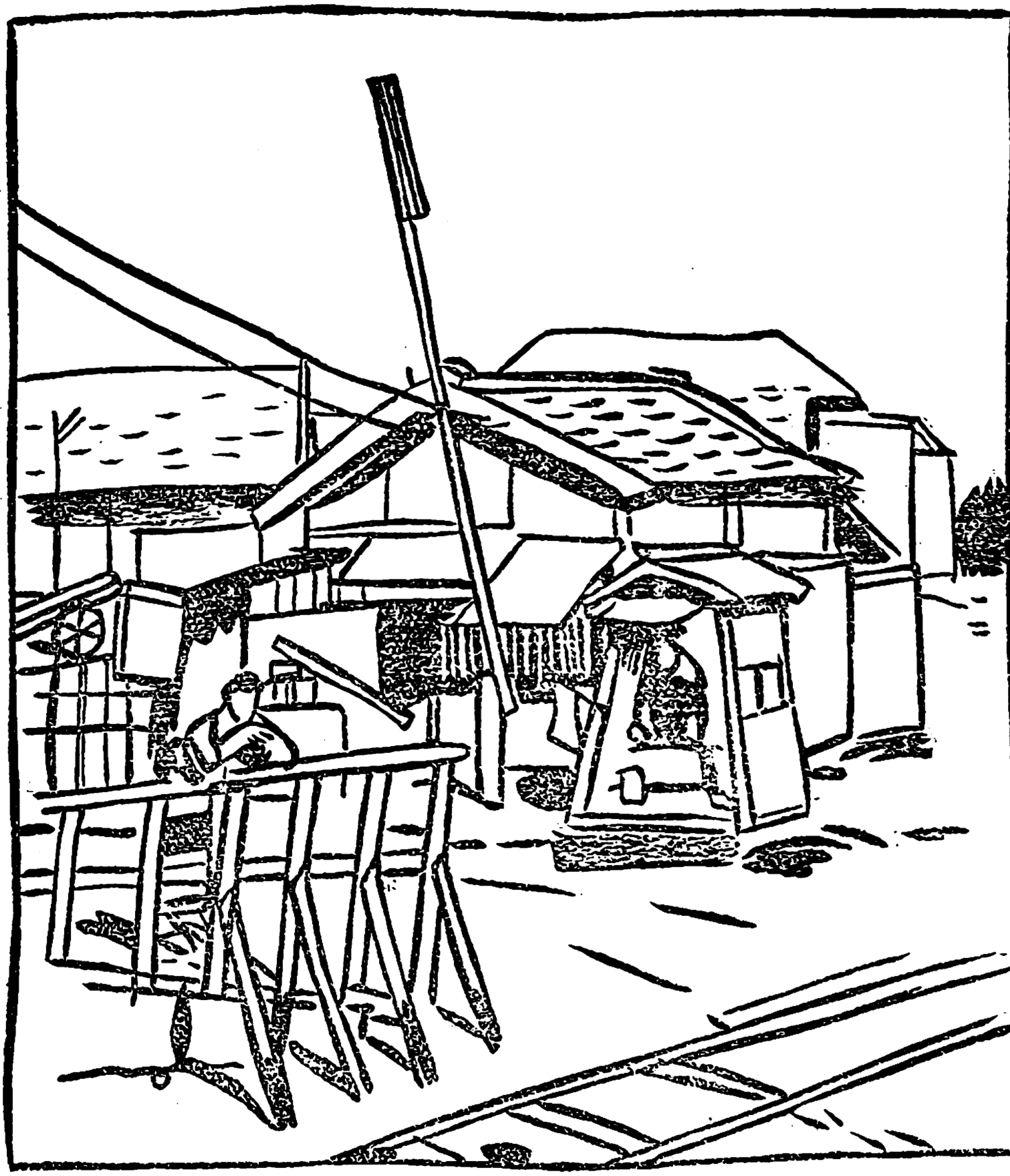
今少し北海道らしい印象がほしい。(評)

○朝の丘

千葉　伊東花蝶子

八月中旬の或日私は寢心地がいゝまゝに白い寢床（ベッド）の上に仰むきになつて硝子越しに庭の面を見ると朝顔の花が赤や紫やとり〴〵にまとうて咲いてゐる。五葉松の間から蒼空が見える、床を離れて寢衣のまゝ表へ出た、あてどもなく行く中に何時の間にか梅ケ丘にきてしまつた。夜露が降りて高い丘も草も木も、しつとりとしてゐるので呼吸する度に清々とする

私は山撫子や桔梗の間を露にぬれ乍ら一つ二つ摘んでゐると、桔梗の切目から白い乳汁がでる、幼い時祖母にたづねても何故出るのだか知らないと云つて私は泣いた事があつた、今思ふとをかしくて微笑ずには居られない、傍の熊笹に露の玉が恰度水面の樣で



踏切　　青山　　中村弘子

ある其間をぬけて柳の下の路へ來ると我村が一目に見える。

靜かに流れる下の小川、何年立ても變らぬ天地自然の平和な姿、流れる水面にも長閑な光りがさしチヨロチヨロと響く水の音もすゞしい。僅にやどる一雫の露にも日光が反射して七色に輝いてゐる、其の輝は昔も今も變らぬけれど私の今の心の變化われ乍ら恐れる程である、左の方を見渡すと富士の山がはつきりと見える。薄雲もなく微風もなき靜かな朝私はかうしてこの丘で無念無想にでけるのが好きで何時も朝はこゝにくる、こゝにくると

餓に安住の地を得た樣に心から天地自然に感謝する、やうやく其れに歸つた時、下の方で微かに聞ゆる銀笛の音、ゆるく、ゆるく、悲しげに、全身の肉、一片々々になつて離れ行く樣におもはん、無意識に歩くうちに足にからまる雜草のつるを手に取つた、つるは切れて乳色の血潮は傷口からふきでる。

イラ〳〵した私の神經は草の葉の露さへ恨めしくなつて意識を失ふ事へある。

けれど今朝の露はわが心には微温湯の如き刺戟であつた。

此位なら氣取ることも咎めるほどでない。(評)

○雨の日

若狹　長谷川英

細い霧の樣な雨が昨夜から引つきりなしに降つて來る、ネルの素肌のうすら寒く、癖の樣に胸をかき合せた時、手や足が冷たく、氣味の惡い程蒼白く〳〵又皺がよつて見えた。

しまつた袷を引き出してまで着るのも面倒臭く、寒いのも我慢して八釜敷世話をやく母に、「寒かないの」と言つた。併し實際は寒いのでそつとF樣を見ると、藍がゝつた袷に、襦袢をかさねて、おちつしやる。「お天氣だつたら」といふお約束だつたのにと思ひながら、私は、小さな手かごを、F樣は蛇の目の傘を持つて、畑へ出た。

白い露をのせた、青い小さな葉のかげに、珊瑚珠の樣なぐみの實は、これも露を含んで、赤くすきとほる樣に美くしい。その一つ一つのさきに、たまつてゐる、雫に、ちぎる指先が、染まりやしないかと思つた。

ちぎつては入れる、白い手から、赤い實が、左から右からと、かはるがはる籠の中へ。

自分の前のよりは外の枝のが、大きく、赤くおいしさうに見えて、あつちへまはり、こつちへまはりする、その度に、葉にたまつた露や、あかい實にたまつた露が、ほろ〳〵とこぼれて、つめたい足にかゝる。

高い枝を、たわませようと引つぱると、葉から葉へ葉から手へと、つたはつて、ふとつたうでに、幾筋かの線を引いて、腋まで流れる冷たさ思はず手を放すと、枝ははねて顔へぴつしやり、額から鼻から、と雫が流れる。

靜かな、細い雨の中に、藍色の袷のF樣と、白つぽいネルの私とが物も云はないで、時々、露に濡れた顔を見合しては、笑つて赤い赤いぐみの實を、右から左からと。

籠の中は、長い軸をつけた、あかい實が、だん〳〵と盛られて行く、

此君も多作の弊がある、多くよりも、少くて好い作が望ましい、因に云ふ、君の文章は句頭が多すぎて困る、句頭はむやみに切るべきものでない。(評)

○涼み臺

東京　ひさぎ

夏も末の或る夜、團扇片手に裏の涼み臺に腰を下ろした。私の足音に聲をとめた蟲が、未だ自分達の出る時ぢやないのだけれどもといつたやうに又かすかに鳴き出した、じつと耳をすますと、どこか遠くの方で、子供が彈いて居るのであらうポツン〳〵と切れぎれに三味線の音が聞える思はずもつり込まれて、自分も撥を持つて彈く眞似をしてみた。垣根一重へだてた大工の家からあかりがさしこんで居る今の姿を見られやしないかと思つて息をころしてのぞいてみたがそんな樣子もなく家の中には若い男が寢そべつて新聞を讀んで居た、ほつと息をついて無意識に團扇をとり上げたがぴたと胸へあてゝふしまつた。

横町の方から麻裏草履の音がぴたぴたと段々とそばへ寄つて來るほどあきらかに聞えて來る。それと同時にいきな端歌のひとふし……「のこ——る暑——さをツントンしのが——んとテンチン」と口三味線で……。あとは草履の音といつしよに遠くなつてしまつた湯歸りの人だらう、聞いて居ると涼み歸りの人の足音がぞろ〳〵通りすぎて行く。私は目をつぶつて一々それらの人を話し聲によつて想像しようとしたが段々とすべてのものが遠ざかつて行つて、自分一人廣々した靜かな野原にでも居るやうな心持になつて、うつとりして居た。未だ幼なかつた時分、夏になると毎晩〳〵母や姉達とにぎやかな人出の多い通りへ涼みがてらに出かけて歸りにはきつと何かしら買つて來た事が朧ろげに思ひ出せる。遠く

から、又ひとかたまり賑かしい人聲にまぢつて、草履や駒下駄の音が近よつて來た。曲り角に來たらしい時「さよならぢや明日ね」と口々に云つたかと思ふと一方は二人許り足早に一方はなほはなやかな聲に笑ひさゞめいて行く。根下りのいきな銀杏がへしや美しい桃割の姿が頭の中にぽうつと浮き出る。

大工の家ではもう戸をしめだした、私も始めて我れにかへつて立ち上がつた。そしてあたりのものに一人置いて行かれるやうな心地がしておのづと急ぎ足に家の中にはひつた。

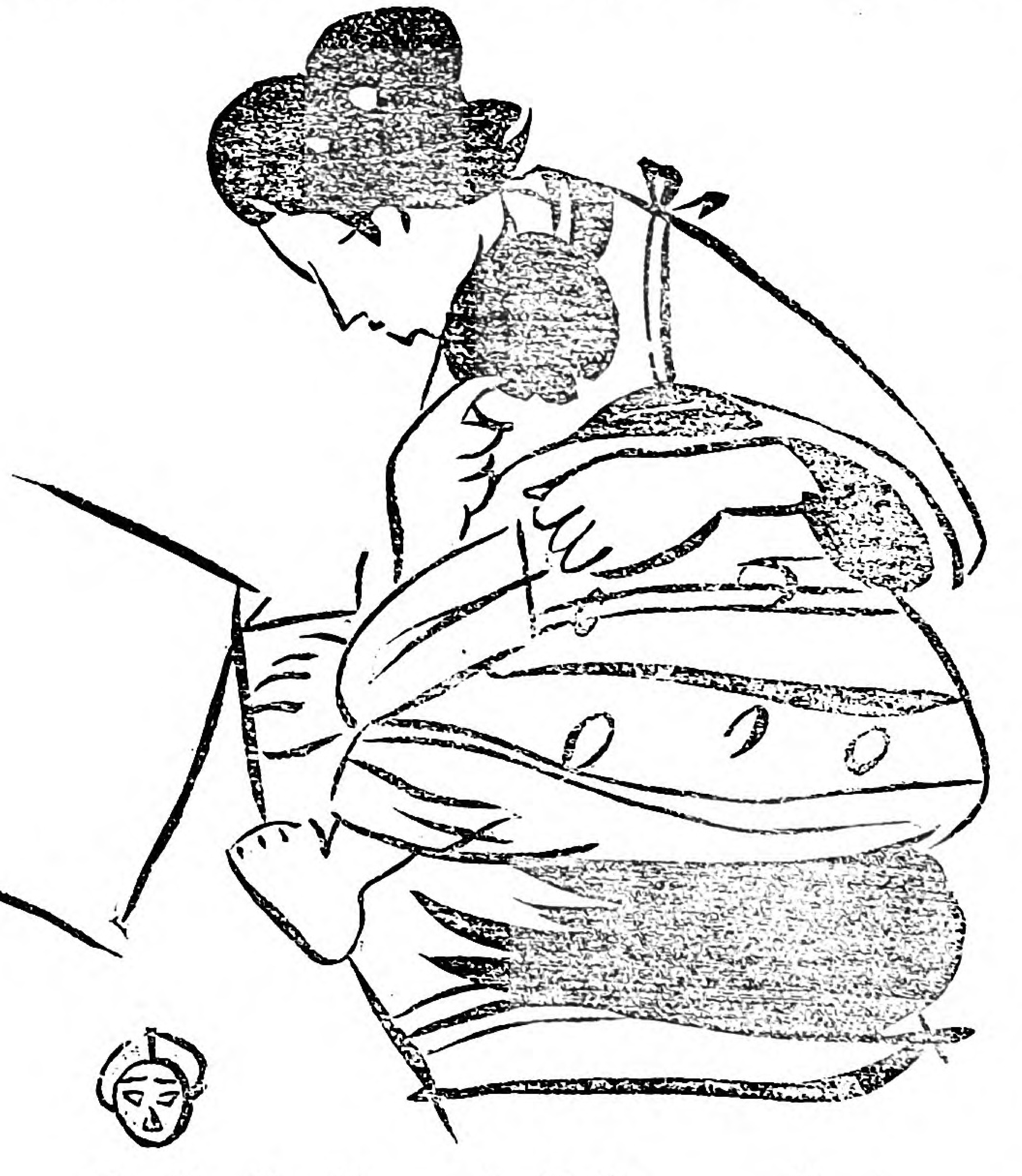
思ひの外東京らしくない書き方だ。(評)

○幼き印象

秋田　花守

三片とも私が七つ頃の時の印象である。

私はふと家を出た。竹管の水道傳ひに深い草を分け乍ら餘念も無く歩いた。何處へ行かうと云ふあてども無く碧い空を仰いでは小聲で唄つたり草をむしり取つたりして歩み續けたがふと道の盡きて居る岩間へ出た。



朝　宇都宮　松井清子

私は思はず冷やりとした。身にぞく〳〵と寒氣のするのを覺えた。岩は蔦や柱で一面に蔽はれて所々から水が絶えずビシャリ――ビシャリと沁み入る樣な音を立てゝ湧き出て居る。幾年前からの物か分らぬ赤い木の葉の浸つて居る清い水の中には人を恐れる古蛙がピョン〳〵跳ね廻つて居たが急に何處かへ姿を隱してしまつた。

「あゝ水道の源だなあ」と云ふ事がすぐ知れた。私は深い考へも無く凝つと水面を見守つたが「怖い」かうした感じがぞく〳〵身に沁みて來たのでさつさと家路を辿つた。

遠い昔を偲ばせる樣な岩間！其の寂靜な印象！私はどうしても忘れることが出來ない。

○

空の曇つた日だつたと覺えて居る。

友と二人いつも遊ぶ谷間を辿つた。大きな樹々が鬱蒼と茂つて居る其の中には一筋の瀧が物凄い音を立てゝ落ちて居る。二人は其の落ち壺の所で立ち止まつた。

あたりは薄暗かつた。柔い香のする草の中には白と紫との小さな美しい花が咲きかをつて居る。二人は無言の儘其の花を摘んだ

暫くして、

「何花かしら」と私は呟いた。

「雨降り花よ」友は答へた。而して此の花を摘むと雨が降るのだつてしみぐ\と物語つた。それは菫に似た花だつた。

私は野に咲く菫の花を見る度に其の寂しい谷間の小さな花を思ひ出すのである。

あとの一篇もわるくはないが、餘り長くなるので削つた。(評)

○丘に立ちて

羽後　さ　ぎ　草

みそ萩の小枝を握つて登つた私はホツとして目をあげた。美くしい夏の朝よ、丘よ。

夕陽に五社の屋根が白く光る、と云ふ御山には霞立ちこめて遠い海でも見る様に、薄紫が流れてる。

かすかに……柔らかな鳩の聲がする。

耳を澄ますと、何處かに水の音が、又サラ〳〵と、草の茂みを歩き出した。

短い絣の筒袖に、赤い半幅帶をキユツと兩端が下る位に結んで、手には河原撫子の二三本を持つた、私より他には、草刈の鎌さへ光らぬ、靜かなる丘よ。

御佛樣に上げ樣とて、起きるやいなや、背戸の丘に登つた私は、昨日洗つた亂れ毛の。一本々々に、沁み入る樣な朝風に、思ひさま歌つて見たくなつた。

薄紫の野菊を、しほらしい花、同級のあぐりさんの崇拜の花、女郎花が黄にほこると、慎ましう白に咲く、男郎花はいやだ、鬼に例へられても、紫の薊の花は懷かしい處がある。

草かげに、赤い苺を見付けた、ソロ〳〵と溶けて流るゝ甘い汁。花を抱へた左の掌に、よく熟した實をのせると、かすかに冷たい感がする、食べるも惜しく暫く見詰めてると、何かしら似た物はありさうだ。

金平糖、――でも色づけばいやらしい。ルビーの金平糖にしたら、と思ふた、がいや、ルビーはこの酸い樣な甘い樣な、味を得られない。

矢張り苺は苺で一番よいと、ポンと口に入れて仕舞つた。と見る彼方の茂みの中に小さい赤い花。

姫百合だ、人差指と親指で、輪をこしらへた位の、こましやくれた花ク丶リ〳〵と恰好よく後に反つた六ツの花瓣に、整つた長い蕋を見ると、都少女の樣な感じがする、輕い言葉、動く眉、整い過ぎた身のこなし、あゝ姫百合だ〳〵。

すると田舍娘は白百合だ、大樣に、無口に、白い花が咲く。

香の強い白百合が、何處に俯いてゐるかと、云ふ樣にグルリと四方を眺めて立つた。

こましやくれた花はおもしろい。(評)

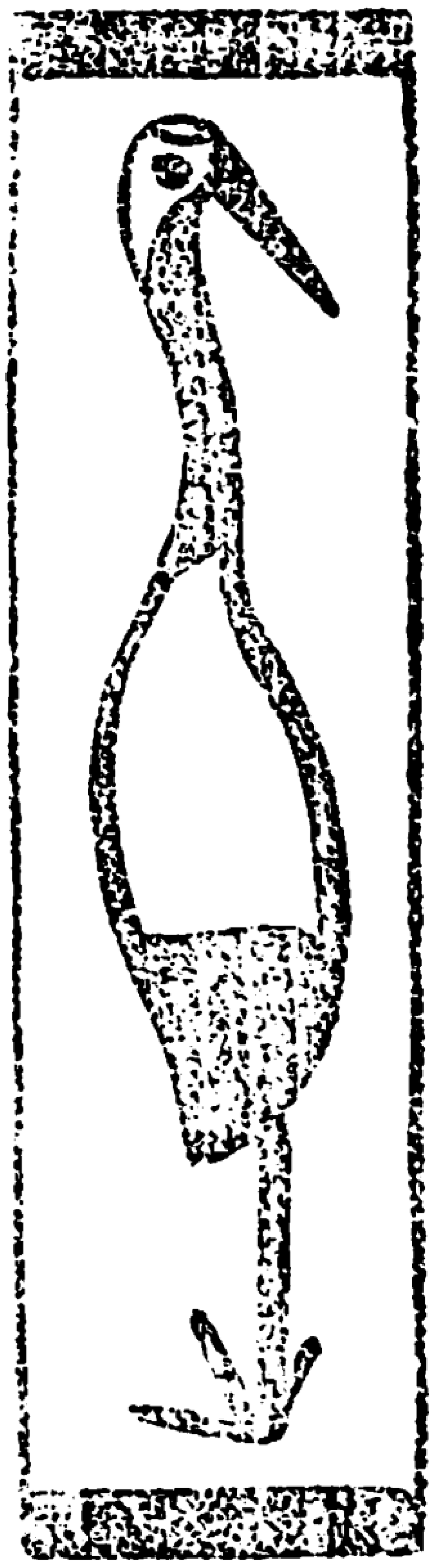
○桑摘みの歸り路

光　子

私の丈より二尺も高くのびてゐる桑の枝を、ぐつと撓めて、みどりの淡いやはらかな、新木の葉を摘まうとしたら、其傍の枝からきたない羽色をした小鳥がキキキーツと鳴きながらとび出した、はつと思つて身を引くと、小鳥は、私の耳のあたりをかすめて、南瓜や西瓜の蔓が思ふさまはびこつて居る、野菜畑の中へ入つて終つた。私は驚いた拍子にはなした桑の木を其まゝにして桑籠をのぞいて見ると、もう八分目位たまつたので、くるりと肩から脊中へ廻して負ひながら歸途に付いた。また掃立てゝ間もない秋蠶、これほどあれば明朝迄は澤山なのである。

薄紫の露草や赤まんまの花等が可愛く咲いてる芋畑と、桑畑の間の小道を出ぬけると、ジリ〳〵と照る、夏の眞盛の日光にやけ切つて居る石ころの多い田圃道、むつとする稻草の匂ひは心から暑さをまさせるやうに感じられる。

稻の葉を渡る風はそよともないのに煙のやうな雲の影は辷るやうに田の上を、東へ東へと走つて行く。それが、向ふの赤土山を通り越して見えなくなつた頃に、また一かたまり、どん〳〵前のを追ふて行く。



和歌　　編輯局選

○（天賞）　名古屋　波の花

のがれ來て我が立つ前に泣きくづる女波男波のいたましきかな

○（地賞）　岡山　筑紫星夜子

わが胸に糧の足らざる日ぞつゞくかくて亡ぶる心といふや

○（人賞）　下ノ關　西村白蝶

衰へぬ恨み得た日を幸と思ひいづるを喜ぶほどに

佳作

○　小石川　中村千代子

眼くるめくなつのまひるに燃ゆるごとあかきはなおつくろつちの上

○　山形　伊藤智惠子

曇り日はいく日もつゞき雨はふる生き甲斐なくば死ねといふ如

○　東京　瑞野揚子

み言葉は謎の如くに惑はしく君とあれどもいさゝか寂し

○　紀伊　紫陽花

ともすればわが心よりのがれむとあせるに似たる君がひとみよ

○　牛込　譽田順子

佗びしさにたへぬ心は鏡とりねころびしまゝうつしみるかな

○　豐後　吉田夕草

めしませとみ酒ごゝゐらす夕暮の部屋も二人の仲も淋しき

○　京都府　竹村槇子

秋風やほろ〳〵とまたほろ〳〵と黄薔薇崩るゝ白ききざはし

○　土佐　はぎ子

逢はざるをよしと思へば逢ひたさやわが破れたる初戀の人

○　廣島縣　葵の花

あかつきの野をさまよへば白駒のはしる如くも朝ぐる

のゆく

○

死ぬほどの戀し男もあらばやとさがしあぐみて三十路越えぬる　　京都　小芹

○

苦酒を飮むくるしさにさも似たり見厭し君と向ひあふ時　　橫濱　岡本ちづ子

○

導かるゝ御手にすがりてゆけばとてさいはひくべき吾ならなくに　　石川縣　水野久代

○

山城や溪間の如き加茂川の水しら〲と秋風の吹く　　京都　廣江曉子

○

小さなる願ひに夜を小さなる思ひに晝をおくら倦みけり　　上毛　雲路

○

わがあとを追ひ來ん人のしるべにとみちにむすびぬ水引のはな　　豐後　花守靜子

○

水の面一ひら落ちし薔薇の花たゞよふ如き我が思ひかな　　信濃　保科伊津子

○

毒草の赤き花をば見し日より物思ふ子となりにけるかな　　京都　壽賀子

○

大正の御代となりけり世を隔つ思ひぞなして喪に服しゐぬ　　甲斐　冷花

○

すゝり泣くわれを見つめてうす笑ふ君がこゝろのすさみけるかな　　京都市　花村白百合

○

さびしさは夕なれば堪へがたき歌など思ひてこゝろしづめぬ　　原すゝき

○

我が胸にもたらす戀は古沼に枯れし木の葉の漂ふが如　　山口縣　梛良美那子

○ うたゝねの我がゆめの間に青嵐戀の歌はとうばはむとしぬ　　越後　富美子

○ 夜の街の電柱のかげを悲しげに去りやらであり捨てられし身の　　福山町　京路末葉子

○ 鳥けもの地にひれふして君をいたむ此月此日空に光なし　　下谷　安田愛子

○ ゆる〲と乳のやうなる秋の雨少女の抱く戀に似てふる　　長崎　町田とし子

○ 白晝のやり水に生く草のごと枯るゝを知りて吾れは戀しぬ　　伯耆　新田文子

○神田　加藤芳江
淋しさはおのづと湧きて暗き灯の家の蔭なる蟋蟀の聲

○京都　川原つぎ子
ゆく雲に想かれたる此頃や反古のみひとり堆くつむ

○石川縣　土田夕女子
なめらかにいと圓やかに大いなる玉としならむ涙しのばむ

○信濃　中澤かし子
所在なさこの衰へし心をば捨て處なしいづ地行かなむ

○信濃　榮子
さびしさもはた悲しさも慣れてゐてもの忘れせし心地するかな

○金澤　杉野みち子
日は落ちて鷗のかずも減り行けり港の町はすでに夜に入る

○筑紫　饒子
秋風も詮なく吹けり對ひ居て言の葉もなし別るゝ期なれ

○牛込　北原雪子
そと笑みて「君」と呼びにしくちひげのうすきひとのみ忘れかねつも

○岡山　安田夕
怖ろしくされど懐かし捨てと得ずふるふ手にとく君が玉章

○白妙女
さらぬだにわびしきものを秋のきてきのふの戀を思はしむるかな

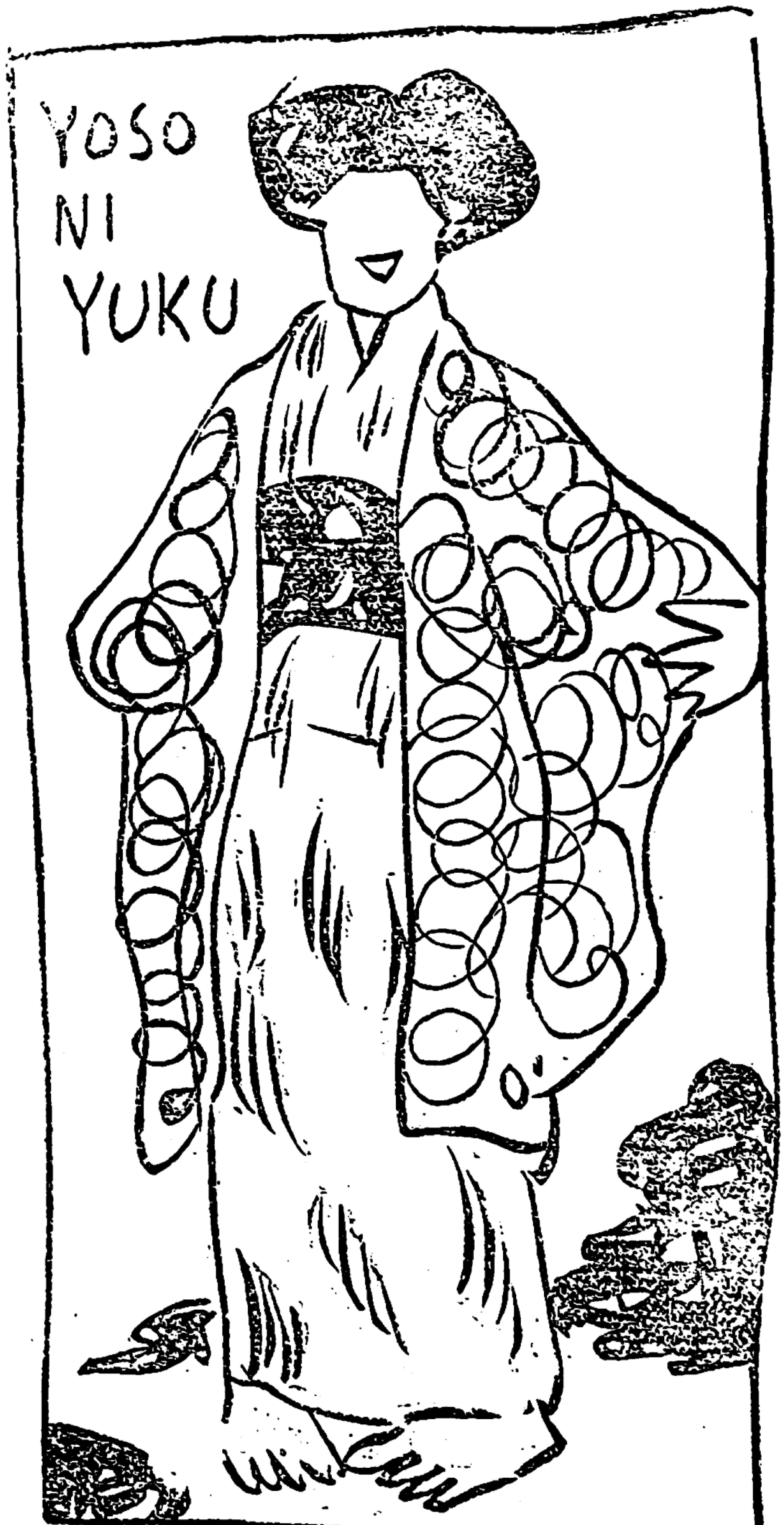
○栃木　百合枝
待つてふを恐ろしきものと思ふ時我は昔をあざけりて泣く

○舞鶴　雪子
東路へ旅立つ君を見送りて我も行かんと契りしものを

○大阪市　河盛よしの
いひがたき誇りを胸ゆあくたともこひしき人を思ひ得し故

○能登　城村とめ子
兒の寢顔うちまもり居れば神のこと時鐘の音靜なり

○近江　瑠璃香
我が儘と識りつゝ母に抗らひてポプラの蔭に泪する吾



よそにゆく　下谷　宇都宮とら

和歌

○　信濃　建花ひで子
なつ眞晝このつかれたる心かも小田卷草の花のしぼめる
○　對馬　伊藤喜代子
夕ばえに野邊の草原踏みしだき折る一本のをみなへし哉
○　美濃　佐藤さをる
夕燒の雲消えうせてむら〳〵と木立くろめる薄月夜かな
○　岡山市　桃の村女
つと走り君の名呼びて夢覺めぬ寢られぬ夜半となりにけるかな
○　靜岡市　石垣靜子
なやましき雨ふりやみし木の蔭に黃色に浮きし月見草かな
○　紀伊　宇田須賀子
初秋の風うら悲し蜘蛛の絲にほろ〳〵と散る木せいの花
○　岐阜縣　佐藤史子
たそがれぬ月見草咲く大川の中洲に又も泣きに行くわれ
○　三國町　新田すて子
君はこぶ針のさきにもまつはれる悲しみの色眞白なる指
○　淡路　高田清子
むら時雨窓うつおとのいくたびか人まつ我をおどろかすらむ
○　鳥取縣　田中春子
ヒステリーの女と言はれて床にあるもの憂き思ひに悲しみぞ湧く
○　周防　若菜
其のゝちは何事もしらず我はたゞ彼の日彼の夜の御姿をもつ
○　信濃　長谷川赤女子
常はみな忘却の家にかくれゐる思出よ汝の姿うつくし
○　神戸市　鈴木照子
紫陽花のごとく日每にかはりゆく男ごゝろのいたましきかな
○　本鄉　吉田恭子
大君の神さりましゝ悲しさにわが民草のしほれけるかな
○　山口　卯花子
おん冷えを知れどなげかず軍將のつよさにも似て今日をあるかな
○　下谷　生澤菊子

夢なれどとこ世の春の花咲きて君とし住まば樂しかりけり
○　山口縣　まみづ子
君が衣おるはた音の長閑なり菜の花さけるかなたの家に
○　群馬　渡邊歌子
安らかに青葉のかげの石にゐて雲ながめつゝ蟬のこゑきく
○　栃木　里の花
よみがへる川原の小石まさぐりつ夕の空に心吸はれぬ
○　城南の里　鈴枝
うす暗き森の上より走り來る魔物の如き夏の雲かな
○　備中　大西千登世
悲しみはいとへどさはれ悲しみのあとを絶つれば喜びもなし
○　羽後　さぎ草
蟲ばめる錦繪ぬけし姫君のかざし重たき紫陽の花
○　茨城　田村かね子
庭の面の秋草に咲く花見つゝ思ひなやめり病院の窓
○　赤坂　古賀まさ子
若き日は倚るに慣れたる小柱に蜘蛛は巢くへり川添の家
○　栃木　紫波
靈の戀血潮の戀にわけ知らぬ世のたゞ人のうとましきかな
○　伊豫　行々子
青桐の葉うらを青き蟲のはふそれらの如く熱もなき戀
○　出雲　三吉よしみ
秋くれば小さきまゝにもみのりたる山椒の實がもの思はする
○　山口　卯花子
月白う空に匂へるあさあけや茄子よりこぼる紫の露
○　備前　我澤勿忘草
晝の夢さめたるがごと月見草咲けば夕の露の悲しき
○　下總　坂田とめ女
ふと我れにかへれば秋の夜は更けてうらかなしくも蟋蟀の啼く
○　水戸　堇子
波の音よせては返す磯づたひ思ひはるかに迷ひゆきけり

○廣島縣　宮垣初代
夏休み友の家居を訪ひれば人は嫁ぎて赤き花咲く

○札幌　俟野幽香里
秋の朝香水の瓶手にとれば戀せぬ人ももの々おもはる

○京橋　青木扇花
横雨の小窓を叩く秋の夜は君を待ちつゝ針運ぶかな

○神田　古海しづゑ
野にたてばコスモスの花白う咲きてわが此こゝろ知る如く見ゆ

○失名
すゞみすと四條の橋にやすらひて知らぬ人ともかたりつる哉

○岡山市　石井明子
いかばかりけ高き人の住むならむみ山のおくにみゆるともし火

○石川　哲
忘るべき人と語りぬ疲れたるみを横たへしたまゆらの夢

○岡山縣　中西りか子
つよきこゝろ性としなればもゝたりの男の笑はかへりみざりき

○熊本縣　本島とよみ
天の星の君の瞳のごとおとなしうまたゝきすれば心なごみく



女　芝區　小松みどり子

○北見　大出夢衣
くろ髪を二つにきりて羽となし小鳥となりて飛びてもゆかん

○木曾　月見草
心なき身にも淋しき昨日今日秋海棠に雨そぼち降る

○下總　浮舟
つれぐに鬼灯ならずたをやめの頬をなぶりぬ初秋の風

○美作　橋本しげ子
わかれかねわけ行く山路辿りては我袖ぬらす萩の下つゆ

○大阪市　小泉貞子
處女てふこの一語もて空虚なるおとこのこゝろ滿たさんとする

○福岡縣　富永敏子
そよと吹く庭の小笹の葉音だに君待つ宵の胸にひびきぬ

○播磨　藤井つや子
いろ紙に戀歌そめてたはむれしむかし懐はる事務室の窓

○新潟縣　若井紅雨
啜り泣く聲はすれども月影にそむきて面を覆ふてある人

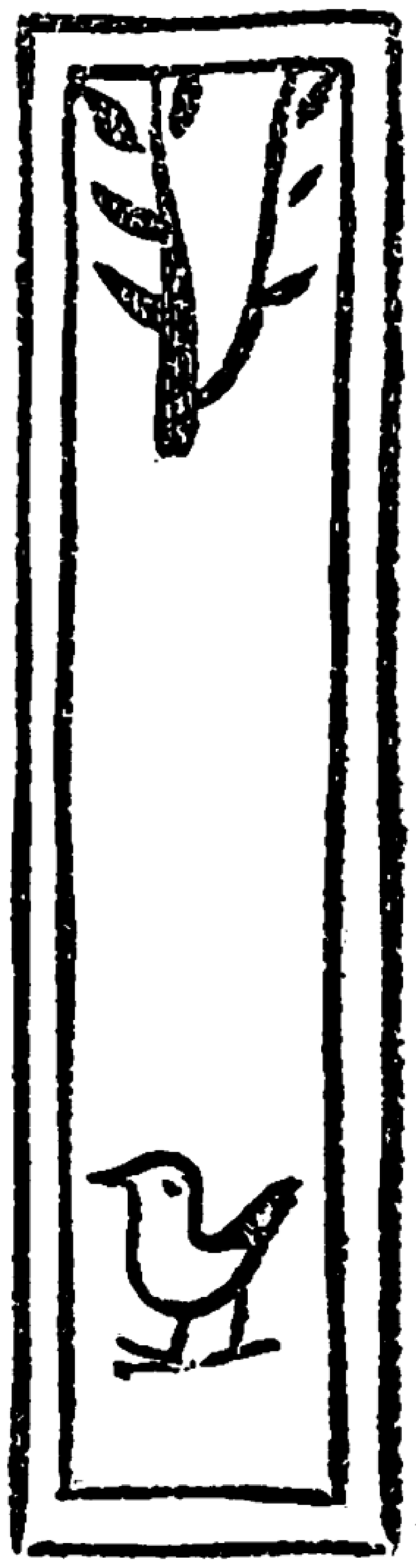
○岡山　桂木淑子
たそがれの露けき野路をさまよへば身にしみぐとこほろぎが鳴く

○　三河　彩路
蚊帳越しに北斗の光仰ぎつゝすさみしわれの行末思ふ
○　栃木　しのぶ子
貧しさや老け行く身を思ひつゝ消え行く夜半の灯火見たり
○　王子町　大浪春子
たらちねのかひなによりて安らかに身の越方を思ひけるかな
○　尾張　水谷靜枝子
こひ去りし我が十八のをち髪に吹く秋風ようら寂しかり
○　加賀　村田いと子
千丈の岩にかゝれる白布のたきのひゞきに散る紅葉かな
○　若松城下　百合世
手術臺に横はりつゝ忘れにしむかしの人を只思ひゐぬ
○　神戸市　上野ひさ
うら若き君の命をつゝみゐるわれのひとみもほのにつかれぬ
○　播摩　鶴岡うずみどり
うつくと夢心地にて鷄の鳴く聲きゝぬ夏の曉
○　常陽　霞水子
君が住む筑紫が戀し窓に倚りて夕の雲を眺めてあれば
○　土佐　橘田紫葉
入日どき赤くたゞれし日をあびて我れのみ一人物思ひする
○　加賀　操
酔ひしれてうさを忘るゝ男子をばあはれみて見つうらやみて見つ
○　千葉縣　坂田とみ子
振りすてゝのがれこし身につくづくともの思はする初秋の風
○　伊賀　福田惡美子
彼の君を逢ひ見し事のなかりせばかく憂き思ひあるまじものを
○　近江　鈴路
さわやかに朝風吹けば他愛なく合歡の花房ゆらぎける哉
○　久留米　久商女
わびし時悲しき時は濱に出て夜の潮のねをきくがなつかし
○　府下　高木多香子

荒川になつかし君と二人にて語るゝも知らで舟浮べけり
○　金澤市　歌の宵
悲しきは我が行く方は靜やかに暮れて行くなり蟲啼きいづる
○　信濃　世良田盈子
舞扇舞し手振りの愛らしと呼ばれし事も昔有りけり
○　高知　藤村紫華子
人を呪ひ世をばのろひし罪の子の二度目の戀は淋しかるらん
○　羽前　美耶子
賤が家の砧打つ音と蟲の音ともつれて秋の夜は更けにけり
○　甲斐　早川とく子
すべなさに他家の子つれて氷室の三つ四つ求め戻り來しかな
○　長野縣　木村淳子
塗りかへしペンキの光る學校のオルガンの音のおもき午時
○　姫路　九十子
鍵盤の一つひとつを味はひて選び出さる戀にやあるらん
○　靜岡縣　北川和子
吾が心千尋の谷に落ちながら眸とづれば海の空見ゆ
○　越後　白菊子
夢なりき許しませ君しかすがに都よしとて村な忘れそ
○　琛　櫻
君がためおん身がはりのまごゝろも神のみしるしなきぞ悲しき
○　丹波　篠田清子
目覺むれば書齋に殘る電燈の光りもあをく夜は明けてあり
○　秋田　愛子
はれやかな少女なりしも此の夏は母にかくれて夜のもりになく
○　岡山市　矢木武子
新らしき社はいよゝ輝きぬ後の山の紅葉せしより
○　筑後　長谷川國枝
氣まぐれに口笛ふけば飼犬のそと走り來ぬ秋の夕ぐれ
○　相模　高根小鈴
歌ふ聲も淋しくなりぬ松かげの砂丘に寄る　秋の海見る

○　渡島　宗原美津子
歡樂の夢より醒しそれの如すべてを捨てし人妻の今日
○　岡山縣　山本筆
夕やみに若葉のゆれて君思ふ別れし森の淋しかりしよ
○　神奈川　平井公子
別れぢをさのみなげくな妹よまた合ふ時のありと思へば
○　渡島　小木白菫
朝顔は悲しき花よ東の間に露もつれなく逃れてぞ去ぬ
○　長野　稻子
はやもまた秋きにけるよ白樺の幹細々と弱き日のかげ
○　東京　諸の花
あいたさも見たさも今はうすらぎぬあの濃き眉もわすれんとする
○　島根　きみ子
死なんまで〳〵とて幾千度語りしことの偲ばるゝよる
○　群馬　はゝ木
くれてゆく薄夕やみの塀のもとほろ〳〵と散る蒼白き花
○　京橋　奥村孝子
胸の月いとまろらかにうつれるを大舟の來て碎きけるかな
○　群馬　磯夕花
灰色の空に暮れゆく淋しさを悲しとなくや蟲のころ〴〵
○　群馬縣　里野はぎ子
君が君此の我が胸に溢れつる此のさびしさを吸ひとり給へ
○　京都市　白萩
よそごとゝ思ひて泣くはつらかりしせめて此身といへばうれしき
○　京都　大槻よしゑ
おもひわびぬれば夕にひかりさす海のゑがほの水あさぎ色
○　水戸市　小湊春雨
洞なる胸に溜りし哀愁の泉の水は流るゝすべなし
○　廣島市　村上清子
亡き父がかたみにうえし白萩にちりてこぼるゝつゆのしら玉
○　横濱市　たけし

うつし世にいともつたなき運命もて來し吾なればせんすべもなし
○　宮城縣　齋藤靜子
流星は君が國よりわが國へ走りて落ちぬ曉の前に
○　信濃　百瀬すみ子
桐一葉まひるのまどにおとづれぬ寂しき心君思ふとき
○　青山　多賀亞舟
われ思ふ人の心をおもふ時思はれぬ身の涙こぼるゝ
○　埼玉　桂の花
積り行く悵ゝ謝めぬ手束ねて泣けば和さん我れにもあらねば
○　京橋　醉花
赤見なきぬその母らしき樂もしぬ枇杷の葉落ちぬ淋しきゆふべ
○　埼玉　地疋福子
なくなとて子をば叱れど其身さへさしぐまれぬるうら若き母
○　京都市　くれなゐ
花にすがる蝶のつばさに歌かきて送らば君の心とけむか
○　佐賀　花の雫
あら淋し戀鳥去にし黒闇やすべてのものを失ひしごと
○　靜岡縣　菊地つぎ子
灰色の屋なみさびしく月代のしらむ町にぞ君はまします
○　澁谷　小林綾子
濱町の河岸の柳に身を寄せて戀しき君と三味の音をきく
○　三重縣　久子
芒野の中に家あり初秋の風に吹かれて馬いなゝきぬ
○　大阪市　妙子
夢に見し蝶のゆくへを偲ぶ時枕ににほふ白百合の花
○　久留米　中島みき子
脫け去りし小鳥の羽にくちづけば仄暖かき戀を覺ゆる
○　熊本　落葉
月見草ゆふべ靜かに開くとき君がさびしき瞳をおもふ
○　小石川　靜香
不具の子は只ひたすらに物云ひて一人の母に憎まれて居ぬ



評論　編輯局選

○『土』を讀みて

伊藤行々子

七月の末兄からヅーダーマンの『故郷』と、長塚節氏の『土』とを頂きました、マグダは私や私等の周圍とはあまり懸離れてゐますので、それよりは『土』の方をより一層親しく讀みました。

『土』に表れてゐる勘次の家…乾びきつたうす暗い家の人々が、土にかじり付いて生活をしてゐる有樣、私はよく小作人の仲間から是等の種類の人々を見出すことがあります。漱石樣の苦んで讀む小説が興味を引きにくい小説の意味でしたなら、『土』に書いてあります世間に一致した世間から、僅かな階段をおいて生活してゐる私には、**事實にとらはれぬ面白味を感ずる事が出來ましたけれ共、ある一面から苦しく讀む小説です。**

くどいと思ふ程細密な自然の描寫にも、一葉のゆらめき一つの音響をも見のがさない細さにはホト〳〵感じ入りました。もう少しく倦み疲れた時、覺醒さす刺戟がございましたなら、自然にあまり親しみのない都會の人達にも、苦しまずに讀み得る事が出來ましたでしやうと考へられます。

『土』の中で一番よくローカルカラーを表して面白うございますのは、自然よりも方言だと思ひます。所々不可解な事もありますが、周圍に調和したあのおつとりした方言の中には、云ひがたいなつかしみがふくまれて居ります。田舍――農家に起る年中行事、早苗振だの、祭禮だのに起り來る青春の男女の心理狀態、是等の男女間には貞操に關する道德的觀念は皆無であつた、そして放縱な性慾の欲するまゝにまかせてゐる獸の樣な戀が、勘次の女おつぎにはみじめに表れて居ります。

『土』全體を考へて見ますと、社會の最下級に屬してゐる次の樣な家、昔から今迄頭の形以外に何等思想上に影響をあたへられてゐない人々が、平坦に又ある方面からは深酷に描かれてあります。

土をほつて雨や日光や**自然の現象の中に生活してゐる百姓には、**自然を畏敬する事が深いだけ、たうてい善から離れることは不可能な樣に思はれます。（地宮）

穩かな好い批評だ。（評）

○苦しき世をよみて

伯耆　新田文子

八月號の評論欄で拜見いたしました「苦しき世」妾はさても苦しき世かなと、言々、句々、汗の出る思ひしてよみました。そして、何となく現代が怖ろしい忙しい、氣でも狂はねば好いがと、思ふ樣な感がでざいました。又妾は六月號のお神樂觀も拜見してゐる一人です。敢て、お神樂觀に同感の聲をはなち、「苦しき世」に反抗も反感を抱きはいたしませんが、妾は妾としての意見をのべて見たいのです。

抑々、現代はかくも、苦しい、セッカチな世でせうか？妾も同感です。決して霞を食べて、雲を飮んで行ける世の中ではありません。無論、酸素を吸つて、お米を食べて、行くべき世です。從つて、其處にも、此處にも、悲慘なむごたらしい生存競爭は、行はれてゐるのです。ですから夢や幻に憧憬してばかりは生きてゐることは出來ますまい。併し妾はこゝに、一言「苦しき世」の作者にお答がしたいのです。

神秘なお神樂を聞いて、其の悠長な、ゆかしい思ひにあこがれる、そして仙人にでもなつた樣な氣分にでもなる樣な人間が、果して、現代に處して行くことが出來ないでせうか？妾は決して何等の妨害もないと思ひます。あまりに此の現代の見方がせまいぢやないかと思ひます。妾はむしろ、かゝる、ローマンチックな感に、時にはうたれるが好いと思ひます。

非文明、非現代とそしる人は、そしつてもかまひません。其の苦しい世路の旅の暫しの休養に、斯うした靜かな崇高な神秘な悠長な氣分に、ふれるといふことは、いかに、其の苦しい現代に處す、尖つた、疲れた精神を、圓く、蘇生せしめることでせう。

從つて、新らしい現代の仕事に有益に處すことが、出來るでせう。

ごらんなさい、文明と共に盛大となる演劇などは、如何です、其の美しい舞臺で、幾多の俳優の上手な技術にあこがれて、且つ醉ふて、皆劇中の人となり、涙を出したり、笑つたりするぢやありませんか、卽ち、現實から離れて仕舞ふのです。此の點に於て、妾は、お神樂もまた同一だと思ひます。現實をはなれて、其の神秘にあこがれ、醉ふのですもの、して見れば、敢て、お神樂を見て、聞いて、其靈境に心を走らしたつて、否現實でもなく、否文明でもなく又何等の障りもないと思ひます。無暗に現實々々といひ、生存競爭といつて、月も花もない、ひからびた生活をしなくつても、好いと思ひます。現實の苦しき前には勿論充分の覺悟をし、而して時には、夢にも、幻にも、月にも、花にも醉ふのが又必要ぢやありますまいか。

最後に、藝術はあそびでもなく、夢幻でもないとありましたが、妾は之れには大いに反するのです。藝術はまた、藝術と見る可きものです。苦しき現代からかけはなれた、一歩超然たるものです。

大波小波

☆

かざんおん（東京）

ゾロモンの箴言より（一）

柔順なる女は榮譽を强き男子は財を得。

美はしき女の愼みなきは金の環の豚の鼻にある如し。

賢こき女はその夫のかんむりなり。

辱を來たらする女は夫をしてその骨に腐れあるが如くならしむ。

相爭ふ女は雨降る日に絶えずある雨漏の如し

智慧ある女はその家を建て、愚なる女は己の手をもて之を毀つ。

賢こき妻はエホバより賜ふものなり。

☆

勿忘草（備前）

凡そ氣障なものは——

マガレットに結つた田舎娘。

眞紅なリボンさした、ニユーマダム。

丸髷に結つた後家さん。

禿頭の色目。

年寄の說法。

目鏡を掛けた田吾作。

女學生風した女工。

令孃風した賣女。

あばずれた女敎師。

人力車上で讀書する女。

我が戀人と談笑する女。

田舎爺さんの氣焔——

☆

ふく子

△與謝野夫人が皇室に對し奉れる敬虔の念の厚き、自ら感涙を催さしむる。夫人今や文明いみじう輝く北歐の地にあり、他日齎し給へる光彩やいかに立派にはなやかであらう。

△デモ文士や自稱詩人はよく文學雜誌を發行したがる其れは誠に結構な事だが、數ケ月で廢刊するのは如何したのだらう。しばらくすると又名を換へて現はれる、さうかと思ふと忽然と消える。彼れ此れしてる中に又候現はるゝと云ふ有樣だ之を蕃曇式と云ふ。

△女の事許りを書く男は大嫌だ、男の事許りを書く女も大嫌だ。若い男は若い女の事を云ひたからう。若い女は若い男の事を云ひたからう。然し云ふにも程度がある、無暗に云ひ過して好色家てふ尊稱を授けらるゝはお目出度い次第でない。

☆

宇田すゞ子（紀伊）

私は手ぬぐひを、かぶくのが大好きです。

おかまを炊いてゐる女の、うす赤く上氣したはゝの色とけむたさうにしたうるんだ目とは、炎のパッともえ上る度に匂ふて手ぬぐひのかげから見えます。

都會の賣女はかすみの樣なベールをもつて美をおぎなふものとし、醜をさけるものとすれば田舎における女のかぶく手ぬぐひと同樣だと思はれます。

手ぬぐひきた細つそりとした若い女の赤い七寸程なんか小さくきちんと結んで、あらいかすりもきたのは、實に好いものです。

私は手ぬぐひをかぶいて、いつも紀の川へせんたくに行きます、小さな棒に重さうなバケツもつた姿の青い畔を行く時人はどんな評を加へるか知らんが、私はバケツのおもさも家庭の不平も世の恨みゝ思つてはしません只自分の手ぬぐひきた姿をそつと自分の前へおいてじつとながめながらゆくのです。

☆

紫陽花女（紀伊）

「賣女そのお召物は幾何で御座いましたか」と無暗に人の衣服の直段を聞き度がる人がある。それも親しい人とか親戚などならばまだしも、何でもない他人に向つて然も大勢の中で平氣に尋ねる。尋ねる人は平氣だらうが問れる者は隨分極りが惡い。「ハア幾何で御座います」とも言へる者ではない、甚だ迷惑を感ずる、そんな人は自分が品性の下劣なのを表白する樣な物でむしろ常識のない人だと思ふ。それ計りでない、「其何々は何處でお求めになりました」とか「八掛ですか、通しですか」とか必要もないのに其樣な事を問ふのは失敬な事だ、我地方の婦人は、こんな事を平氣で尋ねる癖があるが、時には顏から**火の出る樣な事がある、**婦人と服裝とは到底**離れられない**問題だらうけれど、何でもない事で人の感情を損ねる事があるからよく注意せねばならないと思ふ。

☆

藤村菊華子（高知）

△違つてゐるかどうかは存じませんけれど、感じたまゝを述べさして頂きませう、高知程文學

の振はぬ縣が、他に又と有りませうか、而し此は無理ならぬ自然の成行だらうと考へます、土佐人の家庭に於て、文學に多大なる趣味を持ち、藝術と云ふ意味を、完全に了解し得る人が幾人ありませう、ほとんど皆無と答へても好い位です可成理由の分った中流の家庭の親達でも、筆をとる閑には針を持て、書物を買ふ金錢があれば半衿の一掛でも、帶の片端でも買って置くのがさきの身の爲だ、大體が此樣な主義ですから、自然と書籍に親しみにくゝ、又筆を取るのも家の人に氣を兼ねて、遠慮勝になるのでございます、文學は中學校を中途で退校せられた墮落書生や、お裁縫や家事向の仕事の手に付かぬお轉婆娘や鍬や鎌を持って一所懸命働くのが嫌な田舍のノラクラ息子が、いつ迄も親の側へへばり付いて讀だり書いたり一年中三百六十五日牛蝸の如く家の中にばかりすっこんで、泣たり、笑たり、まるで菜っ葉の樣な蒼い顏して考へ込んだり、まるで狂氣の樣な風をして遊び半分にいぢくってゐる玩具、皆此位に思ってゐるのです。又雜誌なんかへ投書する人があれば、先生や、友は一同口を揃へて彼もいけなくなった、投書をする樣になったからとすぐ墮落と斷定されて、一種云ふに云はれぬ眼を持って見るのです、文學を出汁に、異性に接近仕樣とする厚顏無恥の人々も無きにしもあらず、決して無いとは斷定致しませねど、其樣な常識はづれは論ずるに足りません、只眞面目に愼重な態度を取り、持って生れた天才を引き延さんと考へる人達に對しては、唯一の機關たる新聞雜誌は、之を心よく歡迎し、文學の眞價を認め、共々に短は捨てゝ長は取り、將來に於て益々進歩發展する樣に務めてくれてこそ、完全に近い藝術家も生るれ、藝術の方向に志して行く人あらば、頭から墮落呼はりして皆で引きずり落す、此の樣ないやな山國根生のある中は、立派な藝術家等出す事は、仲々近い未來に於てはなからうと考へます。

☆

伊東散花（千葉）

戀、戀なんて一時のなぐさみ發作的の惡戲である。

その一時男がもてあそんで捨てた後の淋しさ破れの末を知り乍ら戀する心のあさましさ、さめた其時の淋しさは秋の末、木の葉の落ちたる如く、井に水なき如く淋しいものである、失戀破約、失望それは想像以上の悲慘事である、若い青年男女のある限りは、それをきかぬ譯には行かぬのを恨みます、背景に暗い淋しい影のひそむ人のは何うなんでせう。

誓った戀も虚僞のかたまり、世の僞善者なのです。

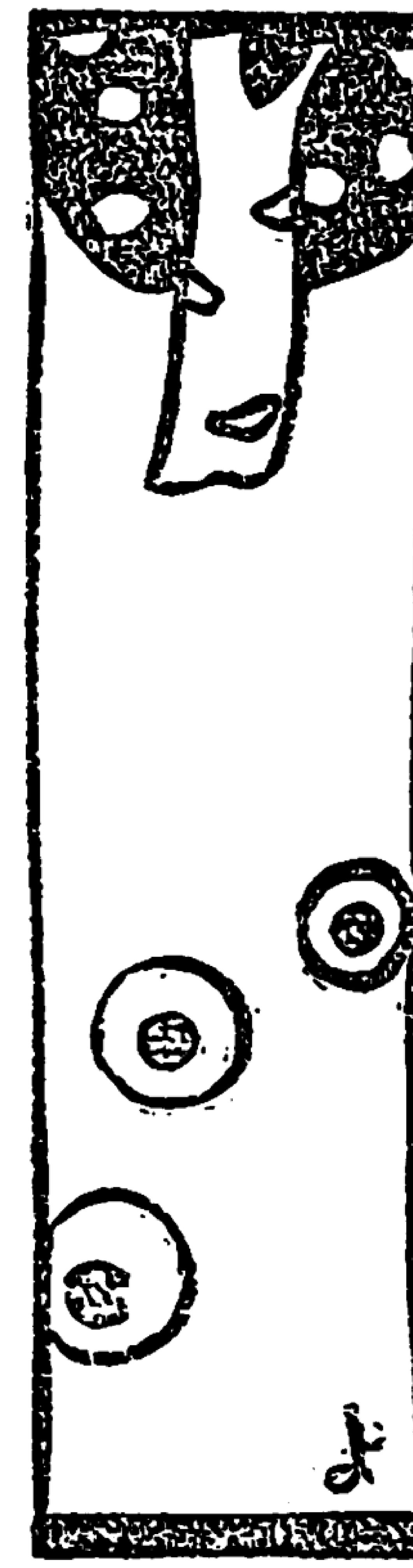
あの金色夜叉の貫一の、懷恨を御らんなさい痛々しい程ではありませんか身を片々にきられる樣。あの小說はどの位今の青年男女の氣質をあらはしてゐるでせう、利欲にのみ走り尊い誓ひを破り、平氣でゐるが、其胸中には屹度悲しい暗い面影があるでせう、今の社會にはお宮式の婦人も少なくありません。

私はこれ等の悲劇のある度に異性に對する恐怖と憎惡を抱く、あゝすべて僞善なるかな。

☆

うすみどり（播磨）

姑と嫁の不和を、世間一般の習はしのやうに考へて居る中等以下の社會では、姑が二三人より合ふと、内の嫁は仕事が出來ないとか、何をさせてもぐづいとか嫁の不足をよく云って居る。私はこんなことを聞かされる度に、云ひ知れぬさびしさの感に打たれる、現在の婦人の結婚期は、十八九より二十歲位までが一番多いやうである、思ふに十八や九ではまだほんの、世間知らずのねんねではあるまいか。何事にも經驗淺く修養足らぬ身をもって、結婚をすると、長く經驗を積んで萬事にあかるい姑の目からは、何にも知らぬ嫁のすることをもどかしがるのは、當然のことである。で自然あてこすりを云ふたり、小言を言ったりするやうになり、家の内には波風が立ち、その結果嫁は居たまらなくなって里へかへったり、又離緣されたりする。去る七日の新聞紙上に、花嫁の投身といふ題のもとに、出て居たのを讀んだが、僅かに十六で花嫁樣だ、その投身の原因もやっぱり姑と不和のためとある、世間にはこんな例も少なくはあるまい。五十軒餘りの小さい私の村でさへも近頃、姑がえらいとか、仕事の不足を云はれるとか云って、里へかへって居る人が二三人ある。私はこの嫁と姑の不和又は、離婚の多いについて結婚期に少しは關係しはしまいか、婦人ももつと修養を積んでちっとは世間の味をも知るやうになり、二十四五位な年頃で結婚すれば、少しはこんな例もへるだらうと思ふ。



俳句

内藤鳴雪選

○（天賞）
牛歸る鞍に母あり時鳥　伊豫　菊池隆子

○（地賞）
洗ひつゝ人なつかしき硯かな　千住　白妙女

○（人賞）
發心の衣に匂ふ野菊かな　濱松　嵐　歛子

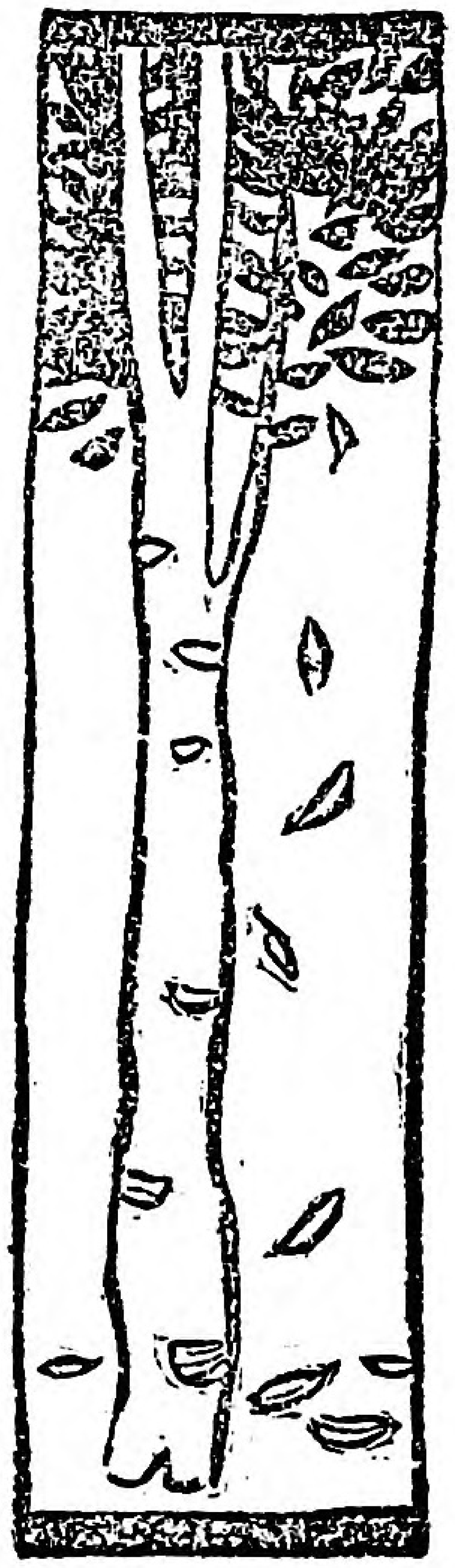
佳作

撫子に雨そゝぐ日や鮓を壓す　京橋　奥村孝子
燒く黍の香ひ一里や秋晴るゝ　京城　瀧本光子
大瀧に僧三千の涼みけり　岐阜縣　佐藤央子
時鳥彩一澤の月夜かな　宇都宮　松井玉子
人ありと啼かで過ぎけり時鳥　信濃　秋野晃
朝寒や末摘花と呼ばれたる　大阪府　田中かをる
魂棚は燈火つけて侚悲し　渡島　小木白董

初秋や窓からもるゝ讀書の灯　宮城縣　長谷川紫葉
蜩や御陵に秋の月薄く　赤坂　古賀まさ子
黄昏を行く雲迅しなつの宵　栃木　木内咲
有明の手許あかるき田植哉　下野　寺の女
水打ちて月あかりあり植木街　水戸市　小湊春雨
あぢさゐの夕べ品よき女哉　京都　一女
うかれ女の磯寺に來てすゞみ哉　三重縣　久子
初蚊帳に寢ねて涼しき月見哉　靜岡縣　菊地づさ子
月今宵蛸見つけたり芋の畑　群馬縣　芝るいか
撫子や庭に露けき石燈籠　牛込　鈴木末子
名月や長閑に寢たるひとり者　京都　吾亦紅
月見草土手八丁の路もせに　山口縣　千香子
水打てば蝶々起さぬ秋の庭　麹町　牧野銀杏
晝顔に汐汲む人の捨荷かな　牛込　鈴山廣子
ひぐらしやすゞしき風の吹く夕べ　四谷　白菊
白露の靜かに傳ふ稲葉かな　福岡縣　宮永歛子
病む人の顔照らしけり夏の月　土佐　はぎ子
夕燒や吾鐘撞て佇めり　京都府　竹村槇子
三千の美女の宴や咲く牡丹　橫濱市　岡本千鶴子
ねむられぬ夜は冬近く犬の聲　王子町　大浪せい子
稲妻や夢の中なる天主閣　徳島縣　山さくら
つむ桑のこゝにも鳴きぬきりぎりす　関口ちよの
銀河近し故里の夜は里祭り　大連　筑紫饒子
人のおて扇動くや闇の舟　京都　川原つぎ子
名月や人なき縁に松の影　茨城　田村かね子

さなきだに淋しき萩のこぼれけり　　　よし子
砂原に松一本の納涼かな　大阪市　大關里野
蘆による潮やかにゝ名なし浦　大阪市　河盛よしの
行く秋や柴苅ひとり木の下に　上野　つめたい花子
鈴蟲や草間がくれの月に啼く　群馬縣　萩野露子
新らしき車にのりて風薫る　宮城縣　小林いさほ
貸家札白きが寂し秋の風　東京　美砂子
涼しさや青田の中の五位下りて　　　操子
紫陽花の窓に經よむ小僧哉　　　松子
青すだれ隔てゝ人と語りけり　　　澄子
川添ひの山涼しさや蟬の聲　枥木　紫波
金蓮に夕日まばゆき佛間かな　日暮里　畠中正子
むち打てど歩らぬ駒や夏の山　甲斐　冷花
青嵐書を讀む人の眉秀づ　枥木　しのぶ子
夏の日やわちやのうらに釜光る　佐世保　長野わきえ
大の字の火を見る橋や風涼し　京都市　花村白百合
松かげをいでゝ花咲く小村かな　加賀　村田いと子
搖籠に眠る美女あり風薫る　土佐　橋田紫葉
黄昏の雲の往來や蛙鳴く　越後　白菊子
十五夜や野風呂に映る影涼し　府下　高木多香子
夕顏や文の使の袖長し　仙臺市　藤村京子
舞姬のうすもの涼し川祭　筑後　涙花子
振り分の昔なつかし蝶の墓　淡島　美津子
聞き居れば徑に音あり小夜時雨　羽前　長澤美也子
朝顏や樹の下かげに花一つ　信濃　保科伊津子

野中行く人の喘ぎや雲の峰　深川　曉子
朝顏や翌咲く宵の露涼し　岡山縣　山本筆
夕顏の花咲く丘や稽あん燈　牛込　夕紅葉
水や空煙に消えて君がふね　吳市　山本哲子
大原や鈴むしすだくあそこゝ　上毛　里野はな子
燈ともせば草木に光る時雨かな　群馬縣　新井つま子
只ひとり時雨ておはす石地藏　群馬縣　里野はぎ子
袖かろく吹く朝風に秋を知る　鳥取縣　田中春子
暮れ方の山血の如し秋日和　美濃　佐藤さをる
名月や壺の襟なる播磨灘　岡山市　桃の村女
名月や落人涙多くして　岡山市　うたかた
いにしへの歌人こひし秋の月　伊賀　福田惠美子
桐の葉や泣く戀もなくて秋に入る　大阪市　小泉貞子
水涸れてすゝきひれ伏す野分かな　山口　卯花子
鳴かぬ蟲も鳴く蟲も皆秋の月　淡路　高田濟子
病院の窓に日まはり花高し　福山　末葉子
夏やせの小猫憐む女哉　鳥取縣　恩田いまの
秋の水石を流れて石に入る　下關市　西村白蝶
名月に一人は淋し草の菴　下總　坂田とめ女
夏雨や蜘蛛のさがりし琴の上　上毛　雲路
鶯鳴く古驛の宿のひるね哉　木曾　月見草
涼しさに少女集る川の中　枥木縣　飯島美乃枝
きのふけふ土用返しの暑さかな　東京市　保間米香
來し文も記るす日記や今朝の秋　神戸　林すみゑ
自轉車を追ひ行く市の蜻蛉哉　兵庫　高田まさ子



初作

編輯局選

○七夕の朝

備前　あきつ

四時起床。室内はまだ鼻を摘まれてもわからぬ程暗い。宵から用意しておいた朱塗の小さい盆と、伊部燒の湯呑茶碗一つ持つて家を出た。外は流石に明るくて、そよ〳〵と吹く曉の風に體に滲染んだ盗汗は拭ふ樣に消えて、何とも云へぬ程氣持がよい。熊山の峰の松に一つ影の薄れた星が眠む相に瞬いて、丸山の端に殘つた月を夢の樣に匂ふて居た。夜露でびつしよりした土橋の上を、草履でばた〳〵云はせながら渡る。澄みきつた水はさら〳〵と氣輕相に流れて居るけれど、岸に咲いた月見草や撫子はしつとりとおいた露に俯向いて、まだ夢からは醒めぬらしい、向ふの山も砂山の松も薄青い霧に包まれて、ぼんやりと立つて居る。萱、嫁菜や露草の一面に生ひ茂つた中を押分けて、小さい道を眞直に稻田へ出た。稻はまだ人の腰程もないけれど、黑ずんで見える程青々して、風の吹く度に葉が裏返つては露がほろ〳〵こぼれる。そして漫々と湛へた水の上に落ちて、小さい波紋を畫くので、倒に寫つた電信柱や樹の影がゆら〳〵と動いて居た。稻の葉先に盆をあてゝスーツとしごいては掬ふ樣にして持上げると、眞白い露は、きら〳〵と赤い面一杯について居る、それをコロ〳〵ころがしながら一緒にしては茶碗にうつす。數は夥しいけれども盆は甚だ擾た。茶碗に溢れる迄には幾度となく同じ事を繰返さねばならぬ。段々と足から裳、帶から袂と、露でもう、しつとりと絞る樣になつてくる、ぴしよ〳〵して冷たいけれど稻の露だと思ふと心地がよい。露に泥つた小蟲を除けたり、盆の泥を洗つたりして、歸る時にはもう、東の空はぱつと薄桃色に褪けて、森の影できり〴〵すが頻りに鳴いて居た。濡れた袂に盆と露を大事に抱いて、まだ消えきらぬ薄霧の中を家に歸つた。忽ち飛び出て來ると思つた妹は振向もせず一心にお茄子で牛を拵へて居た。(地賞)

よく整へて書いてあります。(評)

○お湯

府下　壽惠子

家の前に、此度新らしいお湯屋が出來ました。「始めてのお湯に行くと、中氣がなほるだよ」つてお婆さんが仰有る。ほんと?。中氣がなほるつて其んな人が行けばうつつちまうわねなんかと心の中では思ひながら、別に口答へもせず、「いつてまゐります、濟ちやん早くなさいよ」つて妹と共にまゐりました。前は提灯や旗などで飾り、白地に何やらの紋染ぬいた幕をはつてある。本日より開業仕候と大きく書いた入口の硝子戸がらりと開けると、「いらつしやい」との勇ましい聲も嬉しい――と浴客の視線は、みな我にも「子供一人に流しを下さい」といつた、私は頰の熱するのを覺えた。まだ早い。島田の髷はモウ崩れさうに根元がゆる〳〵下にさがつた變な女が鏡に向つて、ベタクサと左官屋をしてゐる。彼方の湯舟のそばでは裏長屋の娘らしい、十六七の娘が妹を叱りながら流してゐるお神さんの子供をどなる聲だの赤坊んの泣聲だの男湯の方で義太夫をうなり出す聲などさわがしさといへばない。午後の弱い光線は人の丈より高いたうもろこしの葉を通して硝子窓に反射してゐる。すべての物が新らしく氣持のよい事。桶のお湯が少し黄色みがゝつて、新らしい木の香がぷんと刺戟する。湯舟の水は水晶のやうで足の先まで見える。ゆる〳〵立ち上る湯氣の中に靜に體をひたしてゐるとほんとによい心地でしたわ、

しかし、汗もがびりつとしたので思はず飛び上りさうでした。中氣がなほるか否かは中氣らしい人がゐないのですものわかりませんでしたわ。（入賞）

初心らしいが廣く物を觀て居ます。（評）

○たそがれの窓

稲島　千代子

朝氣まぐれに洗つた髪を無雑作にかき上げてオレンヂ色に笑つた空を見つめました。

美くしい夕榮の色は白銀をとかした小浪の面に靜かな光をなげて紅葉した沖の白帆は穩かな海をすべつて遠く安藝の小富士の島影にきえる。

私はいつも靜かなたそがれの窓にもたれて斯う思ふた。

沖善の八重樣と御母樣の目をぬすんでぬき足さし足此窓の下を通つて居た湯殿から兄樣の西洋手拭を持出し、長い袖を後で結んで水の中をかけ廻て居た振分髪の頃がツイ此間の樣に思ふに、其時分は小さかつた柳はささやかな渡守の家をかくして歎い梢をすきとほつた水に寫して居る

同じ十九の八重樣はもう芳ちやんの御母樣……でも幼い時が忘られないのか先達の御手紙にも安藝の小富士の見える里の河口が懷しい……私の樣にたつた一人の小供にくたびれて雑誌を手にしても居眠する方が多いので時々悲觀するつて。

才色兼備の八重樣——一輪の白菊の樣な方でさへ……不足があると云ふのに私は我身の程も知らず勝手ばかり思つて居たのを心から恥ぢた。

向ふ岸に並んだ泥舟から夕餉の煙がゆるく登つて水際近く白い鳥がとんだ。

蘇生る樣な夕風が垂れ懸つた後れ毛を吹くと眞珠の樣なしのぶの水玉がハラ〳〵と散つた。

優しい女の情。（評）

○晝寢した許りに

備後　須賀壽子

初めて見る女子文壇樂しさと嬉しさとにほゝゑみつゝ開いた、すると窓際の松の木に蟬が來て烈しく〳〵啼き出した。あゝこゝは駄目だと私は立つてそつと客間へ入つた。

清々しい風が吹過して床の上に置かれたホクシヤの赤い花が靜かにゆれて居る庭の向ふで可愛い聲がすると思へば妹達が例のお喋り會を開いて居るらしい。私は涼しいのとあたりの物靜かなのに面白い記事を夢中に成つて讀み初めた、とろ〳〵として初めは遠くで田の草を取る若い女や男の笑聲がほんにかすかに〳〵聞えて居たがそれも暫し全くいつの間にか眠つてしまつた。

「ハハ……」「まあどうぞ」あちらが幾らか涼しう御座いますからさあどうぞ」と目が醒め、おや誰かいらしつた私は電氣にでも觸つた樣に吃驚りして飛起き廊下を彼方へ今し障子を明け樣と急いで居た處足のしびれがミリ〳〵痛み出したので、美事お客と母に見つかつてしまつた。

「あら、どうしたの」母は一目見て笑ひ出した、お客は眼の大きな鬚のある私の知らない若い男の方だつたが如何にも可笑しさをこらへかねて居られる樣子私は眞赤に成つて一寸會釋したまゝそこ〳〵で逃げて來た。

さお氣に成つて堪らない胸がドキ〳〵しだした、大急ぎで姿見の前に行く、まあ見て吃驚り私もたうとう吹き出してしまつた。

額や頰や鼻の上に赤い丸い紙切れが幾つも〳〵貼り付けられた其顏の滑稽さ、まるでお化け見た樣、私はつく〴〵口惜しくもなり泣き度くも成つた、いたづらは屹度お隣の妹にきまつて居ると思つて、そこらあたりを見廻したけれど聲も影もない。少なからず不平を鳴らし〳〵紙を一つ一つ取つて居ると母が來られて「先日の仇を討たれたねえ」と矢張り笑つて居られる、私は腹が立つてしかたがない。

「あの方なんだよ先達東京から歸られた森川の若いのは、又一寸御挨拶にお出でよ顏でも洗つて」と母は笑ひ〳〵あちらへ行かれた。

私は今更赤く成つてきまりが惡くてどうしようかしらんと恥かしくて一方ならず狼狽した。

赤くなつたお顏が見えます。（評）

○眞夏の思ひ

對馬　夕陽子

炎を吐くやうな眞夏の光は縁側から室に一ぱいに流れこんで來た。寒暖計は九十二度、萬象皆默してそよとの風もない。うらの松の木では蟬がさわがしく鳴き續けて居る、朝顔は强烈な日の光に首うなだれてゐる。今朝は大きい白が五つ紫に斑の入つたのが四つ咲いた、紫のは一つ無慘にも開いたまゝ踏みにじられて居た、まあ誰がしたのだらう可愛相に。私は其朝顔を紙につゝんで本の問にはさんでおいた。

外は、威勢のよい氷屋が日に燒けた赤黑い顏に湯のやうな汗を流してコホリ〳〵とさけび乍ら行く、つひ此間まではあめ賣をして居たがもう氷屋になつて居る。暑いせいだらう頭痛がして本を讀む氣にもなれない裁縫は尙更出來ない、じつと蟬の聲ばかりきいてゐるとバタ〳〵草履の音がしてお隣のゆくえさんが蟬を持つて來て「これは武ちやんにとつてもらつたの」といつて鳴き止むと腹のあたりを押して又鳴かした「私又とつてもらつてよ姉さんにこれ上げませうか」『ホ、、、私いりませんうらに澤山居るから」いつか姉さんの都合のよい時泳ぎにつれていつて下さいな、お母さんは姉さんとなら行つてもよいつて被仰つてよ」と云つて私の顏をのぞきこんで居る「ちやあ明日一所に行きませう」。「さううれしいわ」筒袖の着物にお下げの髮をピン〳〵させ乍ら彼方にいつて仕舞つた。其無邪氣な後影を見送つて居た私は、ふと去年の十二月ゆくえさんの姉さん――私の親友がお嫁ぎなさる前夜、涙にぬれた顏をあげてゆくえを賴みますと仰つた事を思ひだした。夕顏棚のあたりに凉む時ゆくえさんに、姉さんに逢ひたくないのといふと、かあいゝ小首を傾けながら私逢ひたいの……子供心にも寂しさうであつた。

このやうな調子で進んでゆくとよろしい。（評）

○夕ぐれ

神戸　むらさき

音は、靜に人の心をさそひたてるやうに、寂しい明るさを、雲から雲へ流して、ちり〳〵と沈んでゆく。窓のガラス戸を開け放して、身をよせ、ぼんやりと、あてもない心をば、あてどもなくさまよはして、没日の色や、雲の姿をながめた。

没り際の日は、赤く大きく見えた、光線は薑の樣に、さうけばく〳〵しくはないけれども、それでも、おちついた華かさを、西の空にみなぎらして

北につらなる山々を、蒔紫にうかして見せた、かうした夕暮は、たいていどこでも靜寂を味はれるものであるけれども、こゝではそのやうな、床しいなつかしい事は、到底望み得られるものではなかつた。突然、私の心を破つて、ボウツ……と、汽笛がなつた、續いて造船所からも紡績工場からもなりはじめた。そのうちに職工が、見ぐるしい顏色をして、不調和な姿で、一歩々々つかれを、きざみつけて歸へつてゆく。一日の勞働に、痛ましくもつかれたる、彼れ等が瞳よ、そのあとから工場のドド、ドといふ濁つたとゞろきが、かぶさる樣に、追ひかけてゆく。もく〳〵と黑蛇が、うねくる樣な煤煙は、幾條にもなつてたちならび、夕榮のこがねの光を、くすべてゆくのである、煤煙のとゞろきがひろがつて行く、行末をばみつめて居ると、何かしら情なくなつてくる。夕榮の色は、だん〳〵うすれてゆく、沈んで。しかも、華やかな色は、私の最も好ましいものである。

癖のない文章を書けるやうにしたいものです。（評）

○嬉しい月夜

信濃　靑木よし子

私は何遍も書籍屋へ行つて文壇が來たかと主人樣に申すと未だ來ないとの事に私は非常に落膽しましたので。家へ歸つても矢張心が揺つて居ないので、亦二三日經つて行つて見ますと、此度は來て居たので直ぐ白銅三個を渡して少しく其處で本を繙いて、俳、歌の二頁をみますと圖らずも私のが掲載つてゐたので喜悦を催しました「本屋を出て街を眺ると電燈は仄あはく輝きて人家に反射してゐました、それで周章しく家に歸り二階の六疊の間へ入ると風の流通が出來ない爲室が蒸し熱いのですぐ障子をあけました。漸やく爽やかになつたから又今の文壇を見て居ると何んだか戸外に人の聲がするので出て見ると、同窓の菓子樣で私を誘ひに來たのだと云ふのでさつそく本を閉ぢて菓子樣の云はるゝお儘に家を出てしまひました。種々雜談をしながら公園地に足を運びました。公園に入ると四邊は靜寂でおつて人の聲だに洩れず僅か蟲の鳴く聲が聞えるばかりですその淋しい中を二人であゆんでおる中に疲れたので四阿に腰をおろしました歸りには月が出て私等兩人を門口迄見送つてくれました。

熱心に書く中に上手になります。（評）

誌友評論（二）

一記者

▲四國（上）

◎長曾我部菊子は假名にして、本名は西崎花世と云ふ四國の誌友といふよりも、女子文壇誌友の先輩として多くの私淑者を有する彼女は、今や東京の大旋渦中に在りて、かよわき女の身ながら一枝の筆を以て世の荒波と戰ひつゝある。

◎彼女は阿波の徳島に生れた、阿波と云へば義太夫を想ふ、お鶴を想ひ、お弓を思ひ、順禮歌のあはれを想ふ、藍の葉は昔のやうに作られないが、由來四國は毛色の變つた人間を産出す。

◎菊子は、早くより學ぶことが好きであつた、彼女は暫く郷里で教鞭を取つてゐたが、山低く、野平かなる地に彼女の心は獨り平かでなかつた、其穩健にして圓滿なる家庭にこそ彼女の心は維がれてゐたが、彼女の魂は燃えてゐた、海の彼方にひたすら憬れてゐた。

◎餘りに靜に寂しい周圍に護られて、彼女の空想は縱まゝに翔つたが、元來理性に明るい彼女は、深く考へた、考ふるものは、行ふことに迅速だ、俄然弦を離れた矢の如く東京に來て了つた。

◎何の爲に來たかは深く糺すを要しない、然し、彼女の空想は用捨なく片ぱしから壞されること、他の多くの東京を夢想して上つて來るものと選ぶところはなかつた。

◎長曾我部の名は夜雨氏が與へた名である、頻りに火の鞭を振り廻す筑波嶺の法師は、彼女をすら燒爛せしめんとすれど、必ずしも彼女を憎むものでなからう、彼女も亦徒らに氏に對する尊敬の度を高低するものでなからう。

◎彼女を偶然に知つた水野葉舟氏も、亦彼女の爲に陰に陽に計る處が多かつた、健全なる獨身を標榜する島千代子女史も亦、彼女の味方であつた、表によわ〱しく、底に強い彼女の性格を理解して、彼女の爲に一方の路の拓けんことに心を勞するものは、必ずしも二三の人に止まらない。

◎女子文壇興りて僅に十載に滿たず、人の出ない

ことも無理はないが、其間に在りて、名を知らるゝこと菊子、邦子の右に出づるものはない、自づから人に先んずる處がなくてはかなはない。

◎邦子と菊子とは全然相反したる性格を有す、邦子の血は舊くして、而かも新しきを行はんとするもの、菊子の血は新しくして、而かも舊きを行かんとするもの其表面のみを見て判斷すれば、恐らくは正背を失はん。

◎菊子と尤も似たる性格を有するものは、太田喜志子であらう、喜志子には記者一面の識なしと雖、其性行必ずや一致する處があらうと思ふ、其私信に見るも、其筆蹟に見るも、其行動に見るも、進んで其作物に見るも、兩者太だ相肖たるものがある。

◎菊子は、文章の達者なる點に於て、誌友に中錚々たるもの、彼女毎に自ら一冊のノートを携へ、見るもの聞くもの、感ずるもの、悉く書き綴りて既に七十有餘冊を積んでゐる、婦人として此の如く多くを書き得るものは少ない。

◎**多くを書くからとて、必ずしも稱揚するに足らぬこ**とは無論だ。多くを書き得る丈けの素質が養はれつゝありや否やと云ふことが問題で、幸ひに彼女自己も其を知つてゐるから、多くを書く爲に吾人の憂ふる處は少くなりつゝある。

◎純なる藝術品として世に問ふほどのものは、然う澤山ないが、彼女の方向は藝術の方に向つて行くといふことは分る、眞面目な努力をしてゐる、浮調子ではない、彼女の天分は豐かでないかも知れぬが、彼女の理性と、彼女の情性とは、一般の婦人よりも底の力が強い、何時の日かは峠を越ゆるといふ自信が、始終彼女の胸に在る、彼女の賴みとする處は、實に此自信にあるので、若し誤つて自負、自慢に陷ればいざ知らず、然うでない限りは此自信は彼女の生命だ。

◎今此處に既往に遡つて、彼女の文章を一々解剖し、批判するの餘裕はないが、初めより彼女の文章は沈着にして、寧ろ冷靜に過ぐる位であつた。多くの花やかな告白や、けば〱しい述作の中に、彼女の作爲する文字のみは、じみで、つやけしで、少しも他を挑發する處がなかつた。それでも猶ほ多くの讀者を牽引する力を持つてゐたのは、**彼女の持つて居る人生に對する一種の執着力**とも云ふべきものゝ反映に外ならない。

◎或る場合に、彼女の文章は餘りに廻りくどく、平坦に流れて、味ひの淡さを嘆かしめた、取る處は淡々として盡きざる想泉の豐かな處にあつたが、彼女が若し

昔のまゝに郷土に在つたら其泉は遂に甘くも辛くもない淡々たる無味の水に終つたであらう。爾來幾多の經歷、幾多の刺戟は、更に彼女に豐かなる想泉の源を成した。

◎今や彼女の書かんとするものは、一轉機せんとしつつある、本號掲ぐる處の歸省の記(次號掲載)に見ても明かなる如く、彼女の眼界は稍開けて來た、彼女の觀察は漸く地平線上に表はれて來た、今にして開發せずんば何れの時に開發するの期があらう、菊子たるもの漸を逐ひ、層を積みて今日に到る、今日以後の造詣は、實に其の檜舞臺に於ける舞踏とならなければならぬ。

◎菊子には著しい天才の閃きがない代り、女性としては他の追隨を許さぬ努力がある。滅び易き天才よりも根強き人才が最後の勝利を占むると云ふことも、文壇には有り得る事實である。

◎女性は男性よりも執着力が強いやうに思はれるが、其實は執着力が弱い、創作に對する熱度の如きも、大抵或る度まで上ると、それからは下り坂となる。執着力のみで創作に成功するとは言へないけれども、少くも一要素だとは云へる。只執着力のあるものに限つて進歩がなまぬるいと云ふことが往々にある、なまぬるい執着は、其人に取つて不利益だ、利不利は創作に使ふ言葉でないかも知れぬが、不利な立脚地に居ることは宜いことではない、有利な立脚地に居るのは誰しも好ましい處で、なるべくなら有利な執着力を持つてほしい、單に作つてゐると云ふだけでは、執着力の宜いものとはいへぬ、飛躍する時には飛躍し、濶歩する時には濶歩する、而して始終熱度を保つて居る人なら、何事も飛び拔ける日は來なければならぬ。

◎四國の人は概して執着力が強いやうに思ふ、自我的の立脚地から來るのもあるだらうが、宜い意味に進んで行かうとするのもある。

◎四國と云つても廣い、讃岐と云ふ國は餘り文壇にも人を出さないが、土佐と云ひ、伊豫と云ひ、相當知名の人が出て居る、土佐には土佐の型があり、伊豫には伊豫の型がある、阿波にもあるだらう。菊子に似て同じ阿波の人、以前の吉田紫花、今の松並紫花の如き、菊子をそつくらの處があつて、其作品の表現を見ると其人が想はれる。

◎四國にはなほ土佐の譽田順子、梶原重子、同留子などいふ人がある、紫花女等と共に次號に於て、多少吾人の意の存する處を述べてみよう。



化粧問答

化粧研究會
婦人修容會 顧問 藤波芙蓉



問 私の御友達の中で、女子文壇を愛讀して居ります方が七人ございまして、この七人の御方と共に、化粧品は皆先生御發明のものばかりを文壇社の方から御わけ願って愛用致して居りますが、先生御發明の品々の外に、どうしても化粧水と化粧下クリームと白粉とがなくてはなりませんので、これだけは據なく、他のものを求めて使って居りますが、どうも不安でなりませんから、餘り勝手な御願ひですけれど、右の三品も御序手に、他のコールドクリームや美髮劑と同樣、先生御手づから御調製下され、文壇社の方から御わけして頂くやうに參りますまいでせうか、これは恐らく私共八人の希望に止らず、女子文壇の愛讀者にして、先生を御信頼して居る御方々一斑の御希望と思ひますから、御面倒で、御多忙の御身に、さぞ御迷惑でございませうけれど、枉げて御聞濟み下さいませ。(月の桂女)

答 私に左までの御信頼下さる御芳志の程

芙蓉深く感謝致します、佳人は己を愛するものの爲めに裝ひ、志士は己を知る者のために死すとか申すさうですが、承知致しました、一番發して御望みの品々を精撰して別製して見ませう併し普通のものでしたら今直ぐにも出來ねことはありませんけれど、荀めにも私の名を其製品の責任者として出し、斯くも御信頼下さる諸姉妹方に使つて頂くからには、相當苦心の研究と實驗とを經た上でなければなりませんから、玆暫らくの御猶豫を願ひます。

問 藤波先生の御手紙はチャームなんですつて、殊に御目にかゝつて見ると、私共の想像して居るやうな優しいニヤケた所がなく、凜々しい男性的の中、强い不可拒のチャームをお持ちなんですつてね、併しそれで冷靜な理性的にして警戒、嘲笑と申すやうな御心を包んで居らるるのを或動機で知つたと云ふ人もあります、つまり先生はお筆や御樣子の上では同情遊ばしてお心の底では女性を容れて下さらんお方だと申すことですが、全體先生は私共に對してドンな御考をお持遊ばして居らつしやるのでせうね、それを承つた上で、私は色々化粧上の御敎を頂きたいことがございますのですから。(紅薔薇)

答 これは又隨分思ひ切つた御尋ね、流石の**私も面喰の態です、**併し少々お門違ひではありませんか、**私が貴孃の御聟になりたい、**お嫁にほしいとでも申込んだ時でしたら、成程私の心、行爲を御取調べになる必要もあるでせうが、それにしてもそれを當人に御聞きになることは奇拔過ぎて間が拔けて居るぢやありませんか、私がチャーム的だか、冷酷だか、それは見る人々の御勝手、自分に彼是れ辯解するの愚は演じますまい、併し紅薔薇の君、化粧の問答に、芙蓉の女性觀が何の關係あり、何の必要あるのでせう、私等は求道の人、須らく「依法不依人」たれと申され菩薩は自分の修養の爲め惡鬼の說法をも謹聽するとあります、實を申すと藤波とて人ですもの男ですもの、氣に入つた人もありませうし、嫌な女もないわけには參りますまいさ、そんな事に係らず、化粧上のことを何なりと御尋ね願ひます。

問 八月號の耳袋の中に、五加油のことが出て居りましたが、あれは全く功能がありますでせうか、若し本當でしたら、それを要さねばならぬ程のこの憐れなる身の境遇に一掬の御同情をたまはり、御調製遊ばしては。(夢の女)

答 さア如何のものでせうか、これは私よりも其筆者たる猿丸太夫先生に御尋ね下さつた方が捷徑でせう、が科學の進歩は、今や他にいくらも正確な妊娠法も又避妊娠法までも發明されて居るのですから、必ずしも五加油の力のみに御俟ちになることもないことゝ存じます。但しこれは本問答の權限外ですから、御氣の毒ですが、**これ以上の答は玆では御免を蒙らねばなりません。**

問 (一)手の黑いのを白くする法(二)眉毛を長くする法、それを何卒。(田舍女)

答 (一)過酸化水素水の五プロ以上のを御つけなさい。(二)ペンゾールを輕くすり付けなさい。

問 胎毒腫物のために生際の禿げましたの

を生やしますには。(金澤、苦悶女)

答 十プロのエヒカリン酒精三十グラムに香椒丁幾五グラムを混和したものを御つけなさつて御覧なさい。

問 (一)先生のお著はし遊ばした新式化粧法の中に、薄毛の人は花肉荳蒄油に少量のブランデーかウヰスキーを混ぜて頭皮に擦込むと御座いましたが、その花肉荳蒄油と申すは、只の肉荳蒄油と違ひますでせうか(二)御社から御わけ下さる美髪劑は髪油がはりになりませうか。(花子)

答 (一)肉荳蒄油ではありません、肉荳蒄の花の油です(二)なります、併しそれには寧ろ美髪香油の方が更に適當でせう。

問 五月號の御答に、入墨を除去するには電氣療法がよいとの仰せでございましたが、それはドウいふ工合に致しましたら宜しいのでせうか、普通身體にかけます電氣器で差支ありますまいか、而して若しや電氣をかけまして其所が痕になるやうなことはございませんでせうか(山城、野菊)

答 これは専門の醫師に手術をお受けなさい素人にも出來ますが、加減をソコネルと痕をのこす恐れがあるからです。

問 鼻の上に雀斑がありまして、これまでいろいろの藥や化粧水を用ひて見ましたが、更に効目がありません、一體雀斑といふものはドウしても除れないものでせうか、艶肌劑はかゝさず使つて居りますが、どうか先生のお力で危險でない、輕便な療法を。(麹町、愛讀女)

答 御尋ねの通り雀斑は人體の色素異常中もつとも除去しにくい難物の一つですが、その艶肌劑を御使ひとあれば、それを御つけになつた上に、白梅、ゆずの枝、浮草、小皂角を等分に合せ、水で煉つて御つけなさつて御覧なさい。その雀斑發生の原因如何によつては、四五日で直ることもありますから。

問 白色劑としての過酸化水素水は何處の藥屋でも求め得られませうか、若し御願が出來ますれば、先生の御手を煩はし上げたいと存じますが。(山口、あやめ)

答 工藝化學用の藥品を賣つて居る店なら何處にもあると存じますが、御望みとあれば私の手でこしらへて差上げても差支ありません。

問 純植物性洗粉の定價を。(宮城、野百合)

答 文壇社代理部へ往復ハガキで御問合せ下さい。

問 (一)顔のキメあらく、毛孔大きく、時々ニキビが出來、アブラ性ですが、輕便によくなる法を(二)コールドクリームを使ひましてから、一入アブラが強くなつたやうですが(下關、田舎女)

答 (一)アルカリ性石鹸精を、よく御顔にすり込み、一時間程してそれをよく洗ひ落し、その上に艶肌劑を御つけなさい。(二)アブラ性の人にコールドクリームの單用はいけません、先づコールドクリームをよくすり込み、それをサツパリと拭き去り、その上に艶肌劑をつけないといけません、と云ふてコールドクリームをヌキに致せば皮膚を軟滑にすることが出來ませんから艶肌劑のみの單用もいけません、それでこの二品を離すことの出來ぬ「姉妹劑」と申すのです。

問 (一)ニキビの痕が小さい孔になつて居るのを取りますには(二)顔の肌理ブツブツとしておしろいのノリませんのを直しますには。(備後の女)

答 (一)、(二)共に姉妹劑を御使ひなさい、先づコールドクリームをすり込んで、よく摩擦なされ、それをよく拭き取つて艶肌劑をつけるのです、但しこれはチヨツトやソツトに成功すべくもありません、暫らくの御辛抱が肝要です。

問 (1)鳩胸の上に乳が大きいので着物の着こなしが、どうも思ふやうに參りません、如何致しましたら格好よくなりませうか(2)新式化粧法の中に御説明遊ばされてありますプードルドシヤボン、石鹸膏、ブンヅイン水は、いづれに賣つて居りませうか。(下關、花枝)

答 (1)容儀格好のことに就いては、精しく先月號の「淑女かゞみ」に「美容法」と題し述べて置きましたが、貴孃は若しや其鳩胸をかくさうと思召して、特に襟をかたく御そろへになつて着物を着られ、乳の大きいのを見せまいとて、脊をかゞめなどなさりは致されませんか、それでは一入目立つことになりますから、飾り襟をキチツと打ち合はさずに、上着、下着の襟をそろへて胸の間をあけ、襦袢の襟を緩るくして前に引出し、それで胸をかくすやうになさいまし、(2)プードルドシヤボンは、大きな化粧品店にある筈、石鹸膏は拙著にも書いてある通り、御自製なさるべく、賣品にはありません、ベンヅインは藥店にあります。

問 (一) ニキビで凸凹になつて居るのを、

（二）文光堂のニキビ劑をつけますと色が黒くなりますが、（三）道を歩いて居ますと急に體内からアブラが出ますが、（四）先主御發明の品々を地方の化粧品店に賣らして頂いたら、以上何卒御答を。（神戸、しず女）

答　（一）（下關、田舍女）さんへの（一）の答を御覽下さい、（二）一時黑くなつても、ニキビの毒が全然よくなれば自ら取れます、この黑くなるのはニキビの毒に對拒する一時の反應に過ぎんのですから、（三）サルフィア蕤丁幾一グラムを六十グラムの蒸餾水に混じ、一日三回に分服なさい、（四）各所の化粧店から屢々御同樣の申込みを受け、社長も如何しようかと云はれて居りますが、少々私も思ふ仔細がありますのでお斷り致して居ります、私は必ずしも澤山に買つて頂かうとて調製したのではないのですから若し單に澤山賣らうと思ひますれば、品質がどうでも廣告さへ大げさに出せば、誰でも買つて下さる今の世ですものね、それなら何も私の調製したものでなくてもよい筈、地方の化粧品店は、その方を賣つた方がよいと存じます。

問　（一）五月頃から過酸化水素水を使つて居りますが、毛につけば脱白すると承り、中止致して居ります、然るに二ケ月程しますと眉毛が少し赤くなりました、如何致したら黑くなりませうか、（二）蛋白質、白檀、含殺粉はいくらつゝドウいふ風に用ひますのでせうか。（淋しき田舍の一女）

答　（一）桐の葉の煎じ汁でセッセと御洗ひなさつて御覽なさい、（二）精しくは新式化粧法を御讀みを願ひます。

問　（一）貴著「合せ鏡」の中に、オードトワレツトなりキセロルビネーグルなり云々と仰せられてありますのは、キセロル萬能香水のことでございませうか、又はキセロル洗面香水のことでございませうか、（二）同じく「鼻端とか上顎とかの常に汗ばんでおしろいの剝げ易い邊にビネーグル（醋酸、安息香丁幾、カンフル丁幾各三・〇、酒精五〇・〇より成るものか、若くはキセロルビネーグルをよしと致します）」との仰せのうち、キセロルビネーグルとは矢張りキセロル萬能香水のことでございますか、（三）同じく「化粧下クリームを塗る前に、プエストヅールをその汗ばむ所につけておけば」との御言葉でございますが、これは前のキセロルビネーグルを用ひましてはいけますまいか。（四谷、町の女）

答　（一）御察しの通り オードトワレットはキセロル洗面香水、キセロルビネーグルはキセロル萬能香水のこと、（二）御尋の通りです、（三）キセロルビネーグルでも代用にならぬことはありませぬが、その化粧下クリームの性質によつて、あとのお化粧の上に影響を來すことがありますから、この場合、プエストヅールを御つけになつた方がよいでせう。○（はつみ樣へ）、御手紙は正に拜見致しました郵券までお入れになつて居られたから、無論直ぐ御返事すべき筈の所、文壇社から屆けて參つた貴孃よりの御手紙は中味だけで封筒がありませなんだので、御住所も御姓名もわからず、社の方へ問合せても解らなくなつて了つたと申します、それがため返書の差出しやうがなく、心苦しく思ふて居ります、何卒改めて直接拙宅の方に宛てゝ御尋ねを願ひます。○（芙蓉白す）　直接の答を御望みなさる方は、拙宅へ、誌上にて答を待たるゝ御方は文壇社宛にて御願ひ致します、でないと右のはつみ樣は對するやうな失態を演じ、又私の方に匿名にて誌上の答を要求になるゝ御書面ですと、直ぐ返事する必要がないとの心のゆるみの爲め、時に何處かへまぎれ込んで了ふことがないと限らんからです。猶は御手紙の文字は、達筆に美しくと云はんより、明確に解り易く御認めの程を願つて置きます。

注意

▲化粧問答は一人一題の問ひに限ります▲化粧に關係の無い病氣や衞生上のことをおたづねになつても答はいたしません▲化粧問答の原稿は本社に宛てゝ送ること▲問答以外、又は問答に就いても直接藤波氏より通信を要する手紙類は、牛込區赤城下町九番地、藤波芙蓉宛に發信をねがひます▲問答はだいぶたまつて居ますが、追々到着順に答を發表いたします。

讀友くらぶ

交際

○ビーシー晩香坡市郵函一七一二　池川むら子

▲バンクーバーより　先達妾誌友のみなさんに書籍交換をおねがひしたけれど申込の方がひとりもありませんの、だから交換は止して日本の美しい繪はがき下すつた方へ左の雜誌を進呈いたします、尚書籍御送附下されし方へは相當以上の御れいいたしますの、コスモポリタン、レッドブック、グリーンブック、ブリユーブック、ポプラー、スミス、リツピンコット其他美しい畫報婦人雜誌(P. O. Box 1712 VANCOUVER. B.C.)

○函館區東河町二二一磐方　谷内ちよ子

▲寂しい秋　背よりも高い唐もろこしの莪が色づき、ホロ〳〵と朝露をよろこんで叢に鳴く蟲の音から寂しい北海道の秋も來ました。凋落の秋！寂しい秋！あゝ此の世の中がだん〳〵さびれてゆくやうな秋が來ますと妾は何故かいつも知らぬ土地が戀しくなつて仕様がありません若し皆様の中で地方の風景寫眞がありましたならお送り下さい、どんなのでも構ひません。お禮には當地近在と樺太の寫眞を送ります。

○澁谷の里　鈴木光子

▲私は今まで　熱心な少女の愛讀者でございましたけれど少女改題に付いて本誌の愛讀者になりましたどうぞお姉様方不束ものをお導き下さいませ。

○秋田縣横手町　津村孝子

▲長野の方に　私は佛都たる長野市は戀しう御座います長野の方よ何うぞ佛都の様子を委しく御知らせ下さいね。

○山口縣長府町松原　久保みどり

▲ながく〳〵本誌　の愛讀者で御座います誌友のお方から時々お手紙いたゞきましたがこの度あらためて誌上で御交際をおねがひ申上げます

○土佐高知方新要法寺町五十四番地濱田方　小松和

▲文學に　趣味を持つておらつしやる方にはこれから、先々、文學に努力しようとする方に趣味多い御交際を願ひます。

○淡路津名郡郡家馬區内　清木夕月

▲千鳥　に名を得し淡路の島かげより。最早休暇も殘りすくなになつて參りましたわね誌友の御姉さんます〳〵御丈夫でどなたかムーンライトリナタ(月光曲)御存じの御方は御教へなすつて頂戴な。

○福井市錦下町三十九番地　ゆふひ會

▲ゆふひ文壇　我會は皆様の多大の御盡力をかうむり破竹の勢で發展して來ました。それは皆様の御影によると深く御禮申し上げます。我會發行の『ゆふひ文壇』も約六十頁も進歩し寫眞版等も入る身分となりました。皆様の内で未だ入會なされなかつた御方は一錢切手七枚と投書とを入れて早速申込んで下さい。

○山形縣酒田寺町齋藤正五郎方　齋藤ちよせ

▲少女より●●●●　記者様本屋から買つても愛讀者でせうか。次に誌友の諸姉様私は姉妹よりはなれて一人淋しく下宿してる身です。どうぞ少女の雜誌御玉章交換したう御座います。他に少女の満一週年紀念號御持の方が御座いませんか、どうぞ一冊御送り下さい。

○山口町　橘　貴美子

▲哀な蟲の音●●●●　も何となく悲しくきこえほんたうに淋しい秋ですのね、私は毎日白萩かをる其下で淋しく暮して居るものでございます以後何卒御導き下さいましね。

○神戸市若菜通六丁目七十三番　濱中孫次方　中田雪花

▲誌友の諸姉様●●●●●　私は前々月より愛讀者の一人となつて居ります誠に不束者で御座りますが永久に御交りを御願ひ申します。

○神奈川縣川崎町砂子森方　富田隆子

▲歌と俳句●●●●　私は今年の一月から本誌の愛讀者になりました、下手なものずきと申しませうか和歌や俳句が非常にすきでときぐまねて見ますがどうも感心に下手です、すみ渡つた月が部屋にさしこんでくるたびに皆様はどんな立派な作をおつくりでせうと思ふことが度々です、どうか時々作られた歌や俳句をお送り下さい、お願ひいたします。

▲身長器●●○　福井市にて　芳代

私は米國ケンオミエンショス氏の身長加器を所有して居ります、もし御入用の方がございましたら誌友欄に出して下さい、氣長ーすれば効があります私は氣早ですからそのまゝはいたさなかつたのですが一寸程延びます、御ゆづりにても御かしにてもいたします、御なじくは貸します。

○佐世保市花園町一八一　西村香の枝

▲不幸●●　誌友の皆様に妾はまだ浦若い未亡人なので御座います、良人とはほんの名許りで結婚の翌日上京の途につき都下の某學校に在學中癒らぬ人となりました、世に不幸な方も多いが妾の様な者がありましやうか、もし妾と同じ境遇に泣かれる方がありましたら永久に親密な御交り致し共に慰め合ふではありませんか。

○東京下谷根岸元金杉一五三　薄井野菊

▲御情あつき方々よ●●●●●●　ゑはがきやレターを頂戴な御返事は屹度致します。

○横濱市福富町二丁目五十四番　地飯島方　松粲

▲私はこの女子文壇●●●●●●　を友として毎日淋しく暮らして居りますのよどうぞ誌友の皆様よどうぞ永久にお交り下さいましね。

○淡路津名郡釜口村里木浅日社内　淸水花子

▲同好の姉様方に●●●●●●●　お懐しい姉様方、私等が矢張り文藝狂と云ふのでせうか?近頃毎月一回小品文、和歌、俳句を集めた廻覧誌を出して居ます、それが仲々達者に育つて居ますよ、そこで出來る丈皆様の御盡力に浴したらどれ程嬉しいか知れませんわねほんたうに——。勿論社費が毎月五錢入ります。それが紙や高點作の薄賞です。

○横須賀市逸見町三五七深田方　佐藤花月

▲誌友の皆様●●●●　私も本誌の愛讀者の一人で御座いますから何卒御交りを願ひます。

○兵庫縣佐用郡石井尋常高等小學校内　波留那芳湖

▲廣島の方●●●●　私は以前廣島に居りましたので廣島の御方はことに懐かしう御座います彼の地の御方どうか御手紙下さいなキット御返事いたします。

○栃木縣安蘇郡田沼町小見治江伊之吉方にて　淸子

▲農業を愛す●●●●●　私は本社よりは二十里餘りも隔つる片田舎の生れです私の樣な淋しい心根も何うやら此鮮やかな誌友の皆さんを見て一しほ交際を願はしくなりました農業に趣味を置きます誌友の皆さん心ある者は思想の交換でもよし繪葉書又雜誌なりとも御交換を願ひます。

○近江國坂田郡柏原村大字小野　近藤常子

▲私は先月愁舟●●●●●●　と改名致しました誌友の皆様今後御手紙下さる方は御承知下さいませ、七月號にて御ねがひ致しましたら各姉上樣より繪葉書や御手紙くださつて有難くスグ御返事は上げておきましたけれど重ねて文壇誌上をかりまして御禮申上ます。

○愛知縣豐橋市小田原町五十二　八木秋

▲新らしく　文壇の愛讀者になりました。誌友の諸姉上樣不束者でございますが永久に御交際を御願ひ申上ます。

○　京都　伊藤みゆき

▲おわび　本誌八月號に御交際を御願ひいたしましたみゆきは七月の末から病氣療養の爲めに諸所の溫泉に湯治にまゐりました、その爲め御なつかしいみなさまのお玉章は符箋の三枚もしたのを御うけいたしましたこんな有樣ですから御うけいたしましたのはみんな御返事を申し上げましたけれど中にには御返事をお上げしなかつた御方もあるだらうと思つて居ます、それで誠に申譯も御座いませんが今申した樣な事で御座いますから何卒御情深い御心の一片を御割き下すつて御許しの程がお願ひ致し度う御座います、貴い誌上を拜借しまして誌友の諸姉樣に幾重にも御侘び申ます。

○　廣島縣佐伯郡嚴島町　加茂章子

▲嚴島より　本誌愛讀の皆樣さしも暑かつた夏も去つて燈火親しむ可き頃となりました、記者樣を初め皆樣には御變りはありませんか皆樣よ御暇の節は遊びに入らつしやいね嚴島つて隨分よい所よ遠い所の御方には繪葉書を送るわ。

○　長崎縣北高來郡田結村二〇四　町田俊子

▲白百合　私は此度白百合と云ふ雜誌を思ひ立ちました、どうか御同情下さいまして誌友の皆樣方短歌、小品文、詩なんかを御投稿お願ひ申上ます、出來ましたら御投稿下さつた御方々にさしあげます。

○　兵庫縣神崎郡甘地　坪田龍子

▲コスモスが咲きました　歌に詩になつかしい秋もいよ〳〵深うなりました記者樣並に諸姉樣方、私は未だ肩上のある子供ですが、今度本誌の愛讀者となりました。どうか今後は妹とも思召してお導き下さいませ、お願ひ致します。

○　目白高女にて　中山千代子

▲在校の御方　誌友の皆樣の內女學校に御出遊ばす方々にぜひ濟き御交りお願ひいたしたうございますなにとぞ御文御めぐみくださる御方は牛込區若松町百十三あてに御出し遊ばしてくださいませ不束ながら御返事さし上げたうございますから。

○　長野縣東筑摩郡上川手村　增澤とり子

▲私は信州の山中に哀れな生活をしてをる者で御座います、誌上の御姉上樣方どうぞ御同情を以て御交際下さいませ。

○　吳市淸水上通り　佐々木ゆきえ

▲私は二月よりの愛讀者で御座いますがまた一度も投書は致しませんが皆樣と御交際が求めたいのです、無學の者ですが何卒御手紙の御交際を樂しみに待つて居りますわ早くね。

○　越後柏崎町一五五〇　芹田紫紅子

▲私は浪風あらき越路の濱邊に友もなく寂しく暮して居りましたが先頃友の島田榮子さんの誘めによりまして此度より愛讀者となりました、皆樣わりなき御交際を！

○　埼玉縣粕壁町古谷萬吉方　伊東とし子

▲梧桐一葉　天下の秋を告げ漸く冷氣を身に覺えました、諸孃よ如何です私は本年よりの本誌愛讀者です御惠み深き皆樣よどうか御手紙や御端書の御文通をお願ひ申ます御返事はきつと差上ますよ。

○　下妻町　大久保みどり

▲夜雨先生　私は夜雨先生崇拜家の一人ですあゝ詩を愛するかの先生は筑波ふもとの橫根の里に御住ひ給ふのです私はすぐる晩春の夕大寶の家より幼き從妹をつれて日頃我崇拜せる師いますかの地をさまよひました、しかしたうとう先生の宅は見つからなんだ末筆ながら夜雨先生御健全に……。

記者より

△紀伊、長谷川白百合さんに、いろ〳〵との御身の上話を承りました、同情いたします△慈舟子さんに、如何にもあなたの文字はよみにくい、第一、雅號の慈舟は、慈舟か、戀舟か、戀舟か分らない、楷書で明瞭にお認め下さい△北國、茅夕さんに投稿は人事なら人事、自然なら自然各一篇に限ります△福井の明星さんに、御不快の由お大切になさいませ△豐後、吉田夕草。紀伊、林口和歌子三重、くれなゐ。遠山勝乃。北國、蔦の葉。大分、井上豔子の諸孃より御丁寧なる暑中見舞のお手紙や繪はがきを頂きましてありがたう、記者は

今年のきびしい暑氣にも中らず健康に編輯に從事することが出來ました、御安心下さい。併せて皆樣の御健康を祝福します　△懸賞發送が聊か遅延して居りますので皆樣からおたづねになりますが、早速送ることにいたしますからお待ち下さい。（以上、記者より）

○　繪はがき

新潟縣中魚沼郡水澤村村山德正方　村山銀子

▲風景、美人　繪はがきの交換して下さいませ、（未使用品に願ひます、二枚以上封にて）

○　秋田縣河邊郡新屋町　大澤錦子

▲海邊より　なつかしき誌友の皆樣妾は日本海岸に沿ふ片田舍に淋しく暮して居る不束者ですが何卒繪葉書の御交換をも願ひますわ御返事きつと致してよ。

○　神戶市山本通五丁目番外五十一　伊藤光子

▲オートム、ハス、カム　はらはらと降り出づる雨は尙止みぬ。是れ今年の夏のシーズンを送るの聲でしやう。哀、哀として暮らす私には一層淋しさを增します。無學にして無身、何一つとして樂みがありませう、只友として初めて本誌を愛讀する哀れの身の上情深き誌友の君よ哀れと思召し給はゞ、美しいくハイカラ繪葉書なりと御交換を御許し下さいませんか。

○　茨城縣多賀郡日立村宮田　水庭みの子

▲誌友の皆樣　私は片山里に友もなく一人淋しく住んで居る者ですが何卒御手紙や繪葉書下さいな下手乍ら御返事致します皆樣の御好み次第何の繪葉書でも差上ます。

○　滋賀縣大津市膳所町字中ノ庄　堀井岩吉方　ゆき枝子

▲琵琶湖畔より　妾は琵琶湖の西端に淋しき生活をして居る不束者で御座います誌友の諸姉皆々樣此哀れなる子を永きレター繪葉書にて交つて下さる方は無いでせうか。

○　茨城縣新治郡下大津村戶崎五十四番地飯田方　滑子

▲茨城より　記者樣初誌上の姉上樣には御變りも御座いませんか妾は湖畔に一人淋しく日を送つて居る不束者ですが此の後永久にレターや繪葉書の交換をお願ひ致します、返事は必ず…………

○　東京市牛込區肴町二十七　高橋萩二

▲交換會　私は文壇の愛讀者ですが今回二三の友と共に繪葉書交換會を開きましたから何卒御入會下さいまし御入會下さる御方は御一報下さればすぐに會則を御送り致します。

○　書籍交換

德島縣美馬郡半田村大字半田村三〇五　杉山雪花

▲持つてゐる書物。　後藤、上野兩文學士著、綠音雙引漢和大辭典。大町桂月著、和漢作文辭典。（二冊共箱入）大町桂月著、桂月文集、雜木林。薬地院香著、維新沿革。伊藤銀月著、銀月文。山本鯉城著、日本の美文。渋遊山人著、作文頁材遊紀文。與山青果著、小品文集、夢。蘆花著、不如歸。同氏著、自然と人生。正則英語獨案內。初等英語講義錄。其他英書雜誌各種。

△讀みたい書物。　服部、三島、重野、漢和大辭典。濱野知十郞著、新註漢和大辭典（右二書共可成新本）以上何れにても交換希望致し升。其他文學書

○　兵庫縣宍粟郡安師村　森谷靜

▲皆樣の內に本年四月發行の淑女かゞみ御不用の御方がおありでしたら何卒御ゆづり下さいませ御願ひ申上ます。

○　長野縣更級郡八幡小學校內　宮島千代子

△誌上久しく御無沙汰致しましたが相變らず御玉章給はり度尙繪はがきの交換等を懇願致します。次の書は不用となりました皆さんのなにかと御換へ下さい夢二畫集、（冬卷）さよなら、婦人國若き女の手紙、山家和歌集、（千代田文庫）ハイカラ通俗論語、花袋集、（卷一、二）あらゝぎ（水野葉舟）回想記（天外）女ばかりの衛生、旅すがた（花袋）七月發刊の演藝俱樂部、右の中どれでも上げます。

○　兵庫縣宍粟郡須賀村　藤井光澤子

△懸賞文集、文壇の花及女學世界增刊驚く手紙おもちあそばす方はお讓り下さいませんか前以て御一報下さいましたら相當の御禮は屹度いたします。尙もひとつ勝手なことを申しますけれど和歌を短冊にかいてお惠み下さいましな幾重にも御願ひいたします。

○　長野縣松代伊勢町山崎方　青木よし子

△讀みたい書物。紅葉、乳姉妹、内藤千代子のスヰートホーム、晶子歌集、寄生木、いづれか御所用の方が有りましたらお讓りを願ひます若しもゆづることが出來ませんでしたらお貸し下さい御禮は屹度差上げます。

○　廣島縣賀茂郡竹原町　中野ちとせ

△誠に申兼ますが皆樣方の內で福岡市の箏曲遞信敎授所發行の箏の譜本をお持の方は一寸御貸下さいませんか私も求めるので御座いますけれども實際に其功があるかないかわかりませんからどうぞ御願致します御禮はきつと致します。

○　茨城縣新治郡石岡町廿日市太郎方　姬島價梨枝

△九月號の女子文壇御不用の方は御ゆづり下さい近刊の婦人世界又は婦女界にてお返し致します、夾に三月號の婦人畫報及び七月の本誌とが不用に成つて居りますからお取換下さいませ。

○　宮城縣登米郡登米町　及川うめの

△本年六月求めの鈴木製第八號ヴアイオリン澤山の附屬品共お讓り致しますお望の方は御一報下さい。

○　滋賀縣甲賀郡岩根岩根三牧與吉氏方　みゆき

△殘月「磯部の松の葉かくれて……」と云ふ歌の譜、又は「松竹梅」「うす雪」などの譜本(略譜寫本にてもよろしうございます)をお送り下さいましたらば甚だ失禮ながら相當の書物、雜誌又は肉筆エハガキ十枚を以て御禮致します。何卒お願ひ申ます。又、大阪木津河畔日高豐子樣御近況はいかゞ。

○　橫濱市山下町私書函九一　岩澤政枝

▲所有の書物。女學世界、文藝俱樂部、新小說、新女學、其の他種々の雜誌があります。

△入用の書。ヴアイオリン教科書、少女の戀、右の書と御交換願ひます。

個人消息

○　王子町　大浪せい子

▲米子の田村美子樣——前號では御言葉ありがたう御座いました仰せの通りですのよ私こそ彼の講義錄や其他の雜誌で御芳名拜見する度にどんなに御親はしく存じましたでせう御交り下さいましな、幼ない少女と、或る事情で御手紙は東京府下巢鴨村六六〇野口方へ頂戴な、御返事は必と差上げますわ。

○　照葉

▲本誌の皆樣の內でどなた樣でも伊勢四日市にいらしつてそれから橫濱英和女學校にゐらしつた、伊藤露子樣の住所を御存知でしたら誌上迄お知らせ下さいましなどうぞお願ひ致します。

○　越後　白菊子

▲越後の皆樣振ひませうね星野くり子樣同じくかへで樣貴女北魚沼ですつて御住所御明し下さいな誌上にて私も同郡ですわ併し私は三島へ行つて居りますのそれでも近いのよ故鄕を、どうぞ御願ひですから御明し下さいな。

○　神奈川縣久良岐郡下蒲莊村三分　木村紫雲子

▲千葉縣の方で三年前木村花子樣と仰る本誌上に由つて私と親類先といふ事をお名のり下さいましたわネ只今でも誌友で居らつしやるか如何か何卒此くらぶを御覽になりましたら一寸もう一度御住所をお知らせ下さいませお友達の方でも御覽になりましたら恐れ入りますが花子樣にお知らせ下さる樣偏へにお願ひ申上げます。

○　筑後三潴郡江上村原中牟田　柴田百枝

▲伊勢山田市の廣瀨とみ子樣大阪市の村上春江樣雁の音づれ打ち絕えて茲に幾年！其後お變りもございませんか、お懷かしう存じます、毎日お寫眞を拜見しては無量の感に打たれてゐます御近況如何に？

○　在岡中のすゝき

▲我澤勿忘草樣、逢つたら御免下さいおん許樣はもしや赤磐郡の豐田の我澤校長の御令孃にはおはさずや夾號にて御返事下さい。

○　埼玉　桂の華

▲紫色女樣、いつぞやは早速御返事を有りがたう本當にお淋しい御生活、幾度繰かへして拜見致しましたでせう。千葉の伊藤さく子樣、あなたはもしや千住の名倉樣にいらしつた方では御座いませんか、さうとするとお懷しう御座いますわ、あなたは覺えて被入るでせうか、女學校二年の頃、二學期の初めから三箇月許り御一緒に居た者で御座います、夾號で御答へを——

○　佐賀縣佐賀郡春日村　永松靜子

▲福岡縣の御方にお願ひ申します三池の方で明

治三十八年から二三年福岡市の九州高等女學校(元豫備館)におゐしつた北村八重子さんの現住所を御存知の御方は敎へて下さいましね。

○　秋田縣南秋田郡面潟村岡本
　　宮田美也子

▲おたづね、皆樣の御中に少女世界誌上に、石狩の影遊む月樣と號せし御方を御知りの御方は、お知らせ下さいませんか！只今の現在をも、何卒お願ひ申します！(誌上にてもよし)

○　病床の　みゆき

▲喜多見榮子樣!!! 麗はしき御情こもる御玉章いとも淋しき病床に朝な夕な繰り返し御姿を想像致しぬ清き御交りを永久に御願ひ申し度きもあゝ如何にせんあゝ悲し我が病は重りて今にも逝かざるべからず君よ我は御母上妹君の御側にまゐり御成功を草葉の蔭より祈り參ゐらせん生を得てこゝに十九星一箇年餘も苦しみて死すこの哀れなる身を露不便と思召されてよあはれなつかしの君よ今はこの世の別れ〳〵幸におはせ!!! いざさらば。

○　熊本　君影草

▲下野の津久井梅溪樣お變りはなくつて？其後御伺ひいたさうと思ふて居りましたが御住所がわかりませんので失禮いたして居ります何卒およろしくば御住所おしらせ下さいまして以前に倍し清き御交際の程偏に切望いたします、どうぞ暑さの折柄御身御大切に御自愛遊しませさやうなら。

○　北都にて　幽香里

▲港の町のさゆりさま！北の都は秋がはやい、もうアカシヤに、ポプラに鳴る風が冷たう胸に沁みますの。寂しうムいますよ私——。思ひ出した時にはお便り戴きたうございます。

○　南國にて　いせ子

▲しま子樣もう私の名前御忘れ遊ばしたの？まさかね……私も只今は綠深き南國にかへつてますのよ、あの山、この海を見ては、過ぎにし年月のしのばれて……月よき夜は○○河畔にたゝずんで、かはり行く人の身の上思つては、淚は暮るゝんで御ざいますよ、何をいつてもからだが丈夫でなくつちやためね、せつかく御身御大切に。

○　筑紫　コスモス

▲越後の白百合樣、お察し申上ます、さぞお淋しいでせう、私も病魔にみいられて三年、毎日あぢきなき日を病床に暮して居ますやるせなき淋しさに堪へかねて、せめては文藝に慰められようと想ひます、お心のほど同じ思ひの秋はほんたうに同情致します、何卒今後御交り下さいませ、そしてお互に慰め合ふではありませんか。

○　下妻町　よし子

▲はる子樣へ、先日はお手紙誠に有難う御禮申上ます、私思想の人でも何んでもありませんの、たゞ〳〵平凡なる片田舍の少女です、直接の交際よりも此清き誌上にて御交際のほど……あらさう〳〵京橋の太田よし子樣、どうぞね願ひますよちと田舍へも入らつしやいな御祖母樣とね大丈夫よ私ミセスになんかならない事よホ、、

○　滋賀縣神崎郡御園村
　　北川末子

▲大連の筑紫餞子樣へ、姉上樣よ九月號の和歌を見れば姉上樣には、大連に御住ゐとやら、大連と聞けば、なつかしく御交際致し度いなれども、大連丈では、御手紙を出す事できず、依て何町ですか一度聞かして下さい、何卒右の所へ聞かして下さい。

○　岐阜　わか草より

▲長崎縣北高來の町田敏子樣私何だか大變になつかしう存じますわ私は御地の諫早に昨年居た者ですから御地の事を思ひ出しましてほんたうになつかしう御座いますわ、靜觀堂へはよく燒もちを食べに夜參つたものです、又小野の裁縫女學校へも參りましたわ諫早は私一生忘れる事の出來ない土地ですわ、御差つかへが有りませんなれば何卒御交りをネー又岐阜の愛讀者の皆樣愚なる者ですが以後何卒よろしく……佐藤初音樣天香おひまの時はお遊びに來て下さいな。

○　東京府下王子町七三中村方
　　久保八重子

▲大和下市の辰巳千代子樣御なつかしう御座います、御地に居りし時は、いろ〳〵と御親切にして頂き有難う存じます、決してお忘れ申しては居りません、いつも姉とおうはさを致してゐるのです、恐れ入りますが、薬異先生や、河合しげ子樣に御あひの節、どうぞよろしく願ひます、姉よりもよろしく申されました、左樣なら、御身お大事に。

○　築城の田舍にて
　　靜風子

▲佐賀泥子樣とやら八月號にて御發表になりましたあなたの御思想御同感に堪へません不束な

から妾は數年來の文壇愛讀者でございます 別段御差支もございませんければ 誌上まで御宿所御洩し下さいませ。

○病窓にて　双　葉

▲東都の櫻井八重子樣露の玉女樣 お懐かしう御座います 私今は病む身となりて訪ふ人もなく獨り寂しい日を送つて居ります、お暇の折にレター御惠み下さらば嬉れしう御座います。

○芝　た　つ　子

▲北海道大竹かつ子樣！ 噫御別れ申した時の私の胸の中、潸然と泣きましたわ、所詮彼の處で會はれないと失望して 連絡船に乘つた時若しやあなたの御姿が見えるかと覺束なくも甲板に佇んで居りましたわ、御手紙は嬉しく拜見いたしました、御父上の御病氣は…… 御察し申ます御身體を大切に屹度御歸京なさつて下さいよ。

○福岡市青葉のかげより　千　代　子

▲月中千代子樣 其後御伺ひもいたしませず許して下さいね何卒々々此後も惡しからずお交りを願ひます、福岡のいさを樣てどなたなの、ますます御勉强遊ばし御投書遊ばせね。

○山口　豐　田　綾　子

▲いとも御なつかしい諸姉上さま方 御變りは御座いませんの 私は山口の里に淋しく暮して居る者ですが以後よろしく御好導願ひますよ、千代子さま淸子さま ますく〳〵ね私はつひ先日よりの愛讀者で御座いますが橋君子樣 同じスクール嬉しいわ、悦んで頂戴ね 又山口高女の竹子樣御變りは御座いませんですか 幸子樣、英子樣何卒玉章たまいてよ 記者樣何卒始めてゞすから御洩しないでね願ひますよ。

○ニューヨークの人

▲誠に古いお話で笑はれるかも知れませんが明治三十六年に北長狹 通高等小學の二年生を、玉田先生にをしへて頂いた方はありますまいか。折好く同じクラスの方のお眼に入りましたら、紐育よりお慕ひ申してをります者ですから、どうぞ誌上で御住所をお知らせ下さいませ。又三宮町二丁目、吳服商の兒島いと子樣只今どちらにゐられますか、御存じのお方は一寸御手數お願ひ申たく失禮ながら御禮は必ず。

○隅田河畔　鈴　木　美　喜　子

▲さき頃おたづね下さいました芝のスミレ樣貴女はもしや東京女學館に御通學では御座いませんか私只今は隅田川畔に居ります の一寸御遊びに？岡山の矢木武子樣御無沙汰致して御免遊ばせ又御文頂戴きつと御返事致してよ。

○御存知の光より

▲壺屋町の翠子樣御葉書有難う御座います就きましては今少し御住所を詳しく御書き下さいお願ひです又葉山の双葉子樣御玉章並に御餡付がたう御座います以後相變らずよろしく。

轉居　青山原宿一九六　**河井醉茗**

女子文壇叢書第二編出づ

姿見日記

表紙　竹久夢二氏
著者最近寫眞入
紙數　三百頁

姿見日記、丘の家の日記、番町日記、十八歲までの五長篇日記と、作者が自己の心を傾けて居る得意の和歌三百首とを收めてあります、大部分は從來本誌にも載らなかつた新しい作ばかりです。

山田邦枝子作

「雜報」

▲今年ほど國民として、わが日本人全體の感情の刺戟されて、動搖したことはなからう、八月陛下御重患の趣を拜承して先づ驚き、萬民等しく御平癒を祈り奉りし甲斐もなく、御崩御遊ばされた、上下哀悼の意は宛ら天日も闇くなる感があつた、次いで御大葬の大儀は又東京全市を動かし、伏見桃山の御山陵に葬り奉る爲に京阪地方も亦大動搖を起した。御大葬と同時に乃木大將夫妻殉死の大事件の爲に又もや國民の血は湧いた、あゝ事多かりし明治四十五年よ、否大正元年よ、吾人は後世の歴史家が見ても特筆大書する時代に於て、其大事件を眼前に見た。

▲國家的事件の中心は何時も東京である、今囘も亦東京が凡ての中心であつた。

▲少くとも御大葬は一ケ月以前より豫期して居たことであるが、乃木大將の殉死は夢にも思はなかつたことだけに、國民の感情も思ひの外に大いに動かされた。

▲稱して楠正成以上の大忠臣となす人もある、楠公の時とは時代が違ふけれど、其誠忠は優るとも劣らない、人間一片の赤心は世を動かすこと何んなに大きく且深いであらう、養ふべきは人格である。

▲御大葬の時は、前の警戒があまりに大げさであつた爲に、拜觀をさし控へた人が多い、殊に婦人は大抵拜觀に出なかつた、比較的靜肅に拜觀することの出來たのは、此等多數の人々が拜觀を見合せたからで、後で聞いて、それなら出かければよかつたと云つてゐる人が澤山にあつた。

▲却つて乃木大將夫妻葬儀の日の方が混雜した殊に其日は葬場殿拜觀かた〴〵女や子供が無數に出た、男ばかりであんなに人出があつたら何んな椿事が起つたかも知れぬ。

▲葬場殿も、乃木將軍夫妻の墓も、乃木將軍邸もみな五六町の距離しか隔てゝ居ないから、御大葬後旬日に渡りて青山方面の人出は非常なものであつた。

▲乃木大將が多數國民から同情を得たのは、平民的な處があつたからであらう、現今の將軍中で大將ほど平民的な軍人はなかつた、毎に「私は兵卒だ」と云つて、兵卒同樣に寢食された大將の行爲が、大いに萬民の同情を得る所以であつた。

▲大將既に然り、夫人も亦一軍人の妻として、何等の虚飾も、虚榮も望まず、其赤誠を夫たる大將の上にそゝいだ、斯くて乃木將軍夫妻の殉死は何等の雜念も交へずに行はれたと云ふことに欣仰すべき價値がある。

▲併し大將夫妻だから其自殺も價値ありとは云ふものゝ、他の人が之を眞似た日には無意味な自殺になつてしまふ、自殺其ものには意義がないが、自殺した人に由つて意義も生じて來ると云ふわけである。

▲要するに此問題は單に男子ばかりの問題でもなければ、無論女子ばかりの問題でもない、人間として、日本といふ國に生れた人間として、反省すべき問題であらう。

▲御大葬前後には無數の繪葉書が發行された、玉石混淆の嫌ひはあるが、隨分多數の種類に上つた。

▲新聞では矢張『朝日』『國民』などの記事が宜かつた、且確實だつた、『萬朝』の黒岩氏の乃木大將殉死論は堂々たる議論であつた。『國民』の德富氏の論文は斯る際に於て尤も其文章の才を發揮したものであつた。

▲國民一般の喪章は第一期（九月十八日）限りに附けなくても宜いことになつた、新時代の國民は須らく其意を體して、各自其職に努むべきものであらう。

▲明治天皇の御事蹟を書いた書物や、乃木大將の傳記を綴つた書物が澤山出るやうだが、苟くも書物として出版する以上は、相當の用意を以て編著してほしい、一夜づくりの杜撰な書物を出すのはよろしくない、讀者も亦注意して杜撰な書物よりも完全したものを保存するやうにした方が宜い。

▲今年の夏は暑氣も烈しく、晴天もつゞいたが其爲に米作は近年の豐作だといふ、二百十日にも風がなかつた。

▲併し初秋に入つてから曇り日や、雨の日が多くなつた、御大葬の當日も天氣豫報は曇後雨とあつたが不思議にも午後より東京の空は一天晴れ渡つて、星さへ輝いたが、夜半より又曇つて翌日夕方より降り出した。

▲英皇御名代コンノート殿下、御退京の御途次天龍川の急流を降りたまふ、手には始終カメラを放ちたまはず到る處の田夫野人の姿、或は山容水態を寫眞したまふ、濱松に降りたまふまでに急湍の水しば〳〵舟中に跳り入りては服を濡らす、御勇壯にして且天然を愛したまふ御氣象、感佩の外はない。

▲同殿下御在京の日、白金の香蘭女學校に御成

あつた、同校は主として英國人の手に成るミッションスクールとは云へ、光榮之に過るはない。

文士の消息

△角田浩々氏は上京して本郷西片町に住居した『東京日日』の文藝部に執筆するさうだ。
△岩野泡鳴氏も『大阪新報』を退いて上京した。
△森川葵村氏は神戸に赴いた。
△若山牧水氏は母の病を護る爲に郷里日向に歸省した、因に夫人喜志子女も郷里信濃に歸省中。
△水野葉舟氏は『妹に與ふる手紙』と題した婦人に關する意見を一冊に纏めた書物を實業の日本社より出版する。
△高須梅溪氏は一男子を擧げた。
△田岡嶺雲氏は病氣を日光の山中に養ひつゝあつたが、九月七日同地で病死した、行年四十三氏は大學出身の文士中では奇才あり、矯骨稜々多年人文の爲に盡くす處があつた、評論家としての嶺雲の名は聞えたものであつた。『中央公論』に掲げられたる自作の數奇傳は能く氏自らの性格を語つてある、文壇の爲に惜むべきことだと思ふ。

新刊

○明治天皇御傳　須藤南翠著

明治天皇崩御以來、御傳紀の著述も澤山出版されたが、多くは一時的の編纂もので、永く保存するに適するやうな好著は少い、此處に須藤氏の編著にかゝる御傳は、材料も豐かに、優に類書中の粋を拔いてゐる。箱入の美本で、卷頭には皇室の御寫眞數十頁を挿み、御一代中の主なる詔勅を蒐め、次に御製數百首、而して本文に入る、本文は詳細を極めてゐる、更に詳しい御年表を添へてある。猶は本書には書物以外に、陛下の最近御肖像を中澤弘光氏の謹寫したる大形額面用コロタイプ刷一枚を挿入にして添へてある、當分の間定價金二圓の處を一圓二十錢で頒布するさうである。(麴町平河町五、金尾文淵堂出版)

○陰影　前田夕暮著

『收穫』以後の作歌六百首を集めてある、夕暮氏の作風は既に世間に知られてゐるが、此集には更に『收穫』に見なかつた好い處があるやうだ、機を見て詳しい紹介をしてみたいと思ふ。

うまごやし花さきそめぬちひさなる家のあるじとなりし其頃
赤くさびし小さき鍵を秋にし妻とあかるき夜の町に行く
久にしてあへば親子のへだたりの思ひのほかに深かりしかな

定價金八拾錢(市外西大久保、白日社出版)

○新しき叙事文　山下寂水編

曩に山下氏の編著したる『新しき抒情文』と云ふ書と姉妹篇とも見るべき、本書は專ら叙事文を作る人の參考となるやうに編輯してある、學術上の記述文、傳記、戰記、小説的細叙文、日記、紀行、叙景、記禮、講義文、説明文、釋義文、評論、議論、人物評、弔文、祝辭等の分類の仕方も新しい、先づ吾等の意を得てゐる。定價金五十錢(神田區小川町、尚文館出版)

○葉柳　笹川臨風著

現代文藝叢書の第十四編は、笹川臨風氏の隨筆『葉柳』を收めた、氏の文章は氏の爲人の如く垢拔のした江戸子肌の處に捨て難き妙あり、一貫したる大評論と云ふのではないが、をり〳〵の感想や描寫に一種の妙味があつて、また現代文士中の一異彩である(定價金二十五錢、日本橋區通、春陽堂出版)

○明治天皇御製集　鹿野千代夫編

明治天皇の御製約三百餘首を謹輯したる一冊子である(定價金三十五錢、麴町區飯田町六、趣味社出版)

○バアジン　初號

溝口白羊氏の率ゐる少女文藝會の機關雜誌で少女達の手に成る散文詩歌を精選して載せてある、潔白にして清新なる文藝雜誌、少女の文學同好者には宜い機關である。(會費一箇月金十錢、市外青山原宿少女文藝會出版)

○寸鐵　二年一號

南極探險隊前書記長多田春樹氏の主筆する文藝雜誌で、袖珍形の本文六號、繪入にして目新しき雜誌である、(定價金五錢、飯田町五、銀鷄堂)

關西 濃尾 暴風御見舞
讀者の健在を祈る
編輯局

十月

朝寒を感じ、夜寒を感ずる十月は、一年中で尤も氣候の好い時です。春先と違つて、此れから寒くなると云ふ感じが、何となく身も心も引しめるやうで、心に憂ひある者は悲哀に囚はれる時ですが、十月頃の自然は公明にして快濶、はればれとした秋日和がつゞきます。

野には農夫の收穫に働く時、海には漁夫の鮮魚を漁る時、山には香ある茸も出で、畠には美しい木の實も熟する、秋は食味の新しい時です、コスモスも咲けば、野菊も咲く、萩や芙蓉はすがれても、何の實ともなくいろいろの木の實の草の實の色づいて、落ちて來るのがおもしろい、街頭の柳や梧桐が落葉して、夜長を物賣の聲に更けてゆく都會の十月の夜も、しんみりとした情調が漂ふてゐる。

晩秋の心持は雨と晴とで非常な相違がある、雨の庭など、蟲の聲もたえだえに點滴の音を聞く淋しさつたらない。其代り晴れた日の蒼々として凜然たる空を仰ぐと、言ひ知れぬ崇高な感じに打たれるものです。

日曜	六日	十三日	二十日	二十七日

▲注意　本誌は本年度より從來の增刊を廢し、年四回（一月、四月、七月、十月）定期號を特別三百頁の大冊として發行することになりましたなほ左の定價表を詳しく御覽下さい

○本誌投稿及懸賞規定

▲投稿は凡て女子に限る▲原稿には必ず『女子文壇投稿』の文字を書き添へること▲原稿は凡て女士文壇社宛（未納税は斷じて受付ず）に送ること、▲小說と詩は振假名をつけること▲小說は二十四字詰八十行以內、散文は三十乃至五十行、初作は三十行以內▲各種類毎に一人一篇限りとす、和歌、俳句も一人一章限りとす、▲誌友くらぶの外はハガキの投稿を許さず、半紙、原稿紙、罫紙に限る▲別に本欄の原稿を募る長さは二十四字詰二百行內外とし總振假名をつけること▲圖畫は毛筆畫にて薄き日本紙に認め大さは二寸に三寸一人一枚限。

◎投稿は每月十五日到着を以て既に締切る

▲小說と散文は　▲天賞金參圓、地賞金壹圓五拾錢、人賞金七拾錢を呈す▲『詩』は天賞金貳圓地賞金七拾錢、人賞金四拾錢▲『和歌』『俳句』『圖畫』『初作』は、天賞金壹圓、地賞金五拾錢、人賞金參拾錢を呈す▲『本欄』は金五圓以下壹圓以上正金にて呈す（但し短きものは此限にりあらず）▲賞品發送は作物發表の翌月以後とす定額金壹圓以上の創作當選者には價格相當の物品を贈呈し金壹圓以下は圖書切符にて贈呈す

大正元年九月二十五日印刷納本
大正元年十月一日第八年第十號發行

不許複製

編輯兼發行人　野口竹次郎
印刷人　松本魁
印刷所　東京國文社

發行所　東京市京橋區大鋸町十一番地　女子文壇社
電話京橋六〇七番
振替東京壹七貳九番

特約販賣　東京堂、北隆館、上田屋、至誠堂、東海堂、良明堂、大阪盛文館外

横瀬夜雨先生著

夜雨集

再版

製本既成 好評再版將に盡んとす

全一冊洋装本綴

紙数三百三十頁

特製色クロース天金雅装

正價八拾錢 送料六錢

並製美色箔入装

正價五拾錢 送料六錢

著者は我邦に珍しき**郷土詩人**なり身は筑波山下の一閑村に寂靜なる孤獨生活を送れど其文名は天下の**青年男女**に**渇仰**されて驚くべき**潜勢力**を有せり殊に『夜雨集』は**自己の生活**を描くこと最も眞實にして其文、人を動かさずんば已まず而かも此書の如く男子より**婦人**を観、婦人より**男子**を観るに濃かなる**感情**の籠れるものは他に尠し蓋し本書は出來合の出版にあらず當然**永遠の生命**を有すべき**眞面目**なる著述なり

發兌元
東京京橋區大鋸町
女子文壇社
(振替口座一七二九番)
全國書店取次販賣

（明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可）

女子文壇特別號 定價金三拾錢 郵稅二錢